

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第95集

うし まき  
牛 牧 遺 跡

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター



牛牧遺跡遠景(南から)

上側は庄内川、右側中央が小幡緑地公園で、そこから中位段丘の末端が左下の緑地につながる。



99A・B区 完掘状況 (上が北)



土器棺検出状況



SZ34



SZ41



SZ43



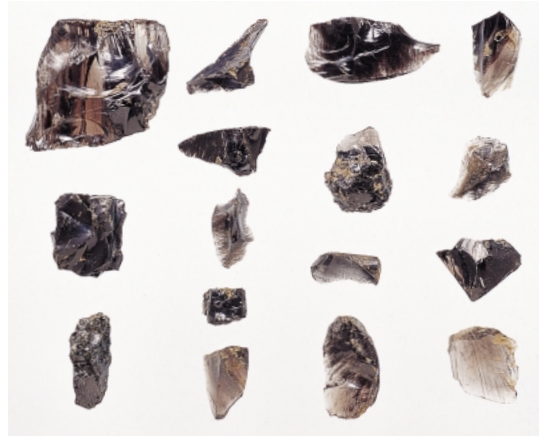
赤彩の見られる遺物



土器棺使用土器(SZ32)  
器面内外面に赤色顔料(ベンガラ)の付着が見られる。



土器棺墓に使用された土器群



出土した剥片 (左 下呂石、右 黒曜石)  
下呂石は、5×5 mの1グリットからの出土分。



SX03 出土須恵器

## 序

名古屋市は、西側は沖積平野、中央から東側は台地部および丘陵からなっています。安定した台地部には後期旧石器時代以降多くの遺跡が残されており、これらの遺跡は先人たちが残した生活の息吹を知る貴重な資料となっています。この地にいた遠い先人たちの生活の痕跡から当時の歴史復元をし、今生きている我々との異同を考えたとき、先人たちの多くの恩恵の上に現在の我々がいることが大きく理解できます。このような郷土の歴史は、現在ばかりでなく、将来にわたり伝え受け継いでいくことが非常に重要であると考えます。

さて、このたび名古屋市守山区に所在する牛牧遺跡を発掘調査することができました。この遺跡はこれまでの守山市の調査など3回にわたる調査により、縄文時代晩期を中心とした遺跡であることがすでに知られています。今回の調査の結果、縄文時代だけでなく中世・戦国期にわたる遺跡であることが判明しました。43基を数える縄文時代晩期土器棺墓の資料は、名古屋台地のみならず、東海地方、さらには周辺地域との比較検討する好資料になると考えられます。また、古墳時代の遺物としまして、珍しい装飾付須恵器の出土も見ました。

最後になりましたが、牛牧遺跡の発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。次第であります。

平成13年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮泰啓

## 例言

- 1、本書は、愛知県守山区小幡中三丁目に所在する牛牧遺跡(県遺跡番号01-1153)の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、県営守山住宅建て替えに伴い、愛知県建築部から愛知県教育委員会を通じて、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。
- 3、調査期間は平成11年6月から11月、および平成12年4月である。
- 4、調査担当者は、平成11年6月から11月が、北村和宏(課長補佐兼主査、現豊田高等学校教諭)・魚住英史(調査研究員、現萩山台小学校教諭)・川添和暁(同)であり、平成12年4月が、北村和宏・池本正明(主任)・宇佐見 守(調査研究員)・鈴木達也(同、現日進西高等学校教諭)である。
- 5、遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。  
八木佳素実(調査研究補助員)、加藤豊子・服部美里・飯田祐子・山田有美子(整理補助員)
- 6、出土遺物の写真撮影については深川 進氏の手を煩わせた。
- 7、発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。  
愛知県教育委員会文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建築部・下呂町教育委員会・小坂井町教育委員会・中津川市教育委員会・名古屋市教育委員会・名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館・山口村教育委員会(五十音順、敬称略)
- 8、発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。  
石川日出志、伊藤正人、岩瀬彰利、江崎 武、大塚達朗、岡田憲一、長田友也、瀬瀬 茂、斎藤弘之、斎藤基生、斎藤嘉彦、佐藤由紀夫、佐野 元、鈴木隆雄、鈴木正博、高木徳彦、原田 幹、増子康眞、森泰通、中村健二、中村友博、野口哲也、前田清彦、百瀬長秀、家根祥多、渡辺 誠、(五十音順、敬称略)
- 9、本書の執筆は、第一章を魚住英史、第三章第3節を早野浩二(調査研究員)、それ以外を川添和暁が担当した。石器および剥片の石材鑑定は堀木真美子(調査研究員)が行い、一部川添が行った。なお、第四章第1節は中野益男(帯広畜産大学生物資源科学科)・中野寛子・清水 了・門 理恵・星山賢一の各氏(ズコーシャ)、第2節は小村美代子氏(パレオ・ラボ)、第3節は株式会社アルカ角張淳一氏より玉稿を頂いた。添付したCD-ROM内の「剥離技術観察」と「石器属性表」も角張淳一氏により作成されたものである。
- 10、本書の編集は川添和暁が行った。
- 11、調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。
- 12、調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

## 目次

|                             |       |
|-----------------------------|-------|
| カラー巻頭                       |       |
| 序・例言・目次                     |       |
| 第一章 遺跡の位置・調査の経過             | 1 頁   |
| 第二章 基本層序・遺構                 | 6 頁   |
| 第三章 出土遺物                    | 70 頁  |
| 第1節 縄文時代の遺物                 |       |
| 縄文土器                        |       |
| 土製品                         |       |
| 石器                          |       |
| 石製品                         |       |
| 剥片類                         |       |
| 第2節 弥生時代の遺物                 |       |
| 第3節 古墳時代の遺物                 |       |
| 第4節 中世以降の遺物                 |       |
| 第四章 自然科学など分析                | 126 頁 |
| 第1節 牛牧遺跡出土遺物の顔料分析           |       |
| 第2節 牛牧遺跡から出土した土器棺に残存する脂肪の分析 |       |
| 第3節 牛牧遺跡の石器                 |       |
| 第五章 今後の課題                   | 151 頁 |
| 附論                          |       |
| 牛牧遺跡第一・二・三次調査の縄文土器について      | 157 頁 |
| 図版                          | 177 頁 |

## 挿図目次

- 第 1 図 牛牧遺跡位置図  
第 2 図 牛牧遺跡位置図 2 万分の 1  
第 3 図 牛牧遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25,000)  
第 4 図 過去の調査地点および 99・00 年度調査区配置図  
第 5 図 セクションポイント位置図  
第 6 図 00 A 区土層断面図  
第 7 図 99 A・B 区土層断面図  
第 8 図 SB04  
第 9 図 土器棺墓出土状態図 1 (SZ02)  
第 10 図 土器棺墓出土状態図 2 (SZ03・04)  
第 11 図 土器棺墓出土状態図 3 (SZ06・07)  
第 12 図 土器棺墓出土状態図 4 (SZ08・09)  
第 13 図 土器棺墓出土状態図 5 (SZ10)  
第 14 図 土器棺墓出土状態図 6 (SZ12・13)  
第 15 図 土器棺墓出土状態図 7 (SZ14・16)  
第 16 図 土器棺墓出土状態図 8 (SZ15)  
第 17 図 土器棺墓出土状態図 9 (SZ17・18)  
第 18 図 土器棺墓出土状態図 10 (SZ22・23)  
第 19 図 土器棺墓出土状態図 11 (SZ26)  
第 20 図 土器棺墓出土状態図 12 (SZ24・28)  
第 21 図 土器棺墓出土状態図 13 (SZ27)  
第 22 図 土器棺墓出土状態図 14 (SZ29・30)  
第 23 図 土器棺墓出土状態図 15 (SZ31・32)  
第 24 図 土器棺墓出土状態図 16 (SZ33・35)  
第 25 図 土器棺墓出土状態図 17 (SZ34・39)  
第 26 図 土器棺墓出土状態図 18 (SZ36・37)  
第 27 図 土器棺墓出土状態図 19 (SZ38・40)  
第 28 図 土器棺墓出土状態図 20 (SZ41・42)  
第 29 図 土器棺墓出土状態図 21 (SZ43・46)  
第 30 図 土器棺墓出土状態図 22 (SZ47・50)  
第 31 図 土器棺墓出土状態図 23 (SZ44)  
第 32 図 土器棺墓出土状態図 24 (SZ44 セクション)  
第 33 図 土器棺墓出土状態図 25 (SZ49・SK804・805)  
第 34 図 土器棺墓出土状態図 26 (SZ49 セクション)  
第 35 図 土器棺墓出土状態図 27 (SZ53・55)  
第 36 図 土器棺墓出土状態図 28 (SZ54)  
第 37 図 土器棺墓出土状態図 29 (SZ56)  
第 38 図 SK592 出土状態図  
第 39 図 SK512 出土状態図  
第 40 図 土器棺墓形態分類図  
第 41 図 土器棺墓埋設方向傾向図  
第 42 図 99 A・99 B・00 B 区縄文時代主要遺構配置図  
第 43 図 SK385・SK799  
第 44 図 土坑セクション図 1  
第 45 図 土坑セクション図 2  
第 46 図 土坑計測値散布図  
第 47 図 812  
第 48 図 SK515・946  
第 49 図 SX01 出土状態図  
第 50 図 環状に巡る土坑群  
第 51 図 SB01  
第 52 図 SB02・SB03  
第 53 図 SX03  
第 54 図 SX03 遺物出土状態図  
第 55 図 弥生・古墳時代主要遺構配置図  
第 56 図 SD01 セクション  
第 57 図 中世・戦国期遺構配置図  
第 58 図 土坑平面・セクション  
第 59 図 SK851  
第 60 図 石鏃形態分類図  
第 61 図 石錐形態分類図  
第 62 図 打製石斧形態分類図  
第 63 図 主要石器使用石材割合図  
第 64 図 主要石器・石製品出土傾向図 1 (1 : 800)  
第 65 図 主要石器・石製品出土傾向図 2 (1 : 800)  
第 66 図 主要石器・石製品出土傾向図 3 (1 : 800)  
第 67 図 剥片出土分布図 1 (1 : 800)  
第 68 図 剥片出土分布図 2 (1 : 800)  
第 69 図 剥片石材割合図  
第 70 図 関連遺物集成図 (1 : 10)  
第 71 図 関連遺物分布図  
第 72 図 赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図 1  
第 73 図 赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図 2  
第 74 図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成  
第 75 図 試料中に残存する脂肪のステール組成  
第 76 図 資料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図  
第 77 図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関  
第 78 図 土器棺墓使用土器棺身容量計測値散布図  
第 79 図 遺構別棺身容量計測値散布図  
第 80 図 下鳥遺跡出土土器 (1 : 3)  
第 81 図 東光寺出土岩偶 (1 : 2)  
第 82 図 真宮遺跡出土岩偶 (1 : 2)

## 図版目次

- |       |          |       |          |        |                  |
|-------|----------|-------|----------|--------|------------------|
| 図版 1  | 遺構配置図 1  | 図版 38 | 土器実測図 32 | 図版 75  | 石器実測図 1          |
| 図版 2  | 遺構配置図 2  | 図版 39 | 土器実測図 33 | 図版 76  | 石器実測図 2          |
| 図版 3  | 遺構配置図 3  | 図版 40 | 土器実測図 34 | 図版 77  | 石器実測図 3          |
| 図版 4  | 遺構配置図 4  | 図版 41 | 土器実測図 35 | 図版 78  | 石器実測図 4          |
| 図版 5  | 遺構配置図 5  | 図版 42 | 土器実測図 36 | 図版 79  | 石器実測図 5          |
| 図版 6  | 遺構配置図 6  | 図版 43 | 土器実測図 37 | 図版 80  | 石器実測図 6          |
| 図版 7  | 土器実測図 1  | 図版 44 | 土器実測図 38 | 図版 81  | 石器実測図 7          |
| 図版 8  | 土器実測図 2  | 図版 45 | 土器実測図 39 | 図版 82  | 石器実測図 8          |
| 図版 9  | 土器実測図 3  | 図版 46 | 土器実測図 40 | 図版 83  | 石器実測図 9          |
| 図版 10 | 土器実測図 4  | 図版 47 | 土器実測図 41 | 図版 84  | 石器実測図 10         |
| 図版 11 | 土器実測図 5  | 図版 48 | 土器実測図 42 | 図版 85  | 石器実測図 11         |
| 図版 12 | 土器実測図 6  | 図版 49 | 土器実測図 43 | 図版 86  | 石器実測図 12         |
| 図版 13 | 土器実測図 7  | 図版 50 | 土器実測図 44 | 図版 87  | 石器実測図 13         |
| 図版 14 | 土器実測図 8  | 図版 51 | 土器実測図 45 | 図版 88  | 石器実測図 14         |
| 図版 15 | 土器実測図 9  | 図版 52 | 土器実測図 46 | 図版 89  | 石器実測図 15         |
| 図版 16 | 土器実測図 10 | 図版 53 | 土器実測図 47 | 図版 90  | 石器実測図 16         |
| 図版 17 | 土器実測図 11 | 図版 54 | 土器実測図 48 | 図版 91  | 石器実測図 17         |
| 図版 18 | 土器実測図 12 | 図版 55 | 土器実測図 49 | 図版 92  | 石器実測図 18         |
| 図版 19 | 土器実測図 13 | 図版 56 | 土器実測図 50 | 図版 93  | 石器実測図 19         |
| 図版 20 | 土器実測図 14 | 図版 57 | 土器実測図 51 | 図版 94  | 石器実測図 20         |
| 図版 21 | 土器実測図 15 | 図版 58 | 土器実測図 52 | 図版 95  | 石器実測図 21         |
| 図版 22 | 土器実測図 16 | 図版 59 | 土器実測図 53 | 図版 96  | 石器実測図 22         |
| 図版 23 | 土器実測図 17 | 図版 60 | 土器実測図 54 | 図版 97  | 石器実測図 23         |
| 図版 24 | 土器実測図 18 | 図版 61 | 土器実測図 55 | 図版 98  | 石器実測図 24         |
| 図版 25 | 土器実測図 19 | 図版 62 | 土器実測図 56 | 図版 99  | 石器実測図 25         |
| 図版 26 | 土器実測図 20 | 図版 63 | 土器実測図 57 | 図版 100 | 石器実測図 26         |
| 図版 27 | 土器実測図 21 | 図版 64 | 土器実測図 58 | 図版 101 | 石器実測図 27         |
| 図版 28 | 土器実測図 22 | 図版 65 | 土器実測図 59 | 図版 102 | 石器実測図 28         |
| 図版 29 | 土器実測図 23 | 図版 66 | 土器実測図 60 | 図版 103 | 土製品実測図           |
| 図版 30 | 土器実測図 24 | 図版 67 | 土器実測図 61 | 図版 104 | 石製品実測図 1         |
| 図版 31 | 土器実測図 25 | 図版 68 | 土器実測図 62 | 図版 105 | 石製品実測図 2         |
| 図版 32 | 土器実測図 26 | 図版 69 | 土器実測図 63 | 図版 106 | 石製品実測図 3         |
| 図版 33 | 土器実測図 27 | 図版 70 | 土器実測図 64 | 図版 107 | 弥生時代、中世・戦国期遺物実測図 |
| 図版 34 | 土器実測図 28 | 図版 71 | 土器実測図 65 | 図版 108 | 古墳時代遺物実測図        |
| 図版 35 | 土器実測図 29 | 図版 72 | 土器実測図 66 |        |                  |
| 図版 36 | 土器実測図 30 | 図版 73 | 土器実測図 67 |        |                  |
| 図版 37 | 土器実測図 31 | 図版 74 | 土器実測図 68 |        |                  |

## 表目次

|        |                           |         |                       |
|--------|---------------------------|---------|-----------------------|
| 第 1 表  | 発掘調査工程表                   | 写真図版 17 | 土器棺墓使用土器 4            |
| 第 2 表  | 関連資料一覧表                   | 写真図版 18 | 土器棺墓使用土器 5            |
| 第 3 表  | 出土遺物の付着赤色物から検出された元素と顔料の種類 | 写真図版 19 | 土器棺墓使用土器 6            |
| 第 4 表  | 土壌試料の残存脂質抽出量              | 写真図版 20 | 土器棺墓使用土器 7            |
| 第 5 表  | 試料中に分布するステロールの割合          | 写真図版 21 | 土器棺墓使用土器 8            |
| 第 6 表  | 剥離技術一覧                    | 写真図版 22 | 土器棺墓使用土器器面拡大写真 1      |
| 第 7 表  | 牛牧遺跡出土石鏃・尖頭器加工技術一覧表       | 写真図版 23 | 土器棺墓使用土器器面拡大写真 2      |
| 第 8 表  | 99B 区の石鏃と尖頭器の加工技術         | 写真図版 24 | 土器棺墓使用土器器面拡大写真 3      |
| 第 9 表  | 99B 区石鏃・尖頭器と石材の構成表        | 写真図版 25 | 遺構内出土遺物 1             |
| 第 10 表 | 99B 区の石材と剥離技術の構成          | 写真図版 26 | 遺構内出土遺物 2             |
| 第 11 表 | A 区の石鏃と尖頭器の加工技術           | 写真図版 27 | 土製品                   |
| 第 12 表 | 99A 区の石鏃と尖頭器の石材構成         | 写真図版 28 | 石製品 1                 |
| 第 13 表 | 99A 区の石材と剥離技術構成           | 写真図版 29 | 石製品 2                 |
|        |                           | 写真図版 30 | 石製品 3                 |
|        |                           | 写真図版 31 | 弥生時代遺物(SB01・03、SK289) |
|        |                           | 写真図版 32 | 古墳時代遺物(SX03)          |

## 写真目次

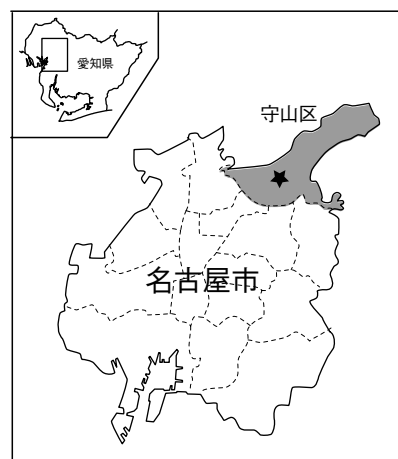
|         |                                |
|---------|--------------------------------|
| 写真図版 1  | 調査区全景 1                        |
| 写真図版 2  | 調査区全景 2                        |
| 写真図版 3  | 調査区全景 3                        |
| 写真図版 4  | 土器棺墓検出状態 1                     |
| 写真図版 5  | 土器棺墓検出状態 2                     |
| 写真図版 6  | 土器棺墓検出状態 3                     |
| 写真図版 7  | 土器棺墓検出状態 4                     |
| 写真図版 8  | 土器棺墓検出状態 5                     |
| 写真図版 9  | 土器棺墓検出状態 6                     |
| 写真図版 10 | SB04、SK385・386・512・515・579・592 |
| 写真図版 11 | SK709・799・804・805・812・946、SX01 |
| 写真図版 12 | SB01・02・03、SK144・289、SD01      |
| 写真図版 13 | SX03                           |
| 写真図版 14 | 土器棺墓使用土器 1                     |
| 写真図版 15 | 土器棺墓使用土器 2                     |
| 写真図版 16 | 土器棺墓使用土器 3                     |

# 第一章 歴史的環境・地理的環境および調査の経緯

## 1. 位置と歴史的環境

### 地理的環境

牛牧遺跡のある名古屋市守山区は名古屋市の北東部にあり、東経136度50分から137度2分5秒にわたり、北緯35度11分にはじまり35度13分5秒に位置する。北部は庄内川をへだてて春日井市、東部は瀬戸市・尾張旭市・愛知郡長久手町に隣接している。南部は矢田川を境に千種区と分けられている。遺跡は、庄内川と矢田川とに挟まれた熱田台地相当の守山面上にあり、守山区の北東端、東谷山（標高198m）から庄内川に向かって広がる台地縁辺部に位置している。



第1図 牛牧遺跡位置図

### 歴史的環境

守山区は、志段味地区にある名古屋市内最古の古墳である白鳥塚古墳をはじめとして、古墳の非常に多いところとして著名である。以下それらを通して牛牧遺跡がある小幡地区を中心に周辺の遺跡を概観してみる。



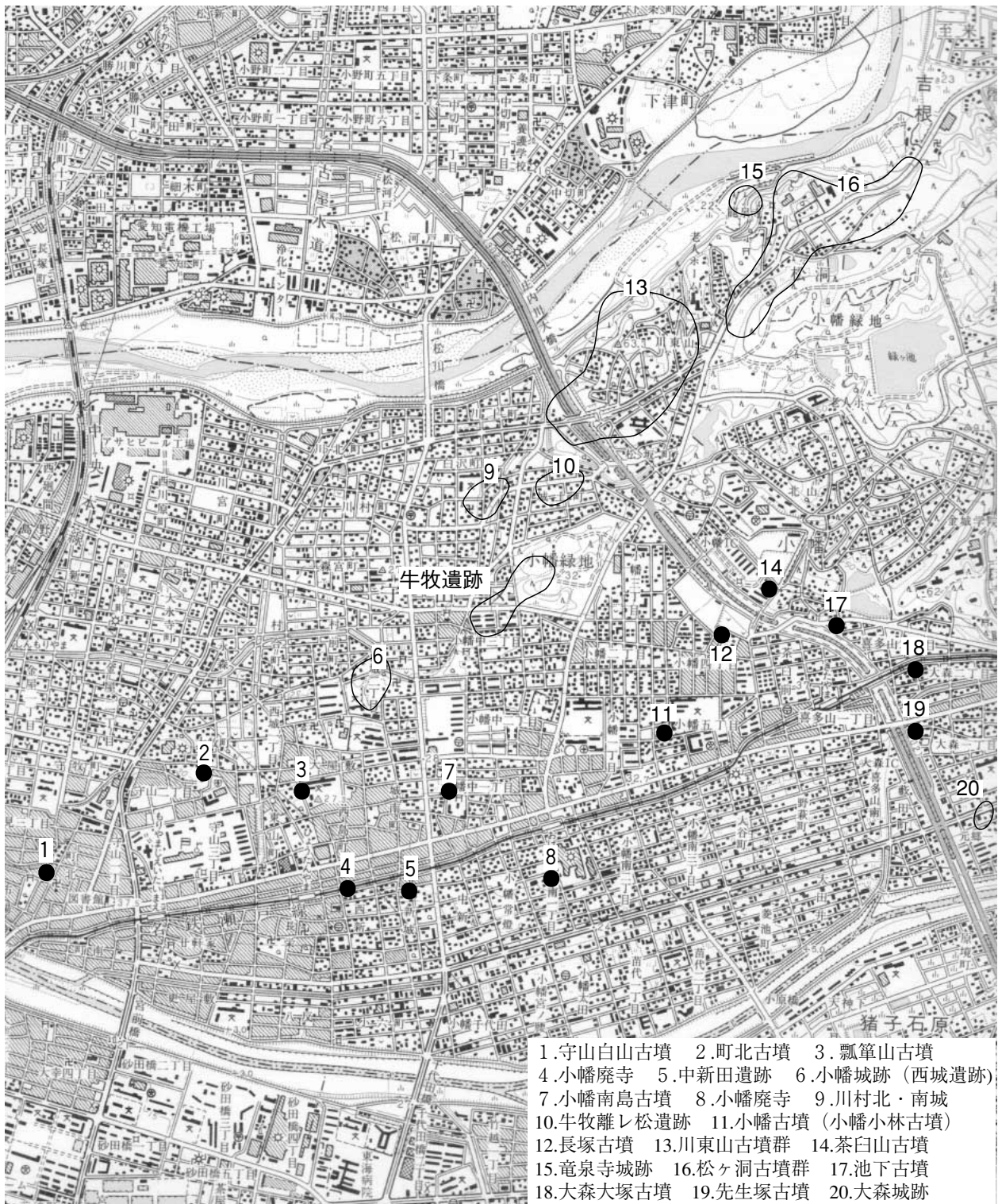
第2図 牛牧遺跡位置図 2万分の1  
(明治24年陸地測量部「勝川村」より)

### 周辺の遺跡

牛牧遺跡より北東に位置する東谷山麓が庄内川南岸に接する守山区北東端の志段味地区には、槍先形尖頭器が出土した後期旧石器時代の樹木遺跡があり、また縄文時代の遺跡には、

加曾利E式に比定される土器類が採集されている白鳥遺跡（中期）、晩期の粗製深鉢が出土している二ノ輪遺跡（註1）がある。弥生時代の遺跡として、牛牧遺跡の北東では牛牧離れ松遺跡（中期）、南西には住居跡が検出された西城遺跡（後期）がある。志段味地区には、弥生時代の遺跡が見つからない。古墳時代になると、4世紀後半尾張地方でも最古の古墳の一つである白鳥塚古墳が出現する。5世紀中ごろまでになると、志段味地区以外でも、小幡地区において茶臼山古墳や守山白山古墳などの前方後円墳が築かれる。5世

（註1）二ノ輪遺跡の出土土器は土器棺墓の可能性はある。



第3図 牛牧遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000) 国土地理院発行「名古屋北部」より

紀後半になると、前方後円墳である池下古墳、長塚古墳などを含む小幡古墳群、帆立貝前方後円墳と考えられる志段味大塚古墳を含む志段味古墳群、吉根の笹ヶ根古墳群や東禅寺古墳群、その中でも群集墓の様相を呈していく松ヶ洞古墳群・川東山古墳群などがある。小幡地区では6世紀前半には瓢箪山古墳などの前方後円墳、6世紀後半には横穴式石室を埋葬主体とする小幡古墳が築かれた。飛鳥～奈良時代には、瓢箪山古墳に近接する地域に小幡廃寺が造営された。

過去3回の  
調査

## 2. 過去の調査の概要

牛牧遺跡は、昭和33年3月、旧守山市大字牛牧字中山1632番地の1、県緑地公園内で内山邦夫氏によって縄文土器が散布しているのが発見され、相当広範囲に包含層のあることがわかった。その中にはすでに都市計画路線の開発が予定され、遺跡の過半は数年のうちに壊滅、変貌する運命にあるものも含まれていた。そのため文化財保護事業の一環として、同年夏より翌34年夏にかけての二次にわたる発掘調査が久永春男氏らによって行われた。その成果は、1961年に刊行された伊藤敬行・久永春男他「牛牧遺跡」に詳しく報告されている。

この二次にわたる調査によって、牛牧遺跡は縄文晩期を主とした遺跡であることがわかった。出土した縄文土器は、蜷塚第一貝塚下層貝層群出土器に類似したもの・宮滝式土器・寺津式土器・元刈谷式土器・五貫森式土器の五型式が認められている。

### 平地式住居

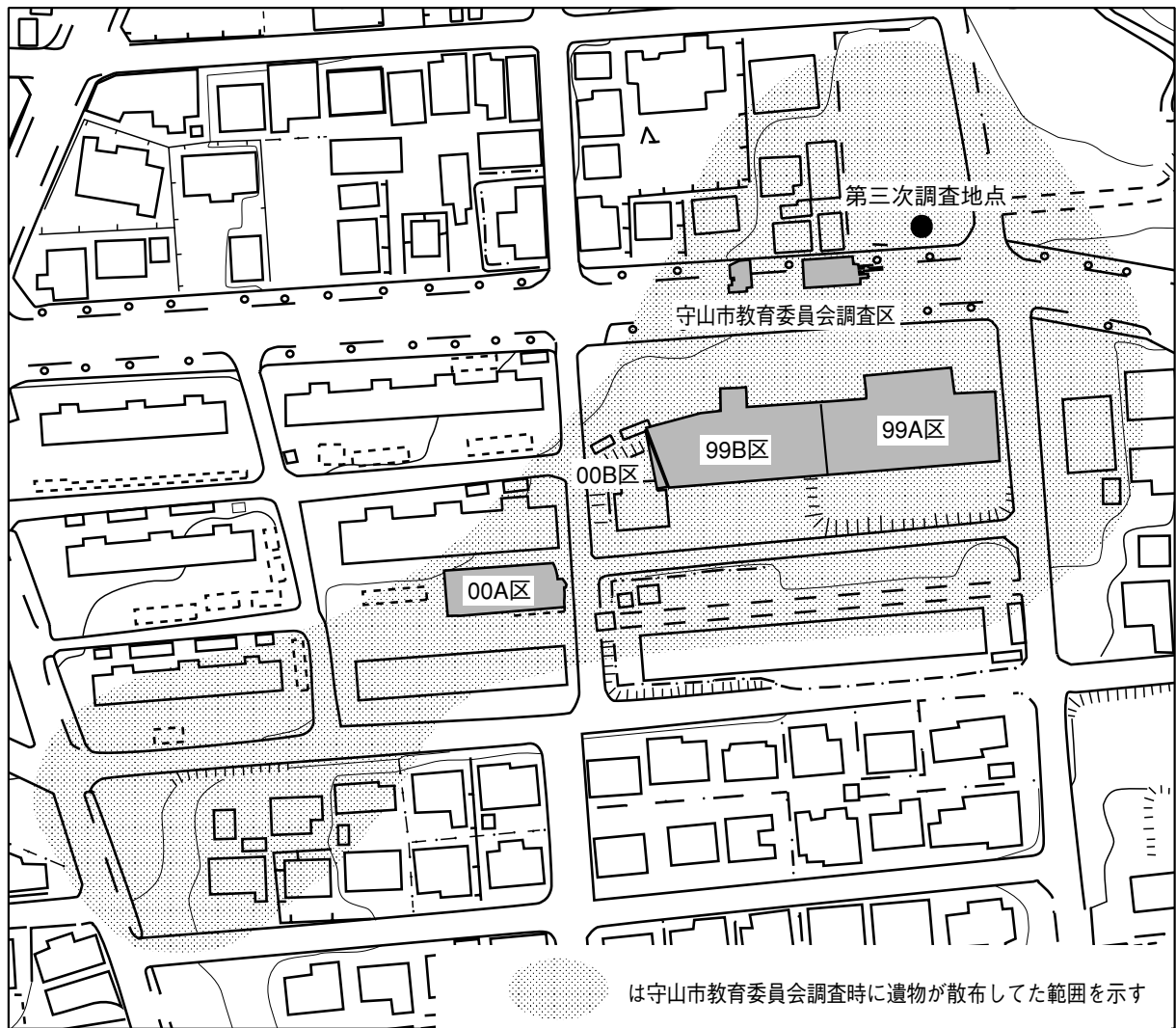
第一次調査では、晩期前葉の遺構として、盛り土による周堤をめぐる平地住居跡一軒が確認された。住居跡の平面形は、径3.5m円形と想定され、七個の柱穴、周囲に円礫をならべた炉囲い施設をもった炉跡を検出している。周堤は15～17cmほどの盛り上がりで、幅は50～60cmを測り、また、この内側すなわち床面の外縁部には、幅7～8cmの浅い溝が部分的に遺存しているのが確認されている。

### 土器棺墓群

第二次調査では、晩期中葉の遺構として、第一次調査区と同じく遺存する周堤によって6.6m×4.2mの隅丸矩形と推定される平地住居跡が確認されたとされている。この遺構に重複して土器棺墓が7基検出されている。土器棺の埋納形態は立位1基、横位6基、横位の例の中には下胴部を欠いた他の土器を口縁部に継ぎ足した例も見つかっている。土器棺に用いられた土器は、いずれも日常生活に使用されていたものが転用されたらしく器壁に炭化物の付着がみられる。器形は甕形が1基、他はすべて深鉢形であり、埋葬層位と土器形態から推定して、すべて元刈谷式土器に属するものと考えられている。この墓域はさらに五貫森式土器の時期に至って、その一部が深さ20cmばかり切り下げられ、その一角に立石が建てられたことが認められ、おそらく祭祀儀礼でも行われたのではないかと推定されている。

### 立石

この二次にわたる調査の後、遺跡付近が広く区画整理され、遺跡保護のため昭和36年8月14日と15日の2日間に第三次調査が行われた。その概要は1969年に刊行された「守山の古墳 調査報告第二」に収められている。遺構としては、五貫森式に属する土器棺墓が1基検出されている。遺物としては、縄文時代晩期後葉の五貫森式に属するものと弥生時代中期末の長床式土器などが出土している。



第4図 過去の調査地点および1999・2000年度調査区配置図（1：3,000）

### 3. 調査に至る経緯と経過

牛牧遺跡は、名古屋市北東部、名古屋市守山区大字牛牧・高島町・小幡中三丁目周辺に所在する。1950年代末に旧守山市（現在の名古屋市守山区）教育委員会が行った第一・二次調査と、1961年に名古屋市教育委員会が行った第三次調査によって、縄文時代晩期の土器棺墓群・平地式居跡などが検出され、縄文時代晩期の遺跡として周知となっていた。

今回の調査は、県営守山住宅建て替えに伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県建築部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施したものである。本調査に先立ち試掘を行い遺跡の範囲を確認した。調査区調査総面積1,250㎡のうち平成11年度は1,000㎡を、平成12年度は250㎡を対象に調査を行った。

遺構の検出は、表土及び旧耕作土をバックホウで除去した後、中世～戦国期の包含層である灰黄褐色シルト層より行った。その際、それぞれの調査区内に建設省告示によって定められた国土座標を基準とした5m×5mのグリッドを設定し、手掘りで遺構掘削後原則としてヘリコプターによる空中写真測量を行った。また適宜発掘調査の進捗状況や遺

構検出状況、遺物出土状況などの写真撮影を行い、空中写真測量に前後して、高所作業車を用いて調査区全体の撮影を行った。

発掘調査終了後、出土遺物を本センター瀬戸事務所に搬入し、洗浄・注記などの一次整理を行った。また、平成11年度には、出土遺物を改めて本センター（弥富町）に移し、遺物実測図の作成などの二次整理を行い、報告書の作成作業を行った。(魚住英史)

第1表 発掘調査工程表



| 年度 | 調査担当者        | 調査区 | 調査期間(月) |   |   |   |   |   |    |    |  | 調査面積                |
|----|--------------|-----|---------|---|---|---|---|---|----|----|--|---------------------|
|    |              |     | 4       | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |  |                     |
| 11 | 北村・魚住・川添     | 99A |         |   |   |   |   |   |    |    |  | 1,000m <sup>2</sup> |
|    | 北村・魚住・川添     | 99B |         |   |   |   |   |   |    |    |  |                     |
| 12 | 北村・池本・宇佐見・鈴木 | 00A | ▶       |   |   |   |   |   |    |    |  | 200m <sup>2</sup>   |
|    | 北村・池本・宇佐見・鈴木 | 00B | ▶       |   |   |   |   |   |    |    |  |                     |

発掘協力者

平成11年度

瀬戸かな子(調査補助員)

- |                |      |               |       |
|----------------|------|---------------|-------|
| 池田サツ子          | 枝木 守 | 枝木幸雄          | 川口ひさ子 |
| 神原ユキ子          | 北島万紀 | 串崎トメ子         | 近藤千里  |
| 笹野千代子          | 仲川信子 | 中田眞澄          | 中野絹枝  |
| 野田香代           | 野田郁子 | 濱嶋英津子         | 服部明日香 |
| 東野由貴子          | 堀場美子 | 森田明子          | 山田のぶよ |
| 跡部祐子(静岡大学4年)   |      | 杉山知隆(名古屋大学3年) |       |
| 西岡智子(愛知県立大学1年) |      | 丹羽崇史(山口大学3年)  |       |
| 廣田早和子(信州大学3年)  |      |               |       |



平成12年度

瀬戸かな子・横山 誠(調査補助員)

- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 浅見久江  | 跡部広子  | 池田サツ子 | 大野千代子 |
| 太田重明  | 小沢幸雄  | 串崎トメ子 | 後藤久美子 |
| 斎場きみ子 | 塩見早智代 | 杉原千速  | 塚本芳子  |
| 長江典子  | 中根千恵子 | 七ツ村清吉 | 浜島喜代美 |
| 平田多助  | 深田美智子 | 宮石千津子 | 宮本勢津子 |
| 森 優子  | 山下洋子  | 山田のぶよ |       |



発掘調査風景

## 第二章 層序・遺構

### 第一節 層序

#### 基本層序

基本層序は、大きく5層からなっている。

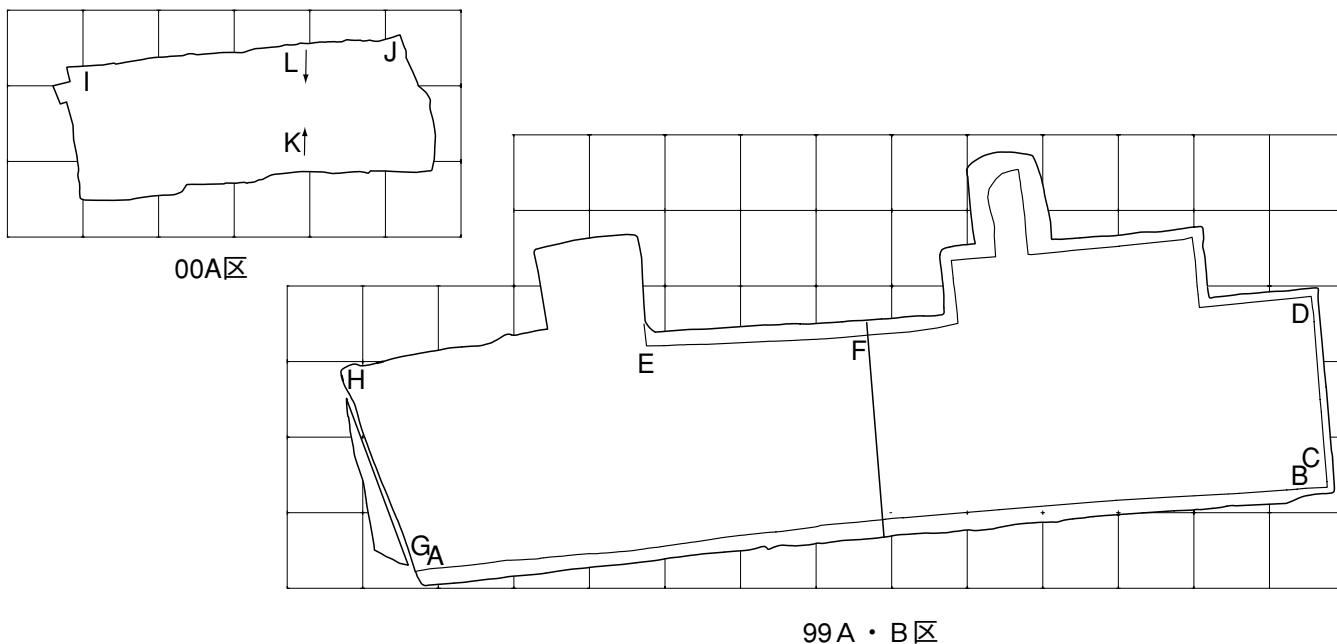
- I層 表土および攪乱
- II層 旧耕作土および中世以降遺物包含層
- III層 遺物包含層および遺構埋土(黒褐色土)
- IV層 旧表土層
- V層 守山面

#### III層 (黒褐色土)

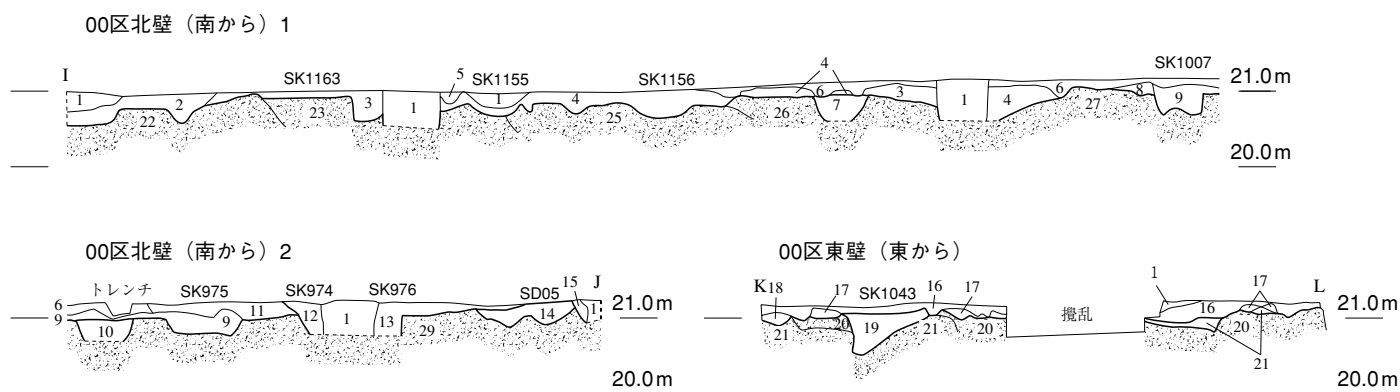
99年度調査区ではこの5層すべてがみられた一方、00年度調査区ではすでに工事によりI・II層が削られた状態であった。中世以降の遺物包含層であるII層は黄灰色粘土質シルトで、99区調査区全体に厚さ5～10cm程度に堆積していた。II層を除去すると、縄文時代の遺物を中心に包含する黒褐色土が広がっていた。99 A区では30～50cmと最も厚い堆積がみられ、99 B・00 B区では15～30cm、00 A区では15～20cmと、西側に行くにしたがって厚みが薄くなっている。III層の上面が中世以降の遺構検出面であると同時に、縄文時代晩期に属する土器棺墓の数基は、すでにこのレベルにて棺の表面の一部が検出されていた。III層からは非常に多くの遺物が出土しただけでなく、土器棺墓もほとんどがこの層の中からの検出である。下のIV・V層まで土器棺埋設の土壌が達している場合は確かにあるものの、土器棺埋設自体は主に黒褐色土内で営まれたものであるらしい。この遺跡の中心となる縄文時代の遺構検出面は、IV層の上面もしくはV層の上面である。IV層は黄褐色粘土質シルトで、その上面では若干の遺物を含んでいた。99年度調査区では厚いところで約40cmの堆積をみた。V層は守山面と言われている、熱田層相当の礫層である。

99 A・B区の接する周辺のみIII層のあり方が少し異なっている。ここでは褐灰色粘土質シルトが包含層の一部を形成し、それが黒褐色土の上に堆積している。この粘土質シルト層が堆積している区域では、遺物・自然礫などに黒色を呈する炭化したタール状の物質が非常に多く付着していた。タール状の物質には沈鉄がしばしば付着しており、後世の水に関係した施設があった可能性も考えられる。

99年度調査区では、中世以降の遺構検出段階を検I、III層の上部掘削段階を検II、III層でも褐灰色粘土質シルトを中心としたレベルの掘削時を検III、III層の下部掘削時を検IV、IV層掘削時を検Vとした。00年度調査区では、III層の堆積が薄くIV層との峻別が難しいために一括して掘り下げ、遺構検出を行った。

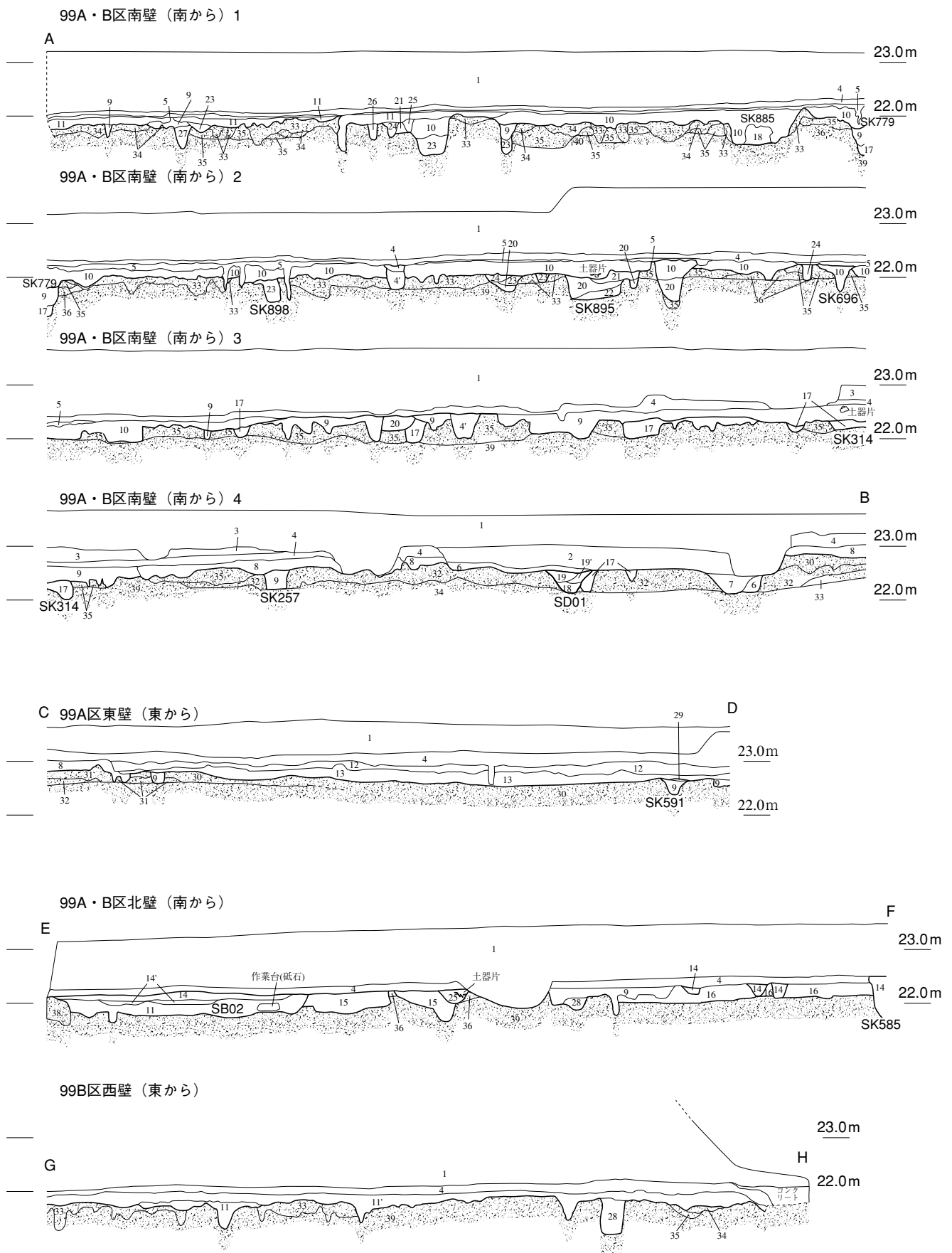


第5図 セクションポイント位置図



|                     |                     |                    |                     |
|---------------------|---------------------|--------------------|---------------------|
| I層 攪乱など             |                     |                    | V層 守山面              |
| 1 攪乱                |                     |                    | 20 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 |
| III層 遺物包含層・遺構埋土     |                     |                    | 10YR3/2 黒褐色土混じる     |
| 2 10YR2/2 黒褐色土      | 11 2.5Y3/2 黒褐色土     | 礫・明黄褐色の粘土ブロックを含む   | 21 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 |
| 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂 | 12 2.5Y3/1 黒褐色土     | 径5~30mmほどの礫を少量含む   | 22 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
| 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂 | 13 2.5Y3/5 暗オリーブ褐色土 | 径10~100mmほどの礫を多く含む | 5Y3/2 オリーブ黒色粗粒砂を含む  |
| 5 10YR3/2 黒褐色細粒砂    | 14 7.5YR3/4 暗褐色土    | 径5~50mmほどの礫を少量含む   | 10YR4/4 褐色細粒砂       |
| 6 2.5Y3/2 黒褐色土      | 15 2.5Y3/1 黒褐色土     | 径5~10mmの礫を少量含む     | 24 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
| 7 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂   | 16 10YR2/1 黒色土      | 径5~10mmの礫を少量含む     | 10YR5/8 黄褐色粗粒砂を含む   |
| 8 2.5Y4/2 暗灰黄色褐色細粒砂 | 17 10YR2/1 黒色土      | 径5~10mmの礫を含む       | 25 2.5Y6/8 明黄褐色粗粒砂  |
| 9 10YR2/3 黒褐色土      | 18 10YR2/1 黒色砂礫     | 径5~20mmの礫を多く含む     | 26 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
| 10 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂   | 19 10YR2/1 黒色砂礫     | 径10~50mmほどの礫を少量含む  | 27 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
|                     |                     |                    | 2.5Y6/4 灰オリーブ細粒砂を含む |
|                     |                     |                    | 28 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
|                     |                     |                    | 10Y4/3 にぶい黄褐色細粒砂を含む |
|                     |                     |                    | 29 2.5Y6/8 明黄褐色礫    |
|                     |                     |                    | 2.5Y5/6 黄褐色細粒砂      |

第6図 00A区土層断面図(1:100)



第7図 99A・B土層断面図(1:100)

|                             |   |                                   |
|-----------------------------|---|-----------------------------------|
| <b>I層 表土および攪乱</b>           |   |                                   |
| 1 10YR5/3                   | にぶい黄褐色粘土質シルト<br>礫を多く含み、しまりが弱い。          | 12 5YR2/1 黒褐色粘土質シルト               |
| 2 10YR3/1                   | 黒褐色粘土質シルト<br>遺物を包含する攪乱層。                | 13 5YR2/2 黒褐色粘土質シルト               |
| <b>II層 旧耕作土および中世以降遺物包含層</b> |   |                                   |
| 3 7.5YR6/6                  | 橙色粘土質シルト                                | 14 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト<br>しまりが弱い。   |
| 4 2Y4/1                     | 黄灰色粘土質シルト                               | 15 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト             |
| 5 10YR4/2                   | 黄灰色粘土質シルト<br>茶褐色をした鉄分を多く含む。             | 16 2.5YR5/2 暗灰黄褐色粘土質シルト<br>沈鉄多い。  |
| 6 7.5Y2/1                   | 黒色粘土質シルト                                | 17 10YR2/1 黒色粘土質シルト               |
| 7 5YR2/1                    | 黒色粘土質シルト                                | 18 2.5YR2/1 黒色粘土質シルト              |
| <b>III層 遺物包含層・遺構埋土</b>      |   |                                   |
| 8 10YR3/1                   | 黒褐色粘土質シルト                               | 19 2.5YR2/1 黒褐色粘土質シルト             |
| 9 7.5YR2/1                  | 黒色粘土質シルト<br>径1cm未満の砂利を多く含む<br>しまりはやや弱い。 | 20 7.5YR1/2 黒褐色粘土質シルト             |
| 10 10YR2/1                  | 黒色粘土質シルト<br>径1cm未満の砂利を多く含む<br>しまりはやや弱い。 | 21 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト             |
| 11 10YR2/1                  | 黒色粘土質シルト<br>径1cm未満の砂利を多く含む              | 22 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト             |
|                             |   | 23 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト             |
|                             |   | 24 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト             |
|                             |   | 25 7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト             |
|                             |   | 26 7.5YR4/2 黒褐色粘土質シルト             |
| <b>IV層 旧地表面</b>             |   |                                   |
| 30 2.5Y5/4                  | 黄褐色粘土質シルト                               | 31 10YR3/2~4/2 黄褐色～<br>灰黄褐色粘土質シルト |
|                             |   | 32 10YR5/2 黄褐色粘土質シルト              |
|                             |   | 33 5Y2/1 黒色粘土質シルト                 |
|                             |   | 34 10Y5/1 褐灰色粘土質シルト               |
|                             |   | 35 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト             |
|                             |   | 36 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト<br>礫を多く含む   |
|                             |   | 37 2.5Y5/2 灰黄褐色粘土質シルト             |
|                             |   | 38 2.5Y5/4 灰黄褐色粘土質シルト             |
| <b>V層 守山面</b>               |   |                                   |
| 39 10YR6/6                  | 明黄褐色礫層                                  |                                   |

番号に ' の付いている層は、同色の土性でレキが多く含まれていることを示す。

## 第二節 時期区分

今回の報告にあたり、以下のように時期区分を設定する。

第2表 時期区分

|                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| <b>I 期 縄文時代～弥生時代初頭</b>      |                             |
| i 期 中期                      | iii d 期 晩期前葉(元刈谷式)          |
| ii 期 後期前葉                   | iii e 期 晩期中葉(稲荷山式・桜井式～西之山式) |
| iii a 期 後期後葉(元住吉山II式～宮滝式併行) | iii f 期 晩期後葉(五貫森式)          |
| iii b 期 後期末(下別所式・滋賀里I式併行)   | iii g 期 晩期終末(馬見塚式)          |
| iii c 期 晩期初頭(寺津式)           | iii h 期 弥生初頭(樫王式)           |
| <b>II 期 弥生時代中期後葉</b>        |                             |
| <b>III 期 古墳時代後期</b>         |                             |
| <b>IV 期 中世・戦国期</b>          |                             |

( ) は型式名とのおおよその対応関係を示す

### 第三節 検出遺構

今回の調査で検出された遺構の所属時期は、Ⅰ期(縄文時代)・Ⅱ期(弥生時代中期後葉)・Ⅲ期(古墳時代後期)・Ⅳ期(中世～戦国期)にまたがっていたが、Ⅰ期に属する遺構が大半であった。各時代ごとに順を追って報告していく。

#### 縄文時代

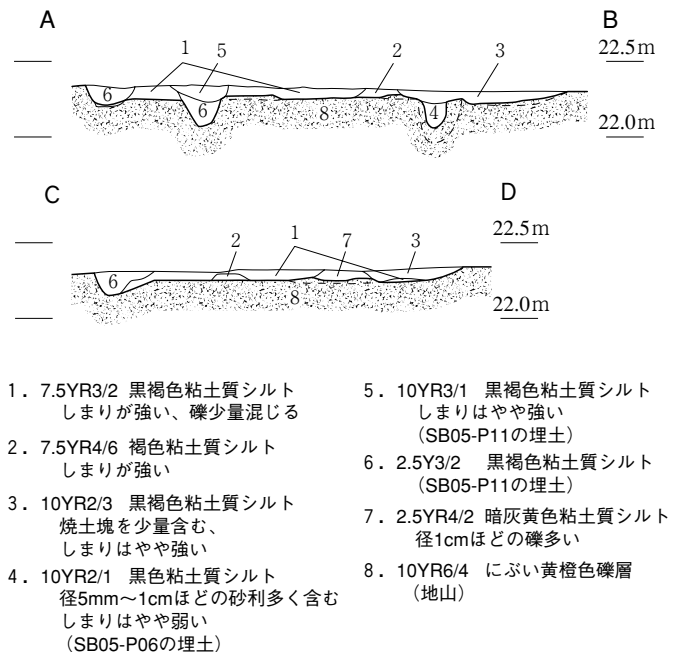
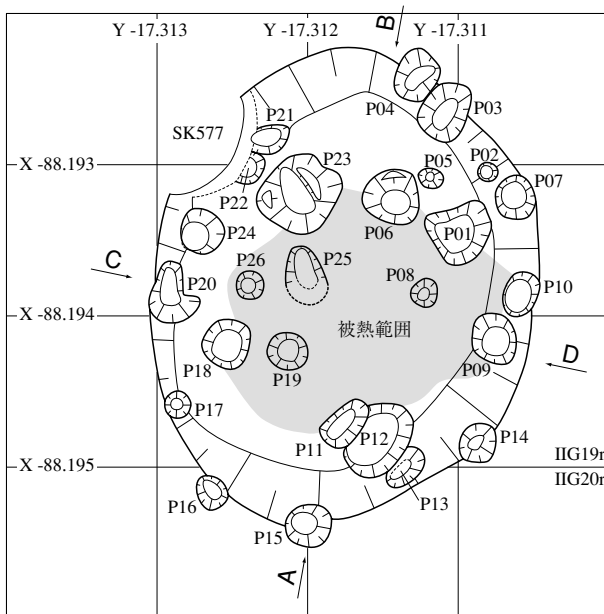
##### 1. Ⅰ期の遺構

縄文時代に属する遺構には、住居跡・土器棺墓・土坑(土壙墓も含める)・集石遺構がある。また、土坑が環状に連なる部分が2ヶ所見つかっている。

##### a. 住居跡

今回明確に検出されたのは、SB04の一例のみである。平面プランは長軸約3m、短軸約2.5mほどの楕円形状である。遺構の断面は皿形を呈し、遺構の肩はなだらかな立ち上がりを示している。遺構底面は被熱している部分が全体の二分の一程度まで見られる。包含層掘削時からこの近辺では遺物の出土が極めて多く見られた。最終検出面で遺構プランを確定してから遺構内の遺物出土はセクション図上面のレベルで終わっており、さらにその下層(セクション図の1層、厚さ8～10cm)からの遺物の出土は極端に少なかった。1層は、第一節で述べたⅣ層の一部と考えられることから、いわゆる「平地式住居」であった可能性が高い。今回の調査では残念ながら遺構外郭に周堤の存在は確定できなかった(註1)。SB04の遺構外郭に沿って、SK577・SZ07・SZ18の重複が見られるのは、注目される。時期の比定は難しいが、晩期前半(iii c 期～iii e 期前半)の範疇と考えられる。床直上では石器がまとまりをもって出土した(1114～1134)。

#### 平地式住居 の万能性



第8図 SB04(1:50)

(註1)周堤は存在していた可能性が高い。包含層掘削時に問題があった。それは機械的に深く掘り下げをしすぎるといふ、失敗をしてしまったために土盛り部分の検討ができなくなってしまったことにある。多いに反省したい。

## b. 土器棺墓

土器棺墓は牛牧遺跡を特徴づける遺構である。今回の調査では99 A区で24基、99 B区で17基、00 A区で2基、合計43基が検出された。ここでは、各土器棺墓の検出状況の報告を主とする。

**棺身・棺蓋** なお、報告するに当たり、棺身・棺蓋のどちらに相当するのか判断しかねる土器片も存在する。棺の構造に関わる問題につながるため詳細は後述することにし、ここでは便宜的に出土状況から土器棺墓の中心的位置を占める土器片・個体を「棺身」とし、それを覆う形になっているものを「棺蓋」と呼称する。

**土壌の掘り方** 土器棺墓の調査でしばしば問題になるものに、棺を埋納したとされる土壌の掘り方の検出がある。現場の調査では、調査の進行上、無理して「検出」したものもある。ここでは、掘り方検出時の状況を明文化することにした。また、不確かな掘り方を遺構出土状態図では、破線で示すことにした。

### ①検出状況

**SZ02  
(横位)**

SZ02は99A区北東端に位置しており、SZ14の南東側に位置する。深鉢形土器三个体からなっている。全体の三分の二周および底部が残存する深鉢形土器を棺身とし、その口縁と、胴部下半を欠損させた深鉢形土器の欠損側とを合わせたものである。さらに棺身の上には、別の深鉢形土器の破片が被せられており、これも棺身を構成していると考えられる。検出された土壌のプランに沿って棺自体も検出されたが、検出された土壌の存在は微妙である。横位埋設である。iii g期。

**SZ03  
(横位)**

SZ03は99A区東端に位置する。深鉢形土器三个体により構成されている。底部を欠損させた全体の二分の一周残存する深鉢形土器を棺身とし遺構底面に敷き、その上面には別の二个体の深鉢形土器口縁部を蓋としている。検出された土壌の掘り方と棺とは一致せず、土壌の存在は疑わしい。横位埋設である。iii e期。

**SZ04  
(横位 or  
斜位)**

SZ04は99 A区南東に位置し、SZ17の南西側でほぼ近接している。深鉢形土器二个体で構成されている。全体の二分の一周および底部が残存する突帯文土器を棺身とし、別个体の突帯文土器口縁部片を蓋としている。棺を埋設する土壌の掘り方の検出を見たが、その存在は微妙である。横位もしくは斜位埋設である。iii f期。

**SZ06  
(横位)**

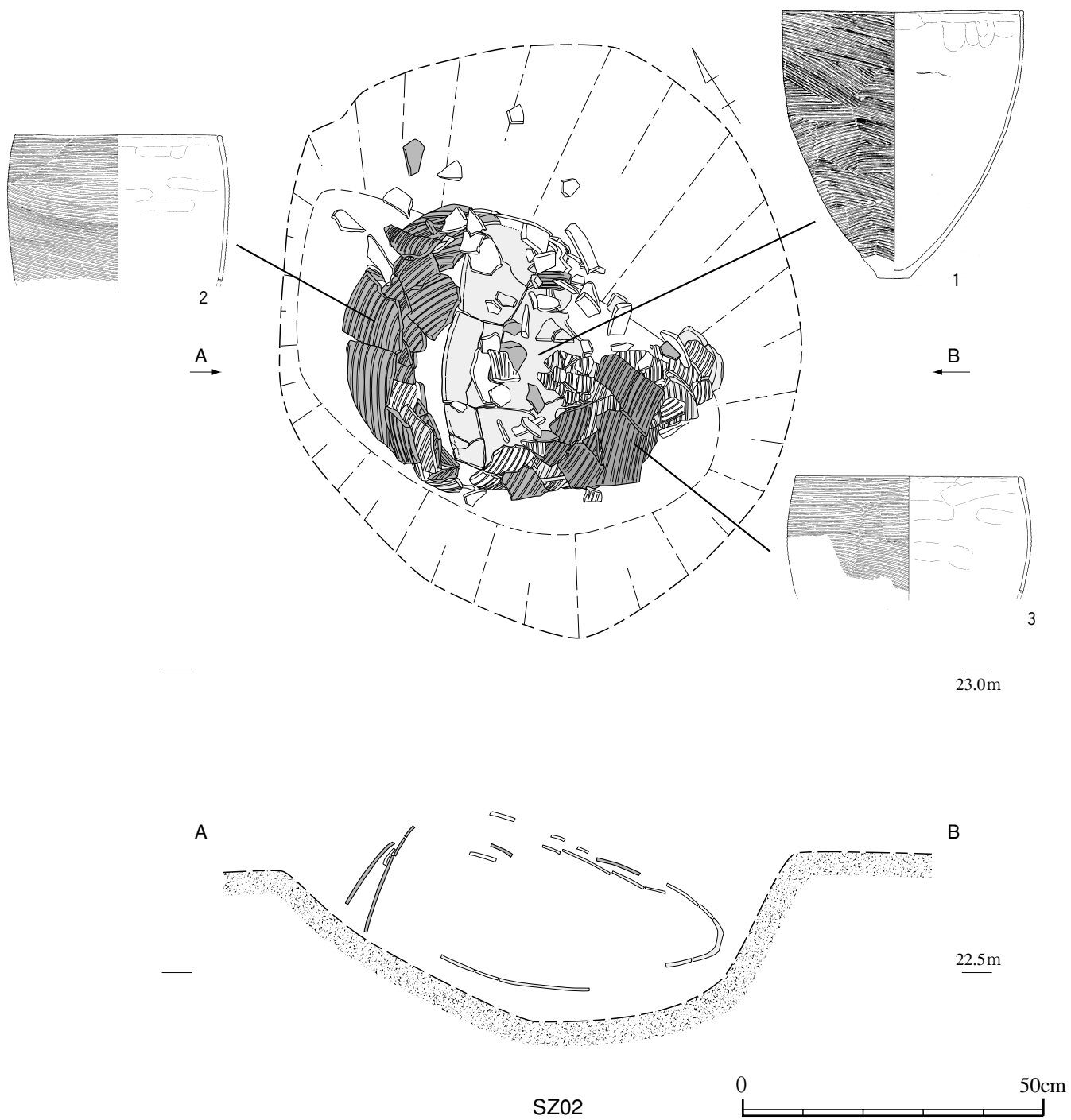
SZ06は99 A区中央に位置し、SZ07の北東に近接している。深鉢形土器二个体で構成されている。底部を欠損させた全体の二分の一周残存する深鉢形土器を棺身とし、その上面の一部には別个体の深鉢形土器口縁部を蓋にしている。浅い窪地状の場所に埋設されたものと思われる、明確な土壌の掘り方は検出できなかった。横位埋設である。iii f期。

**SZ07  
(横位)**

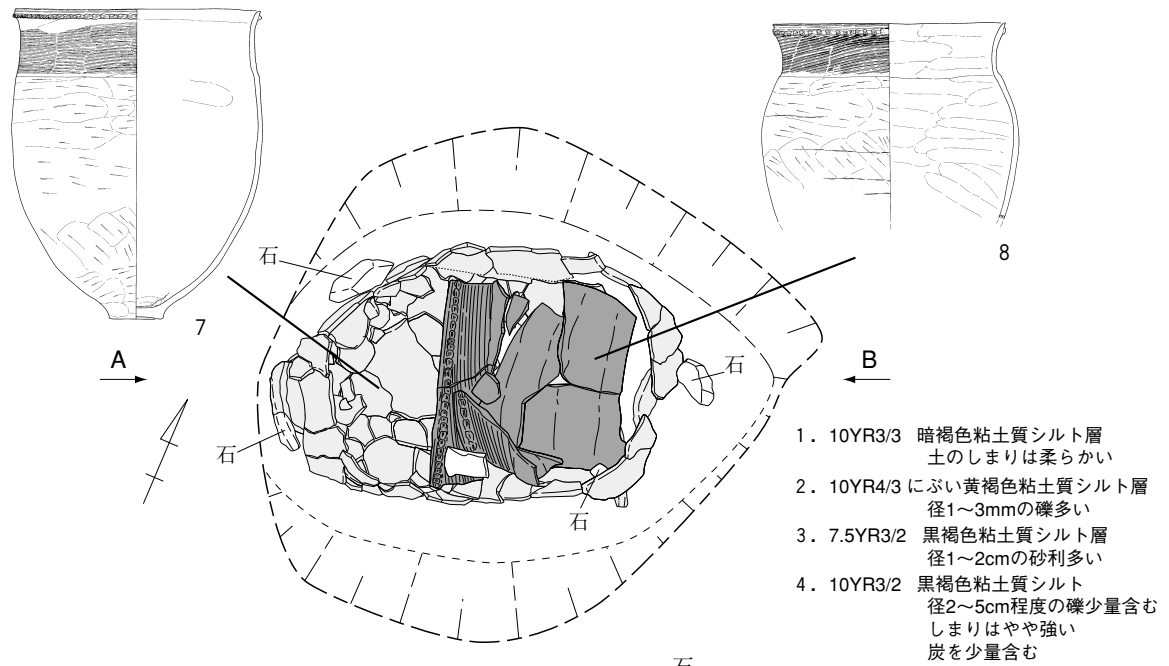
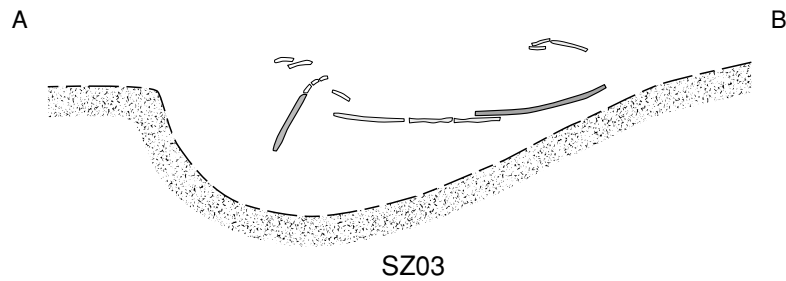
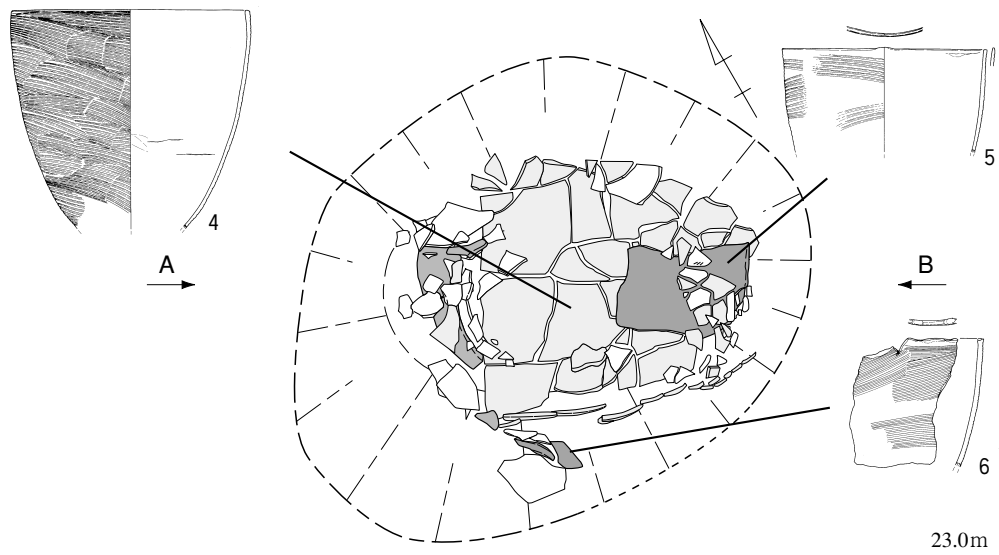
SZ07はSZ06の南西、SZ18の北東に近接した位置にある。深鉢形土器一个体で構成されている。全体の三分の二周および底部が残存する深鉢形土器を棺身としている。ごく浅い土壌の掘り方を検出したが、その存在は微妙であり、元来窪地であったところに埋設された可能性もある。竪穴住居跡SB04に重複している。横位埋設である。iii f期。

**SZ08  
(横位)**

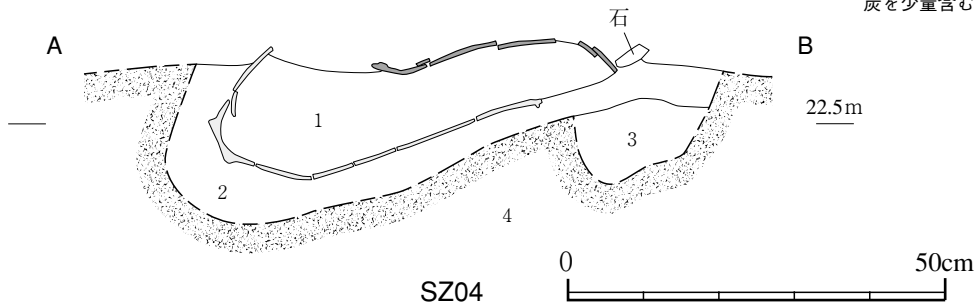
SZ08はSZ18の南西に近接した位置にある。深鉢形土器三个体で構成されている。底部



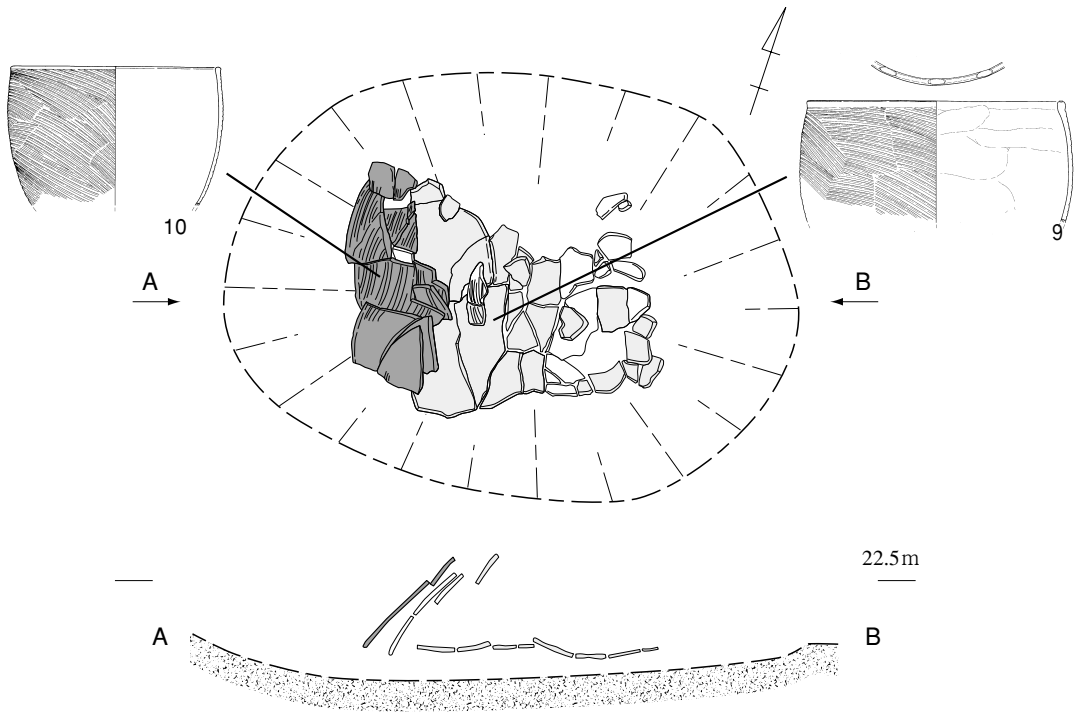
第9图 土器棺墓出土状态图1



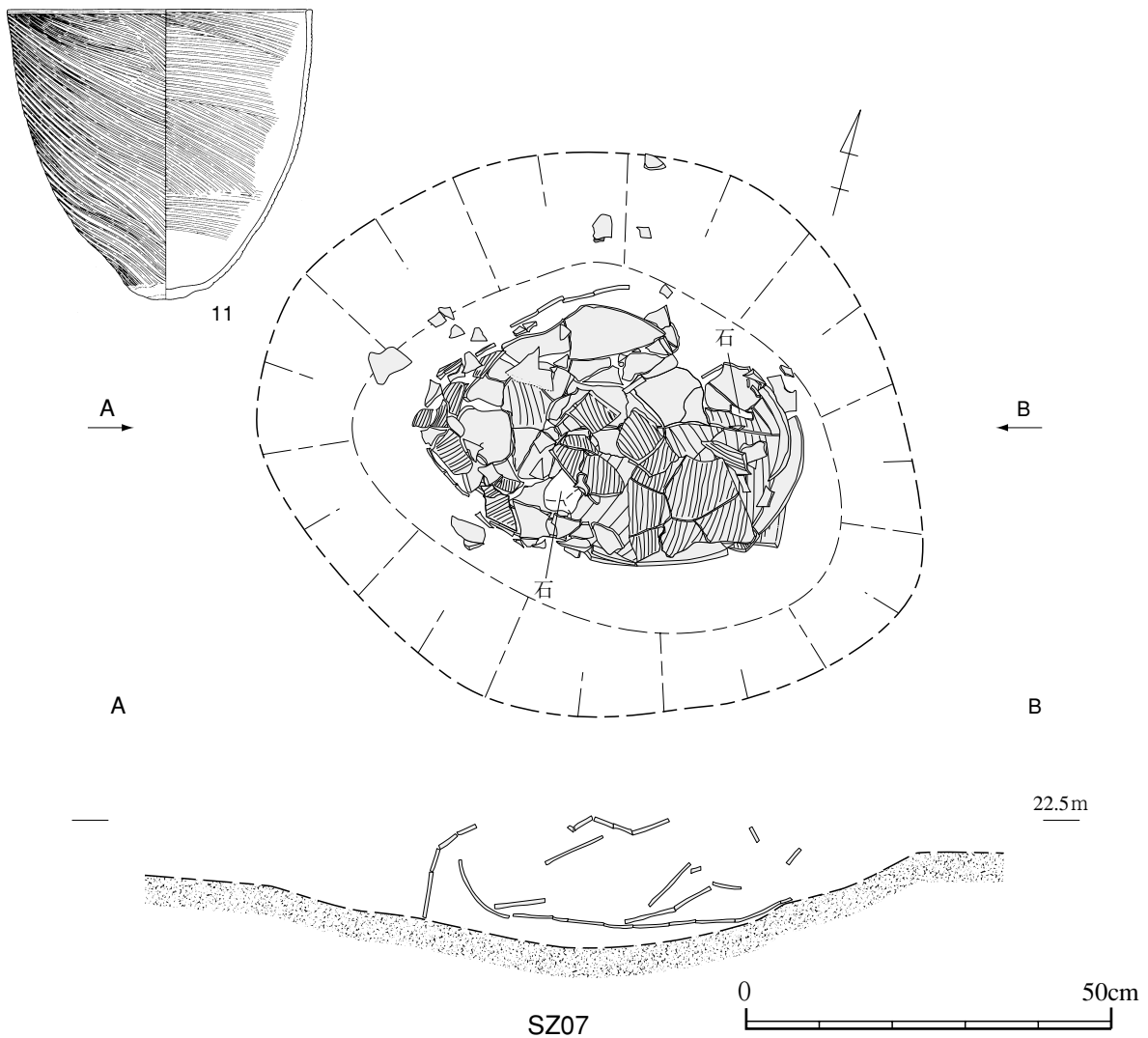
1. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層  
土のしまりは柔らかい
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト層  
径1~3mmの礫多い
3. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト層  
径1~2cmの砂利多い
4. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト  
径2~5cm程度の礫少量含む  
しまりはやや強い  
炭を少量含む



第10図 土器棺墓出土状態図2

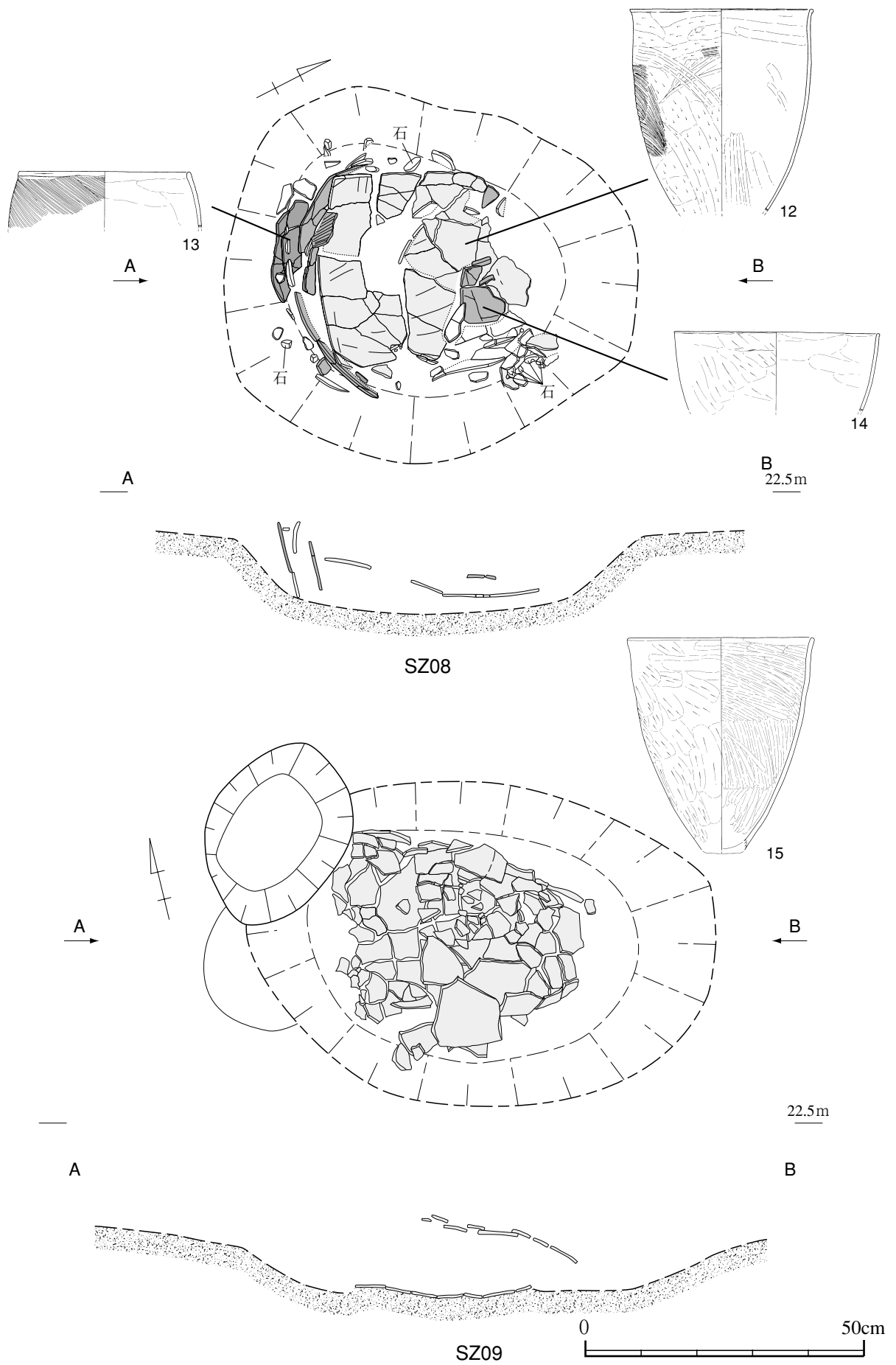


SZ06

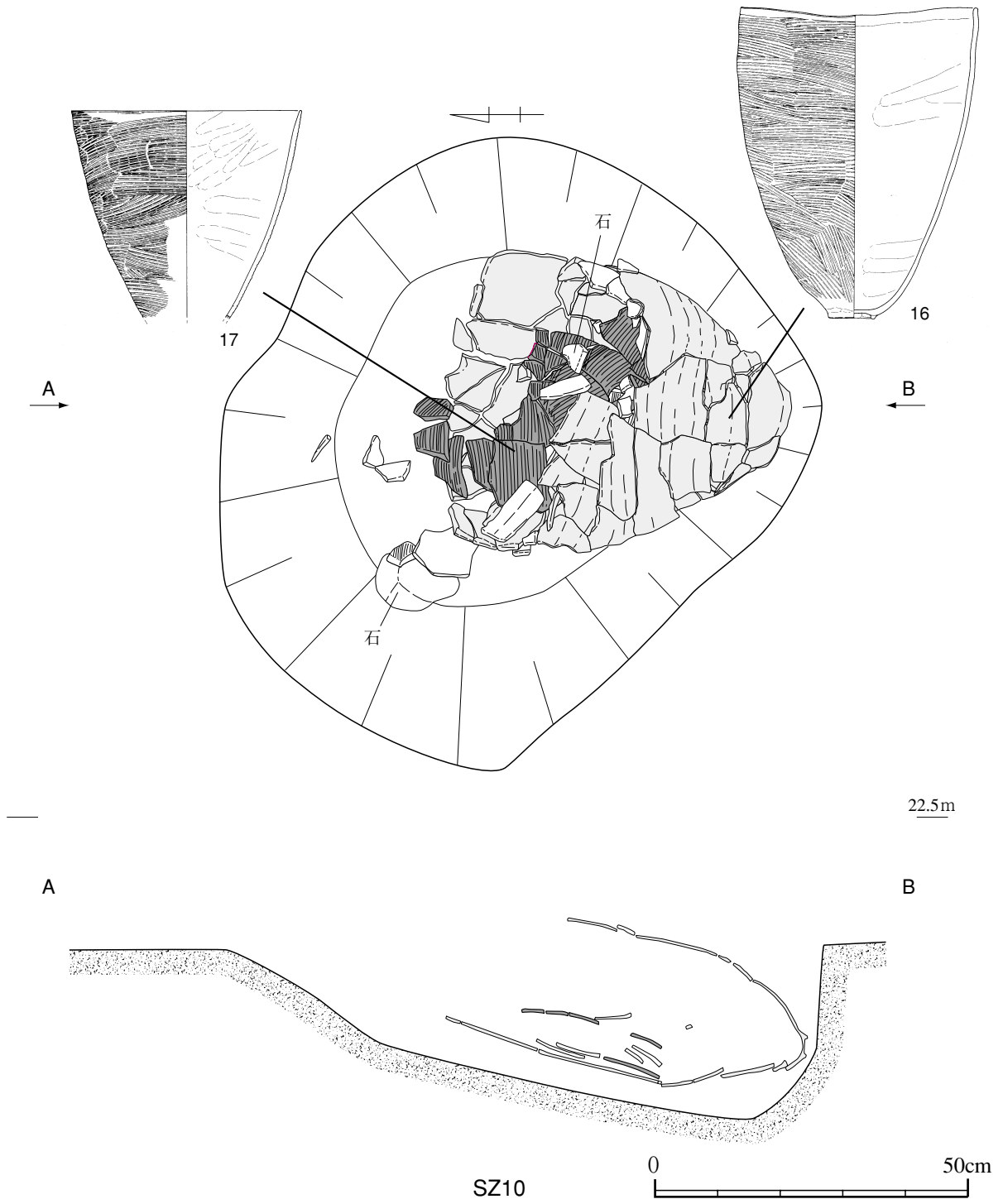


SZ07

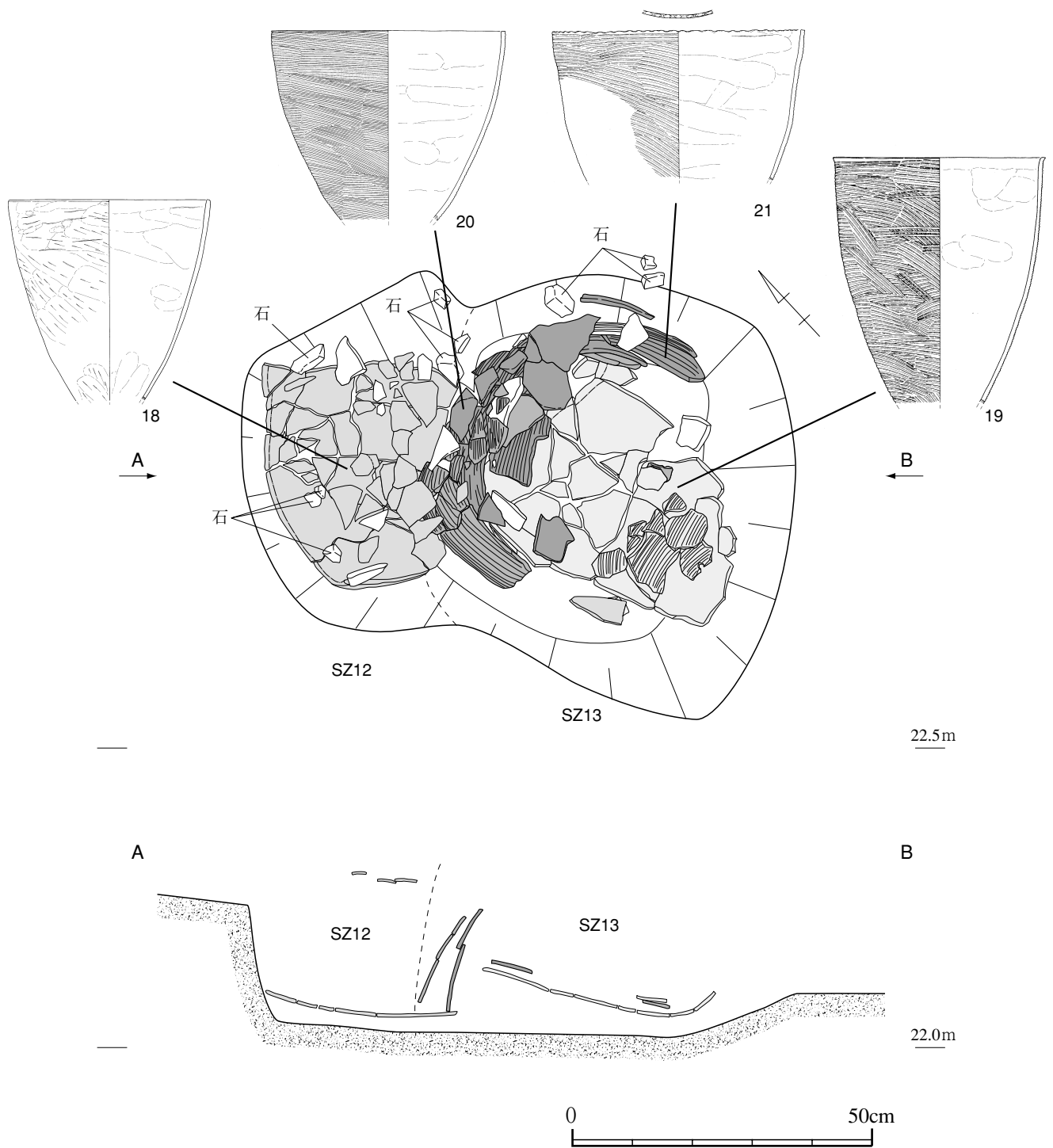
第 11 图 土器棺墓出土状态图 3



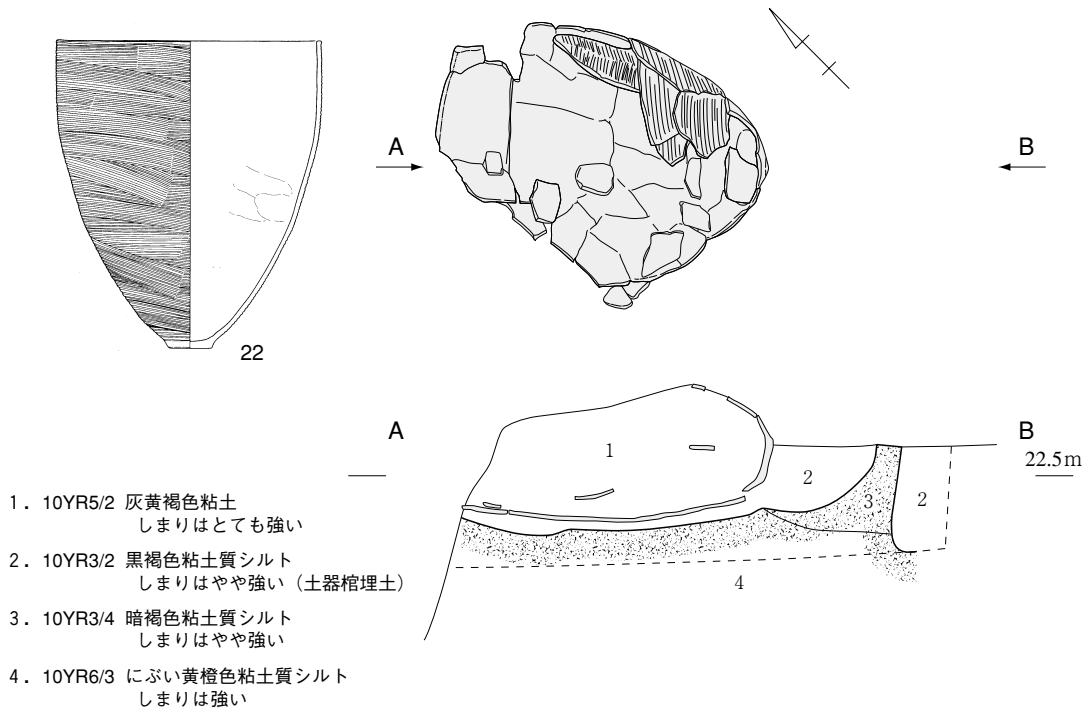
第12図 土器棺墓出土状態図4



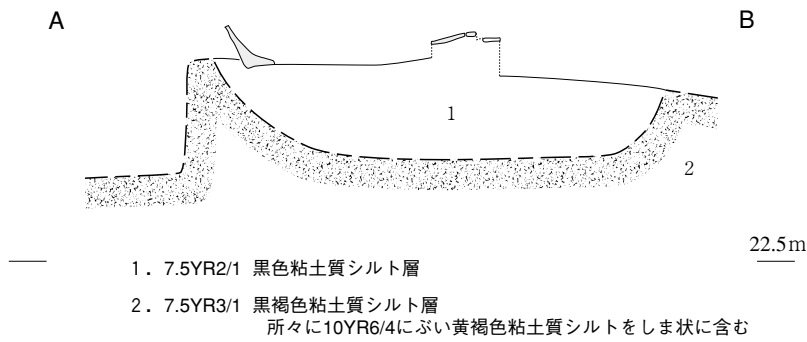
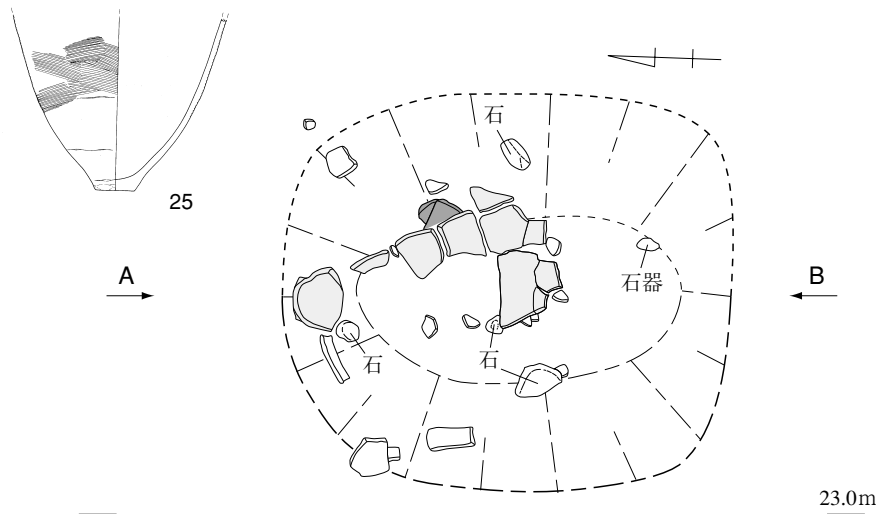
第13图 土器棺墓出土状态图5



第14图 土器棺墓出土状态图6



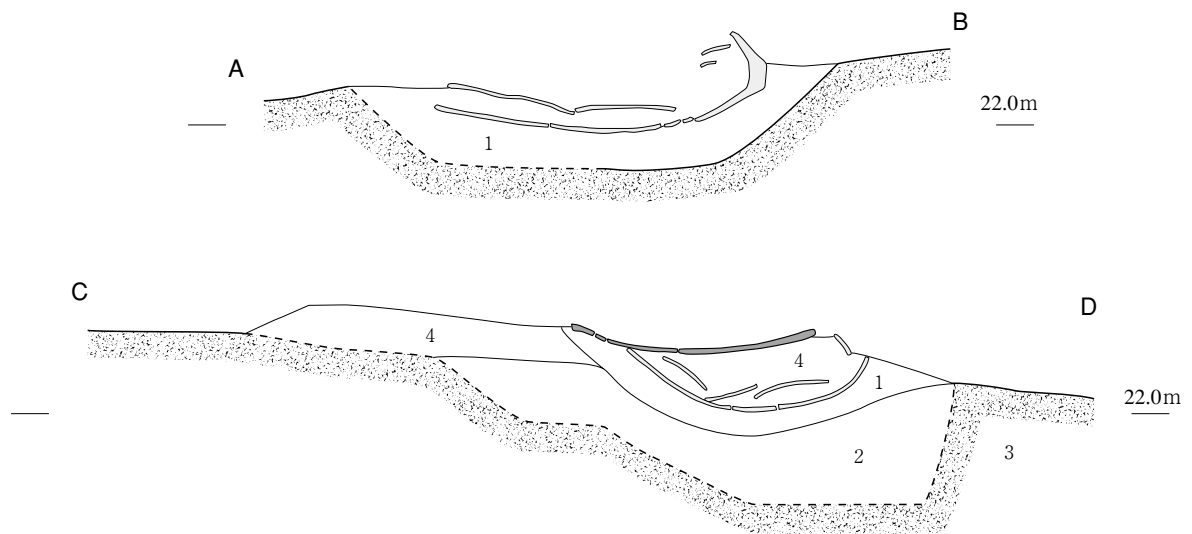
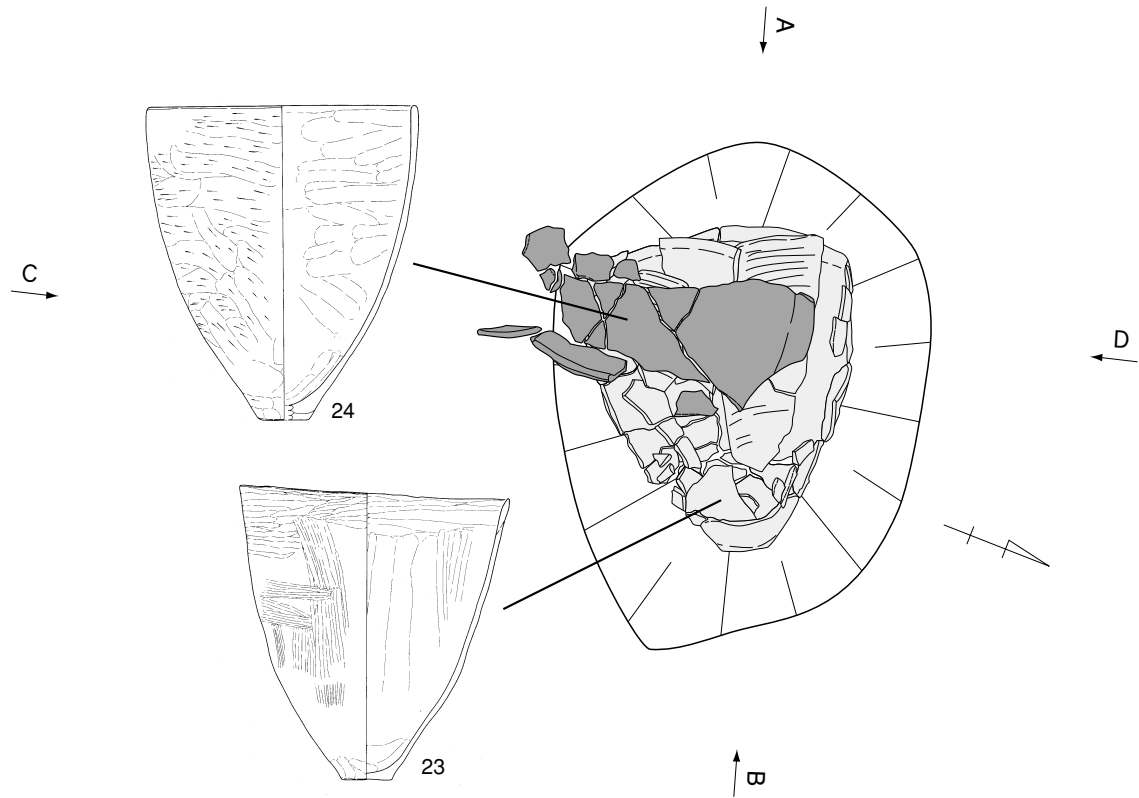
SZ14



SZ16



第15図 土器棺墓出土状態図7

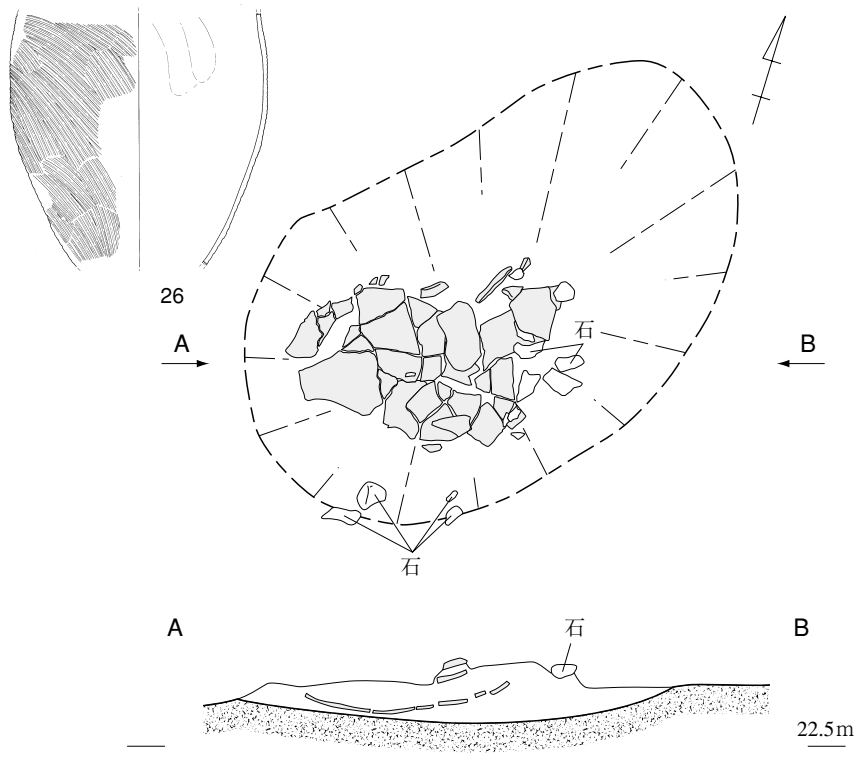


1. 7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
所々に2.5Y5/4黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト層  
径2~3cm程の礫を多く含む (3と1との混じる部分か)
3. 10YR6/8 明黄褐色礫層 地山
4. 7.5YR2/3 極暗褐色粘土質シルト層  
砂利が多い

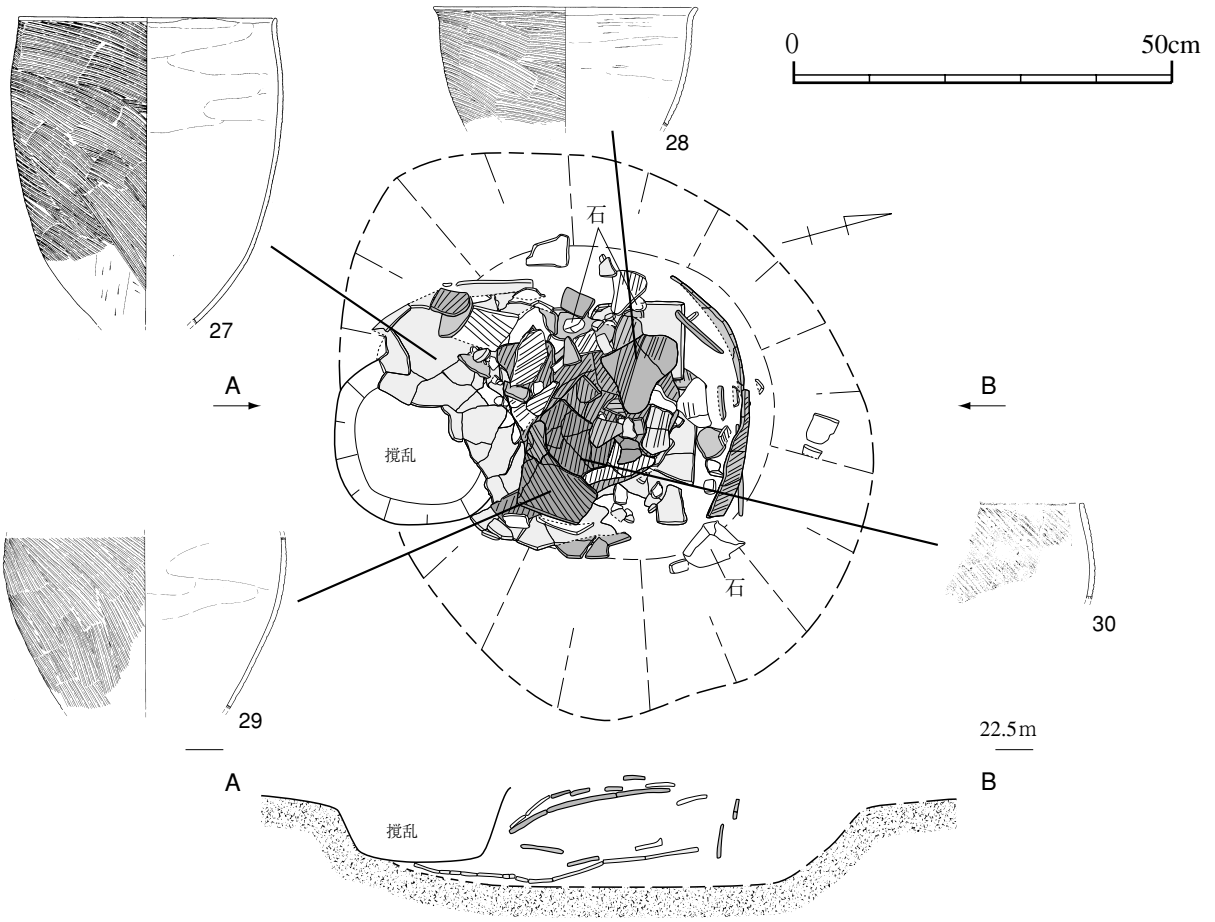
SZ15



第16図 土器棺墓出土状態図8

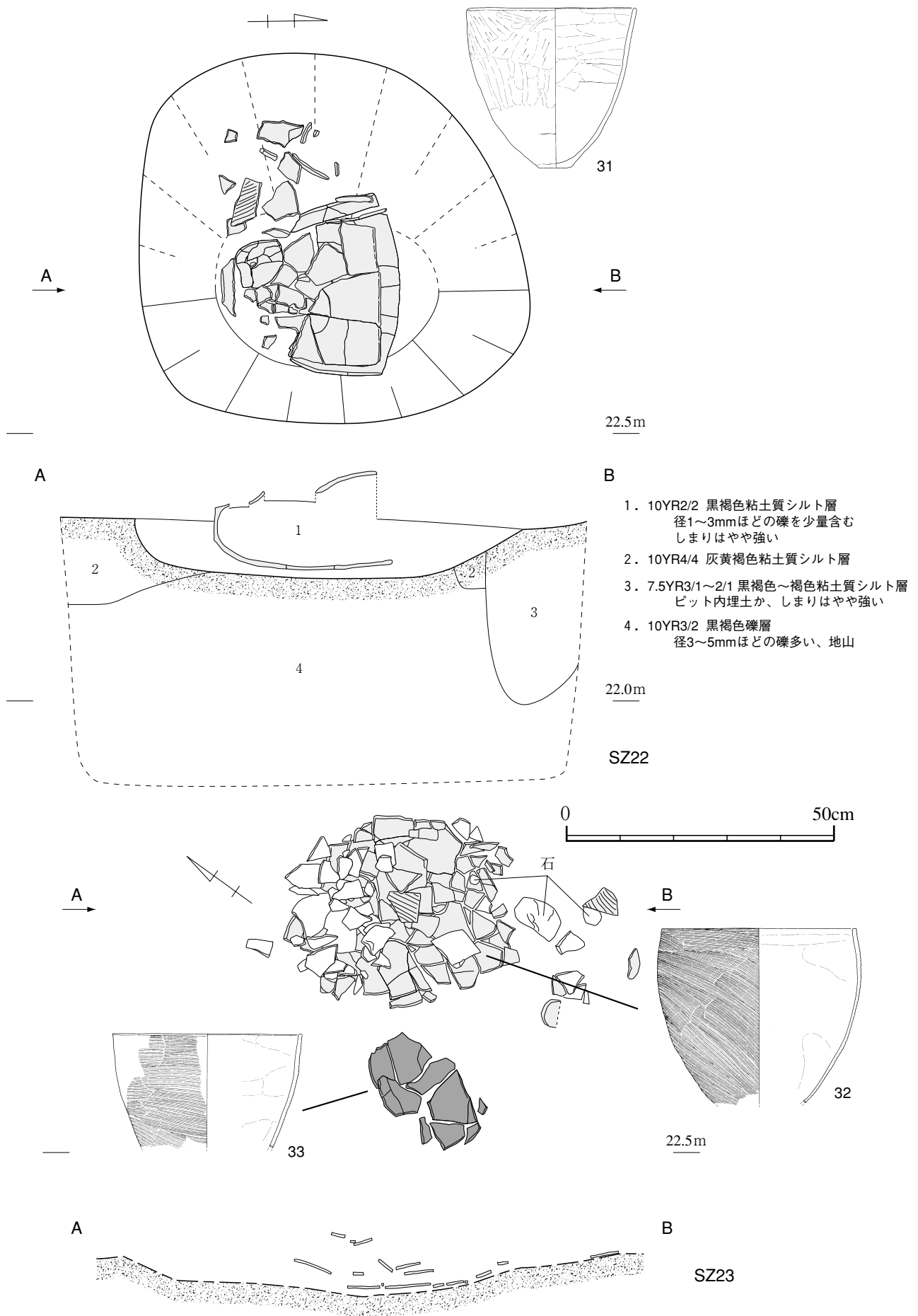


SZ17

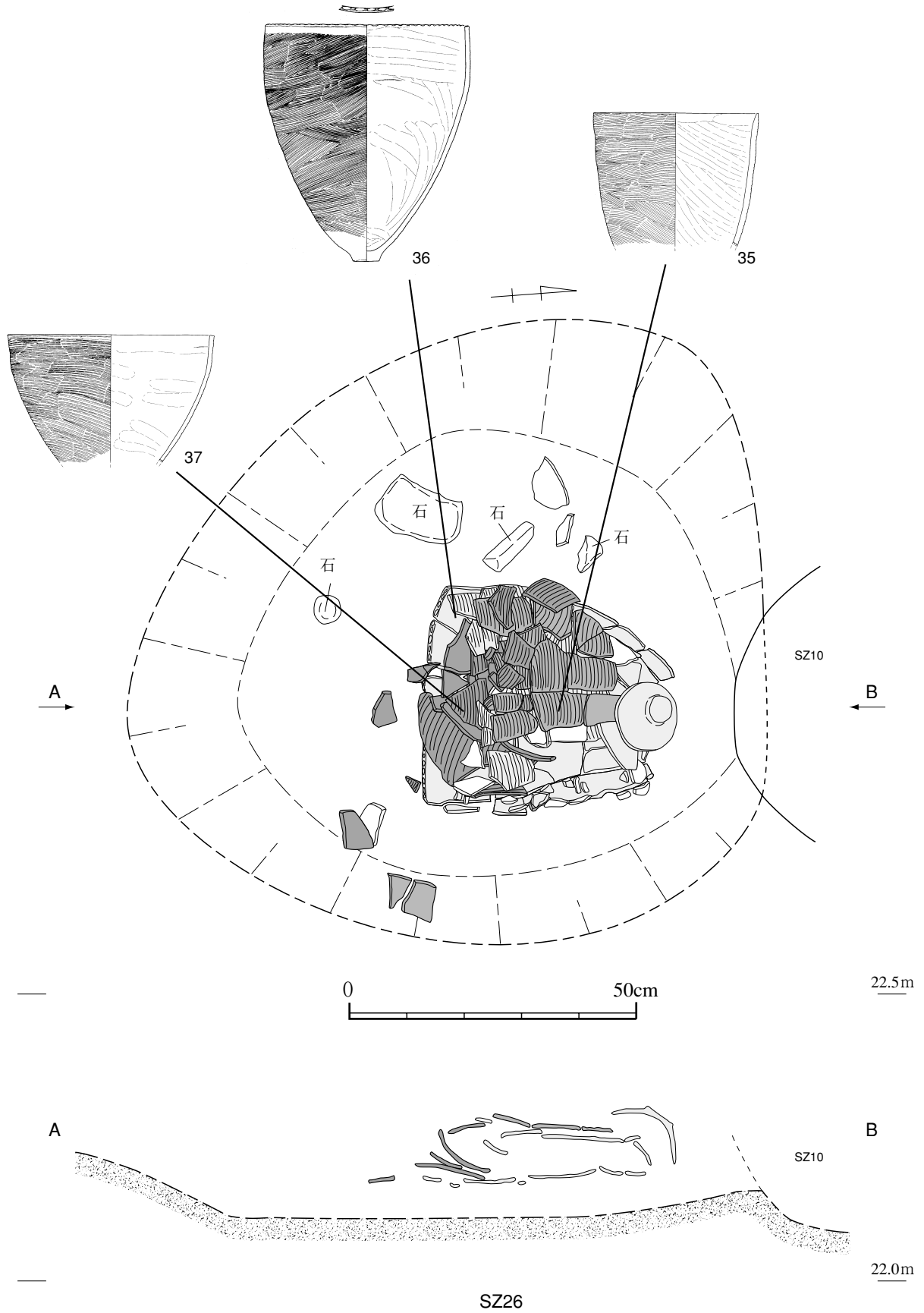


SZ18

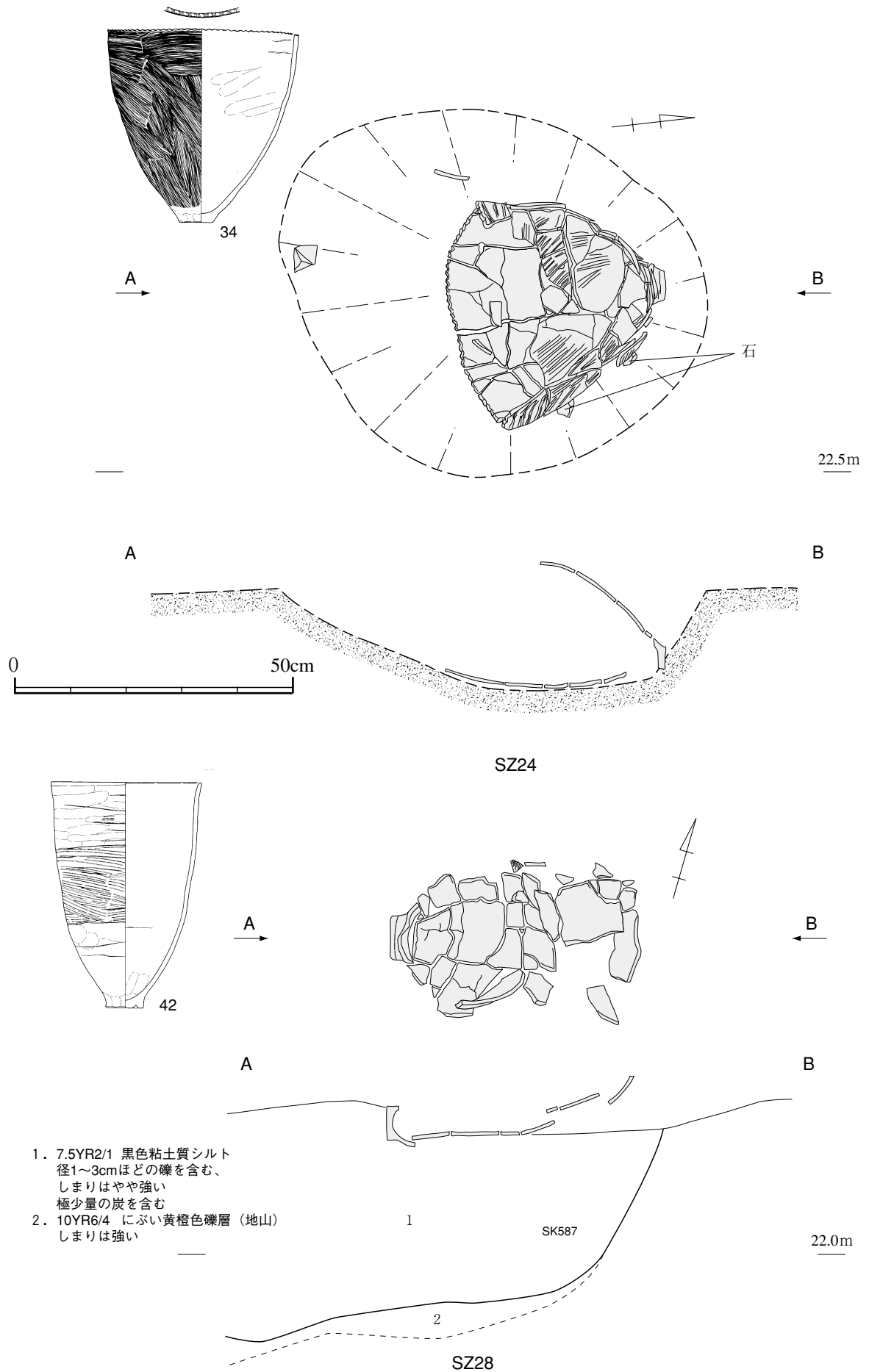
第 17 图 土器棺墓出土状态图 9



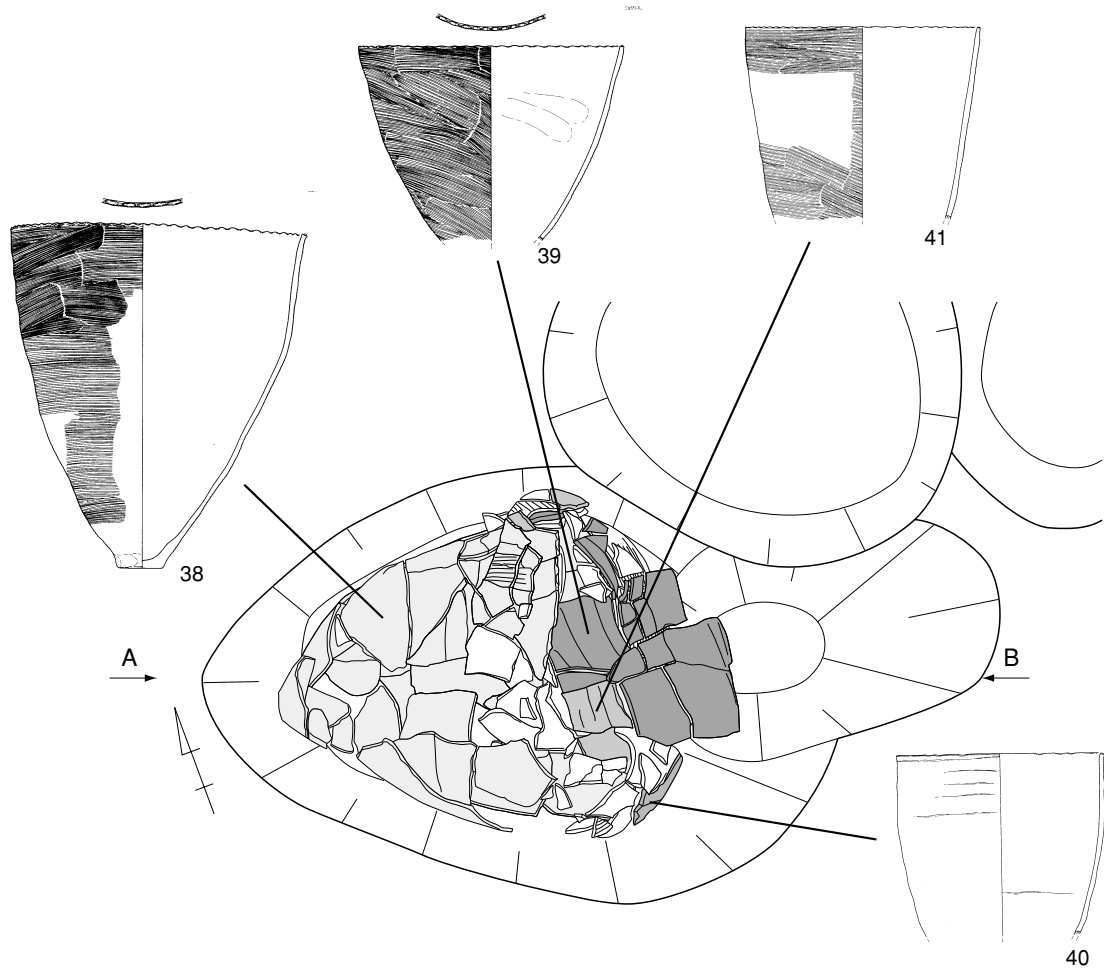
第18図 土器棺墓出土状態図10



第19图 土器棺墓出土状态图11



第20図 土器棺墓出土状態図12



1. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト  
しまりはやや強い

2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト  
極細粒砂少量含む

3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト  
少量小石を混じる

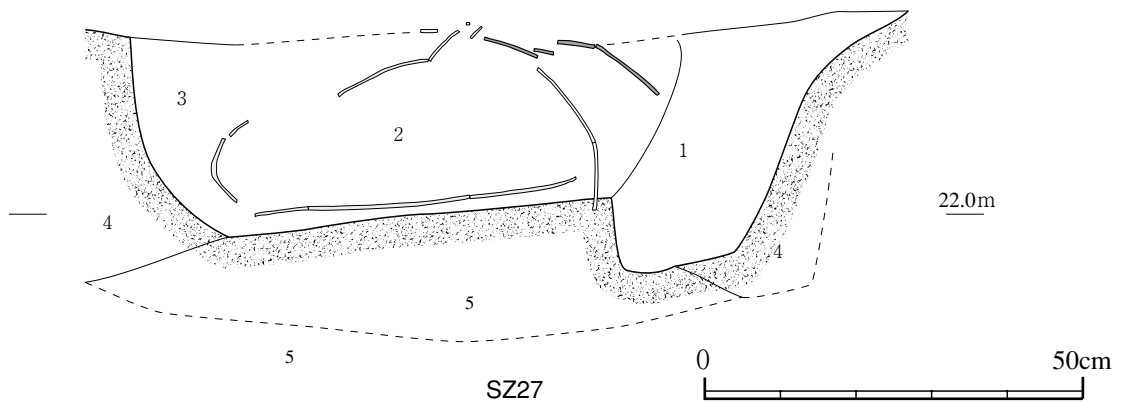
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト

5. 10YR6/6 明黄褐色礫層 (地山)

22.5m

A

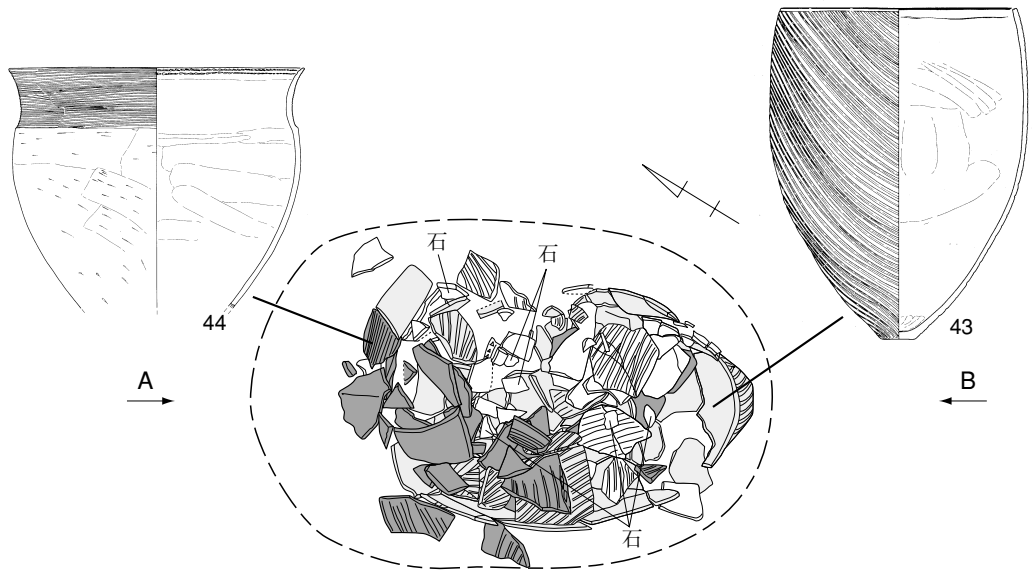
B



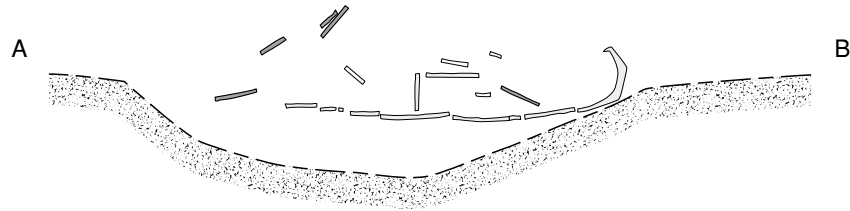
22.0m

0 50cm

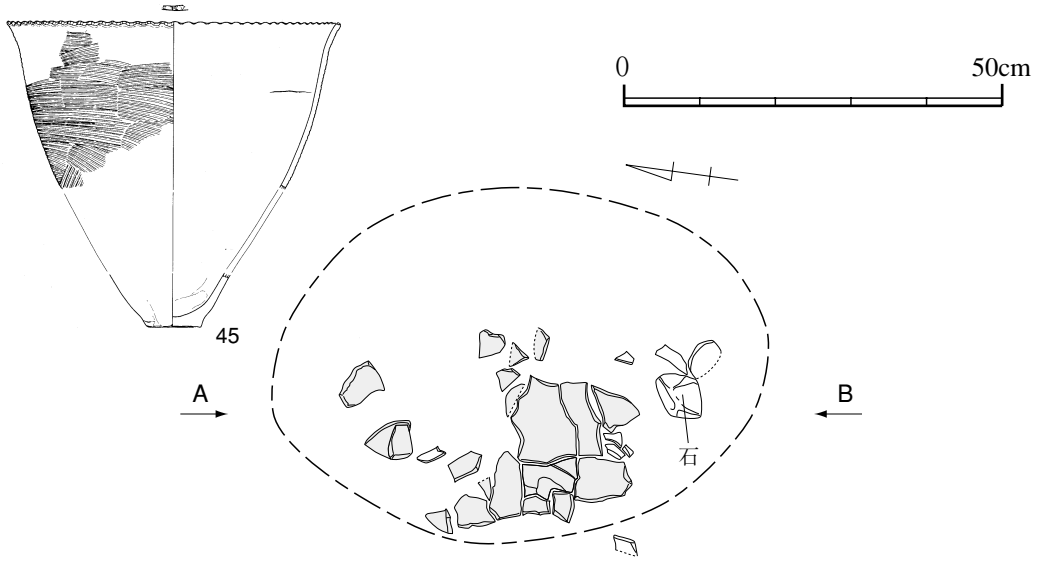
第 21 図 土器棺出土状態図 13



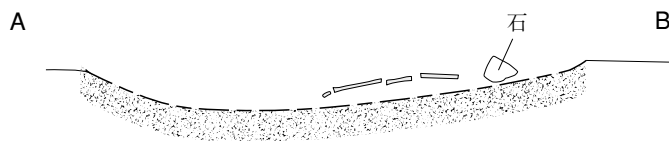
22.5m



SZ29

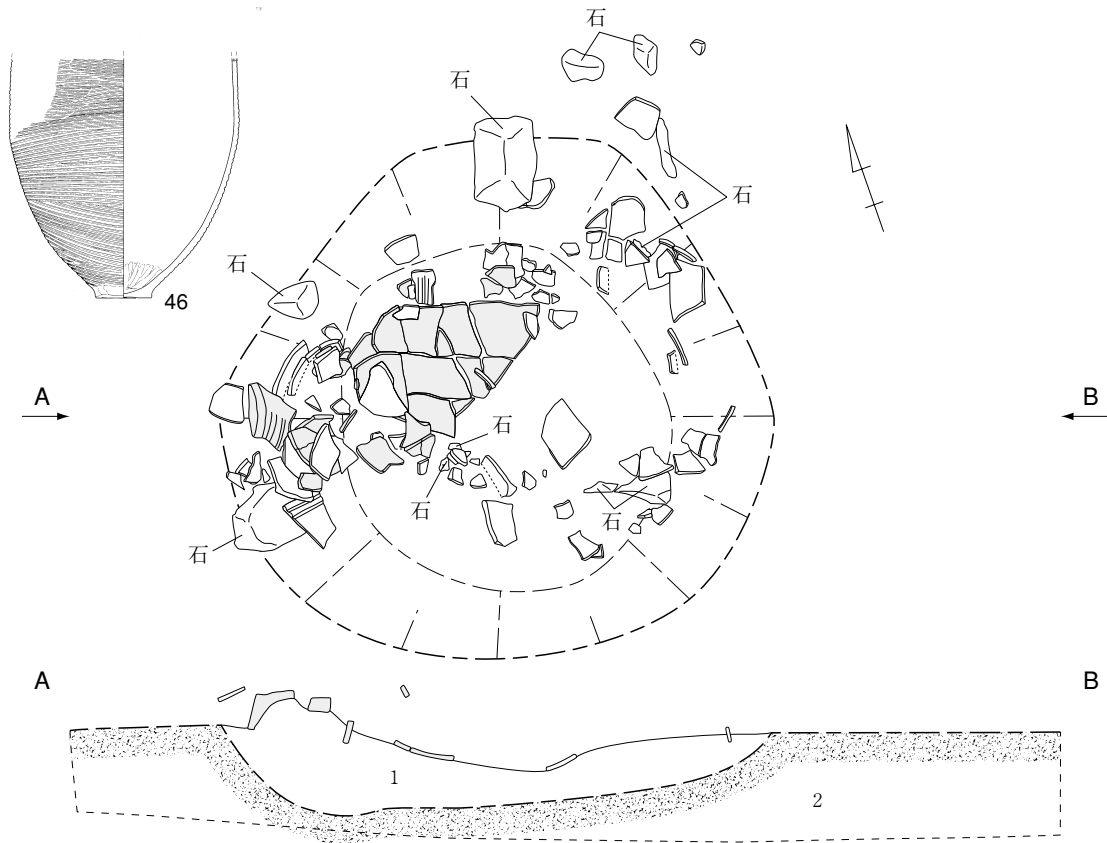


22.5m



SZ30

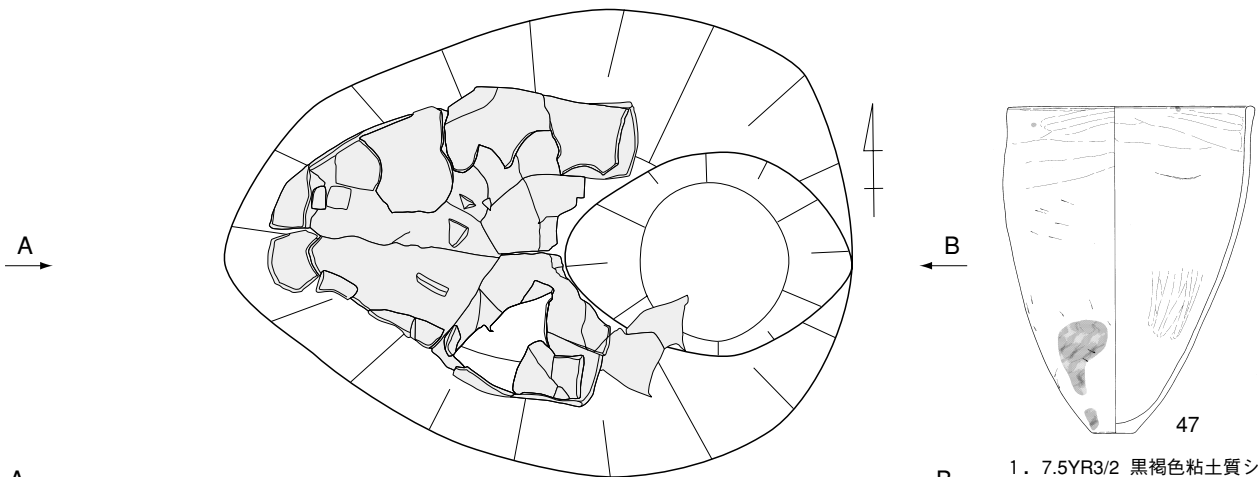
第22图 土器棺墓出土状态图 14



1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
所々に10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルトを含む  
炭を少量含む、しまりはやや強い
2. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト層  
炭を少量含む、しまりはやや強い

0 50cm

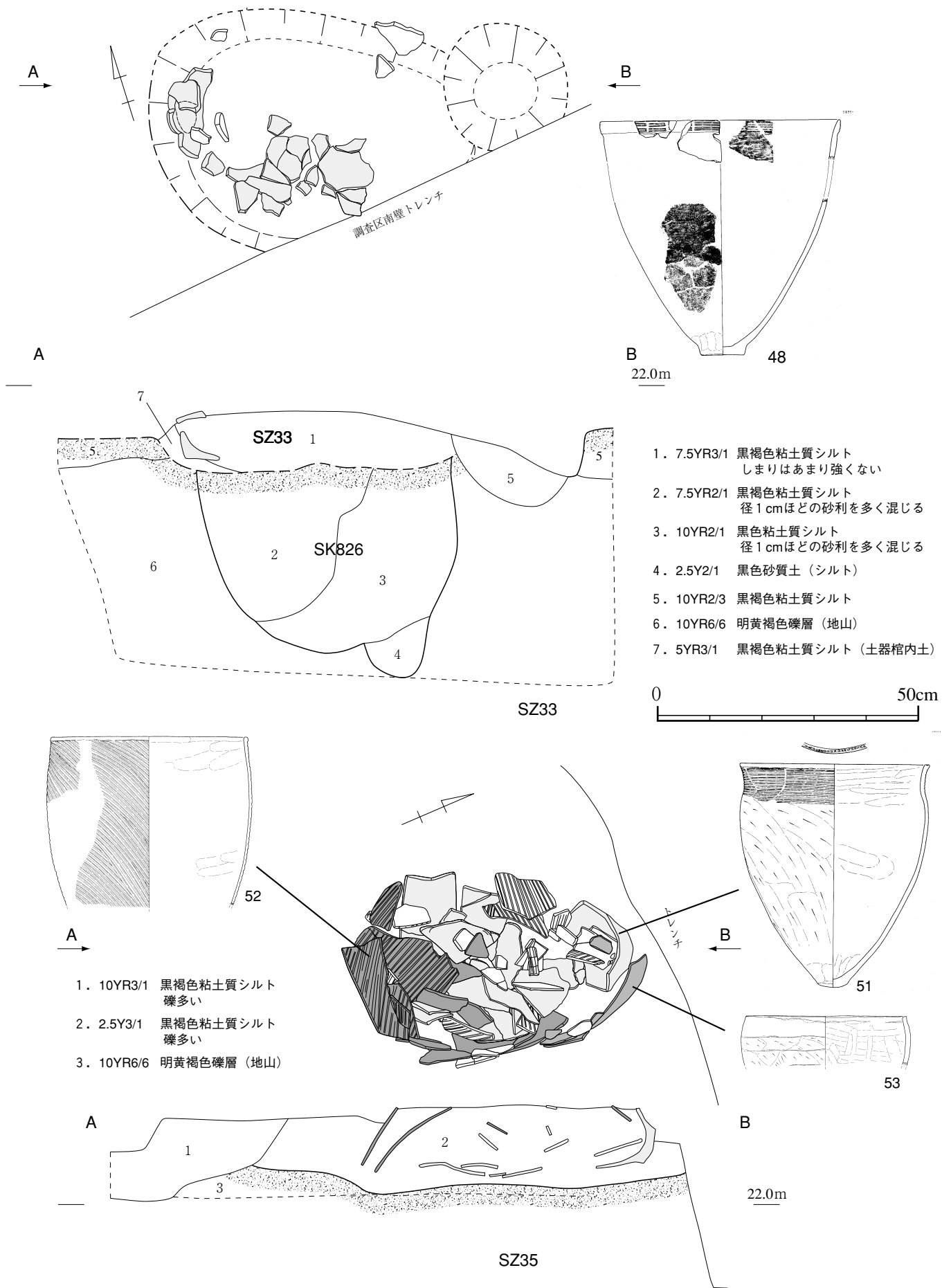
SZ31



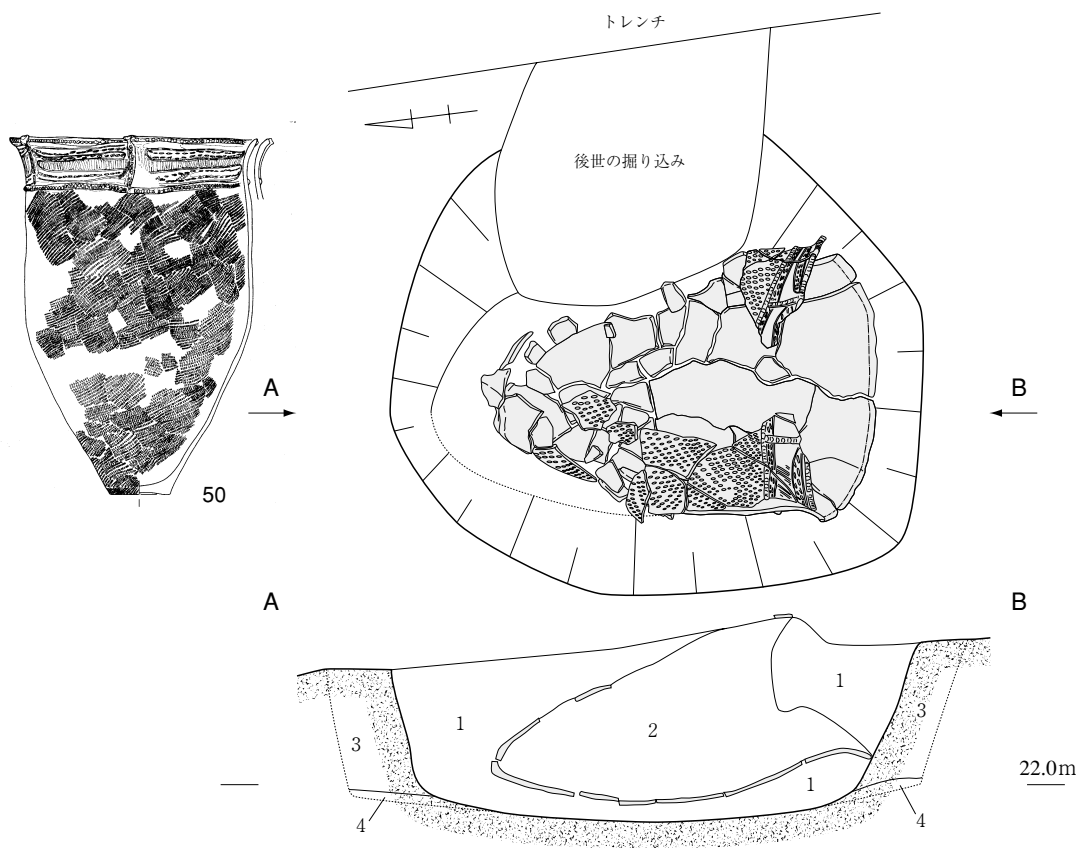
1. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト
2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
3. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト  
灰褐色土を多く含む
- 3'. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
4. 10YR2/3 黒色粘土質シルト  
しまりはやや弱い
5. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土質シルト  
しまりはあまり強くない
6. 10YR6/6 明黄褐色礫層 (地山)

SZ32

第23図 土器棺墓出土状態図 15



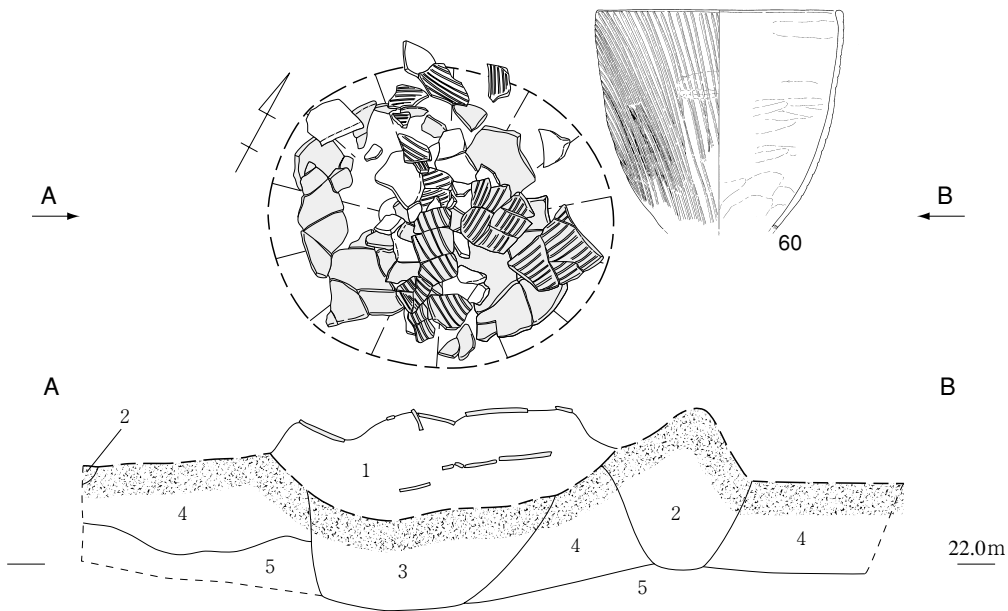
第24図 土器棺墓出土状態図 16



- 1. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト層  
炭を少量含む、径1~3mmほどの砂利を少量含む  
しまりはやや弱い
- 2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
炭を少量含む、しまりはやや弱い

- 3. 7.5YR4/4 褐色粘土質シルト層
- 4. 10YR6/6 明黄褐色砂礫層  
細粒砂・極細粒砂多く含む

SZ34

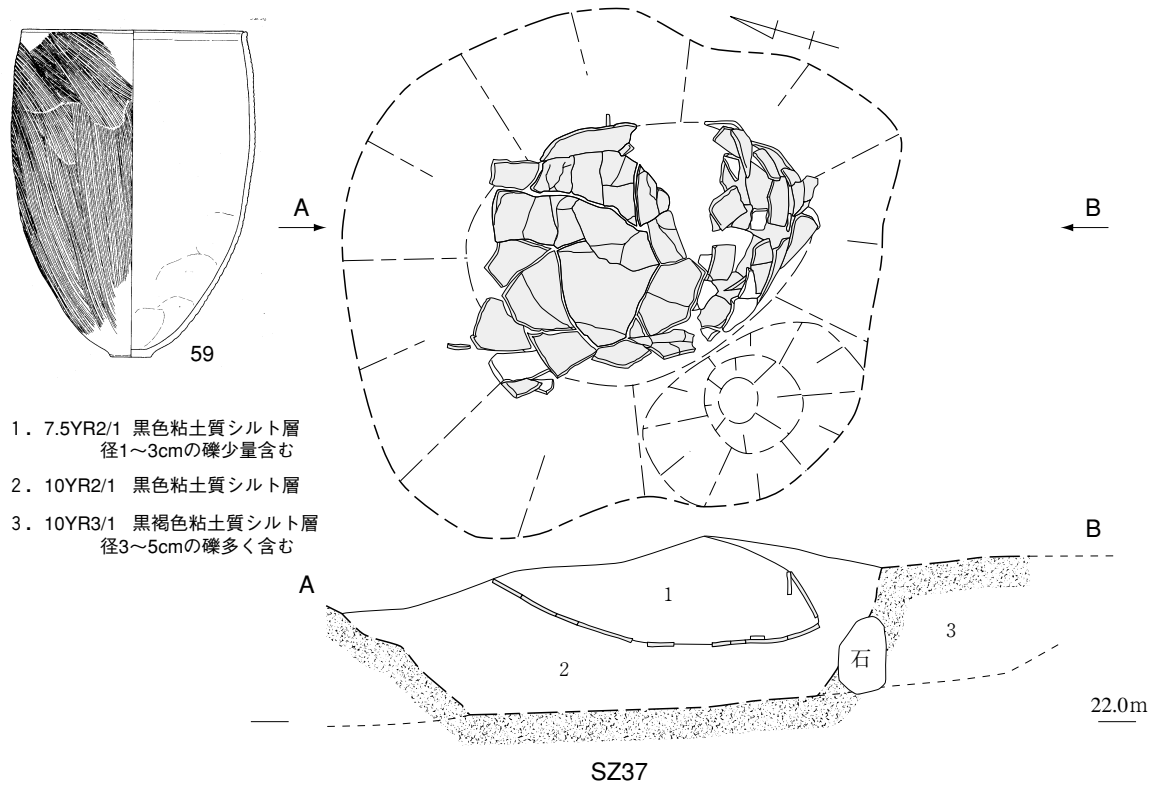
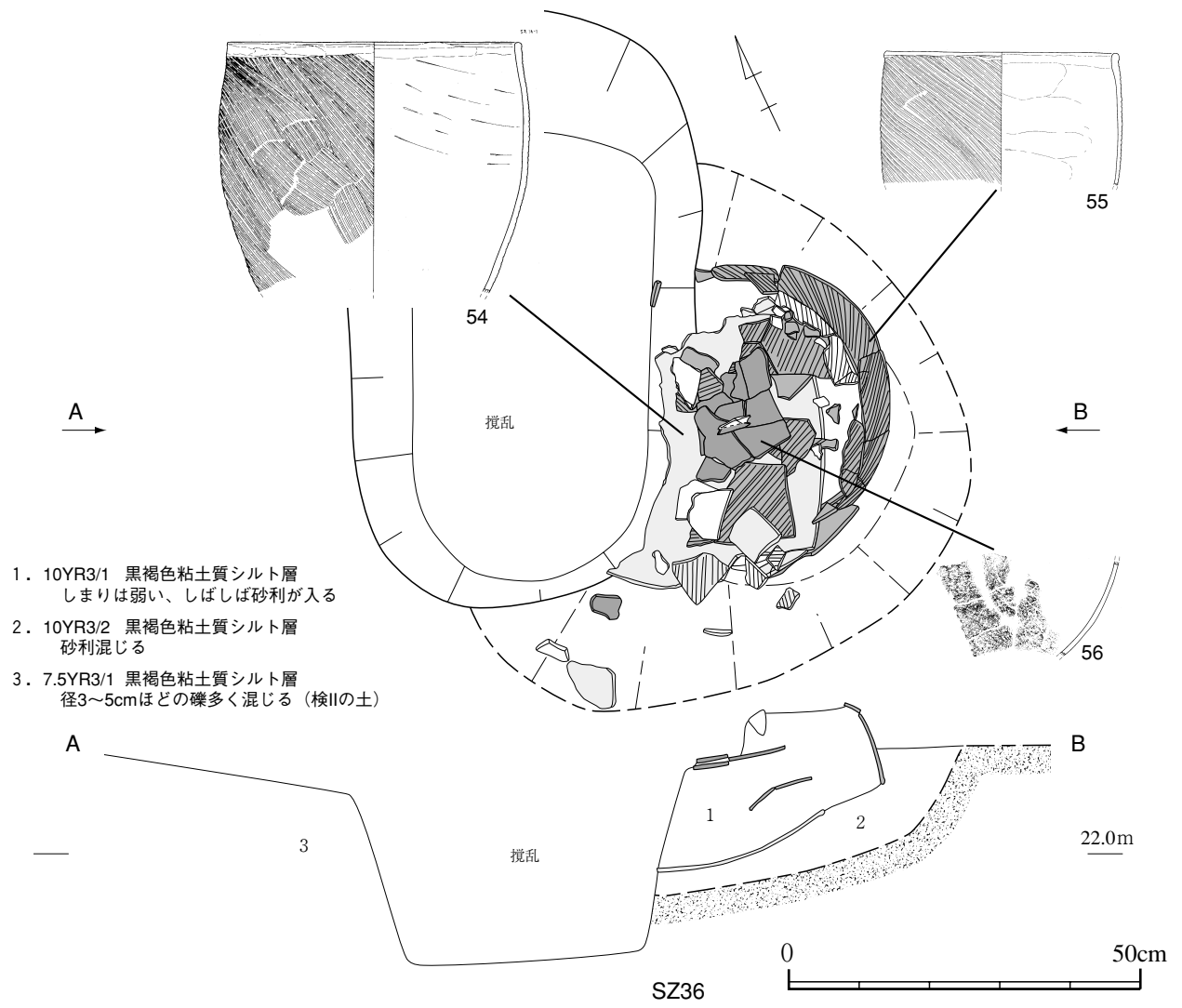


- 1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
径2cmほどの礫混じる（埋土）  
しまりはやや強い
- 2. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト層  
径1~2cmほどの礫少量混じる  
土器棺検出時同一レベルの遺構と考えられる。  
しかし平面では遺構の検出はできない。

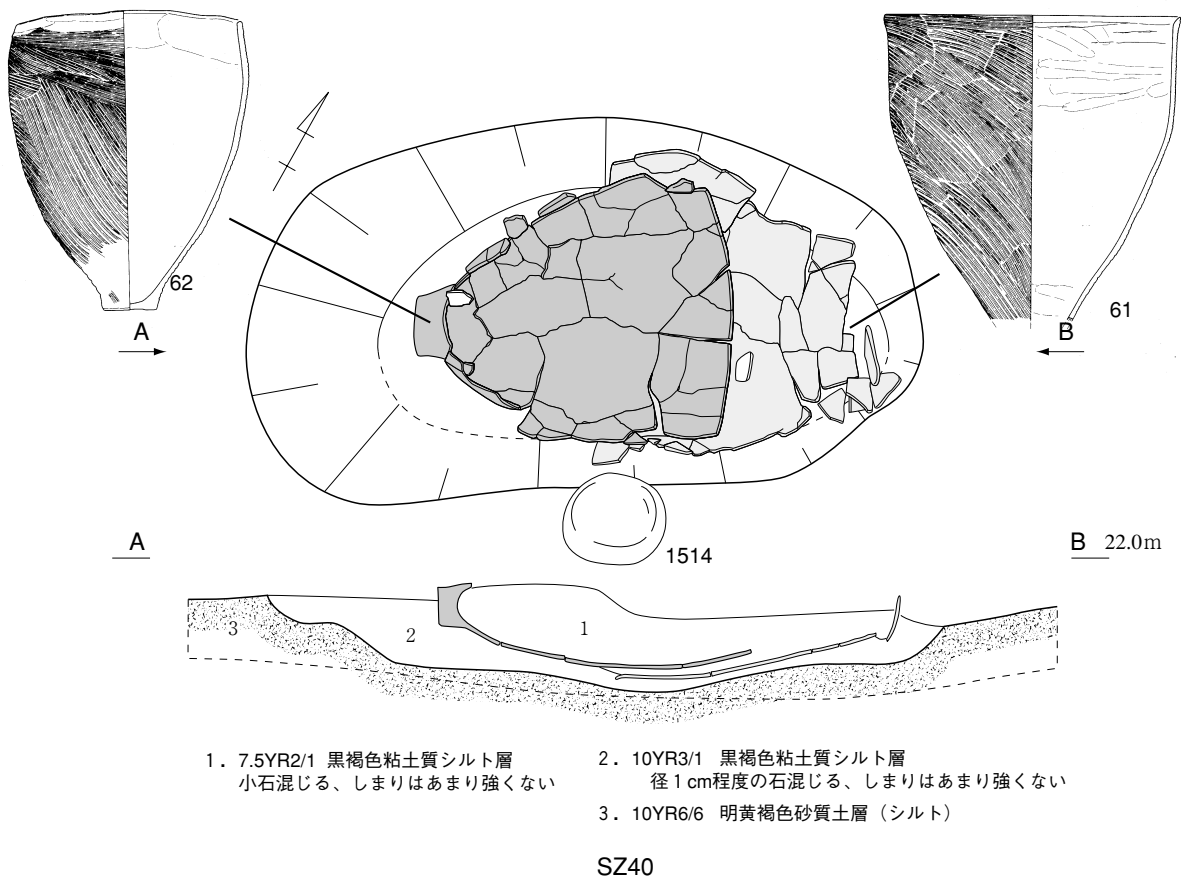
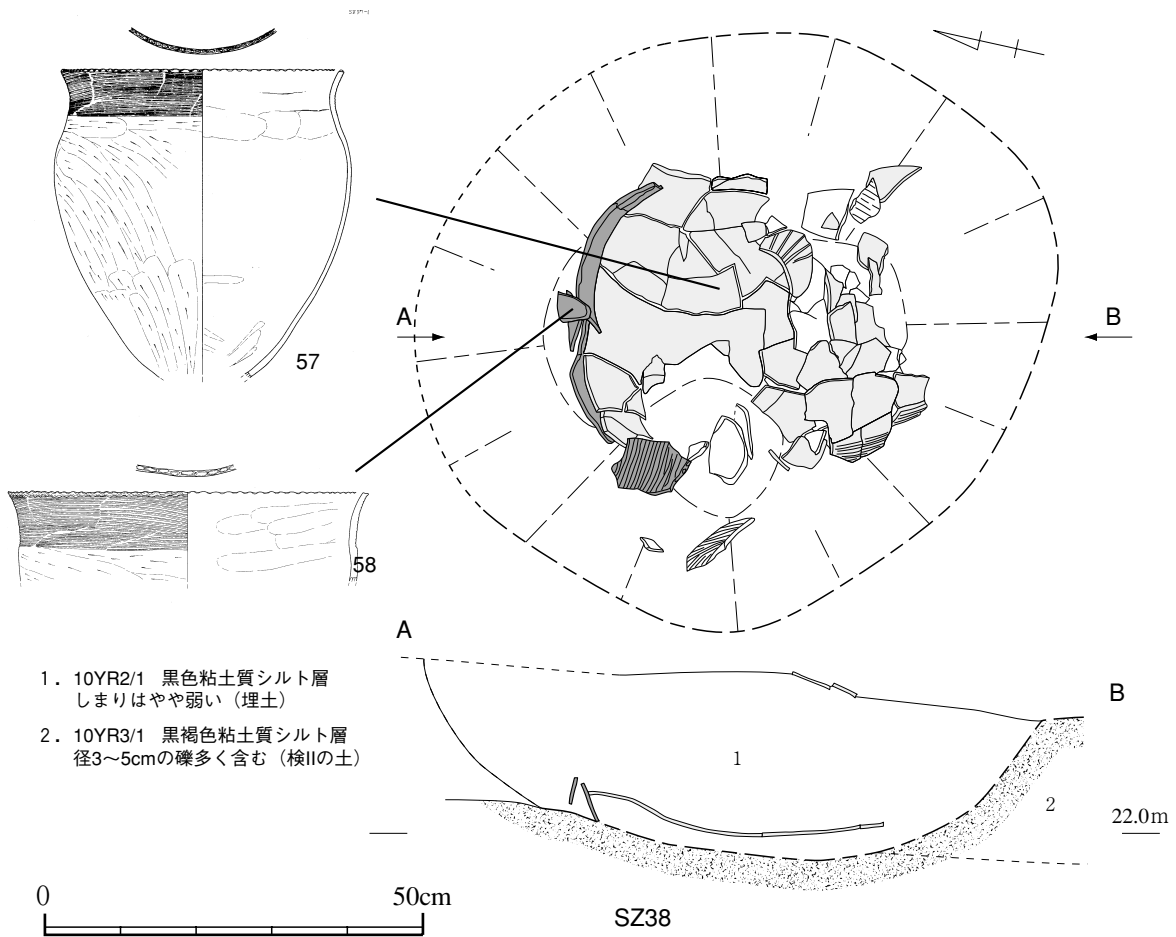
- 3. 7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
径1~2cmほどの礫多く含む（上からの染み込みか?）
- 4. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層  
礫少量混じる（検IIの土）
- 5. 10YR6/6 明黄褐色礫層  
細粒砂・極細粒砂多く混じる（地山）

SZ39

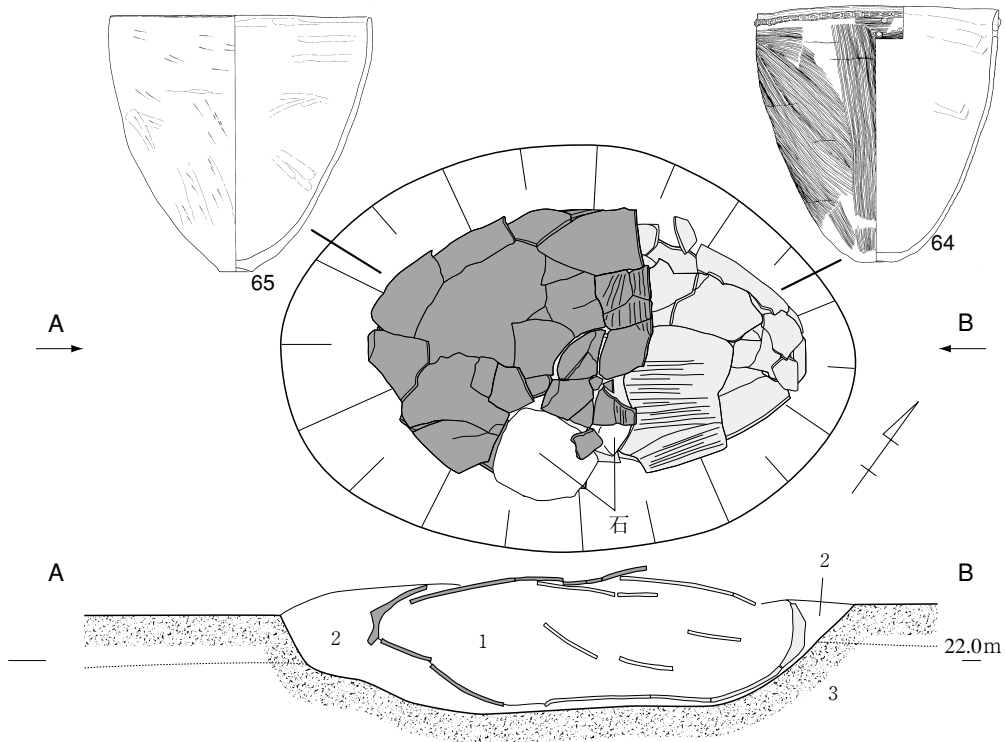
第25図 土器棺墓出土状態図 17



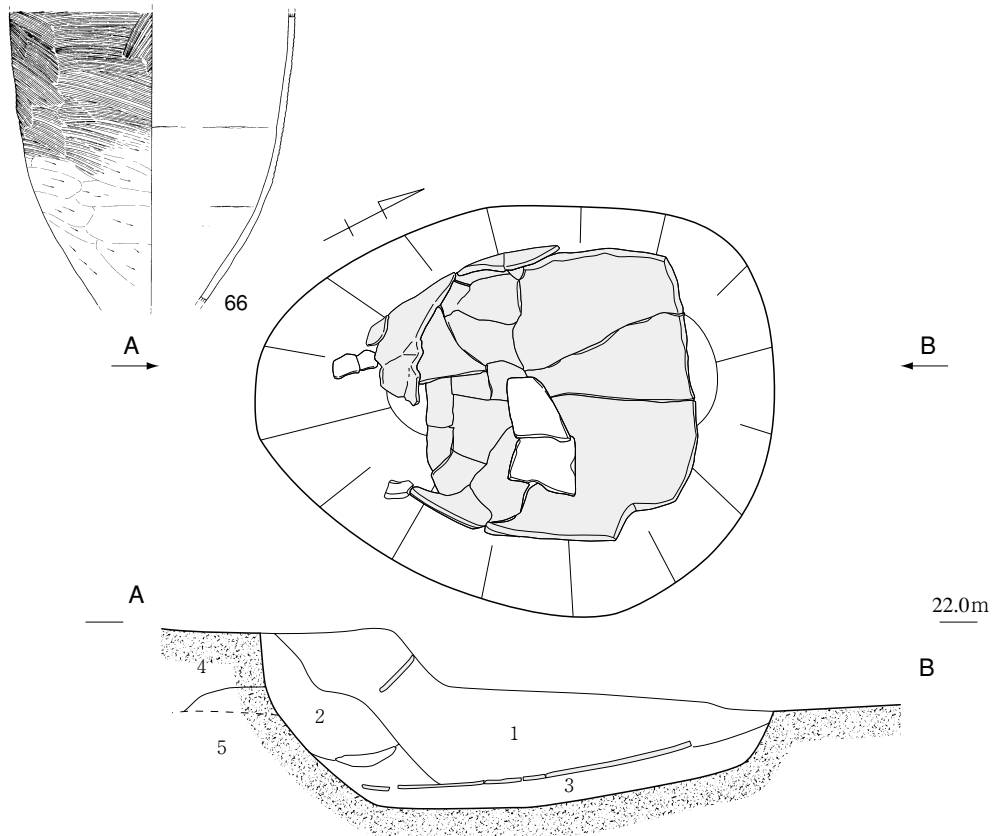
第26図 土器棺墓出土状態図 18



第27図 土器棺墓出土状態図 19

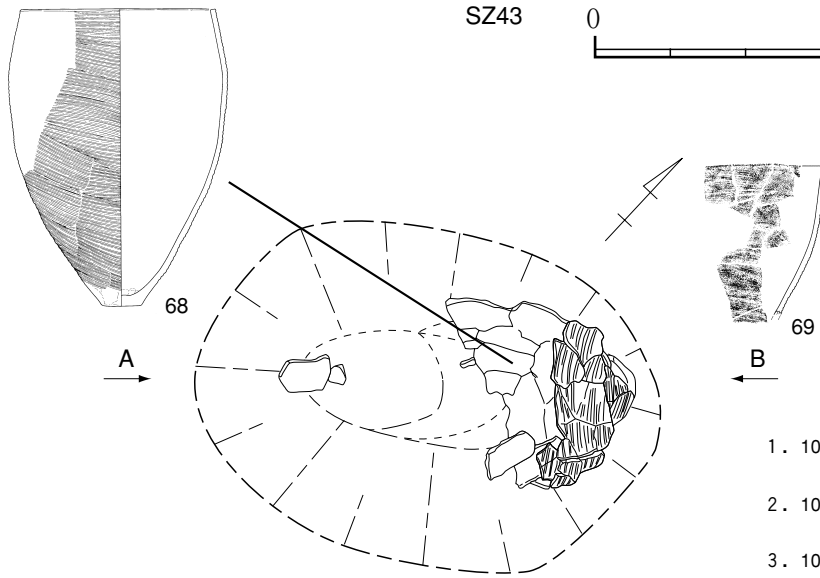


第28図 土器棺墓出土状態図 20

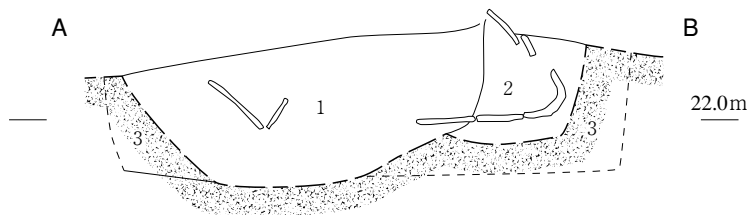


- 1. 10YR2/1 黒色粘土質シルト層  
炭少量混じる
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層  
礫を少量含む (埋土)
- 3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層
- 4. 10YR5/6 黄褐色砂質土  
粗粒砂多く含む (地山)
- 5. 10YR6/6 明黄褐色礫層 (地山)

SZ43

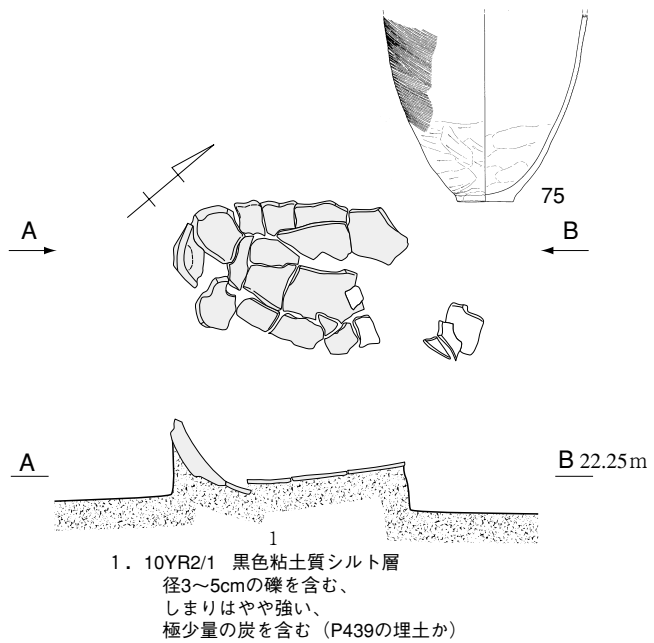
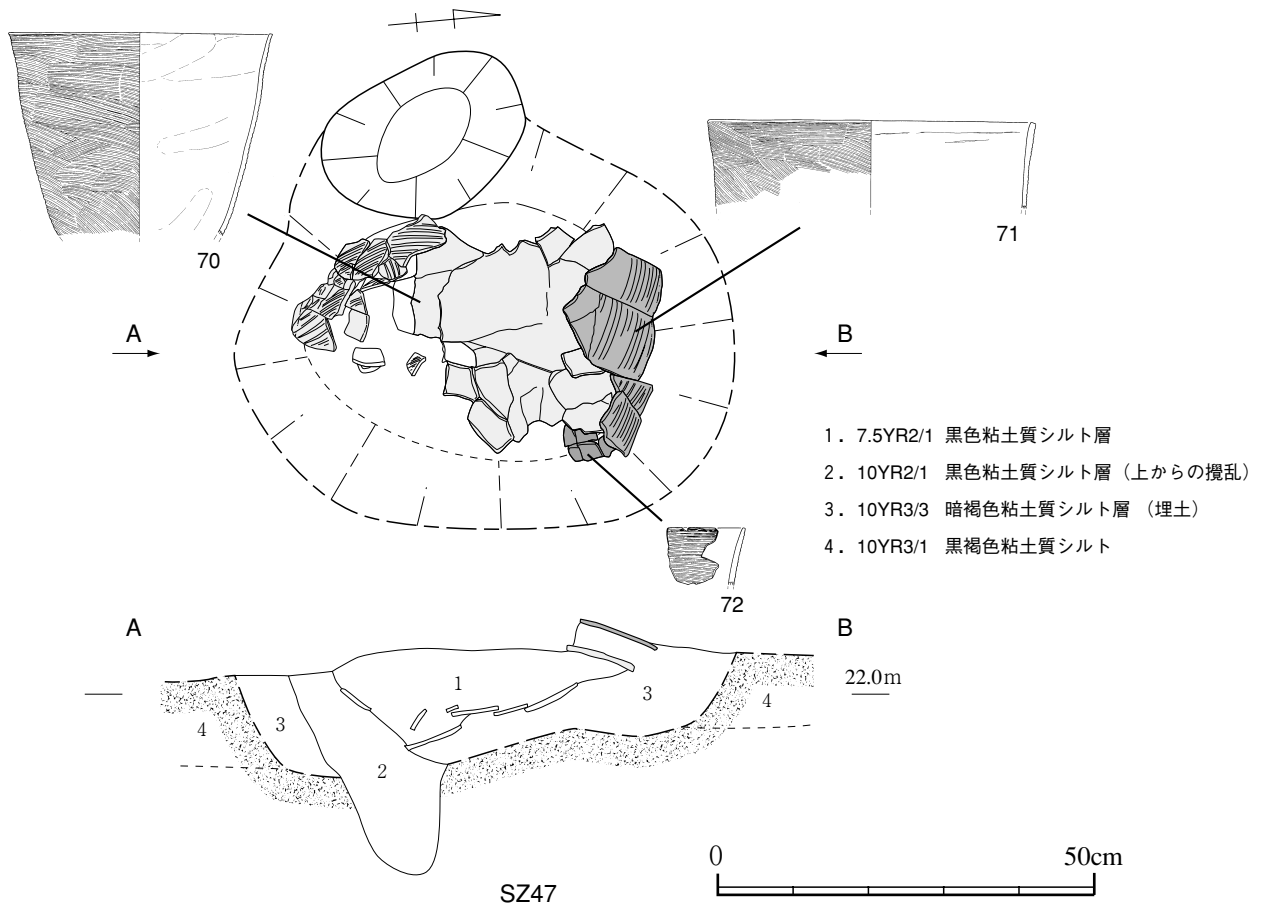


- 1. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層  
礫多い
- 2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層  
土器棺内埋土
- 3. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層  
礫を混じる



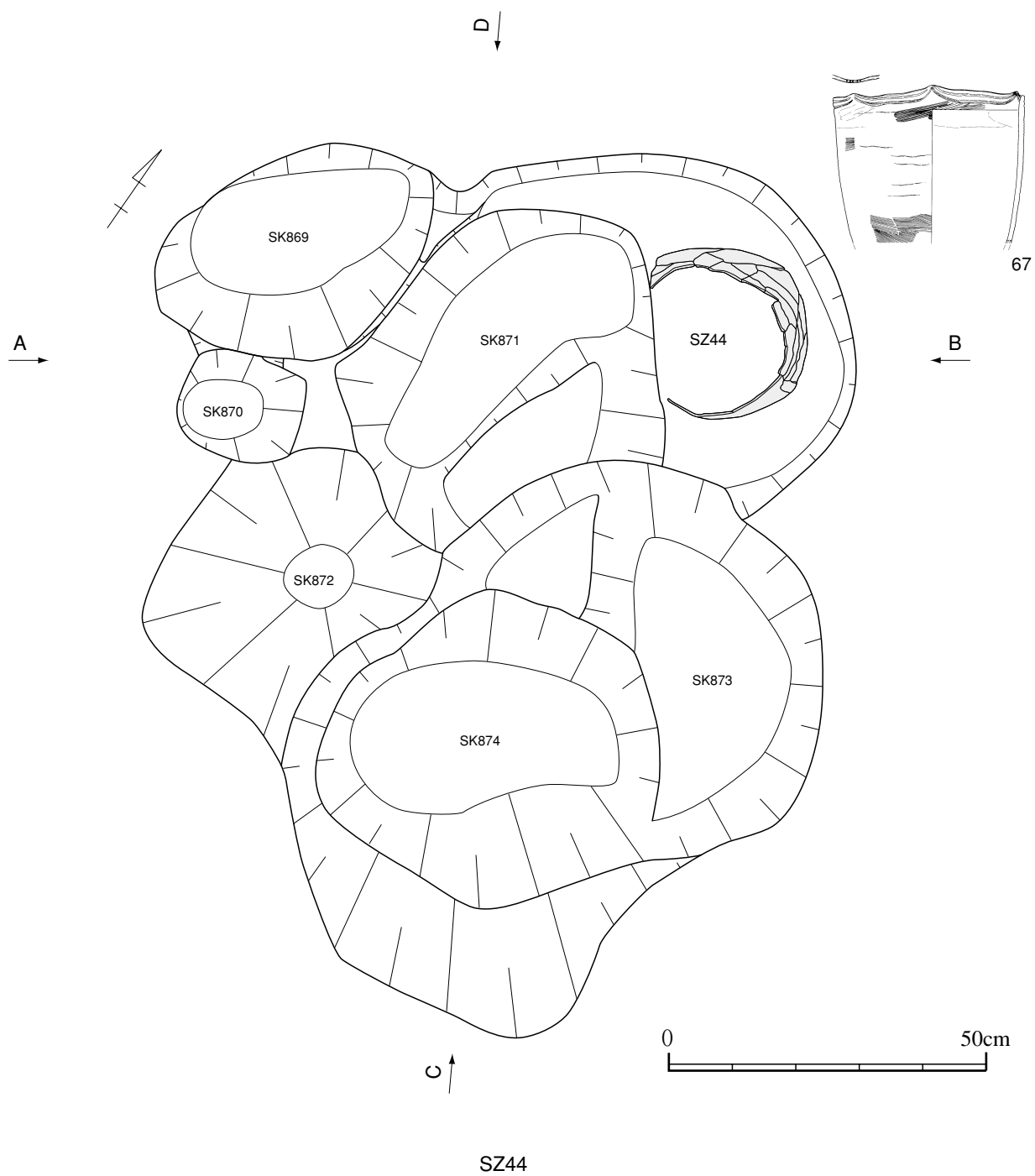
SZ46

第 29 図 土器棺墓出土状態図 21

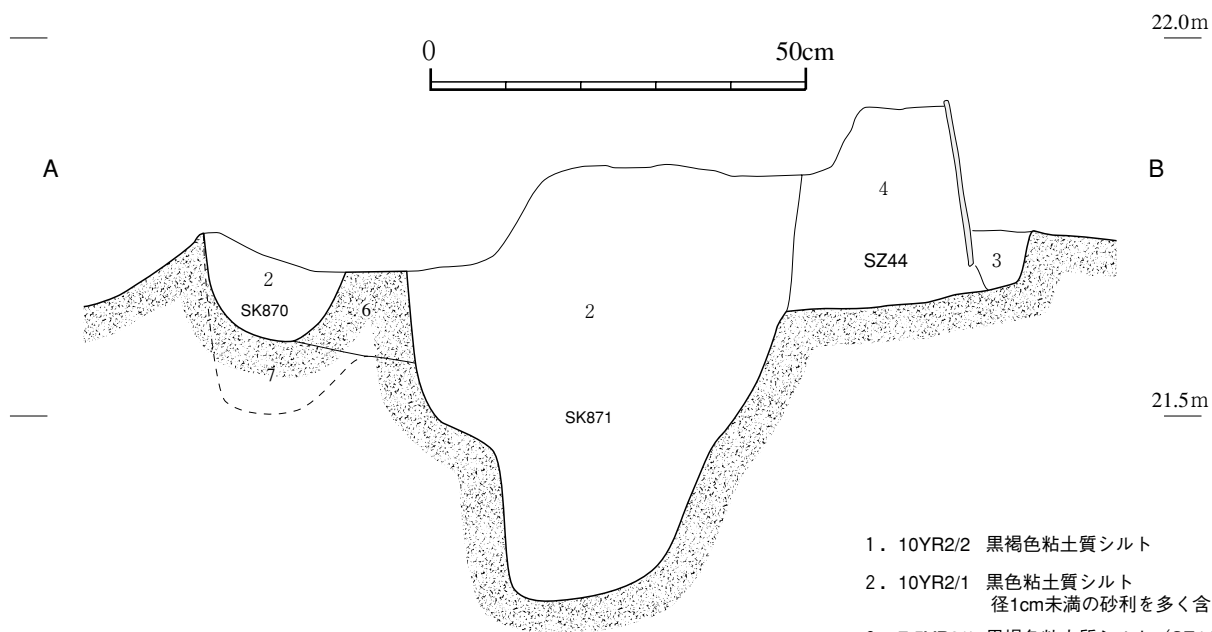
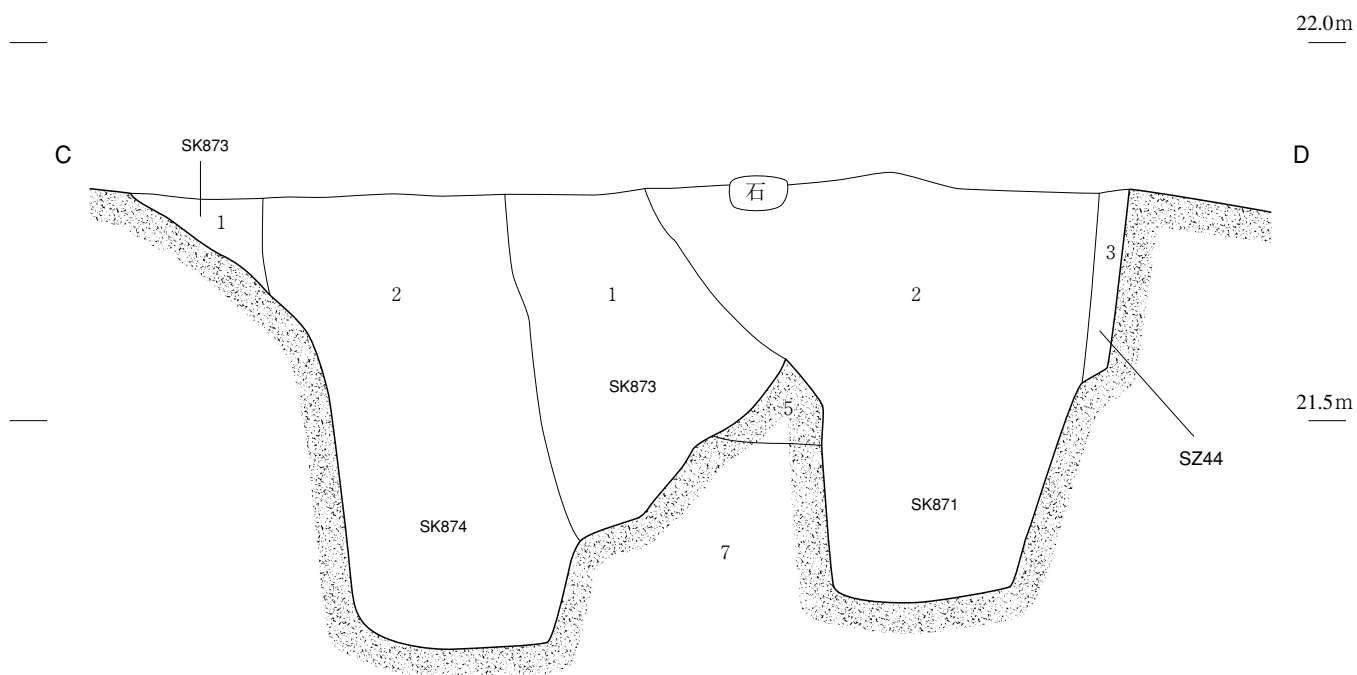


SZ50

第30図 土器棺墓出土状態図 22

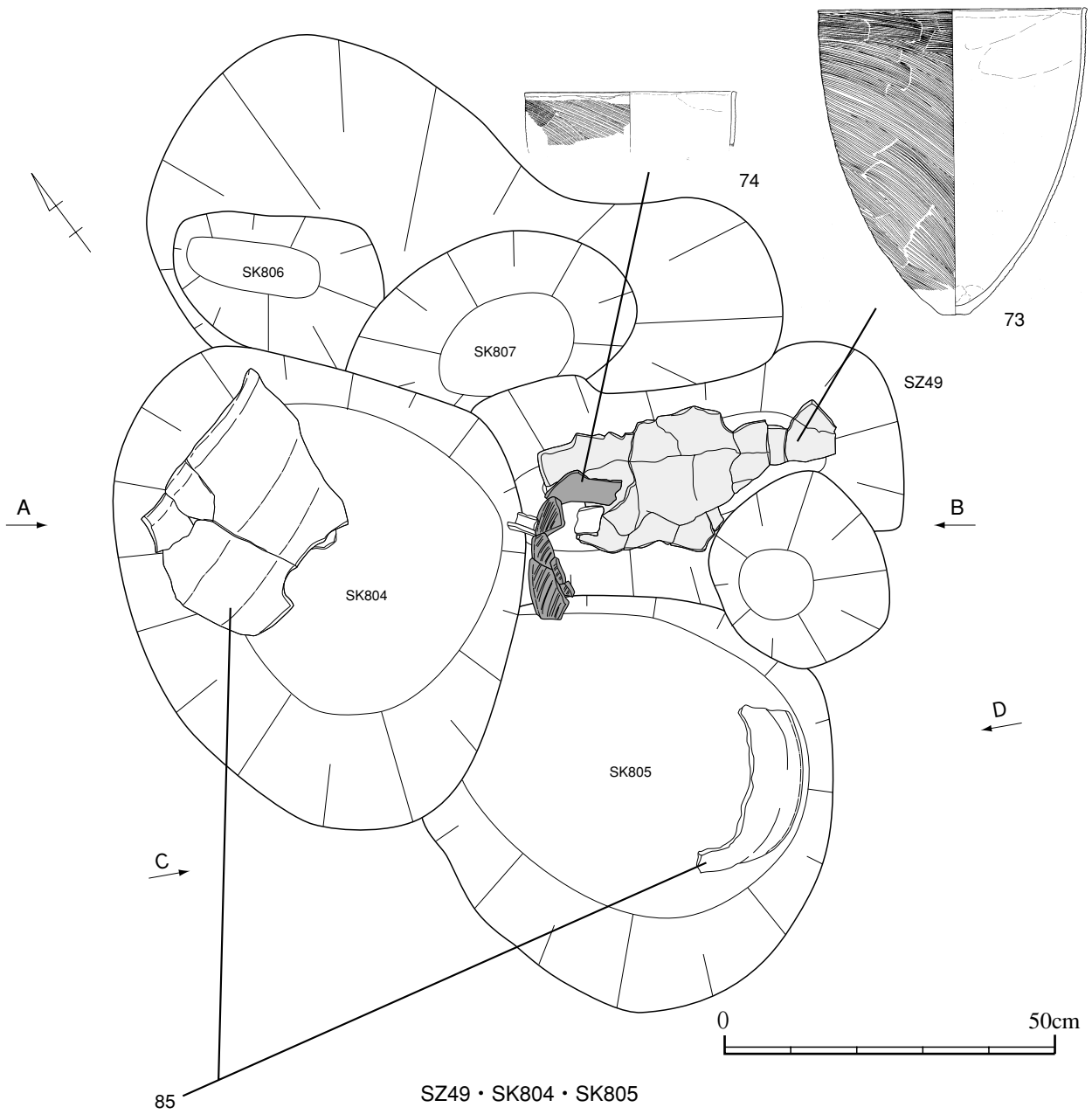


第31图 土器棺墓出土状态图 23

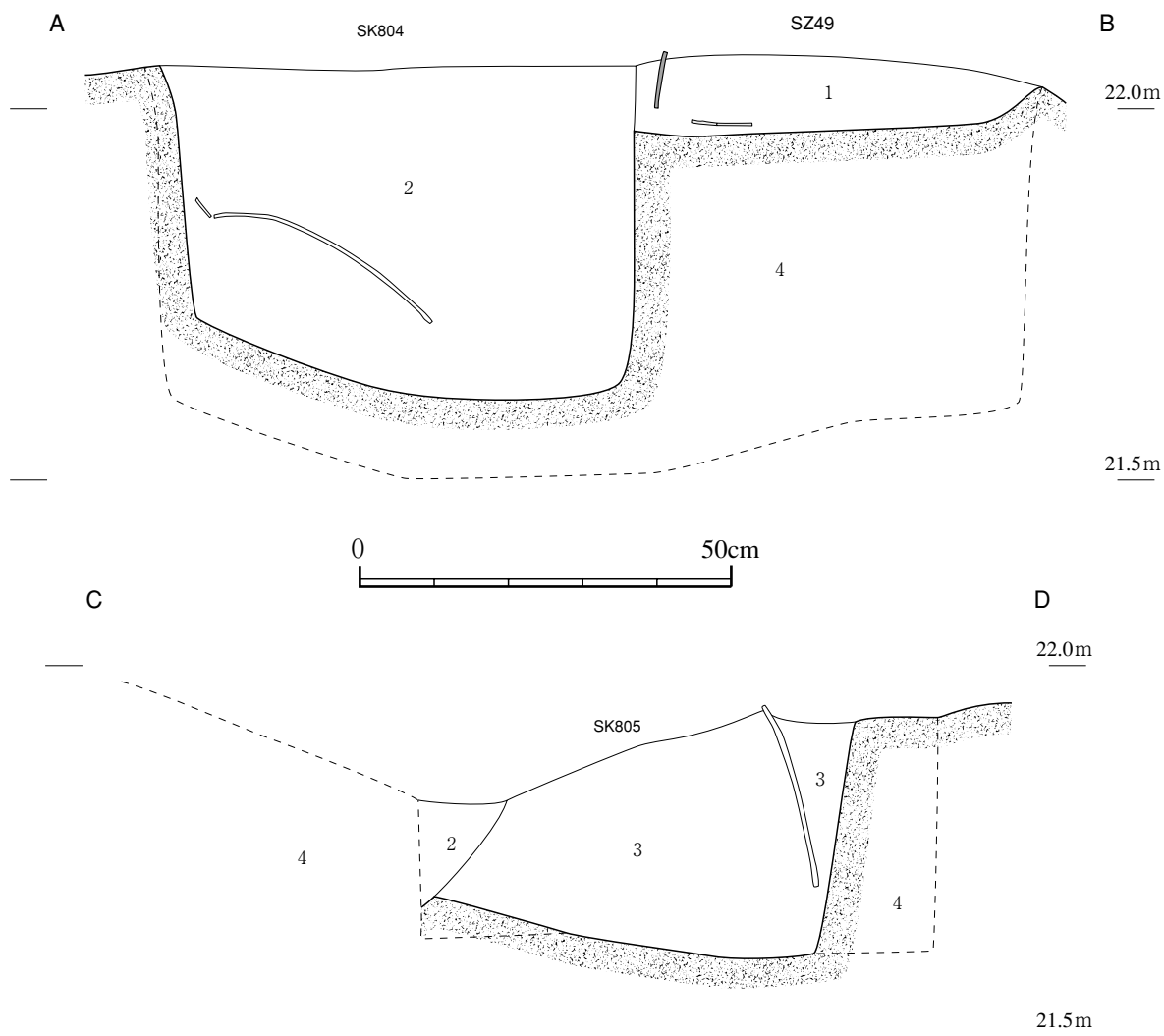


1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
2. 10YR2/1 黒色粘土質シルト  
径1cm未満の砂利を多く含む
3. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト (SZ44遺構埋土)
4. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト (土器棺内の土)
5. 5Y2/1 黒色粘土質シルト  
径1cm程度の小石を多く含む
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
7. 10YR6/6 明黄褐色礫層

第32図 土器棺墓出土状態図24

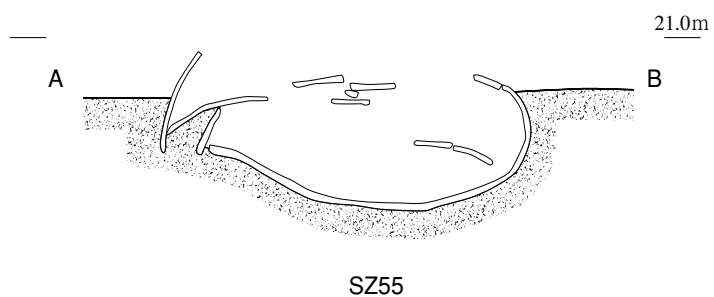
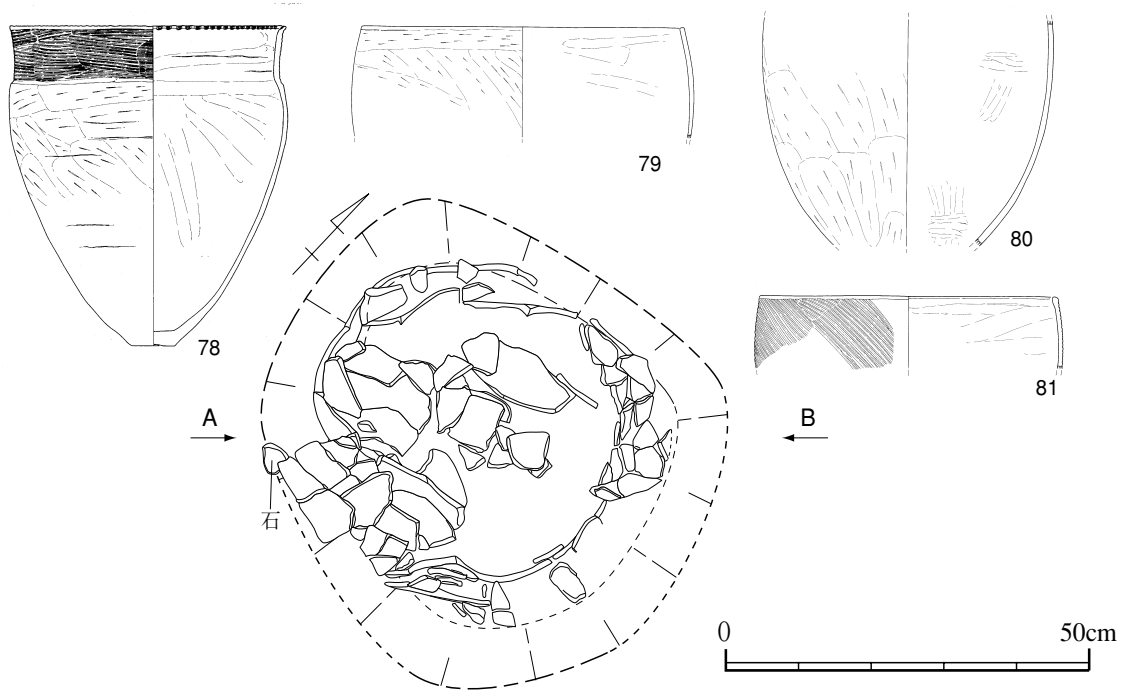
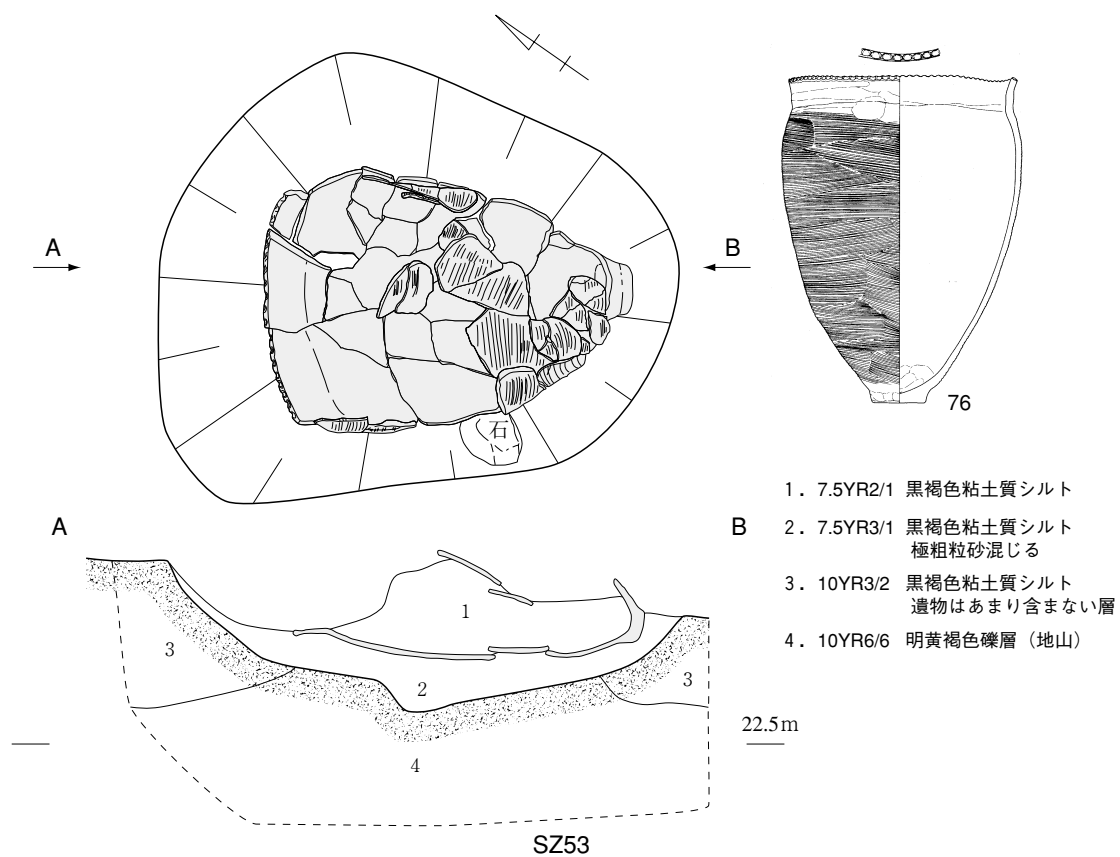


第33图 土器棺墓出土状态图 25

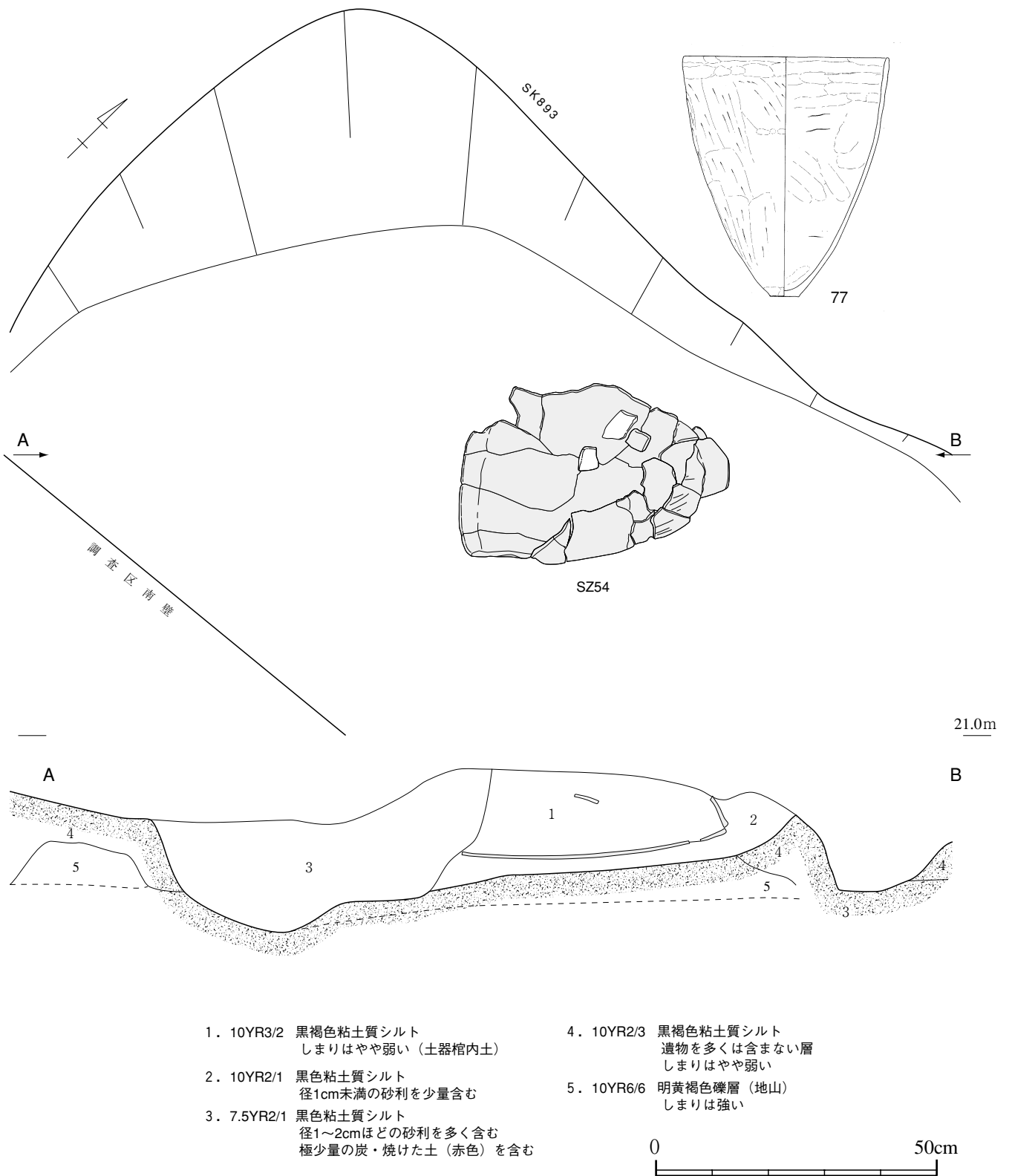


1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト  
極細粒砂を所々に含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト層  
径1~3cmほどの礫少量混じる、しまりはやや強い
3. 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト  
砂利を多く含む
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫層 (地山)

第 34 図 土器棺墓出土状態図 26



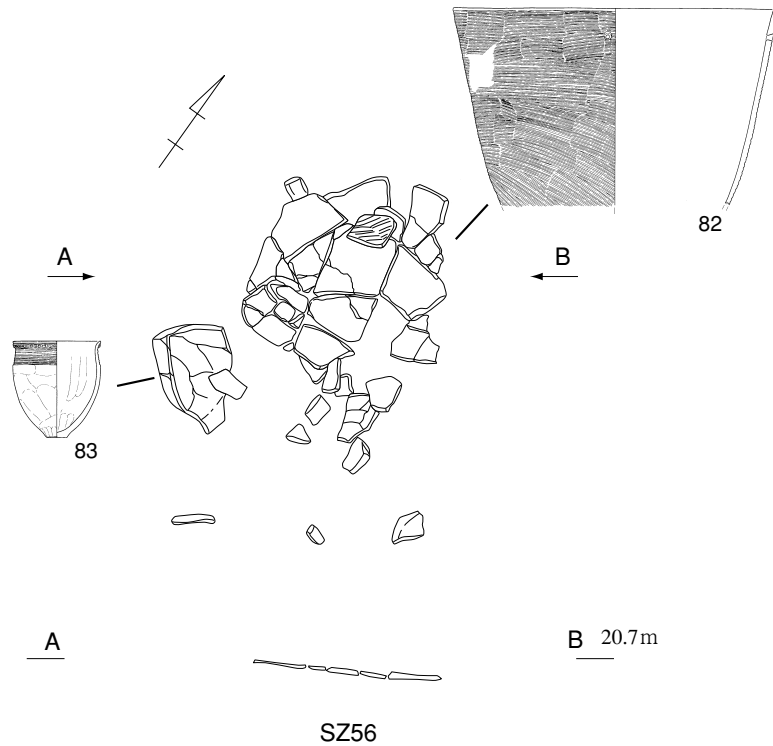
第35図 土器棺墓出土状態図 27



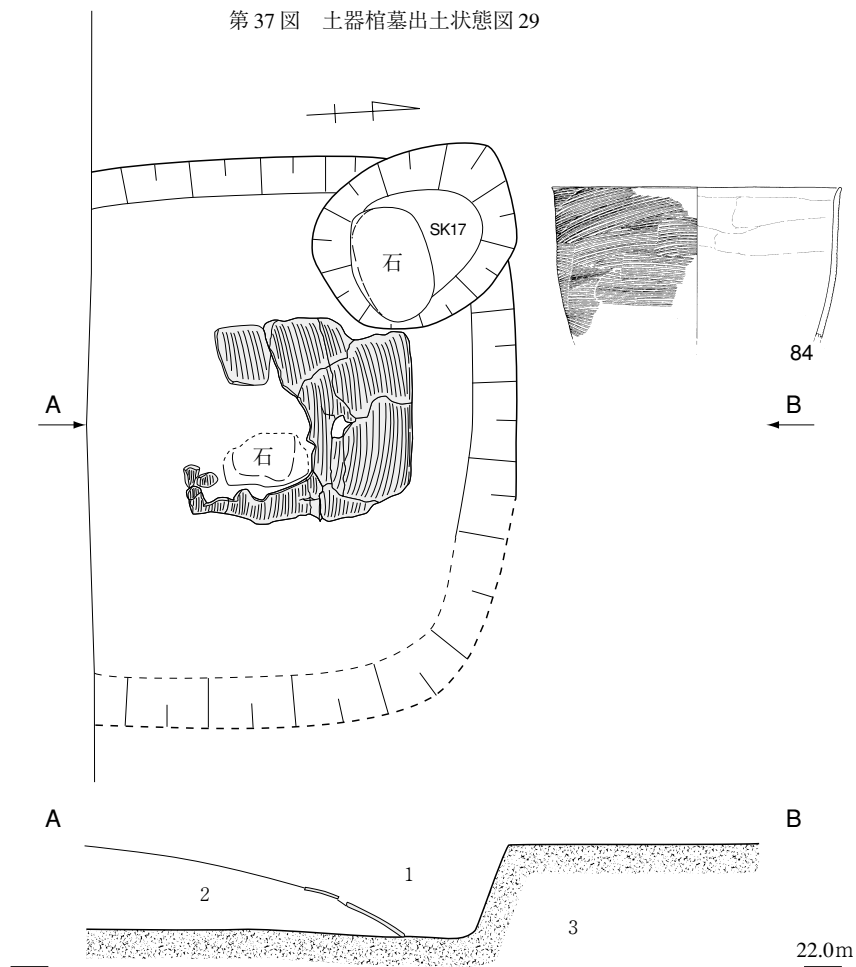
- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト<br/>しまりはやや弱い（土器棺内土）</p> <p>2. 10YR2/1 黒色粘土質シルト<br/>径1cm未満の砂利を少量含む</p> <p>3. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト<br/>径1~2cmほどの砂利を多く含む<br/>極少量の炭・焼けた土（赤色）を含む</p> | <p>4. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト<br/>遺物を多くは含まない層<br/>しまりはやや弱い</p> <p>5. 10YR6/6 明黄褐色礫層（地山）<br/>しまりは強い</p> |
|--|--|

SZ54

第36図 土器棺墓出土状態図 28

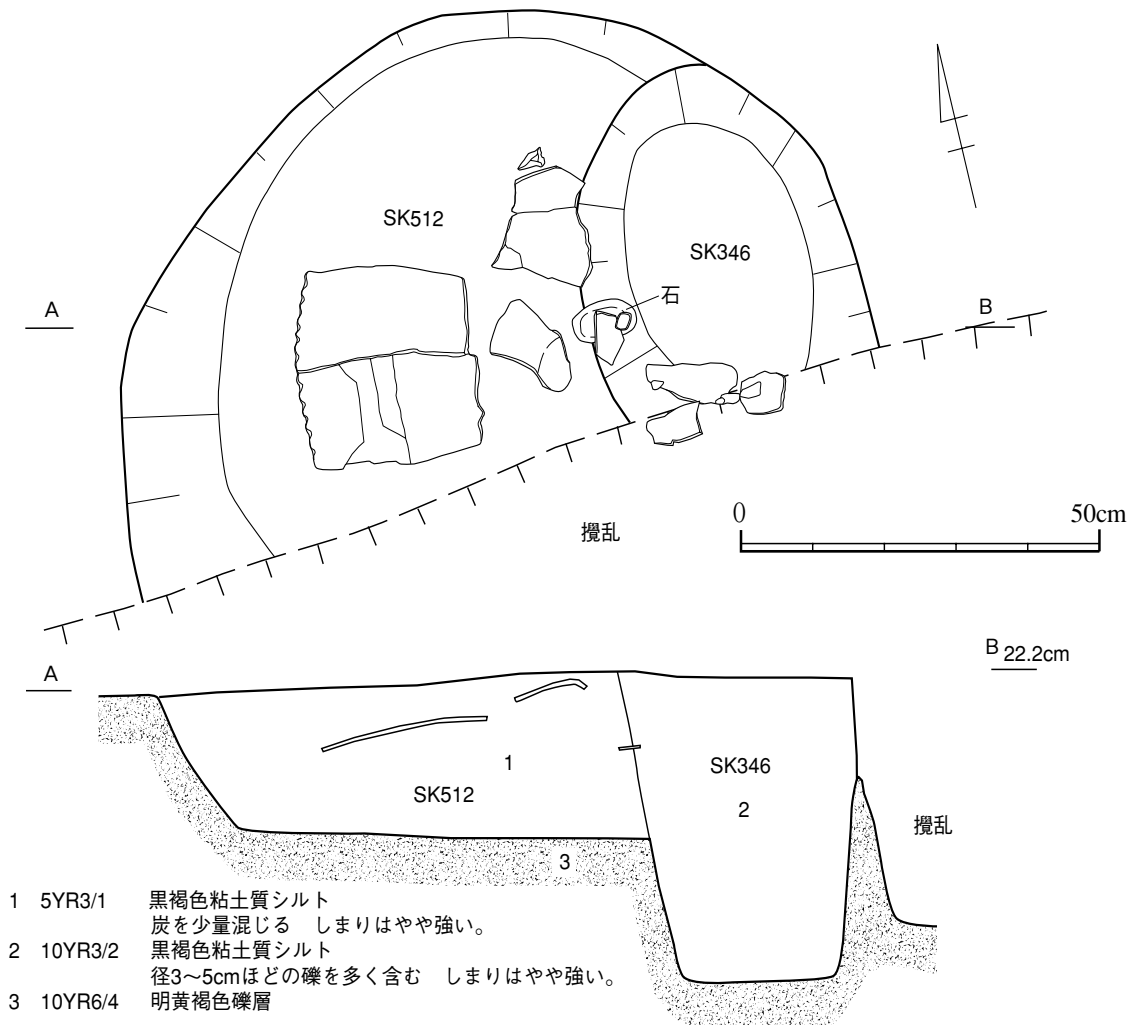


第 37 図 土器棺墓出土状態図 29



1. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト層
2. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト層
3. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト層  
10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルトを斑状に含む

第 38 図 SK592 出土状態図



第39図 SK512出土状態図

を欠損させた全体の二分の一残存する深鉢形土器を棺身として遺構底面に敷き、その上面には別個体の深鉢形土器口縁部破片二個体分を蓋にしている。棺に沿って埋設土壌の掘り方が検出されたが、その存在は微妙である。横位埋設である。iii f 期。

SZ09  
(横位)

SZ09は99 A区ほぼ中央に位置する。底部を欠損させた全周する深鉢形土器一個体で構成されている。ごく浅い土壌の掘り方を検出したが、その存在は微妙である。元来窪地であったところに埋設された可能性もある。棺は全体的に潰れた様な状態であった。横位埋設である。iii d ~ iii e 期。

SZ10  
(横位)

SZ10はSZ26の北側に位置し、底部同士を合わせる形で近接している。深鉢形土器二個体で構成されている。胴部上半のみ二分の一欠損した深鉢形土器を棺身とし、欠損された部分に別個体の深鉢形土器の口縁部破片を蓋にしている。棺を埋設する土壌は検出されたものの、北東に張り出す形になっており、切り合い関係を持った別の土坑が存在した可能性が考えられる。棺身の土器は、土器本来の形を保ったまま検出された。横位埋設。iii e 期。

SZ12・13  
(横位)

切り合い

SZ12・SZ13は今回の調査の中で唯一確実な切り合い関係があると考えられるものである。SZ12は深鉢形土器一個体で構成されている。底部を欠損させた全体の二分の一の一周残存する深鉢形土器を棺身にし、遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壌は、かなりの深さをもって検出することができた。横位埋設である。iii d ~ iii e 期。SZ13は深鉢形土器三個体

で構成されている。底部を欠損させた全体の二分の一周残存する深鉢形土器を棺身として底面に敷き、その上面には別個体の深鉢形土器口縁部破片二個体分を棺蓋としている。ここで棺蓋とした一つは大破片であり、遺構内で逆位に立て棺身を取り囲んでいる。棺を埋設する土壌は検出された。横位埋設である。iii e 期。

SZ14  
(横位)

SZ14はSZ02の北西に近接しており、一部が中世の遺構であるSD01によって切られている。二分の一周および底部が残存する深鉢形土器一個体で構成されている。棺を埋設する土壌の存在はセクションでは確認できたものの、平面プランは確認できなかった。横位埋設である。iii e 期。

SZ15  
(横位)

SZ15は99 A区の最も北側に位置する土器棺墓である。深鉢形土器二個体で構成されている。全周残存している深鉢形土器を棺身として、全体の四分の一周および底部を残存している深鉢形土器片をさらに上に覆い蓋としている。検出時、棺身の土器は遺構の上面となる側が潰れて底面側に落ち込んでいた。棺を埋設する土壌は洪積台地である守山面まで掘られており、平面プランの検出は明確であった。横位埋設である。iii d～iii e 期。

SZ16  
(横位)

SZ16は99 A区の東北端でSZ31の東側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。全体の四分の一周および底部を残存している深鉢形土器片を身としているのか。棺を埋設する土壌の存在をセクションで確認したものの棺と遊離する可能性も考えられる。横位埋設である。iii e 期。

SZ17  
(横位)

SZ17はSZ04の北東に近接している。口縁部と底部を欠損した、全体の二分の一周残存する深鉢形土器胴部片一個体により構成されており、それを棺身として遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壌の掘り方は明確に検出できず、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。横位埋設である。iii e～iii f 期。

SZ18  
(横位)

SZ18はSZ07の南西側、SZ08の北東側に近接しており、SZ07同様、SB04に重複している。深鉢形土器四個体で構成されている。底部が欠損し、全体の二分の一周が残存する深鉢形土器を棺身とし遺構底面に敷き、さらに別個体の土器片口縁部三片で蓋にしている。棺を埋設する土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii f 期。

SZ22  
(横位)

SZ22はSZ08の南西側、SZ27の東側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。胴部下半のみ全体の二分の一欠損し、かつ底部が残存する深鉢形土器を棺身としている。棺を埋設する土壌は、遺跡の立地する守山面の礫層上まで掘られている状況が確認できた。横位埋設。iii e 期か。

SZ23  
(横位)

SZ23はSZ30の東側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が欠損し、全体の二分の一周が残存する深鉢形土器を棺身とし、遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壌の掘り方は明確ではなく、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。なお、同じ窪地内から深鉢形土器の口縁部破片が出土しているものの、土器棺墓を構成していたものであるとの断定は難しい。横位埋設。iii f 期。

SZ24  
(横位)

SZ24は99 A区の比較的北側に位置し、約5 m南側にSZ30が位置している。深鉢形土器一個体で構成されている。口縁部から胴部上半分の二分の一周のみ欠損した深鉢形土器を棺

身としている。棺自体は土器の形をそのままとどめた状態で出土している。棺を埋設する土壇の掘り方が棺に沿って検出できたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii e 期。

SZ26  
(横位)

SZ26はSZ10の南側に棺身の底部同士が接する形であり、SZ27の北西側に近接している。深鉢形土器三个体で構成されている。口縁部から胴上半部のみ四分の一欠損した深鉢形土器を棺身とし、さらに別個体の深鉢形土器口縁部片二个体分を重ね、蓋としている。棺を埋設する土壇の掘り方は明確ではない。なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。当初土壇のプラン上、SZ10に切られているものと考えて調査を進めていたが、SZ26とSZ10との遺構の切り合い関係は不明であるとした。またSZ26が検出時に潰れたような状態であったことは、隣接するSZ10のあり方と好対照をなしている。横位埋設。iii e 期。

潰れた状態

SZ27  
(横位)

SZ27はSZ26の南東側、SZ22の西側に近接している。深鉢形土器四个体で構成されている。全周残存する深鉢形土器を棺身とし、その口縁部付近に深鉢形土器口縁部片三个体を覆い蓋としている。棺身の土器は本来の形を保ったまま検出された。蓋とされた個体のなかで31に関しては、全周の3分の1程度の破片が2片、接合しない状態での出土である。一個体の土器を破損させその3分の1に残存した土器片2片を蓋とした可能性が考えられる。棺を埋設する土壇はかなり上面で検出され、遺跡の立地する守山面の礫層直上まで掘られていた。横位埋設。iii e 期。

SZ28  
(横位)

SZ28はSZ50の東側に近接しており、SK587の直上で検出された。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が残存しかつ二分の一の一周残存する深鉢形土器を棺身として、遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壇の掘り方は明確ではなく、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。SK587は不定形の土坑で、その埋土が完全に埋まりきっていない窪地状を呈したときに土器棺が埋設された可能性が考えられる。横位埋設。iii d ~ iii e 期。

SZ29  
(横位)

SZ29は99 A 区の北東部、SZ28の5 mほど東側に位置する。深鉢形土器二个体で構成されている。底部と全体の三分の二の一周残存する深鉢形土器を棺身とし、その口縁部付近に別個体の深鉢形土器口縁部片一個体を覆い、蓋としている。棺身は遺構底面側が土器本来の形のまま検出されたものの、遺構上面側は潰れた状態での検出となった。土器棺検出時にはそれを埋設する土壇の掘り方が検出できたものの、その存在は微妙である。iii f 期。

SZ30  
(横位)

SZ30はSZ23の東側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。口縁部から胴上半部にかけての部分が四分の一、および底部のみが残存する深鉢形土器を棺身として、遺構底面に敷いたと考えられる。棺を埋設する土壇の掘り方は明確ではなく、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。横位埋設。iii e 期か。

SZ31  
(横位)

SZ31はSZ16の西側、およびSZ02の東側に位置している。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が残存し、かつ全体の四分の一の一周する深鉢形土器を棺身とし、遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壇の掘り方を平面およびセクションで検出したものの、その存在は非常に微妙である。横位埋設。iii e 期。

SZ32  
(横位)

SZ32はSZ12・13の北西側に位置している。深鉢土器一個体で構成されている。底部が残存しかつ全体の三分の二の一周が残存する深鉢形土器を棺身としている。棺に使用された土器

は遺構底面側を中心に残存しており、上面側が欠損している。土器本来の形をとどめたまま検出された。棺に使用されたのは粗製深鉢形土器であるが、土器表面および内面には赤色顔料(ベンガラ)(註1)の塗布が見られた。棺を埋設した土壌は、旧表土層を掘り込み、守山層の礫層直上までの深さで検出された。横位埋設。iii e 期。

**SZ33**  
(横位)

SZ33はSZ43の南東側、かつ99B区の南壁近くに位置する。SK826と重複している。有文の深鉢形土器一個体で構成されている。若干の口縁端部および底部、全体の四分の一の周残存する胴下半部を遺構底面に敷いて、棺身としたと考えられる。棺を埋設した土壌の掘り方は明確ではなく、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。SK826との関連も想定できるが、埋土中ではなくSK826にかぶさるような形で検出されたため、ここでは別遺構として扱った。横位埋設。iii d 期。

**SZ34**  
(横位)

SZ34は99A・B区の境付近、調査区南端に位置している。有文の深鉢形土器一個体で構成されている。底部が残存しかつ全体の四分の三の周残存する深鉢形土器を棺身としている。棺に使用された土器は遺構底面側を中心に残存しており、上面側が欠損している。土器本来の形をとどめたまま検出された。棺を埋設した土壌は旧表土を掘り抜いて、守山面直上までの深さで検出された。横位埋設。iii e 期。

**SZ35**  
(横位)

SZ35は99B区の北壁付近で、SZ36の4mほど北側に位置している。深鉢形土器三個体で構成されている。底部および全体の二分の一の周残存する深鉢形土器を棺身として遺構底面に敷き、その上面には深鉢形土器口縁部片二個体分が被せられ、棺蓋とされている。全体的に潰れたような形で検出された。棺を埋設した土壌は明確ではなく、なだらかな窪地に埋設されたものと考えられる。横位埋設。iii f 期。

**SZ36**  
(横位)

SZ36はSZ38の北西側、SZ39の北東側に近接している。北西部を後世の攪乱により破壊されているものの、残存した棺自体は原位置のまま保っているものと考えられる。深鉢形土器三個体で構成されている。口縁部から胴上半部までで全周の二分の一残存する深鉢形土器を底面に敷き棺身とし、深鉢形土器口縁部片二個体分を覆い、棺蓋としている。ここで棺蓋とした口縁部片の一つは遺構内で逆位で立てられており、棺身を大きく囲んでいる棺を埋設した土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii f～iii g 期。

**SZ37**  
(横位)

SZ37はSZ38の南側に隣接している。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が残存しかつ口縁部から胴上半のみ二分の一欠損している深鉢形土器を棺身とし、口縁部から底部まで残存している方を遺構底面側に埋設している。棺は土器自体の形をとどめたまま検出された。遺構を埋設した土壌の掘り方は検出されたものの、遺構外の土との差は微妙であった。横位埋設。iii f 期。

**SZ38**  
(横位)

SZ38はSZ37の北側、SZ36・39にそれぞれ近接している。深鉢形土器二個体で構成されている。底部が欠損しかつ全周の二分の一が残存する深鉢形土器を棺身とし遺構底面に敷き、その口縁部付近に別個体の深鉢形土器口縁部片を覆い、棺蓋としている。棺を埋設した土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii e～iii f 期。

---

(註1)分析の結果に関しては、第四章 第1節参照。

- SZ39**  
(横位) SZ39はSZ36・37に近接する形で検出された。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が欠損し、全周が二分の一残存する深鉢形土器を棺身とし遺構底面に敷いている。全体的に潰れたような状態で検出された。棺を埋設した土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii f 期。
- SZ40**  
合口棺  
(横位) SZ40は深鉢形土器二個体で構成されている。底部が残存している棺の口縁部外側に、底部が欠損している棺の口縁部を重ねる形になっており、合口の形態となっている。棺は土器の形そのまま検出され、遺構上面部側が欠損している。この地点は黒色の包含層が薄くなる地点であり、上面部の欠損が土器棺墓構成自体によるものなのか、後世の攪乱によるものなのか、調査では明らかにできなかった。棺を埋設する土壌の掘り方は明確な土色の違いで検出できた。遺構に接して台石(1514)が出土しているが、棺を安定させるためなどの、土器棺との有機的な関係は不明である。横位埋設。iii f 期。
- SZ41**  
(横位) SZ41はSZ42の北側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。口縁部から底部まで、全周すべて残存している土器を棺身としている。棺は土器自体の形を保ったまま出土した。棺に使用された土器の表面は遺構上面にあった部分ほど劣化が進んでおり、遺構底面に相当する部分では土器表面の風化はあまり見られない。棺を埋設した土壌の掘り方は、土色が微妙であるものの検出された。横位埋設。iii d 期。
- SZ42**  
合口棺  
(横位) SZ42はSZ41の南側に近接している。深鉢形土器二個体で構成されている。口縁部から底部まで、全周が残存している土器に、口縁部から胴部上半の二分の一残存している土器を口縁部で重ね合わせ棺身を形成しており、合口の形態となっている。棺は土器自体の形を保ったまま出土した。棺に使用された土器はSZ41同様に、表面は遺構上面にあった部分ほど劣化が進んでいる。棺を埋設した土壌の掘り方は、土色が微妙であるものの検出された。棺には後世による、径20cmほどの礫が食い込んでいる。横位埋設。iii g 期。
- SZ43**  
(横位) SZ43はSZ33の北西約2mほどの位置にある。深鉢形土器一個体で構成されている。底部が欠損し、全周の二分の一が欠損する土器を棺身とし、残存部が多い方を遺構底面に埋設している。棺は土器自体の形を保ったまま検出された。棺を埋設する土壌は、守山面の礫層を若干掘り抜く形で検出された。横位埋設。iii e～iii f 期。
- SZ44**  
(逆位) SZ44はSZ53の北東側で出土した。深鉢形土器一個体で構成されている。底部を含む胴下半部を欠損した土器を棺身としている。棺は土器の形を保ったまま検出された。棺を埋設する土壌の掘り方も検出されたが、周辺には遺構の切り合いが激しく見られた。立位埋設であるが、口縁部側を遺構底面側に埋設され、逆位の形態をとる。iii c～ii f 期。
- SZ46**  
(横位) SZ46はSZ47の北東側に近接している。深鉢形土器二個体で構成されている。底部を残存し全周の二分の一残存する深鉢形土器を棺身とし、多く残存している側を遺構底面側に埋設している。遺構からは深鉢形土器の大形口縁部片が一点出土している。遺構検出時に誤って掘ってしまったため、遺構内での構成が不明となってしまった。棺蓋であったか。棺を埋設する土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii e 期。
- SZ47**  
(横位) SZ47はSZ46の南西側に位置する。深鉢形土器三個体で構成されている。底部が欠損し

全周の二分の一周分残存する深鉢形土器を棺身とし、遺構底面に敷いている。その口縁部付近に別個体の深鉢形土器口縁部片二個体分を覆い、棺蓋としている。棺を埋設する土壌の掘り方は検出されたものの、その存在は微妙である。横位埋設。iii e 期。

SZ49  
(横位)

SZ49はSZ38の北西側3mほどのところに位置する。深鉢形土器二個体で構成されている。底部が残存し全周の三分の一周分残存する土器を棺身とし、遺構底面に敷いている。その口縁部付近には別個体の深鉢形土器口縁部片一点を覆い、棺蓋としている。この遺構周辺も多くの土坑による切り合いが激しく見られた。横位埋設。iii e～iii f 期。

SZ50  
(横位)

SZ50はSZ28の西側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。底部および全周の二分の一周分残存する深鉢形土器を棺身とし、遺構底面に敷いている。棺を埋設する土壌の掘り方は検出されず、不明である。横位埋設。iii e 期。

SZ53  
(横位)

SZ53はSZ44の南側に近接している。深鉢形土器一個体で構成されている。底部を残存し、全周の二分の一周分残存する深鉢形土器を棺身とし、残存部の多い方を遺構底面側に埋設している。棺身は土器の形自体を保ったまま検出された。棺を埋設する土壌は、守山面の礫層を若干掘り抜く形で検出された。横位埋設。iii e 期。

SZ54  
(横位)

SZ54は、SK893としたなだらかな落ち込み内から出土した。深鉢形土器一個体で構成されている。底部かつ全周の二分の一周分残存する深鉢形土器を棺身とし、残存部の多い側を遺構底面側にしている。棺身は土器自体の形を保ったまま検出された。棺を埋設する土壌は検出されていない。横位埋設。iii e～iii f 期。

SZ55  
(横位)

SZ55は深鉢形土器四個体で形成されている。底部を残存し口縁部から胴部上半の二分の一周分のみ欠損した土器を棺身とし、別個体の深鉢形土器口縁部片二個体分と胴部片一個体分を覆い、棺蓋としている。蓋は一括して取り上げたため、遺構内の構成は不明であるものの、棺身の口縁部付近を覆っていたものと思われる。棺を埋設する土壌の平面プランは追えたものの、セクションで明確なラインを追うことができなかった。横位埋設。iii f 期。

SZ56  
(横位)

SZ56は深鉢形土器二個体で構成されている。口縁部から胴部上半までの全体の二分の一周分残存する深鉢形土器を遺構底面に敷き、棺身としている。それに隣接して、口縁部から胴部上半の三分の二のみ欠損した小型の突帯文土器が出土している。出土状態から、これも土器棺墓を構成していた可能性が高い。棺を埋設する土壌は調査時検出できなかった。横位埋設。iii f 期。

#### ②土器棺墓の形態(第40図)

立位

以上の土器棺墓を埋設状態および棺身・蓋の組み合わせで分類できる。埋設状態では立位が一例外は、すべて横位もしくは斜位の埋設である。立位の例(SZ44)は後期以降見られる「埋設土器」と呼ばれる一群の流れを受けるものと考えられる。横位埋設と斜位埋設との明確な峻別は積極的にできる状況にはない。横位もしくは斜位埋設の土器棺は、以下のように分類した。

横位 or 斜位

棺を構成する土器の個体数および構成による分類

- A 「単棺」
- B 「土器片の蓋をもつ単棺」
- C 「合口棺」

棺身出土状況の分類


- a 土器本来の形を保ったままのもの
- b 潰れた状態で出土したもの
- c 棺身が二分の一以下のみ残存で、遺構底面に内面を上にして敷かれた状態のもの

棺蓋出土状況の分類

- i 棺身の口縁部・胴部下半に蓋が被せられているもの。
- ii 棺身の口縁部のみに蓋が被せられているもの。
- iii 棺身の口縁部から胴部全体に蓋が被せられているもの。

これらの組み合わせで、立位 1・単棺 3・土器片の蓋をもつ単棺 9・合口棺 1 の計 14 形態に分類できるが、今回の調査では「B - b - i」類、「B - b - ii」類、「B - c - iii」類が見られなかったため、立位 1・単棺 3・土器片により蓋がされた棺 6・合口棺 1 の計 11 形態に分類される。豊川市麻生田大橋遺跡の資料を中心に分析された前田清彦氏の分類では、「立位」の SZ44 は I A 類に、「単棺」と「土器片の蓋をもつ単棺」とが II A 類に、「合口棺」が II C 類にそれぞれ該当する(前田 1993)。

「A - a」類は 11 基見られ、そのうち 10 基が底部残存している。SZ09 のみ意識的な底部の欠損が施されている。土器の個体数としては一個体しか見られないものの、SZ34・SZ41 のようにセクションから口縁部付近に有機質のもので蓋をされた痕跡と考えられる状態が確認できた。「A - b」類は 1 基見られ、底部の欠損された土器の 2 分の 1 が底面に張り付いた状態で、その上には同一個体の破片が潰れた状態で出土している。「A - c」類は 10 基見

| 立位   | 横位もしくは斜位   |  |  |                    |         |   |                               |  |                 |       |
|------|--|--|--|--------------------|---------|---|-------------------------------|--|-----------------|-------|
|      | A 単棺   |  |  | B 土器片の蓋をもつ単棺       |         |   |                               |  |                 | C 合口棺 |
|      | a  | b  | c  | a                  |         |   | b                             | c  |                 |       |
|      |  |  | i  | ii                 | iii     | iii   | i                             | ii   |                 |       |
| SZ44 | SZ07(底)<br>SZ09<br>SZ14(底)<br>SZ22(底)<br>SZ24(底)<br>SZ32(底)<br>SZ34(底)<br>SZ37(底)<br>SZ41(底)<br>SZ53(底)<br>SZ54(底) |  SZ39<br>土器片を組み合わせて棺を形成した可能性? | SZ28(底)<br>SZ30(底)<br>SZ31(底)<br>SZ33(底)<br>SZ12<br>SZ16<br>SZ17<br>SZ23<br>SZ43<br>SZ50 | SZ02(底)<br>SZ04(底) | SZ27(底) | SZ10(底)<br>SZ15(底)<br>SZ29(底)<br>SZ35(底)<br>SZ55(底) | SZ26(底)<br><br>土器片を組み合わせて棺を形成 | SZ03<br>SZ06<br>SZ08<br>SZ18<br>SZ13(蓋逆位)<br>SZ36(蓋逆位)<br>SZ38<br>SZ47<br>SZ49 | SZ40<br>SZ42(底) |       |

(底)は棺身に底部が残存していることを示す  
白抜きの遺構番号は棺身の底部が欠損されているものを示す。

第 40 図 土器棺墓形態分類図

られる。底部が残存しているものが4基である。すべて土器片が遺構底面に張り付いた状態での出土である。「B-a-i」類は2基見られる。2基ともに棺身の底部の破損は見られない。棺身の破損部分に別個体片を蓋にしているものの、棺身の胴部下半部分には塞がれていない部分が見られる。「B-a-ii」類は1基のみである。蓋としている土器片は棺身の口縁部付近にしか見られないものの棺身自体がほぼ完器に近いことから、埋設時には完全に塞がれたものと考えられる。「B-a-iii」類は5基みられ、全て棺身には底部欠損が見られない。「B-a-ii」類同様に埋設時には開放部分がなかったものと考えられる。「B-b-iii」類はSZ26の1基のみであり、これも棺身の底部欠損が見られないものである。この潰れた状態での出土は、隣接するSZ10との比較から単に土圧によるのみの潰れだけでは説明ができないものである。棺身となっている土器についても、まずは破片にして埋設時に組み合わせた可能性も考えられる。「B-c-i」類は3基で、底面にある棺身はすべて故意的な底部欠損が見られる。「B-c-ii」類は6基で、これも棺身となってる土器の底部は意識的な欠損が見られた。SZ13とSZ36の棺身の口縁部を立て囲むように棺蓋が逆位に置かれている状況は特徴的で、棺の側壁を意識したものとも考えられる。「C」類は2基のみである。SZ40は一方の棺身のみ、故意的な底部欠損が見られる。SZ42は棺身両者ともに底部の故意的な欠損は見られない。

土器そのままの棺身

土器片組み合わせた棺

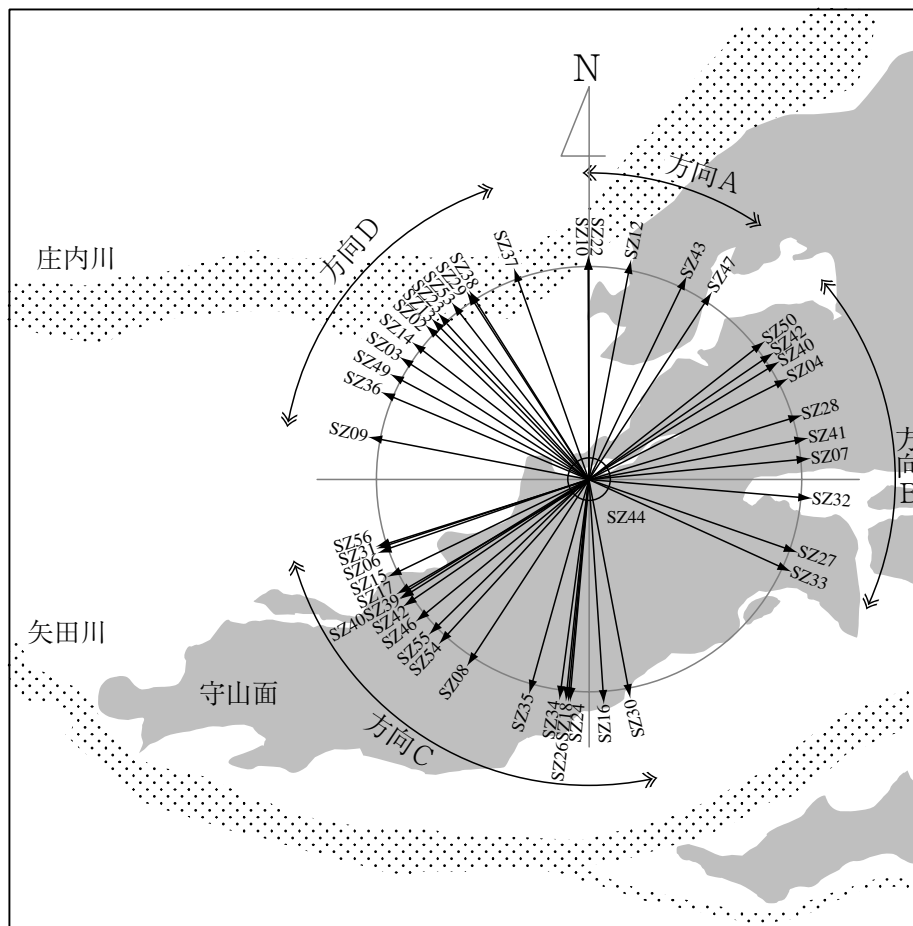
以上のことから、土器棺墓の造営には土器をそのままの形で棺身としたものと、土器片を組み合わせることによって全体として棺を形成しているものの2群に大きく分れる。前者にあたるのは「A-a」類・「B-a-i」類・「B-a-ii」類・「B-a-iii」類・「C」類で、後者にあたるものは「B-b-iii」類・「B-c-i」類・「B-c-ii」類である。例外はあるが、前者は棺身に故意的な底部欠損が少なく、後者はそれが多く見られる傾向にある。「A-b」類・「A-c」類はどちらともつかないものであり、後世の破壊により欠損の甚だしいものの可能性もある。今回の調査内の状況から類推して、「A-c」類のなかでSZ28・30・31・33という底部の残存が見られるものは、前者の、それ以外は後者の可能性が考えられる。

### ③土器棺墓の主軸方向の検討(第41図)

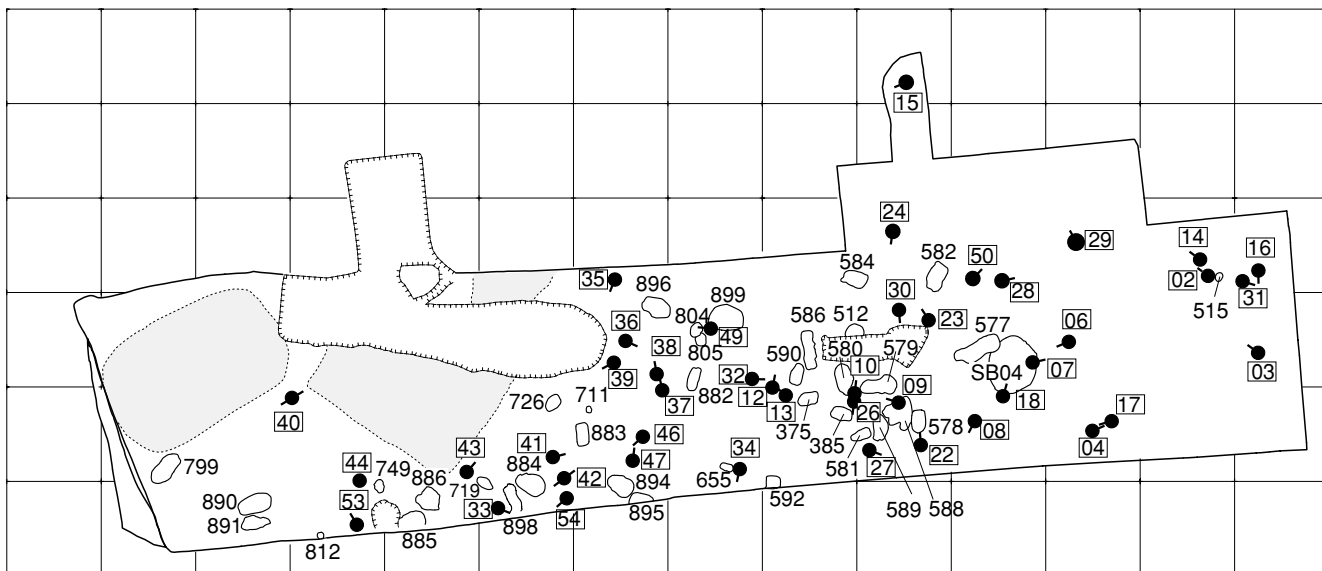
棺身の口縁部方向を土器棺墓の主軸方向として、棺の埋設方向を集約した。注目されるのは、南東方向に埋設されているものがない、という事実である。埋設方向はほぼ次の四方向に集中する。真北から北北東方向に置かれているもの(方向Aとする、以下同じ)、東方向を中心に北東から東南東方向に向かって置かれているもの(方向B)、(3)南西方向を中心に置かれているもの(方向C)、(4)北西方向に向かって置かれているもの(方向D)、である。主体になると考えられるものが方向B・C・Dで、方向Dは遺跡の立地する段丘の傾斜方向で庄内川方向であり、方向B・Cは段丘縁辺方向で庄内川と平行方向である。台地の傾斜と庄内川の方向を意識した埋設が行われていると考えられる。方向Aは谷地形を越え反対側の段丘に向けた方向であるといえる。この方向に埋設されるのは、5基のみであった。

地形を意識した方向性

### ④土器棺墓の分布状況(第42図)



第41図 土器棺埋設方向傾向図



□で囲われた番号は土器棺墓、数字のみは土坑(土壌墓をも含む)を示す      〇は弥生時代以降の遺構

第42図 99A・99B・00B区縄文時代主要遺構配置図(1:400)

段丘縁に  
平行に埋設

土器棺墓の広がりには調査区全体に広がっているものの、99A・B区の真ん中を北東方向から南西方向にかけて斜行するように分布密度の濃い部分が存在する。この流れは遺跡の立地している中位段丘の縁に平行しており、遺跡の地形を意識したことが十分に伺えられる。これは主要な土坑の分布とも一致する。しかし、時期によって集中する傾向はつかめなかった。

c. 土坑(土壙墓の可能性のあるものも含む)

ここでは、以下の4群に分けて記述する。

土坑の分類

- (1)大形の土器片が遺構上面から覆うように検出された土壙
- (2)大きさ・形状・埋土内遺物から遺体埋葬が行われた可能性も考えられる土壙。
- (3)いわゆる「埋設土器」
- (4)土器・石器の廃棄または埋納の跡が見られた土坑

(1)大形の土器片により覆われている土壙

大形の土器片が器壁外面を表にして遺構上面に伏せるような形で出土した遺構である。これは、土器棺墓の棺埋設土壙のプランと大きさがほぼ近似することが多いことから、しばしば土器棺墓の一類型として扱われるものである(註1)。今回の報告では破片の組み合わせにより棺底面と側面(身)・上面(蓋)を形成するもののみ「土器棺墓」とし、上面(蓋)のみ土器であるものとの間で大きな区別をした。これは棺身が土器であるか否かを重視したことによる。4基確認できた。

SK592 SK592は、99A・B境界に近い、調査区南壁沿いに検出された。調査時、粗製深鉢の大形土器片が表側を上面に検出され、その後隅丸方形状に土壙の平面プランを確定して掘り進めた。土壙の平面プランの検出にはかなりの無理があった。もし、この検出された遺構のプランが正しければ、土壙に安置された遺体に土器片を被せた可能性があるため、ここで報告する。土器片は全体の3分の1周分残存した、口縁部から胴部上半部の破片である(84)。iii e期。(第38図)

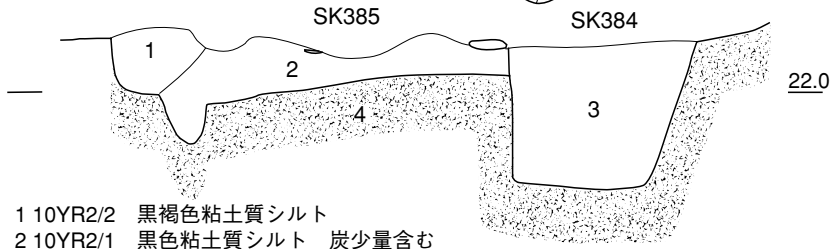
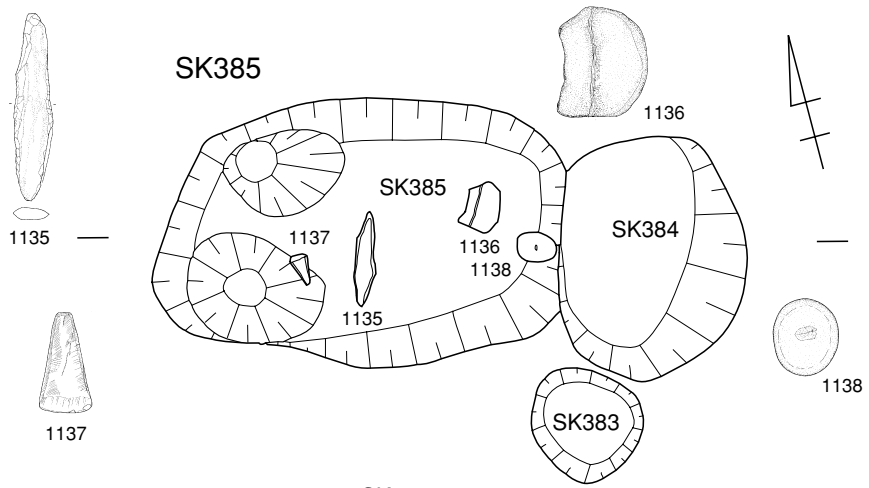
SK804・805 SK804・SK805は、SZ49などと切り合い関係の見られる土壙である。SK804とSK805の両方で粗製深鉢の大形破片が被せるような形で検出された。両者は同一個体であり、接合の結果、胴下半部を欠損するのみで、全周残存する深鉢になる(85)。調査時はSK804とSK805は切り合い関係があるものとして扱ったが、セクションで観察する限りSK804とSK805の深さがほぼ同じであること、両者の埋土の区別が微妙であることなどから、二つの遺構は一連のもので、長さ1 m 30cm、幅70cmほどの土壙墓である可能性も考えられる。iii e～iii f期。(第33・34図)

SK512 SK512も、大形の土器片が遺構検出面にほど近い高さの、遺構埋土内で出土した。検出された土壙は、攪乱を受けているものの、径1m前後の円形状を呈していたものと考えられる。大形の土器片が、遺構のある一方に寄って検出された(256)。土器片は口縁部側を低く底部側を高くした状態で埋設されていた。SK346に切られており、断面形状は逆台形状を呈している。iii e期。(第39図)

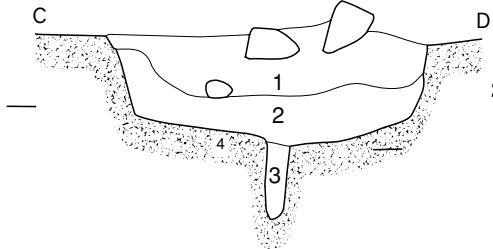
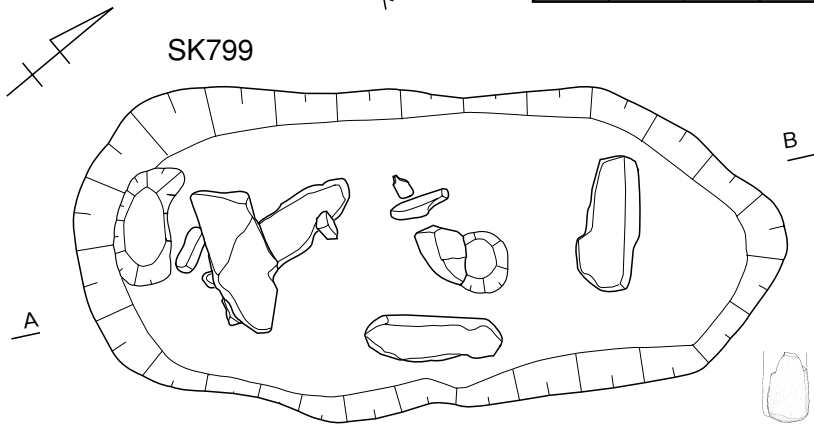
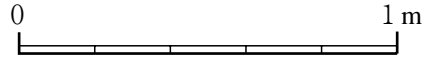
以上の遺構は、全形が伺えるものはSK804・SK805のみであるものの、被せられる大形

---

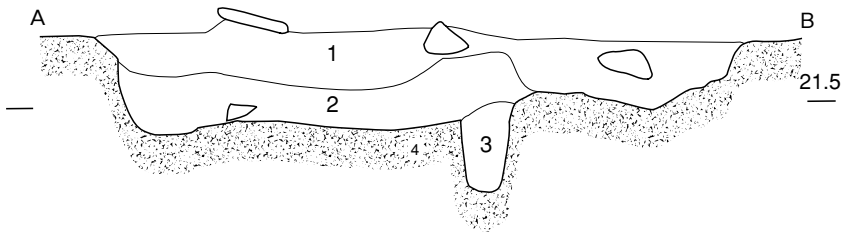
(註2)例えば知立市荒新切遺跡SZ02(岡本編1990)や、麻生田大橋遺跡豊川市調査分SK147(前田編1993)などが、ここで報告する遺構と同種のものと考えられる。



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 炭少量含む
- 3 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

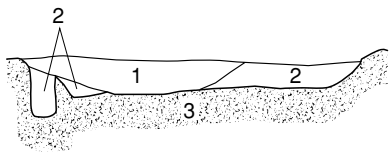


- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト  
しまりはあまり強くない
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト  
径3mmほどの礫を少量混じる
- 3 2.5YR3/1 黒褐色砂質土  
細粒砂主体  
しまりはあまり強くない
- 4 10YR6/6 明黄褐色礫層



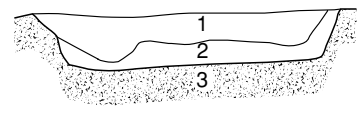
第43図 SK385・799(1:20)

SK579(南から) 22.5



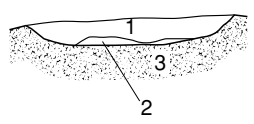
- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 炭を少量含む
- 2 10YR2/1 黒色粘土質シルト
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK580(西から) 22.5



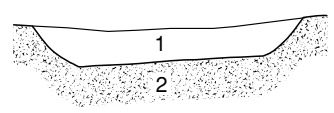
- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 炭を少量含む
- 2 7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK581(南から) 22.5



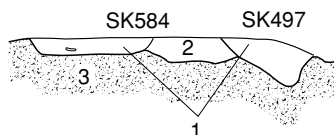
- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 炭を少量含む
- 2 7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK582(南東から) 22.5



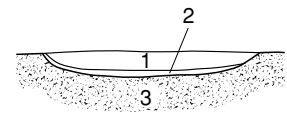
- 1 7.5YR2/1 黒褐色粘土質シルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK497・SK584(南から) 22.5



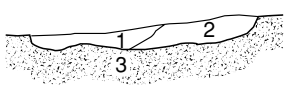
- 1 10YR3/2 茶褐色粘土質シルト
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK590(東から) 22.5



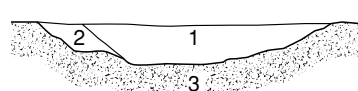
- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 礫多く含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK882(東から) 22.0



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色礫層

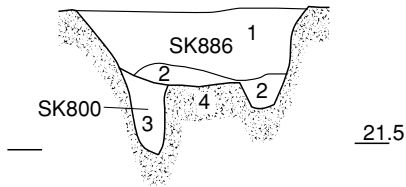
SK884(南から) 22.0



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質土 砂礫を少量含む
- 3 10YR6/6 明黄褐色礫層

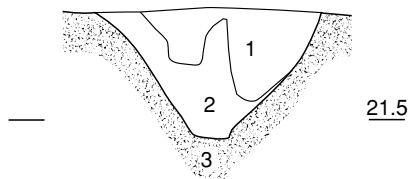
第44図 土坑セクション図1(1:20)

SK800(・SK886南西より) 22.0



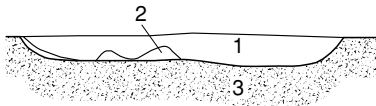
- 1 10YR2/1 黒色粘土質シルト
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
- 3 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK889(南西より) 22.0



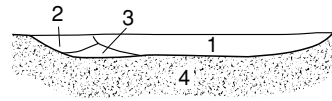
- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト  
礫多い、炭少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質土  
しまりはやや弱い
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK890(南より) 22.0



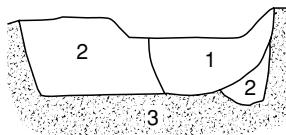
- 1 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト 礫多い
- 2 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK891(南より) 22.0



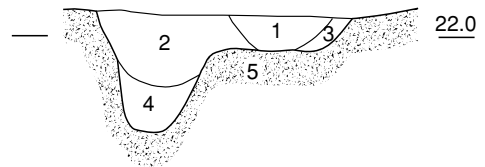
- 1 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト
- 2 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色礫層

SK894(南西より) 22.0



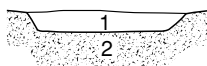
- 1 10YR2/1 黒色粘土質シルト
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK896(南より)



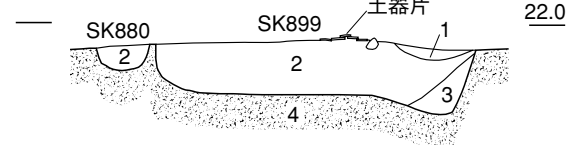
- 1 10YR2/1 黒色粘土質シルト
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト 礫多い
- 3 5Y1.7/1 黒色粘土質シルト  
礫多い しまりは強い
- 4 2.5Y2/1 黒色粘土質シルト

SK726(南東より) 22.0



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色礫層

SK880・SK899(南から)



- 1 10YR3/2 茶褐色粘土質シルト  
径1cm以上の小石を含む
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
- 3 10YR2/1 黒色粘土質シルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色礫層

第45図 土坑セクション図2(1:20)

土器片が粗製深鉢片であること、それが遺構の平面プランのある一方に偏った状態で検出されていることが共通していると言える。

(2)大きさ・形状・埋土内遺物から土墳墓の可能性のあるもの。埋土内遺物とは具体的には人工遺物および骨片や骨片と思われる白粉が見つかったものを示す。

ここで相当する遺構は、SK375・385・577・578・579・580・581・582・584・586・588・589・590・655・711・719・799・882・883・884・885・886・890・891・894・895・896・898・899・1183・1043である。そのうち骨片・骨粉などがみられたものはSK655・711・884・886・898・1043・1183である。以下、特筆すべき遺構を順次述べていく。

骨片・骨粉  
の出土した  
土壌

**SK577** SK577は断面皿形を呈しごく浅くしか残っていなかった遺構である。SB04の一部を切る形で検出された。SK577の埋土とSB04の埋土とは明確な土色の違いを認識できたため、この切り合い関係は保証されている。平面プランは隅丸長方形を呈すると考えられる。

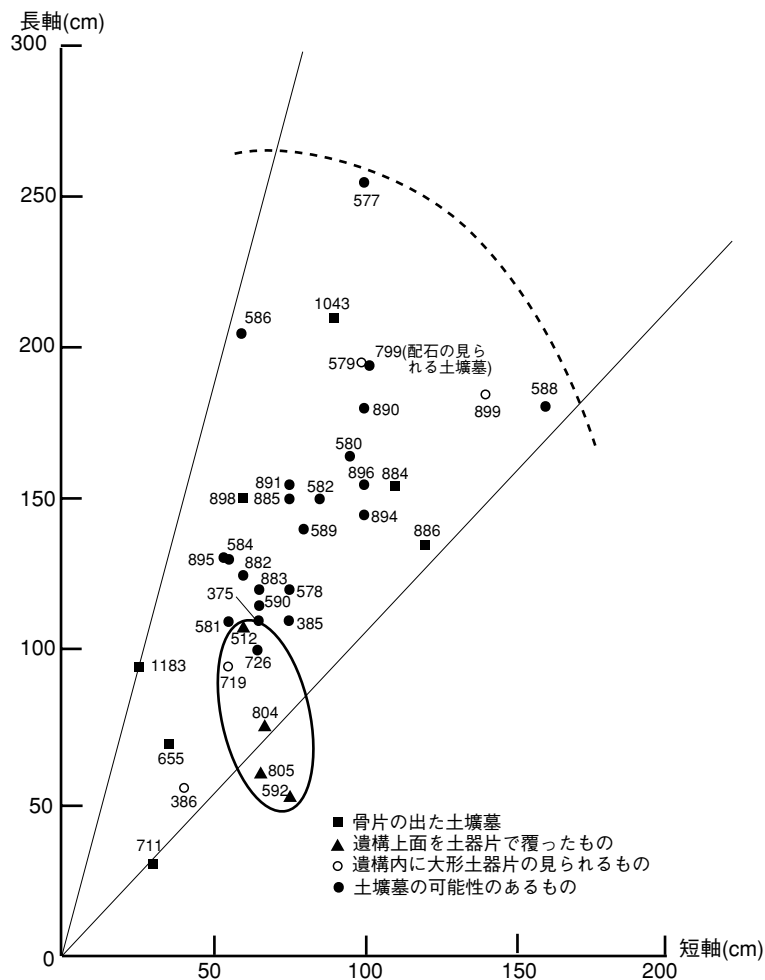
**SK588** SK588は断面逆台形状で、平面プランは不定形である。平面の形状から、長楕円形状プランを呈する土墳墓が2基以上切り合いの結果に形成された可能性が高いが、調査時には明確な関係を確認することができなかった。ひだ状に延びる先端の部分では、遺構底面に若干の窪みが見られる所もある。

**SK385** SK385は断面逆台形状で、平面プランは長形状を呈する。遺構底面には角の二ヶ所に少し窪みが見られる。遺

構底面から10～15cmの高さの遺構検出面で、石剣・磨製石斧・敲石・陰刻された石製品と思われるものがほぼ同一レベルで出土した。(第43図上)

**SK799** SK799は断面逆台形状で、平面プランは隅丸の長形状を呈する。長さ約40～50cm、幅15～20cmの柱状の河原石が遺構の平面プランに合わせて組み立てられている状態で検出された。組み立てた石は遺構底面ではなく、検出面に近いレベルで検出された。埋土からは、敲石・打製石斧・被

遺構内配石



第46図 土坑計測値散布図

熱を受けた石皿片が出土した。(第43図下)

SK899

SK899は遺構検出時に、一個体であると考えられる粗製深鉢胴部片がまとまりをもって検出された。表面を上面にした状態で、遺構平面プランの東側に偏った場所で検出された。この遺構も同類のものである可能性が高い。断面逆台形状で平面プランは楕円形状を呈する。(第45図右下)

土坑(1)・(2)に関して、遺構長軸と短軸の相関関係を示したものが、第46図である。土坑(1)は長軸・短軸ほぼ50～100cm以内で、土器棺墓の規模とはほぼ同じである。土坑(2)に関してみると、多くは長軸100～200cmの範囲のもので、骨片・骨粉が検出された土坑では径30cmほどの小型の遺構も見られる。

(3)いわゆる「埋設土器」

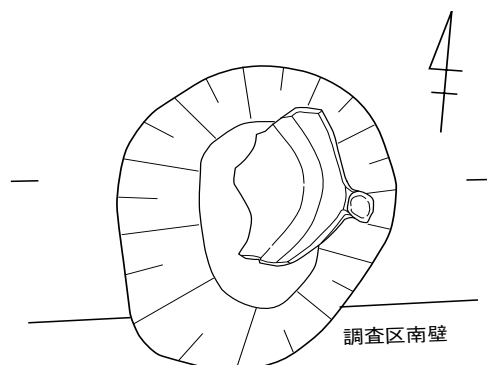
SK812  
胴部下半  
欠損

SK812は平面プランが楕円形状を呈する土坑内に、胴部下半を欠損させた精製深鉢形土器が立位に埋設された状態で検出された。南壁沿いにありトレンチ掘削時に動いてしまったため、検出時にはその痕跡を留める状態でしか確認ができなかった。土器は検出面付近で見つかっており、検出した遺構底面からは40cmほどの高さのレベルで埋設されたものと思われる。iii b期。

(4)土器・石器の廃棄または埋納の跡が見られた土坑

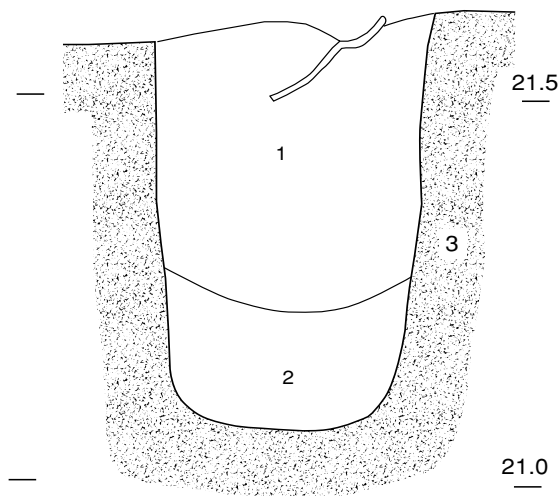
SK515

SK515はSZ02に隣接する、小土坑である。土坑内からは台付鉢の脚部・打製石斧・磨製石斧・石剣・礫器が出土した。打製・磨製両石斧は使用の痕跡が多く残っていた。遺物のほとんどは遺構検出面付近で出土しており、遺構底面としたレベルからは約40cmほど上である。使用された石器・石製品の埋納土坑もしくは廃棄土坑であると考えられる。iii e期。



SK946

SK946もごく浅い小土坑である。土坑内からは中部高地系の隆帯文系浅鉢が二個体分、大形破片を折り重ねるような状態で出土した。土器全周分の破片が遺構内に見られた様子はなく、破片の一部を埋納もしくは廃棄したものと考えられる。iii b期(255)。(第48図)

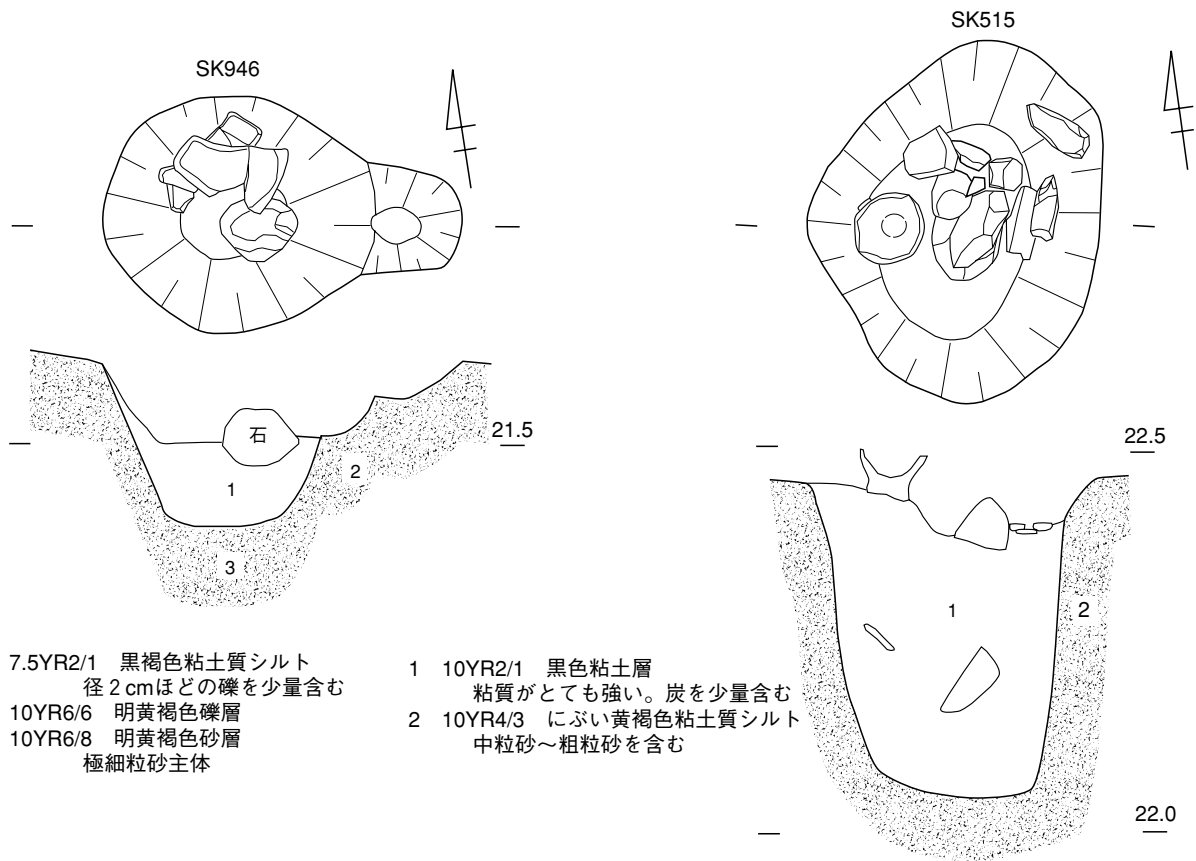


#### d. 集石遺構

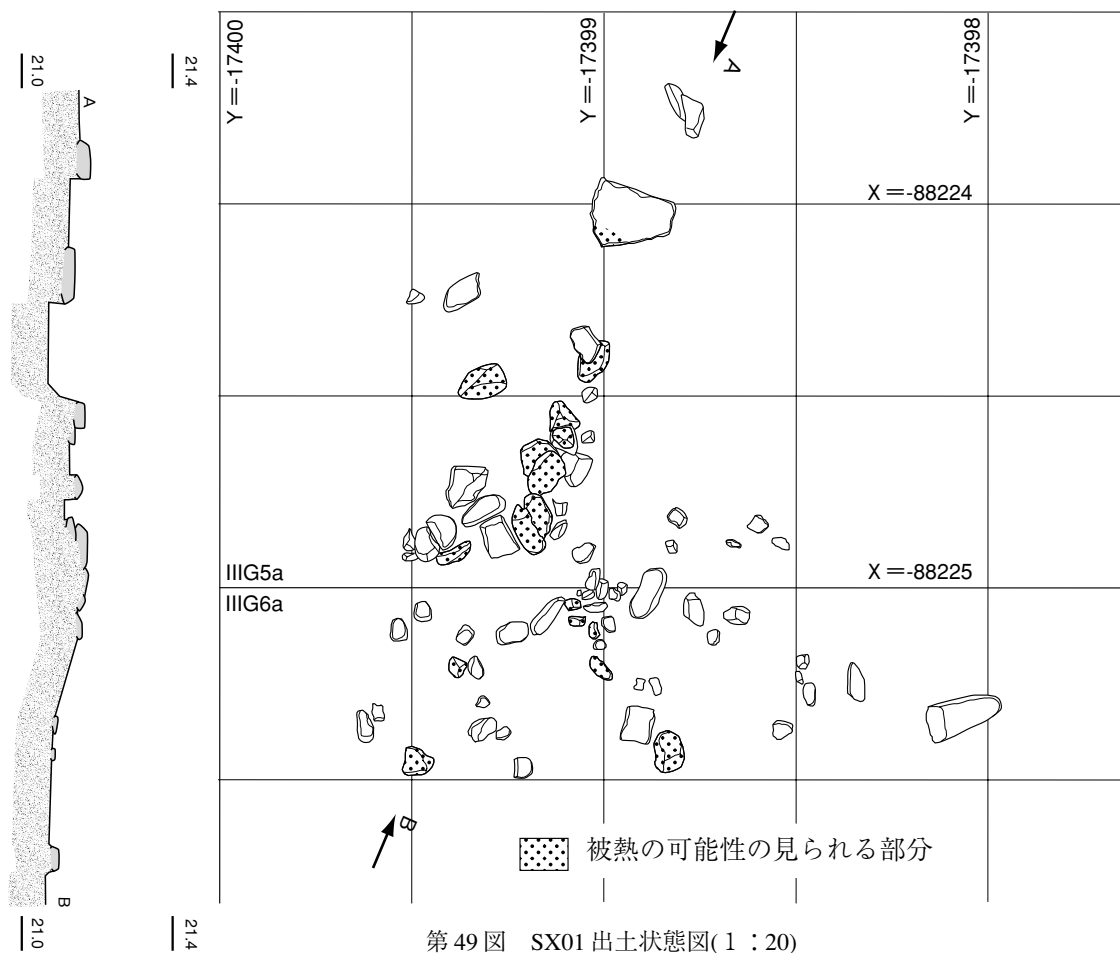
SX01は2m四方の広がりの中なかで10～30cmほどの礫群が被熱した状態で検出

1 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト  
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト  
3 10YR6/6 明黄褐色礫層

第47図 SK812(1:10)



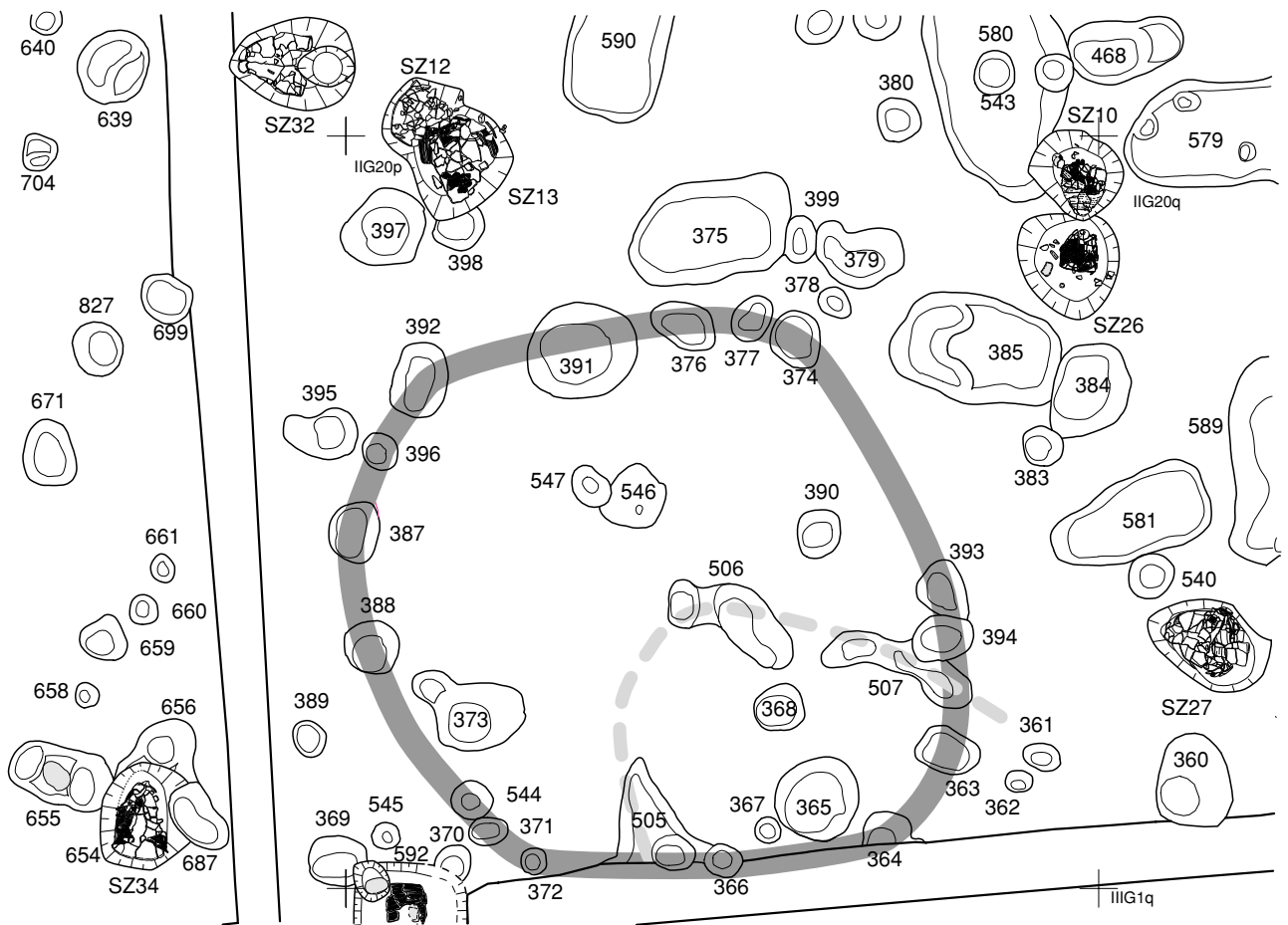
第 48 図 SK515・946(1 : 10)



**被熱の跡** された部分である。調査区の南側に接しており、本来はもう若干広範囲に見られたものと推測される。被熱したものの中には、石皿の破片など(1531)石器も含まれている。この周辺からは被熱したと見られる白色化した骨片がまとまって検出された。細片であるため種の同定は難しい。骨粉のみで明らかに焼けた骨片などは見られず、被熱した石とを明確に関係づけることができない。出土遺物は土器を中心とし、石製品の出土は不明品が1点のみ(1570)であるほかは、周囲から精神文化を示す遺物の出土は見なかった。時期の比定についても困難を伴うが、iii b ~ iii c 期。(218 ~ 230)。(第 49 図)

**平地式住居の可能性か**

以上の遺構以外に、土坑が円形に連なる状態で検出されたところが1ヶ所見られる。99A区南壁沿いの99A・B区境に見られる。関連する遺構はSK363・364・366・371・372・374・376・377・387・388・391・392・393・394・396・544である。周囲を土器棺墓・土坑(1)に囲まれた部分であり、ほぼ同大の小土坑が径約4mの環状に廻っている。SK505・506・507は細長の形状を呈するという共通点を持っており、これも一連の遺構である可能性が高い。これらの土坑群は、断言できないものの平地式住居であった可能性を考えておきたい。



第 50 図 環状に巡る土坑群(1 : 50)

## 2. II期の遺構

### 弥生時代

弥生時代に属する遺構は、竪穴住居3棟および土坑である。すべて弥生時代中期後葉の高蔵式期に属する。遺構は99A区では希薄で、99B区そして00A区へと西に行くにしたがって遺構の濃度が濃くなっている。ここでは竪穴式住居を中心に報告していく。

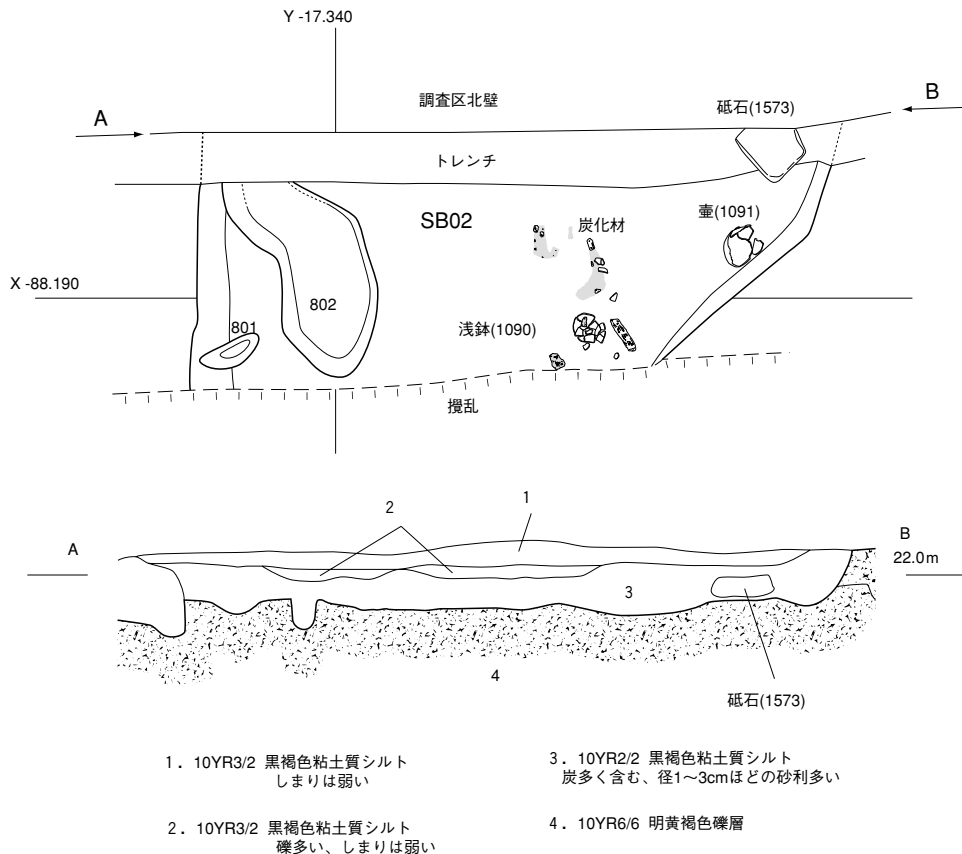
#### SB01

SB01は長軸9m、短軸6.5mを測る隅丸方形の平面プランを呈する。守山面の礫層を掘り下げてつくられている。遺構内側の壁際に沿って一段平坦面が巡り、さらにその内側に向かって一段下がって広い平坦面が作られている。下の平坦面の外周には細い溝が回っていたと思われる。遺構内北東部分には35×10×10cmの被熱した川原石と、その周囲約2m四方に焼成塊を粒状に含む分を検出した。炉跡かもしれない。遺構南西隅では、台付甕・甕が出土しており、甕は口縁部を下にした状態で出土した。遺構内には、軸を違えてさらに一段低くなっている部分があり、建替えがあったものと見られる。遺構底面では30基近くの土坑が検出されたが、SB01に伴うピットかどうかは不明である。

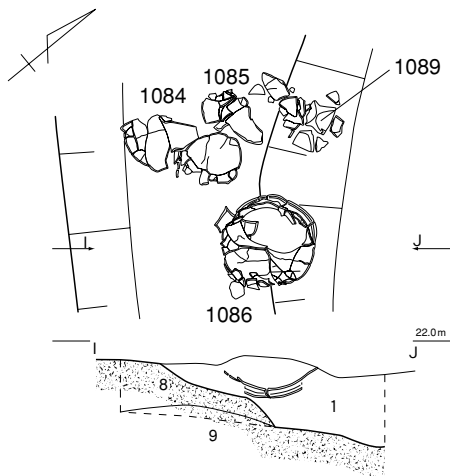
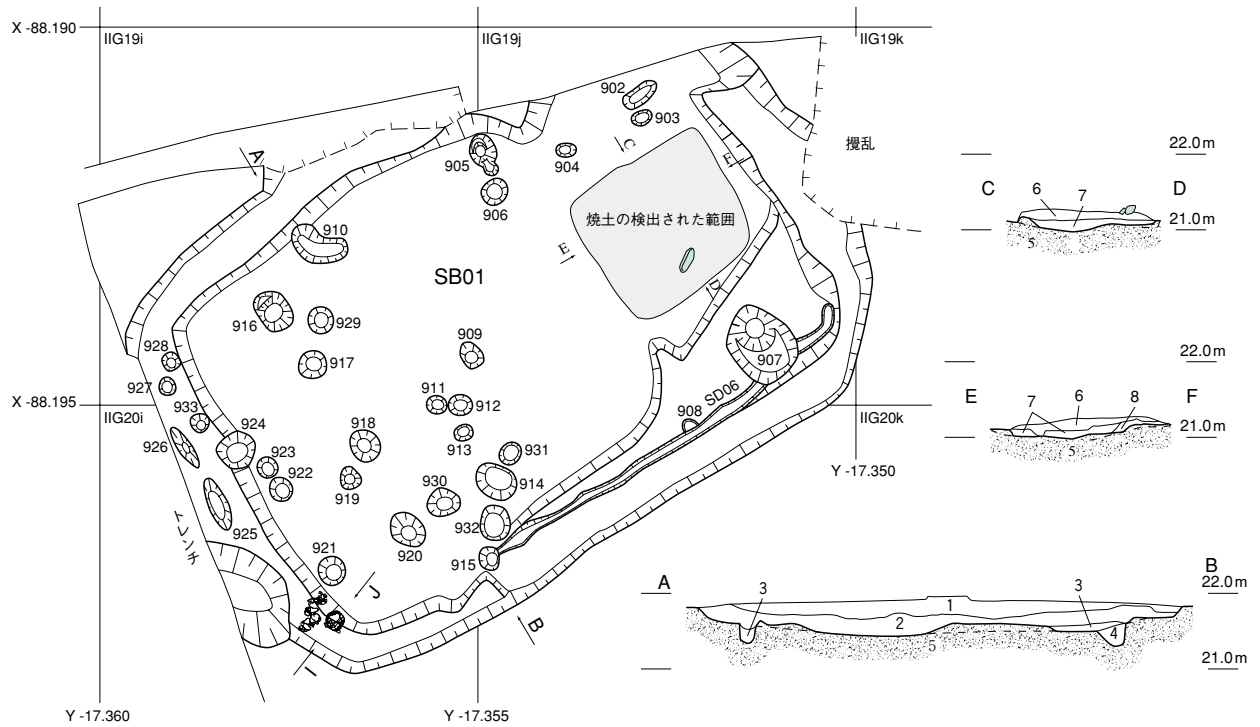
#### SB02

SB02は調査区北壁に接しており、全掘はできなかったものの、住居跡のコーナー部分であると考えられる。平面プランは不明である。遺構断面が確認できたところでは、礫層を掘り抜き明確な箱堀状を呈しているのが観察された。遺構底面は平坦であり、床面からは炭化材が出土した。焼失家屋であったと考えられる。遺構のコーナー付近には、壺・浅鉢・砥石が被熱した状態で出土した。遺構底面には2基の土坑が検出されたが、この住居に伴うピットではないと考えられる。

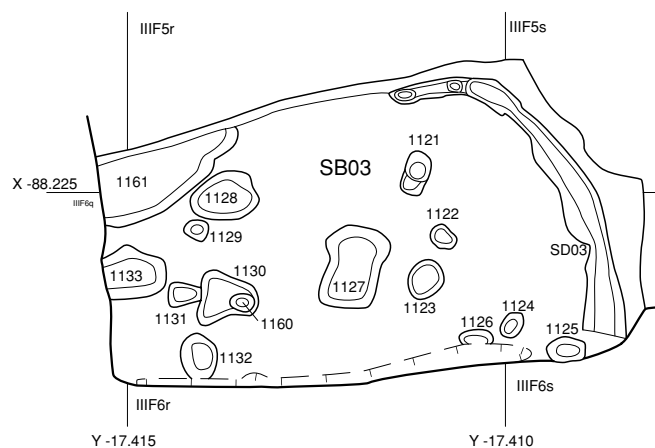
### 焼失家屋



第51図 SB02(1:50)



1. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト層  
礫多い、縄文土器、弥生土器多い、しまりは強い
2. 7.5YR1.7/1 黒色粘土質シルト層  
1よりも礫多い、また1よりもしまりが強い、弥生土器多い。
3. 5YR2/1 黒褐色粘土質シルト層
4. 5YR2/1 黒褐色礫層  
礫に黒土がしみ込んだものか
5. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫層（地山）
6. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト  
径3~5cm程度の礫を少量含む、赤色した焼土塊を多く含む  
しまりはやや強い
7. 10YR3/3 暗褐色砂質土  
径5cm程の礫を多く含む、しまりはやや弱い
8. 10YR3/3 暗褐色砂質土  
中粒砂・細粒砂多い、しまりは弱い
9. 10YR6/6 明黄褐色砂礫層  
中粒砂~極細粒砂主体、径3~5cmの礫多く含む



第 52 図 SB01・SB03(1:100) SB01 遺物出土状態図は 1:20

SB03

SB03は調査区南西端にあり全掘ができなかったものの、長軸6.5m以上、短軸4m以上の隅丸長方形の平面プランを呈すると考えられる。遺構の断面は明確な箱堀状で、守山面の礫層をも掘り下げられていた。遺構底面は平坦で、外周の一部には細い溝が残存していた。溝は本来は遺構底面外周を回っていたものと思われる。ここでも遺構底面で15基近くの土坑が検出された。

### 3. III期の遺構

古墳時代

古墳時代に属する遺構は、性格不明の遺構1基である。時期比定および性格づけの難しい遺構である。

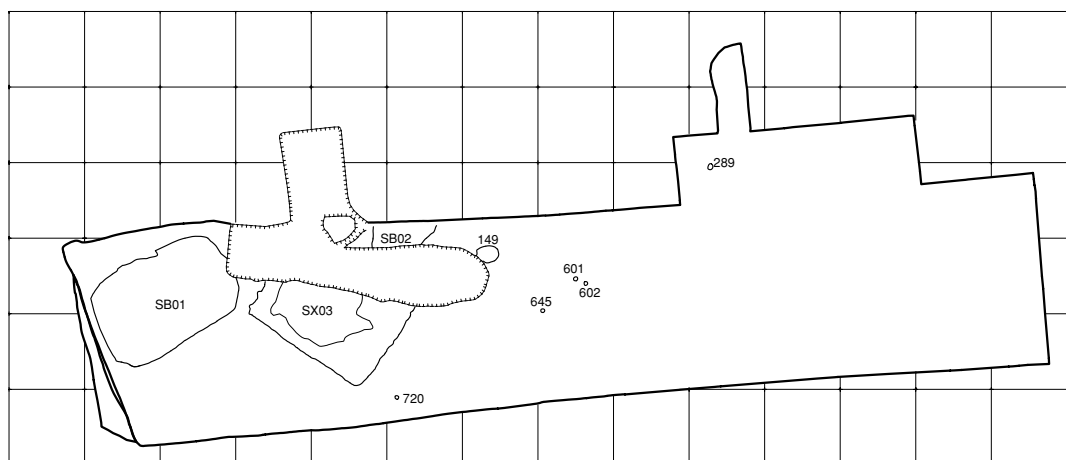
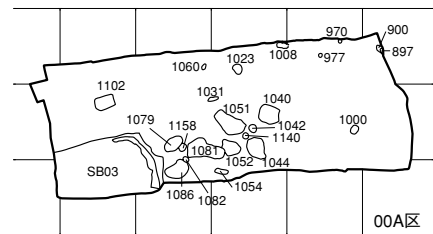
SX03

SX03は軸を違えてSB01に隣接している。北部分は攪乱され、全形は不明であるが、長軸9m、短軸6.5m以上の隅丸方形プランを呈するものと考えられる。遺構断面は礫層を掘り抜いて逆台形状を呈する。遺構底面の外周には西側で幅約1m、東側は1~2mほどの不整形の溝が回っている。遺構底面中心は若干凸気味となっている。遺構内には約40基の土坑が見られるが、SX03のピットであるとの評価は難しい。遺構の南西部、埋土中で2×3mの範囲で黄色粘土の広がりが見られた。黄色粘土の堆積時には当場所は若干の窪地になっていたようであり、黄色粘土が薄く広がりをもって検出された。堆積の厚さは遺構南東側が最も厚く、遺構中心に行くにしたがって薄くなっている。黄色粘土直上では貼り付くように6世紀前半に属すると思われる須恵器坏身・高坏・器台、そして大形の「装飾付須恵器」と呼ぶべき遺物が集中して出土した。特に装飾付器台は北側から南側に向かって倒れた状態で検出された。

黄色粘土の  
広がり

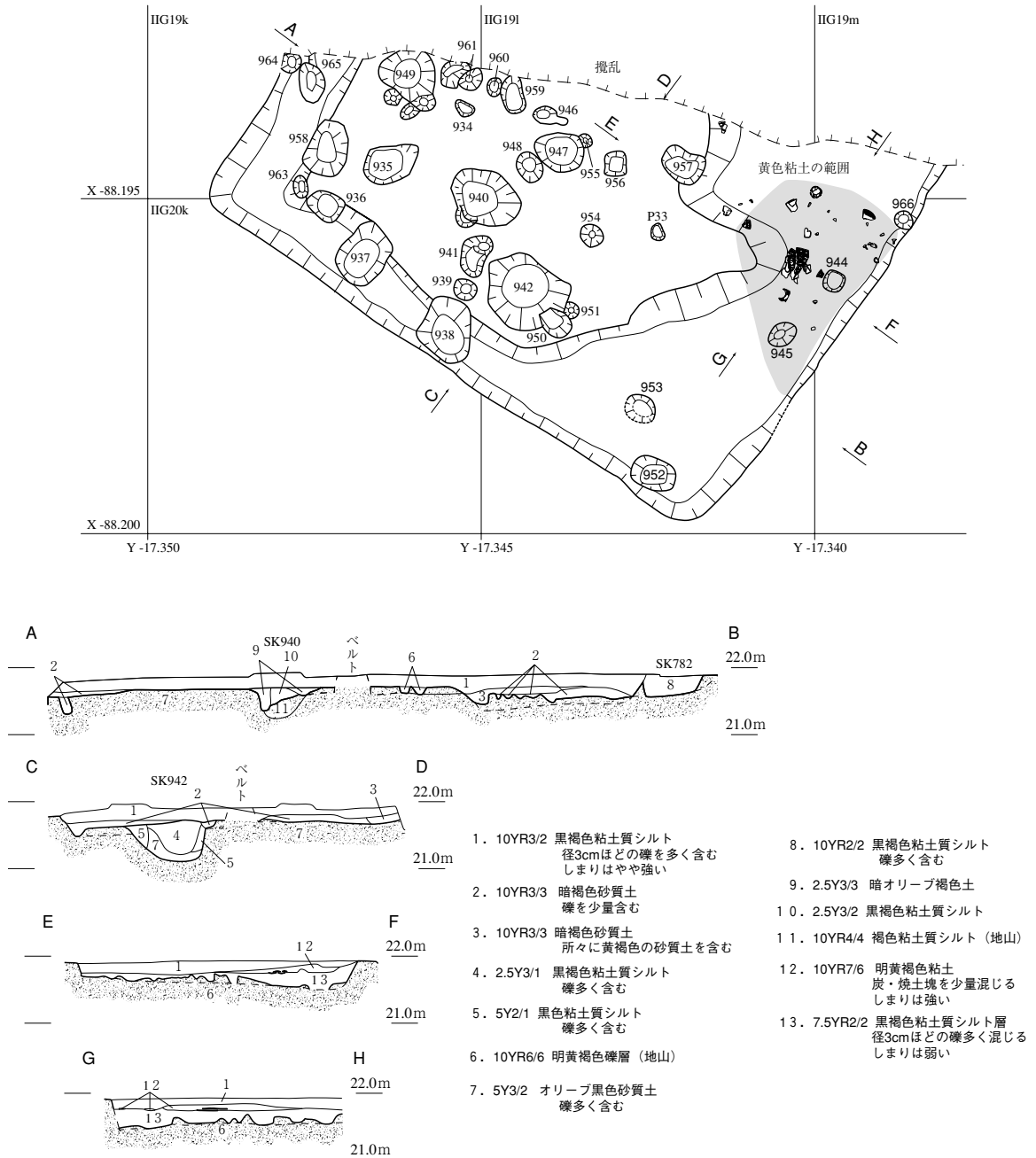
装飾付  
須恵器

この遺構では遺構底面から高蔵式土器が若干出土している。遺構の規模がSB01とほぼ同一であると考えられること、SX03の軸を離れた配置がSB01を意識したものであるとも考えられることから、

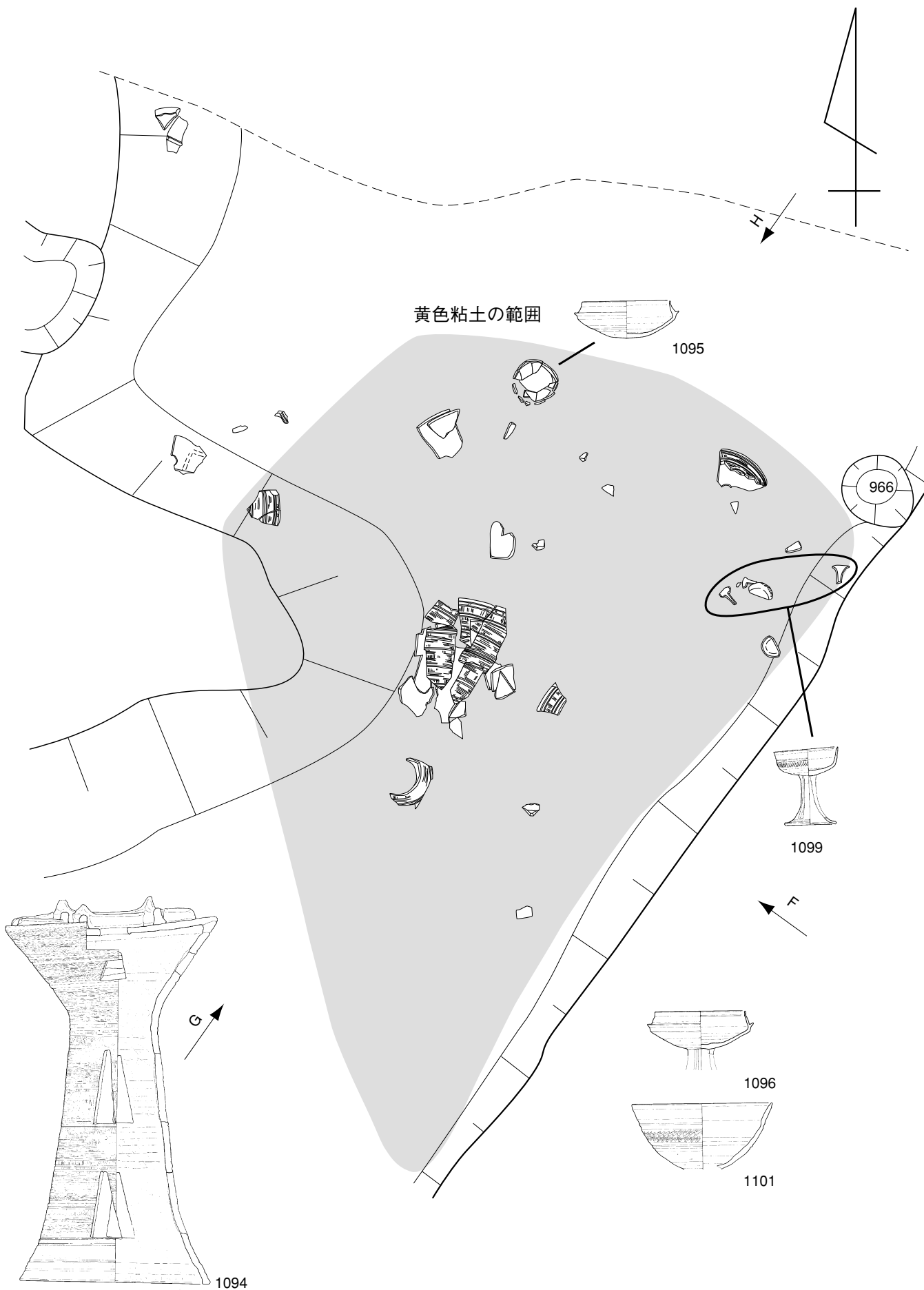


第53図 弥生・古墳時代主要遺構配置図(1:500)

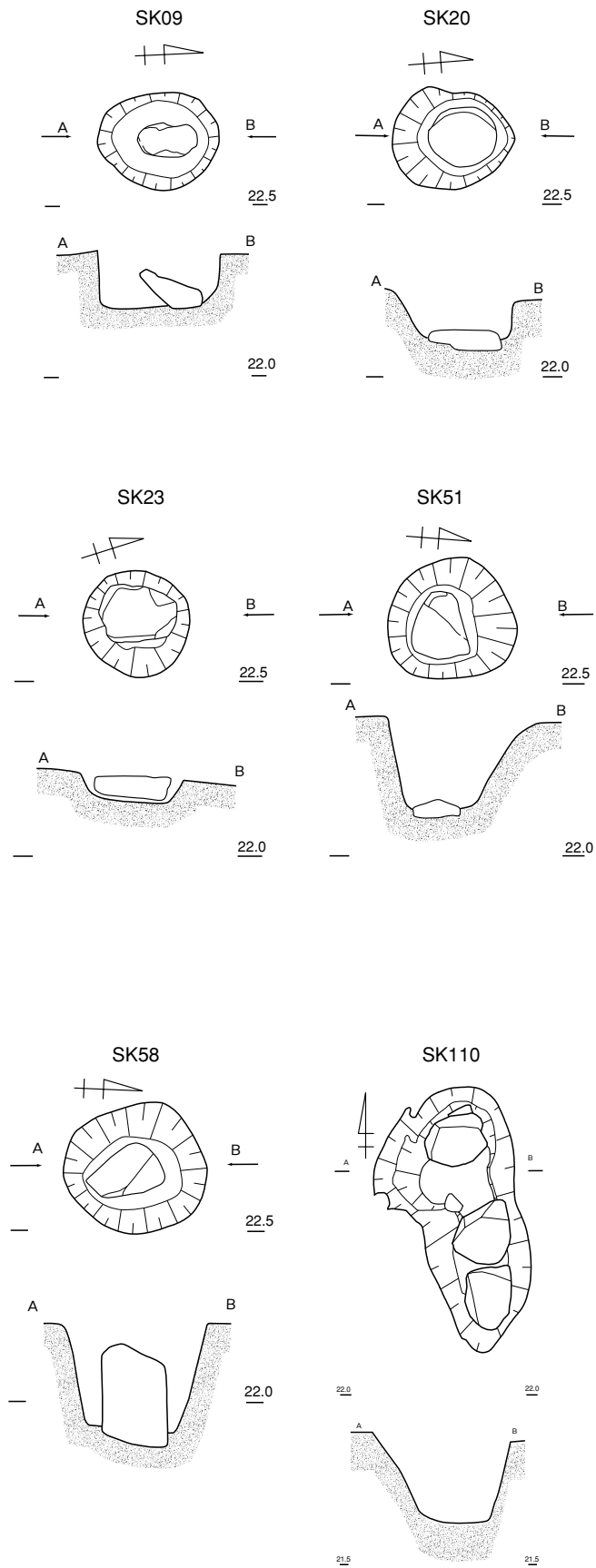
SX03の遺構自体が弥生中期後葉高蔵式のもので、遺構が完全に埋まる前に窪地になっていたところに、古墳時代に属する黄色粘土の堆積が見られたとの説明が可能である。しかし、高蔵式期に属するものとした場合、遺構の性格が確定しないこと、また黄色粘土からの出土遺物は古墳からの出土遺物と共通性があり、それに関連する遺構との解釈も想定しうることから、ここでは性格不明遺構としておく。確実に報告できることは、黄色粘土の広がり須恵器との関連が保証されていることで、時期は6世紀前葉と考えられることのみである。



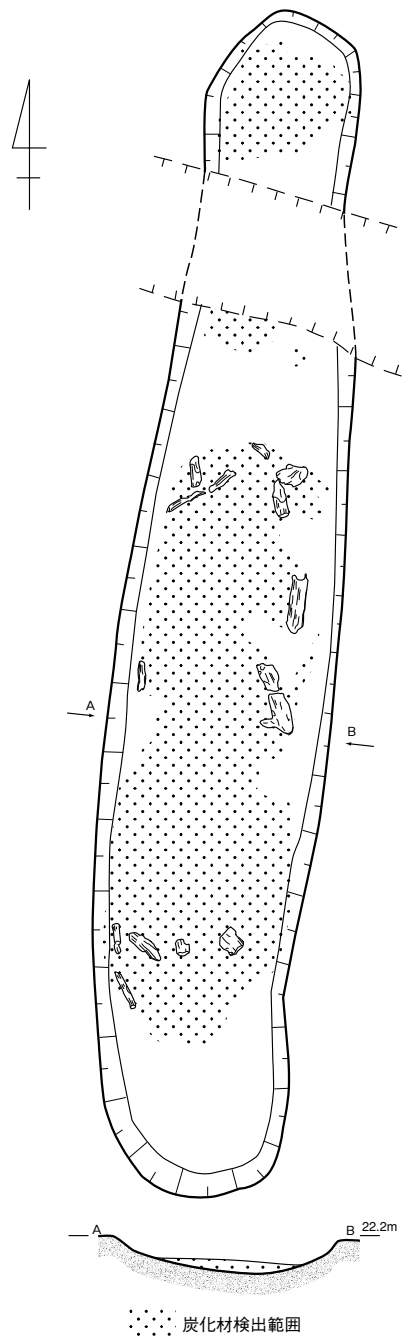
第54図 SX03(1:100)



第55図 SX03 遺物出土状態図(1 : 20)



第56図 土坑平面・セクション(1:40)



第57図 SK851(1:50)

#### 4. IV期の遺構

中世～戦国

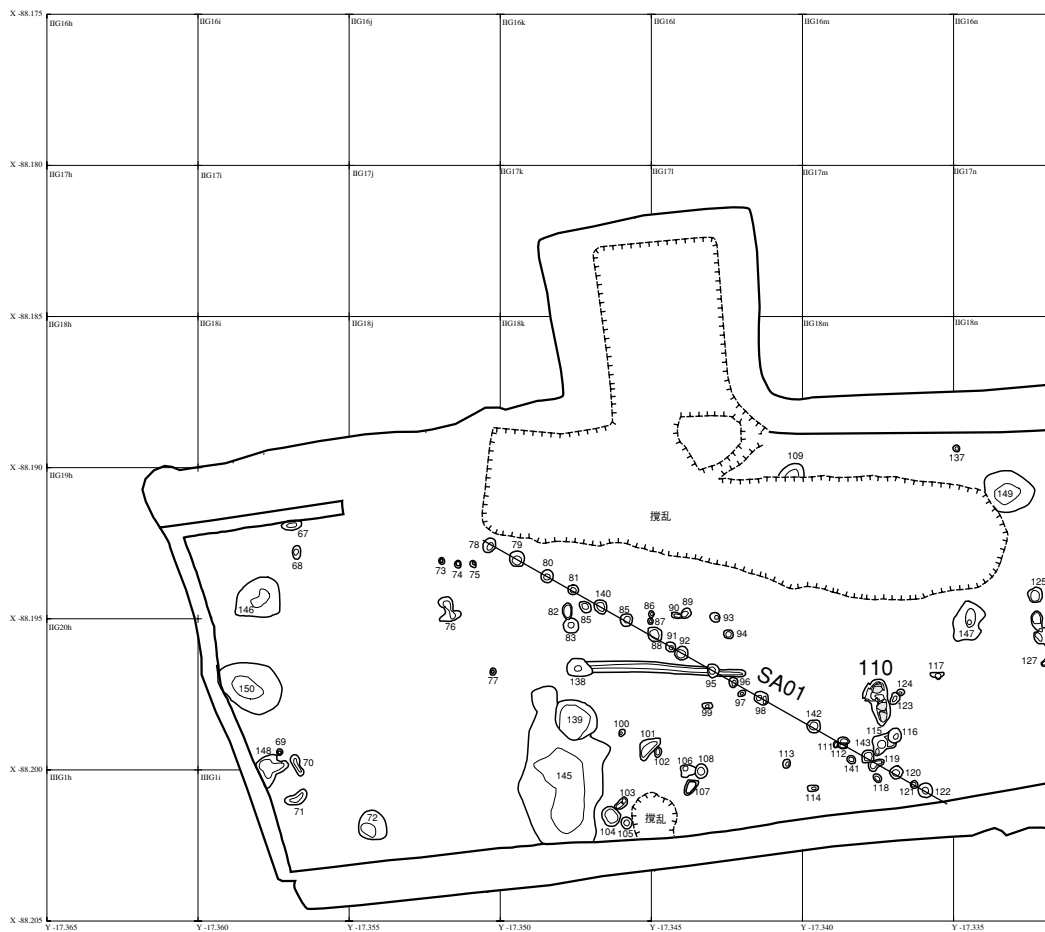
中世～戦国期に属すると思われる遺構が99A・B区全体で検出された。

SA01

SA01は、99B調査区を斜めに横切る形で検出された柵列である。少なくとも16基以上の土坑が関連しているものと思われる。柵列の中心となる土坑は100～120cmの間隔でつくられており、平面プランは径40cmほどの隅丸正方形および円状を呈している。各土坑の埋土状況は単一層であるものが多かったものの、SK80・88・96・120では杭痕と思われる筒状に入り込んだ橙色粘土が遺構埋土内で確認できた。

SD01

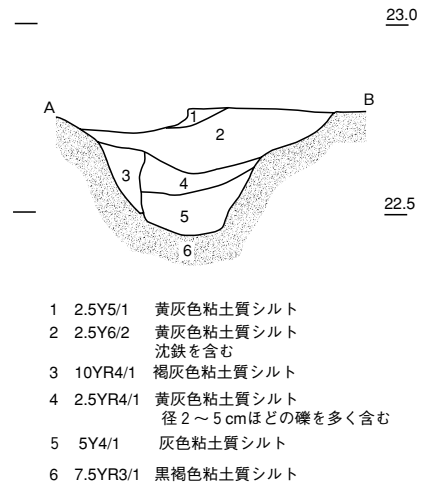
SD01は検出時で、最大幅1m25cm、深さ約35cmを測る溝である。ほぼ真北に沿ってつくられており、南北に縦断している。断面形状からおよび埋土から2時期に分けることができる。この溝が掘削された当初は、断面V字形を呈していたものと考えられる。その後、下層が埋まった後は断面形状が緩やかなU字形を呈し、よどんだ水の流れてはなかったのかと考えられる。SD01より西側、グリットIIG17～19のq・r・s・tでは包含層中に大量の沈鉄が含まれており、包含層が他の地点と比べてもかなりしまりが固くなっていた。下層が埋まった後は、この範囲まで水が流れてきていたのかもしれない。遺物は、上層に関して明確な時期決定できる遺物の出土はないものの、下層の遺構底面からは大窯II期に属する播鉢片の出土を見た。



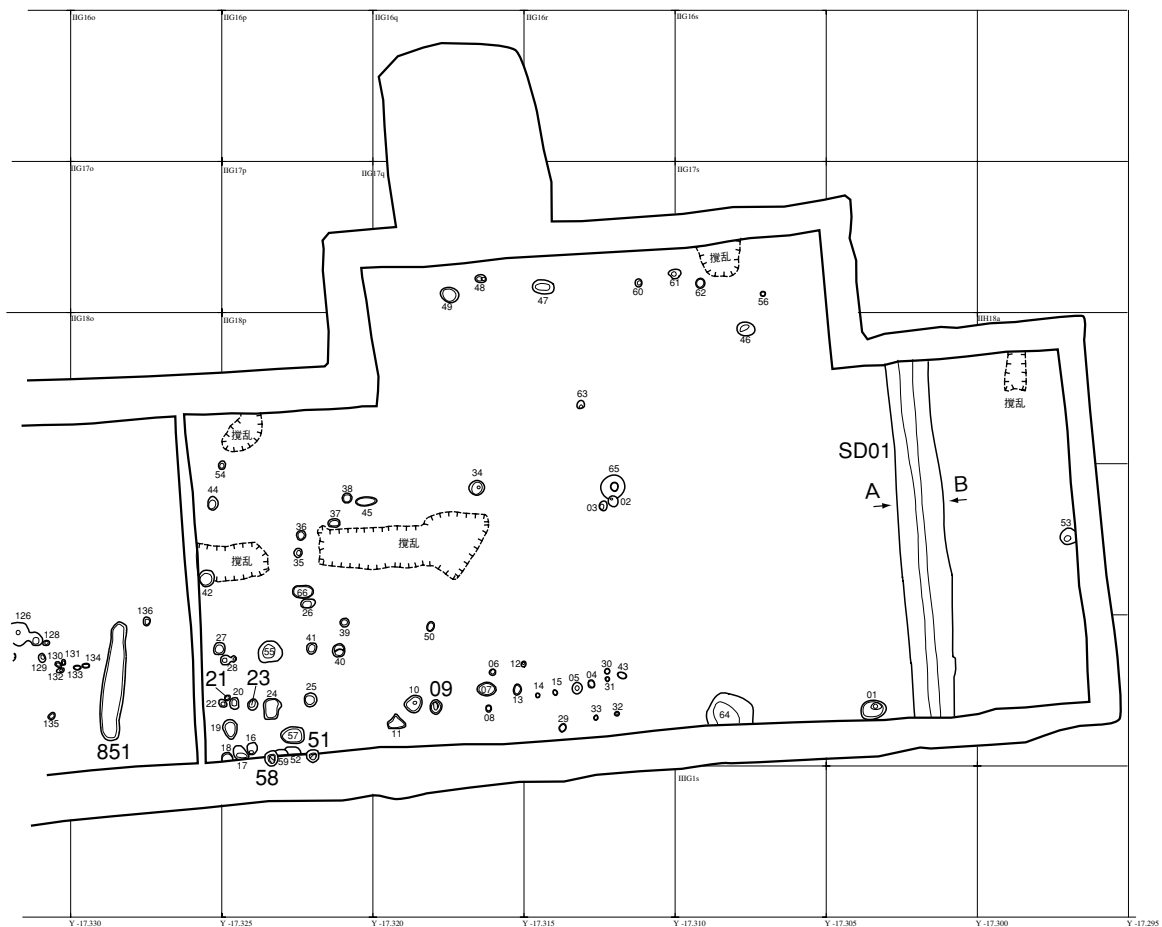
SK851 炭化材 SK851は平面プランが長軸約4 m、短軸約80cmの隅丸長形状、断面形が浅い皿状を呈する。遺構内埋土は黄色粘土で、遺構床面全面からは炭化材が面的に検出された。床面全面に敷かれたものと見られる。土壌墓である可能性が考えられる。

SK09 など SK09・20・23・51・58では土坑底面から、大きな礫が出土した。遺物の出土は見られず時期の決定は難しい。砂石・凝灰質砂岩・チャート・アプライトなど河原で採集されたと考えられる礫が、自然あるいは人為的によるとみられる平坦面上にした状態で埋置してあった。柱の根石かと考えられるが、今回検出された遺構では建物の推定は難しい。SK58からは大窯Ⅰ期に属すると思われる天目茶碗・匣鉢片が出土しており、ほかの土坑もほぼ同時期ではないのかと考えられる。

SK110 なお、SK110は遺構内に礫が集積している様子が確認できた。性格は不明である。



第59図 SD01 セクション(1:20)



第58図 中世・戦国期遺構配置図(1:250)

### 第三章 出土遺物

第今回の調査で検出された遺物は、土器棺の土器が83個体、その他土器・土製品を合わせて27リットルコンテナ約130箱ほど、石器・石製品を合わせて同コンテナ約80箱ほどが出土した。時期は、縄文時代中期から戦国期までに属するものであり、特に縄文後期後葉から晩期後葉までが主である。

#### 第一節 縄文時代から弥生前期の遺物

##### 1 土器類

###### (A)土器の分類

時期・器種・文様の有無により大きく9群に分類し、さらに群内で類別に細分する。類別の分類の基準は、Ⅲ群土器・Ⅵ群土器・Ⅶ群土器は文様と器形で、Ⅳ群土器・Ⅴ群土器・Ⅷ群土器・Ⅸ群土器は器形で行った。類以下の細別は「(D)遺物包含層出土土器」の中で述べていく。土器棺墓使用土器および遺構出土土器にの分類に関しては、各文末に示していく。「(D)遺物包含層出土土器」の項を参考にされたい。

#### 土器の分類

- I 群土器 縄文中期以前
- II 群土器 縄文時代後期前葉
- III 群土器 縄文時代後期後葉～晩期中葉 有文深鉢土器
  - A 類 後期後葉の凹線文土器
  - B 類 後期末から晩期初頭の有文土器
  - C 類 晩期前葉から中葉の有文土器
- IV 群土器 縄文後期後葉～晩期 粗製深鉢土器
  - (1)口縁端部上面に指による押圧および工具による刺突がみられないもの
    - A 類 口縁部がくの字屈曲および、内湾する器形でくの字屈曲と関連があると考えられるもの
    - B 類 口縁部が肥厚するもの
    - C 類 口縁部から底部にかけて大きな屈曲のみられない器形
    - D 類 口縁部が外反するもの
    - E 類 口縁部が内湾するもの
  - (2)口縁端部上面に指による押圧および工具による刺突がみられるもの
    - C' 類 口縁部から底部にかけてなだらかにつながる器形
    - D' 類 口縁部が外反するもの
    - E' 類 口縁部が内湾するもの
- V 群土器 突帯文土器・条痕文土器
  - A 類 いわゆる「無突帯刻目土器」
  - B 類 突帯文土器
  - C 類 条痕文の壺形土器
- VI 群土器 精製土器および異系統深鉢土器
- VII 群土器 浅鉢
- VIII 群土器 壺もしくは注口土器
- IX 群土器 底部

## (B)土器棺墓に使用された土器

SZ02  
(1～3)

1は口縁部から底部まで復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部には肥厚が見られ、底部は平底、器面調整は二枚貝条痕である。外面調整の横方向の条痕は規則正しく、原体それぞれの幅、全体の幅とも均一である。条痕調整後、口縁端部のごく上端のみナデが行われている。内面は口縁端部付近に指によるナデの痕跡が見られ、基本的にナデ調整であったと思われる。また内面には若干ではあるが輪積痕が見られ、底部付近には炭化物付着の痕跡が見られる。2・3は口縁から胴部上半まで復元できた。両者とも内湾する器形で、口縁端部は肥厚し、器面調整は二枚貝条痕である。1と同様に外面調整の横方向の条痕は規則正しく、原体それぞれの幅、全体の幅とも均一である。内面には指ナデの痕跡が多く見られる。3も同一である。口縁端部の最後の調整も1と同様である。1はIV群土器C類b1、2・3はIV群土器E類b。

SZ03  
(4～6)

4は底部のみ復元ができなかった。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部には若干の肥厚が見られ、器面調整は二枚貝条痕である。外面の調整はあたりの弱い横方向の条痕で、幅は若干変化している。外面の胴部下半には輪積痕が多く残されている。内面の調整はナデと思われ、一部輪積痕が見られる。器壁外面・内面には、炭化物付着の痕跡が見られた。5は口縁から胴部上半部までの復元である。口縁部から底部にかけてなだらかにつながる器形で、口縁端部には若干の肥厚が見られ、外面の調整はあたりの弱い横方向の条痕である。内面の調整はナデかと思われ、一部輪積痕が見られる。口縁端部の一部には指のつまみにより突起がつくられている。器壁の厚さが平均5mmほどと薄手である。6は胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部には指による押圧が施され、器面調整は横方向の条痕で、非常に当たりが弱いが規則的である。4・5・6はすべてIV群土器C類b1。

SZ04  
(7・8)

突帯文土器

7は完形に復元できた。突帯文土器で、器面調整は頸部が横方向の二枚貝条痕および胴部が削り、底部は凹底である。頸部の条痕調整後に貼付突帯をしたことから、条痕が一部ナデ消されたような状態になっている。突帯の刻目は二枚貝背面によるものと考えられる。頸部と胴部の境は、頸部側を横方向にナデることによって段をつけ明瞭にしている。凹底である底部は明瞭に出すために横方向にナデが見られる。外面では胴部最大径部分、内面ではそれ以下の部分で炭化物付着の痕跡が見られた。8は胴部上半まで復元できた。突帯文土器で、器面調整は頸部が横方向の二枚貝条痕、胴部が削りである。頸部と胴部との境は頸部側を横ナデによって段を明瞭につくり、胴部には輪積痕を残している。内面は横ナデにより調整している。外面胴部には全面に炭化物付着の痕跡が見られる。7・8はV群土器B類a2。

SZ06  
(9・10)

9は口縁部が内湾する器形で、口縁端部に肥厚が見られ、調整は粗い条痕である。口縁

単斜方向の  
粗い条痕

端部上面には指の腹により押し引いた押圧列が見られる。外面の条痕は単位の幅が多少変化している。内面はナデ調整である。口縁端部は条痕の後に横方向にナデて仕上げをしている。内面はナデと思われる。10は口縁部が内湾する器形で、口縁端部には肥厚がみられ、調整は単斜方向の粗い条痕である。外面の条痕は単位の幅が多少変化している。内面はナデ調整かと思われる。外面・内面両面の胴下半部には、炭化物付着の痕跡が見られた。9はIV群土器E'類b、10はIV群土器E類a1。

SZ07(11)

単斜方向の  
粗い条痕

11は全形を復元することができた。胴部2分の1の部分で緩やかに屈折し口縁に向かって直立気味になる器形で、口縁端部は肥厚し、底部は凸底、器面調整は外面の条痕は単斜方向に施された粗い条痕で、単位の幅自体が微妙に変化しある一定の深さを有する。内面にも同一の工具によると思われる条痕が、横もしくは斜方向に見られる。底部は円形をした凸底であり、使用の結果であろうか激しく摩滅している。口縁端部上面を中心に条痕調整後、横方向のナデにより仕上げをしている。内外両面には炭化物付着の痕跡が認められる。IV群土器C類c。

SZ08  
(12~14)

12は底部以外の復元ができた。口縁端部付近で若干外反する器形で、口縁端部は肥厚。器面調整は削痕と条痕である。削痕は、口縁端部上面から三分の一程度までは横方向に、それ以下は斜方向に行われている。一部残っている条痕は、削痕と同一の工具によるものと思われる。条痕の単位の幅に変化が見られる。内面は全面ナデにより調整され、一部輪積痕も見られる。13・14は胴部上半までしか復元できなかった。13は口縁内湾する器形で、口縁端部は肥厚、器面調整は条痕である。外面の条痕は単斜方向に施されており、原体の幅は微妙ではあるが一定してない。口縁端部は条痕調整後、横方向にナデにより仕上げられている。内面はナデにより調整されている。14は胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、器面調整は削痕である。削痕は斜方向につけられていて、外面には輪積痕を残している。一部炭化物付着の痕跡が見られる。12はIV群土器D類b、13はIV群土器E類a1、14はIV群土器C類b1。

SZ09(15)

15は底部以外がほぼ復元できた。口縁端部付近で若干外反する器形で、器面調整は削痕である。削痕は底部付近では縦方向に、口縁部に近づくにつれて斜そして横方向にみられる。内面はナデの痕跡が多く残されている。口縁端部は横方向にナデて仕上げをしている。外面・内面ともに炭化物付着の痕跡が見られる。IV群土器D類b。

SZ10  
(16・17)

SZ10の土器(16・17)

長胴の器形  
巻貝条痕

16は棺身に使用された土器で、全形を復元できた。口縁部から底部にかけてなだらかにつながる、長胴の器形で、口縁端部上面は明確に面取りされ、器面調整は巻貝条痕である。条痕は当たりが浅く、底部付近のみ縦および斜方向、それ以外は横方向である。外面には輪積痕を多く残している。底部は現存では粘土紐を高台状に貼付けている状況が観察され

るが、その中に詰めていた粘土が、はがれ落ちてしまった可能性も考えられる。条痕調整後、口縁端部は横にナデることによって仕上げをしている。内面はナデ調整である。内外両面には炭化物の付着が見られた。17は棺蓋に使用されてもので底部を除き復元することができた。口縁部から底部にかけてなだらかにつながる器形で、口縁端部は薄く鋭くなっており、調整は条痕で、横方向に付けられており当たりは弱い。外面には所々に輪積痕が残されている。また炭化物の付着痕も認められた。内面はナデ調整である。16はIV群土器C類e、17はIV群土器C類a。

SZ12(18) 18は底部を除きほぼ復元できた。口縁部から底部にかけてなだらかにつながる器形で、口縁端部上面には平坦面がつくられ、器面調整は削痕である。削痕は口縁部付近のみは横方向で、それ以外は斜方向である。外面には輪積痕が残されており、その付近では指による押えの痕も所々見られる。内面はナデにより調整されている。内外両面には炭化物付着の痕跡が認められた。IV群土器C類a。

SZ13  
(19～21)

19は底部以外は復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は上面が平坦、外面に若干飛び出ている。器面調整は条痕である。条痕は横方向を基本として、所々斜方向にも行われている。条痕の単位の幅は微妙に変化している。内面はナデ調整か。外面には炭化物の付着痕が認められる。20も底部以外の復元ができた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、器面調整は条痕で、横方向、幅は一定しており、当たりが弱い。口縁端部まで条痕が残されたままである。内面は横方向のナデ調整である。外面には炭化物の付着が見られる。21は口縁部から胴部上半部までの部分が復元できた。胴部上3分の1の部分で屈折し直立気味になりかつさらに屈折する器形で、口縁端部は指による押圧痕が見られ、調整は条痕である。条痕は斜方向を主とし、口縁端部では横方向になっている。内面は横方向のナデ調整である。外面には炭化物付着の痕跡が認められた。19はIV群土器C類b1、20はIV群土器C類c、21はIV群土器C'類b1。

SZ14(22) 22は完形に復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、底部は平底、調整が条痕で、条痕は横方向に付けられ、幅は一定であり、当たりは浅い。口縁端部まで条痕が残されたままである。口縁端部上面は若干丸みを残したままの面取りである。内面はナデ調整であったと思われる。内外両面には炭化物付着の痕跡が見られる。IV群土器C類b1。

SZ15  
(23・24)

ミガキ状の  
浅い条痕

23は全形が復元できた。口縁端部に若干外反気味になる器形で、底部は若干の凹底である。器面調整は一見、みがき状にも見える、幅が一定していないごく浅い条痕で、縦横方向に行われている。口縁端部外面は横方向にナデの痕跡が多く残されている。内面も口

縁端部付近は横に、それ以外は縦にナデが行われている。内外両面には炭化物の付着痕が認められた。24もほぼ復元できたものである。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、底部は平底、調整は削痕である。削痕は底部から胴下半部までは斜方向に、胴上半部から口縁までは横方向に見られる。内面の調整は底部付近は縦方向に、胴部は主に横方向にナデられている。外面には炭化物付着の痕跡が認められた。23はIV群土器D類b、24はIV群土器C類b1。

SZ16(25) 25は胴下半部から底部までの復元である。底部は平底、調整は条痕で横方向、単位の幅が一定しており、当たりが弱い。外面には輪積痕が所々見られた。内面の調整は不明であるが、ナデではないのかと考えられる。IV群土器C類b1の可能性が高い。

SZ17(26) 26は胴部のみの復元である。口縁部に向かって内湾する器形で、調整は条痕で、斜方向が中心であり、口縁部に近づくにつれ横方向になっていく。条痕は若干単位の幅が変化している。内面はナデ調整か。外面には炭化物付着の痕跡が認められる。IV群土器E類a1。

SZ18  
(27～30) 27は底部を除いて器形が復元できた。口縁に向かって内湾する器形で、調整が条痕と底部付近が削痕である。条痕は斜方向を主とし、幅は一定である。削痕と条痕は同一の工具で調整されたのと思われる。口縁端部を横ナデによって仕上げをしている。外面には炭化物付着の痕跡が見られた。内面はナデ調整か。28は口縁から胴上半部までが復元できた。外反する器形で胴部最大径が口径より小さくなる。調整は条痕で、基本的に斜方向が主である。内面は削痕が認められ、輪積痕も若干見られる。29は胴部のみの復元である。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、条痕の単位の幅は若干変化がある。内面はナデ調整か。外面には炭化物付着の痕跡が認められる。30は口縁部破片で、口径の復元もできなかったものである。内湾する器形、調整は単斜方向の粗い条痕である。内面はナデ調整か。27はIV群土器E類、28はIV群土器D類c、29はIV群土器C類b1、30はIV群土器E類a1。

SZ22(31) 31は全形が復元できたものである。口縁部から底部にかけて緩やかにつながる器形で、底部は平底、調整はナデおよび削痕である。外・内の両面には輪積痕が残されている。外面のナデ・削痕は縦位および斜位である。内面は主に横方向にナデられている。口縁端部上面は面取りされ、平坦になっている。また、炭化物の付着痕も内外両面に見られる。IV群土器C類a。

SZ23  
(32・33) 32は底部以外の復元ができた。口縁に向かって内湾する器形で、調整は条痕で、斜方向を主とし、口縁端部付近のみ横位で仕上げをしている。二枚貝条痕かと思われる。内面は、口縁端部付近ではナデで、特に口縁端部では横ナデである。外面には炭化物の付着が認め

られる。33は口縁から胴部上半までが復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、調整は条痕で、横方向が主である。二枚貝条痕か。口縁端部の仕上げは上端を中心に行われたため、外面の条痕は口縁端部まで残っている。内面はナデ調整である。外面には炭化物の付着が確認できる。32はIV群土器E類b、33はIV群土器C類b1。

SZ24(34) 34は全形が復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は指による外側からの押圧列、底部は平底、調整は繊維束による条痕と考えられ、  
繊維束による条痕 条痕の方向は底部より四分の三までは斜位、上部四分の一は横位である。底部から胴部に立ち上がる部分では、指ナデの痕跡が残されている。内面はナデ調整で、一部輪積痕が残っている。外面には炭化物付着の痕跡が認められた。IV群土器C'類b1。

SZ26 (35～37) 35は全形が復元できた。胴部上3分の1の部分で屈折し若干内湾気味に直立する器形で、口縁端部は指による内側からの押圧列、底部は平底、調整は条痕である。条痕は細密で、幅が一定になっている。斜位および横位を主としているが、多くの土器では左上がりの斜位であるのに対して、35のみは右上がりの斜位の条痕である。底部にはあまり見られず胴部下半から条痕が見られることから、ここから上部に向かって行われたようである。口縁端部外面は条痕調整後、横ナデによって仕上げられており、条痕が消えているのが特徴的である。内面は上部四分の一は横位、それ以下では斜位および縦位にナデ調整が施され、若干輪積痕が残る。内外両面には炭化物の付着痕が認められた。36は口縁から胴部上半まで復元できた。口縁から底部になだらかにつながる器形で、口縁端部は尖り気味、調整は細密な条痕である。条痕は横位を主とし、幅は一定している。内面は口縁端部付近では横位に、それ以外では斜方向を主にナデ調整が施されている。外面には炭化物の付着が認められる。37は口縁部から胴部下半までを復元することができた。口縁部付近で屈折し直立する器形で、鉢になると考えられる。調整は細密な条痕である。条痕は横方向が主である。口縁端部は横ナデにより仕上げをしており、外面の条痕はわずかにナデ消えている。口縁端部上面の沈線状の浅い凹みはその仕上げの時に付いたものであろう。内面は横位・斜位にナデ調整が行われている。35はIV群土器C'類b2、36はIV群土器C類a、37はIV群土器C類b1。

SZ27 (38～41) 38は全形が復元できた。胴部上3分の1の部分で屈折し、口縁部に向かって直立する器形で、口縁端部は外側からの指による押圧列、底部は平底、調整は細密な条痕である。条痕は幅が一定したものであり、横方向が主である。外面には炭化物付着の痕跡が認められる。内面はナデ調整であると思われる。39は口縁部から胴部下半まで復元することができた。口縁部から底部になだらかに続く鉢で、口縁端部は外側からの指による押圧列、調整は細密な条痕である。条痕はほぼ斜方向が主であるが、口縁端部付近のみ横方向となっている。内面はナデ調整か。また炭化物付着の痕跡も観察できた。40は口縁部から胴部下半まで復元で

きた。胴部上3分の1の部分で屈折し口縁部に向かって直立する器形で、口縁端部は間隔が不規則であるものの外側から指による押圧列、調整は細密な条痕である。条痕は横方向を主としており、幅は一定である。器面の外・内両面には輪積痕が残されていた。内面はナデ調整と思われる。41は口縁部から胴部上半まで復元できた。口縁部から底部になだらかに続く器形で、口縁端部は外側からの指による押圧列、調整は細密な条痕である。条痕は横方向が主であり、幅は一定である。内面はナデ調整と思われる。38・39・40はIV群土器C'類b1、41はIV群土器C'類a。

SZ28(42)  
長胴の器形  
巻貝条痕

42は全形が復元できた。口縁部から底部にかけてなだらかにつながる長胴の器形で、底部は平底、器面調整は巻貝条痕である。条痕は横方向を主としている。器面の外・内両面に輪積痕が残っているが、特に外面が顕著である。内面はナデ調整だと思われ、一部底部で縦方向のナデ痕が見られる。また外内両面には炭化物付着の痕跡が認められた。底部には外面からの凹みがある。IV群土器C類e。

SZ29  
(43・44)  
単斜方向の  
粗い条痕

43は全形が復元できた。口縁部に向かって内湾する器形で、底部は平底、器面調整は単斜方向の原体には粗さが見られる条痕である。口縁端部は横ナデによって仕上げをしており、端部上面には筋状の痕が残る。内面の調整はナデであり、口縁端部内面には輪積痕が認められる。内外両面には炭化物付着の痕跡が見られる。44は口縁部から胴部下半まで復元できた。無突帯刻目土器で、調整は頸部が横方向の二枚貝条痕、胴部は斜方向から横方向の削りである。外反する口縁端部内面には半截竹管による刺突列文が見られる。内面はナデ調整であるが、頸部付近はミガキ状で緻密である。外面の最大径部分には炭化物付着の痕跡が見られる。43はIV群土器E類a1、44はV群土器A類b。

SZ30(45)

45は胴部下半が欠損しているものの、ほぼ全形の復元が想定できる。口縁部にかけて外反する器形で、口縁端部は棒状工具を横にしたことによる押圧列、底部は若干の凹底、器面調整は二枚貝条痕である。条痕は胴部上半は横方向を主とするものの、下半は斜方向の可能性が高い。内面には輪積痕が若干残されており、ナデ調整である。IV群土器D'類c。

SZ31(46)

46は胴部上半から底部まで復元できた。胴部上3分の1の部分で屈折し、口縁部に向かってやや内湾気味に直立する器形で、底部は若干の凹底、調整は二枚貝条痕である。条痕は横方向を主とし、幅は一定である。内面はナデ調整と思われる。特に底部内面には縦方向のナデ痕が多く残されている。外面には炭化物付着の痕跡が見られる。IV群土器C類b1。

SZ32(47)

47は全形を復元することができた。口縁部付近で若干外反する器形で、口縁端部は肥厚、底部は平底、調整はナデおよび削りであり、口縁端部付近では特に横方向のナデ痕が多く

- 見られた。器面内面もナデ調整であると思われ、胴部下半では縦方向に、口縁端部では横方向に行われている。また一部には輪積痕も見られる。内・外両面には赤色顔料(ベンガラ)の痕跡が残されており、塗布されたものと考えられる。胎土の中に粒状の粘土塊が多く含まれていることも特徴的である。内面底部付近には炭化物付着の痕跡が確認できた。Ⅳ群土器D類b。
- 赤色顔料**
- SZ33(48)** 48は胴部上半部が欠損し、胴部下半と底部とが直接接合できなかったが、ほぼ全形を想定できた。胴部上3分の1の部分で屈折し、口縁部に向かって立ち上がる器形で、口縁端部は外側が肥厚し、肥厚した部分には半截竹管による押引の短沈線が二条見られる。器面の調整は外面が巻貝条痕、内面がナデである。底部は平匠、大形で安定感がある。底部の底面には、原体不明の底部圧痕がみられる。Ⅲ群土器C類b。
- 有文土器**
- SZ34(50)** 50は全形を復元することができた有文土器である。口縁部で外反するものの胴部最大径と口径がほぼ同じになる器形で、底部は若干の凹底である。外面はLRを地文とし、全面に施されたものと思われる。施文後、ナデがかかった部分があり、地文が若干薄くなっているようである。口縁端部上端から幅5cm程度にわたり横に展開する文様が施されている。この部分のみ縦方向でミガキをかけ地文を磨り消した後、横方向に平行する隆帯2条と、縦方向に隆帯5条を貼付けている。隆帯は工具により刺突が加えられて、縦の隆帯の頂部は指による押えがなされている。刺突の工具は巻貝の殻頂部の可能性もある。縦横の隆帯で区画された部分にはヘラ状工具による横長の楕円文や曲線が引かれ、中に同状の工具による刺突列文がつけられている。底部には網代痕が残されている。内面は全面ナデ調整である。内外両面には炭化物付着の痕跡が見られる。Ⅲ群土器C類g。
- 全面に地文**
- 隆帯の貼付け**
- SZ35 (51～53)** 51は全形を復元することができた。無突帯刻目土器で、口縁端部は横ナデによる仕上げの上に半截竹管と思われる工具による刺突列文が施される。底部は凸底、調整は口縁端部から頸部が二枚貝条痕、胴部が斜方向の削りである。内面はナデ調整であり、口縁端部は横方向、底部内面は縦方向にナデ痕が認められる。内外両面には炭化物付着の痕跡が認められる。52は口縁から胴部上半までが復元できた。内湾する器形で、口縁端部は肥厚、調整は単斜方向の粗い条痕である。条痕は原体一本一本の太さが異なっている。口縁端部は横ナデによって仕上げをしている。内面はナデ調整である。内外両面には炭化物付着の痕跡が残っていた。53は口縁から胴部上半までが復元できた。内湾する器形で、調整は斜方向の削りである。口縁端部はナデによって仕上げがなされており、端部上面には沈線状の浅い凹みが見られる。外・内両面には輪積痕が多く見られるが、特に外面が顕著に見られる。内面は縦横方向のナデ調整である。51はⅤ群土器A類a、52はⅣ群土器E類a1、53Ⅳ群土器E類c。
- 単斜方向の粗い条痕**
- SZ36 (54～56)** 54は口縁から胴部下半までを復元することができた。内湾する器形で、口縁端部は肥厚、

単斜方向の  
粗い条痕

調整は単斜方向の粗い条痕である。口縁端部は条痕調整後横ナデにより仕上げがなされているのが特徴的である。内面は削痕が見られるが単位は不明である。外面には炭化物の付着痕が確認できる。55は口縁から胴部上半までの復元である。内湾する器形で、口縁端部は肥厚、調整は単斜方向の粗い条痕である。口縁端部の仕上げは横ナデである。内面も横ナデである。56は胴部下半のみで、径の復元もできなかった。外面は削り、内面はナデである。54はIV群土器E類a2、55はIV群土器E類a1。

SZ37  
(57・58)

57は底部以外ほぼ復元できた。無突帯刻目土器で、口縁端部には内側から半截竹管による刺突列、調整は口縁から頸部は横方向の二枚貝条痕、胴部は斜方向の削りである。内面の調整はナデで、若干輪積痕も認められる。58は口縁から胴部上半までの復元である。無突帯刻目土器で、口縁端部には外側からの指による押圧列が見られ、調整は口縁部から頸部が横方向の二枚貝条痕、胴部が削りである。内面は横方向のナデ調整である。外面には炭化物付着の痕跡が確認できた。57・58ともにV群土器A類a。

SZ38(59)

59は全形が復元できた。内湾する器形で、口縁端部は肥厚、底部は平底、調整は二枚貝条痕である。条痕は胴部が縦方向、口縁端部付近は斜方向である。口縁端部は横ナデによって仕上げをしている。内面はナデ調整である。底部は使用時のすり減りがかなり見られる。内外両面には炭化物付着の痕跡が認められる。IV群土器E類a2。

SZ39(60)

60は底部を除き復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部には肥厚が見られる。外面はナデ調整のあと、単斜方向の条痕が施されている。内面はナデ調整で、横ナデを中心とし底部内面は縦方向にナデられている。内外両面に炭化物付着の痕跡が見られる。IV群土器C類c。

SZ40  
(61・62)

61は底部を除き復元できた。胴部上3分の1の部分で明確に屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は鋭く尖り、調整は条痕である。条痕は斜方向を主としており、口縁端部外面のみ横方向で仕上げをしている。内面はナデ調整であり、主として横方向である。輪積痕が残っている部分がわずかに見られる。外面には炭化物付着の痕跡が認められた。62は全形を復元できた。胴部上3分の1の部分で明確に屈折し内湾気味になる器形で、底部は若干の凹底、調整は条痕である。条痕の方向は胴部下半を中心に斜方向で、胴部上半は横方向が主である。口縁端部は条痕調整のあと横ナデによって仕上げをしており、外面では条痕がナデ消えている。内面はナデ調整である。内外両面で炭化物付着の痕跡が確認できた。61はIV群土器C類b1、62はIV群土器E類a2。

SZ41(63)

63は完形に復元ができた。口縁から底部にかけてなだらかにつながる器形で、底部は平底、調整は幅の変化する条痕である。全面に条痕調整を施した後、ナデにより条痕を消し、

有文土器 横に棒状工具による一条の沈線を引いた後に棒状工具により4列の刺突列文が施されている。口縁端部には若干の肥厚が見られるものの、横方向の沈線により肥厚と同一効果を出していると考えられる。この部分の反対側になる口縁端部の内面は若干の反りが見られ、外見上の肥厚の効果をさらに出している。胴部の条痕についてもナデにより消えてしまっている部分が見られる。底部は大きめで、器面に対して底面が突出しており、安定感がある。内面はナデ調整と思われ、輪積痕が多く残存している。内外両面で炭化物付着痕が確認できた。Ⅲ群土器C類h。

SZ42  
(64・65)

64・65ともに完形に復元できた。64は胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は鋭く尖る。底部は凸底であったと考えられるが、使用のためかかなりの摩耗が見られる。調整は繊維束によると考えられる細密な条痕である。条痕は縦および斜方向が主であり、口縁端部付近のみ横方向である。条痕調整後、二枚貝背面によって刻目づけられた突帯が一条貼付けられている。突帯直下には補修孔が見られる。内面調整はヘラナデである。内外両面には炭化物付着の痕跡が見られた。65は胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、底部は凹底、調整は削痕である。削痕は単位の認識できる部分と不明瞭な部分とがあるものの、胴部は斜方向に、口縁部に近づくとも横方向に付けられている。内面は横および斜方向のナデである。外面には炭化物の付着が認められた。64はV群土器B類b、65はIV群土器C類b1。

突帯文土器

SZ43(66)

66は胴部上半から下半までの復元ができた。胴部上2分の1の部分で屈折し直立気味になる器形で、調整は胴部上半が条痕、下半が削りである。条痕も削痕も横方向が主体である。内面はナデと思われ、輪積痕が残されている。器壁の厚さが9mm前後あり厚手である。IV群土器C類b1。

SZ44(67)

67は口縁部から胴部下半まで復元できた。口縁から底部へなだらかにつながる器形で、調整は二枚貝条痕である。条痕は横方向を主としている。口縁端部の粘土を引き上げることによって6単位の小波状を形成しており、波頂部には口縁とは垂直方向でヘラ状工具による刺突列が5つ付けられている。波状部から波状部にかけて、太い棒状工具による2本1単位の弧状沈線(上放弧文)が付けられている。外面には輪積痕が多く残されている。内面はナデ調整である。Ⅲ群土器C類c。

弧状沈線

SZ46  
(68・69)

68は全形が復元できた。内湾する器形で、底部は平底、調整は二枚貝条痕である。条痕は横および斜方向を主としている。内面はナデ調整であると思われる。69は口縁部から胴部下半までの破片であるが、径の復元ができなかったものである。胴部上3分の1の部分で屈折し直立気味になる器形、調整は横方向の細密な条痕である。内面はナデ調整か。内外両面には炭化物の付着が認められた。68はIV群土器E類a2、69はIV群土器C類b1。

SZ47  
(70～72)

70は口縁部から胴部下半までが復元できた。口縁から底部にかけてなだらかにつながる器形で、調整は条痕である。条痕は胴部下半は斜方向が主であり、胴部上半以上は横方向を主としている。内面はナデ調整である。内外両面には炭化物付着の痕跡が見られた。71は口縁から胴部上半まで復元できた。調整は条痕である。条痕は胴部上半では斜方向、口縁部付近では横方向に付けられる。内面の調整はナデであると思われる。輪積痕も一部に見られる。72は口縁部片である。調整は横方向の細密な条痕である。内面はナデ調整と思われる。70はIV群土器C類a。

SZ49  
(73・74)

73は完形に復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は肥厚し、底部は若干の凹底、調整が細密な条痕である。条痕は斜方向を主としており、口縁部付近のみ横方向である。内面はナデ調整である。内外両面には炭化物付着痕が認められる。74は口縁部から胴部上半にかけてが復元できた。胴部上3分の1の部分で緩やかに屈折し直立気味になる器形と思われ、口縁端部は肥厚、調整が条痕である。条痕は斜方向が主である。口縁端部は横ナデにより仕上げをしており、外面の条痕がナデ消えている。この部分には輪積痕も見られる。内面はナデ調整である。73はIV群土器C類b1、74はIV群土器C類b3。

SZ50(75)

75は胴部下半から底部までが復元できた。底部は平底、調整は残存している上半部が二枚貝条痕、下半部が削りである。条痕は斜方向に、削りは横・斜方向である。内面はナデ調整が中心である。外面には炭化物の付着が確認できた。

SZ53(76)

76は完形に復元できた。外反する器形で胴部最大径が口径よりも大きい器形で、口縁端部上面には外側からの指による押圧列がみられ、底部は平底、調整は頸部がナデ、胴部が横方向の細密な条痕である。条痕調整の後、頸部のナデが行われたようで、条痕が一部ナデによって消えている。頸部と胴部の付近に輪積痕が見られる。内面はナデ調整か。外面には炭化物付着痕が認められる。器壁の厚さは他の個体に比べて若干厚手である。IV群土器D類d。

SZ54(77)

77は完形に復元できた。口縁から底部にかけてなだらかにつながる器形で、底部は平底、調整は斜方向の削りである。口縁端部は外内両面をナデにより仕上げをしており、口縁端部が先細りになっている。内面はナデ調整である。内面には輪積痕も部分的に残されている。外面には炭化物付着の痕跡が確認できた。IV群土器C類a。

SZ55  
(78～81)

78は完形に復元できた。無突帯刻目土器で、底部は若干の凹底、調整は頸部が横方向の二枚貝条痕、胴部が削痕である。口縁端部は外反し、内面には二枚貝背面による刺突列文が付けられている。外内両面には輪積痕が残されている。内面は横および斜方向にナデ調

整である。内外両面に炭化物付着の痕跡が確認できた。79は口縁から胴部上半まで復元できた。内湾する器形で、調整は横および斜方向の削りである。内面は横方向に板状工具によるナデ調整である。80は胴部上半から下半まで復元できた。調整は削りである。内面は縦および横のナデ調整である。内外両面には炭化物の付着が確認できた。81は口縁部のみの復元である。内湾する器形で、口縁端部は肥厚し、調整は単斜方向の粗い条痕である。内面は横方向が主のナデ調整である。78はV群土器A類b、79はIV群土器E類c、81はIV群土器E類a。

**SZ56(82)** 82は口縁部から胴部上半までの復元である。口縁から底部につながる器形で、調整は条痕である。条痕は残存部の下半では斜方向に、その上半では横方向に施されている。内面はナデ調整であると思われる。口縁部付近には補修孔が見られる。83は完形に復元できた。突帯文土器で、底部は平底、調整は頸部が横方向の二枚貝条痕、胴部がナデもしくはミガキである。口縁端部外面には棒状工具による刻目がつけられた突帯が貼付られている。内面は縦方向にナデの痕跡が認められた。82はIV群土器C類a、83はV群土器B類a2。

#### (C)遺構内埋設土器および遺構埋土内土器

遺構に伴い意識的に埋設された「遺構内埋設土器」と遺構内に入り込んだ「遺構埋土内土器」の両方をここで報告する。

**SK592(84)** 84は口縁から胴部上半まで復元できた。胴部上3分の1の部分で屈折し直立気味になる器形で、口縁端部は鋭く尖り、調整は細密な条痕である。条痕は横方向に付けられている。内面は横方向のナデ調整である。外面には一部条痕が炭化物の付着痕が確認できた。IV群土器C類b1。

**SK804・805(85)** 85は口縁から胴部下半まで復元できた。口縁から底部にかけてゆるやかにつながる器形で、調整は削痕である。削痕は斜および縦方向である。口縁端部は横ナデにより最終的な仕上げをしている。外内両面には輪積痕が見られる。内面は横ナデである。内面には炭化物の付着が見られた。IV群土器D類b。

**SK812(86)** 86は口縁から胴部下半まで復元できた。胴部上半で屈折し口縁部で直立する深鉢形土器杯状の突起で、4単位の波状を持つ。波頂部は杯状の凹みを有し、それが口縁内部側に内向している。指によるナデの痕跡が残されている。波頂部から口縁端部に平行と垂直方向に、さらに屈曲部分に2本1単位の沈線が引かれている。横走る沈線は2本が閉じて、横長のレンズ状になっている。波頂部付近にはさらに小さいレンズ状の沈線区画が付けられている。胴部にはミガキの痕跡が多く残されていた。縦方向に磨かれた上に、屈曲部分は横方向に入念に横ナ

デが施されている。器面は黒色を呈し、胎土は緻密である。Ⅲ群土器B類。後期末に属するものか。

SK794(87) 87は口縁部から胴部下半まで復元できた。6単位の小波状を呈する器形で、頸部で若干くの字に屈曲する器形である。口縁内面は調整時の横ナデにより、幅広の凹線状の凹みが形成されている。口縁部には、半截竹管内に刺突列が施された弧状沈線が、上下一対に展開する。器面調整は内外両面ともにナデが施され、特に外面にはナデの痕跡が明瞭に観察される。Ⅲ群土器B類f。

SK356(88) 口縁部から胴部上半まで復元できた。口縁部は4単位の小波状を呈する外反する器形である。口縁端部上面は面取りの後、半截竹管による刺突列が施されている。頸部には横方向の条痕bが、胴部には横方向の削り調整が施されている。胴部と頸部の境は、頸部側に横方向のナデ調整により段差をつけ区別されており、その結果条痕がナデによって消えている。胴部外面には、所々に輪積痕が残されている。内面調整も削痕がみられ、器壁は薄手に作られている。胎土はきめ細かい。Ⅳ群土器D'類c。

SK577  
(89～96) 89は波状を呈する有文土器で、条痕を調整とし、口縁に沿って半截竹管による押引文が一条みられる。Ⅲ群土器C類f。90は深鉢胴部で、縦方向にLRがみられる。Ⅲ群土器C類g。91は小波状を呈し、半截竹管の弧状沈線が2条1対で展開する。93・96は浅鉢と思われる。

地文を有する土器

97は粗製深鉢の胴部で、外面は斜方向の二枚貝条痕、内面はナデもしくは削りである。胴部下半には炭化物付着の痕跡が見られる。Ⅳ群土器C類a。98は有文深鉢土器の口縁部で、半截竹管による2条の沈線が施されている。102・103・105は浅鉢と思われる。

SK579(106) 106は口縁端部上面に指による押圧が施されている粗製深鉢土器である。器面調整は外面に細密な横方向の条痕がみられる。胴部下半には内外両面に炭化物の付着痕がみられる。Ⅳ群土器C'類b1。

SK580(107) 107は波状を呈する浅鉢である。口縁端部上面は面取りがなされており、波頂部には外からの指による押圧痕が見られる。器面調整は内外面ともに丁寧なミガキが施されている。

SK887(108) 108は口縁部から胴部下半まで復元できた粗製深鉢土器。器面調整は内外面とも削りと考えられる。胴部下半では炭化物の付着痕がみられる。Ⅳ群土器C類b1。

SK581  
(109～114)

すべて粗製深鉢の胴部片で、条痕調整である。109～113は二枚貝条痕か。114は器面外

面に炭化物の付着痕が見られる。

SK583  
(115・116)

115は有文深鉢口縁部片で、半截竹管による沈線が1条見られる。116は深鉢底部で、平底で、底部部分が筒状に立ち上がるものである。

SK584  
(117・118)

117は有文土器片で、半截竹管による沈線が1条横走する。118は粗製深鉢土器胴部片で、器面調整は斜方向の二枚貝条痕である。

SK582  
(119～131)

119・121・125・127は有文深鉢片である。119は半截竹管による弧状沈線が2条見られる。上方弧文になるものか。121は肥厚した口縁部に半截竹管による押引文が施され、口縁端部には、半截竹管を横にすることによる刺突が見られる。Ⅲ群土器C類a5。125は口縁部で外反する器形であり、頸部には指による押圧列文が見られる。Ⅲ群土器C類f。127は器面調整が内外面とも巻貝条痕で、外面には櫛描波状文が見られる。123は小波状を呈する深鉢形土器で、口縁端部内面には指の押圧痕が見られる。124は波状を呈する深鉢形土器で、波頂部には4または5つのヘラ状工具による刺突列が付く。Ⅲ群土器C類h。128は口縁端部上端に指による押圧が施される粗製深鉢土器である。器面調整は外面が条痕で、胴部は縦および斜方向、口縁端部のみ横方向に施されている。Ⅳ群土器C類b1。120は内外両面ともナデ調整で文様は見られないものの、口縁端部のみ肥厚が見られる。130は口縁が内湾する、碗状の浅鉢である。

SK589  
(132～141)

132は小波状を呈する有文深鉢土器で、口縁部で外反をする。口縁部は若干肥厚し、半截竹管による背反弧文の中に、同工具による短沈線が充填されている。器面調整は外面が条痕で横方向に施され、内面はナデと思われる。Ⅲ群土器C類b。140は中部高地系の晩期隆帯文土器の一種と考えられる。口縁部にはヘラ状工具による刻目を持つ貼付隆帯があり、その上方は幅広の半截竹管による沈線が施されている。Ⅵ群土器B類b1。141は口縁端部上面を半截竹管による刺突を施している。134は口縁端部上面を面取りし、棒状工具により刺突列が加えられている。136は素文突帯をもつ突帯文土器と思われる。Ⅴ群土器B類a6。

SK590  
(142・143)

142は粗製深鉢口縁部である。143は深鉢底部で、筒状に立ち上がるものである。

SK588  
(144～169)

158は器面調整が外面は巻貝条痕、内面はナデである。外面には、指によりナデ広げられた凹線が1条施されている。144～154は有文深鉢土器である。144は「くの字屈曲」を呈し、半截竹管の沈線が3条施されている。上下の2条は平行しており、中心の1条が弧状を呈するか。Ⅲ群土器B類j。145も「くの字屈曲」で波状を呈する。屈曲部上半は左上がりの斜方向の半截竹管による沈線で充填されている。波頂部には指による押圧が見られる。Ⅲ群土器B類b。146は波状を呈する。擬縄文を地文とし、口縁方向に沿って2本1単位の巻

貝凹線が上方弧線を形成する。下段にはさらに2本1単位の巻貝凹線があり、背反弧線を形成する可能性が高い。Ⅲ群土器B類g 1。147は半截竹管文が1条見られる。148は半截竹管により、上段が短沈線、下段が楕円文という文様構成である。149は口縁部が肥厚し、現存部分では半截竹管による刺突列が2段みられ、その中には巻貝の殻頂部分による刺突列が施されている。150～152は同一個体であると考えられる。口縁部は肥厚されており、棒状工具による2本の沈線間に、平行して同工具による刺突列文が施されるのを基本とする。150は口縁端部上面が広く面取りされている。最下段の沈線が途切れている部分があり、そこに指による押引の押圧が加えられた貼付が見られる。151は上端の沈線が口縁端部に接している。152は最下段の沈線が、刺突列文になっている。153は小波状を呈し、間隔が広めの細い2本の平行沈線が見られる。Ⅲ群土器C類a 1。154は口縁部に肥厚が見られ、棒状工具による刺突列が施されている。155・161・165は口縁端部上面に指による押圧が施されているものである。155は器面調整は外面が細密な横方向の条痕、内面がナデである。胴部下半には炭化物の付着痕が見られる。Ⅳ群土器C類b 1。165は内湾する器形で、外面には削痕が見られる。156・166は文様は見られないものの、口縁部は肥厚している。168は外面ミガキ調整で壺形を呈する。

SK885(173) 173は有文深鉢口縁部で、口縁部には横方向にLRの縄文が帯状に施文されている。口縁端部上面は面取りがみられる。

SK884・886 (170～172・174・175) すべて無文の粗製深鉢口縁部片である。175の外面が丁寧に磨かれている以外は、ナデで調整がなされている。

SK894 (176～198) 195は精製浅鉢で、外面には縄文を伴う連鎖状三叉文が見られる。主文様は太い棒状沈線で描かれ、渦巻文および横に延びてつながるレンズ状の区画内にLRが充填されている。それらの周囲には三叉文が陰刻されている。口縁端部上面は面取りされており、内面は丁寧に磨かれている。176～183・185・188・191・193は有文深鉢土器である。176は「くの字屈曲」を呈し、屈曲部上部にはLRの縄文が施されている。内面はナデで屈曲部は若干の凹みが見られる。Ⅲ群土器B類i。177は口縁端部と半截竹管によって区画された中にLRが施されている。178・181は半截竹管による2本1単位の上方弧線が見られる。179は細い棒状工具により長軸方向に1条付加された横長の楕円区画が、2段見られる。180は丸みを持つ「くの字屈曲」を呈するもので、半截竹管により長楕円文が2段見られる。Ⅲ群土器B類c。182は半截竹管による沈線を2本1単位とし、上方弧線および横線を形成する。横線には、巻貝の殻頂部による刺突が見られる。Ⅲ群土器B類i。183は小波状口縁部で、波頂部には半截竹管を横にし沈線状の刻目が3つ見られる。口縁部は肥厚しており、外面には半截竹管による押引文が3条見られ、最上段が上方弧線を中・下段が平行沈線を呈する。Ⅲ群土器C類i。185・188は口縁部を肥厚させ、半截竹管による刺突列文が見られる。

ものである。185は口縁端部上面が面取りされ、胴部外面の調整は横方向の条痕である。Ⅲ群土器C類 a 5。188は口縁部下方を中心に肥厚させているため、断面形状が若干三角形を呈する。口縁端部上面は丸く成形している。Ⅲ群土器C類 a 5。187は小波状を呈し、口縁端部上面のみに施文部分が集約され、棒状工具による沈線が1条施されている。器面外面には輪積痕が残されている。Ⅲ群土器C類 d。191は細い沈線が現存で3条見られるものである。193は半截竹管による波状文および端部上面には半截竹管による沈線状の刻目が見られる。194は口縁端部上面に指による押圧痕をもつ粗製深鉢である。器面外面には横方向に条痕が施され、内面はナデ調整である。Ⅳ群土器C'類 b 1。

SK891  
(199～210)

199は「くの字屈曲」を呈し、かつ屈曲部を肥厚させたために、断面三角形を呈するものである。文様は半截竹管による3条の沈線が観察できる。Ⅲ群土器B類 k 4。200は口縁端部の若干下に隆帯状の貼付けをする。その隆帯の上場と下場とを結んで、細い棒状工具による長楕円文が施されている。Ⅲ群土器C類 c。201は縦・横に隆帯を貼付けた区画の中に、沈線による楕円文が施されている。縦の隆帯には工具による棒状工具による刻目がつけられている。50と同様のものと考えられる。Ⅲ群土器C類 g。202は太い沈線区画内に磨消縄文LRが施されている。203は棒状工具による刺突列文が1条見られる。口縁部の肥厚は見られず、文様は口縁端部付近だけに集約されている。205は口縁端部上面に沈線が1条つけられている。器面調整は外面が横方向の条痕、内面がナデである。204は口縁端部上面に指による押圧痕が見られるものである。外面には巻貝条痕が横方向に見られる。Ⅳ群土器D'類。206・210は口縁端部上面に工具による刺突列が見られるもので、206は半截竹管、210は棒状工具であると思われる。206はⅤ群土器A類 a、210はⅣ群土器C'類 b 1。

SK655  
(212・213)

212は現存で文様が3段で構成されている。半截竹管による弧状沈線であり、上1段と下2段の組み合わせで背反弧文を形成している。213は内外両面がミガキで調整され、口縁端部の若干下方には隆帯の貼付けが見られる。中部高地系の晩期隆帯文土器の一群と考えられる。

SK896(211)

211は小波状を呈する粗製深鉢で、波頂部は深く刻目が入り山形突起状になっている。器面調整は外面が巻貝条痕、内面がナデである。Ⅲ群土器C類 h。

SK890(216)

216は半截竹管による弧状沈線が確認される。上放弧線と思われる。

SK1079(217)

217は巻貝による凹線の見られるもので、弧状沈線を形成するものと思われる。赤色顔料の痕跡が認められる。

SX01  
(218～230)

218はLRを地文とし、半截竹管による沈線が2条見られる。219は口縁部が肥厚してお

隆帯文土器

り、半截竹管による刺突列文が2条見られる。Ⅲ群土器C類a 5。220も口縁部に若干の肥厚が見られ、巻貝の殻頂部による刺突列文が施されている。221は口縁端部にのみ肥厚が見られ、波状を呈する口縁に沿って、そのごく狭い部分に半截竹管による2本の平行沈線が施され弧状沈線を形成する。Ⅲ群土器C類d。223は大波状口縁深鉢の波頂部の一部と考えられる。上面は平坦面を形成し、そこから絞るような形で細身の筒状の部分が下方につながる。器面には指ナデのあとが多く見られる。224は中部高地系の隆帯文土器の一群と考えられる。波状を呈し、断面形態はくの字屈曲をしている。屈曲部外面に横1条の棒状工具による刻目を持つ貼付け隆帯がみられ、口縁波頂部からも縦方向にも指による押圧がなされている貼付け隆帯が1条垂下している。縦横の隆帯に囲まれた部分は指による凹線状の凹みが2条見られる。Ⅵ群土器B類b 1。228は浅鉢と考えられる。三叉状の彫去が見られ、ヘラ状工具による刻目をもつ幅狭い帯状部とLRの見られる幅広い帯状部が、対向して配されている。222・226は器面調整に巻貝条痕が見られるものである。225も巻貝条痕の可能性がある。口縁端部付近のみ肥厚しているもので、波状を呈する。

SK485  
(231～239)

231・233・235・236はいわゆる素文突帯を有するものである。Ⅴ群土器B a 6。口縁端部内面には、指ナデによる1条の凹線状の凹みが見られる。231・233は口縁端部の尖りが鋭くなっている。232はヘラ状工具による刻目突帯を有するもの。器面調整は外面が削り内面がナデで、外面には輪積痕を残す。Ⅴ群土器B b。234・237・239は粗い条痕で単斜方向に調整が加えられている。

SK574  
(240～254)

突帯文土器

242は細い棒状工具による幅広い平行沈線が見られる。241は半截竹管による弧状沈線が見られ、真ん中の1条を挟んで上下が背反弧文を形成する。243は断面三角形の肥厚を呈し、指による押圧痕列が見られる。Ⅲ群土器C類b。244・245は同一個体と考えられる。口縁部は肥厚し、波状を呈する。ヘラ状工具による2条の平行沈線内に巻貝の殻頂部による刺突列文が見られる。Ⅲ群土器C類a 1。246は器面を巻貝条痕で横方向に調整したあと、巻貝凹線を3条引かれたものである。251は2本の平行沈線内に刺突列が見られるのが2条平行している。いわゆる櫃原文様をもつ浅鉢と考えられる。252は玉抱き三叉の見られる浅鉢である。三叉の彫去は沈線につながっており、他の沈線と区画を形成しLRの磨消縄文が施されてる。内面は丁寧なミガキ調整である。240・253は単斜方向の粗い条痕で調整がなされている深鉢である。Ⅳ群土器C類b 1。247は二枚貝の腹縁による刻目をもつ突帯文土器で、条痕bにより調整の後、貼付けられている。口縁端部上面にも同工具によると思われる刺突列文が見られる。Ⅴ群土器B a 4。

SK946(255)

255は胴部下半および底部が欠損しているものの、全形を伺い知ることができた。波状を呈する浅鉢と考えられ、波状は4単位と思われる。文様帯が口縁部のみに集約され、口縁端部外面に横・縦に隆帯を貼付け区画をつくり、その中を筋が付くように磨いている。波

中部高地よ  
りの搬入品

頂部分には棒状工具により押圧が施された粘土の貼付が見られる。内外面は非常に丁寧に磨かれており、胎土も緻密である。後期後葉中ノ沢Ⅱ式に属するもので、搬入品と考えられる。Ⅵ群土器B類b1。

SK512  
(256～260)

259は二枚貝腹縁での押引により文様が施されてる。口縁部の肥厚はみられない。257・258は浅鉢で、257は外面条痕、内面ミガキ調整で外面には赤色顔料の痕跡が認められる。258は胴部下半から底部にかけてであり、器面外目には輪積痕がよく残されている。256は指による押圧痕をもつ深鉢である。器面調整は外面は不明、内面は削りである。Ⅳ群土器D'類a。260は台付鉢の底部で、外面はよく磨かれている。

SK385(261)  
巻貝条痕

261は口縁端部に指による押圧痕の見られる深鉢である。器面調整が外面は横方向の巻貝条痕、内面はナデである。器面外面胴部下半には、炭化物付着の痕跡が見られる。Ⅳ群土器D'類a。

#### (D)遺物包含層出土土器

##### Ⅰ群土器

###### A類(262～265・269～271)

縄文中期

縄文中期初頭から前半に属するもの。262～265同一個体であると考えられる。深鉢の胴部片で、外面に隆帯の両脇部分を棒状工具による刺突をし、キャタピラ文を形成している。横および斜方向に施されており、文様構成として区画文を形成している(262)。その下部には結節縄文が横方向に施されている。器壁は厚手で、胎色は灰茶褐色を呈する。269は深鉢の口縁端部上面と外面に半截竹管による爪形文が、間隔を密にして施されている。270は波状を呈する口縁部片で、口縁に沿って横方向に、さらにスペースを埋めるように縦方向に、断面カマボコ形した半隆起状を呈する半截竹管文が施されている。さらに棒状工具によると思われる、刺突文が施されている。271は深鉢胴部片で、横に一直線引き区画をしているなかで、浅い斜行沈線文が充填されている。

###### B類(266・267)

時期不詳のもの。266は口縁部片で外面には半截竹管による爪形文が横方向に施されている。267は縦方向の条痕状の工具痕を地文とし、半截竹管により縦および×状と、幾何学的な文様を構成している。

##### Ⅱ群土器(272・273)

縄文後期  
初頭

縄文後期初頭に属するものである。沈線により区画された縄文を持つ、口縁の波状部片を一括した。太い沈線による区画に縄文LRを充填している。272は厚手で、上端部には広

い平坦面がつくられている。内面は非常に丁寧にナデられている。林ノ峰Ⅱ式もしくはⅢ式に類似するものか。

### Ⅲ群土器

縄文後期  
後葉から晩  
期中葉の有  
文土器

牛牧遺跡ではこの段階から遺物の出土量が増えはじめてくる。分類は、器形・文様の両者を加味して行った。文様変化と器形変化とが有機的なつながりをもつとみられるが、一部それでは説明できない部分がある。そのときは文様を重視した。Ⅲ群土器はさらに10類に細分される。

#### A類(274～299)

凹線文土器

後期後葉の凹線文土器。沈線の内面を指によるナデによりナデ消し、幅広く浅い凹線になっているもの(274・276～279・281・288・290・295)と、工具によるやや太い沈線が横方向に引かれ、沈線内部はそのまま工具痕が残されているもの(280・282～287・289・291～294・296～299)の両者が見られる。文様は口縁部付近および胴部屈曲部にのみ施され、地文は見られない。器形上、「くの字屈曲」するものと、「くの字屈曲」して口縁部は立ち上がるもの(276・280・287・290)、上方に開く形態のもの(291・295)との分類ができる。274・287・289・292・293は胴部の屈曲部で、それ以外は口縁部である。凹線を施す工具は283～285・291・294が巻貝、それ以外は棒状工具によるものと考えられる。291・293は内外面ともに器面調整は巻貝条痕である。沈線は三本1単位が基本であるが、多条化したものも見られる(296～299)。

A類は274が元住吉山Ⅱ式までさかのぼる可能性がある以外は、おおむね宮滝式に併行するものと考えられる。

#### B類

縄文時代後期末から晩期初頭までに属する有文土器群を当てる。

##### B類 a (300・301・303)

屈曲上部が幅広い「くの字屈曲」をなす器形で、工具で引かれたやや太い沈線で、弧状沈線を形成しているものを当てる。沈線は3本1単位で、口縁端部直下から弧状を描くもの(301)、屈曲部で弧状を描くもの(300・303)がある。300は文様帯が二段で形成され、上段は横方向の沈線、下段は下方に開く弧線で結節部分には粘土を貼付け、その上から巻貝の押圧を施している。外面はナデ、内面は巻貝条痕である。

##### B類 b (302)

口縁部が内湾する器形で、斜め方向に背反するかたちで沈線が施されているもの。これは波状を呈するものと思われる。

##### B類 c (304～311)

口縁部形態が「くの字屈曲」を示し、文様帯の幅が比較的狭まるものの、半截竹管によ

り複雑化した文様が描かれているもの。くの字屈曲は丸みを持った形態が多くなるのが特徴的である。文様のヴァリエーションが増え、二本の横走する半截竹管文に刺突が加わるもの(304・307)、横走する半截竹管文が一条で、二条が弧状を呈し結節部には巻貝の押圧痕が付けられているもの(305)、横長の楕円文を形成するもの(310・311)、楕円文ではあるが垂線を意識したもの(309)、単沈線化したもの(308)が見られる。器面はナデ調整の他に、巻貝条痕も確認できる(305・309)。この一群の「くの字屈曲」は丸みを帯びることが大きな特徴である(特に304～307・310・311)。

#### B類 d (312～316)

器形は緩やかな「くの字屈曲」を呈し、横走する羽状沈線の見られるものを一括した。312は二段の文様で構成され、上段は二本沈線内に横走する羽状沈線が、下段も二本沈線内に斜方向の沈線が充填されている。外面の調整は巻貝条痕で屈曲部以下では炭化物付着の痕跡が確認できた。313・314も羽状沈線の上部に横走する沈線が見られることから、これらの羽状沈線も沈線内を充填していた可能性がある。工具は312・313が半截竹管、それ以外は棒状工具によって施されている。

#### B類 e (317～319)

器形は緩い「くの字」もしくは内湾状を呈し、弧線内に縦沈線1条を1単位とし、それが連続して施されているもの。317は棒状工具による上放弧文が3条みられ、沈線内にも若干押し引かれた刺突列が施されている。318は繊維束などによる浅い条痕で調整後、半截竹管で横方向に1条区画した上部を、半截竹管による上放弧文で充填している。319は巻貝による擬縄文を地文とし、半截竹管文で1条区画された上部に半截竹管による波状文が施され、弧線の下方側に縦方向に半截竹管文が引かれている。

#### B類 f (320～324)

幅広の半截竹管による沈線および2条の平行沈線内に、工具による刺突列が施されているもの。器形によりさらに2分される。

#### B類 f 1 (320～322・324)

器形が「くの字屈曲」および緩やかな内湾状を呈するもの。沈線は半截竹管によって施されている。320はさらに1条の半截竹管による沈線が見られる。321は背反弧文の上放弧線と口縁端部とで囲まれた部分に刺突列が見られる。

#### B類 f 2 (323)

器形が外反するもの。別々に引かれた2条の平行沈線内に刺突列が見られる。横1条の横線を挟み、対向して弧線が描かれている。

#### B類 g (325～366)

器形が「くの字屈曲」および緩やかな内湾状を呈し、文様帯の幅が広がるもの。凹線および半截竹管などで多条化もしくは複雑化した文様が見られる。さらに4分類に細別できる。

#### B類 g 1 (325・327～339・341)

地文の見られるもの。地文は331が巻貝擬縄文以外は縄文で、LR(327～329・335～339・

341)とRL(325・330・332～334)とが見られる。文様は半截竹管文(325・327・329・331・335～339)と、凹線もしくは太い沈線によるもの(328・330・332～334・341)とがある。波頂部では沈線の垂下が見られ(325・331)、325では巻貝殻頂部による押圧が見られる。平行沈線が横一直線になるものや、弧状を呈するのを基本とし、長楕円文の見られるもの(325)、波状を呈するもの(335)、弧状沈線がさらに重層化するもの(336・339)など、複雑化する傾向にある。

#### B類 g 2 (326・340・342～345・347～354)

地文の見られないもの。ナデ調整の上に、文様は凹線もしくは太い沈線(342・343・345・347～352・354)、または半截竹管(326・340・344・353)で、弧状沈線が施されている。波頂部からは沈線が垂下しているもの(347)や、粘土紐の貼付けによって隆帯を垂下させているもの(343)も見られる。353も波状部の一部と思われる。平行する3条の沈線内には同工具による刺突が充填され、弧状を形成する。波頂部からも同様の沈線の垂下が見られる。

#### B類 g 3 (356～362)

幅狭い範囲内に弧状沈線の見られるもの。地文を持つものとなないもの(360)がある。地文は縄文LR(356・357・363)、擬縄文(358・359・361・362)があり、半截竹管により文様がつけられている。背反弧文が文様の主体である。弧線の結節部には、竹管による押圧が見られる。

#### B類 g 4 (363～366)

波状文の見られるもの。文様は半截竹管(363～365)と棒状工具(366)である。波状文が2本平行しているもの(363・365)、上線が波状文で下線が横線のもの(365)、波状文が3本以上みられるもの(366)がある。

#### B類 g 5 (355)

刻目をもつ隆帯の貼付けの見られるもの。横方向の隆帯を中心として、その上段には隆帯が下放弧文状につながっている。結節部には粘土の貼付けが見られる。

B類 g 1～4はおおよそ下別所式と言われる範疇に入るものと考えられる。B類 g 5も平行する時期のものと考えられる。

#### B類 h (385～393・395・400)

緩やかな内湾器形で、地文なしで文様が構成されているもの。文様は凹線および太い沈線(385～391)、もしくは半截竹管(392・393)による。平行沈線および弧状沈線の見られるものが多い中で、刺突列文もわずかに見られる(389)。調整はナデ以外に巻貝条痕も見られる(390・391)。

#### B類 i (394・396～399)

外反する器形で、半截竹管または棒状工具による沈線で文様を構成しているもの。上放弧文のみの文様では3条以上で構成している(394・399)。396は巻貝条痕の調整後、半截竹管による上放弧線および横線脇に、同工具による刺突列文が見られる。397は半截竹管による長楕円文、398は半截竹管による沈線で区画された部分に、同工具の刺突列文が見られ

る。

B類 h は外反する器形が大きな特徴であり、特に 396 は蜆塚 B 式に類似したものと考えられる。

#### B類 j (401 ~ 418 · 426)

「くの字屈曲」の器形を呈し、屈曲上部が狭くなるために文様帯の幅が狭くなってきているもので、半截竹管による文様が見られるもの。さらに 2 群に分けることができる。

#### B類 j 1 (406 · 407 · 426)

地文のみられるもの。地文は縄文 LR である。半截竹管により平行沈線が見られる。

#### B類 j 2 (401 ~ 405 · 408 ~ 417)

地文の見られないもの。「くの字屈曲」部は外面から見ると突出したように尖っており、内面がちょうど凹みになっているものが多い。文様は半截竹管による横方向の沈線(401 · 402 · 404 · 405 · 412 ~ 418)、短沈線(408)、幅広の連弧文(409 · 410)が見られる。胴部調整はナデが多いものも、巻貝条痕も見られる(409 · 410 · 419 · 424)。

B類 j は晩期初頭の寺津式に比定されると考えられる。

#### B類 k (427 ~ 459)

口縁形態で、「くの字屈曲」を呈するうえに肥厚の見られるものを当てた。屈曲部以下が直立気味になる器形が多くなるのが、特徴である。器面調整はナデが多いものの、巻貝条痕も確認できる(427 · 428 · 429 · 432 · 445)。文様によりさらに類に分類できる。

#### B類 k 1 (427 ~ 432 · 440)

縄文・擬縄文を地文に持つもの。半截竹管による沈線が横走するもの(428 · 430 ~ 432)、弧状を形成するもの(427 · 440)、波状のもの(429)がある。

#### B類 k 2 (433 ~ 439 · 441 ~ 449)

地文の見られないもの。半截竹管による横方向の沈線(433 · 437 · 441 ~ 449)、横長の楕円文(438)、短沈線(434 · 435)がある。

#### B類 k 3

幅広の半截竹管による沈線の見られるもの(450 · 451)、平行沈線内に押引の刺突列が施されているもの(456)、細い棒状工具による平行する二条の刺突列文(455)もあり。

B類 k は今回の調査である一定量出土した資料である。「くの字屈曲」は呈しているものの、外面屈曲部を中心に肥厚させた意図が見られる。この製作方法の採用が口縁端部肥厚という、新たな器形を生み出すこととなったと考えられる。元刈谷式への過渡期的性格をもつ一群で、一部は元刈谷式まで下るものと考えられる。

#### B類 l (367 ~ 384 · 419 ~ 425 · 452 ~ 454 · 457 ~ 459)

「くの字屈曲」をなす器形で、口縁部に地文のみ見られるものを一括した。口縁部形態によってさらに 4 分類できる。

#### B類 l 1 (367 ~ 369 · 372 · 373 · 375 · 377 ~ 379 · 384)

「くの字屈曲」に丸みがあるもの。器形上、B類 b とした一群との共通が見られる。地文

寺津式から元刈谷式への過渡期的性格

は、縄文・巻貝による擬縄文の両者が見られる。

**B類 I 2 (370・371・374・376・380～383)**

「くの字屈曲」が大きく緩やかなもの。文様帯部分(屈曲上部)が胴部(屈曲下部)より薄くなっているものも見られる(382・383)。地文は、縄文・巻貝による擬縄文の両者が見られる。

**B類 I 3 (419～425)**

「くの字屈曲」部の幅が狭まるもの。土器成形により屈曲部内側には凹線状の凹みがつけられているのが、特徴である。器形上、B類 i とした一群との共通性が認められる。地文は、縄文・巻貝による擬縄文の両者が見られ、器面調整では巻貝条痕の見られるものもある(419・424)。

**B類 I 4 (452～454・457～459)**

「くの字屈曲」を呈するうえに肥厚の見られるもの。器形上、B類 j とした一群と共通性が見られる。地文は縄文(452・454・459)と巻貝擬縄文(453・457・458)が見られる。

**C類**

元刈谷式以降に属すると思われる有文土器をあてる。

**C類 a**

口縁形態で、肥厚の見られるものでかつ肥厚部およびそれにつながる胴部が直立ぎみにつながるものをまとめた。文様構成によって以下のように分けることができる。

**C類 a 1 (460～462)**

平行沈線および刺突列文がみられるもの。460は2条の沈線下に2条の刺突列文が付けられ、461は2条の沈線の下一条に被る形で刺突列文が1条、さらに縦方向にも続いている。沈線は半截竹管、刺突は巻貝の殻頂部で行っている。462は半截竹管による短沈線が2条の下および縦方向に同工具による刺突列文が施されている。

**C類 a 2 (463・464・466)**

刺突列は縦方向のみで、沈線のあり方に幅のあるもの。463は巻貝の殻頂部による縦方向の刺突列を、巻貝による太い沈線により区画している。464は半截竹管による沈線が3段みられ、最上段は連弧文、中段・下段は横線で、下段は肥厚部の段差部分に施されている。その上に巻貝の殻頂部による刺突列が縦方向になされている。胴部調整は巻貝条痕。466は半截竹管による上下の弧状沈線が施文されており、その結節部分には巻貝による刺突列が縦に見られる。

**C類 a 3 (465・467～478・481～483・485・486)**

文様が沈線のみで構成されているもの。工具は467・476のみ棒状工具以外は、半截竹管が圧倒的な量を占める。平行沈線が多く見られるが、それ以外にも弧状沈線(467・476)、横長の楕円文(465・468・470)、短沈線(475・486)も見られる。477は横方向の沈線に重なる形で縦方向の沈線が引かれている。

**C類 a 4** (479・480・488・491・493・495)

半截竹管による押引文で構成されているもの。横方向を主体とする。2～3条で構成されているものが多い。胴部の調整はナデや二枚貝条痕が見られる(479)。

**C類 a 5** (494・498・506)

半截竹管の横走る沈線とほかの文様が組み合わさっているもの。494は半截竹管で3条、棒状工具で1条沈線を施文し、その上に半截竹管による刺突列文を2条施している。498は半截竹管による沈線を挟んで上下に、同工具の刺突列文が見られる。506は半截竹管の背を使った沈線を上下に挟んで、半截竹管による刺突列文が見られる。

**C類 a 6** (484・492・496・497・499～505・507～513・515・520)

刺突列文を主体とするもの。工具は半截竹管が主体を占めるが、一部巻貝の殻頂部による刺突列文も見られる(484・501・508)。口縁端部上面は面取りがなされているものが多く、巻貝殻頂部による刺突がみられるもの(490)、口縁に垂直方向で半截竹管を立てた刻目が施されているもの(496)、半截竹管をねかせることによる連続した押引がみられるもの(515)、指により押圧がみられるもの(512)がある。体部の調整にはナデが多く見られるものの、巻貝条痕(507)、条痕(500・501)も確認できる。520は巻貝殻頂部により縦方向に刺突、さらに半截竹管による刺突列文が横に展開している。

**C類 a 7** (489)

肥厚部分に指による横ナデにより、凹線化しているもの。器面はナデ調整である。

**C類 b** (514・516～530・543～548)

口縁部形態で、肥厚しかつ胴部から口縁にかけて外反傾向にあるもの。文様構成は刺突列文が目立ち、半截竹管による波状文も見られる(543～548)。刺突の工具は半截竹管が主体となるものの、巻貝の殻頂部も見られる(528・529)。518は半截竹管による横走る沈線を挟んで、上下に同工具の刺突列文が施されている。526は口縁部が波状を呈するもので、波頂部には口縁に垂直方向で半截竹管を横にして連続した押引文が見られる。

**C類 c** (531～536・538・541)

波状口縁に見られる長い弧状沈線を主体としているもので、器形的に大波状になるものをあてた(531～536)。532が中に筋の残る巻貝凹線の他は、半截竹管文によって施されている。531・541は口縁端部上面に文様が付けられている。1条もしくは2条1単位で波頂部に向かっての長い弧状沈線を描く。

**C類 d** (539・540・542)

緩い波状になるものをまとめた。器面調整は外部が条痕で、内面がナデである。その上に半截竹管を2条1単位にして長い弧状沈線が描かれている。器壁は厚手である。

**C類 e** (549～554)

口縁部形態が肥厚しているもので、縄文・擬縄文などが施されているものを当てた。549は肥厚した口縁部外面にLRを施し、その後で中央部分を横方向に指でなで凹線化している。550は外面にやや角度を変えながらLRが施されている。551・554は体部調整が巻貝条

痕に、口縁端部外面に巻貝による擬縄文が施されている。553は器面調整が条痕bの上に、二枚貝背面による押引文が連続して付けられている。553・554は口縁が外反する器形である。

#### C類 f (565～576)

口縁部形態が肥厚せず、外反が顕著なものをあてた。565・567は半截竹管による沈線と刺突列文の組み合わせである。567は口縁が若干の波状が見られるもので、浅い二枚貝条痕による器面調整の上に半截竹管の沈線を挟んで上下2段に刺突列文が見られる。566は半截竹管による平行する波状文2条が見られるもので、胴部調整は浅い二枚貝条痕である。568は沈線区画の中に二つ一単位の刺突列が充填されている。50と同類のものと考えられる。569・570は半截竹管による押引文である。569は口縁が若干の波状を呈するもので、くびれる頸部で2条確認できる。570は、口縁端部外面に沿っており、より上方の押引文が若干蛇行している。571は口縁端部上面には半截竹管による刺突列が、外面には同工具の沈線が見られる。566・572～576は波状文で、575が棒状工具による以外は半截竹管による。575は器面調整が二枚貝条痕である。

#### C類 g (268)

口縁部形態が肥厚せず、外反が顕著なもので、胴部に地文のみられるものをあてた。268は器壁は薄手の土器で、外面に口縁端部から全面にRLが施されている。地文が施された後、ナデにより縄文が消えてしまった部分が見られる。

#### C類 h (555～564)

突起のあるものを一括した。すべて外反器形のものである。突起は刻目が見られるものが多い。557は縦方向に粘土の貼付けが見られる。560は口縁端部上端に粘土の埋め込みが見られることから、精製土器の可能性もある。

#### C類 i (577～591)

口縁形態は肥厚が若干か、ほとんど見られないもので、外反のそれほど顕著でないものを当てる。刺突による文様が主となる。577・581は浅い二枚貝条痕、580は巻貝条痕の上に、二枚貝の腹縁を縦にした刺突列文が見られる。577は口縁端部上端にも二枚貝腹縁による刺突列が見られる。578は器面調整は巻貝条痕で、半截竹管による刺突列文が施されている。口縁は波状を呈し、波頂部には口縁とは垂直方向に半截竹管による押引文が施されている。582は外面は巻貝を回転させた擬縄文か。583・586・587・590は半截竹管を立てて、爪形状にした刺突列文である。文様の施文位置が口縁端部上面および外面に縮小している。588・589は半截竹管による上下の沈線間に巻貝殻頂部による刺突列文が見られる。591は半截竹管文による押引文である。

以上の中で、C類h群の一部は西三河にみられる「桜井式」とされる一群との共通性が見られる。また、最近元刈谷式の細分を行った佐野 元氏の分類(佐野2001)を援用すれば、C類a群がおおむね元刈谷式の古段階、C類b群・C類f群が新段階に属すると考えられる。

#### IV群土器

縄文時代後期後葉～晩期の粗製土器を一括した。

(1)口縁端部上面に指の押圧列もしくは工具の刺突列が施されていないもの。器形から5群に分類される。

##### A類(592・605・608・629～633・635～637・640)

口縁部が「くの字屈曲」する器形、および内湾するもののなかで、「くの字屈曲」と関連があると思われる器形。口縁部形態が内折もしくは立ち上がるもの。592は口縁が多くの小波状を呈する。器面調整は外面が条痕で、内面がナデである。断面形態が「くの字屈曲」を呈し、屈曲部外面には炭化物付着の痕跡が見られる。593～598・601は立ち上がる波状口縁と考えられる。外面調整は593～595・601で巻貝条痕が見られ、これが主体であったと考えられる。599・600・602・604も、口縁部断面形態がくの字屈曲を示すものである。器面調整はナデ調整である。604の屈曲部内面は、指ナデにより凹みが生じている。603・605・608は口縁部形態が「くの字屈曲」を呈しかつ肥厚しているものである。口縁端部から屈曲部までの幅が非常に狭くなっている。器面調整はナデである。630は口縁部で若干内湾する器形である。内外面には巻貝条痕が残されている。640は緩いくの字屈曲を呈する器形である。内面にも巻貝条痕が残っている。629～629・631～633・635～637は調整に巻貝条痕の見られるものである。

器形上の特徴から、Ⅲ群土器B類とほぼ同時期のものと考えられる。

##### B類(606・607・609～611・614～616)

口縁端部に肥厚が見られる器形。口縁部が肥厚しているもの。肥厚の行い方では、口縁端部の若干下を帯状に肥厚させたものが多く見られる。調整はナデが多く見られるが、巻貝条痕も確認できる(606・611)。614は外面に多く炭化物付着の痕跡が見られる。

器形上の特徴から、Ⅲ群土器C類とほぼ同時期のものと考えられる。

C類 口縁部から底部にかけてなだらかにつながる器形。さらに4群に分類される。

##### C類 a (680・684・688・690・692)

口縁部から底部まで目立った屈曲がなくつながるもの。端部が尖り気味のもの(680)や、丸みを帯びたもの(684・688・690・692)などが見られる。器面調整はナデもしくは削りである。

##### C類 b 1 (638・639・641～649・652～661・663～665・668・671～673・689・691・693)

胴部上3分の1の部分で屈折し直立気味になるもの。外面の器面調整が横方向の浅い条痕のもの(638・639・641～644)、二枚貝条痕のもの(645～649・654)、器面調整が二枚貝条痕で、端部上面には調整時に筋がついているもの(639)、器面調整が単斜方向もしくは縦方向の粗い条痕のもの(652・653・655～661・663～665・668)が見られる。またはナデもしくは削痕

調整のもの(671～673・689・691・693)も見られる。

**C類 b 2 (683・694・695)**

胴部上3分の1の部分で屈折し直立気味になるもので、口縁端部を最後にナデ回していて成形しているもの。器壁外面は削痕が多く、口縁部分のみ器壁が厚くなるものが見られる。

**C類 c (696～700)**

口縁部に肥厚の見られるもの。若干外反する器形も見られる。

**C類 d**

胴部2分の1の部分で緩やかに屈曲し、口縁に向かって直立気味につながるもの。

全形が残存もしくは復元できないとこの器種の確認できない。包含層出土遺物で確認できなかったものの、存在する可能性は十分にある。

**C類 e 長胴のもの**

土器棺使用土器で2点見られる(16・42)。C類 d 同様、全形が残存もしくは復元できないとこの器種の確認できない。包含層出土遺物で確認できなかったものの、存在する可能性は十分にある。

**D類 外反する器形**

外反する器形はさらに次の4群に分類できる。

**D類 a (623)**

頸部で外反するものの、口縁端部で若干内向するもの。端部上面は面取りがなされている。外面の器面調整は不明であるが、内面には巻貝条痕が確認できた。Ⅲ群土器B類と同時期のものと考えられる。

**D類 b (674～677・679・681・682・685・686)**

口縁端部付近で若干外反気味になるもの

**D類 c (612・613・617～622・624・625)**

口径と胴径がほぼ同じ、もしくは口径が大きくなると思われるもの。口縁が波状を呈するもの(612・613・621・622・624・625)、肥厚されているもの(612)、外面に輪積痕を残すもの(613・625)などが見られる。器面調整はナデが多く見られる。

**D類 d (626～628)**

胴部最大径が口径よりも小さいもの。626・628は口縁端部に半截竹管による刺突列が施されている。器面調整はナデで、627はナデが丁寧である。

**E類 口縁部が内湾するもの。調整・成形方法でさらに細部される。**

**E類 a 1 (662・666・667・669)**

外面に粗い単斜方向の条痕がみられるもの。器形は砲弾形の深鉢になる。E類 a 1は、五貫森式に伴う粗製深鉢であることが知られている。牛牧遺跡でも土器棺の組み合わせの

中で、五貫森式にまで下る無突帯刻目文土器に共伴して出土しており、五貫森式に属するものと考えられる。

#### E 類 a 2

外面に粗い単斜方向の条痕がみられ、条痕調整後、口縁端部を一周ナデて仕上げているもの。土器棺使用土器で1点確認されている(54)。包含層出土土器では確認できなかった。

#### E 類 b

調整が粗い単斜方向の条痕以外の条痕のもの。条痕は二枚貝条痕かそれに類似した原体幅の条痕と考えられ、横方向あるいは斜方向に調整が加えられる。土器棺使用土器では2・3が該当するものの、包含層出土土器では確認できなかった。

#### E 類 c (678)

調整が削痕およびナデ調整のもの。678は器面調整ナデである。土器棺使用土器では、2点存在する(53・79)。

口縁端部上面に押圧・刺突の見られるもの

(2)口縁端部上面に指の押圧列もしくは工具の刺突列が施されているもの。器形の分類は(1)に準じ、アルファベットに「'」をつけることで区別することとする。

C' 類 口縁部から底部まで目立った屈曲がなくつながるもの。

#### C' 類 a (726 ~ 738・740・764 ~ 766・768)

口縁端部に指による押圧もしくは工具による刺突列が施されているもの。726 ~ 731・734・735・737が指による押圧、732・733・736・738・740は工具による刺突である。指による押圧は器面内側から(727・729・731・734・735)、器面外側から(728・730・737)の両方が見られる。工具による刺突では、半截竹管を立てたもの(732・733)、棒状工具を立てたもの(736・738)がある。器面調整は条痕・ナデがあり、条痕には二枚貝条痕(734・730)、細密な条痕(727・728・735・737・738)、巻貝条痕(733)が見られる。

#### C' 類 b 1 (701 ~ 725)。

器形の屈曲具合は、701のように段が明瞭に見られるもの、711のように段は見られず曲線状に底部につながるものの両者を含む。701 ~ 707・711・712・721が指による押圧、708 ~ 710・713 ~ 720・722 ~ 725が工具による押圧・刺突である。指の押圧は、指を立て爪痕が残っているもの(711)、指先で行っているもの(712)が見られるが、ほぼ腹の部分で行われ、705は若干押し引いているものの、押し引くものは主体とはならず、押圧の間隔がほぼ一定のようである。押圧は土器口縁に対して外面から施しているもの(701・707)、内面から施しているもの(702・703 ~ 706・711)が見られる。工具による押圧・刺突では、半截竹管を縦にして刺突しているもの(708 ~ 710・713・715・717 ~ 720・723 ~ 725)、半截竹管を口縁方向に対し垂直でかつ横にして押し引いているもの(716)、棒状工具により刺突しているもの(714・722)が見られる。器面調整は条痕・ナデ・削痕(717)であり、条痕に関しては、細密条痕(708・709・720・722・724)、巻貝条痕(701・711)、繊維束など束ねた工具による条痕(721)で、717の外表面には輪積痕が見られる。

### C' 類 b 2

土器棺使用土器の中で1点見られたものである(35)。包含層出土土器の中では確認できなかった。

### D' 類(739・741～763・769・770・772・773)

口縁端部上部に指による押圧および工具による刺突列の見られるもの。739～763・765・766・769・773は指による押圧、764・769・770・772・774～780は工具による刺突である。指による押圧では、766のように口縁端部上面が著しく外反し、そこに押圧が加えられている例もある。また、773は指を縦にして、爪痕が残っている例である。工具による刺突では半截竹管によるものが多くを占める。器面調整は、条痕・ナデ・削痕(739)が見られ、条痕では二枚貝条痕(748・760)、細密条痕(743・755・758・770)が見られる。

### E' 類 b(781～784・787)

断面形態で、口縁部が内湾するもの。上端部の押圧が、押引をされていないもの(781・787)と上端部の押圧・刺突が押引されているもの(782～784)の2者が見られる。781は上端部の押圧を二枚貝の背面で一定間隔を空けて施されている。口縁部付近は端部に近づくにつれて肥厚している。器面調整は外面が二枚貝条痕、内面はナデである。787は上端部の刺突が半截竹管を縦にして施されている。外面は削り、内面はナデである。782・783は指により、784は半截竹管により施されている。782は口縁端部で若干外反傾向を見せ、783・784は口縁端部が肥厚を見せている。器面調整は982が二枚貝条痕、983が削り、984が繊維束もしくはササラ状工具による条痕である。

## V 群土器

### A 類 無突帯刻目文土器

口縁端部上面への刻目から、さらに2群に分類できる。

#### A 類 a(767・771・774～780)

口縁端部上面を平坦にし、上面から工具による刺突列が施されているもの。刺突には、半截竹管が多く見られるものの、ヘラ状工具によるもの(767・775)、幅広の半截竹管で口縁部を縫うように刺突されているもの(776)もみられる。器面外面の調整は横方向の二枚貝条痕が主体である。

#### A 類 b

口縁端部は尖った状態で外反し、刺突が口縁端部内面に施されるもの。土器棺墓使用土器には見られたものの、包含層出土土器では確認することができなかった。

### B 類 突帯文土器

突帯文土器は器形によって大きく3群に分けられる。

#### B 類 a

胴部と頸部の間には段が付き、口縁部の外反する器形。

#### B類 a 1 (789・791・794)

口縁部が外反し、口縁端部上面にも刺突が見られるもの。突帯は口縁端部外面に一条貼付けられおり、刻目は半截竹管によるもの(789・794)、二枚貝背面と思われるもの(791)が見られる。頸部の調整は791・794が二枚貝条痕、789がナデである。

#### B類 a 2 (792・795)

口縁部が若干外反気味で、口縁端部外面に刻目突帯が貼付けられているもの。刻目はヘラ状工具による。口縁端部は尖っており、内面には沈線状の細い筋がつく。外面には二枚貝条痕が見られる。

#### B類 a 3 (793・800)

口縁形態が外反し、若干突帯が垂れ下がるようなもの。口縁端部外面の若干下方に、ヘラ状工具による刻目を持つ突帯を貼付けている。793は頸部の調整がナデである。

#### B類 a 4 (801・803)

突帯が断面長方形に立ち上がるもの。801は二枚貝条痕の上に、半截竹管による刻目をもつ突帯が貼付けられている。803はナデ調整の上に、指による押圧を加えた突帯が貼付けられている。

#### B類 a 5 (804)

突帯の刻目が工具により押し引かれているもの。口縁端部は折り返され、その直下に低位で幅広な突帯が貼付けられている。突帯は、二枚貝背面によって押し引かれている。

#### B類 a 6 (805～812)

刻目の見られない突帯が貼付けられている一群を一括した。突帯の断面形は、第6類-4に類似する。器面外面はナデおよびミガキによる調整が目立つものの、810は条痕bと思われる。口縁端部の形態は尖るもの(805・806・810・811)、緩やかな面取りをするもの(807～809・812)が見られ、内面に沈線状の細い筋も見られるものもある(806・808・809・811)。

#### B類 b (796～798・802)

胴部と頸部の境が明瞭ではなく、口縁部の外も見られない器形

口縁部に向かって器形が内湾するもの。器形はいわゆる砲弾形を呈するものと思われる。ヘラ状工具による刻目突帯が口縁端部に貼付けられている。797は外面削り調整で、輪積痕が見られる。798は外面に繊維束もしくはササラ状工具の条痕が見られる。

#### B類 c (813)

壺形を呈するもの。頸部と胴部の境にヘラ状工具による貼付け突帯が巡る。外面調整は、頸部がミガキ、胴部が単斜方向の粗い条痕である。

#### C類(785・788・814～816)

条痕文の壺形土器。785・788は両者とも器面内側から指による押圧が加えられ、788は特に押引の程度が顕著である。788の外面調整は二枚貝条痕である。814は、口縁端部上面が面取りされ、外面に突出する形態をもつ。その若干下には一条の突帯が貼付けられてお

り、指による押圧が施されている。815も口縁端部形態は814と同様である。端部に接して、袋状突帯が貼付けられている。

## VI群土器 異系統および精製の深鉢

### A類 関東・東北系のもの

#### A類 a (817～821・824)

瘤状の貼り付けのあるもの。817は口縁端部を若干肥厚させ、外面には棒状工具による太い2条の沈線を施し、間には棒状工具による緻密な刺突列が施されている。その下段は棒状工具による太い沈線内にLRの充填が見られる。横方向に二つ刻目を持つ瘤状の貼付けが、二つ1単位で見られる。瘤付土器といわれる土器群の一意匠ではあるもの、内面調整が巻貝条痕であり在地で製作されたものと考えられる。818～820は横長の瘤状の貼付けが付いている。818は2本1単位の太い棒状沈線の始点に瘤状の貼付けがあり、その上には縄文LRが施されている。曾谷式に平行するものか。819は818と同様の構図を取り、瘤状の貼付け上には縦方向に沈線が施されている。820は口縁端部直下に、中に筋の見られる凹線が施され、瘤状の貼付けが施されている。821は、構図としては819と同様と考えられる。瘤状の貼付けが口縁端部に接し、縦方向の沈線が端部上面側に施されている。824は縦長の瘤状の貼付けを有するものである。波状口縁の波頂部から垂下する形で貼付けがあり、凹んだその内側に爪による刺突列が見られる。さらにその両側には巻貝殻頂部による刺突が見られる。

#### A類 b (829)

玉抱き三叉の構図を取るものである。中心部は沈線による円状の区画内にLRが充填されている。

### B類 中部高地系のもの

#### B類 a (828)

深鉢波状部で、口縁端部に沿って2本1単位の平行沈線が、その下段には内面を細い工具で刺突したボタン状の貼付けが見られる。胴部には羽状沈線と思われる斜方向の沈線が見られる。

B類 b 中部高地にみられる隆帯文土器および類似のものを一括する。さらに2群に分けられる。

#### B類 b 1 (832～846)

文様帯は口縁部上端に集約される。隆帯を口縁端部の若干下部に貼付けられるものが多く、隆帯上には工具による刻目が施されているものと刻目のない素文のものが見られる。口縁端部と隆帯の間には、棒状工具による沈線文が見られたり、磨きによる凹みのみのものがある。縦長の貼付けが見られるものもあり、中心は隆帯と同様の刺突が施されてい

る。835は以上の組み合わせで玉抱き三叉文状に文様が形成されている。これらの類いは山内清男の「吉胡晩期旧A」と言われるものと同一内容であり(山内19\*\*), 後期後葉から晩期初頭に属するものと考えられる。

#### B類b 2 (847～851)

847・848は、くの字に外反する器形頸部と胴部の境に隆帯が貼付けられ、隆帯上には指による押圧(847)もしくは工具による刻目(848)がつけられている。849は緩やかに外反する波状口縁である。隆帯は口縁端部若干下につけられ、半截竹管により下から上の方向で押し上げられている。器面調整は内外面ともに巻貝条痕であると見られる。850・851は幅が広く、平坦な隆帯上にヘラ状工具による刻目が施されている。両者は同一個体である可能性が高い。

#### B類c (830・831)

深鉢大波状把手の波頂部を一括する。830は中実な筒状を呈する。上端部は平坦面を形成している。側面を回る形で短沈線が2条、そこから下方に広がる形の沈線も見られる。831は板状の粘土版を折り返したような中空で、上面および側面に穿孔がなされている。穿孔部分を挟むように棒状工具による沈線が引かれている。その下部には刻目をもつ隆帯が2条巡っている。器壁外面には棒状沈線による楕円文が施されている。この一群は百瀬長秀氏のいうところの「高井東式」の範疇に入るものであろう。

### VII群土器 浅鉢類

#### (1)有文浅鉢

##### A類(853・863～880)

北陸系のもの。口縁端部上面を中心に文様が施されるもので、所属はほぼ御経塚Ⅲ式と思われる。口縁端部上面には横方向に沈線、その上に粘土の貼付け、その後にLRが施されている。粘土の貼付けは口縁部方向に対し垂直方向が多く、曲線的な貼付けも見られる(853・865)。内外面ともにミガキ調整で、胎色が黒褐色を呈するものが多い。器面外面には輪積痕が残るものもあり、867は外面にLRの施文が見られる。875～880は口縁内面に文様が施されているものである。875・876は沈線が、877～880は三叉文が施されている。器壁の厚さはほぼ均等のもも見られるが、口縁端部が肥厚気味のものも多く見られる。

##### B類(882・890・891)

大洞系のものを一括する。882は器形cで、口縁端部上面にいわゆる「B突起」と呼ばれる貼付けの小突起が見られる。890は、LRの磨消縄文が帯状に展開する下方に、三叉文が連続して施されている。891は刻目文帯が一条見られる。

##### C類(857～859・925)

関東系のもの。沈線区画内に刺突文が充填されているもの。858は直線的な区画内、859

は曲線的な区画内に充填が見られる。内外面とも器面調整は丁寧なミガキである。925は右から左に従って開く、2本沈線内に、沈線と同じ細い工具による刺突列文が充填されている。安行 III c 式に比定されるものと考えられる。

#### D類(346・904～917)

櫃原文様もしくはそれに類似したものを一括する。2本の平行沈線内に刻目が付く文様に、「三角形剝入文」により盛り上がっている部分に集合沈線が施されている。905・910・912・917には「付加的弧線文」と呼ばれるものも見られる。施文技法は基本的にレリーフ状である。909には器面外面に赤色顔料の付着が見られる。

#### E類

中部高地系のもので、佐野式に比定されるもの。ここでは文様によってさらに3群に分けられる。

#### E類 a (886・889・893)

三叉文に充填縄文が施されているもの。886は横位に展開する文様から派生して、上部に渦巻文を形成する。LRの充填が見られる。889も同様であり、886とは逆に下部に文様が展開する部分であろうか。893は三叉文の部分のみの残存である。

#### E類 b (862・885)

粗大な工字文の見られるもの。文様はすべてレリーフ状である。885は最上段に粗大な工字文、横方向の隆帯を挟んで下段には角張った三叉状の彫去を互い違いに施す文様帯が展開する。胎色は灰白色を呈し、器面外面には赤色顔料の残存が見られる。862は最上段が2条の隆帯で、その下段には上下から三叉状の彫去により楕円形にレリーフされた部分に細い工具により斜沈線が施されている。

#### E類 c (852・860・861・887・892)

口縁部に向かって外側に外反するもの器形で、口縁部には縄文帯、頸部には細い刺突列が施された貼付け隆帯の見られるもの。852は口縁部を若干肥厚させた上にLRが施されている。860・861は口縁部の縄文帯部分のみと思われ、内面に1条沈線があり、さらに861には外面にボタン状の貼付けが見られる。887も同様の文様構成であり、内外面にはナデもしくはミガキの痕跡が多く残されている。892は頸部の細い隆帯のみの部分と思われる。隆帯は2条見られるため、別の系統のものである可能性も残されている。

#### E類 d (854～856)

口縁部に細い棒状工具による刺突列を持つ、貼付け隆帯が見られるもの。口縁部から大きな屈折がなく、底部までつながる器形を呈する。隆帯は854・855では口縁端部の若干下部に、856では口縁端部直下に付けられている。内外両面とも非常に丁寧なミガキ調整が施されている。

## F類(918～923)

晩期後葉の精製浅鉢を一括する。918～921は眼鏡状付帯文をもつものである。すべて口縁部屈曲部に付帯文の貼付けの見られるものである。918・919は、眼鏡状の結節部にボタン状の貼付けが見られる。921は屈曲部に眼鏡状付帯文、その下部にはLRを地文に太い沈線が施されている。922・923は浮線文の見られるものである。

G類 その他有文浅鉢を一括する。

### G類 a (900～902)

レリーフにより文様が形成されているもの。

G類 a 1 (900・902)楕円文および刺突列文が形成されているもの。同一個体と考えられる。製作技法から、E類 b と近い関係をもつものと考えられる

### G類 a 2 (901)

円文が形成されている部分にLRが施されているもの。

### G類 b (888・894・895・898・899)

沈線の施されている浅鉢を一括する。888は口縁部外面に1条、口縁端部上面に1条の沈線が見られる。894は3本一単位の弧状沈線になるものか。内外両面には赤色顔料が残存している。895は胴部屈曲部外面に1条沈線が施されている。899は太めの棒状工具による沈線が1条見られる。

### G類 c (881・924・926)

半截竹管による刺突列が見られるもの。881は口縁端部上面および胴部屈曲部に横方向に1条ずつ施されている。924・926は口縁端部外面に間隔を開けて1条の刺突列が見られる。

### G類 d (883・884)

突起の見られるもの。883は三角形の突起になるのか、対にもう一つ続くのかは不明である。外面には輪積痕がよく見られる。884は口縁の方向とは垂直方向に粘土の貼付けによって突起が形成されている。

## (2)素文の浅鉢

H類 口縁部から大きな屈折がなく、底部までつながるもの。

### H類 a (928～931・933～949・957)

口縁部には特に肥厚が見られないもの。器面調整は、丁寧なナデもしくはミガキであるものが多いが、931・944では巻貝条痕が見られる。口縁端部上面は面取りりがされ、平坦になっているものが多い。939・947では赤色顔料の塗布が認められた。

### H類 b (950～956)

口縁部に肥厚が見られるもの。底部に向かって、直線的につながっていく。調整では外面の削りが目立ち、内面は丁寧なナデが多い。954の内面は繊維束による条痕状の痕跡が見られる。955・956の器面外面には輪積痕が見られる。

H類c(958～974)波状を呈するものを一括する。器面調整は外面がナデ・削りが多い中、967は巻貝条痕が見られる。口縁端部は面取りがされているものが多く、若干肥厚気味のものもある。963は波頂部に刻目が見られる。

#### I類(932)

口縁部が外側に外反するもの。内外面ともナデ調整と思われる。頸部屈曲部は横方向に特にナデられており、若干の凹みが見られる。

#### J類(975～978)

ラッパ形に外反する口縁形態で、口縁端部上面もしくは内面に沈線が見られるもの。器面調整は内外面とも非常に丁寧なミガキである。

#### K類(927・979)

頸部で屈曲し、口縁端部でも内面に屈曲の見えるもの。内外面ともに丁寧にミガキ調整が見られる。

### VIII群土器 壺形および注口土器

#### A類(822・823・825～827)

丸いボタン状の貼付けの見えるものである。貼付けの中は凹みが見られ、823・826は中に爪の痕跡がついている。825・826は内面に筋の残る巻貝凹線と見られる。

#### B類(980)

大洞系のもの。左下がりの入り組み三叉文が施されている。作りは非常に薄手で丁寧、胎色は黒色を呈する。大洞BC式で、搬入品の可能性が高い。

#### C類(981～986)

三叉文の刻まれている精製の壺形土器。多くは佐野式と思われる。981は太い平行沈線内に刺突列が見られ、羊歯状文の変形したものと見ることができる。胴部には太い沈線が曲線状に描かれているものの、文様の展開は不明である。982も太い平行沈線内に刺突列が見られ、その下段には太い沈線により三叉状に彫去されている。983も太い沈線による三叉が見られる部分の破片である。984～986も三叉文が見られる。983よりも面的に彫去がなされたものである。

#### D類(987・989～991・995・996)

頸部が明確に見られる素文のもの。987・995・996は直立する形態を呈する。987は口縁端部上面を斜方向に面取りがなされている。器壁は若干厚手で、外面は丁寧にミガキがか

けられている。995・996は内面に幅細の沈線の見られるものである。これらも口縁端部上面は面取りが施されている。989も口縁端部上面が明確に面取りされているもので、器面外面には輪積痕を残す。

#### E類(988・992～994・997)

頸部が屈曲なく胴部につながる形態。口縁端部のみ外反し、先細になっている形態が多い。994は頸部と胴部の境が段によって区別されているものである。表面の劣化が激しいものの、薄手で、丁寧なつくりのものであったと考えられる。

#### F類(998～1002)

注口土器およびその可能性のあるものを一括する。すべて後期中葉から後葉までに属すると考えられる。998はくの字に屈曲する形態をもち、端部外面には馬蹄状の浮文が貼付けられている。999・1000は注口部分である。999は注口先端では外反する形態を呈し、注口部分の下部を細い棒状工具による沈線が3条平行している。1000は注口先端が外反せずに直線的にのびる形態である。1001は加曾利B1の注口土器の一部で、口縁端部に対に貼付けられる装飾部と考えられる。1002は注口部直下に横走る文様帯で、太めの沈線内をLRの縄文で充填している。

### IX群土器 底部

#### A類 深鉢底部

##### A類 a (1003～1005・1007・1008・1010・1012・1013・1016～1030)

平底のもの。さらに2群に分けられる。

A類 a 1 (1008・1012・1017) 底部が絞り込まれ、筒状に立ち上がるもの。

A類 a 2 (1003～1005・1007・1010・1013・1016・1018～1030) 底面中心部が薄く成形されているもの。

A類 b (1031・1034～1036) 凸底のもの。底部bに相当する。この底部を持つものは、胴部に単斜方向の粗い条痕を持つものとの関連が強い。

A類 c (1006・1009・1011・1014・1015・1032・1033・1037) 若干の凹底のもの。土器製作上、結果的に凹底になってしまったものと考えられる。

A類 d (1038・1039・1040) 凹底のもの。

#### B類 浅鉢底部 以下の4群に分けられる。

B類 a (1045・1046) 平底のもの。

B類 b (1049) 丸底のもの。

B類 c (1041・1042・1044) 若干の凹底のもの。

B類 d (1043・1047・1048) 凹底のもの。

### C類(1050～1059)

台付鉢脚部を一括する。素文のもの(1050～1055)は、全面ナデ調整で作られており、器面表面には輪積痕がよく残されている。穿孔のみられるものも見られる(1054・1055)。有文のもののうち1056～1058は、胴部と脚部との境にみられるくびれ部に横方向に隆帯を貼付けをし、隆帯上を指もしくは棒状工具により押圧・刺突されている。1050～1058は、稲荷山式の深鉢と考えられる。1059は工字文風の貼付けおよび、結節部分には縦に刻目をもつ貼付けが見られる。晩期後葉の精製浅鉢の一種と考えられる。

以上の中には、底部圧痕の見られるものも見られる。底部圧痕には網代痕と木葉文がある。

網代痕は1本越え・1本くぐり・1本送りのものが多く見られ(1004・1005・1007～1011)、2本越え・1本くぐり・1本送りのものや(1003)、1本越え・1本くぐり・1本送りから途中で2本越え・1本くぐり・1本送りに編み方に変化が見られるもの(1006)が見られる。網代痕・木葉文の両者とも、土器の製作段階でナデ消えてしまっているものがしばしば見られる。

## 2 石器類

### (A)遺構内出土石器

SK515  
(1106～1113)

石器の埋納もしくは廃棄の見られた遺構で、打製石斧(1106)・磨製石斧(1107・1109)・敲石(1108)・礫器(1111)・石剣(1112・1113)・下呂石剥片(1110)が出土している。1106は刃部の残存である。両面を打撃による整形で、厚さを均一にしている。側面には二次調整を行い、かつ刃部をつけている。撥形になるものと考えられる。頁岩製。1107は刃部のみ欠損している。表面の摩耗は著しく、かなり使用されたものと考えられる。ハイアロクロスタイト製。1109は刃部のみ残存である。打撃により大まかな整形をしたあと、全面研磨で調整をしている。被熱のためか、一部若干の黒色化した部分が見られる。砂岩製か。1108は円礫の両面に敲打痕の見られるものである。凝灰質砂岩製。1111は一部自然面を残し、敲打により整形された礫器と考えられるものか。剥離面の一部には若干摩滅している部分も見られる。凝灰質砂岩製。1112・1113は一平面に稜が見られる。全面研磨により整形されており、研磨痕が多く見られる。1112には被熱によるものか、若干黒色化した部分が見られる。ともに頁岩製。

SB04  
(1114～1134)

ここで取上げるものは、SB04の床直上で出土した石器である。石鏃(1114～1122)、石錐(1123)、スクレイパー(1125～1126)、石槍(1127・1128)、ピエス・エスキーユ(1129)、使用痕のある剥片(1130～1134)、加工痕のみられる剥片(1124)がある。

石鏃はすべて無茎鏃で、凹基鏃(1114～1118・1120・1122)と平基鏃(1119・1121)とがある。1125は片側の、1126は両側の縁辺部に連続した剥離が見られる。1127は両面からの剥離により整え、二次調整も両面より行っている。1128は横長剥片を素材とする。片面は剥離面を利用し、もう片面は両側よりの剥離により稜線が作られ、断面三角形を呈する。両面とも側面には二次調整により刃部がつけられる。1129は断面台形状を呈するもので、両端には潰れたような剥離が見られる。1130～1134は剥片の部分に片側もしくは両側に細密で不連続な剥離痕が見られる。

SK385  
(1135～1138)

1135は断面形状扁平の石剣で、側縁部を連続した調整により成形している。剥離調整の可能性もあるものか。石材は結晶片岩で、表面の劣化にともなう剥離が著しい。1136は河原石の平坦である片面に溝がつけられているもので、その溝が反対面の一部にまで見られる。凝塊質砂岩製か。1137は基部に比べて刃部が極端に幅の広がる磨製石斧である。仕上げの研磨が非常に丁寧になされており、全面に研磨痕が見られる。一部には細長い亀裂が見られることから、被熱したものと考えられる。1138は両面に敲打痕があり、片側に1ヶ所、もう片側に3ヶ所見られる。前者が後者よりも深い。

SK799  
(1139 ~ 1141)

1139は石皿片と考えられる。破片であり、全形を伺うことはできない。被熱のためか、一部赤色化している部分が見られる。1140は磨製石斧の可能性のあるもの。側面部は扁平で、刃部とした部分には部分的に若干の鋭さが見られる。1141は敲石と考えられるもので、一側面に敲打痕が見られる。

(B)上記以外の遺構および包含層出土石器

### 1. 石鏃

今回の調査で2000点以上の資料が出土し、牛牧遺跡から出土した石器の大部分を石鏃が占める。SB04内で出土している9点を除いて、103点を図化した。平面形態および断面形状から以下のように分類できる。

#### I 群 断面形状が平坦なもの

<無茎>

A類 平基

A 1 類 平面形態がほぼ正三角形を呈するもの。

(1144 ~ 1147・1149・1154・1156・1177・1184・1194・1200)

A 2 類 平面形態がほぼ二等辺三角形を呈するもの。(1162・1163・1169・1189)

A 3 類 平面形態がほぼ正三角形を呈し、斜辺部が内に湾曲しているもの。(1150・1187)

B類 凹基

B 1 類 平面形態が三角形を呈するもの。(1142・1143・1148・1151 ~ 1153・1155・1157 ~ 1161・1173・1176・1180・1181・1183・1185・1186・1188・1191 ~ 1193・1196 ~ 1197・1201)

B 2 類 平面形態がほぼ五角形状を呈するもの。

B 3 類 若干大形・幅広で両脚が明確に見られるもの。

<有茎>

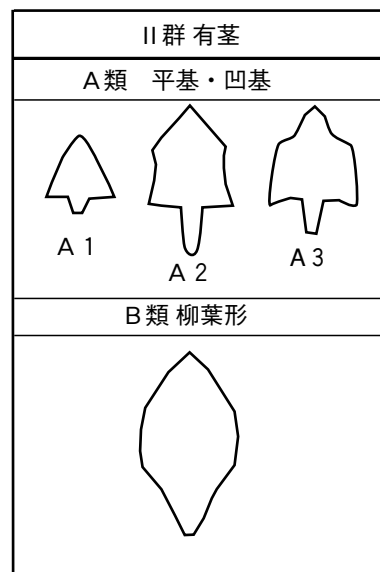
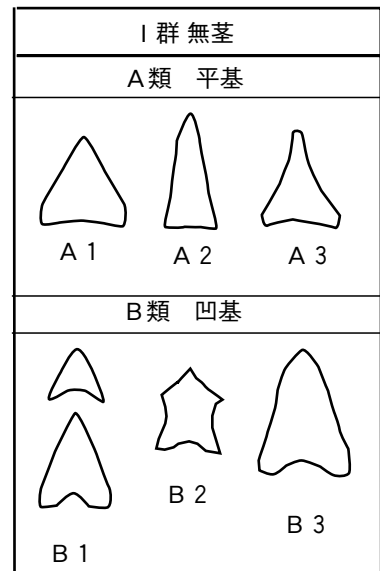
A類 平基・凹基

A 1 類 平面形態がほぼ正三角形を呈するもの。

(1204 ~ 1206・1209・1211・1213・1217・1222・1223・1225・1228・1229・1231・1233・1234)

A 2 類 平面形態がほぼ五角形状を呈するもの。

(1202・1203・1207・1208・1210・1212・1216・1218・1220・



第 60 図 石鏃形態分類図

1221・1224・1226・1227・1235)

A 3類 いわゆる飛行機鏃。(1215・1230)

B類 柳葉形(1214・1219・1232)

II群 断面形状がI群に比べ厚手のもの

この群は無茎のもののみである。さらに平面形態より二類に分類される。

A類 平基・凹基(1237～1239・1242～1245)

C類 円基・尖基(1236・1240・1241・1246)

II群は中央部の剥離調整がなされず残ってしまったため、周辺部に比べ盛り上がりを見せることに大きな特徴がある。製作技法との関連性が想定される。

III群 製作途中の未成品の可能性のあるもの(1247～1284・1309・1310)

石鏃の未成品の可能性のあるものを一括する。一部に二次調整がなされほぼ石鏃の形態に近づいているものから、石鏃に適した形に剥片を取った段階のものまでみられる。1247・1248・1250～1252などは縁辺の剥離調整の結果、側面観で中心に大きな凸部分が見られ、II群との関連性が強いと考えられる。

使用されている石材は下呂石、サヌカイトと思われる緻密な安山岩、チャート、珪質頁岩、黒曜石、水晶である。以上の中でも下呂石製の数量は他の石材製の数量をはるかに越えている。

## 2. 尖頭器もしくはスクレイパー(1285～1308・1311)

この石器群の特徴は、側面観が厚手であり、平面形態が三角形・楕円形もしくは柳葉形に成形しよとする意図の見られるものである。三角形のものでは鋭角を挟む二辺に、楕円形もしくは柳葉形のものでは周囲に二次調整が施される。この群を尖頭器とした場合には、すべてその未成品と考えられる。

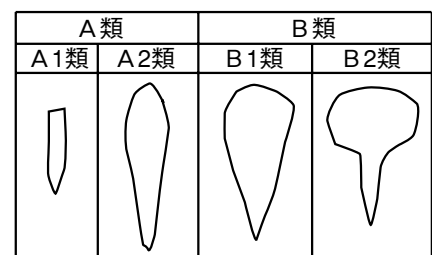
## 3. 石錐(1312～1366)

A類 全体の形態が細身で、つまみ状の頭部が見られず、錐部のみのもの(1313～1314)。平面観、側面観ともに同様で、円柱状の形態をなすものである。

B類 全体の形態が細身で、頭部付近の幅が太くなったり、つまみ状の頭部が見られるもの(1315～1317・1358・1359・1363)。

C類 錐部と頭部との明瞭な区別がなく、平面形態が鋭角三角形状を呈するもの(1324～1327)。

D類 剥片の一端のみに二次調整を加え細く鋭くしたもので、平面形態が台形状もしくは五角形状を



第61図 石錐形態分類図

呈するもの(1332～1337・1340～1346・1348～1357)。

E類 錐部と頭部とに明瞭な区別が見られるもの(1328・1330・1338・1339)。

形態の伺い知れるものの中では、特にD類に数量の優位性が見られる。

#### 4. 石匙(1579・1580)

2点のみ出土した。ともに横型である。1579はつまみ部が片側に寄るもので、刃部の調整は主に片側からのみから行っている。1580はつまみ部が中央に付くもので、刃部の調整は両側より行っている。1580はサヌカイト製と思われる。

#### 5. ピエス・エスキーユ(1368～1398)

総点数700点以上で、石鏃に続いて多く見られたものである。SB04で出土している1点を除き、31点を図化した。形状からは、正形状のもの、縦長のもの、横長のもの、の三者に分けられる。部分的に礫の自然面を残しているものが多く見られるのも特徴か。両極からの剥離が見られるもので、縁辺部には刃潰れのようなダメージが見られることが共通して見られる。1369・1371のように四辺すべてに両極からの剥離が見られるものもある。縦長のものよりも、正形状のものが小型で剥離の行為も多く行われた結果の産物とも考えられる。

#### 6. 鉤形石器(1574)

1点のみである。破片のみで全形を伺い知ることにはできないものの、鉤状に湾曲する形態になるものと考えられる。チャート製。

#### 7. 削器(1399～1405・1575・1576)

鋭く側縁に鋸歯状の刃部を形成するもの。形態的に特徴的なものに長楕円形したもの(1399)や、三角形のもの(1575・1576)がある。特に三角形のものは縄文晩期の遺跡で散見され、定型化されている可能性がある。刃部は両側からつけられている。1575がチャート製、1576がサヌカイト製かと考えられる。

#### 8. 搔器(1406～1409)

急角度の刃部を作り出しているもの。牛牧遺跡からの出土はわずか数点であった。

#### 9. 二次加工剥片(1410～1419)

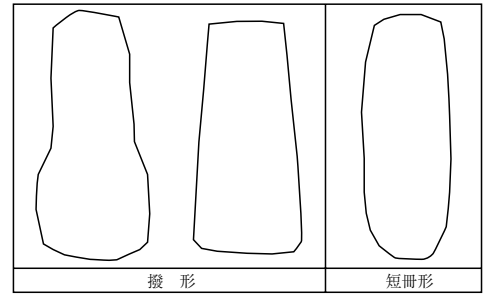
剥片に加工を施したものであるが、形態的に不安定なものを一括した。

#### 10. 使用痕剥片(1419～1433)

剥片の鋭い側縁に不連続な刃こぼれの見られるもの。

### 11. 打製石斧(1434～1458・1578)

総点数43点で、ここではSK515で石器一括で出土している1点を除いて、26点を図化した。形態的には撥形(1434～1449・1578)、短冊形(1450～1458)に大きく分けられる。出土遺物はかなり使用された痕跡のみられるものが多く、1434・1435・1438・1439のように刃部の表面の摩耗が著



第62図 打製石斧形態分類図

しいものがある。刃部は潰れたような剥離が全てに観察できる。側面部は直線状を呈するものがほとんどである一方で、1444・1450・1452・1454はくの字もしくは基部が上端部に向かって細くなっている、いわゆる反り身のものである。欠損部分でみると、刃部と胴部との境付近で欠損しているものが目立つ。石材はホルンフェルス・砂岩・凝灰質泥岩・結晶片岩が見られるが、ホルンフェルスの割合に優位性が見られる。

### 12. 磨製石斧(1459～1483)

総点数67で、SK515で出土している2点を除いて、27点を図化した。形態的にはSK385で出土した1137が定角型であるのを除いて乳棒状といわれるものがほとんどを占め、乳棒状では断面形状・および側面観から二群に分類できる。

**A類** 断面形状が楕円形で、厚みのあるもの。(1459・1460・1462・1464～1466・1468～1473・1475～1479・1482)

**B類** 断面形状が扁平な楕円形で、全体的に薄手のもの。(1461・1463・1467・1481・1483)

**C類** 断面形状が円形に近く、全体的に棒状な形態のもの(1474・1480)。

刃部付近に摩滅の痕跡が多く見られ、不連続な刃こぼれ状の剥離が見られる。1462は一度刃部が欠損したのち、欠損部分に再び刃をつけている。1468は基部の成形のために横方向から敲打がなされており、その上から磨かれている。側面観は細長いレンズ状を呈する。1469～1474は刃部が先細になっているものである。1469・1470は側面観が若干のくの字状を呈し、特徴的である。石材はホルンフェルス・ハイアロクラスタイト・砂岩で、ハイアロクラスタイトの割合に優位性が見られる。

### 13. 礫器(1111・1517～1524・1581・1582)

ここで礫器としたものは、次のものを包括したものである。

**A類** 粗い剥離によって得られた剥片を材としているもの。剥片そのもの(1517・1518)から縁辺部に刃部がつけられているもの(1519～1523・1581)まで見られる。

**B類** 粗い剥離によって石核状になっているもの(1111)。

**C類** 抉り状に剥離が加えられているもの(1582)。礫石錘の可能性もある。

A類・B類は牛牧遺跡の中で多く見られるものの、剥離技術において他の器種とは異質である。石材もホルンフェルスを主体として使用しており、打製石斧との関連性も考えられる。

#### 14. 敲石(叩石)(1484～1499)

総点数70点で、SK515で出土している1点を除いて、17点を図化した。ここに図示したものは、完形のものばかりであるが、出土遺物の多くは欠損しているものが目立つ。敲打痕のあり方および石の形態から以下のように3類に分類できる。

A類 石の平面および側面のみに敲打痕の残るもの(1484～1495)。

B類 石の上下端部にも敲打痕の残るもの(1496～1498・1577)。

C類 A類・B類以外のその他(1499)。

A類は、石は若干扁平さの見られる河原石を使用しており、断面形状が楕円形を呈するものが多い。ほぼ同じ場所に複数回の敲打痕が見られる。1492は一部に赤色顔料(ベンガラ)付着の痕跡が見られる。B類は、石は断面形状が円形に近いものを使用している。上下端部の敲打痕は平面と側面のそれとは特別な差は見られない。C類は、扁平な河原石を使用している。平面と側面に敲打痕が見られるが、側面の敲打は図面の上面側を握り、ハンマー状に敲いたものと思われる。石材はホルンフェルス・濃飛流紋岩・花崗岩・安山岩・凝灰質砂岩・アプライトである。

#### 15. 磨石(1500～1506)

総点数33点で、完形と思われる4点を含む7点を図示した。敲石同様、出土品の多くは欠損している。河原石をそのまま使用しているものが多く、広く面の見られる部分に磨痕がよく残されている。1503は断面形状が長方形を呈するものである。すべての面が平滑に滑らかになっており、磨石としての形状を整えてから使用されてものと考えられる。石材は安山岩や濃飛流紋岩が多く、1503は表面に凹凸の多く見られる粗目の安山岩である。

#### 16. 凹石(1507～1513)

総点数9点のうち、7点を図示した。深く開けられた凹みは、表裏両面に見られるものが多く、同じ場所に複数回にわたり凹みが付けられているものがほとんどである。1512は扁平な河原石を用い、両面を凹ませており、側面は複数回の敲打により抉り状の凹みが見られる。1513は断面形状四角形を呈するもので、全面にわたり凹のみられるものである。石材は凝灰質砂岩・濃飛流紋岩・安山岩が見られ、磨石や敲石と同様な石材を使用していると思われる。

#### 17. 台石(1514)

台石としたものは、1点のみである。表面に粗さの見られる安山岩を使用した、平面形態が円形のもので、安定感がある。表面は敲打を受けた結果であろうか、表面の粗さによるもの以外の凹凸が所々にみられる。

#### 18. 砥石(1515・1516)

総点数23点のうち、2点を図化した。出土遺物のほとんどが破片資料であり、図化したものは2点のみである。1516は扁平な石材で、縁から中心部に向かって研がれたような磨痕が多くみられる。1515は溝状の凹みが2条見られるものである。石材は砂岩および凝灰

質砂岩が優位を示している。

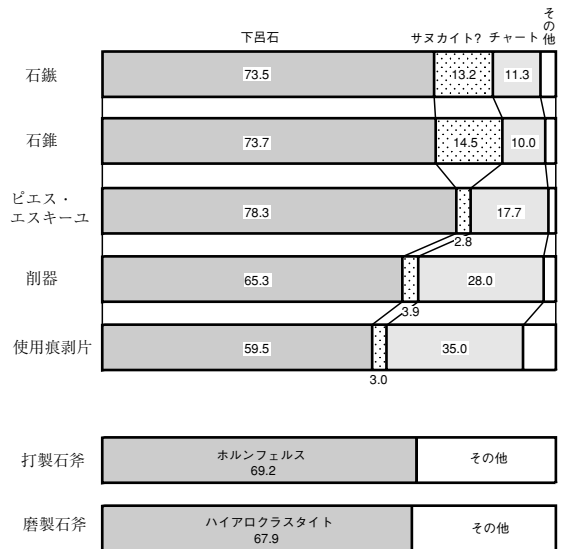
### 19. 石皿(1525 ~ 1535)

総点数63点のうち、11点を図示した。出土遺物の多くが破片資料であり、全形の伺い知れるものを中心に図化を行った。1525 ~ 1531・1534は片面の平坦面を作業面とし、もう片面を地面側に据えていたと想定されるものである。作業面側には縁に向かって落ちていく凹みがみられるのが、特徴的である。1533・1535はそれ以外の面も作業面として想定されるものである。1533は側面および両平坦面に磨痕が観察され、これ自体が磨石であった可能性も考えられるものである。1535は両平坦面の一面に石皿としての作業面がみられ、もう一方には溝状の凹みが2条見られることから砥石として使用された可能性も考えられる。石材は濃飛流紋岩・砂岩・凝灰質砂岩が優位を占め、アプライト・ホルンフェルスが若干みられる。

#### (C)使用石材に関して

石鏃、石錐、ピエス・エスキーユ、削器、使用痕剥片、打製石斧、磨製石斧について、使用石材比を示したのが第63図である。石鏃と石錐では下呂石とサヌカイトとでほぼ90%近くを占め、ピエス・エスキーユ、削器、使用痕剥片では下呂石とチャートと同様に90%近くを占める。小型の剥片石器では、下呂石・サヌカイト・チャートで大半を占め、特に下呂石がその中でも絶対的優位を占めていることが、確認できる。

下呂石の  
優位性

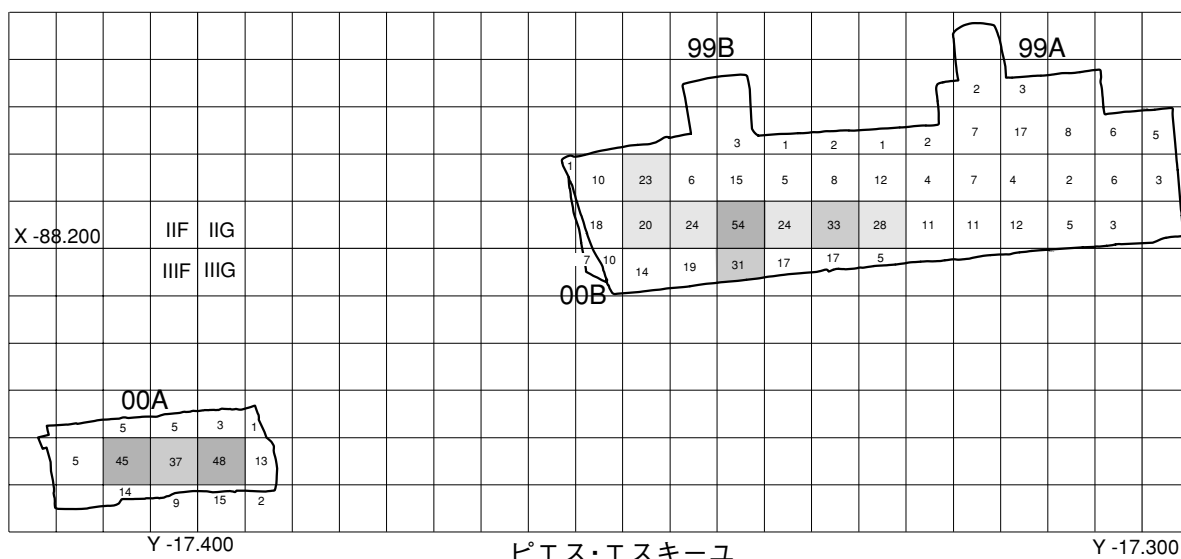
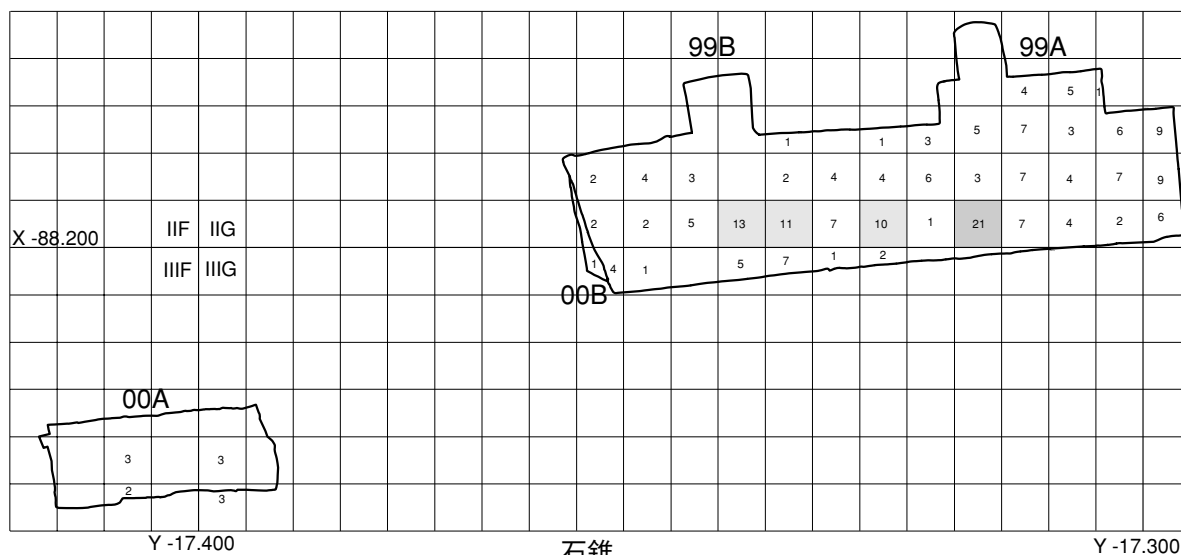
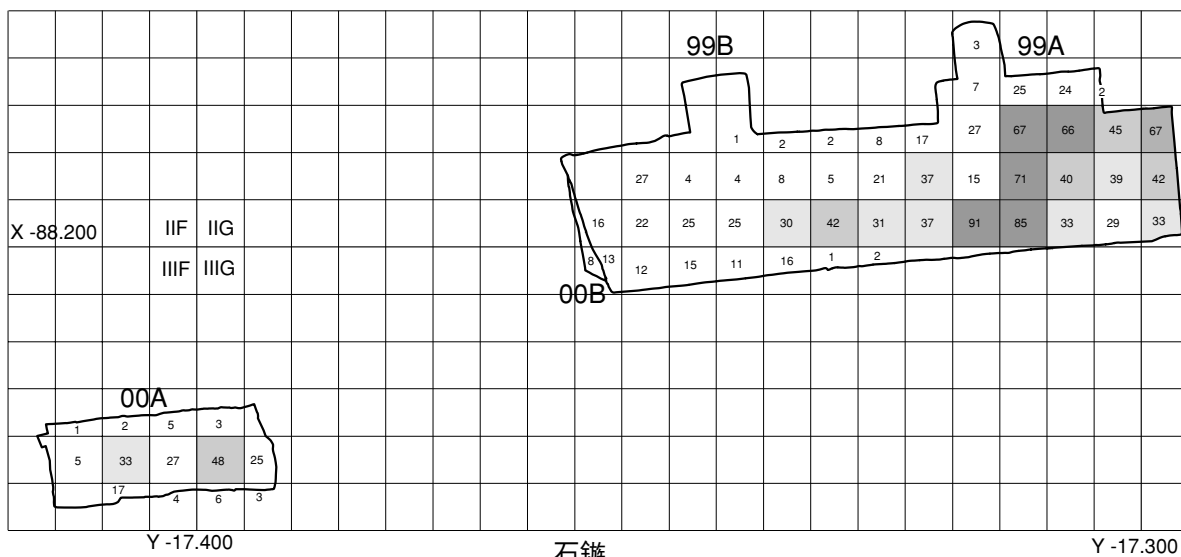


第63図 主要石器使用石材割合図

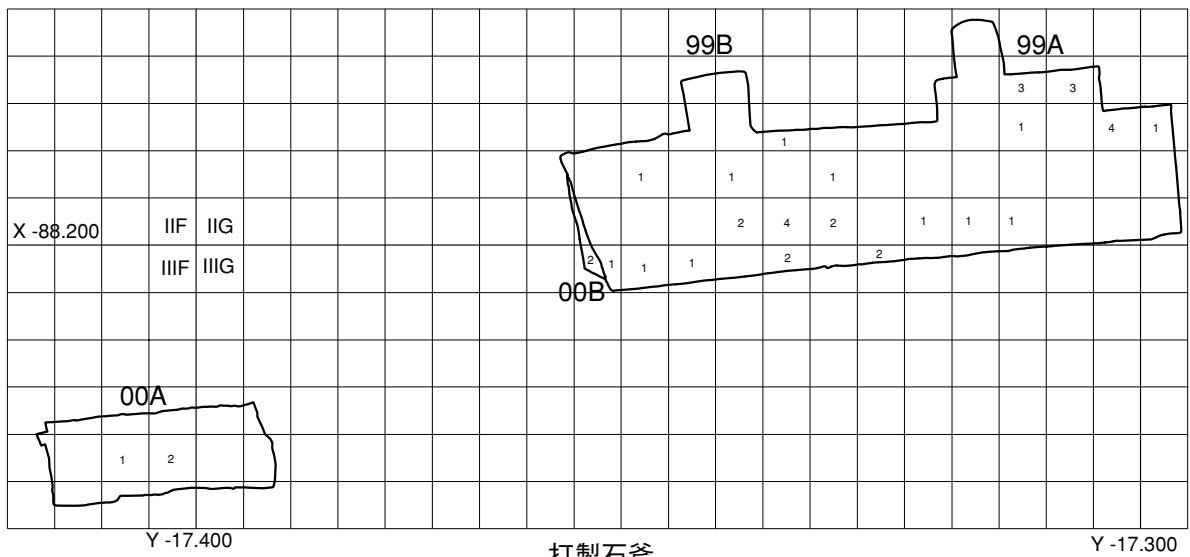
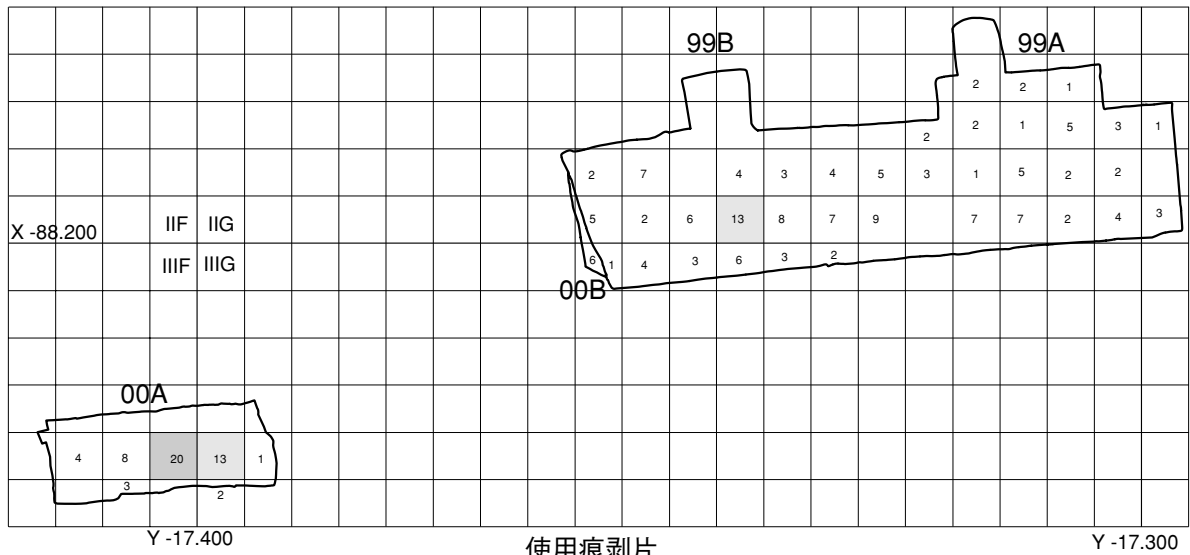
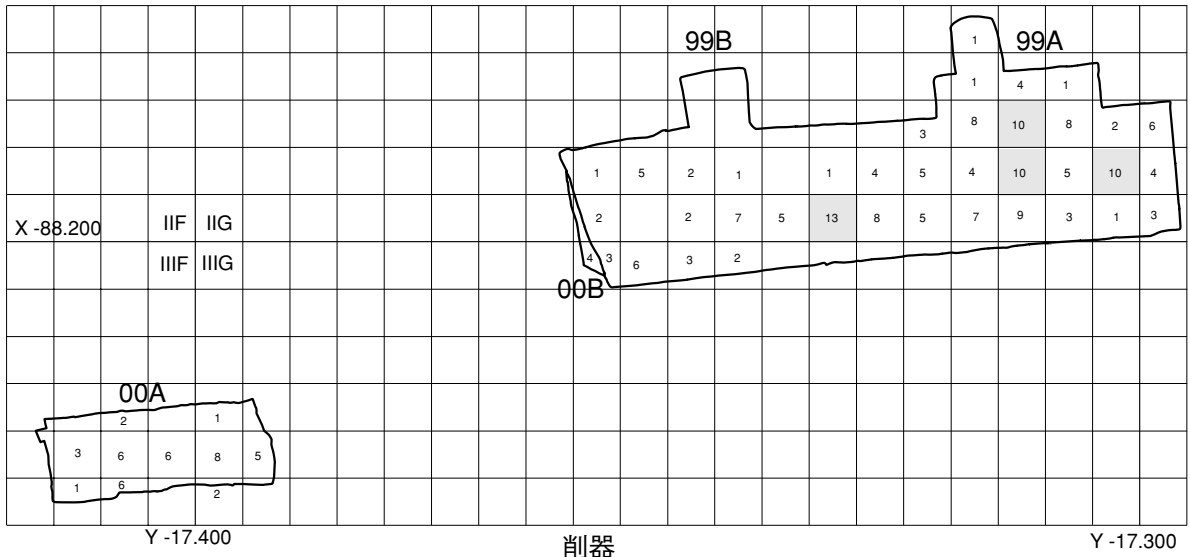
また、打製石斧ではホルンフェルスが、磨製石斧ではハイアロクラスタイトが優位を占め、石材の選択が行われていたことを示している。打製石斧においてホルンフェルスが主体的に選択されたことについては、礫器との関連性を考慮できる。

#### (D)各器種の出土傾向について

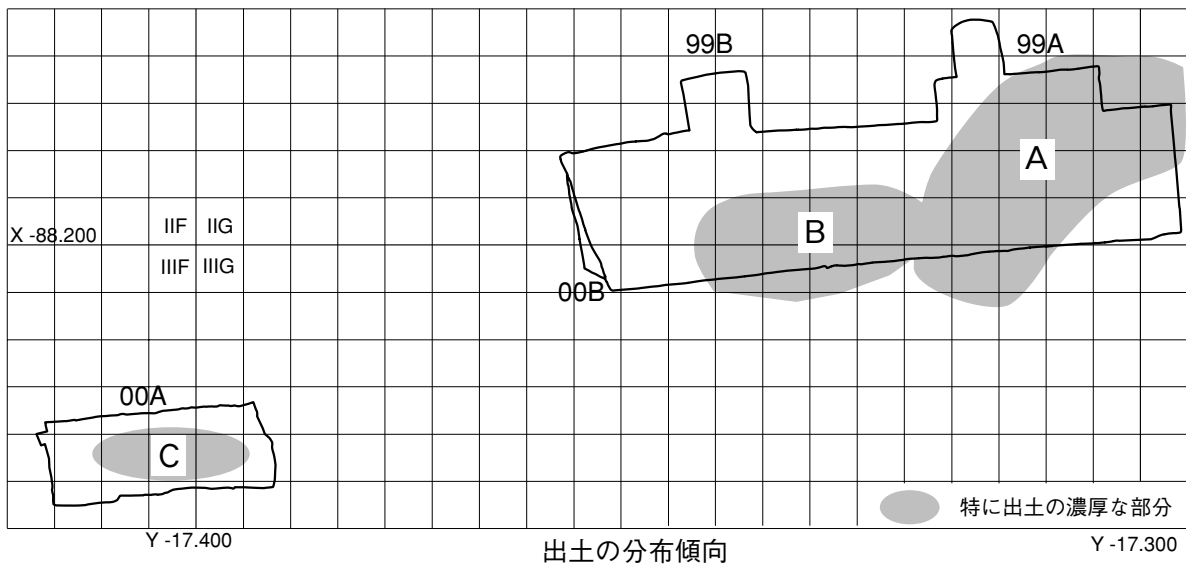
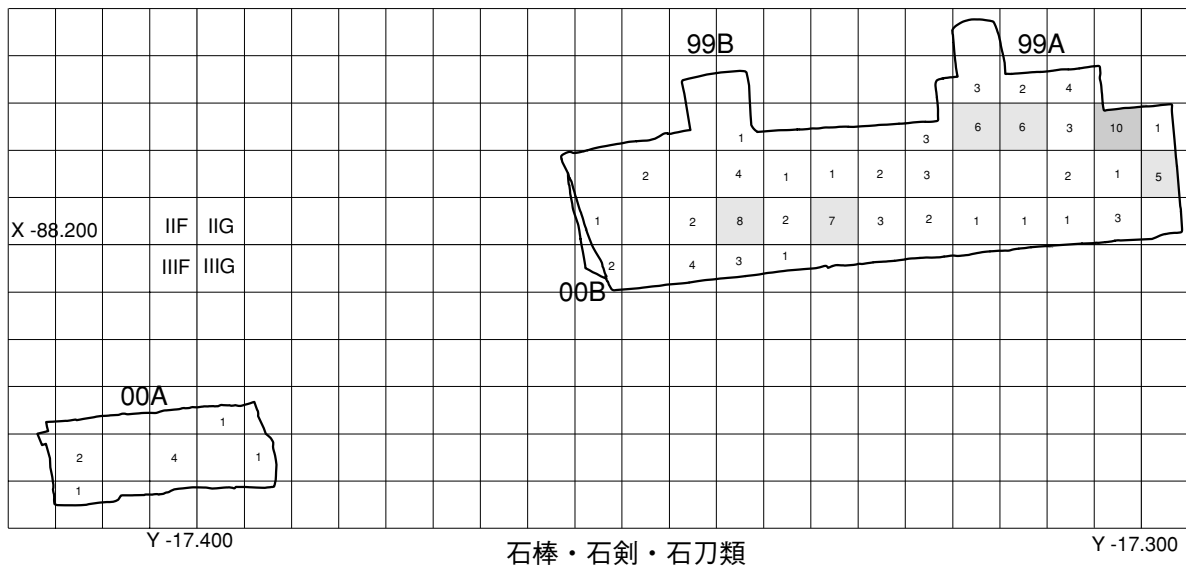
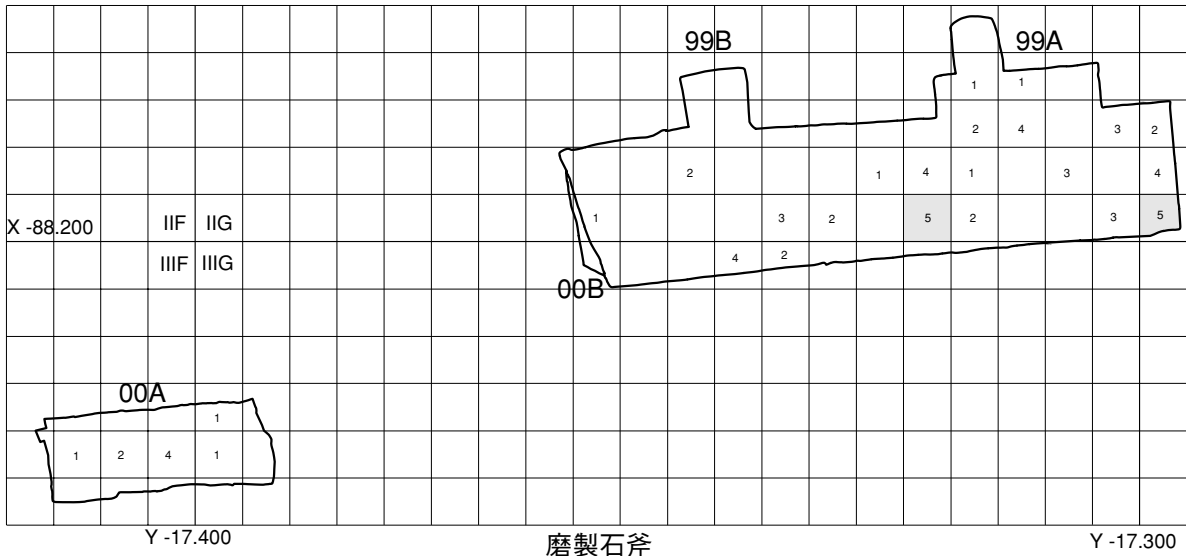
(C)で取上げた7器種に加え、石棒・石刀・石剣類の出土傾向を示したのが、第64図～第66図である。出土は調査区全面で広く見られるものの、特に出土の濃厚な部分が三地区(A・B・C)見られる。最も出土量の多い石鏃は他の器種に比べても独特な出土状況を示し、石錐と削器と磨製石斧、ピエス・エスキーユと使用痕剥片、打製石斧と石棒・石剣・石刀類がそれぞれ同様の傾向を示す。その中でも、石鏃と、打製石斧および石棒・石剣・石刀類の出土状況とは対照的で注目できる。



第 64 図 主要石器・石製品出土傾向図 1 (1 : 800)



第 65 図 主要石器・石製品出土傾向図 2 (1 : 800)



第 66 図 主要石器・石製品出土傾向図 3 (1 : 800)

### 3 土製品

土製品も縄文時代に属するものがほとんどである。一部時期の下と思われるものもあるが、ここで一括して報告する。

#### 土偶(1061～1068)

土偶は8点出土した。1061は頭部である。厚さ約1.5～2 cmほどの扁平な円盤状を呈し、それを胴部に貼付ける形態をとる。眼窩上および鼻の部分を粘土の貼付けによって表現されている。目と口は同じ細い棒状工具の刺突により付けられており、目は数度の刺突により横長となっている。頭部側面はナデによる面がいくつか見られ、頭頂部および両側面部には若干の凹みが見られる。表面の劣化が激しいため貼付けの耳の存在は不明であるが、左側面部にある沈線が耳への穿孔だったかもしれない。顎の部分は一段貼付けが見られる。全体に赤色顔料(ベンガラ)の塗布が見られる。1062は胴部で、残存しているのは、肩部から腰部にかけてと考えられる。乳房は痕跡を若干残存しているのみである。左腕部との接合部分にはヘラ状工具による刻目が付けられており、接合部分をなじませるようにしている。粘土の芯を中心にして、周りに粘土を貼付けて成形していった様子が分かる。1063～1067は腕部および脚部である。1068も円盤状の部分に粘土紐の貼付けが見られる。貼付けにはヘラ状工具による刻目がみられる。これも頭部の一部かもしれない。

赤色顔料  
の塗布

#### 耳飾り(1069～1071)

耳飾りは4点出土し、3点を図示した。すべて滑車形であり、側面観は台形状を呈する。1069は全面にナデ・オサエなどの指による成形痕がみられ、円形になっている平面部は全体的に若干の凹みが付けられている。中央部には穿孔が見られない。1070は中央部分がさらに薄くなっているものであり、断面形態がH字状を呈する。中央部には穿孔が見られない。1071はリング状を呈するものである。上面端部には一条沈線が巡る。

滑車形

#### 加工円盤(1078～1080)

3点図示した。1078は胴部片で器面には削痕が見られる。1079はLRを地文とした上に棒状工具による沈線が2条見られる。1080は底部の網代状圧痕のみられる底部部分を使用しており、編み方は1本越え・1本くぐり・1本送りである。

#### その他の土製品(1072～1083)

1072は、扁平な菱形をした完形品である。周囲を彫去することによって、釣針状の文様を形成している。文様構成は耳飾りに見られるものと類似する。全面に赤色顔料(水銀朱)が塗布されていた(註1)。1073は扁平で細長なものに細い棒状工具により2条の刺突列文が見られる。1074は、細長の土製品で、断面形状は隅丸方形を呈する。1075は素文の中実な土

---

(註1)第4章第1節参照

製品で、断面形状が三角形を呈する。上面は平坦面を作り、側面は成形のためか指による押えがみられ一部凹んでいる。三角磚形土製品の可能性も考えられる。1076は、鉤状になるものの両面に細い工具により押引の刺突列文が見られる。工具は半截竹管の可能性もある。1077は上面扁平の半円形をしたもので、下方は末広がり横方向に凹線が見られる。波状口縁の波頂部の可能性もある。1081は管玉状をしたもの、1082・1083は円形の土玉である。

#### 4 石製品

##### 石棒・石刀・石剣類(1536～1559)

総出土点数113点のうち、24点を図化した。1536～1539は陰刻がほどこされているものである。1536・1537は先端が先細になるものである。は先端が扁平になるもので、放射線状に対向する文様と、単斜方向の沈線で充填されている区画文が見られ、その間を太めの横沈線によって区画している。2は沈線区画された中に格子目文様が全周するものである。側面には被熱の痕跡、また一部には赤彩の痕跡が残されている。1538・1539は頭部の作り出しが見られるものである。3は側面から線状の挟りが3条確認できるものである。1539は上下2本の横沈線によって横帯を形成し、横帯には円文および三叉の彫去が見られる。端部上面にも彫去によって円文が残されている。1540・1541は作り出しの見られる頭部である。1540は平面形態が円形で、扁平かつ側面には稜線が見られる。被熱のためであろうか、全面に亀裂が見られる。1541の頭部は、明確に段をもって胴部と区別され、頭部先端は若干の丸みを持たせてある。14・15は完形品で、細い棒状を呈し、全面研磨で成形されている。1543～1548・1551～1555は胴部・もしくは基部と考えられる。1540は側面に被熱の痕跡が見られる。1546・1547は接合資料である。1554はタール状の付着物が帯状に付いているものである。1556は扁平で片側に鋭く稜を持つ、石刀と考えられる。1557～1559は扁平で両端に稜を持つ石剣と考えられる。1557は剥離技術により成形され、断面形状の一方が扁平、もう一方が三角形を呈する。1558は剥離のあと、全面研磨により成形しているものか。1559は平面形態が長い菱形状である。

##### 独鈷状石器(1560・1561)

1560は先端部の部分で、鋭く尖るものである。反りの見られるもので、一方には平坦面が見られる。1561は中央上面に挟り込みのある、中心部分と考えられる。これも反りを有する形態になるものと考えられる。両者とも断面形状が円形もしくは楕円形を呈し、いわゆる「西日本型独鈷状石器」(後藤1985)と思われる。

##### 岩偶(1562)

平面形が楕円形の、扁平な砂岩を使用している。断面形状は若干反りのみられる長楕円

## 赤色顔料

形を呈し、裏面の中央部は、若干の凹みがみられる。反りのあることによって、表面と裏面との区別がつけられている。上部三分の一の部分を作り出して頭部にしている。頭部と胴部との境は横方向に沈線状の凹みがつけられ、頸部としている。肩部と考えられる部分には、斜め方向の抉りがさらに入れている。上部三分の二にあたる場所には、横方向に1条線が巡る。一番下端と思われる部分には抉りが付けられ、脚部としたものとも考えられる。器面全面には磨痕が多く残されており、頭部付近を中心に赤色顔料(ベンガラ)の付着が見られる(註1)。

### 垂飾(1563～1566)

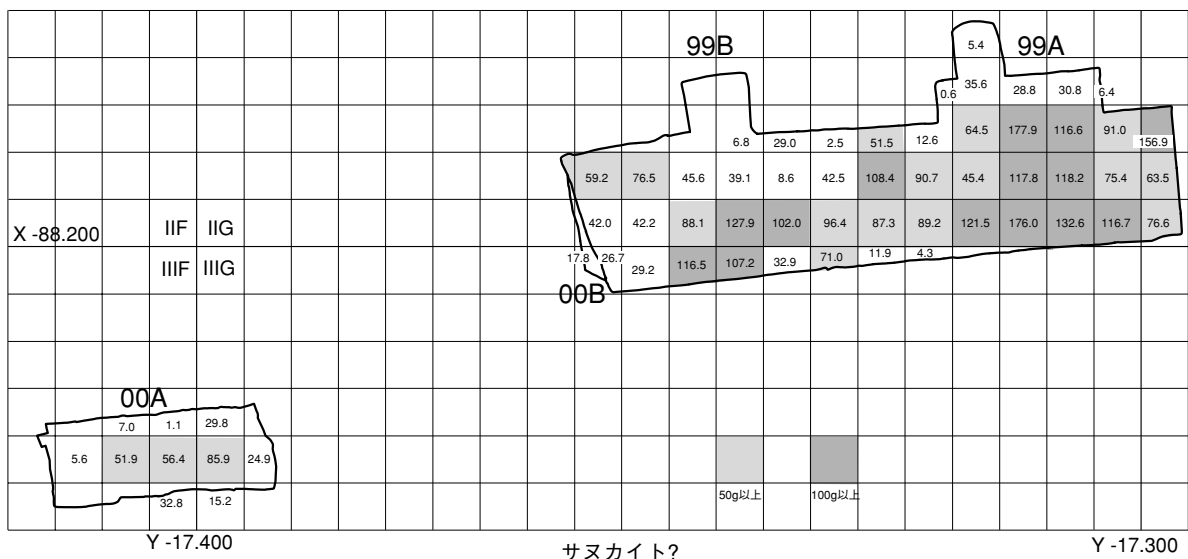
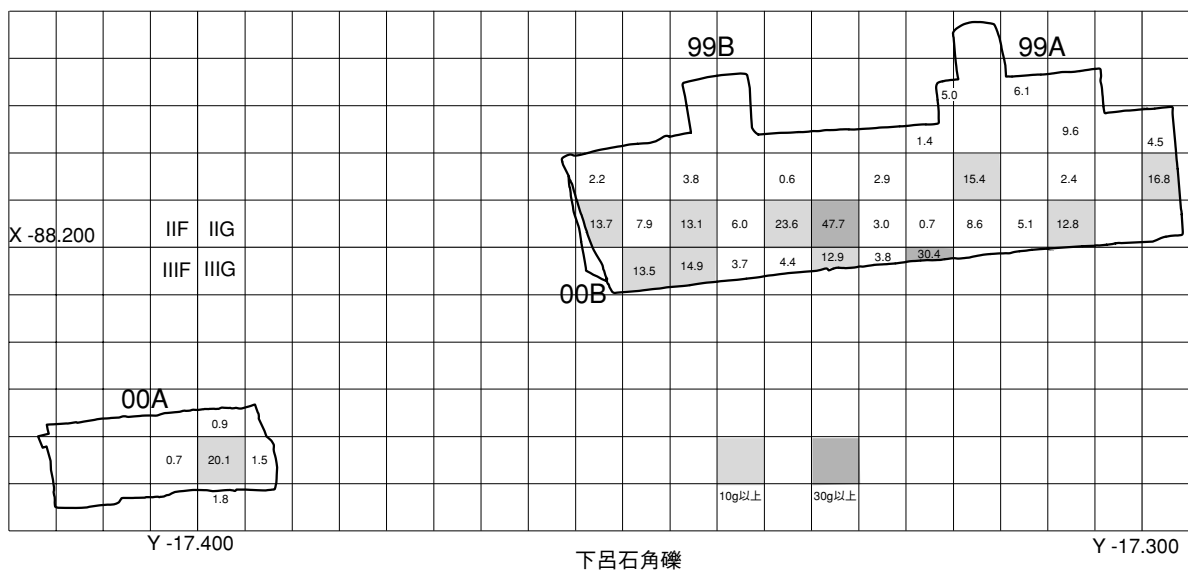
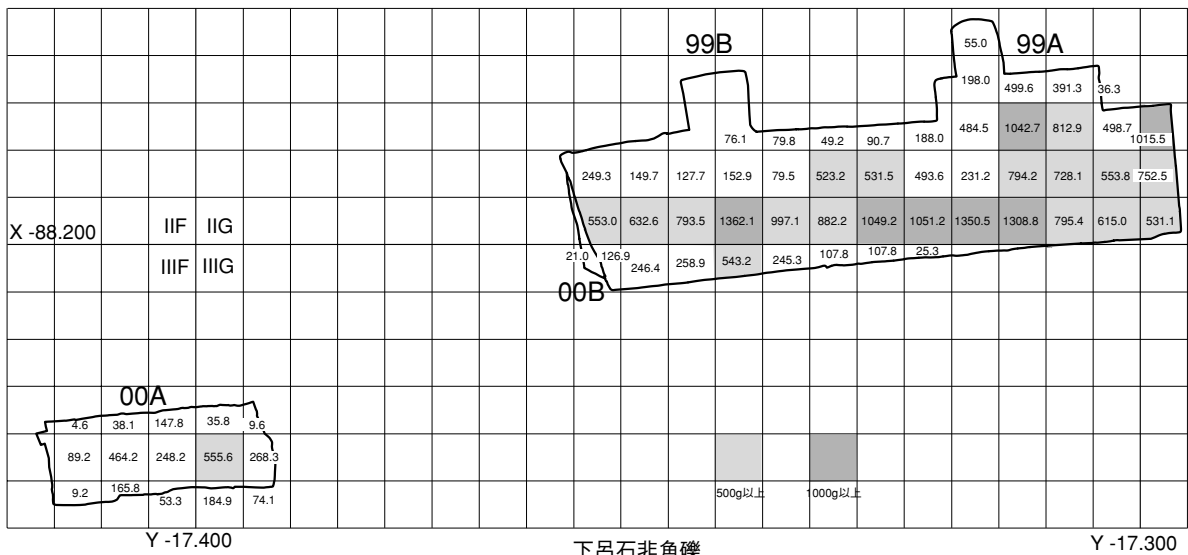
1563は断面形状隅丸長方形を呈するもので滑石製である。1564は球状を呈するもので、ヒスイ製である。1565は細長で、断面形状円形を呈するものである。一方端には段差が見られ切断時のままとっている。滑石製。1566は細長の管玉で、弥生時代に属する可能性がある。熔結凝灰石製。

### その他

1567は扁平に加工されたものである。両端は若干先細り状になっている。1568は全面を丁寧に研磨されたもので、細長い斧状の形態を呈する。1570も磨製石斧状の形態を呈するものだが、全面の研磨は丁寧である。1569は円形の両頭をもち、側面は稜を持つ。全面研磨により丁寧に作られている。1571・1572は中央部に凹みの見られるものである。1571は平面形状は菱形を呈し、中央部に二ヶ所、若干深い凹みが見られる。1572は扁平な石材を使用し、中央部に若干凹みが見られる。

---

(註1)第4章第1節参照



第 67 図 剥片出土分布図 1 (1 : 800)

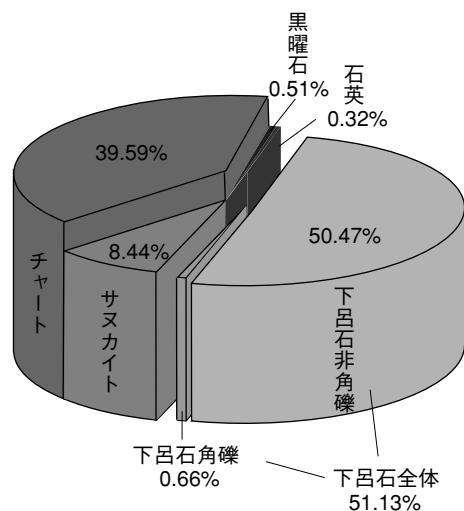


## 5 剥片類

今回の調査では、多くの剥片類の出土を見た。特に小型剥片石器の石材となるものでは、下呂石・チャート・サヌカイトと思われる緻密な安山岩・黒曜石・石英である。これらの総重量比を出したものが、第69図である。石材で最も多いのは下呂石で、以下チャート、サヌカイト、黒曜石、水晶の順である。

下呂石は全体の二分の一程度を占め、下呂石に対する優位性が見られる。下呂石の中でも、円礫と言われる河川転石と、角礫と言われる陸路により運ばれたとされる石材の両者が見られる。円礫と角礫の識別は自然面が残っている石材に対してのみ行えるため、今回は下呂石剥片内から確実に角礫であることが分かるもののみを抽出し、非角礫と角礫とで分類を行った。その比率は約80：1である。自然面の残されていない剥片には青灰色の濃いものが多数見られることから、実際には角礫の数量は少なくともこの数倍にはなるものと考えられる。

上記の石材ごとに出土状況を示したのが、第67図・第68図である。前に述べた石器の出土状況と対比できる。下呂石非角礫・サヌカイト・チャート・黒曜石・はほぼ同一の傾向を示し、石鏃の出土状況と類似する。下呂石角礫に関しては認定の仕方にあるものの、確実に角礫と分かるものに関しては、ピエス・エスキューや使用痕剥片とほぼ同一の傾向を示している。水晶は石鏃と比較的近い傾向を示している。



第69図 剥片石材割合図

## 第二節 弥生時代の遺物

牛牧遺跡からは弥生時代の遺物も若干出土している。ここでは、遺構内出土の資料を中心に報告する。

SB01  
(1084～1089)

1084～1087は甕もしくは台付甕である。1084は外面がナデ、内面が工具によるナデ調整である。口縁端部は尖り気味に受け口状になる。内面では頸部と胴部との境で明確に稜になっている。1085は外面がタタキのあとに縦方向にハケを施し、内面は工具による削りと思われ、指による押えの痕も胴部中段に多く見られる。外面には棒状工具により波状文が横方向に描かれている。1086は外面がタタキ、内面には胴部下半がヘラ削り、上半にはタタキで胴部中位には指による押えの痕が多く見られる。口縁部は折り返しの外反が著しく、上面にはタタキと同じ工具の痕が多く見られる。1087も外面は縦方向に刷け目がつけられ、内面には指押えの痕が多く見られ、タタキの工具で内面をナデている痕も見られる。1088と1089は台付甕の脚部である。1089は外面には縦方向の刷け目がよく残っている。内面は丁寧にナデられている。

SB02  
(1090・1091・  
1573)

すべて二次的な被熱を受けている。1090は口縁部に凹線の見られる浅鉢である。凹線は3本同時に引かれたようであり、凹線内はナデられ幅広くなっている。胴部上半にはハケメが残っており、胴部下半から底部にかけては縦方向によくナデられている。1091は胴部下半と上段とで明瞭に屈曲している、いわゆる体部が「ソロバン玉」状を呈する壺である。外面は縦および横方向にハケメが残されている。内面は縦方向にナデの痕跡が多く残されている。1573は台石もしくは砥石と考えられるものか。重量30kgある扁平な凝灰質砂岩を材とし、その片面のみを作業面とする。中央に数ヶ所の凹みが見られるものの、それらは縦および斜方向につながりがみられるか。縁辺および凹みの中には幅3～4cmほどを1単位とした、鋭い研磨痕が見られ、砥石として使用された可能性が伺えられる。

SK289(1092)

高坏の脚部。脚部下端で末広りの形態をとる。坏部内外面には指によるナデおよび押えが多く見られる。脚部外面では上半には平行沈線が8条、所によっては9条巡っており、上4もしくは5条と下4条とで一単位か。下半には六ヶ所の穿孔が見られる。調整は内外面ともハケである。

1093は広口壺の口縁部で、口縁部が立ち上がり気味に外反する。頸部は下方から上方にかけて櫛によるはね上げが見られる。

### 第三節 古墳時代後期の遺物

SX03

1094は器台。他に類をみない独特な器形であるものの、「装飾付須恵器」の範疇（山田1989・1998など）に含めておく（後述）。いま仮に柱状となる下半の部分を「脚部」、外上方に大きく外反する上半の部分を「鉢部」としておく。

製作は脚部と鉢部を鼓形に一体として成形したのち、鉢部の上端を粘土版で塞ぎ、さらに粘土版の上に立体的な造形物を貼り付けるという手順をとる。脚部はやや細身のくびれ部分から直線的に開き、裾部付近はわずかに有段状をなす。鉢部および脚部外面は2～3条単位の凹線によって区分され、3段4方向に透孔が配される。透孔は、中下段は三角形に近い台形、上段は台形に切削される。外面調整は1次調整としてタテハケを施したのち、2次調整として回転ヨコハケ（カキメ、C種ヨコハケ）を施し、一部を指頭でナデ消している。内面調整は指頭によるナデで、ナデの痕跡をそのままに残す。

粘土版は回転ケズリによって径33.0cmの正円形に成形されたのち、擬口縁状とした鉢部上端に接合される。粘土版の中央には径4.2cmの正円形の透孔が穿たれる。粘土版上面には手捏ねによる断面不整台形の粘土帯が「#」字状に貼り付けられ、粘土帯が直交する部分は円錐状に高く突出させている。なお、粘土帯貼り付けに際しては、予め貼り付け位置に割付線を線刻していることが、粘土帯が剥離した部分から判明する。さらに粘土版上面には煤の付着が認められる。やや軟質に焼成され、灰白色の色調を呈する。

1095は杯。口縁部はやや内傾し、先端は直立気味に細く仕上げる。器壁全体が薄く、焼成もやや不良で、全体に軽く脆い質感を与える。1096は有蓋高杯の杯部。口縁部はやや内傾し、先端部分を有段状に細く仕上げる。脚部には透孔を3方穿つ。硬質。1097は無蓋高杯の杯部片。1098は無蓋高杯の脚部片。方形と三角形の透孔を千鳥状に3方向ずつ配する。1099は小型の無蓋高杯。杯部にはヘラ工具によるキザミを施す。長脚の脚部には1段3方向の透孔を配する。1100は有蓋高杯の蓋の摘み部分で、上面は浅く窪む。1101は高杯形器台の鉢部。口縁部はわずかな有段状をなし、体部外面には波状文を施す。

#### 小結—S X 03 出土遺物群の編年的位置

ここでS X 03出土遺物群の編年的位置を明らかにしておく。杯(1095)と有蓋高杯(1096)は、口径がそれぞれ13.6 cm、13.8 cmと大きいこと、体部の回転ケズリの範囲は受部より下がった位置にとまること、あるいは口縁端部が有段状に薄く引き出されることなど、東山61号窯期の杯、有蓋高杯の形態的特長が多く認められる。無蓋高杯(1099)についても、脚部が長脚化していること、1段3方向に透孔を配することなどから東山61号窯期に位置づけられる。他の器種においても東山61号窯期の型式的内容を逸脱するような特長はみられない。したがってS X 03出土須恵器は東山61号窯期のまとまりを示す資料群であると判断され、共伴する装飾付須恵器の編年的位置も東山61号窯期に確定できよう。

#### 付．装飾付須恵器の位置づけ

## 1、「装飾付須恵器」の名称・分類について

牛牧遺跡 S X 03 で出土した「装飾付須恵器」(1094) について、類例との比較検討を通じてその位置づけを試みる。

さて、いわゆる「装飾付須恵器」(あるいは「装飾須恵器」、以下「装飾付須恵器」) にかんしては、山田邦和(山田1989・1998)、柴垣勇夫(柴垣1995)が全国的な集成を行ったうえで、体系的に分類・編年を試みている。ここで、山田による装飾付須恵器の定義「機能もしくは大きさの点で主たる器物があり、それにさらに副次的な器物をとり付けた須恵器」に従うなら、子器、小像を何ら配した痕跡がない当資料は装飾付須恵器には含まれない。山田は同様に「子器」、「小像」を配しない脚付連結須恵器も「装飾付須恵器」に包括せず、「(装飾付須恵器以外の)複合須恵器」として理解している(註1)。

これは「装飾付須恵器」をより限定すべきとの意見で、「装飾付須恵器」が古墳における葬送祭祀の場と密接不離であることにも配慮しての提案でもある。このとき、牛牧遺跡における出土状況が古墳において使用された場面を想像させるだけの具体的根拠を欠くことをことさらに強調するなら、牛牧遺跡例は山田のいう「その他の(装飾付須恵器以外の)複合須恵器」として理解されることになる。

しかし、ここでは他の装飾付須恵器との比較を通じて牛牧遺跡例を位置づけることを目標とすることから、「装飾付須恵器」を脚付連結須恵器も含めた広義の装飾付須恵器として理解し、牛牧遺跡例に対しても「装飾付須恵器」の名称を用いることにしたい。

## 2、類例との比較

牛牧遺跡の装飾付須恵器は、それが独特な器形であるために、広く支持されている山田による分類をそのままに適用することも難しい。そこでひとまずは、「脚部と鉢部を一体と

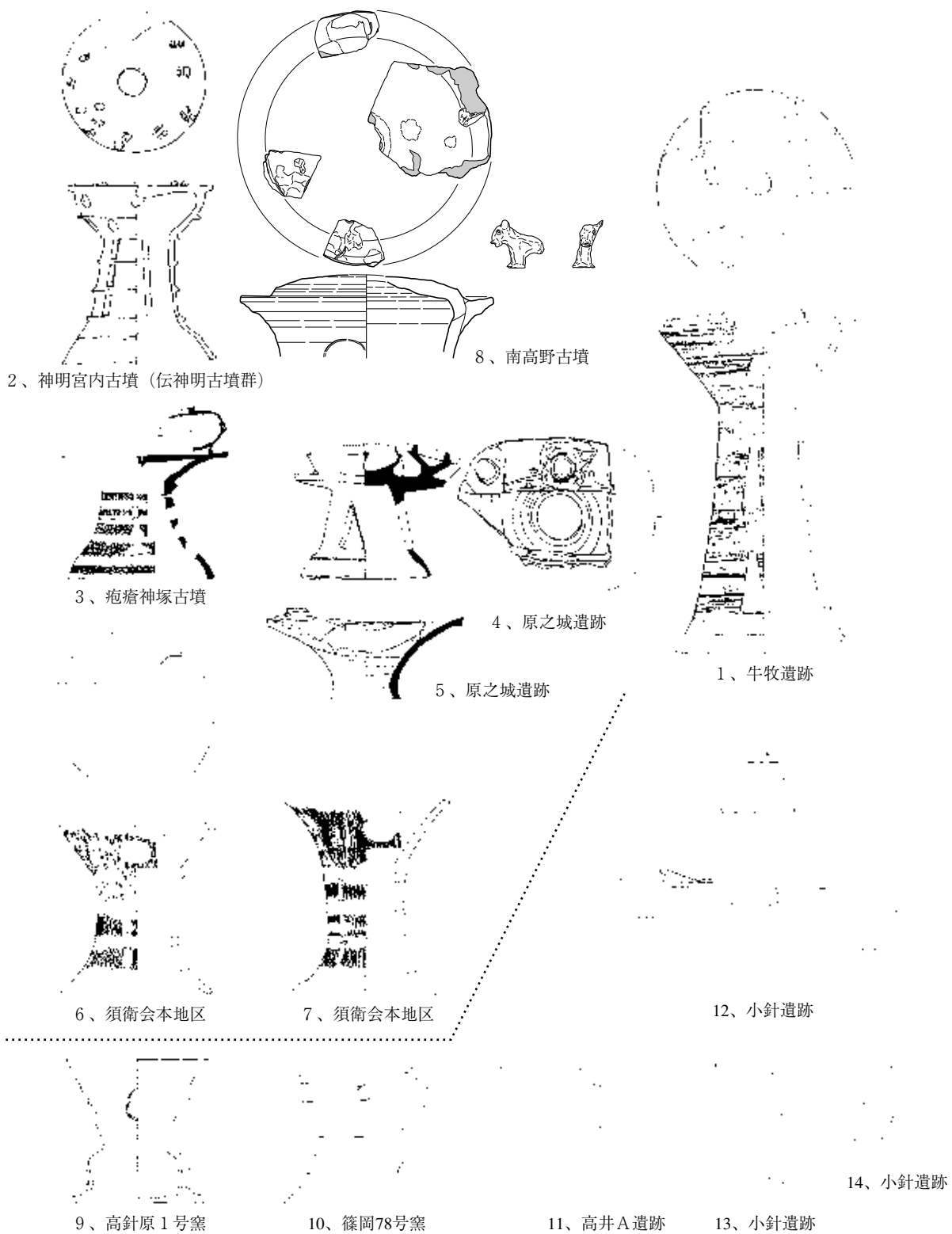
第2表 関連資料一覧表

| 遺跡名       | 出土遺構      | 所在              | 遺跡  | 時期     | 器高   | 口径   | 底径   | 備考               | 文献 |
|-----------|-----------|-----------------|-----|--------|------|------|------|------------------|----|
| 1 牛牧遺跡    | S X 03    | 愛知県名古屋守山区牛牧字中山  | 集落? | 6世紀前半  | 59.3 | 33.0 | 29.3 | 「#」字状、竪穴状遺構?、煤付着 |    |
| 2 神明宮内古墳  |           | 静岡県磐田市鎌田        | 古墳  | 5世紀後半? | 30.4 | 24.0 | 26.0 | 配像?、(伝)神明古墳群     | 1  |
| 3 庵倉神塚古墳  |           | 長野県茅野市宮川高部熊堂    | 古墳  | 6世紀中葉  | 28.8 | 30.4 | 24.2 | 子杯               | 2  |
| 4 原之城遺跡   | 中溝        | 群馬県伊勢崎市豊城町      | 集落  | 6世紀中葉  | 22.4 | 29.6 | 22.0 | 子杯、鉢部省略?         | 3  |
| 5 原之城遺跡   | 中溝        | 群馬県伊勢崎市豊城町      | 集落  | 6世紀中葉  |      | 32.8 |      | 子杯               | 3  |
| 6 須衛会本地区  |           | 岐阜県各務原市須衛町      | 古墳  | 6世紀後半? | 28.6 | 25.6 | 23.8 | 子杯?、美濃須衛産        | 4  |
| 7 須衛会本地区  |           | 岐阜県各務原市須衛町      | 古墳  | 6世紀後半? | 32.9 | 27.5 | 23.0 | 子杯?、美濃須衛産        | 4  |
| 8 南高野古墳   | 墳丘、周溝     | 岐阜県揖斐郡池田町片山宇南高野 | 古墳  | 6世紀後半  |      | 42.4 |      | 小像(動物)、装飾付壺?     | 5  |
| 9 高針原1号窯  | 灰層Ⅱ群      | 愛知県名古屋市東区高針原    | 古窯  | 7世紀後半  | 23.8 | 23.6 | 21.6 | 煤付着?             | 6  |
| 10 篠岡78号窯 |           | 愛知県小牧市城山        | 古窯  | 7世紀末   |      | 23.2 | 26.8 |                  | 7  |
| 11 高井A遺跡  | S D 31    | 三重県鈴鹿市徳田町字高井    | 集落  | 7世紀末?  | 24.3 | 31.2 | 23.0 | 煤付着、円筒状          | 8  |
| 12 小針遺跡   | A区包含層     | 愛知県岡崎市小針町       | 集落  |        |      | 17.2 |      | 煤付着              | 9  |
| 13 小針遺跡   | A区包含層     | 愛知県岡崎市小針町       | 集落  |        |      | 25.6 |      | 煤付着              | 9  |
| 14 小針遺跡   | A区 S I 82 | 愛知県岡崎市小針町       | 集落  | 8世紀後半  |      |      |      |                  | 9  |

文献

- 1、中嶋郁夫、1992「第四節 古墳時代」『磐田市史 史料編1 考古・古代・中世』
- 2、岩崎卓也、1988「3 古墳時代の信仰と葬制」『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
- 3、中澤貞治、1988「原之城遺跡発掘調査報告書」伊勢崎市教育委員会
- 4、渡辺 博、1999「美濃における装飾付須恵器の出現とその背景(上)」『岐阜史学』第95号 岐阜史学会
- 5、飯沼暢康ほか、2000「南高野古墳・ニノ井遺跡・市場遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第51集 財団法人岐阜県文化財保護センター
- 6、池本正明編、1999「細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第81集 愛知県埋蔵文化財センター
- 7、愛知県教育委員会、1983「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」
- 8、筒井昭仁、1998、「高井A遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告 115-8
- 9、斎藤嘉彦ほか、1999「小針遺跡」岡崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 岡崎市教育委員会

(註1)山田邦和は「その他の複合須恵器」の例として二重瀧、鈴付高杯、鈴台付壺、二重瀧、ある種の筒形器台などを挙げている。



第70図 関連遺物集成図(1:10)

して成形し鉢部を粘土版で塞ぐ」特長をもつ器形の須恵器の類例を求め、それらとの比較を行いたい。

さて、同様な器形の須恵器は、牛牧遺跡以外には9遺跡で13個体が確認される（第70図・第2表）。これらは形態から二大別できる。一つは粘土版の上面に小杯などの子器や小像を貼り付けているもの、あるいはその痕跡をもつもので（Ⅰ群）、静岡県神明宮内古墳（伝神明古墳群）、長野県疱瘡神塚古墳、群馬県原之城遺跡の2個体（註1）、岐阜県須衛会本地区の2個体（註2）、岐阜県南高野古墳の例が知られる。もう一つは粘土版の上面に子器や小像を貼り付けないもので（Ⅱ群）、愛知県高針原1号窯、三重県高井A遺跡、愛知県篠岡78号窯、愛知県小針遺跡の3個体（註3）がある。

前者のⅠ群は時期が明確に特定できないものがあるものの、5世紀後半から6世紀後半まで継続してみられる公算が強く、原之城遺跡例を除いてはすべて古墳からの出土であるという。これらは形態、帰属時期、出土状況とも装飾付須恵器に通例するもので、山田による分類を借用すれば、神明宮内古墳例が配像高杯形器台、疱瘡神塚古墳例、群馬県原之城遺跡の2個体、須衛会本地区の2個体の子持器台Ⅰ—2類（鉢部が外彎することを特長とするもの）となる。南高野古墳例については、上面を塞ぐ粘土版はわずかにアーチ状をなし、粘土版を接合後に突帯を貼り付けていることなどから、他のⅠ群の例とは区別される。さらに小像（動物）は突帯状に貼り付けられていた可能性が高い（註4）から、むしろ胴部突帯をもつ装飾付壺Ⅱ類（山田分類）との関連も想起されよう。

一方で後者のⅡ群の例はすべて7世紀後半から8世紀に位置づけられるようで、Ⅰ群との間には如何ともしがたい年代的な懸隔がある。出土状況は古窯からの出土と集落からの出土が相半ばし、古墳から出土した例は知られていない。つまりⅡ群は形態、帰属時期、出土状況の点でⅠ群とはまったく異質な存在であることは疑いなく、他の装飾付須恵器と同様な評価を与えることはきわめて困難であろう。

牛牧遺跡例は、形態や出土状況はⅡ群に通じるが、帰属時期はⅠ群との間に接点がある。さらに牛牧遺跡例にみられる粘土版の上面の造形については、他のあらゆる装飾付須恵器を

---

（註1） 原之城遺跡の2例のうち、一方の器台は鉢部がなく脚部に粘土版を被せ子杯を配する形態である。しかし、もう一方の器台が外彎する鉢部に粘土版を被せ子杯を配するものであることから、両者の関連が密接不離なものと考えてそれぞれを類例に加えた。

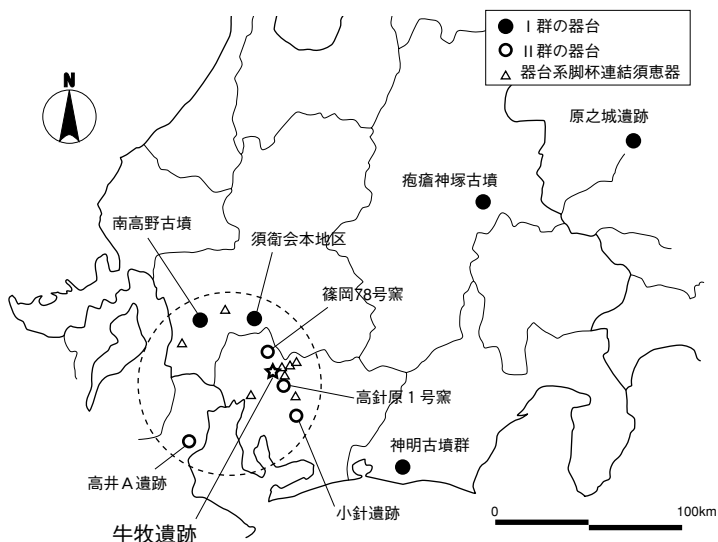
（註2） 須衛会本地区の2例のうち、一方は粘土版が遺存していないが、形態が酷似するもう一方の例から粘土版上には子杯を配していたと考えて誤りないとみられる。

（註3） 小針遺跡例は粘土版上面の被熱痕跡を根拠に鉢形の器形として図化されている（高針原1号窯例も小針遺跡例に倣って同様の器形として図化されている）が、これらもひとまずは類例に加えた。

（註4） 南高野古墳の装飾付須恵器18片（うち3片は別個体の可能性もある）は石室内ではなく墳丘や周溝からの出土で原位置を大きく違えて出土している。小像（動物）についてはその剥離痕跡から、突帯上に配されていた可能性が高いとみられるが、子壺片らしき破片については配置場所を特定しえなかった。

見通したところで、何らの手がかりすらもえられない。つまり、牛牧遺跡の装飾付須恵器はこれら類例との比較を通じてもお独り独特な位置を占めていることが容易に理解される。これが結論である。

しかし、楽観的な見方が許される余地がわずかながらでもあるとすれば、むしろ比較を躊躇したⅡ群に共通する特長を指摘することも可能ではある。それは粘土版上面の煤付着痕跡で、牛牧遺跡、高井A遺跡、小針遺跡の例、すなわち古窯出土の例を除いたすべての例に同様の使用痕跡が確認される（註1）。また、高井A遺跡例の粘土版中央に穿たれた正円形の透孔や小針遺跡例粘土版に貼り付けられた棒状の突起は、牛牧遺跡例に類似するもので、あるいは粘土版上面の使用痕跡と何らかの関連があったとも憶測できる。また、Ⅱ群が愛知県を中心に分布することも示唆的である。いずれにせよ、牛牧遺跡例とⅡ群の例との時代的空白を補う資料の出現が何よりも期待されよう。



第71図 関連資料の分布

### 3、脚付連結須恵器との関連

牛牧遺跡の装飾付須恵器をめぐって、類例の比較からは説得力にとむ解釈を提示することは現在のところ難しいように思われた。このとき、脚部と鉢部を一体として筒抜けに成形する器形の特長のみを強調すれば、器台系脚付連結須恵器との関連を考慮すべきかもしれない。なお、ここでいう器台系脚付連結須恵器とは、脚付連結須恵器のうち鉢部がなく脚部の形態が高杯に共通するもの（高杯系脚付連結須恵器とする）を除いた一群を呼称したものである（註2）。

脚付連結須恵器は牛牧遺跡例と同様に子器や小像をもたないことから、装飾付須恵器とは弁別すべきとの意見があることは先に述べたとおりで、これらが盛行する時期は6世紀

（註1） 煤はいずれの器台においても粘土版上面にのみ付着し、鉢部や脚部にはいっさい付着していないから、それが偶然によるものではないことは明らかであろう。

（註2） 山田邦和は脚付連結須恵器のうち脚部の形態が器台に似るものについて「東海型脚付連結須恵器」と別称している。ここでいう「器台系脚付連結須恵器」とは、山田が別称する「東海型脚付連結須恵器」とほぼ同義であるが、山田が「東海型脚付連結壺」に含めた愛知県岩津1号墳例は高杯を意識して製作されたことは明らかであることから、「器台系脚付連結須恵器」からは除外している。

前半を中心とするらしいことも、他の装飾付須恵器とはやや異なる特長である。また、器台系脚付連結須恵器は愛知県を中心とした東海地方にのみ分布し、なかでも牛牧遺跡周辺の守山区の古墳への集中の度合いは軽視すべきではない。つまり、器台系脚付連結須恵器と牛牧遺跡の器台は時間的・空間的にも近い距離にあったことは明らかであるから、牛牧遺跡の器台の製作には脚杯連結須恵器の何らかの製作意図が反映されていた可能性も考えられよう。

#### 4、まとめ

何らの解決の見通しもないまま、徒な着意に終始する結果となってしまった。見かけ上の類似を指摘したのみとの批判は避けられるべくもないが、ここに検討結果をまとめておきたい。

最初に関連を想起したⅠ群はそれぞれに形態が多様で、分布に目立った傾向は看取されないことから、それら相互のつながりは希薄であると考えらるべきであろう。また、Ⅱ群との関連は今後の類例の増加に期待するほかなかりう。最後に、地域的、時代的な背景を考慮して器台系脚付連結須恵器（東海型脚杯連結須恵器）との関連にも考えをめぐらせた。しかしこの想定とて、その妥当性を保証するには、古墳時代後期の牛牧遺跡にどのような性格が付与せられるのかを明らかにすることが不可欠であろう。

また、詳しくは論じなかったが、牛牧遺跡例の外面の回転ヨコハケ調整は尾張型埴輪に特徴的な技法そのものであることから（註1）、埴輪生産との関連にも配慮すべきであろう。いずれにせよ、この器台を「特殊なもの」とする評価に終わらせないためにも、すべて自今の課題として今後に望みたい。（早野浩二）

### 第四節 中世・戦国期の遺物

中世・戦国期の遺物も若干出土した。中世に属すると思われる山茶碗なども出土したものの、細片で図示もできない状況である。ここでは、SD01 出土資料について報告する。

1103は天目茶碗。高台を持ち、口縁端部はくびれをもって外反する。胴下半部には鉄錆釉の化粧掛が見られる。1104は内面に播目を持つ、いわゆる播鉢。逆ハの字状を呈する器形で、口縁端部は断面三角形をなし、端部外面は若干凹む。1105は匣鉢で、口縁部にかけて若干内湾するものの、ほぼ垂直に立ち上がる形態である。

以上はほぼ大窯Ⅱ期に属するものと思われる。

---

（註1） 須衛会本地区の2個体には、鉢部外面にタテハケ調整が施され、さらにこれらの器台には須恵質円筒埴輪がともなっていた可能性があることから、渡辺博人は埴輪生産との関係を強く意識している（渡辺1999）。

## 第四章 自然科学的分析

### 第1節 牛牧遺跡出土遺物の顔料分析

小村美代子(パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

牛牧遺跡は、名古屋市北東部、守山区大字牛牧・高島町・小幡中3丁目周辺に所在する。調査では、牛牧遺跡は縄文時代晩期・弥生時代中期・古墳時代中期・中世から戦国期にかけての4時期に分けられる。その中でも縄文時代晩期の遺構数・遺物数が圧倒的に多く、この時期が遺跡の中心の時期であったと考えられる。出土した縄文時代晩期の不明土製品・土器片・赤色塊・たたき石・土偶・岩偶・土器棺の遺物には、赤色物が観察された。

今回これら赤色物について蛍光X線分析を行い、赤色物の成分について検討した。

#### 2. 試料および方法

試料は、不明土製品(完形品)・土器片・赤色塊・たたき石・土偶・岩偶・土器棺から採取した赤色物である。測定試料は、赤色部にセロハンテープを押し付けて採取した。ただし測定試料は、純粋に赤色物のみではなく、表面に付着する土なども含まれている。分析は、セイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。装置の仕様は、X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流60 $\mu$ A、電圧50kV、試料室内は真空である。

#### 3. 結果

図1及び図2には、試料から採取した赤色物の蛍光X線スペクトル図を示す。また表1には、試料の詳細、蛍光X線分析による赤色顔料に関する元素やその他検出された元素などを示す。

第3表 出土遺物の付着赤色物から検出された元素と顔料の種類

[元素記号]Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Cu:銅、Zn:亜鉛、Hg:水銀

| 資料番号 | 遺物番号 | 器種  | グリット    | 検出・遺構  | Hg | Fe | 顔料の同定 | その他検出された元素               |
|------|------|-----|---------|--------|----|----|-------|--------------------------|
| ①    | 1072 | 土製品 | IIG19r  | 検II    | ◎  | ○  | 水銀朱   | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Zn       |
| ②    | 939  | 土器片 | IIG19r  | 検I     |    | ◎  | ベンガラ  | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Zn    |
| ③    | なし   | 赤色塊 | IIIIG1n | SK894  |    | ◎  | ベンガラ  | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Zn    |
| ④    | 1492 | 敲石  | IIG20m  | SK785  | ◎  | ○  | 水銀朱   | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Cu,Zn |
| ⑤    | 1061 | 土偶  | IIG18s  | 検II    |    | ◎  | ベンガラ  | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Zn    |
| ⑥    | 1562 | 岩偶  | IIG20q  | 検IV    |    | ◎  | ベンガラ  | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn       |
| ⑦    | 47   | 土器  | IIG19o  | SZ32棺身 |    | ◎  | ベンガラ  | Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Cu,Zn |

検出された元素は、水銀、鉄、アルミニウム、ケイ素、イオウ、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、銅、亜鉛がある。

なお、ロジウム(Rh)のピークはX線発生部の管球(ロジウムターゲット)に由来するものであり、赤色物に含まれる元素とは関係がない。また、イオウ(S)はセロハンテープに含まれる元素である。

#### 4. 考察

No 2 土器片・No 3 赤色塊・No 5 土偶・No 6 岩偶・No 7 土器棺の赤色物は、鉄が高率で検出されたことからベンガラである。なお、No 7 土器棺は肉眼観察で、下地にベンガラ、上地に黒っぽい何らかの物質が塗布された2重構造になっているものと思われる。No 1 不明土製品(完形品)・No 4 たたき石の赤色物は水銀が明瞭に検出され、明らかに水銀朱が付着しているといえる。また、鉄も検出されていることから、ベンガラも含まれている可能性も示唆される。しかし、遺物に付着する土壌にも鉄は含まれ、その影響で検出されている可能性もあるので、現段階では厳密には判断できない。なお、その他の元素も付着する土壌に由来するものと思われる。

一般的に赤色顔料には、ベンガラ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、水銀朱( $\text{HgS}$ )、鉛丹( $\text{PbO}_4$ )が知られている(市毛1984)。水銀朱は主成分元素が硫化第二水銀からなる辰砂(cinnabar、水銀朱)を磨り潰して作られるものを言う。ベンガラは狭義には酸化第二鉄(赤鉄鉱、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )の顔料をさすが、広義には3価の鉄が発色の原因となる化合物の顔料の総称として使われている。ベンガラは原料として天然の赤鉄鉱を用いる場合のほか、沼沢地などに沈積する含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱を用いる場合があり、これを含めればその産出地は全国無数にあることになる(成瀬、1998)。最近の研究では、ベンガラの中でも特徴的な形態の「パイプ状ベンガラ」と呼称されるものが、湖沼や湿地帯に生息する鉄細菌の生成物を燃焼したものということが分かってきた(岡田1997)。

水銀朱からなる赤色顔料の使用例は縄文時代まで遡り、岐阜県揖斐郡旧徳山村に所在する塚遺跡では、縄文中期末鏝付土器や縄文後期前葉浅鉢の外側において水銀朱からなる赤色物が検出され、当時赤色顔料として水銀朱が利用されていたことが分かった(菱田1998)。なお、縄文中期末鏝付壺型土器の水銀朱からなる赤色顔料の使用例は、現時点において最古級のものとして注目される。

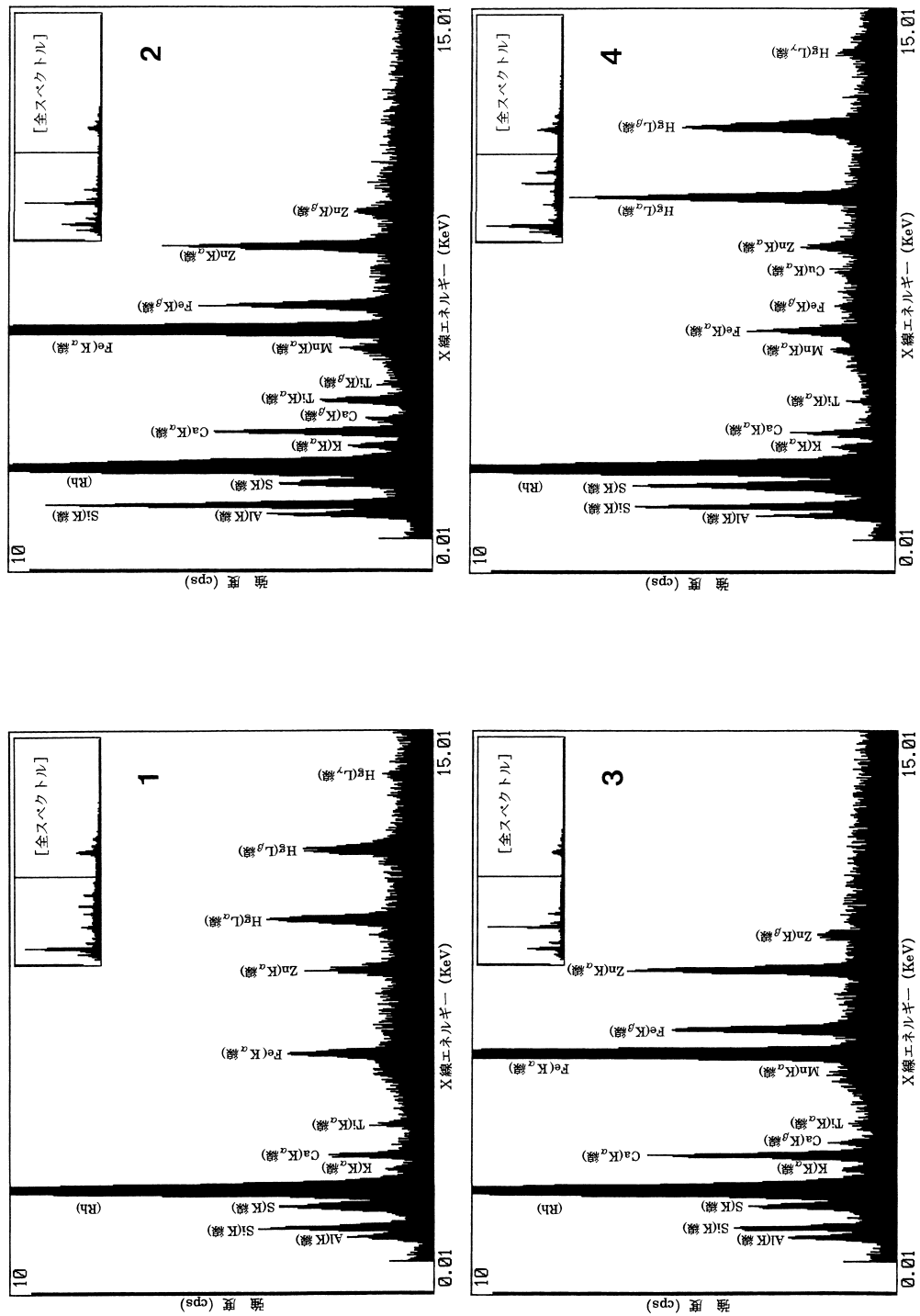
#### 引用文献

市毛 勲(1984)「増補 朱の考古学」、第2版、考古学選書12、雄山閣出版、324p

成瀬正和(1998)「縄文時代の赤色顔料Ⅰー赤彩土器ー」、考古学ジャーナル438、10p

岡田文男(1997)「パイプ状ベンガラ粒子の復元」、日本文化財科学会、第14回大会研究発表要旨集、38,39p

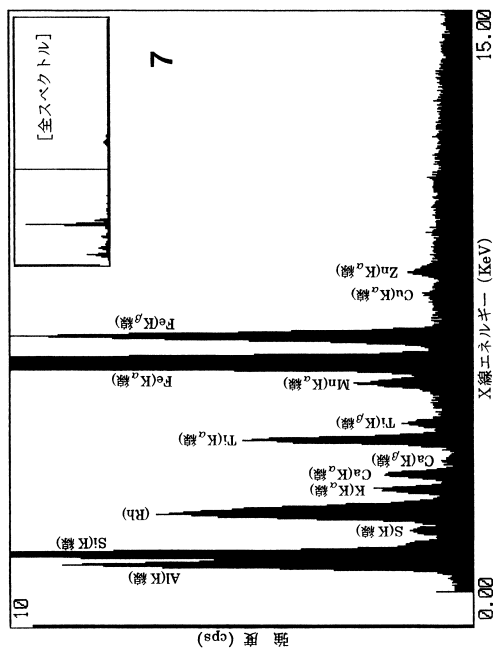
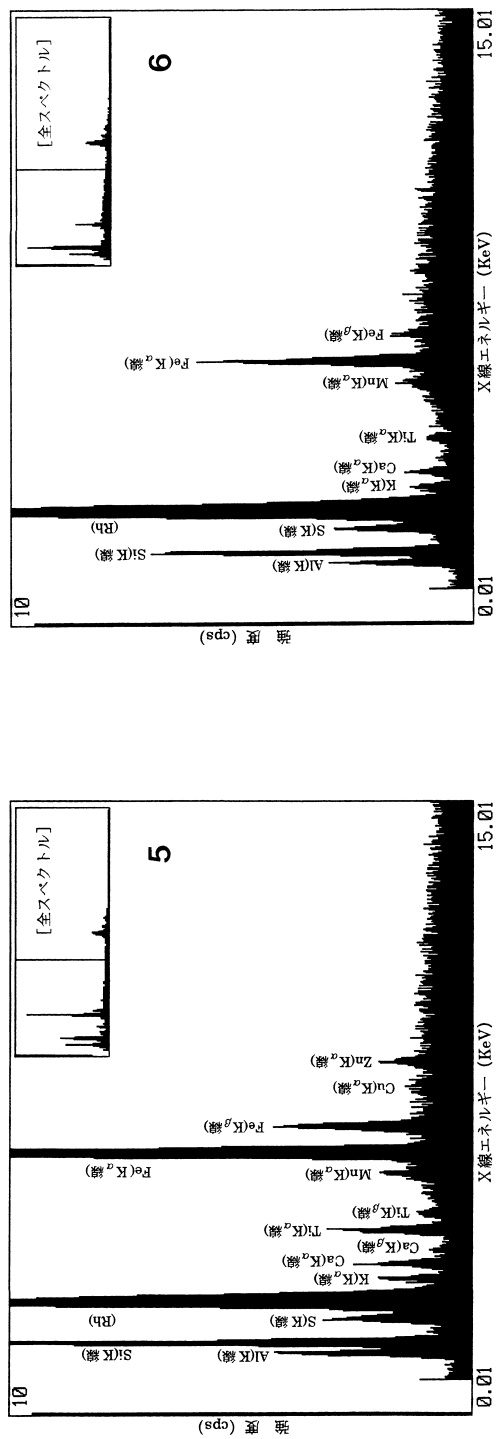
菱田 量(1998)「塚遺跡出土土器付着の赤色顔料について」、『塚遺跡』、岐阜県文化財保護センター調査報告書第27集、水資源開発公団・財団法人岐阜県文化財保護センター、147～152p



[元素記号] Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Cu:銅、Zn:亜鉛、Hg:水銀、Rh:ロジウム (X線管球ターゲットから)

第72図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

第72図



第73図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図  
 [元素記号] Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca、カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Cu:銅、Zn:亜鉛、Hg:水銀、Rh:ロジウム (X線管球ターゲットから)

第73図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

第73図

## 第2節 牛牧遺跡から出土した土器棺に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

ズコーシャ・総合科学研究所 中野寛子, 清水 了

門 利恵, 星山賢一

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。（1）

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2（2）（3）千年前のトウモロコシ種子、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態（4）で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて牛牧遺跡から出土した土器棺の性格を解明しようとした。

### 1. 土壌試料

愛知県名古屋市に所在する牛牧遺跡は縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代中期、中世から戦国期にかけてのものと推定されている。この遺跡から出土した縄文時代晩期のものと推定されている土器棺墓内の土壌試料を分析した。遺跡内での土器棺の配置状況および各土器棺内での試料採取地点を図1-1～1-に示す。試料No 1はSZ04、No 2はSZ24、No 3とNo 4はSZ34、No 5はSZ40、No 6はSZ41、No 7はSZ42のもので、いずれも横位に置かれた土器棺の底部から採取した。従って、今回の試料中には土器棺墓外から採取した対照試料はない。

## 2. 残存脂肪の抽出

土壌試料 140～205 g に 3 倍量のクロロホルム-メタノール(2:1) 混液を加え、超音波浴槽中で 30 分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び 30 分間超音波処理をする。この操作をさらに 2 回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に 1 % 塩化バリウムを全抽出溶媒の 4 分の 1 容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

第 4 表 土壌試料の残存脂質抽出量

| 試料No. | 試料名       | 湿重量(g) | 全脂質(mg) | 抽出率(%) |
|-------|-----------|--------|---------|--------|
| 1     | SZ02      | 204.6  | 3.9     | 0.0019 |
| 2     | SZ24      | 174.3  | 2.9     | 0.0017 |
| 3     | SZ34 No.3 | 158.9  | 2.9     | 0.0018 |
| 4     | SZ34 No.5 | 140.2  | 4.5     | 0.0032 |
| 5     | SZ40      | 195.9  | 4.0     | 0.0020 |
| 6     | SZ41      | 200.0  | 5.8     | 0.0029 |
| 7     | SZ42      | 142.2  | 1.2     | 0.0008 |

残存脂肪の抽出量を表 1 に示す。

抽出率は 0.0017～0.0032%、平均 0.0020% であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器などの試料の平均抽出率 0.0010～

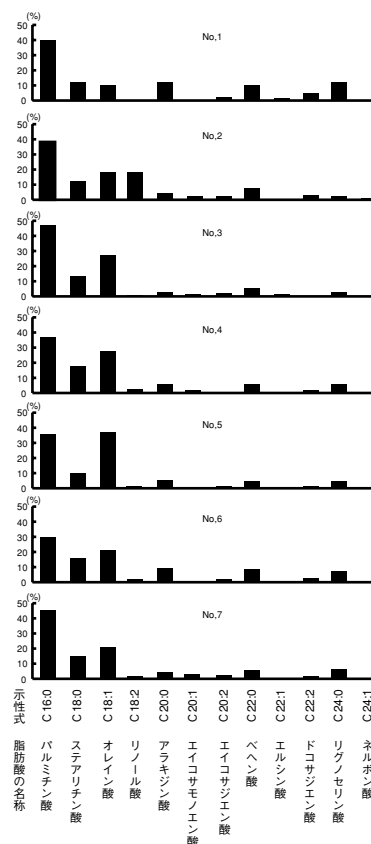
0.0100% の範囲内ではあるが、低めであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。その中では遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸が結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

## 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに 5 % メタノール性塩酸を加え、125 °C 封管中で 2 時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサノール-エチルエーテル(80:30:1)またはヘキサノール-エチルエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析し(5)た。

残存脂肪の脂肪酸組成を図 2 に示す。残存脂肪から 12 種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)の 10 種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。



第 74 図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

試料中の脂肪酸組成をみると、試料 No. 1 を除くすべての試料 No. 2～No. 7 がほぼ同一の組

成パターンであったが、No 2 がその中では若干異なっていた。このうち炭素数 18 までの中級脂肪酸だけをみると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸であった。次いで試料 No 1 ではステアリン酸、オレイン酸の順に多く、他のすべての試料 No 2 ~ No 7 ではオレイン酸、ステアリン酸の順に多かった。試料 No 2 ではパルミチン酸に次いでオレイン酸とリノール酸がほぼ同量分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれている。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数 20 以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸はそれら 3 つの合計含有率が試料 No 1 と No 6 で約 26 ~ 33%、他のすべての試料中で約 12 ~ 17% であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸 3 つの合計含有率は約 4 ~ 10% であるから、試料 No 2、No 3 はさほど多くはないが、他のすべての試料中での高級飽和脂肪酸含有量は多めで、特に No 1 と No 6 に多かった。高級飽和脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級飽和脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、牛牧遺跡のすべての試料中では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いで SZ04 試料 No 1 ではステアリン酸、オレイン酸の順に多く、他のすべての試料中ではオレイン酸、ステアリン酸の順に多いことがわかった。SZ24 試料 No 2 ではパルミチン酸に次いでオレイン酸とリノール酸がほぼ同量分布していた。高級飽和脂肪酸はすべての試料中に通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも多めで、特に SZ04 試料 No 1 と SZ41 試料 No 6 に多いことがわかった。

#### 4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸 (80:30:1) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸 (1:1) を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図 3 に示す。残存脂肪から 16 ~ 21 種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレ

ステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No 2、No 3、No 7に約8～11%、他のすべての試料中に約3～5%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、コレステロール含有量は試料No 2、No 3、No 7で多く、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約4～19%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミなどの堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールがすべての試料中に約1～4%、スチグマステロールがすべての試料中に約2～6%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中のカンペステロール、スチグマステロール含有量はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであったが、その中では少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料No 1とNo 2に4%前後、他のすべての試料中に約1～2%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはエルゴステロールは数%分布している。従って、試料No 1とNo 2のエルゴステロール含有量がわずかに多くはあるが、この程度の量は単に土壤微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料No 1、No 2、No 7に約3～4%、他のすべての試料中に2%前後分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、1～2%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の持ち主の動物種や性別、また遺(6)体の配置状況などが特定できる場合がある。今回は試料No 1、No 2、No 7でわずかに多くはあるが、種々の状況が判断できるほどの量ではなかった。しかし、それらの試料採取地点には哺乳動物の腸や糞便由来の脂肪がわずかにあるが残存していた可能性も考えられる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌(7)(8、9)で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8～23.5である。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比は試料No 2、No 3、No 7が0.6以上、No 1、No 4が0.6に近く、No 5とNo 6が0.6以下であった。従って、分布比が0.6以上か0.6に近かった試料

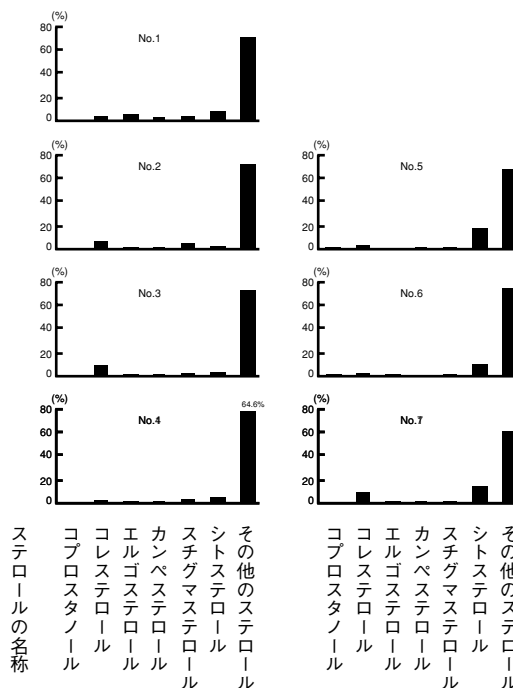
第5表 試料中に分布するステロールの割合

| 試料No. | コプロスタノール(%) | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-------|-------------|------------|------------|-----------------|
| 1     | 4.23        | 4.55       | 8.73       | 0.52            |
| 2     | 3.03        | 8.40       | 4.08       | 2.06            |
| 3     | 1.90        | 11.09      | 4.85       | 2.29            |
| 4     | 2.08        | 3.27       | 6.27       | 0.52            |
| 5     | 2.24        | 4.82       | 19.45      | 0.25            |
| 6     | 2.27        | 4.06       | 12.20      | 0.33            |
| 7     | 2.79        | 10.83      | 16.37      | 0.66            |

中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性が考えられる。

以上、牛牧遺跡の試料中には動物由来のコレステロールがSZ24試料No.2、SZ34試料No.3、SZ42試料No.7に多く、哺乳動物由来のコプロスタノールがSZ04試料No.1とSZ24試料No.2にわずかに多く、微生物由来のエルゴステロールがSZ04試料No.1とSZ24試料No.2にわずかに多く、他のステロール類はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめに含まれていることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はSZ24試料No.2、SZ34試料No.3、SZ42試料No.7が0.6以上、SZ04試料No.1、SZ34試料No.4が0.6に近い値を示し、

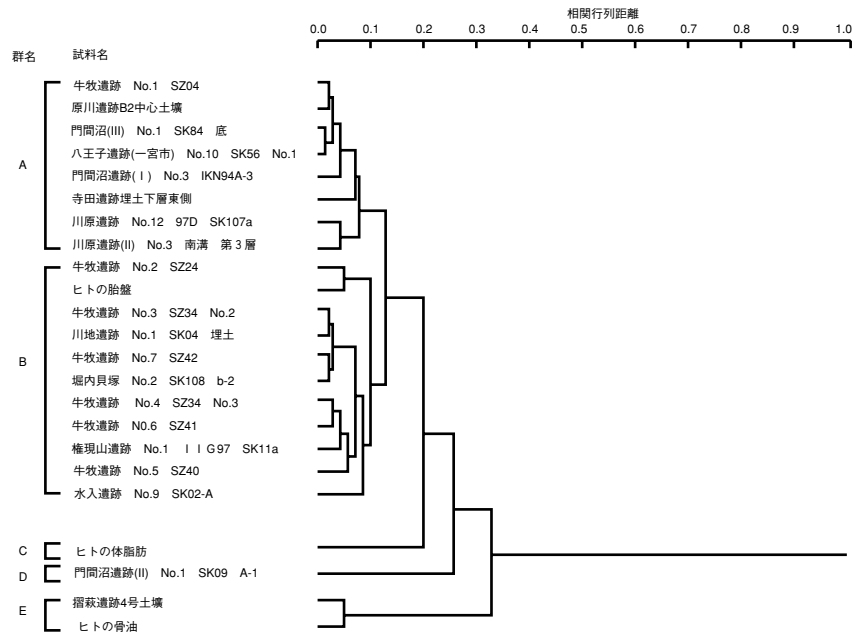
これらの試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることがわかった。ステロール分析の結果を考え合わせても、脂肪酸分析で多く含まれていた高級飽和脂肪酸が動物、植物のいずれに由来するかは推測できなかった。



第75図 試料中に残存する脂肪のステール組成

### 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ愛知県内の遺跡で、土壌に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬した場合の脂肪と類似していると判定した川地遺跡、水入遺跡、6世紀末～7世紀初めのものと推定されている円墳の周溝や土坑、中世のものと推定されている土坑、13世紀半ば～後半のものと推定されている土坑に残存する脂肪は、それぞれヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似していると判定した門間沼遺跡、土坑に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料、ニホンジカ、イノシシのような動物試料の脂肪と類似していると判定した八王子遺跡（一宮市）、土坑に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料中の脂肪、すなわち高等動物の体脂肪や骨油に類似していると判定した権現山遺跡、判定が困難ではあったが、脂肪酸やステロールのわずかな違いから大半の墓墳には微量ながら動物遺体または動物由来の脂肪が残存していたと推測した川原遺跡、同じ川原遺跡で異なる時期に分析し脂肪酸とステロールのわずかな特徴から動物由来の脂肪が微量に残存している可能性も考えられるが、性格判定は困難であったもの、出土土壌から人骨が検出されその土坑内に埋葬されたヒトの性別や血液型の判定を試みた堀内貝塚、出土土壌を土墳墓と判定した兵庫県（10）寺田遺跡、出土土



第 76 図 資料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡、出土土壌を再埋葬と判定し（11）た宮城県摺萩遺跡、ヒトの体脂肪、ヒトの骨油、ヒトの胎盤試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスタ分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスタ分析によりパターン間距離にして表したのが図4である。

図からわかるように、牛牧遺跡の試料No.1は原川遺跡、門間沼遺跡、八王子遺跡（一宮市）、寺田遺跡、川原遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。牛牧遺跡のすべての試料No.2～No.7はヒトの胎盤試料や川地遺跡、堀内貝塚、権現山遺跡、水入遺跡の試料と共に相関行列距離0.15以内でB群を形成し類似していた。他の対照試料はC～E群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.15以内の所にあり、互いに類似していた。牛牧遺跡の試料No.2はB群の中ではヒトの胎盤試料と相関行列距離0.05以内の所にあり、互いに非常によく類似していた。

以上、牛牧遺跡のすべての試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料やヒトの胎盤試料の脂肪と類似していることがわかった。

## 6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などに由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来

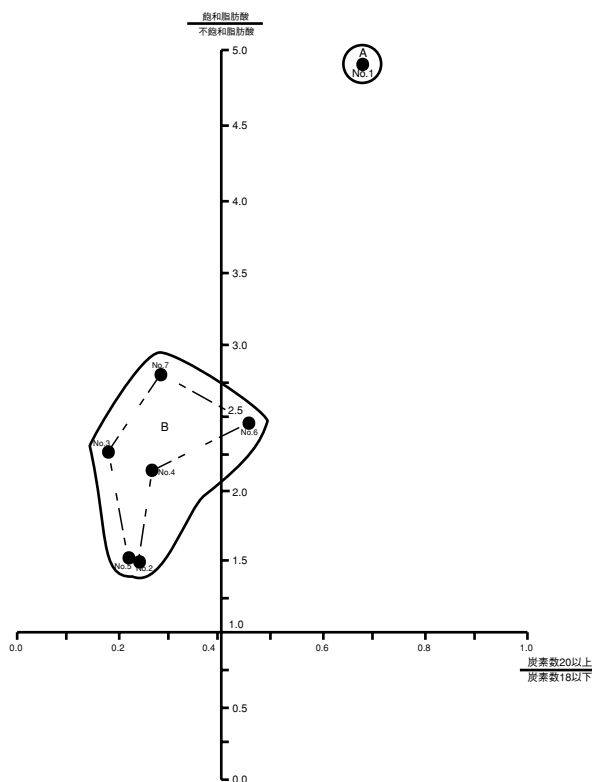
する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を図5に示す。図からわかるように、試料No.1は第1象限内の原点から離れた位置に分布し、単独でA群を形成した。他のすべての試料No.2～No.7はNo.6を除いて第2象限内に分布しB群を形成した。試料No.6も第1象限内ではあるがY軸に近い位置にあり、他の試料と共にB群を形成した。A群の分布位置は通常は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分に由来することを示唆する。今回の試料No.1には動物由来のコレステロールは植物腐植土並みにしか分布していないが、哺乳動物由来のコプロスタノールがわずかに多いことを考え合わせると、No.1に残存する脂肪は高等動物の体脂肪に由来すると推測される。B群の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、牛牧遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

## 7. 総括

牛牧遺跡から出土した土器棺の性格を判定するために、土器棺内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪のステロール分析の結果ではSZ24、SZ34、SZ42の試料中に動物由来のコレステロールがやや多く、SZ04、SZ24の試料中に哺乳動物由来のコプロスタノールがわずかに多いのみで、他の試料は動物性ステロールの残存を明確には示していなかった。コレステロールとシトステロールの分布比はSZ04、SZ24、SZ34、SZ42の試料が0.6以上か0.6に近い値を示し、これらの土器棺中には動物由来の脂肪が残存していることを示していた。コプロスタノールが分布していた試料もその量がわずかでコプロスタノールとコレステロールの分布比からヒトの男女の識別まではできなかった。しかし、残存する脂肪の脂肪酸分析と脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果からは、すべての土器棺中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料やヒトの胎盤試料の脂肪と類似し



第77図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

ていることがわかった。ヒト遺体やヒトの胎盤かどうかは動物種に特有な抗原抗体反応を用いた免疫試験を行うと詳細が判明する場合もある。また、今回は土器棺内土壌のみを分析しているので、土器棺を構成している土器(片)そのものを分析するとさらに詳細が判明したかもしれない。

#### 参考文献

- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10 巻, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292 巻, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : 「Analyse fruhgeschichtlicher Gefas-inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70 巻, 1983, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler Z.Physiol.Chem.』, 358 巻, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 眞編, クバプロ, 1995, pp148.
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40. (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡』, 石川県鳳至郡能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- (9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書第3集, 1987, pp191.
- (10) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I』, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第17集, 財静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- (11) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『摺萩遺跡』, 宮城県文化財調査報告書第132集, 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課, 1990, pp929.

### 第3節 牛牧遺跡の剥片石器

(株) アルカ 角張淳一

#### 1. 整理の方法

一次資料体の作成：最初にすべての石器を観察し、利器として完形に近く、剥離技術を特定できると判断した石器を3291点を選択した。この選択により全体像を明らかにすることを努めた。そうした選択にしたがって石器の器種分類を行い、石器群の内容を大きく把握する表を作成した。

二次資料体の作成；さらに、そこから図を書く石器を選択した結果297点選択した。また、その297点の中から剥離技術を説明できる石器22点の資料を対象に、デジタル顕微鏡の低倍率観察と分析を行ない、剥離技術の推定を行った。また、剥離技術の同定に際し、その剥離の力学的な理解を目標にし、それに基づいて剥離実験を行った。それらの剥離実験は二上山のサヌカイトを用いて、牛牧遺跡にある石材とほぼ同質のデータを得ることにした。その結果は別に添付した。以上の整理と分析によって、牛牧遺跡の剥片石器について、剥離技術を理解した石器群の全体像を把握した。

次に、そのデータをもとに再度全体の石器群を見渡し、牛牧遺跡の石器群とはいかなる石器群であるのかを以下に考察した。

報告書に掲載した実測図は297点であり、量の多い石鏃と両極石器類、二次加工剥片類は選択して図化し、それ以外の石錐・削器・搔器はほぼ全点図化した。また図化した石器には詳細な属性表を添付した。これらは全体の利器（一次資料体）の約1割をカバーしているので、サンプルとして十分な量であると思われる。また図化や詳細属性表の作業を行わなかった石器のうち、石鏃だけは剥離技術と石材と出土地区を記載した表を作成した。これらの表をもとにして以下の考察を行なった。

#### 2. 剥離技術の分析

##### i. 剥離技術分析の意義

石器の考古学は過去に残された石器から、当時の人々の文化を復元するのが、まず第一の作業である。現代人の考え方では、石器は刃物として臨機的につくられたという誤解もあるが、同じ形態の石器を製作するためには、素材の石割り技術と加工技術が一定で、さらにデザインの認識が明確でなければならない。石器製作は、そこに文化的な要請があるといえる。そして、その文化的要請というのは、文化の諸規則に準じて、許容範囲のある一定性という意味であり、ゆえに石器は文化の諸規則に則って製作技法が定まっている。

#### 剥離技術

その石割りと加工の技術を剥離技術と呼ぶ。剥離技術は、天然の石を加工する技術であるので、そこには工具とその身振り（作法）の理解が必要である。「工具」も「工具の使い方」の作法も文化の中では目に見えない慣習として当時の社会にあるので、大げさにいえば「慣習法（当時の常識）」のひとつである。また、石器のデザイン認識も「慣習法」の範囲で

あるし、石器の種類にどのような石材を選択するのも慣習法のなせるわざである。彼らは意識的にしろ、無意識的にしろ、そうした慣習法に沿って石器を製作している。したがって「技法」というのは、デザインと技術と素材の関係の一定性のことである。石器の分類・分析とは技法を明らかにすることが第一の目的であり、当時の人々の文化の作法を私たちの言葉で記述することが目的である（註1）。

## ii. 剥離技術の概要

さて技法を明らかにするために理解すべきなのが石という素材を変形させる技術である。これを「剥離技術」と呼ぶ。先史時代の石器の剥離技術を記述するには、その原理を整理する必要がある。そこで、以下に石器の剥離技術の簡単な整理を試みることにする。

剥離技術は、右手にもつ「工具の種類」と、「工具の身振り（作法）」を分類・記号化することで記述される。

石器の一般論でいえば、工具の種類とはハードハンマーとソフトハンマーの2種類である。これらの区別は、従来はハードハンマーが石、ソフトハンマーが骨・角といったステレオタイプの理解であるが、実際は石器に対して変形しないのがハードハンマーであり、変形するのがソフトハンマーである。これは剥離される石器との相対的な関係であって、乾燥鹿角は黒曜石にはハードハンマーとして作用するが、硬質頁岩にはソフトハンマーとして作用してしまう。なお、ハンマーの種類については、それ独自の理解が必要なため、付編として独立に文章化した。

### 剥離技術の種類

次にハンマーの身振りであるが、ハンマーを直接、素材に振り下ろす動作を「直接打撃」、タガネなどのパンチを素材に当て、そのパンチを加撃する「間接打撃」、ハンマーを素材に押しつけながら小さく薄い剥片を押し剥がす「押圧剥離」の3種類がある。

第6表 剥離技術一覧

|            | 直接打撃(D) | 間接打撃(I) | 押圧剥離(P) |
|------------|---------|---------|---------|
| ハードハンマー(H) | HD      | HI      | HP      |
| ソフトハンマー(S) | SD      | SI      | SP      |

以上のように、ハンマーの種類2×身振りの種類3で6種類の剥離技術が記述できることになる（以下表を参照）。具体的な剥離技術の見方は、今回の剥離面観察と実験による解説があるので、そちらを参照されたい。

## 3. 個別の石器の剥離技術分析

さて、これから牛牧遺跡の石器について、その加工の剥離技術について個別に詳しくみてゆくことにしよう。なおこの文章はCD-ROMの顕微鏡観察の文章に準じている。(編者註1)

(註1)「石鏃」とか「打製石斧」は器種と呼ばれるが、これは私たちが特定の石器を他の石器と区別するためにつけた恣意的な名称のことである。当時の文化の中での名称はすでに消えていくが、私たちにとって重要なことは、自分達の言語で過去の内容を記述することである。

なお、自分たちの理論によって過去を恣意的に記述・解釈することと、恣意的な言語（私たちの言語）をもって過去の内容を記述することは全く別の研究姿勢である。これについては「続石器研究の方法」(角張淳一、1999「東京考古」18、東京考古談話会)を参照願いたい。

(編者註1)この文章中の写真は報告書内に掲載することができなかった。添付CD-ROMを参照されたい。

162(報告書番号 1243): 下呂石。大形の瘤付き石鏃。写真 1 は正面基部の拡大写真。急角度の剥離のため打点部分が深く抉れている。打点は幅広でコーンとバルブが発達していない。剥離面全体が平らの幅広で、末端が階段状になっている。剥離面の平面形態は短冊形に整い、それが連続している。これは加撃の位置を固定しているからである。下呂石の硬さ、剥離面の大きさ、剥離された剥片の厚みを考慮すると、この剥離はソフトハンマーによる間接打撃と推定される。

写真 2 は裏面基部の拡大写真である。剥離面の規模は小さいが押圧剥離ではなく、ソフトハンマーの間接打撃である。

写真 3 は正面側の右側辺である。曲げの剥離の開始部分と剥離軸の長さを測定した。剥離の開始部分の幅が 4.5mm、剥離軸の長さが 8.7mm である。

291(報告書番号 1206): 下呂石。鋸歯縁の有茎石鏃。写真 1 は正面の拡大図である。二次加工で幅が狭くほとんど厚みのない剥片が剥がされている。これはソフトハンマーの押圧剥離と推定できる。打点は 1 mm 前後である。写真 2 は縁辺の鋸歯縁の拡大である。石器の縁で鋸歯縁が規則的に止まっており、石鏃の縁辺を意図的に鋸歯縁にしている。

312(報告書番号 1220): サヌカイト。有茎石鏃。写真 1 は正面左側辺の拡大図である。大きな剥離はソフトハンマーの押圧剥離である。縁辺は先の鋭いソフトハンマーでかすかな鋸歯縁をつくっている。写真 2 は正面基部左側辺の拡大写真である。剥離の開始部は規則正しい間隔の曲げの剥離で構成され、バルブはない。剥離の開始部に見えるのは曲げ剥離の際に生じるリップであり、これまでは散漫なバルブとして記述されていたものである。写真 3 は正面左側辺の縁辺の拡大図である。尖ったソフトハンマーで鋸歯縁をつくっている。

366(報告書番号 1225): 珪岩。有茎石鏃。写真 1 は正面左側辺の拡大図である。写真 2 は写真 1 をさらに拡大している。打点が明瞭で長方形の砕けが有り、バルブは深く発達している。ハードハンマーの押圧剥離である。打点の部分の長方形の砕けは、ハンマーがあたっているときに、圧縮の力によって石器の内部に複数の亀裂が生じ、その結果、打点直下に複数のコーンが生じ、それが同時に剥がれることで、この長方形の亀裂が生じる。写真 3 は裏面の左側辺の拡大である。正面と同じ様相だが、やや急角度の剥離面となっている。

371(報告書番号 1223): 珪質頁岩。有茎石鏃。写真 1 は正面左側辺の拡大図である。1225 と非常によく似た剥離面様相である。写真 2 は先端部である。打点に潰れはみられないものの、打点は明瞭で、コーンとバルブがよく発達している。写真 2 は器体中央の島状に残っている部分である。こうした島状の部分が残るのは、不自然であり、原因はその部分にだけ剥離面とは異なる力が加わって剥離の伸展を疎外したと推定される。これは考古学上で解釈するなら、その部分に固定具で押さえつけられていたのであろう。

419(報告書番号 1188):サヌカイト。凹基鏃。写真 1 は正面右側辺の鋸歯縁の拡大図である。先の細いソフトハンマーで目立つ鋸歯縁を製作している。写真 2 は正面基部である。ソフトハンマーの押圧剥離の様相がよくわかる。

424(報告書番号 1179):サヌカイト。凹基鏃。写真 1 は正面左側辺。ソフトハンマーの押圧剥離の様相がよく現れている。基部には挟りで器体の島が切られている。側辺加工と基部加工のときの石鏃の固定の方法が異なることを示している。写真 2 は裏面の先端である。ソフトハンマーの押圧剥離の様相がでてい

478(報告書番号 1218):サヌカイト。有茎石鏃。形態は飛行機鏃に似る。写真 1 は正面左側辺である。器体中央に大きな瘤が残り、加工はその瘤の直前で止まっている。加工はソフトハンマーの間接打撃である。写真 2 は正面の先端部である。左側辺の階段状剥離で止まっている深い剥離面はソフトハンマーの間接打撃の様相をよく示している。写真 3 は正面の中央から基部にかけての写真である。右側辺の手前の柄練りはソフトハンマーの特徴をよく示し、右側辺の中央の挟りは瘤の分厚い部分に加工を施したため、剥離が何回か止まって階段状剥離をつくりだしている。この剥離は急角度の剥離である。

487(報告書番号 1359):サヌカイト。石錐。写真 1 は正面の錐部である。ソフトハンマーの押圧剥離でつくられている。写真 2 は錐部先端であり、ソフトハンマーの押圧剥離の様相をしめしている。使用によるマイクロフレイキングは認められない。

683(報告書番号 1154):下呂石。凹基鏃。写真 1 は正面右側辺である。この剥離の様相は 1206 の下呂石の有茎石鏃と全く同じである。鋸歯縁のつくりかたも全く同じである。写真 2 は正面先端部である。これも側辺と同じでソフトハンマーの押圧剥離のみで構成されている。

1251:黒曜石。有茎石鏃。飛行機鏃に似る形態。径の細いハードハンマーの押圧剥離でつくられている。打点、コーン、バルブが非常に明瞭である。剥離面のリングは細かく波打っている。この現象は剥離を生じる力の他に別の力が干渉すると生じやすい。おそらく固定具からの反発力が関係しているのであろう。写真 2 は先端部の拡大である。いずれの剥離面もハードハンマーの押圧剥離の特徴をよく表している。写真 3 は石器中央部の拡大である。剥離面の様相はいずれもハードハンマーの押圧剥離の特徴を表している。

1254(報告書番号 1234):黒曜石。有茎石鏃。写真 1 は右側辺である。ハードハンマーの押圧剥離で加工されている。加工はやや急角度のために、コーンやバルブがよく発達している。剥離は石器の奥にまで届いていない。写真 2 は基部である。これも急角度のハード

ハンマーの押圧剥離である。写真3は裏面の右側辺である。ハードハンマーの押圧剥離で平らな加工である。これもコーンやバルブがよく発達している。

2039:下呂石。石錐。写真1は正面右側辺。右側辺は素材の直角の折れ面を錐部に利用し、ハードハンマーの押圧剥離で折れ面を整形加工している。写真2は錐部の裏面である。右側辺に見える加工は打点が明瞭でバルブが発達し、急角度の押圧剥離の様相をよく示している。写真3は正面の右側辺にある器体の整形加工である。平らな剥離はハードハンマーの押圧剥離によるものである。

2045(報告書番号1367):珪岩。石錐。2039と同様に片側辺に直角の折れ面をつくり、その辺と向かいの辺で錐部を形成している。写真1は折れ面の向かいの辺でハードハンマーの押圧剥離で急角度に加工されている。写真2は錐部の裏面の写真で、急角度の押圧剥離の打点部分がよく見える。打点の径はほぼ1 mmである。

2050(報告書番号1316):下呂石。石錐。写真1は胴部の加工。剥離の開始部が広がりコーンが形成されていない。打面の厚みは推定で2 mm程度と思われる。この剥離面は、これまで記述してきたソフトハンマーの間接打撃による加工と剥離面様相が全く同じである。写真2は錐部の加工の拡大である。ハードハンマーの押圧剥離の様相がよくでている。

2066(報告書番号1363):珪岩。石錐。写真1と2は錐部の加工の拡大である。打点が明瞭な剥離面や打点のところに長方形の砕けがみられる。ハードハンマーの押圧剥離の様相である。写真3は錐部の先端である。右端からマイクロフレイキングの剥離面が1枚観察できる。

3001(報告書番号1291):下呂石。尖頭器。両極石器を素材にし、分厚い側辺はソフトハンマーの間接打撃で、薄い側辺はソフトハンマーの押圧剥離で仕上げている。写真1は薄い左側辺の押圧剥離である。コーンがみられず、剥離の開始部の幅のまま剥離面が伸びている。剥離の開始部は広くやや階段状になっている。これは右側辺のソフトハンマーの間接打撃の剥離の開始部と同じであり、この石器の間接打撃と押圧剥離は同じ工具を用いていることが推定される。写真2は尖頭部を形成するソフトハンマーの間接打撃の剥離面である。急角度の剥離のために剥離の開始部が砕けている。写真3は右側辺のソフトハンマーの間接打撃の剥離面である。剥離の開始部が曲げの剥離となり、ソフトハンマーの様相を示している。

3008(報告書番号1300):下呂石。尖頭器未製品。分厚い両極石器の周囲をソフトハンマーの間接打撃で加工した尖頭器の未製品。写真1と3はソフトハンマーの間接打撃の剥離面

様相をよく示している。コーンが発達せずバルブは平坦である。剥離の末端は薄い階段状末端となっている。写真2は大きな階段状末端が生じている剥離面である。一見押圧剥離にみえるが、硬い下呂石が大きく剥がされて階段状末端となっている。

3018(報告書番号 1299): 赤珪岩。石鏃未製品。剥片素材の石鏃未製品。剥離技術はソフトハンマーの間接打撃。写真1と2は、発達しないコーンとバルブ、器体の奥にまでのびる剥離面が観察できる。切り立つ稜線も明瞭に観察できるが、この意味はソフトハンマーが「硬い素材」であることを示している。写真3は曲げの剥離が明瞭に観察できる。

3019(報告書番号 1306): 珪岩。尖頭器未製品。両極石器を素材に、径の細いハードハンマーの間接打撃で加工されている。写真1は尖頭部を形成する大きな一枚の剥離面である。打点が明瞭に残り、コーンが発達している。この剥離面全体がバルブとなって、剥離は終了している。

写真2と3は器体の中央部に残る瘤を拡大した。周囲から伸びてきた剥離面が瘤のところで止まっている。瘤の部分に固定具があったと推定できよう。

3020(報告書番号 1302): 珪岩。石鏃未製品。比較的薄い両極剥片を素材にして、周囲にハードハンマーの押圧剥離で加工をしている。写真1、2、3からは径の細いハードハンマーの押圧剥離の様子がよくわかる。この押圧剥離は不規則で剥離が伸びていない。こうした押圧剥離は石器の手のひらにのせて行う押圧剥離と推定できる。きちんとした石鏃にはみられない押圧剥離である。

3022(報告書番号 1399): 下呂石。削器。両極剥片の薄い側辺に、ハードハンマーの押圧剥離を急角度につけて鋸歯状の刃部を形成している削器。写真はいずれも刃部の拡大で、鋸歯縁の様相が明瞭にあらわれている。

#### 4. 牛牧遺跡の石器の種類

##### i. 石器の種類と用語の解説

器種は遺跡の中の石器という歴史的・文化的な属性とは無関係に、石器の考古学者がその石器を区別するためにつけた石器の名前である。まずは器種が分類されることで、見た目に違う大きな分類が実現される。次に、剥離技術や石材・素材と形態の一定性が分析され、そこに「石器の種類」という分類がなされる。石器の種類という分類は、その遺跡の石器が負う文化的要請という属性を示している分類である。こうした分類を行うためには、この遺跡の中で用いる石器の用語を整理する必要がある。そこで以下に用語の整理を行う。

#### 用語の整理

両極石器もしくはピエス・エスキーユ；素材を台石に置き、真上からハンマーを叩きつける剥離技術で定義された石器。牛牧遺跡ではこの剥離技術を用いて、石鏃・尖頭器・削

器などの剥片石器の素材剥片を剥離している。また両極打撃から剥離された剥片（両極剥片）を再び両極打撃を行うことで、次の剥離の行いやすいように加工している。したがって、牛牧遺跡のなかで両極打撃による石器は次の3種類がある。

**両極石核：**両極打撃による剥離技術で、石器の素材となる剥片を剥離しているもの。

**両極剥片：**両極石核から剥がされた剥片で、石器の素材となる剥片。

**石器ブランク：**両極剥片や剥片を再度両極剥離によって成形した石器。なお「ブランク」とは「加工された石器の素材」のことをいう。

**HvDの剥離：**垂直打撃の剥離技術のこと。素材の真上からハンマーを力強くうち下ろすこと技術。石核を左手に保持するとき、石核を台石に固定するときがある。後者が両極打撃である。

**剥片：**石核から剥がされた石片で、剥離技術の推定できるものに限定する。一般に剥片は、剥片剥離作業で生じる剥片、剥片石器の二次加工で生じる剥片、礫器の加工で生じる剥片があり、これらは石器製作の系列に準じている。牛牧遺跡では礫器がほとんど製作されないので、剥片石器文化である。

**裂片：**剥片以外の石片。荒割り作業、剥片剥離作業、二次加工作業のいずれでも生ずる。剥片との区別は、技術が復元できるかという観点で行い、主に打面が残っているか、技術が推定出来る場合以外のものをすべて裂片と呼称する。

**石鏃：**牛牧遺跡の石鏃は、最終加工に押圧剥離をなす三角形の身部を持つ石器と定義される。形態の多様性は主に基部に示され、一本足の「有茎石鏃」と三角形に抉りをいれる「凹基鏃」の2種類がある。また身部の側辺に角をつける「五角形鏃」も特徴的にある。

**尖頭器：**牛牧遺跡の尖頭器は分厚い素材を間接打撃によって加工をし、三角形に形態を成形した石器をいう。一部に石鏃のような基部をもつものも製作される。

**石錐：**牛牧遺跡の石錐は、細長い両極剥片を素材にしてHI（ハードハンマーの間接打撃）による急角度剥離で刃部を作り出している。刃部のつくりだして、石錐は2種類に分類される。刃部断面が急角度な三角形をしており、あらかじめ素材の折れ面を残す石錐と、両側辺から急角度の加工をいれて断面が菱形になる石錐がある。両者とも摘みを明瞭につくりだす石錐は牛牧遺跡にはない。

**削器：**垂直打撃の剥片を素材にして、その鋭い側辺に押圧剥離で鋸歯状の刃部を形成する削器、もしくはSP（ソフトハンマーの押圧剥離）やSI（ソフトハンマーの間接打撃）で直線上の刃部をつくるものがある。

**搔器：**素材は両極石器や垂直打撃の剥片を用い、急角度の刃部をつくりだす石器。牛牧遺跡では4点のみの石器である。

**二次加工剥片：**両極石器や垂直打撃の剥片にHD（ハードハンマーの直接打撃）やHI（ハードハンマーの間接打撃）の加工がなされている石器だが、形態が安定せず、作り手の意図が明瞭でない石器をこのように分類した。

**使用痕剥片：**垂直打撃の剥片の鋭い側辺にマイクロフレイキングが付いている石器。そ

のマイクロフレイキングは特定の傾向がみられず、今後、この石器の使用痕については、詳細な分析が必要である。

ホルンフェルス製の石器：ホルンフェルス製の大型剥片2点、礫器が1、削器1点の合計4点が出土している。いじれも径の大きなハードハンマーによる直接打撃で素材剥離が行われている。加工はソフトハンマーによる間接打撃もしくは直接打撃である。牛牧遺跡の小形剥片石器群には異質の石器類である。

## 5. 石鏃の製作技術と技法

### i. はじめに

3でみてきたように、加工技術が理解できたところで、次にはそれをもとに石器の分析を行うことにしよう。牛牧遺跡では石鏃と尖頭器が量的に圧倒的に多いので、その傾向を分析によって把握することで、牛牧遺跡の性格が理解できるはずである。

### ii. 石鏃と尖頭器の加工技術

牛牧遺跡の石鏃と尖頭器の加工技術の種類は、ソフトハンマーの間接打撃 (SI)、ソフトハンマーの押圧剥離 (SP)、そしてハードハンマーの間接打撃 (HI)、ハードハンマーの押圧剥離 (HP) の4種類であった。

その特徴を以下の第7表に整理しておく。

第7表 牛牧遺跡出土石鏃・尖頭器加工技術一覧表

|    | 打点         | コーン  | バルブ  | 末端            | 剥離面の深さ       | 剥離面の大きさ    | 遺跡内様相    |
|----|------------|------|------|---------------|--------------|------------|----------|
| SI | 幅広い線状か曲げ   | 未発達  | 未発達  | V字に切れ込むステップ   | 稜線が立ち1mmを越える | 剥離軸が7mm以上  | 一般的      |
| SP | 線状か曲げ      | 未発達  | 未発達  | フェザー          | 触診で厚みを感じない   | 剥離軸長10mm未満 | 一般的      |
| HI | 明瞭でやや潰れている | 発達   | 発達   | ヒンジかステップ      | 見ただ目で稜線が立つ   | 剥離軸が7mm以上  | 極稀       |
| HP | 明瞭         | やや発達 | やや発達 | ヒンジ、ステップ、フェザー | 触診で厚みを感じる    | 剥離軸が5mm以下  | 一部に限定される |

特に多い加工がSPであり、SIである。形態の整然とした大型の石鏃はSPとSIによって作られ、小形のものはSPのみでつくられる。これは牛牧遺跡の剥離技術の一定性がよく示されている。希に剥離の伸びない稚拙なHPがあり、これは固定具を用いないで、掌中に石器を固定して行うときに生じる押圧剥離である。こうした稚拙な加工の素材剥片は裂片が用いられる。珪岩には希にHIも用いられているが、このHIも剥離が伸びずに、石器の固定、工具の用い方にソフトハンマーを用いるときのような習熟性がみられない。

素材剥離の技術は、HvDによる垂直剥離もしくは両極剥離であるが、まれにSIによる縦長剥片もみられる。両極剥離は台石にあたる部分から薄い剥片が剥がされることになり、これらの剥片類は小さな石鏃の素材となっている。大きな石鏃や尖頭器の素材は、両極剥離ではなく、大きなハンマーの垂直打撃によるものと思われる。下呂石やサヌカイトは非常に硬い石材なので、手にじかに石核を保持しているかは疑問が残る。しかし垂直打撃にさいし、石核を側面から固定している可能性もあると推定したが、この点については石器からは明らかにできなかった。またHDによる縦長剥片もあり、これらは打面が残る場合が

ある。HDの剥片にはHhP（ハード・ハンド・プレッシャー：手のひら押圧剥離）の加工と結びつく傾向があるような印象をうけた。

### iii. 石鏃の大きさや厚みと技術

石鏃・尖頭器の剥離技術はソフトハンマーの剥離で一定しているが、剥離の技術に2種類あることがわかった。

やや大形で厚みが3mmから5mm程度の石鏃や厚みが8mm近い尖頭器には、打点が3mm程度の線状で、剥離の幅が5mm前後の剥離が付いている。これは当初押圧剥離とみたが、観察と実験結果を照合して間接打撃として認定した。また小形の石鏃で厚みが3mm前後のものは、打点が2mm以内で剥離面の幅が3mm程度の剥離がついていた。これは押圧剥離であった。これらの剥離の種類は、作る石器の石器大小と選択される素材の厚みに応じて使い分けられている。牛牧遺跡の二次加工の一定性と役割は、作られる石器のデザインと素材のノイズを矯正する石器の技術のプログラムの様相をもっているといえる。

### iv. 固定具

器体中央に瘤が残る独特の形態がある。この瘤の周囲をみると、剥離面が階段状に止まっていることがわかる。これは石鏃器体の部分を強く固定することで、その直下に圧縮の力の分布ができ、横からの形態形成の剥離の力を妨げた結果、瘤となったものとみられる。ゆえに、瘤のあることはこれまでの石鏃の製作技術とは異なる技術、具体的には新しい固定の技術とみることができる。そして、瘤のない石鏃もよく観察すると、器体の真中に瘤が取られた痕跡がわずかに残ることが観察できる。石鏃のほとんどが同じ固定の方法で制作されていたことが、今回の分析でわかった。

通常、縄文中期や後期の石鏃は厚みを減らす押圧剥離ではない。しかし、牛牧遺跡の押圧剥離には厚みを減らすことのできる強い力の剥離（間接打撃）が行われている。それを保証するのが非常にしっかりとした、いわば「万力」のような固定具であろうと推定できる。牛牧遺跡の文化と時代性の指標になるこれらの石鏃を「瘤付き石鏃」と呼称してもよいかもしれない。

### v. 瘤付きの未製品と瘤除去の完成品

大きな瘤のそのまま残る石鏃を観察すると、それらの石鏃には脚部が形成されていない。一方脚部の形成されている石鏃のほとんどには目立つ瘤がないものの、瘤を除去した痕跡がわずかに残されているものが多い。

また凹基鏃は脚が比較的浅く、脚部の挟りは全長の1/3以下である。これらのことから、最初に器体の成形が行われたあと、脚部をつくる時に瘤も除去していると推定できる。そして小さな石鏃では、ほとんど脚部の目立たない石鏃もあるが、こうした場合、瘤の除去のあとがみられれば脚部が目立たなくても完成品とみるべきであろう。

### iv. 瘤付き石鏃の工具と剥離技術

剥離の開始部が広く、バルブは発達せずに、開始部と同じ幅で石鏃の器体の奥に剥離が伸びる。剥離の末端は階段状剥離となり、そのステップはV字状に切れ込んでいる。こう

した工具痕は、経験上では通常の石のハンマーや先の尖った鹿角では経験上はできない。むしろマイナスドライバー状のタガネを用いて、押し剥ぐもしくはそぎ落とすといった剥離面である。剥離の開始部からは押圧剥離とも見間違うが、顕微鏡の観察と実験結果では間接打撃の可能性が示唆できる。こうした剥離面は縄文中期以前ではない剥離面である。しかし残念ながら、その工具が石製工具なのか、金属工具なのかの同定はできなかった。

#### vii. 部分磨製石鏃について

部分磨製石鏃の磨製の部位は瘤の部位に一致する。瘤をきれいに剥離したときに、牛牧遺跡の石鏃は瘤の周りに直線上かやや湾曲したV字型のステップが生じる。このステップを滑らかにするために「研磨」が行われたのではないかと今回は推定している。しかし、研磨によって中央の微妙な段差を取り去るものと、そのままにしておくものの両者が何故あるのかは不明である。

### 6. 両極石器・両極剥片について

牛牧遺跡の剥片剥離技術にはハードハンマーの垂直剥離（剥離技術名称：HvD）が特徴的にみられる。垂直剥離の石核を台石に固定すると、それは「両極打撃」と呼ばれる剥離技術となる。

牛牧遺跡では、これらの剥離技術は、石鏃や尖頭石器その他の剥片石器の素材となっていることが明らかになった。これらの両極石器類は、その9割以上が下呂石であり、それは剥片石器の石材構成に一致する（牛牧剥片石器分類表参照）。

さらにこの剥離技術には、石核の形態が異なることが明らかになった。それらは以下の3種類である。

- 1、通常の打撃の剥片を両極剥離する。
- 2、両極剥片を両極剥離する。
- 3、円礫をそのまま両極剥離する。

以上のうち、3については石器の素材やさらに小さな石核を製作する剥離技術と推定できる。1や2の両極剥離は二次加工であるが、種類の異なる剥片、特に珪岩製の通常の直接打撃の剥片が石器の素材として遺跡内にあることは注意される必要がある。

### 7. 石鏃の分析からみた牛牧遺跡の様相

#### i. 石器組成と総論

剥片石器の石器組成は、石鏃・石錐・削器・両極石器・両極剥片構成される。その他には打製石斧数十点、磨製石斧数十点があり、礫器、磨石、石皿などはほとんどない。また石匙は全くなく剥片石器組成から完全に欠落している。これまで述べてきたように多量の両極石器と両極剥片は石鏃などの剥片石器の石核や素材剥片となっている。ゆえに、牛牧遺跡では多量の石鏃・尖頭器が製作され、そこに少量の石錐・削器も製作され、打製石斧・磨製石斧は遺跡外から持ち込まれているという石器様相をとる。非常に偏った石器組成と

いえる。

さらに驚くべきことに、凹基鏃と尖頭器の形態は多様であるものの、その加工技術と工程は非常に統一されている。押圧剥離はソフトハンマーで、間接打撃もソフトハンマーである。押圧剥離と間接打撃は、石鏃素材の選択性すなわち石鏃・尖頭器の大きさと素材の厚みを制御するプログラムとしてはたらいっていることはすでに述べた。ゆえに大きな石鏃、分厚い石鏃や尖頭器には間接打撃が最初になされる加工の技術である。この傾向は下呂石・サヌカイトに顕著であるが、他の石材でもほとんど同様である。例外的に珪岩や黒曜石には間接打撃の剥片が素材として用いられることがあり、その場合は間接打撃は用いられない。

有茎石鏃の傾向も凹基鏃と全く同じであるが、珪岩・黒曜石などの稀少石材が比率から言えば多い。有茎石鏃の製作自体が少量であり、石材がばらつくといえよう。また東海・近畿地方に独特な凹基の五角形鏃があるが、有茎石鏃では形態的に五角形鏃との折衷形態がみられる。この現象は、凹基鏃の下位に折衷形式として有茎石鏃が混在しているという状態である。

さて、これらの様相を地区ごとの組成表によって見てみよう。

#### ii. 99B 区の分析

右表は石器にみられる最終加工を示した。凹基鏃と尖頭器のほとんどにはSIが見られるがこの表には記述されていない。大きさも形態も石鏃であるが、押圧剥離でなく間接打撃による凹基鏃が1点ある。こうした折衷形式のものは凹基鏃と

尖頭器と有茎石鏃にはしばしばみられる。いずれの石器名で表記するかは、その属性の束が強くひかれるほうに表記

してある。ハードハンマーによる加工が非常に少なく、石器群全体に共通する技術構造があることがこの表からわかる。

石器と石材の構成表を作成した。凹基鏃と有茎石鏃では、前者が圧倒的に多く、後者は薄い。石材構成の割合も下呂石が圧倒的であり、他の石材は稀少石材として存在している。しかし、割合でみるならば、有茎石鏃は比較的稀少石材が多く用いられていることがわかる。

第8表 99B 区の石鏃と尖頭器の加工技術

|         | HI | HP | SI | SP  | 合計  |
|---------|----|----|----|-----|-----|
| 凹基鏃     | 0  | 4  | 1  | 239 | 224 |
| 凹基鏃未成品  | 0  | 1  | 3  | 0   | 4   |
| 尖頭器     | 0  | 0  | 0  | 39  | 39  |
| 尖頭器未成品  | 1  | 1  | 0  | 0   | 2   |
| 有茎石鏃    | 0  | 2  | 1  | 54  | 57  |
| 有茎石鏃未成品 | 0  | 0  | 0  | 2   | 2   |
|         | 1  | 8  | 5  | 334 | 348 |

第9表 99B 区石鏃・尖頭器と石材の構成表

|         | サヌカイト | メノウ | 下呂石 | 珪岩 | 赤珪岩 | 珪質頁岩 | 合計  |
|---------|-------|-----|-----|----|-----|------|-----|
| 凹基鏃     | 2     | 1   | 235 | 6  | 1   | 0    | 244 |
| 凹基鏃未成品  | 0     | 0   | 0   | 3  | 1   | 0    | 4   |
| 尖頭器     | 0     | 0   | 39  | 0  | 0   | 0    | 39  |
| 尖頭器未成品  | 0     | 0   | 0   | 2  | 0   | 0    | 2   |
| 有茎石鏃    | 7     | 0   | 38  | 7  | 3   | 2    | 57  |
| 有茎石鏃未成品 | 0     | 0   | 0   | 2  | 2   | 0    | 2   |
| 合計      | 9     | 0   | 312 | 20 | 4   | 2    | 348 |

第10表 99B 区の石材と剥離技術の構成

|       | HP | HI | SI | SP  | 合計  |
|-------|----|----|----|-----|-----|
| サヌカイト | 0  | 0  | 0  | 9   | 9   |
| メノウ   | 0  | 0  | 0  | 1   | 1   |
| 下呂石   | 4  | 0  | 1  | 307 | 312 |
| 珪岩    | 4  | 1  | 3  | 12  | 20  |
| 赤珪岩   | 0  | 0  | 1  | 3   | 4   |
| 珪質頁岩  | 0  | 0  | 0  | 2   | 2   |
| 合計    | 8  | 1  | 5  | 334 | 338 |

右表でも同じような結論が示される。

### iii. 99A 区の分析

99A 区は 99B 区の数量の 3 倍弱の量が出土している。しかし傾向は 99B 区と全く同じである。99B 区との差異は 99A 区のように加工技術・石材ともに変異があることである。これは数量の差と大きく関係するのである

うから、その差異は文化の規則として取り上げる属性ではないだろう。この表で 99A 区の尖頭器は未製品を含むが、すべて尖頭器に含めてある。表のなかで HP は有茎石鏃に多いこと

第 11 表 A 区の石鏃と尖頭器の加工技術

|                 | HP | HP<br>/刃潰し | HP? | HI | SI | SP  | 合計  |
|-----------------|----|------------|-----|----|----|-----|-----|
| 凹基鏃             | 12 | 1          | 1   | 1  | 5  | 592 | 612 |
| 凹基未成品           |    |            |     |    | 3  | 37  | 40  |
| 石鏃未成品<br>(形態不明) | 7  |            |     |    |    |     | 7   |
| 尖頭器<br>(未成品を含む) |    |            |     |    | 1  | 69  | 70  |
| 有茎石鏃            | 18 | 1          |     | 1  | 7  | 140 | 164 |
| 有茎石鏃<br>未成品     |    |            |     |    | 7  | 14  | 21  |
| 合計              | 37 | 2          | 1   | 2  | 20 | 852 | 914 |

第 12 表 99A 区の石鏃と尖頭器の石材構成

|                  | サヌ<br>カイト | ホルン<br>フェルス | 安山岩 | 下呂石 | 凝灰岩 | 珪岩 | 珪質頁岩 | 黒曜石 | 水晶 | 赤頁岩 | 頁岩 | 流紋岩 |
|------------------|-----------|-------------|-----|-----|-----|----|------|-----|----|-----|----|-----|
| 凹基鏃              | 95        | 1           | 3   | 462 | 1   | 39 | 0    | 0   | 2  | 8   | 0  | 1   |
| 凹基鏃<br>未成品       | 1         | 0           | 0   | 34  | 0   | 3  | 0    | 0   | 0  | 2   | 0  | 0   |
| 凹基鏃未成<br>品(形態不明) | 0         | 0           | 0   | 0   | 0   | 7  | 0    | 0   | 0  | 0   | 0  | 0   |
| 尖頭器<br>(未成品を含む)  | 1         | 0           | 0   | 69  | 0   | 0  | 0    | 0   | 0  | 0   | 0  | 0   |
| 有茎石鏃             | 18        | 0           | 0   | 95  | 0   | 40 | 1    | 4   | 5  | 0   | 1  | 0   |
| 有茎石鏃<br>未成品      | 2         | 0           | 12  | 0   | 0   | 7  | 0    | 0   | 0  | 0   | 0  | 0   |
| 合計               | 117       | 1           | 3   | 672 | 1   | 96 | 1    | 4   | 7  | 10  | 1  | 1   |

がわかる。

99A 区の石器と石材も 99B 区と同じ様相である。尖頭器は下呂石でしか製作されていない。実際には尖頭器とした石器は、分厚くゴロゴロしており、そうした剥片剥離の過程を示す石材は下呂石しかない。つ

まり、牛牧遺跡では下呂石が大量に持ち込まれ、あとの石材は完成品に近いが、素材剥片で持ち込まれた可能性がある。そうした状況下でサヌカイトが下呂石の次点ということは、牛牧遺跡を残した集団の紐帯関係に示唆的である。最も、石材ばかりでなく、下呂石とサヌカイトは剥片剥離のために原石を遺跡に持ち込む

第 13 表 99A 区の石材と剥離技術構成

|         | HP | HP/<br>刃潰し | HP? | HI | SI | SP  | 合計  |
|---------|----|------------|-----|----|----|-----|-----|
| サヌカイト   | 0  | 0          | 0   | 0  | 2  | 115 | 117 |
| ホルンフェルス | 0  | 0          | 0   | 0  | 1  | 0   | 1   |
| 安山岩     | 0  | 0          | 0   | 0  | 1  | 2   | 3   |
| 下呂石     | 2  | 0          | 0   | 0  | 4  | 665 | 672 |
| 凝灰岩     | 0  | 1          | 0   | 0  | 0  | 1   | 1   |
| 珪岩      | 25 | 0          | 0   | 1  | 11 | 59  | 96  |
| 赤珪岩     | 0  | 0          | 0   | 1  | 1  | 8   | 10  |
| 珪質頁岩    | 0  | 0          | 0   | 0  | 0  | 1   | 1   |
| 黒曜石     | 4  | 0          | 0   | 0  | 0  | 0   | 4   |
| 水晶      | 6  | 0          | 1   | 0  | 0  | 0   | 7   |
| 頁岩      | 0  | 1          | 0   | 0  | 0  | 0   | 1   |
| 流紋岩     | 0  | 0          | 0   | 0  | 0  | 1   | 1   |
| 合計      | 37 | 2          | 1   | 2  | 20 | 852 | 914 |

という以外は、石器組成、技術構成など全くといってよいほど同じである。

#### iv 今後の課題

関東・甲信越では、加曽利B式土器が出現すると、有茎石鏃が遺跡に加わるようになる。そして、加曽利B式から大洞BC並行期まで、ひとつの遺跡の中で土器型式は連続する。そうした遺跡は、長野県では飯田市中村中平遺跡（註1）、小諸市石神遺跡、栃木県八剣遺跡などがある。おそらくこの時期の幅にまだ多くの遺跡があると思われる。

そうした遺跡の石器組成は、石鏃が第一であり、次に石錐、さらに少量の削器類があり、石匙はほとんど組成しない。また両極石器も多量に組成し、それらは主に凹基鏃の素材剥片の剥離技術となっている。有茎石鏃は間接打撃の端正な縦長剥片を素材にして、細いソフトハンマーの押圧剥離で非常に精緻に仕上げられるものと、やや幅広のハードハンマーの工具でありきれいでない有茎石鏃、そして同じハンマーでつくられる凹基鏃がみられる。これらの天竜川以東の遺跡では、加曽利B式土器と有茎石鏃が、それまでの土器型式と石鏃形態を下位におき、在地の土器と石器が加曽利B式や有茎石鏃との折衷形式を生み出す構造をもつ。

その次のステージは大洞C式並行から遺跡は始まるようだが（註2）、その剥片石器の構造は変わりはなく、弥生中期までほとんど同じ石鏃が製作され続けるようである（註3）。ただし、石鏃の量は少なくなり、形態も小さく貧弱になる。

牛牧遺跡の場合は、天竜川以東とは別の様相であることが今回の分析によってわかった。ここでは、大量の凹基鏃が製作され、少量の有茎石鏃はむしろ凹基鏃との折衷形式をうみだし、凹基鏃と有茎石鏃の関係は関東・甲信越とは逆転している。そして下呂石を大量に遺跡に持ち込みつつ、サヌカイト製の石器と全く同じ製作技法の構成（石器群構造）をもつのである。この時期の列島の歴史的な動きが、こうした石器群構造に示されていると考えたい。なお、今後は土器の分析とともに、同じ分析を各遺跡ごとに積み重ね、遺跡間を比較検討しなくてはならないだろう。

#### 参考文献

- 『石器研究法』 竹岡俊樹著 言叢社 1988
- 「石器研究の感想」 角張淳一 『東京考古』 東京考古談話会 1998
- 「続石器研究の感想」 角張淳一 『東京考古』 東京考古談話会 2000
- 『日本の古代遺跡50 長野』 桐原健・樋口昇一共著 保育社 1997
- 『八剣遺跡』 栃木県埋蔵文化財センター 2001（印刷中）
- 『石神』 小諸市教育委員会 1994
- 『榛名平遺跡』 佐久市教育委員会 2001（印刷中）

---

（註1） 中村中平遺跡の遺物は飯田市教育委員会の馬場保之氏のご厚意で実見させていただいた。

（註2） 川崎義雄氏のご教示による。

（註3） いわき市 矢島敬之氏のご厚意で「荒田目遺跡」（弥生中期）の石器を実見させていただいた。

## 第五章 今後の課題

牛牧遺跡の総合的評価を論じる予定であったが、それは後日起稿することとし、ここでは発掘調査・整理作業の段階で問題として上がってきたことを提議して、今後の課題とする。

### 第一節 遺構

#### 1 土器棺墓

調査の結果、棺身が土器である土器棺墓が43基検出された。過去3回の調査で7基以上出土しており、それを合わせても一遺跡からの出土では尾張地方で最多となる。棺の構造上、大きく分けて、

(1)土器そのままの形で棺身にするもの

(2)土器片をその場で組み合わせることによって全体として棺を形成するもの

の2群に大きく分れることが推定された。さらに(2)には、別個体の複数破片を組み合わせる棺を形成するものと、元来一個体であったものを割り、遺構の場所でまた組み合わせたとと思われるものの、2分類が見られる。

他遺跡での  
類例の存在

第一の問題として、(2)の形態が他の遺跡においても認められるかどうかである。第2章でも述べたように、土器の大形破片が遺構底面に残存しているのみの土器棺墓が、組み合わせの棺であった可能性もある。今後このような事例の検証が必要となるであろう。土器棺墓の発掘の場合、検出時にかなり乱されたような状態のように見えていることがある。遺構の様相を明確にさせるために、そこからさらに間引きをして下の土器を明確に出してから図化・取上げを行う場合が多い。しかし今回、一見すると乱れた状態であることに意味があるのではないのかということを提起しておきたい。それは、組み合わせの土器棺が潰れたことを示す可能性が高いからである。

組み合わせる土器の  
相関関係

また複数個体数で棺身・棺蓋が構成されているもののなかで、土器の器形・調整を観察すると、ある相関関係が見られる。

(a)同様の器形・調整のものを使用しているもの

(b)無突帯刻目文土器(V群土器A類)と口縁部内湾の粗製土器(IV群土器E類)

(a)ではSZ04・SZ06・SZ26・SZ27・SZ37が、(b)ではSZ29・SZ35が相当する。

以上のように棺に使用する土器は同様の器形・調整のものを蓋・身にするものであることがしばしば見られる。そのために取上げ時に詳細な記録をとることが重要となる。整理の段階ではじめて、実は予想以上の個体数であったと判明することが多い。類似の複数個体で組み合わせている場合、棺・身をすべて一括取上げせずに、その組み合わせの形が検証できる記録保存が望まれる。

組み合わせ方の  
検証ができる  
記録保存

土器棺棺身の口縁部方向を主軸とした方向に関して、今回の調査では、方向A～Dの4方向に集中することは第二章で指摘した通りである(第41図)。かつての守山市が行った調査分に関しても、それが当てはまり、方向AにはNo.4、方向BにはNo.1・3、方向CにはNo.2、

方向DにはNo.5が入る。土器棺墓の埋葬方向に規則性が見られると報告されたものはほとんどない。今後、このような類例が他にも提示されことを期待したい。

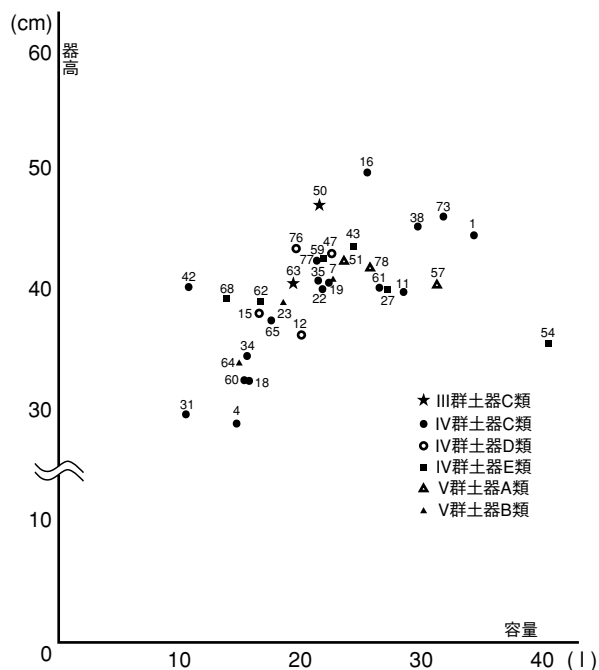
## 2 土器棺墓出土土器の容量

土器棺墓使用土器のうち、棺身に使用された土器を対象に容量計測をした。計測の対象にしたものは、図上で全形が復元できるものと、底部などが欠損しているもののおおよそ大差なく推定できるもの、である。

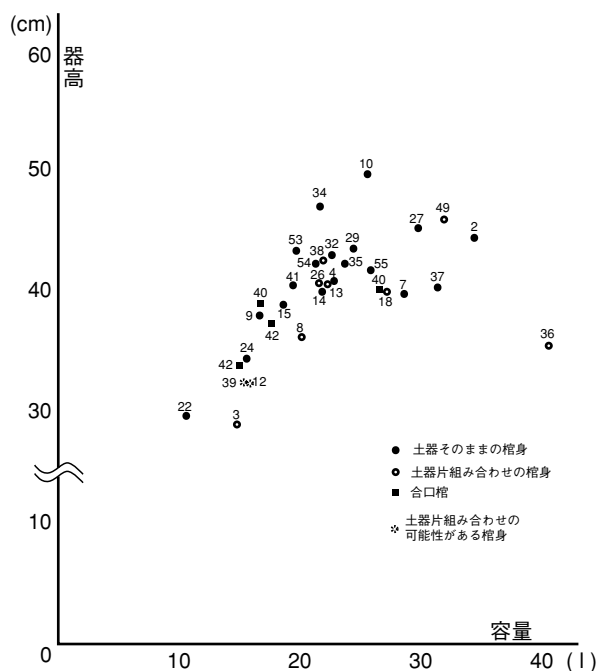
第78図は、土器の分類別に器高・容量を示したものである。牛牧遺跡の土器棺墓で使用された土器は、容量がほぼ10～35 lのなかに収まる。54のみほぼ40 lと容量が大きくなっている。54は底部欠損部が多いものであり、実際にはさらに容量が大きくなるものと考えられる。器形による大きさの差では、V群土器A類(無突帯・刻目土器)が20 l以上である一方、V群土器B類(突帯文土器)が20 l以下と小形であるということ以外、特には見られない。

また、同じ計測結果を、棺身となっている土器棺墓の形態別にしたものが第79図である。「土器そのまま

の棺身」のものと、「土器片組み合わせの棺身」との間に、棺身に使用する土器の容量の差は見られない。「土器片組み合わせの棺身」は、土器片の組み合わせによって棺の容積を増やす意図があったとする想定にはならない。土器片の組み合わせる行為には、別の要因を検討するべきであろう。合口棺では、SZ42のような小形の部類に入る土器を2個体合わせることで、大形の単棺以上の容量となっている。



第78図 土器棺墓使用土器棺身容量計測値散布図  
番号は遺物番号を示す



第79図 遺構別棺身容量計測値散布図  
番号は遺構番号を示す

## 第二節 出土遺物に関して

### (A)出土土器

今回の調査で、縄文後期後葉から晩期後葉にかけての資料が多く見られた。ここでは土器個々の詳細な検討は今後の課題とし別稿で論じることとする。とりわけ牛牧遺跡において、土器棺墓は縄文時代 III<sub>d</sub> 期最終末に群集化の兆しが見え、III<sub>e</sub> 期～III<sub>g</sub> 期にかけて盛行する。ここでは III<sub>e</sub> 期～III<sub>g</sub> 期にかけての時期に属する可能性のある遺構内土器および包含層出土土器との比較を通じて、土器棺墓に使用された土器との異同を検討する。

#### 1 土器棺使用土器

##### 深鉢形土器

棺身・蓋として使用された土器は計 83 個体であり、IV 群土器(粗製深鉢)が圧倒的数量を占める。III 群土器(有文土器):IV 群土器(粗製土器):V 群土器(無突帯刻目・突帯文)が、4:71:8 である。また、IV 群土器には口縁端部上面が押圧もしくは刺突されているものもみられ、そのものとそれ以外のものとの比は、9:62 で、粗製土器内では 14.5%、土器棺使用土器全体の 10.8% を占める。器形はほとんどが深鉢であり、1 例鉢といえるものもあるが、浅鉢・壺形の器形のものも 1 例もない。また、複数個体で棺を形成する場合、深鉢のなかでも調整・器形が類似するもの同士で構成している場合と、IV 群土器と V 群土器とで構成している場合と両者が見られる。後者の場合、V 群土器に組み合わさる IV 群土器は E 類(内湾する器形)である場合が多い。IV 群土器に関して、調整では、巻貝条痕:条痕:削痕:ナデもしくは粗いミガキの比は、2:53:11:2 であり、条痕調整のものが IV 群土器では 77.9%、土器棺使用土器全体の 63.9% と、高比率を占める。

#### 2 遺構内出土土器

##### 口縁端部上面に押圧の見られるものの比率が高い

主要遺構から出土したものに関しては、今回ほぼ全て図示した。大形破片で残存していたものは、すべて IV 群土器(粗製深鉢)であり、該当するものは 84・85・97・106・108・240・256・261 で、これらの土器片はある意味をもって意識的に埋設された可能性が高いものである。ここでは口縁端部上面に押圧の見られるものの比率が高く、それ以外のものとは 3:4 (不明 1) の割合である。

#### 3 包含層出土土器

粗製深鉢の口縁部で、対象にしたのは 5323 点である。このなかで、口縁端部に押圧・もしくは刺突が見られたものは 280 点のみで、それ以外のものとの比は、280:5043 となり、粗製深鉢全体の 5.3% を占めるに過ぎない。また、口縁端部に押圧・もしくは刺突が見られない 5043 点については、C 類(口縁部から底部に直線的につながる器形)が 55% を占め、続いて E 類(内湾する器形)が 32.1% を、D 類(外反する器形)が 13% を占める。また、V 群土器に関しては実数を示していないが、突帯文土器は 100 点以下で、無突帯・刻目土器は口縁端部に押圧・もしくは刺突が見られた 280 点に含まれている可能性が高い。

#### 4 土器棺使用土器の選択性

上記の1～3から、以下の傾向が伺えられる。

a. 土器棺使用土器の器形では、深鉢が選択されており、浅鉢・壺形のものはない。粗製深鉢に関しては、C類・D類・E類の使用傾向は、包含層出土傾向とそれほど差はない。これは突帯文土器に関しても同様である。ただし、突帯文土器に関しては素文突帯の土器は使用していない。

b. 土器棺および遺構内の土器には、包含層に比べ、口縁端部押圧もしくは刺突された土器の使用頻度が高い。

c. 土器棺使用土器のIV群土器(粗製土器)では、条痕調整のものが圧倒的優位を占める。これは包含層出土土器と比べても比率が逆転するほどである。ただし、これらの土器棺使用土器の多くが、粗製土器において条痕調整を主体とするものが多くなる、突帯文期以降の深鉢である可能性が高く、その時期的傾向が反映されているとも考えられる。

#### 5 .SZ34の棺として使用された土器(50)について

50は、地文に縄文が見られるものである。土器文様の無文化傾向にあるなかで、全面に地文のみられること自体、特異な存在である。さらにその縄文が上から軽いナデが施され、縄文の消えている部分があることも大きな特徴である。牛牧遺跡では、同様の縄文のみられる胴部片が、土坑内埋土(90)および包含層(268)からも出土している。

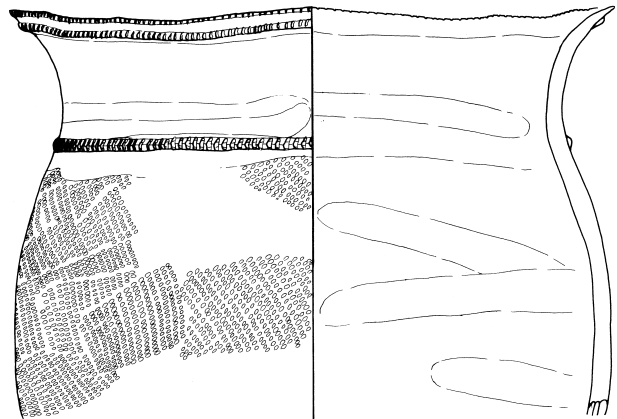
貼付け隆帯などの特徴を含めると、この土器に最も近いと考えられる例は、岐阜県下呂町の下島遺跡(高井編 1985)の例である(第80図)。この一群の土器に関しては別稿で論じる予定である。

#### 下島遺跡

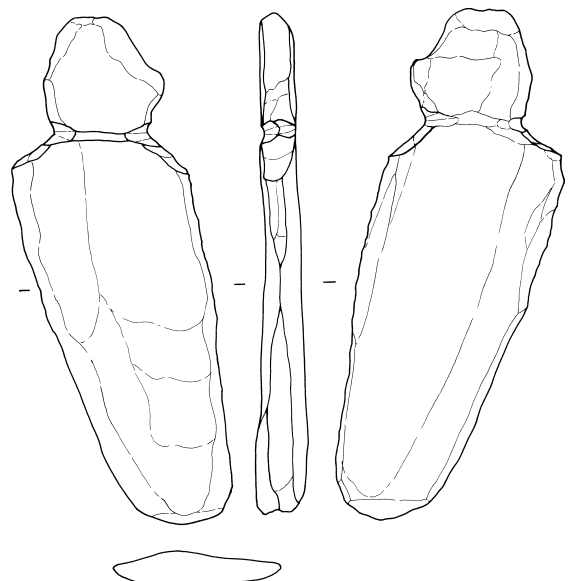
#### (B)石製品

#### 岩偶

牛牧遺跡では、1点「岩偶」と思われる遺物の出土を見た。東海地方では珍しく、牛牧遺跡を代表する遺物とな



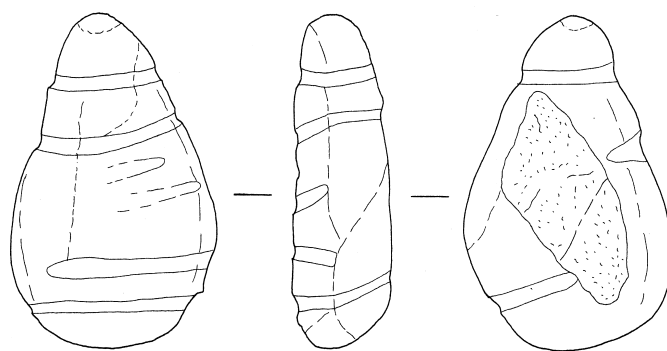
第80図 下島遺跡出土土器(1:3)



第81図 東光寺出土岩偶(1:2)

るものである。青森県の馬淵川流域を中心に分布する「岩偶」(渡辺1997)とは別系統のものと考えられる。

中部地方では、「岩偶」と報告されている遺物が幾例か知られている。遺物に対する加工の度合いには幅が見られ、挟り込みなどで人形らしくしてあ



第82図 真宮遺跡出土岩偶(1:2)  
斎藤編2001より転載

るものから沈線を巡るだけのものまでさまざまである。時期としては全て縄文時代後期以降に属するようである。近隣で多くの岩偶を出土した遺跡に、三重県の天白遺跡がある(森川編1995)。

#### 東光寺遺跡 真宮遺跡

愛知県内では牛牧遺跡以外で真宮遺跡(斎藤編2001)・東光寺遺跡(酒井ほか1993)での出土が知られている(第81・82図)。真宮遺跡例は砂質片岩・東光寺遺跡例は結晶片岩製である。両遺跡とも晩期中葉稲荷山式・桜井式に時期の中心があること、土器棺墓群が検出されていることなど、牛牧遺跡との共通性が見られる。特に、東光寺遺跡の資料は、肩部から上を挟り頭部を作りだし、牛牧遺跡の岩偶との類似性が強い。同時期の土器棺墓が群集する遺跡で、さらにも出土例が増える可能性がある。

### 第三節 牛牧遺跡の黒褐色土(いわゆる黒ボク土)について

中位段丘に立地する牛牧遺跡では黒色および黒褐色土(黒ボク土)の堆積が見られた。東海地域の黒ボク土は非火山灰起源のものと言われ、草原植生下の腐植の集積によって形成されたものと考えられている(森1993)。黒ボク土には2種類見られる。一つは、主たる遺物包含層であり、縄文時代後期から晩期までの遺物を濃厚に含むもので、もう一つは、守山面の礫層上に堆積している無遺物層である。今回、主たる遺物包含層であった黒褐色土からは、土器・土製品・石器・石製品という多量の遺物を含み、なおかつ剥片も大量に出土した。縄文後期後葉から晩期終末までが主体であり、その中でも晩期前葉の元刈谷式から後葉の五貫森式の遺物が中心である。堆積の最も厚いところで50cmを測るほどである。土器棺墓の群集化する遺跡では、その包含層から剥片・未成品を含む大量の遺物が出土する傾向にあることは、共通しているようである。東海地方では、牛牧遺跡とほぼ同時期の真宮遺跡でも同様な現象が見られる(斎藤2001)。ここでは、この土の成因ではなく、そこから遺物が大量出土することについての意味について考えてみたい。

黒褐色土の中で層として区別できたのは4層のみ(第7図8～11層)で、それらが累重して見られたのではなく、同様のレベルで場所を違えて堆積していた様子が見られる。もしかしたら、場所による土の変色が原因かもしれない。基本的には、黒褐色土を上下に分層することはできなかった。遺物の出土状況としては、整然というにはほど遠く、むしろ雑多であ

る。個々の遺物に関しては破片もしくは細片の状態になっているものがほとんどで、包含されている遺物同士で接合したものは石棒以外には見られなかった。出土状況から、これら包含層の出土遺物が使用されたあとそのまま放置された状態であるとは考えることができない。台地上という立地から見て、この黒褐色土および包含遺物は外からの流れ込みの状態ではないと思われる。

また、一方で注目すべきことはこの黒褐色土と土器棺墓との関係である。土器棺墓は黒褐色土内にいわば埋まっている状態で検出された。検出レベルはまちまちで、現状で残った黒褐色土上面で全面検出できたものもあれば、黒褐色土内の深いところではじめて検出できたものもあった。黒褐色土での掘り方の検出が難しかったのは、第二章の報告の通りである。黒褐色土出土の土器と土器棺墓出土の土器との間には、時期的な幅で差はあるものの、同時期と思われるものに関しては、大きな違いはなかった。

今回、残念ながらこの黒褐色土に関する自然科学的分析ができなかったので断定はできないが、厚くかつ遺物を多量に含む黒褐色土は、人為的な要因で形成された可能性も考えられる。その場合、これらの遺物も人為的な営みの結果集積したものと考えられる。これらの遺物の出土状況が雑然としていることに意味があり、それを積極的に評価するならば、一つの可能性として、当地に意識的な「集中廃棄」を行った結果ではないのかとの仮説が立つ。黒褐色土には遺物だけではなく、土器棺墓・土壙墓という墓も造られ、さながらちょうど貝塚の貝層に例えられるのではないであろうか。貝塚が「霊送り」の場として評価できるならば、この牛牧遺跡の一側面として同様の評価をすることもできるのではないであろうか。

#### 貝塚

牛牧遺跡からは住居跡が検出されている。この生活に関わる遺構と黒褐色土および墓との関係は、さながら貝塚の貝層下で検出された住居跡との関係に相当する。住居の後に墓地、ということも言えるが、すべてを組み合わせると、牛牧遺跡の集落構造とすることはできないだろうか。

#### 牛牧遺跡の 集落構造

## 附論 牛牧遺跡第1次～第3次調査出土土器について

川添和暁

纈纈 茂(名古屋市見晴台考古資料館)

佐野 元(財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター)

1. 牛牧遺跡は、第一章で述べたように、かつての守山市教育委員会・名古屋市教育委員会によりすでに調査が行われ、報告も出されている。今回の調査で出土した土器との異同を確認することを目的に、第1次～第3次調査で出土した土器類の再実測を行った。一部ここで初めて図化・報告するものもある。対象としたものは、土器307点・土製品1点である。

2. 本稿は、川添和暁・纈纈 茂(名古屋市見晴台考古資料館)・佐野 元(財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター)の3名が分担し、実測・拓本・トレース・観察表の作成を行った。

3. 「甕棺」と報告されている土器を中心とする、1～12に関しては、山口大学人文学部中村友博教授のご好意により原図を使わせていただき、炭化物付着痕の範囲など若干の追加記入をした。なおトレース・拓本は当方で行った。

4. 図化のスケールは以下のようである。

1～12      1：4

13～23     1：3

24～308    1：2

5. 現在、これらの遺物は一括して名古屋市博物館に所蔵されている。長期にわたり調査の便宜を図っていただき、感謝の意を表する次第である。

6. 版組など編集は川添が行った。この附論に関わる一切の責任はすべて川添が負うものである。

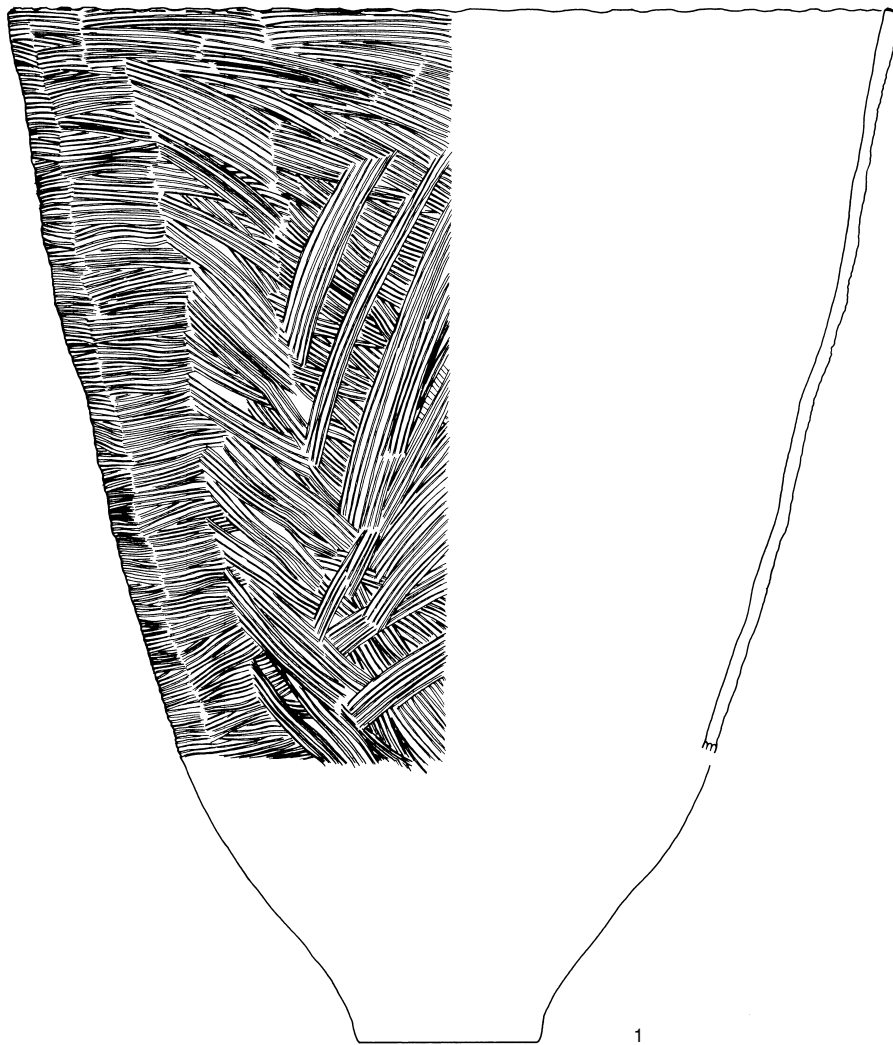
| 番号 | 守山市報告番号 | 遺構     | 注記            | 器形 | 残存部分および欠損部分  | 全周に占める残存率 | 底部の残存率 | 図面上の残存率 | 復元口径 (cm) | 復元最大径 (cm) | 復元底径 (cm) |
|----|---------|--------|---------------|----|--------------|-----------|--------|---------|-----------|------------|-----------|
| 1  | 第35図11  | 甕棺No.1 | 甕棺一号・牛牧No.1   | 深鉢 | 口縁部から胴部下     | 1/3       | 欠損     | 2/3     | (47.6)    | (47.6)     | ◇         |
| 2  | 第35図6   | 甕棺No.1 | 牛牧No.4        | 深鉢 | 口縁部から胴部      | 1/4       | 欠損     | 1/2     | ◇         | ◇          | ◇         |
| 3  | 第35図5   | 甕棺No.2 | 牛牧No.12・No.2  | 深鉢 | 胴下部から底部残存    | 1/1       | 残存     | 1/1     | ◇         | (25.0)     | 6.4       |
| 4  | 第35図9   | 甕棺No.3 | 第三号甕棺         | 深鉢 | 全周の1/2残存     | 1/2       | 残存     | 1/1     | 42.8      | 42.8       | 6.4       |
| 5  | 第35図3   | 甕棺No.4 | 甕棺第四号・牛牧No.5  | 深鉢 | 全周の1/4残存     | 1/4       | 欠損     | 1/2     | (25.4)    | (25.4)     | ◇         |
| 6  | 第35図4   | 甕棺No.5 | No.5の2・牛牧No.6 | 深鉢 | 口縁部から胴部上半    | 1/2       | 欠損     | 1/1     | (45.4)    | (45.4)     | ◇         |
| 7  | 第35図8   | 甕棺No.5 | No.5・牛牧No.10  | 深鉢 | 口縁部から胴部上半    | 1/1       | 欠損     | 1/1     | 26.0      | 26.0       | ◇         |
| 8  | 第35図10  | ◇      | No.11・牛牧No.13 | 深鉢 | 胴下部から底部      | 1/1       | 残存     | 1/1     | ◇         | (26.4)     | 4.0       |
| 9  | 第35図6   | 甕棺No.6 | なし            | 深鉢 | 胴部上半部のみ1/4欠損 | 1/1       | 欠損     | 1/1     | 38.4      | 38.4       | ◇         |
| 10 | 第35図7   | 甕棺No.7 | No.7・牛牧No.9   | 深鉢 | 口縁部から胴部      | 1/3       | 欠損     | 1/2     | (42.2)    | (42.2)     | ◇         |
| 11 | 第35図2   | ◇      | 牛牧No.2        | 深鉢 | 口縁部から胴部      | 1/2       | 欠損     | 1/1     | (34.0)    | (33.6)     | ◇         |
| 12 | ◇       | ◇      | 牛牧No.11       | 深鉢 | 口縁部から底部      | 1/2       | 残存     | 1/1     | (32.0)    | (35.4)     | 4.4       |

| 番号 | 残存高(cm) | 文様・底部圧痕など            | 調整           |    | 胎色           | 混和材(多い順に記載) | 備考      |
|----|---------|----------------------|--------------|----|--------------|-------------|---------|
|    |         |                      | 表            | 裏  |              |             |         |
| 1  | (39.4)  | 口縁部上面に指による刺突列        | 二枚貝条痕        | ナデ | 7.5YR6/4     | 長石・雲母・チャート  |         |
| 2  | (29.0)  | 口縁部上面に指による刺突列        | 二枚貝条痕        | ナデ | 10YR5/2 灰黄褐色 | 長石・雲母       |         |
| 3  | (18.8)  | ◇◇◇◇◇                | 削り           | ナデ | 10YR6/4      | 長石・チャート     |         |
| 4  | 43.2    | 口縁部上面に半載竹管による刺突列     | 二枚貝条痕        | ナデ | 10YR5/2 灰黄褐色 | チャート・雲母・長石  |         |
| 5  | (48.4)  | 山形突起                 | 二枚貝条痕        | ナデ | 10YR5/2 灰黄褐色 | 長石・チャート・雲母  |         |
| 6  | (33.0)  | 口縁部上面に指による刺突列        | 二枚貝条痕        | ナデ | 7.5YR5/2 褐灰色 | 長石・チャート     |         |
| 7  | (17.4)  | 口縁部上面に指による刺突列        | 二枚貝条痕        | ナデ | 10YR4/1 灰褐色  | チャート・長石     |         |
| 8  | (17.6)  | ◇◇◇◇◇                | 削り           | ナデ | 5YR6/4       | チャート・長石     |         |
| 9  | (37.6)  | ◇◇◇◇◇                | 巻貝条痕?        | ナデ | 10YR7/3      | 長石・チャート     |         |
| 10 | (31.2)  | ◇◇◇◇◇                | 削り状を呈する二枚貝条痕 | ナデ | 10YR5/2 灰黄褐色 | 長石・チャート     |         |
| 11 | (35.6)  | 口縁部上面に半載竹管による刺突列     | 頸部二枚貝条痕・胴部削り | ナデ | 10YR5/3      | 長石・チャート     |         |
| 12 | 39.8    | 口縁部上面に半載竹管による押印状の刺突列 | 頸部二枚貝条痕・胴部削り | ナデ | 10YR4/2      | 灰黄褐色        | 長石・チャート |

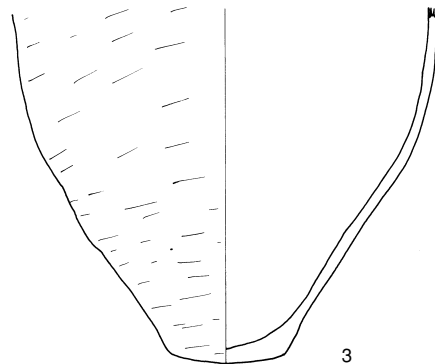
| 番号  | 守山市報告番号 | 注記                      | 器形  | 残存部分     | 残存率 | 復元口径・底径(cm) | 残存高(cm) | 文様・底部圧痕など              | 調整           |       | 胎色       | 混和材(多い順に記載)   | 備考            |
|-----|---------|-------------------------|-----|----------|-----|-------------|---------|------------------------|--------------|-------|----------|---------------|---------------|
|     |         |                         |     |          |     |             |         |                        | 表            | 裏     |          |               |               |
| 013 | 第31図81  | 不 <sup>3</sup> ・3 T・MIT | 浅鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/4 | (26.2)      | (10.0)  | 雲行文                    | ミガキ          | ミガキ   | 7.5YR4   | 長石・石英・雲母・チャート | 赤彩の遺跡         |
| 014 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/3 | (34.2)      | (13.0)  | ◇◇◇◇◇                  | ナデ           | ナデ    | 10YR5/4  | 長石・チャート・石英    |               |
| 015 | 図版第九3   | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/4 | (32.0)      | (16.8)  | 口縁部上面・ヘラ状工具による刻目列      | 巻貝条痕のあととナデまた | ナデ    | 10YR4/1  | 褐灰色           | 長石・チャート・雲母    |
| 016 | 図版第九2   | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/3 | (29.4)      | (12.0)  | 横方向の二枚貝条痕              | ナデ           | ナデ    | 7.5YR5/3 | にぶい褐色         | 長石・チャート・石英    |
| 017 | 図版第六〇   | 第一A北掘二層・第二B東掘一層         | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/3 | (32.4)      | (8.5)   | ◇◇◇◇◇                  | 巻貝条痕?        | ナデ    | 2.5Y/1   | 黄灰色           | 長石・チャート       |
| 018 | ***     | 4TB2                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | 1/3 | (32.0)      | (5.9)   | ◇◇◇◇◇                  | ナデ           | ナデ    | 10YR7/3  | にぶい黄褐色        | 長石・雲母・チャート    |
| 019 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/4 | (24.6)      | (6.4)   | ◇◇◇◇◇                  | ミガキ          | ナデ    | 10YR4/1  | 褐灰色           | 長石・石英・チャート    |
| 020 | ***     | なし                      | 壺形  | 口縁部(平縁)  | 1/4 | (27.4)      | (7.8)   | ◇◇◇◇◇                  | ミガキ          | ナデ    | 10YR4/3  | にぶい黄褐色        | 長石・雲母・チャート    |
| 021 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/3 | (34.4)      | (9.3)   | 口縁部上面・指による押印痕          | 二枚貝条痕        | ナデ    | 7.5YR6/6 | 褐色            | 長石・チャート・石英    |
| 022 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | 1/6 | (36.7)      | (12.3)  | ◇◇◇◇◇                  | ナデ           | ナデ    | 10YR6/3  | にぶい黄褐色        | 長石・石英・チャート    |
| 023 | 図版第九1   | なし                      | 鉢   | 口縁部(平縁)  | 1/4 | (34.6)      | (13.8)  | ◇◇◇◇◇                  | 削り           | ナデ    | 2.5Y/3   | にぶい黄色         | 長石・雲母・チャート    |
| 024 | 第29図45  | 第一A区 三層                 | 浅鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (4.4)       | (4.4)   | 縦工に1線・斜線・横線に縦工に1線横工に1線 | ミガキ          | ミガキ   | 10YR6/2  | 灰黄褐色          | 長石・チャート・雲母    |
| 025 | 第29図44  | 第二C・B 東掘床面              | 深鉢  | 口縁部(大波状) | ◇   | (4.6)       | (4.6)   | 巻貝尾節による凹線              | ナデ           | ナデ    | 10YR4/2  | 灰黄褐色          | 長石・チャート       |
| 026 | 第29図40  | 底下                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (4.2)       | (4.2)   | LR・凹線(凹線内部を指でなされたものか)  | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 10YR7/2  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・雲母    |
| 027 | 第29図43  | 第一A 三層                  | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (5.1)       | (5.1)   | 巻貝凹線・巻貝先端による刺突         | 巻貝条痕         | ナデ    | 10YR4/1  | 褐灰色           | 長石・石英         |
| 028 | 第29図46  | 第二A 一層                  | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (6.0)       | (6.0)   | 丸棒状工具による沈線             | ミガキ          | ミガキ   | 5YR5/4   | にぶい赤褐色        | 長石・雲母         |
| 029 | 第29図42  | 底下                      | 深鉢  | 口縁部(大波状) | ◇   | (7.5)       | (7.5)   | 巻貝尾節凹線・巻貝脚圧            | ナデ           | ナデ    | 10YR4/1  | 褐灰色           | 長石・チャート・雲母    |
| 030 | ***     | 5T                      | 深鉢  | 口縁部(大波状) | ◇   | (3.5)       | (3.5)   | 巻貝による平行凹線              | ナデ           | ナデ    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色        | チャート・長石       |
| 031 | ***     | 第二B 一層                  | 深鉢  | 口縁部      | ◇   | (2.9)       | (2.9)   | 棒状工具による二条の沈線           | ナデ?          | ナデ?   | 10YR7/3  | にぶい黄褐色        | チャート・雲母・チャート  |
| 032 | 第31図124 | なし                      | 深鉢  | 口縁部      | ◇   | (3.5)       | (3.5)   | 巻貝による凹線・凹線内は消されていない    | 巻貝条痕         | ナデ    | 10YR5/4  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・雲母    |
| 033 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (4.0)       | (4.0)   | 六条の集合沈線                | ナデ?          | ナデ?   | 10YR7/3  | にぶい黄褐色        | チャート・長石・雲母    |
| 034 | 第31図110 | 4 T B 中央                | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | 二一単位位の棒状工具による沈線三組?     | ナデ           | ナデ    | 10YR5/2  | 灰黄褐色          | 長石・石英・雲母      |
| 035 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | 棒状工具による沈線              | ナデ           | ナデ    | 10YR6/3  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・雲母    |
| 036 | 第29図51  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.8)       | (3.8)   | 三本一単位位の沈線              | ナデ           | ナデ    | 7.5YR6/6 | 褐色            | チャート・長石・雲母    |
| 037 | 第29図52  | 南内側                     | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (5.1)       | (5.1)   | LR・棒状工具による平行沈線         | ナデ           | ナデ    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート       |
| 038 | 図版第六C   | 第一区 一層                  | 深鉢  | 口縁部(大波状) | ◇   | (2.4)       | (2.4)   | 弧状沈線                   | ナデ           | ナデ    | 7.5YR4/1 | 褐灰色           | 長石・チャート       |
| 039 | ***     | 720 不                   | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | 半載竹管による沈線・弧状沈線         | ナデ?          | ナデ?   | 10YR7/2  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・石英    |
| 040 | 第29図30  | 第二B南掘 セクション 三層          | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.9)       | (3.9)   | 半載竹管による扇状沈線            | 条痕           | ナデ    | 10YR7/2  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・石英    |
| 041 | 第29図26  | 2B南掘 東西掘 床面             | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (4.5)       | (4.5)   | 半載竹管による沈線              | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 10YR5/3  | にぶい黄褐色        | 長石・雲母         |
| 042 | 第29図16  | 底下                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | LR・半載竹管による沈線           | ナデ           | ナデ    | 7.5YR6/2 | 灰褐色           | 長石・石英         |
| 043 | 第29図17  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | LRを施すに、半載竹管による沈線       | ナデ           | ナデ    | 7.5YR6/4 | にぶい褐色         | 長石・石英         |
| 044 | 第31図108 | なし                      | 深鉢  | 胴部       | ◇   | (4.2)       | (4.2)   | LRを施すに、半載竹管による沈線       | 巻貝条痕         | ナデ    | 7.5YR6/4 | にぶい褐色         | 長石・石英         |
| 045 | 第29図34  | 第二区 北掘 二層               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.4)       | (2.4)   | LR・半載竹管による弧状沈線         | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 7.5YR6/4 | にぶい褐色         | 長石・石英・チャート    |
| 046 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部      | ◇   | (1.7)       | (1.7)   | 半載竹管による沈線              | ナデ           | ナデ?   | 10YR2/2  | 黒褐色           | 長石・チャート       |
| 047 | 第29図33  | 第二区 C・B 東掘 床面           | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (4.7)       | (4.7)   | 半載竹管による横沈線のち長橋円状沈線     | 二枚貝条痕のちナデ    | ナデ    | 10YR6/2  | 灰黄褐色          | チャート・長石・石英    |
| 048 | 第29図35  | 第二B南掘 二層                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (1.9)       | (1.9)   | 半載竹管による二条の押印文          | 二枚貝条痕のちナデ    | ナデ    | 10YR6/2  | 灰黄褐色          | チャート・長石・石英    |
| 049 | 第29図50  | 南内側                     | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (1.8)       | (1.8)   | 縦いヘラ状工具による沈線・縦方向の刺突列   | ナデ           | ナデ    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色        | チャート・長石       |
| 050 | 第29図56  | 第二B南掘                   | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (1.9)       | (1.9)   | 棒状工具による沈線              | ナデ           | ナデ    | 10YR5/1  | にぶい黄褐色        | 長石・雲母         |
| 051 | 第29図60  | なし                      | 深鉢  | 胴部       | ◇   | (1.9)       | (1.9)   | 棒状工具による斜格子文・沈線(楕圓文様)   | ナデ           | ナデ    | 2.5Y/1   | 黒褐色           | 長石・雲母         |
| 052 | 第29図59  | 第二B東掘 二層                | 壺形? | 頸部付近?    | ◇   | (2.5)       | (2.5)   | ヘラ状工具による平行沈線・半載竹管文?    | ミガキ          | ナデ    | 10YR5/2  | 灰褐色           | 長石・雲母         |
| 053 | 第31図128 | 3 T 東(?)                | 深鉢  | 頸部       | ◇   | (3.7)       | (3.7)   | 二一単位位の刺突列文             | ナデ?          | ナデ?   | 7.5YR6/4 | にぶい褐色         | 長石・石英・チャート    |
| 054 | ***     | T A                     | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.4)       | (3.4)   | 四本一単位位の集合沈線            | ナデ?          | ナデ?   | 10YR5/2  | 灰黄褐色          | 長石・雲母・チャート    |
| 055 | ***     | なし                      | 深鉢  | 胴部       | ◇   | (6.7)       | (6.7)   | 半載竹管による沈線              | ナデ           | ナデ    | 7.5YR7/6 | 褐色            | 長石・チャート       |
| 056 | 第29図12  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (7.6)       | (7.6)   | LR・半載竹管による沈線           | 条痕           | ナデ    | 7.5YR6/6 | にぶい褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 057 | 第29図14  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (4.1)       | (4.1)   | LR・半載竹管による沈線           | 条痕のちナデ?      | ナデ?   | 7.5YR4/1 | 褐灰色           | 長石・チャート・雲母    |
| 058 | 第29図31  | 2B南掘 床面?                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.1)       | (3.1)   | 縦線文・半載竹管による弧状沈線        | ナデ?          | ナデ?   | 10YR3/2  | 黒褐色           | 長石・石英・雲母・チャート |
| 059 | 第29図32  | 第一A西掘 三層                | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (3.2)       | (3.2)   | 半載竹管によるS字状沈線           | ナデ           | ナデ    | 10YR8/3  | 浅黄褐色          | チャート・長石・雲母    |
| 060 | 第29図15  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.9)       | (2.9)   | LR・半載竹管による沈線           | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 10YR7/3  | にぶい黄褐色        | 長石・雲母・チャート    |
| 061 | 第29図53  | 第二区 東掘 二層               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.5)       | (2.5)   | LR・棒状工具による太い沈線         | ナデ           | ナデ    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色        | チャート・長石       |
| 062 | 第31図105 | 1号 4                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (2.0)       | (2.0)   | LRを施すに、半載竹管による沈線       | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 7.5YR6/4 | にぶい褐色         | 長石・石英・雲母      |
| 063 | 第31図112 | カノNo.6                  | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (3.1)       | (3.1)   | 半載竹管による沈線              | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 2.5YR7/3 | 浅黄褐色          | 長石・チャート       |
| 064 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (4.7)       | (4.7)   | LRを施すに、半載竹管による弧状沈線     | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 10YR6/2  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート・雲母    |
| 065 | 図版第六J   | 2B 黒                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.4)       | (2.4)   | LR・半載竹管による平行沈線         | ナデ           | ナデ    | 2.5Y/3   | 浅黄褐色          | 長石・チャート       |
| 066 | 第29図13  | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.0)       | (3.0)   | LR・半載竹管による沈線           | ◇◇◇◇◇        | ◇◇◇◇◇ | 10YR5/1  | 褐灰色           | 長石・石英・チャート    |
| 067 | ***     | 判読不能                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.5)       | (2.5)   | 二条の平行沈線                | ナデ           | ナデ?   | 7.5YR6/4 | にぶい黄褐色        | 長石・石英・雲母・チャート |
| 068 | 図版第六M   | 第二区Bトレ二層                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.1)       | (2.1)   | 半載竹管による二条の沈線           | ナデ?          | ナデ?   | 10YR7/3  | にぶい黄褐色        | 長石・チャート       |
| 069 | 図版第六K   | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (3.0)       | (3.0)   | 半載竹管による二条の押印文          | ナデ           | ナデ    | 2.5Y/3   | 浅黄褐色          | 長石・チャート       |
| 070 | 第29図54  | 2B南掘区 東南掘               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (5.5)       | (5.5)   | LR・棒状工具による丸凹線・口縁部上面LR  | ナデ           | ナデ    | 10YR4/2  | 灰褐色           | 長石・雲母         |
| 071 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (1.9)       | (1.9)   | 半載竹管による弧状沈線            | ナデ           | ナデ    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色        | 長石・石英         |
| 072 | 第31図104 | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (5.2)       | (5.2)   | 巻貝の縦線文の後、半載竹管による弧線     | 巻貝条痕         | ナデ    | 10YR6/6  | 具線状黄褐色        | 長石・チャート       |
| 073 | 第31図102 | カノ No. 9                | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | (3.0)       | (3.0)   | 半載竹管による二条の沈線           | ナデ           | ナデ    | 2.5Y/3   | 黒褐色           | 長石・石英・チャート    |
| 074 | ***     | なし                      | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | (2.4)       | (2.4)   | 半載竹管による平行沈線            |              |       |          |               |               |

| 番号  | 守山市報告書番号 | 注記                    | 器形  | 残存部分     | 残存率 | 復元口径・底径(cm) | 残存高(cm) | 文様・底部痕など              | 調整    |   | 史料(多い順に記載) | 備考      |               |            |
|-----|----------|-----------------------|-----|----------|-----|-------------|---------|-----------------------|-------|---|------------|---------|---------------|------------|
|     |          |                       |     |          |     |             |         |                       | 表     | 裏 |            |         |               |            |
| 107 | 第29号41   | 第一A北壁 二層              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.4)   | 二枚貝屑による刷列文            | ナ     | ナ | 10YR7/2    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート・雲母    |            |
| 107 | 第31号101  | 1 P D Ⅱ               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.0)   | 半載竹管による一糸の刷列文         | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・雲母      |            |
| 108 | ***      | 2i                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.6)   | 半載竹管による短沈線            | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート・雲母    |            |
| 109 | 図版第六1    | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.3)   | 半載竹管による二糸の刷列文         | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・チャート       |            |
| 110 | ***      | 第3ビッド                 | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (4.4)   | 半載竹管による半平沈線           | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 111 | 第31号98   | 5 T                   | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.1)   | 半載竹管による二糸の刷列文         | ナ     | ナ | 10YR6/3    | 灰褐色     | 長石・石英・チャート    |            |
| 112 | 第31号106  | 3 T                   | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.3)   | 半載竹管による一糸の半平沈線        | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 113 | 第31号100  | 第五灰部                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.2)   | 口縁部・胎土による刷列文          | ナ     | ナ | 10YR5/2    | 灰黄褐色    | 長石・チャート・雲母    |            |
| 114 | 第31号96   | 判読不能                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.3)   | 断面正方形の棒状工具による二列の刷列文   | ナ     | ナ | 2.5YR6/1   | 黄灰色     | 長石・雲母・チャート    |            |
| 115 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.4)   | 半載竹管による押印文            | ナ     | ナ | 10YR6/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート       |            |
| 116 | 第29号19   | なし                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (3.1)   | 半載竹管による刷列文            | ナ     | ナ | 7.5YR7/6   | 褐色      | 長石・チャート・石英    |            |
| 118 | 第31号95   | 1 T A                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.4)   | 断面正方形の棒状工具による二列の刷列文   | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・雲母         |            |
| 119 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.3)   | 口縁部上部に付着による刷列文        | ナ     | ナ | 10YR2/2    | 灰白色     | 長石・石英・雲母      |            |
| 120 | ***      | N                     | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.0)   | 半載竹管による刷列文            | ナ     | ナ | 7.5YR7/4   | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート       |            |
| 121 | 第29号24   | 南内側・2B 南拡張 東側■ 床面     | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.0)   | 半載竹管による刷列文            | ナ     | ナ | 10YR6/2    | 灰黄褐色    | 長石・雲母・チャート    |            |
| 122 | 第31号93   | 5V E 立■               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.3)   | 断面正方形の棒状工具による二列の刷列文   | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英         |            |
| 123 | 第29号27   | 灰下                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.4)   | 半載竹管による刷列文            | ナ     | ナ | 10YR3/2    | 黒褐色     | 長石・雲母・チャート    |            |
| 124 | ***      | ■ Ⅱ Ⅲ?                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.2)   | 口縁部上部および外面、半載竹管による刷列文 | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・チャート・雲母    |            |
| 125 | 第30号66   | 第 C ■■■■ 一 二層区別出来ず    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (5.5)   | 棒状工具による沈線             | ナ     | ナ | 2.5Y7/3    | 黄褐色     | 長石・チャート・雲母    |            |
| 126 | 第31号90   | 不 A 守山                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.2)   | 口縁部外部、半載竹管による二列の刷列文   | ナ     | ナ | 2.5Y7/2    | 灰黄色     | 長石・雲母・チャート    |            |
| 127 | 第31号99   | 1 T・B                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.6)   | 半載竹管による二列の刷列文         | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・チャート    |            |
| 128 | 第31号94   | 4T ■■ B C             | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.0)   | 半載竹管による二列の刷列文         | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 129 | 第31号91   | カノNo.6                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (6.4)   | 口縁部外部、半載竹管による二列の刷列文   | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 130 | 第29号22   | 第 C 北壁 ■■■■ 一 二層区別出来ず | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.0)   | 半載竹管による刷列文            | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 131 | 第31号111  | 1 T F                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.8)   | 半載竹管による四糸の集合沈線        | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 132 | 第31号114  | カノNo.6                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.0)   | 半載竹管による沈線             | ナ     | ナ | 2.5YR8/2   | 灰白色     | チャート・石英       |            |
| 133 | 第29号37   | 判読不能                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (1.1)   | 半載竹管による沈線             | ナ     | ナ | 10YR1/1    | 灰白色     | 長石・雲母         |            |
| 134 | 第29号36   | 判読不能                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (1.7)   | 半載竹管による沈線             | ナ     | ナ | 7.5YR7/6   | 褐色      | 長石・石英・チャート    |            |
| 135 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (2.9)   | 半載竹管による二糸の沈線          | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 136 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.8)   | 半載竹管による波状沈線           | ナ     | ナ | 2.5Y6/1    | 黄灰色     | 長石・石英・チャート    |            |
| 137 | 第29号25   | 2B 南拡張 東西拡張 床面        | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.5)   | 半載竹管による沈線             | ナ     | ナ | 10YR5/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・雲母・チャート |            |
| 138 | 第31号132  | カノNo.2                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.8)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・雲母      |            |
| 139 | 第31号134  | 有キ                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.8)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 10YR4/4    | 灰黄褐色    | 長石・石英         |            |
| 140 | ***      | 床面                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.6)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・雲母・チャート    |            |
| 141 | 第29号20   | 第 ■■■■ Ⅱ              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.3)   | 半載竹管による沈線・巻貝による刷列文    | ◇◇◇◇◇ | ナ | ナ          | 10YR8/4 | 黄褐色           | 長石・チャート    |
| 142 | 第29号21   | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.4)   | 半載竹管による沈線・巻貝による刷列文    | ◇◇◇◇◇ | ナ | ナ          | 10YR5/1 | 褐色            | 長石・チャート・石英 |
| 143 | ***      | 1 TGP                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.3)   | 口縁部上部に浅い沈線が3本あるか?     | ナ     | ナ | 10YR8/3    | 黄褐色     | チャート・長石       |            |
| 144 | 第31号122  | ■■■■ 1 D              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.4)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 2.5YR2/2   | 灰白色     | 長石・石英・チャート    |            |
| 145 | ***      | 灰下                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.6)   | 口縁部上部に半載竹管による沈線       | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英         |            |
| 146 | ***      | 第一層                   | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.3)   | 口縁部上部に沈線              | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰黄褐色    | チャート・長石       |            |
| 147 | ***      | 二層                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.6)   | 口縁部上部に沈線              | ナ     | ナ | 2.5Y6/6    | 黄褐色     | 長石・チャート・雲母    |            |
| 148 | ***      | 不?                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.9)   | 口縁部上部に半載竹管による沈線       | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート・雲母    |            |
| 149 | 第31号119  | 5 T 西 成土              | 深鉢? | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.0)   | 棒状工具による刻目をもつ隆起・ベタ沈線   | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 150 | 第31号118  | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.5)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・雲母         |            |
| 151 | ***      | 一層                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.5)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 7.5Y6/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート       |            |
| 152 | ***      | なし                    | 深鉢? | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.0)   | 棒状工具による刻目、同工具による刷列文   | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・チャート・雲母    |            |
| 153 | ***      | 5T 有キ                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (1.6)   | 棒状工具による刻目、同工具による刷列文   | ナ     | ナ | 7.5Y6/6    | 黄褐色     | 長石・チャート       |            |
| 154 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (4.0)   | 口縁部外部、横方向に二枚貝による押印痕   | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・チャート・雲母    |            |
| 155 | 第32号142  | 判読不能                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.1)   | 波状隆起による刷列文            | ナ     | ナ | 10YR4/1    | 灰褐色     | 長石・雲母         |            |
| 156 | 第32号143  | 0 T 北 第三層             | 深鉢? | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.8)   | 口縁部上部に突起              | ナ     | ナ | 2.5YR2/2   | 灰白色     | 長石・チャート       |            |
| 157 | 図版第六E    | 第 C-B1 南 南 北 床面       | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.7)   | 口縁部上部に突起              | ナ     | ナ | 10YR5/1    | 褐色      | 長石・チャート・雲母    |            |
| 158 | 第32号141  | 1 P ■■■■              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.5)   | 口縁部上部に沈線、突起           | ナ     | ナ | 10YR6/1    | 褐色      | 長石・雲母         |            |
| 159 | ***      | 床面                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.7)   | 波頭部を二つ持つ山形突起          | ナ     | ナ | 10YR3/1    | 黒褐色     | 長石・チャート       |            |
| 160 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.2)   | 口縁部上部に突起              | ナ     | ナ | 10YR7/2    | 灰白・黄褐色  | 石英・チャート・雲母・長石 |            |
| 161 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (3.9)   | 口縁部上部、浅い刻目がつけられている    | ナ     | ナ | 10YR4/1    | 褐色      | 長石・チャート・雲母    |            |
| 162 | 第31号117  | 5 ■■■■                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.2)   | 断面正方形の棒状工具による刷列文      | ナ     | ナ | 10YR7/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・雲母・チャート |            |
| 163 | 第31号120  | カノNo.9                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.6)   | 口縁部上部に突起              | ナ     | ナ | 10YR3/2    | 黒褐色     | 長石・チャート       |            |
| 165 | ***      | 第 CA付近 一? 二層          | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.1)   | 口縁部上部、棒状工具による押印痕      | ナ     | ナ | 10YR5/2    | 灰黄褐色    | 長石・雲母         |            |
| 166 | ***      | 4TD 第一層               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 5YR6/6     | 褐色      | 長石・石英・チャート    |            |
| 167 | 第32号139  | 1 P D 第二層             | 鉢?  | 口縁部(波状)  | ◇   | ◇           | (3.4)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 5YR7/6     | 褐色      | 長石・石英・チャート    |            |
| 168 | ***      | 1 P D                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.7)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 7.5YR3/1   | 黒褐色     | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 169 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (2.0)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR3/1    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 170 | 第32号154  | No.2                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.3)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 2.5YR6/2   | 灰黄褐色    | 長石・石英・チャート    |            |
| 171 | ***      | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.4)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR3/2    | 黒褐色     | 長石・石英・チャート・雲母 |            |
| 172 | 第37号196  | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR6/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・雲母・チャート    |            |
| 173 | 第33号178  | ■■■■                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.9)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR6/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 174 | 第33号183  | ITA 表                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR5/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・雲母・チャート |            |
| 175 | 第33号174  | HT ■■■■ 上             | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.3)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR6/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 176 | 図版第六Q    | 第 C-東壁 二層 中央カベ        | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.3)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 7.5YR3/1   | 黒褐色     | 長石・石英・チャート    |            |
| 177 | ***      | 4TD 第一層               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.4)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR3/1    | 黒褐色     | 長石・チャート       |            |
| 178 | 第33号181  | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.7)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 7.5YR6/3   | 灰白・黄褐色  | 長石・石英         |            |
| 179 | 第33号182  | 灰下 6-1                | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.0)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR7/6    | 黄褐色     | 長石・石英・チャート    |            |
| 180 | 第33号184  | 6TC 第一層               | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.4)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・チャート    |            |
| 181 | ***      | 1 T ■■■■              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (14.2)  | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR6/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・雲母      |            |
| 182 | 第32号155  | 判読不能                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.7)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 2.5Y3/1    | 黒褐色     | 長石・石英         |            |
| 183 | 第37号201  | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (6.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・石英・チャート    |            |
| 184 | 第33号172  | HT 部                  | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (3.8)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR5/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・石英・チャート    |            |
| 185 | 第30号80   | 灰下                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (7.4)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰褐色     | 長石・雲母・チャート    |            |
| 186 | 第31号131  | 不 4                   | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (4.2)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 7.5YR4/2   | 灰褐色     | 長石・石英・雲母      |            |
| 187 | ***      | 5T                    | 深鉢  | 口縁部(波状?) | ◇   | ◇           | (3.1)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR4/2    | 灰黄褐色    | 長石・チャート・石英    |            |
| 188 | 第32号148  | N 1 T                 | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (11.8)  | 口縁部上部、一糸沈線            | ナ     | ナ | 10YR6/3    | 灰白・黄褐色  | 長石・雲母・チャート・石英 |            |
| 189 | 第37号199  | なし                    | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (7.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 10YR7/4    | 灰白・黄褐色  | 長石・雲母・チャート    |            |
| 190 | 第33号185  | 第一A南壁 一層              | 深鉢  | 口縁部(平縁)  | ◇   | ◇           | (5.5)   | 口縁部上部にへら状工具による刷列文     | ナ     | ナ | 2.5Y4/2    | 灰赤色     | 長石・石英・チャート    |            |

| 番号  | 守山市報<br>古墳番号 | 注記                  | 器形 | 残存部分    | 残存率 | 復元口径・<br>底径(cm) | 残存高<br>(cm) | 文様・底部痕痕など               | 調整 |    | 胎色       | 資料<br>(多い順に記載) | 備考            |
|-----|--------------|---------------------|----|---------|-----|-----------------|-------------|-------------------------|----|----|----------|----------------|---------------|
|     |              |                     |    |         |     |                 |             |                         | 表  | 裏  |          |                |               |
| 248 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 口縁部外側に貝を押し引く突起          | ナデ | ナデ | 10YR6/3  | 灰白・チャート        |               |
| 249 | 第33回161      | 判読不能                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.6)       | 口縁部外側、一条突起              | ナデ | ナデ | 10YR4/1  | 褐色             | 長石・チャート       |
| 250 | 第33回156      | T北                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 口縁部外側、横方向に流線をもち一条突起     | ナデ | ナデ | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色           | 長石・石英・チャート    |
| 251 | 第33回159      | カメ                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 口縁部外側、一条突起              | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 252 | 第33回189      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 口縁部外側、流線のある一条突起         | ナデ | ナデ | 7.5YR5/1 | 褐色             | 長石・石英・チャート    |
| 253 | 第33回158      | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 口縁部外側、幅広い一条突起           | ナデ | ナデ | 10YR4/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・チャート    |
| 254 | 第33回160      | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.1)       | 口縁部外側、一条突起              | ナデ | ナデ | 10YR4/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・雲母      |
| 255 | ***          | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.1)       | 口縁部外側、指により凹部を装飾した突起     | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 256 | ***          | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.0)       | 口縁部外側、指により凹部を装飾した突起     | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 257 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | 口縁部外側、指により凹部を装飾した突起     | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・チャート・雲母 |
| 258 | ***          | 3 T P 2             | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.8)       | 口縁部外側、指により凹部を装飾した突起     | ナデ | ナデ | 5YR6/6   | 褐色             | 長石・雲母         |
| 259 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | 口縁部外側、指により凹部を装飾した突起     | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石・チャート・石英・雲母 |
| 260 | 第31回116      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 流線・縦突・横切りの流線・口縁部・指管状の押痕 | ナデ | ナデ | 5YR3/1   | 黒褐色            | 長石・石英・チャート    |
| 261 | 第29回55       | 第2A 南北張一層           | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (5.7)       | 棒状工具による流線・貼付隆帯          | ナデ | ナデ | 10YR6/2  | 灰黄褐色           | 長石・チャート       |
| 262 | 第31回86       | 不I                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 丸を施して流線・断面形状の棒状工具による刻印文 | ナデ | ナデ | 10YR7/6  | 明黄褐色           | 長石・赤褐色の粒子     |
| 263 | 第31回84       | I T A               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 流線(二文文?)                | ナデ | ナデ | 10YR4/1  | 褐色             | 長石・石英         |
| 264 | ***          | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.2)       | 太い流線による区画内に充填織文(LR)     | ナデ | ナデ | 10YR8/3  | 浅黄褐色           | 長石・チャート       |
| 265 | 第31回115      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 口縁部外側にLRの地文・貼付          | ナデ | ナデ | 10YR2/1  | 黒色             | 長石・石英         |
| 266 | 第29回7        | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.4)       | 口縁部外側に流線                | ナデ | ナデ | 10YR4/1  | 褐色             | 長石・石英         |
| 267 | 第31回87       | I T 中北              | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.5)       | 口縁部外側に流線、一条の刻目突起        | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英・チャート    |
| 268 | 第31回82       | カメ No. 2・土坑No.3(6号) | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.5)       | 雲行文?すれか?                | ナデ | ナデ | 10YR6/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・雲母      |
| 269 | 第31回83       | カメ No. 9            | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.9)       | 流線(二文文?)                | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英・雲母      |
| 270 | 第31回121      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.6)       | 流線(二文文?)                | ナデ | ナデ | 10YR6/8  | 褐色             | 長石・雲母・石英      |
| 271 | 第29回5        | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.6)       | ヘラ描流線・ヘラ木口刺突・権原文様       | ナデ | ナデ | 7.5YR4/1 | 褐色             | 長石・石英・チャート・雲母 |
| 272 | 第29回1        | ■B東 ■中央             | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | ヘラ描流線・ヘラ木口刺突            | ナデ | ナデ | 7.5YR6/4 | 灰白・褐色          | 長石・石英・チャート    |
| 273 | 第29回2        | ■北B ■東二層            | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.0)       | ヘラ描流線・ヘラ木口刺突            | ナデ | ナデ | 5YR6/6   | 褐色             | 長石・雲母         |
| 274 | 第29回4        | ■北B ■東二層            | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.0)       | ヘラ描流線・ヘラ木口刺突            | ナデ | ナデ | 7.5YR4/1 | 褐色             | 長石・チャート・石英・雲母 |
| 275 | 第29回3        | ■北B ■東二層            | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.9)       | ヘラ描流線・ヘラ木口刺突            | ナデ | ナデ | 5YR6/4   | 灰白・褐色          | 長石・チャート・石英・雲母 |
| 276 | 第31回136      | 5 T ■               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 口縁部外側に2本の太い流線           | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英・雲母      |
| 277 | 第30回65       | 第一A三層               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.1)       | 山形突起・粘土の貼付による肥厚         | ナデ | ナデ | 10YR8/2  | 灰白色            | チャート・長石       |
| 278 | 第31回88       | 判読不能                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.0)       | 流線間にLRを充填               | ナデ | ナデ | 2.5Y3/1  | 黒褐色            | 長石・雲母         |
| 280 | 第29回8        | 一層                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.8)       | 丸棒状工具による凹縁              | ナデ | ナデ | 7.5YR5/2 | 灰褐色            | 長石・雲母         |
| 281 | 第31回129      | S T 東 P             | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (4.7)       | 二本流線間にLRの充填織文           | ナデ | ナデ | 7.5YR6/3 | 灰白・褐色          | 長石・雲母・石英      |
| 282 | 第30回64       | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.7)       | 横、および斜方向の半截竹管文          | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | チャート・長石       |
| 283 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.2)       | 横、および斜方向の半截竹管文          | ナデ | ナデ | 7.5YR7/6 | 褐色             | 長石・チャート       |
| 285 | 第34回5        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.3)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 7.5Y6/6  | 褐色             | 長石・雲母・チャート    |
| 286 | 第34回1        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.2)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 7.5YR7/6 | 褐色             | 長石・チャート       |
| 287 | 第34回4        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (5.5)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 288 | ***          | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (9.2)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | チャート・長石・雲母    |
| 289 | 第34回12       | 不2                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.1)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | チャート・長石・雲母    |
| 290 | 第34回8        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (10.5)      | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 2.5Y3/6  | 明赤褐色           | 長石・雲母         |
| 291 | 第34回11       | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (10.5)      | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 292 | 第34回1        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.0)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート       |
| 294 | 第34回6        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 2.5Y7/3  | 淡赤褐色           | 長石・石英・チャート    |
| 295 | 第34回3        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (7.1)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 297 | 第34回15       | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.0)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 5YR6/6   | 褐色             | 長石・雲母         |
| 298 | 第34回16       | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.4)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/4  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 299 | ***          | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR8/3  | 浅黄褐色           | 長石・チャート       |
| 300 | ***          | I T G I             | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.2)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 2.5Y8/2  | 灰白色            | 長石・チャート       |
| 301 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR5/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英・雲母・チャート |
| 302 | 第34回9        | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.3)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 7.5YR7/6 | 褐色             | 長石・石英・チャート    |
| 303 | ***          | 判読不能                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.3)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 7.5YR6/6 | 褐色             | 長石・チャート       |
| 304 | 第34回7        | ST坑底内 第10号カメカンド     | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 7.5YR4/1 | 褐色             | 長石・チャート       |
| 305 | ***          | 第一A 西掘 三層           | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (11.2)      | 木葉痕あり                   | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英・チャート    |
| 306 | ***          | I P D               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.3)       | 指による押圧痕をもつ貼付隆帯          | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート       |
| 307 | ***          | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (8.6)       | 指による押圧痕をもつ貼付隆帯          | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | チャート・長石       |
| 308 | 第34回14       | ST西盛土               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.0)       | 指による押圧痕をもつ貼付隆帯          | ナデ | ナデ | 10YR6/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・雲母・チャート |
| 238 | 第37回188      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.3)       | 口縁部外側に流線                | ナデ | ナデ | 5YR4/1   | 褐色             | 長石・チャート       |
| 239 | ◇            | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.9)       | 口縁部外側に流線                | ナデ | ナデ | 5YR6/6   | 褐色             | 長石・チャート       |
| 240 | ◇            | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (4.1)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 7.5YR6/4 | 灰白・褐色          | 長石・チャート       |
| 241 | 第33回162      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.3)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR6/3  | 灰黄褐色           | 長石・チャート・石英    |
| 242 | 第33回164      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.7)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR3/1  | 黒褐色            | 長石・石英         |
| 243 | ◇            | 2h                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (5.0)       | 指による押圧痕を持つ突起            | ナデ | ナデ | 10YR7/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・チャート・雲母    |
| 244 | 第33回157      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.0)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 2.5Y3/2  | 黒褐色            | 長石・石英・チャート    |
| 245 | 第37回190      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.0)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 7.5YR4/1 | 褐色             | 長石・石英・チャート    |
| 246 | 第33回169      | 南下                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.1)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR4/3  | 灰白・黄褐色         | 長石・石英         |
| 248 | ◇            | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR6/3  | 灰黄褐色           | 長石・チャート       |
| 249 | 第33回161      | 判読不能                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (6.0)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR4/1  | 褐色             | 長石・チャート       |
| 250 | 第33回156      | T北                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 2.5Y4/2  | 暗灰黄色           | 長石・石英・チャート    |
| 251 | 第33回159      | カメ                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.4)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 252 | 第37回189      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 7.5YR5/1 | 褐色             | 長石・石英・チャート    |
| 253 | 第33回158      | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR4/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・チャート    |
| 254 | 第33回160      | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.1)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR4/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・雲母      |
| 255 | ◇            | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.1)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 256 | ◇            | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.0)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石            |
| 257 | ◇            | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石・石英・チャート・雲母 |
| 258 | ◇            | 3 T P 2             | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (1.8)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 5YR6/6   | 褐色             | 長石・雲母         |
| 259 | ◇            | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.8)       | 口縁部外側に流線、指による押圧痕        | ナデ | ナデ | 10YR5/2  | 灰黄褐色           | 長石・チャート・石英・雲母 |
| 260 | 第31回116      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.5)       | 流線・縦突・横切りの流線・口縁部・指管状の押痕 | ナデ | ナデ | 5YR3/1   | 黒褐色            | 長石・石英・チャート    |
| 261 | 第29回55       | 第2A 南北張一層           | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (5.7)       | 棒状工具による流線・貼付隆帯          | ナデ | ナデ | 10YR6/2  | 灰黄褐色           | 長石・チャート       |
| 262 | 第31回86       | 不I                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 丸を施して流線・断面形状の棒状工具による刻印文 | ナデ | ナデ | 10YR7/6  | 明黄褐色           | 長石・赤褐色の粒子     |
| 263 | 第31回84       | I T A               | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 流線(二文文?)                | ナデ | ナデ | 10YR4/1  | 褐色             | 長石・石英         |
| 264 | ◇            | ■I B                | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (3.2)       | 太い流線による区画内に充填織文(LR)     | ナデ | ナデ | 10YR8/3  | 浅黄褐色           | 長石・チャート       |
| 265 | 第31回115      | なし                  | 深鉢 | 口縁部(平縁) | ◇   | ◇               | (2.7)       | 口縁部外側にLRの地文・貼付          | ナデ | ナデ | 10YR2/1  | 黒色             | 長石・石英         |

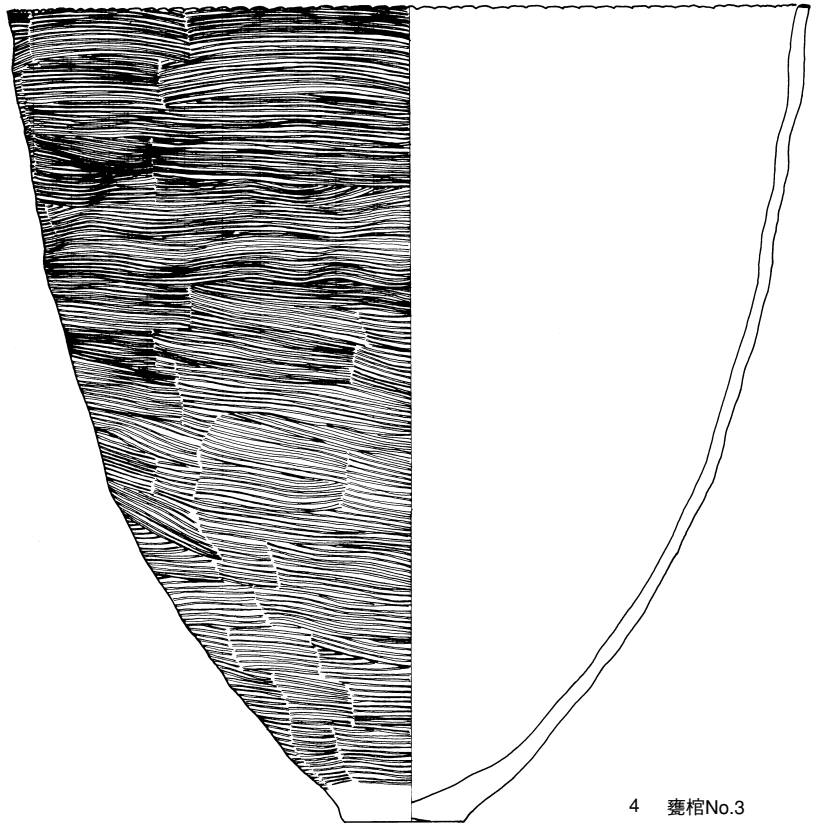


甕棺No.1

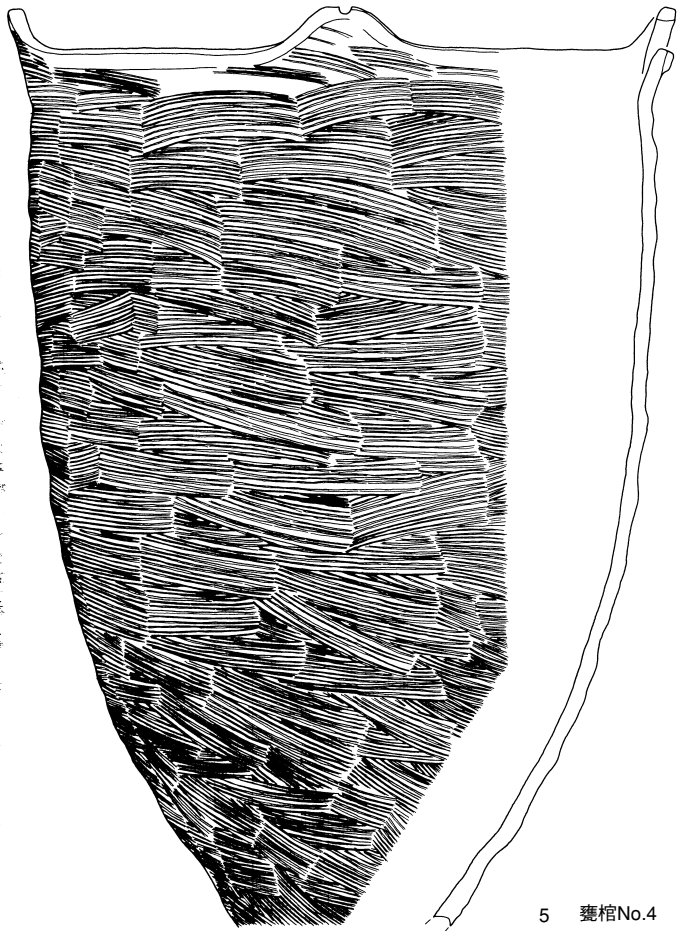


甕棺No.2

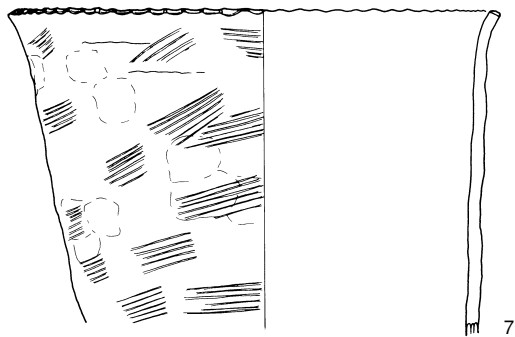
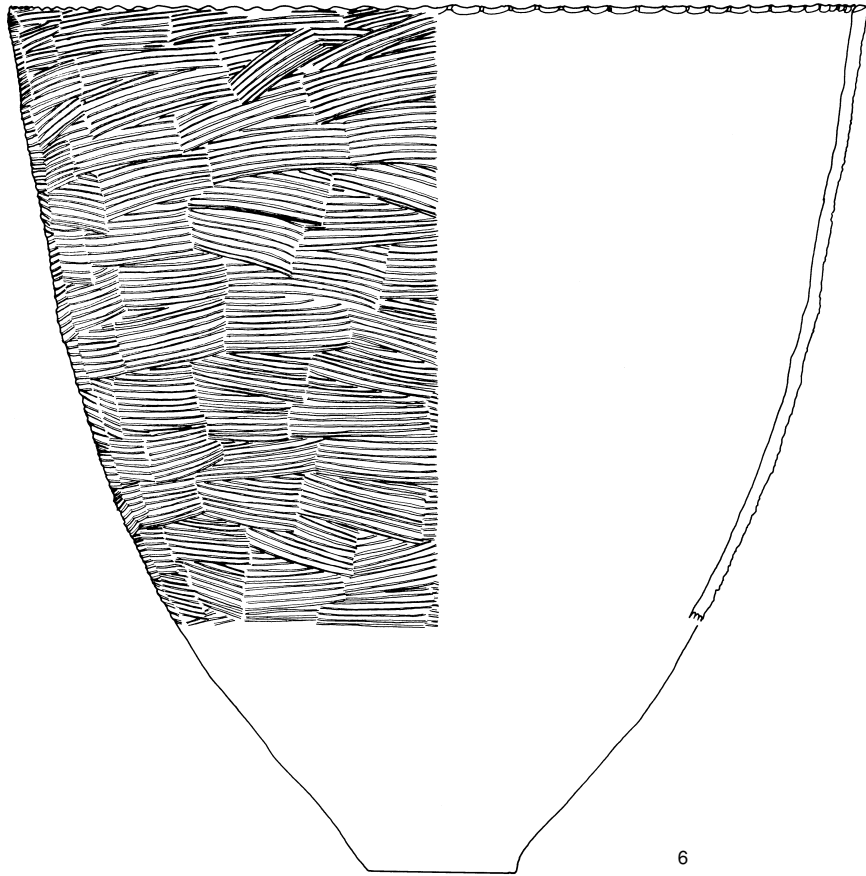
0 10cm



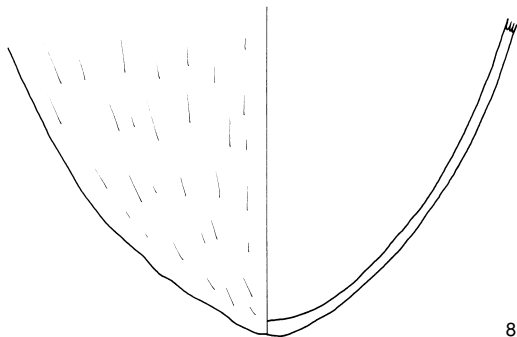
4 甕棺No.3

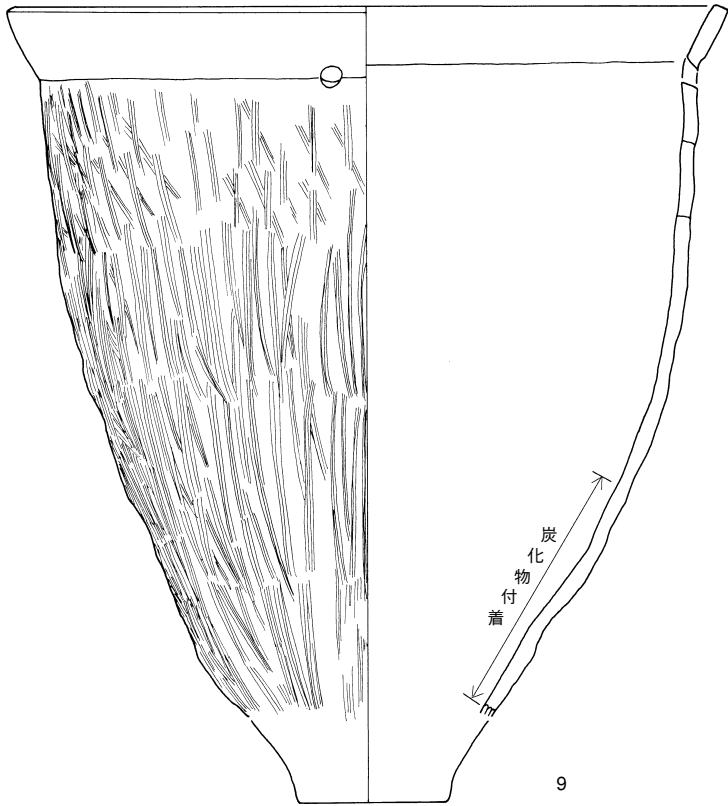


5 甕棺No.4



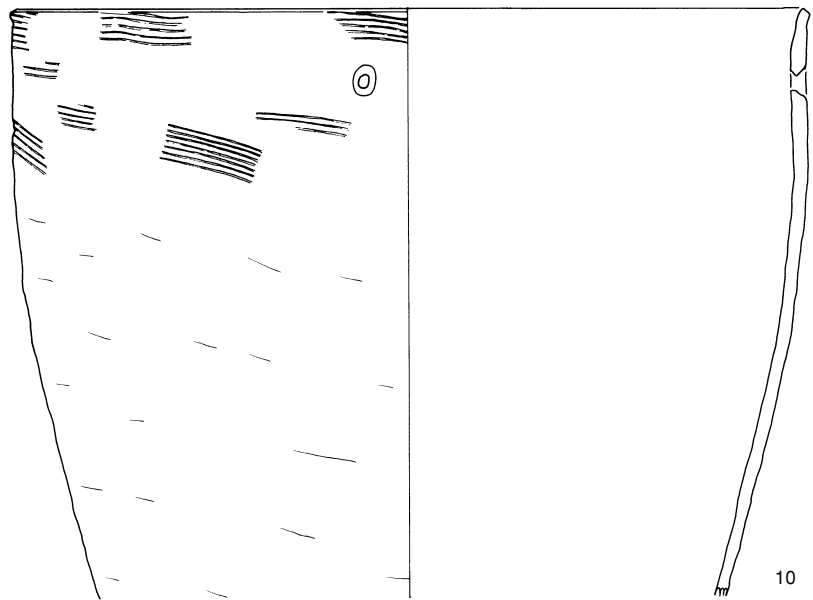
甕棺No.5





9

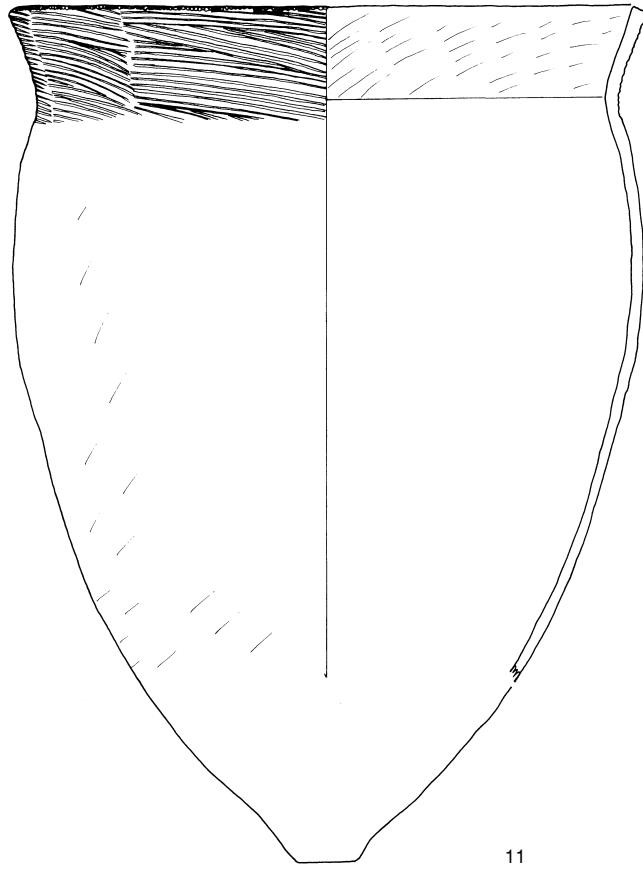
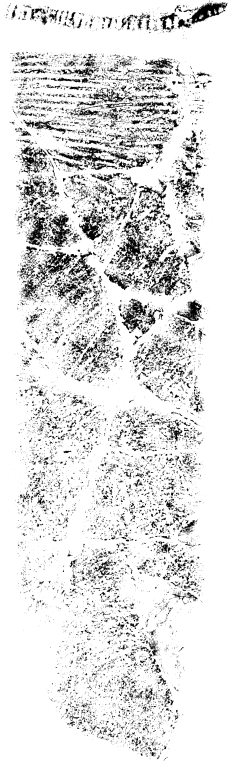
甕棺No.6



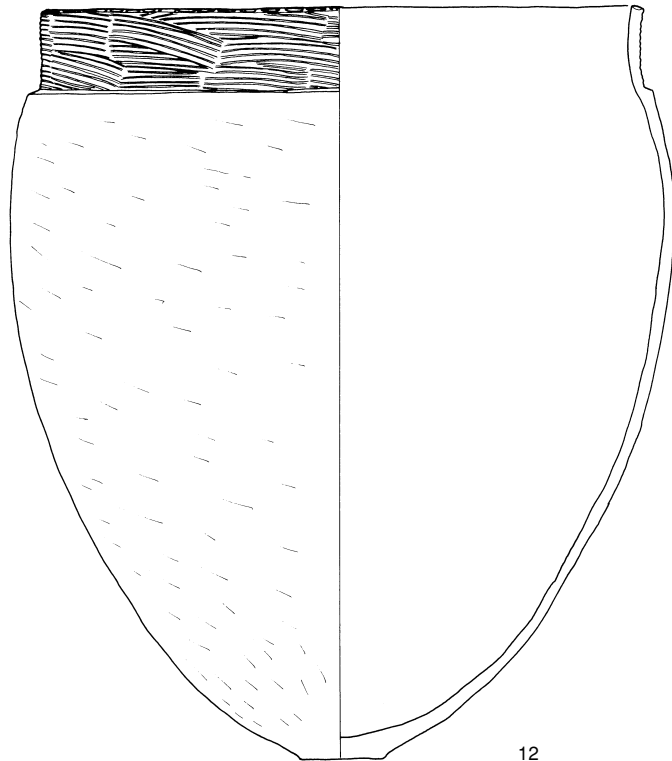
10

甕棺No.7

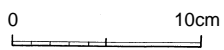
0 10cm

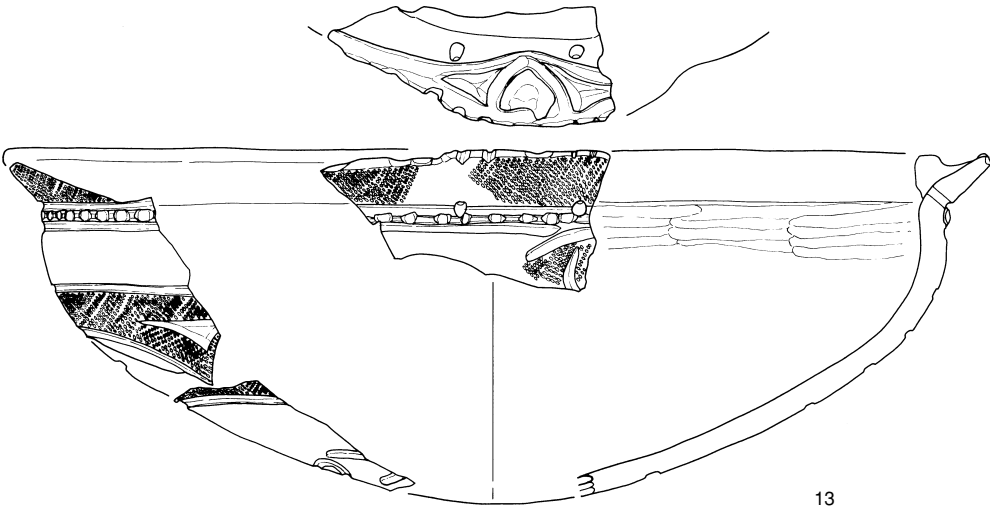


11

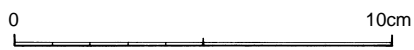
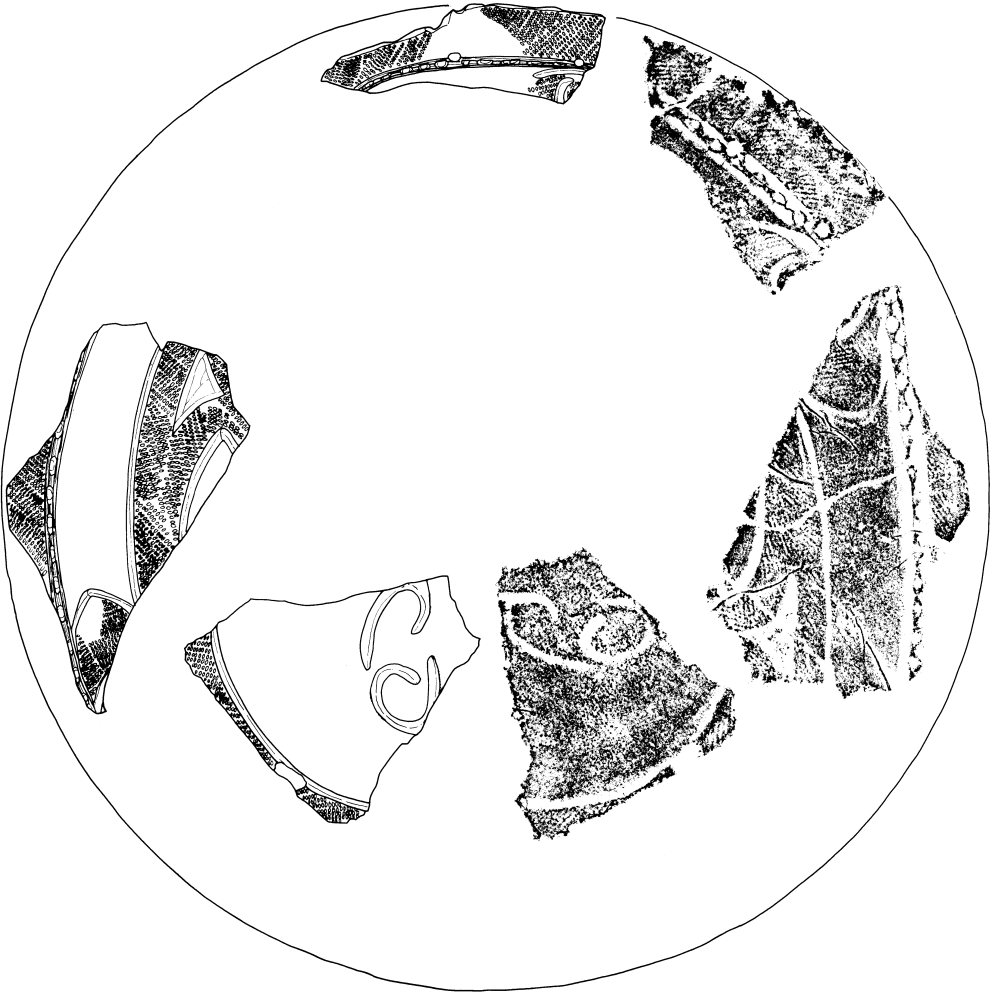


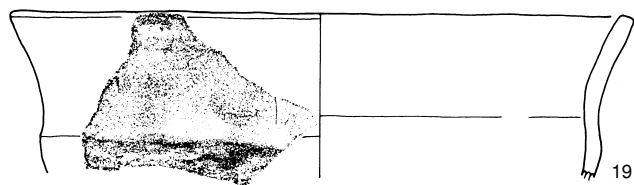
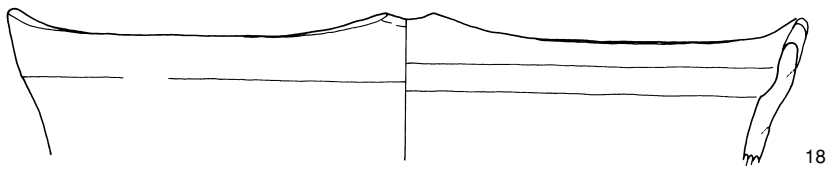
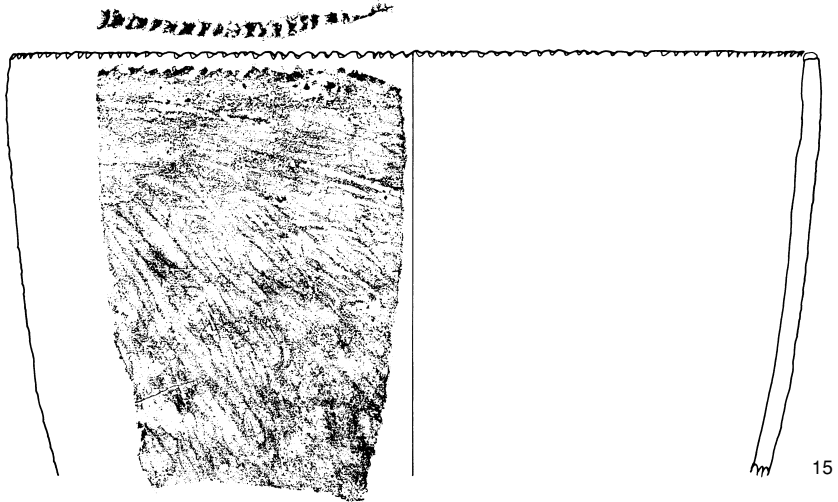
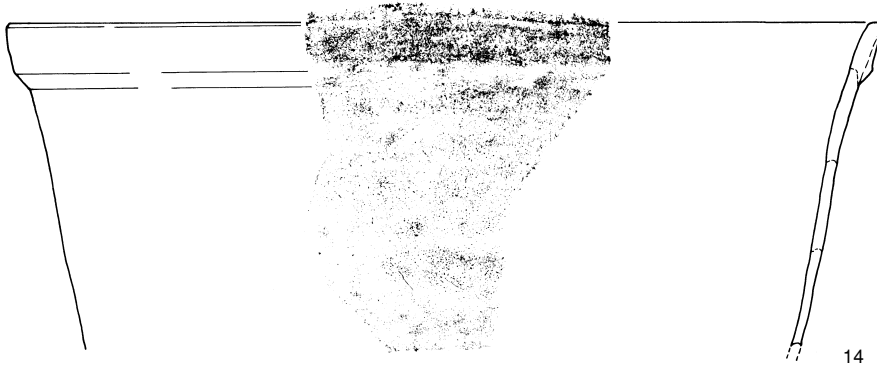
12



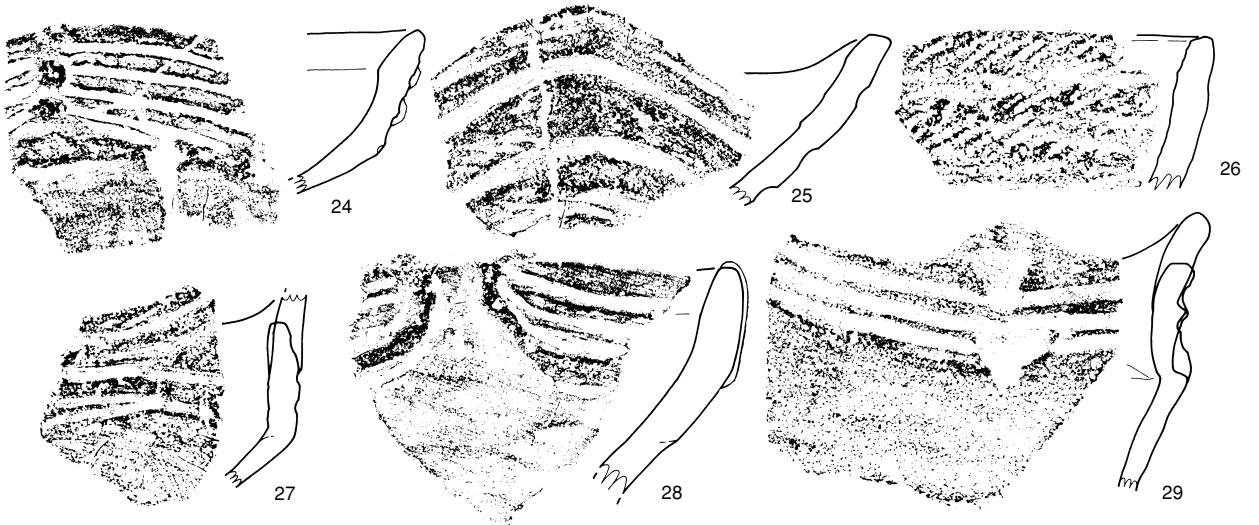
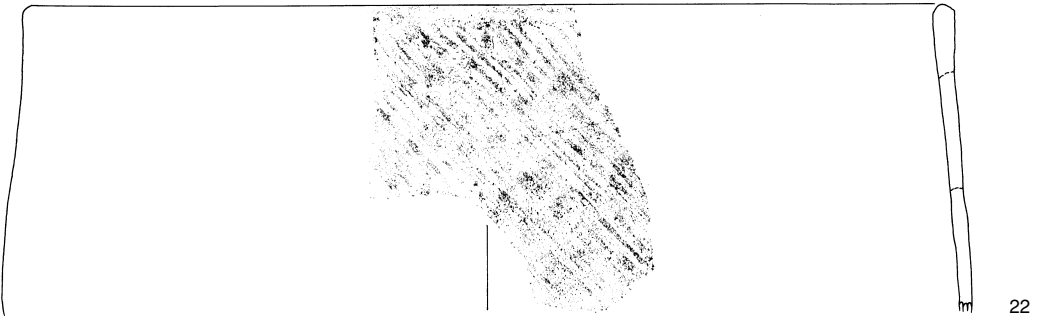
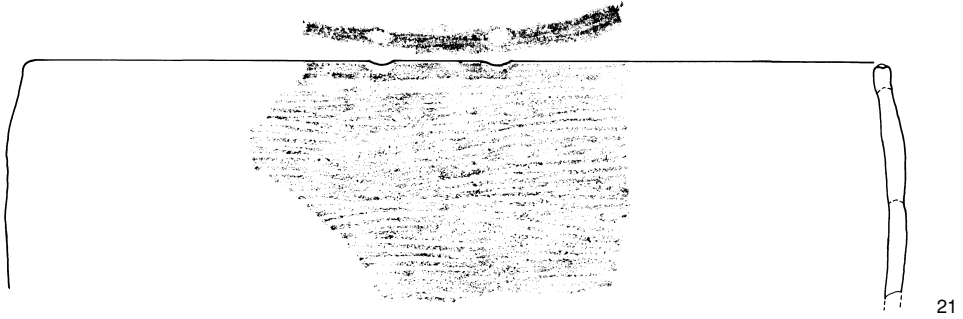
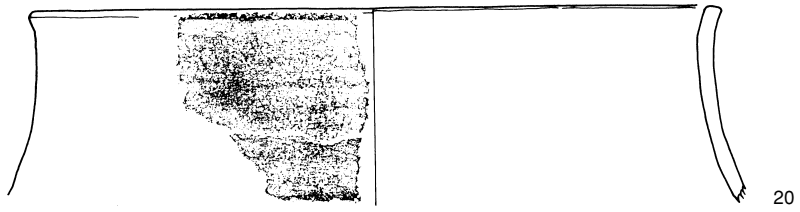


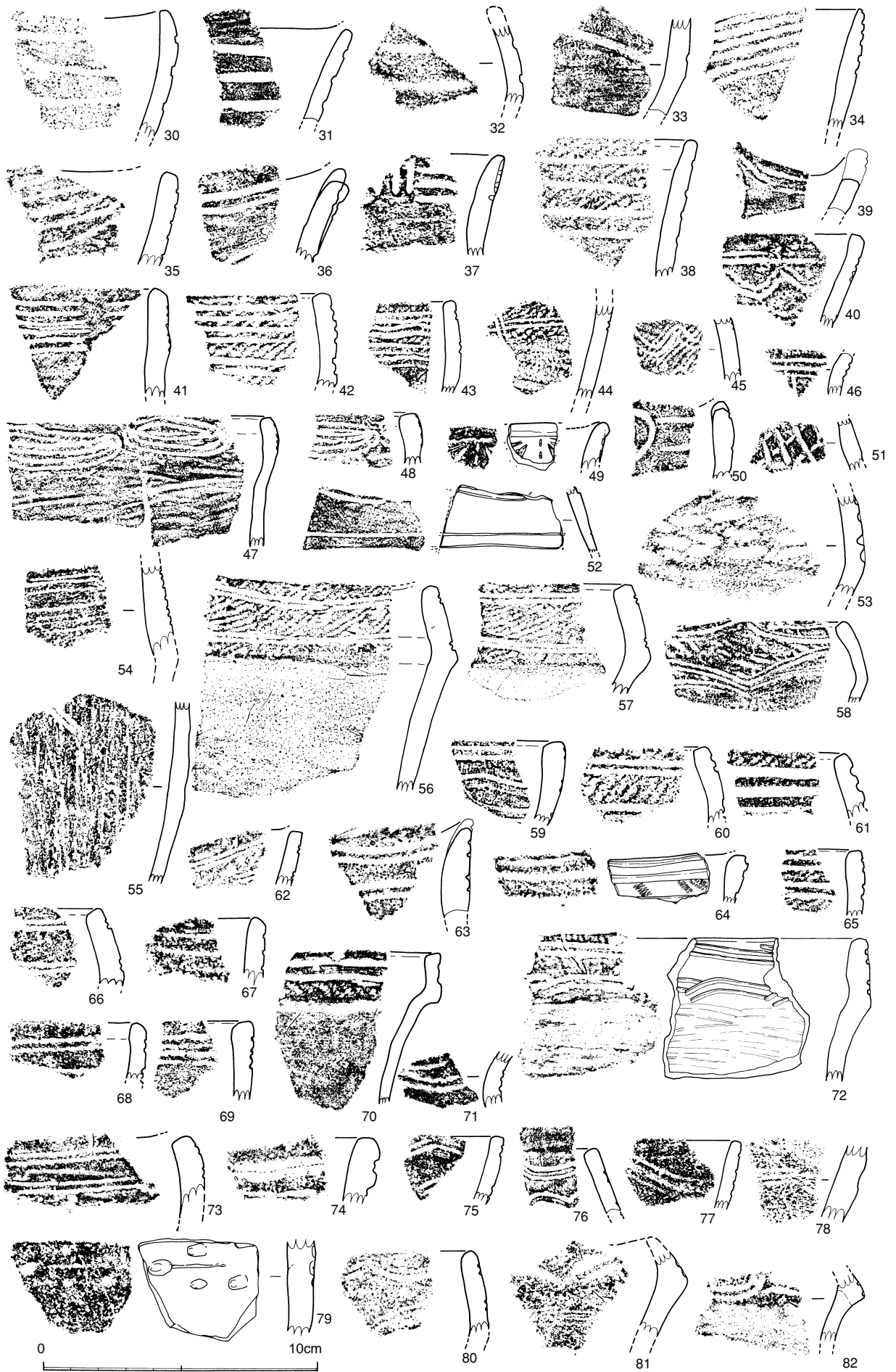
13

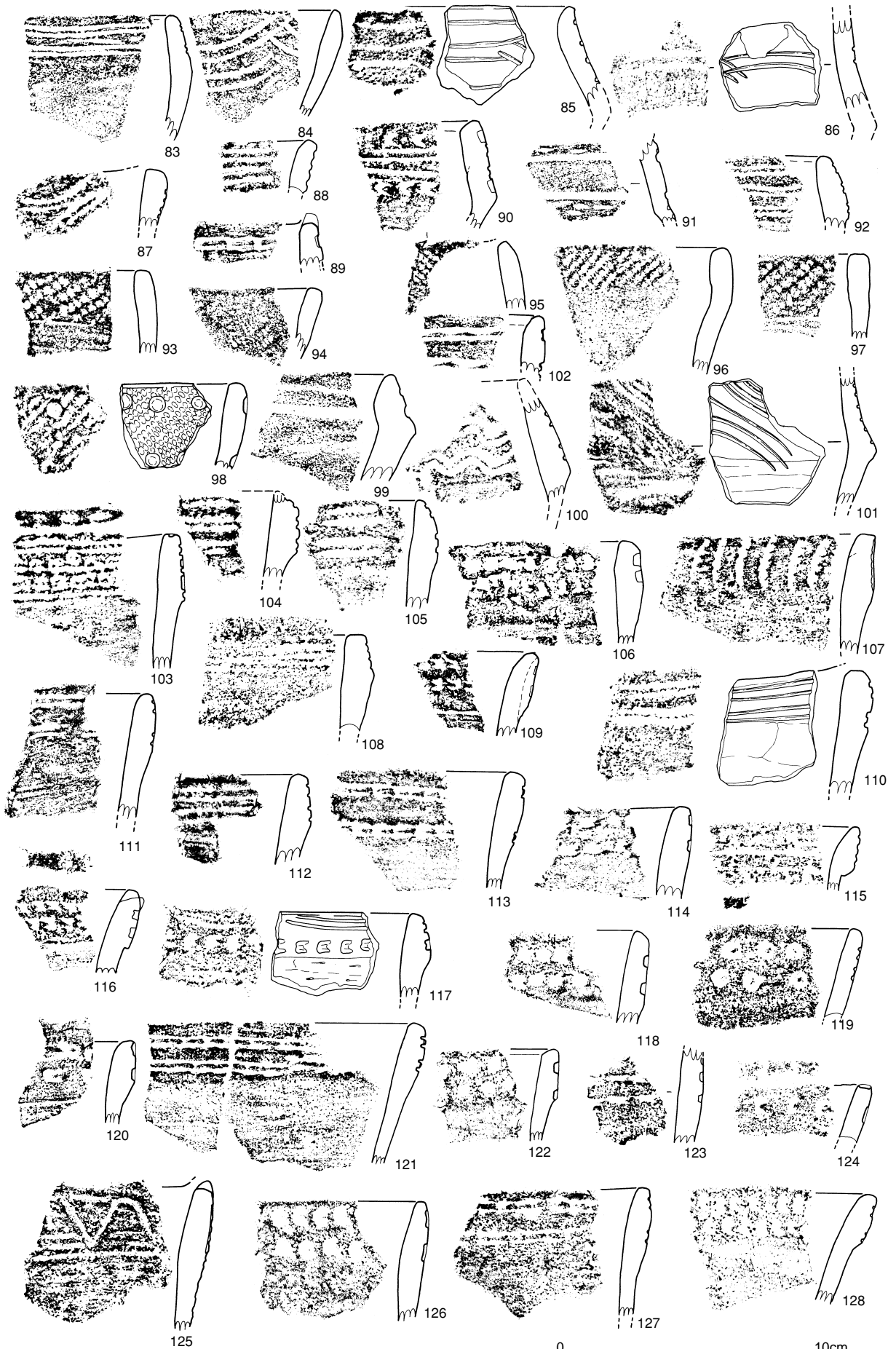


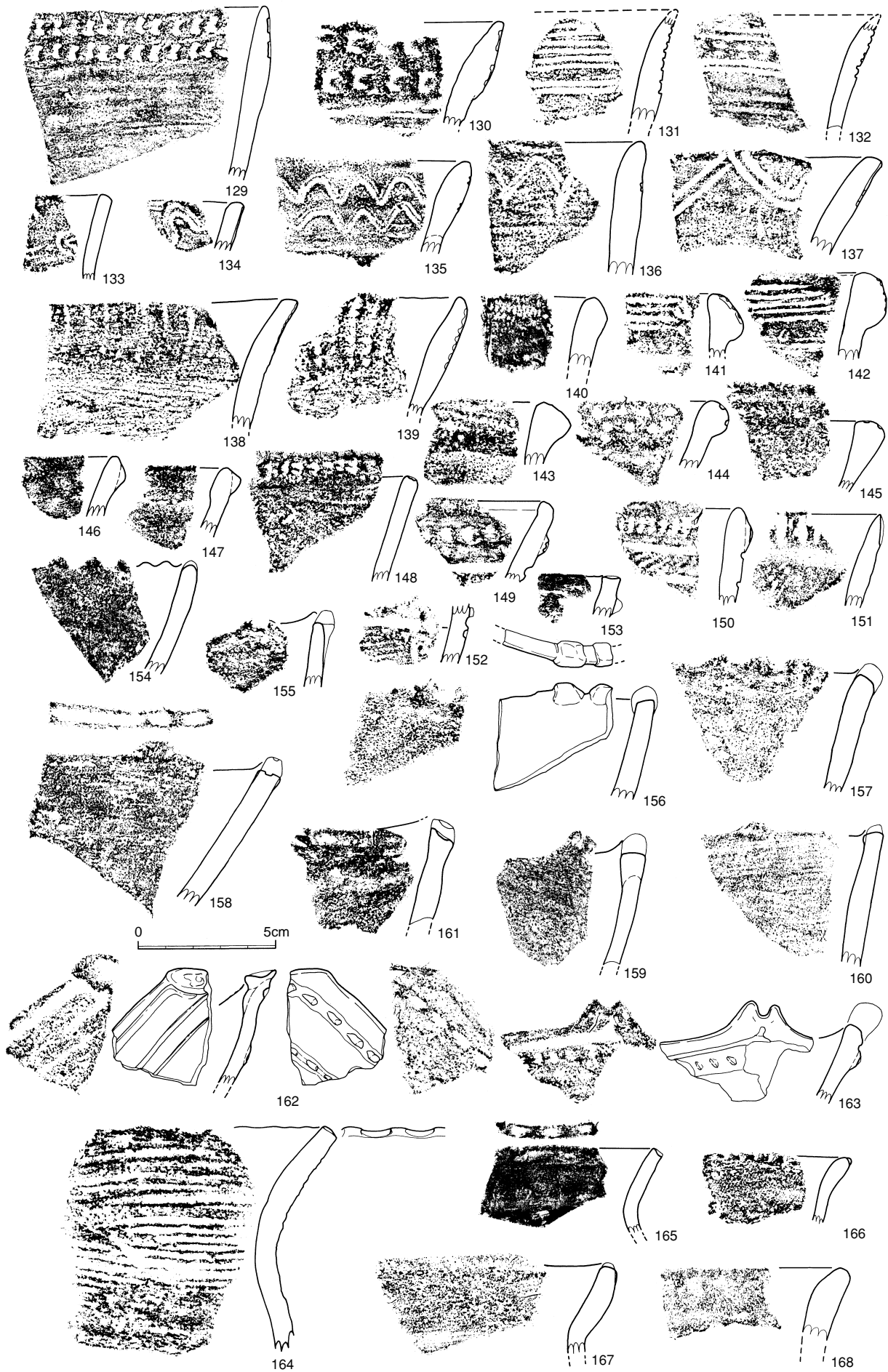


0 10cm

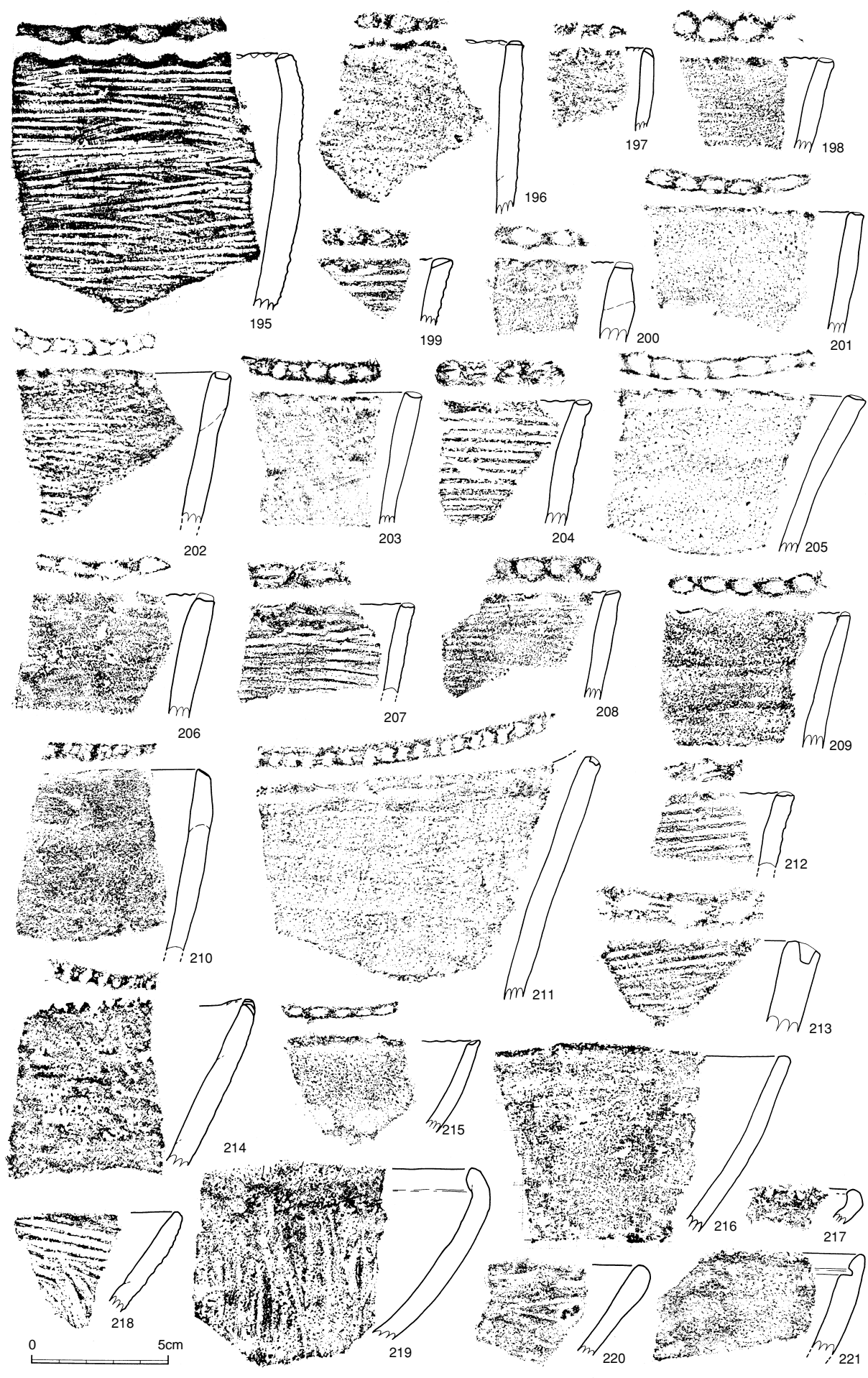










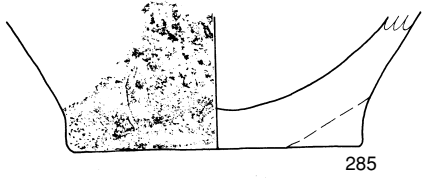




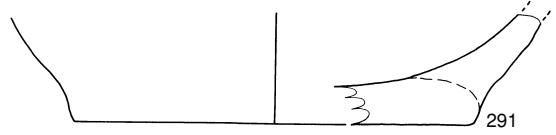


赤色顔料残存部分

0 10cm



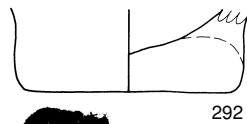
285



291



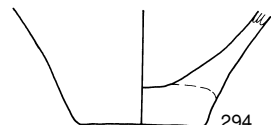
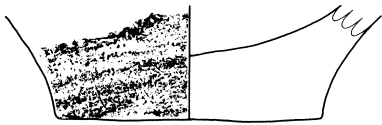
286



292



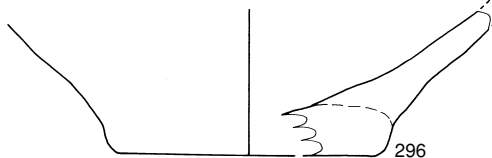
293



294

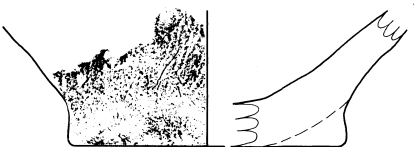


295

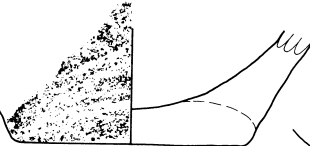


296

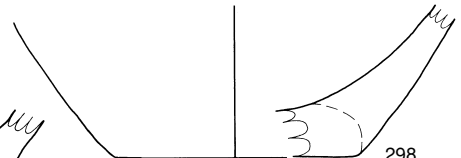
0 5cm



287



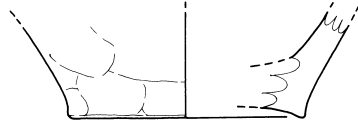
297



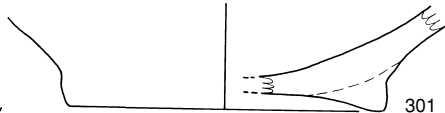
298



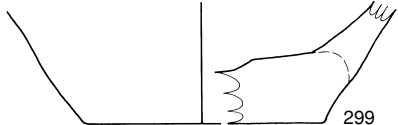
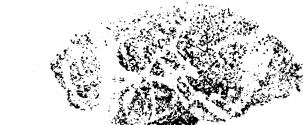
288



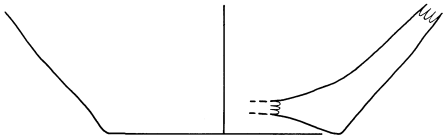
300



301



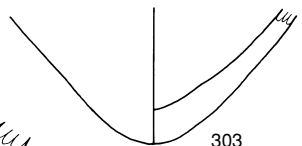
299



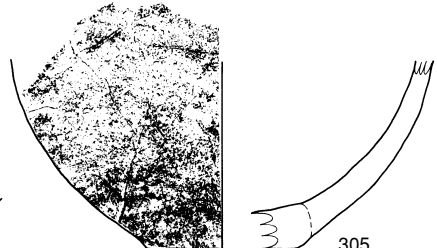
302



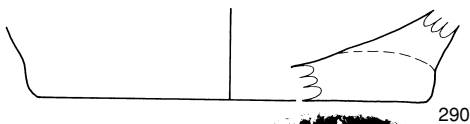
289



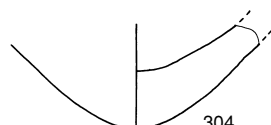
303



305



290



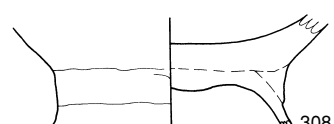
304



306

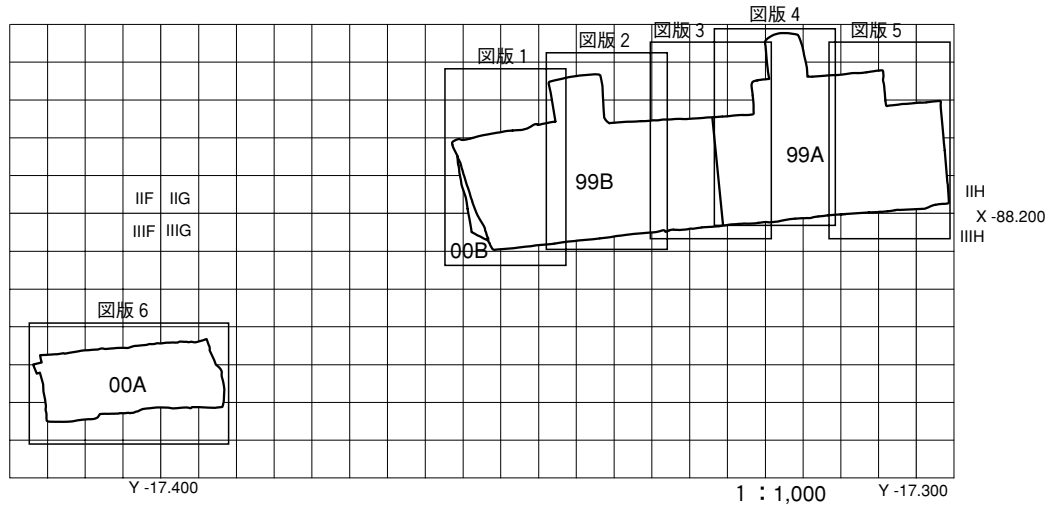


307



308

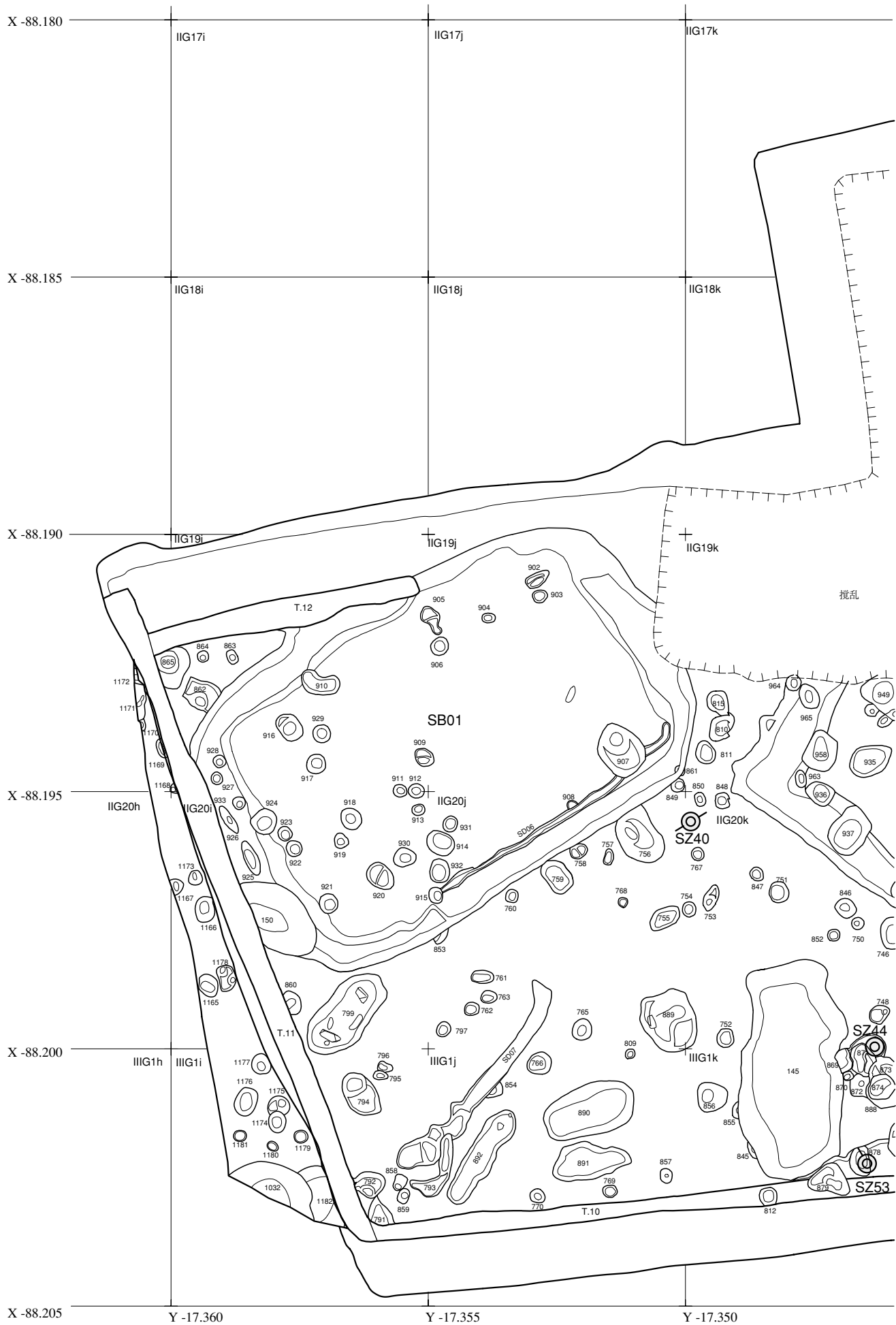
# 図版

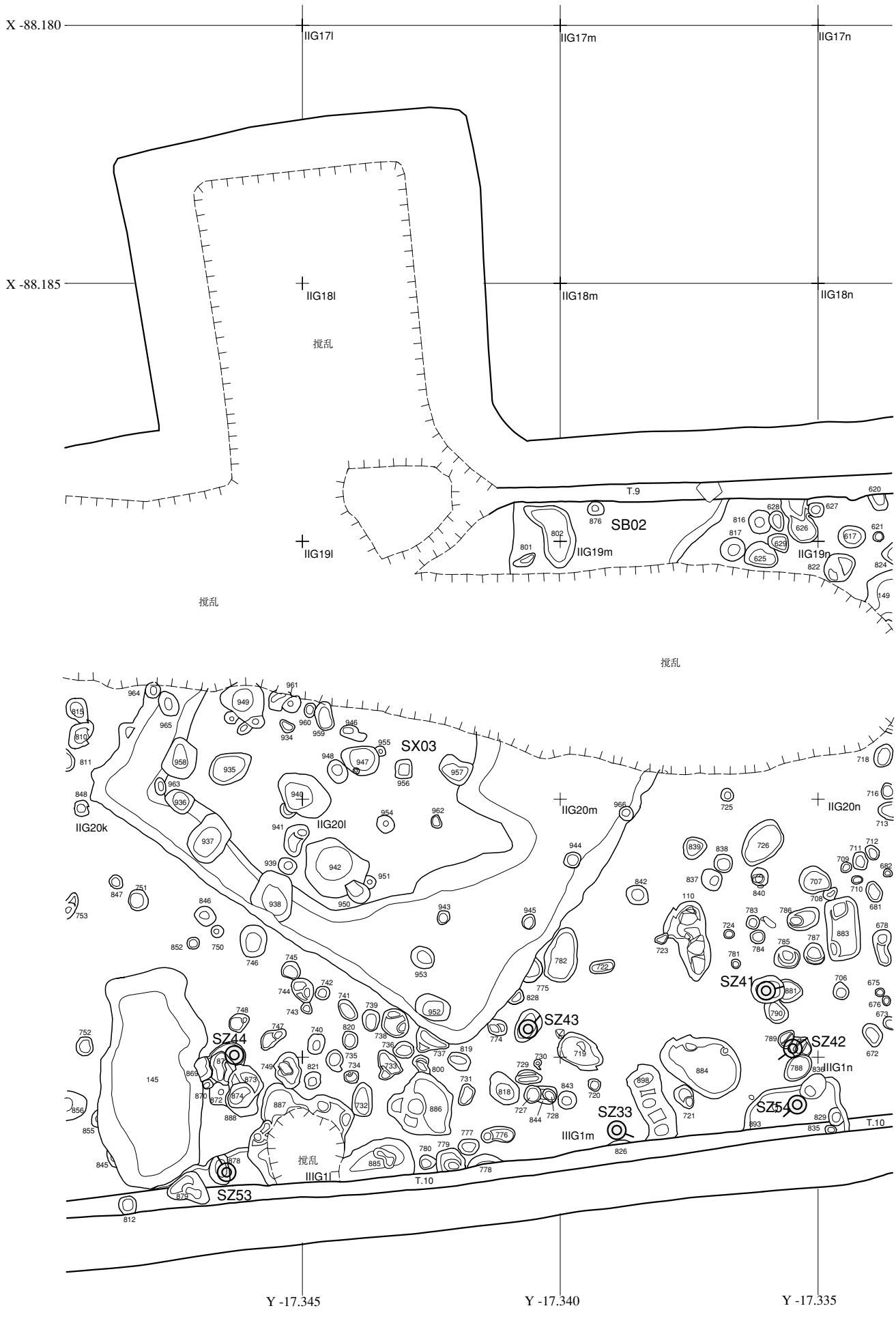


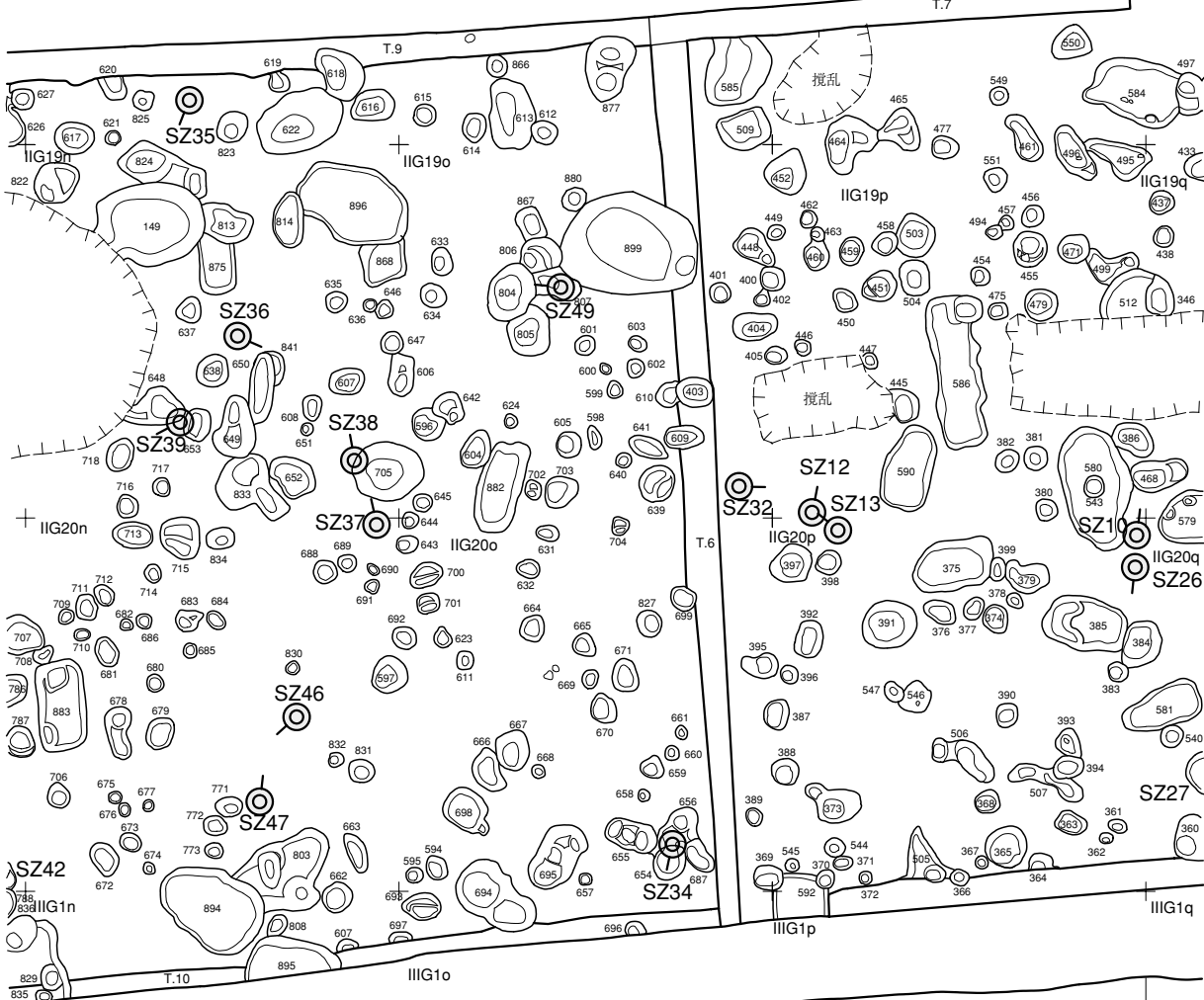
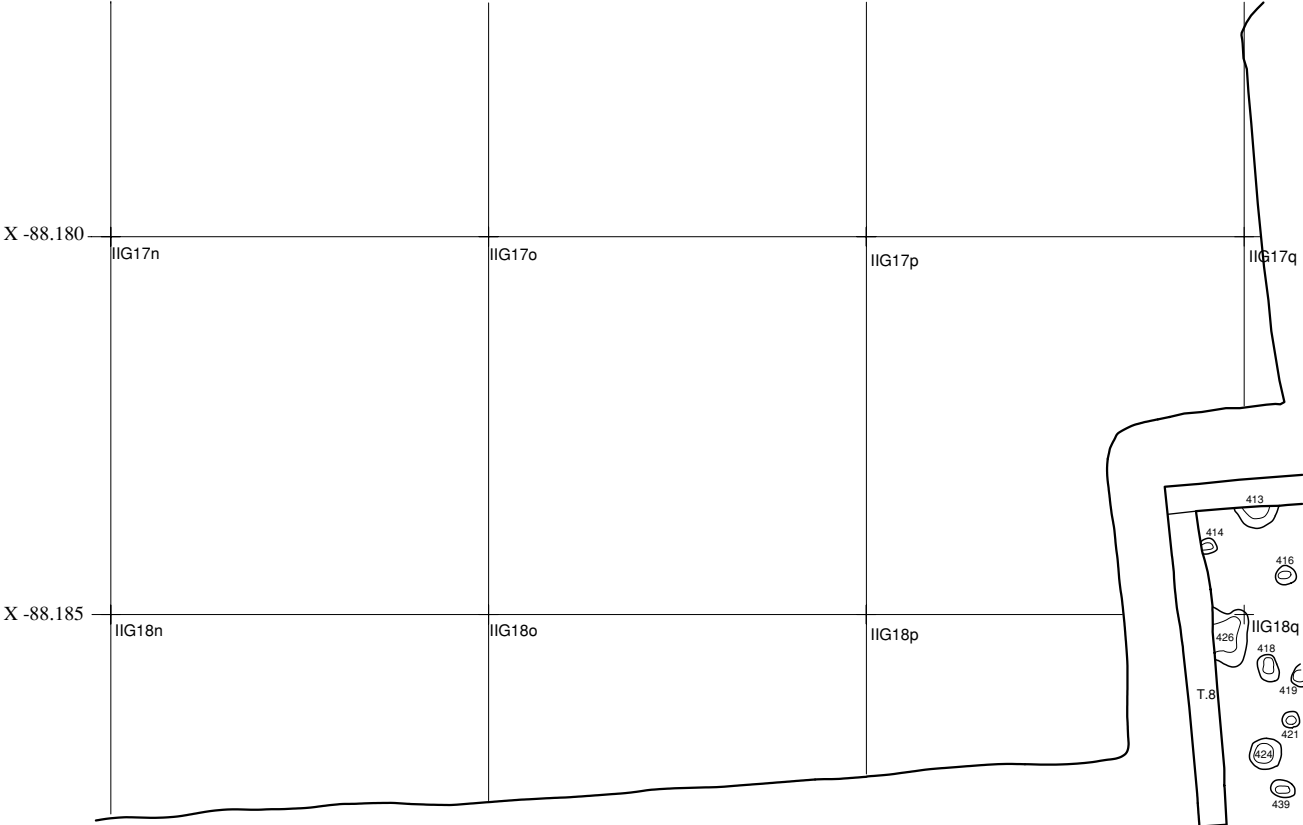
遺構配置図 1 : 100

遺物実測図

- 土器 土器棺など 1 : 4
- その他 1 : 2 一部 1 : 3
- 石器 小型剥片石器 2 : 3
- 打製石斧・磨製石斧・礫器 1 : 3
- 敲石・石皿など 1 : 4











X-88.215  
IIIF4q

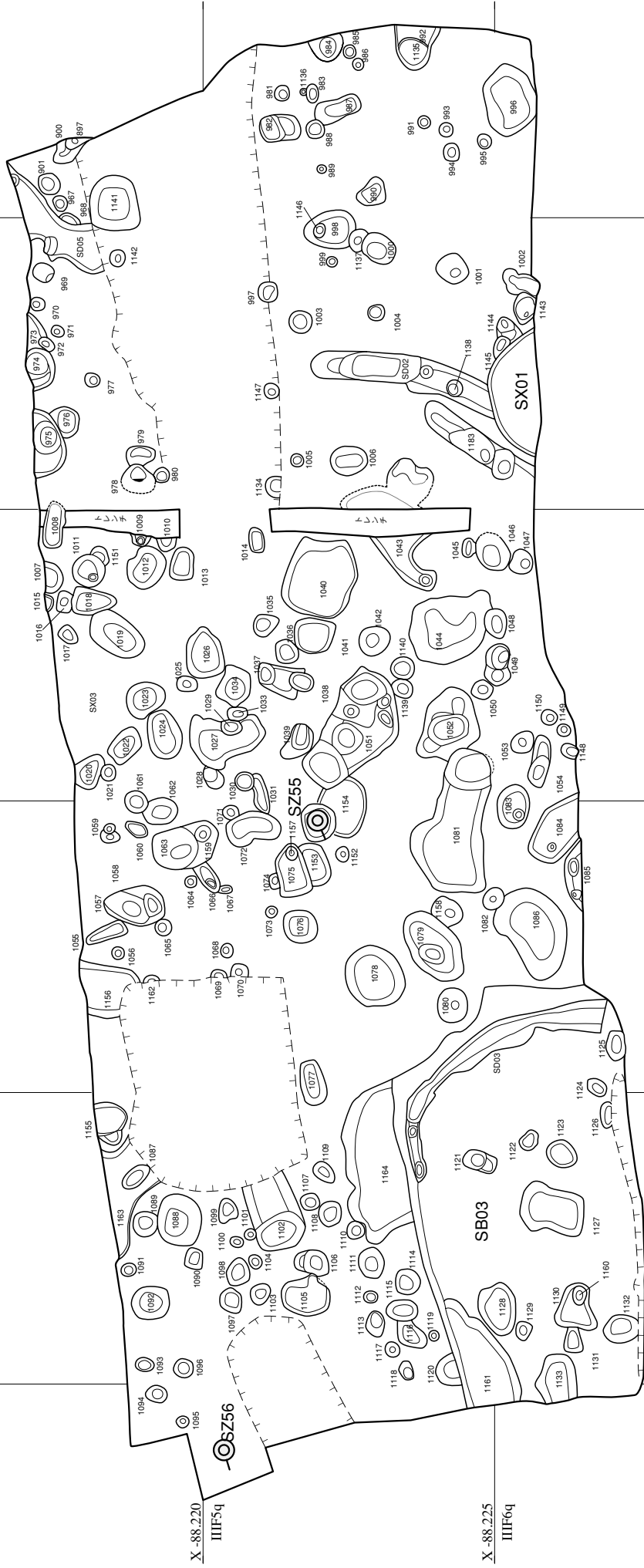
IIIF4r

IIIF4s

IIIF4t

IIIG4a

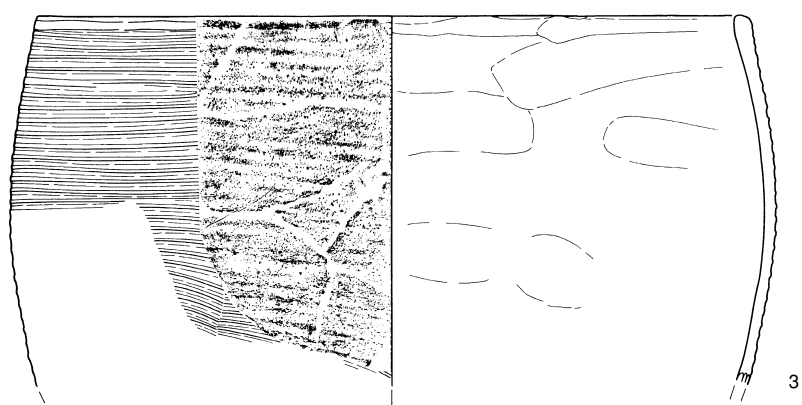
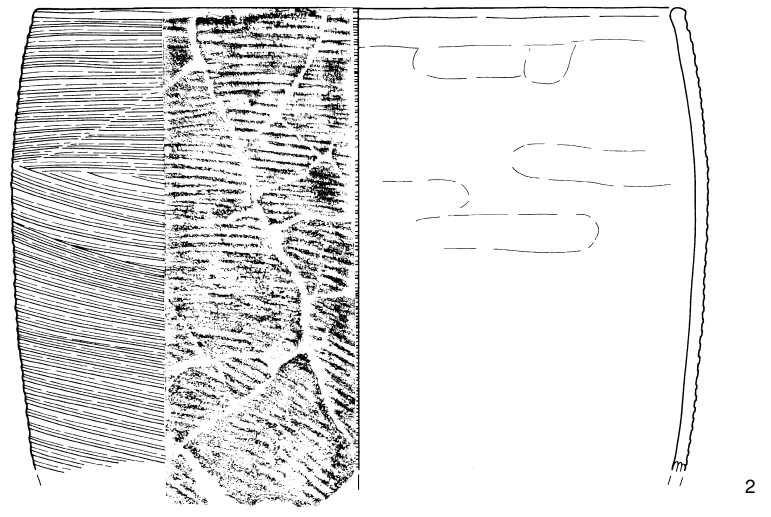
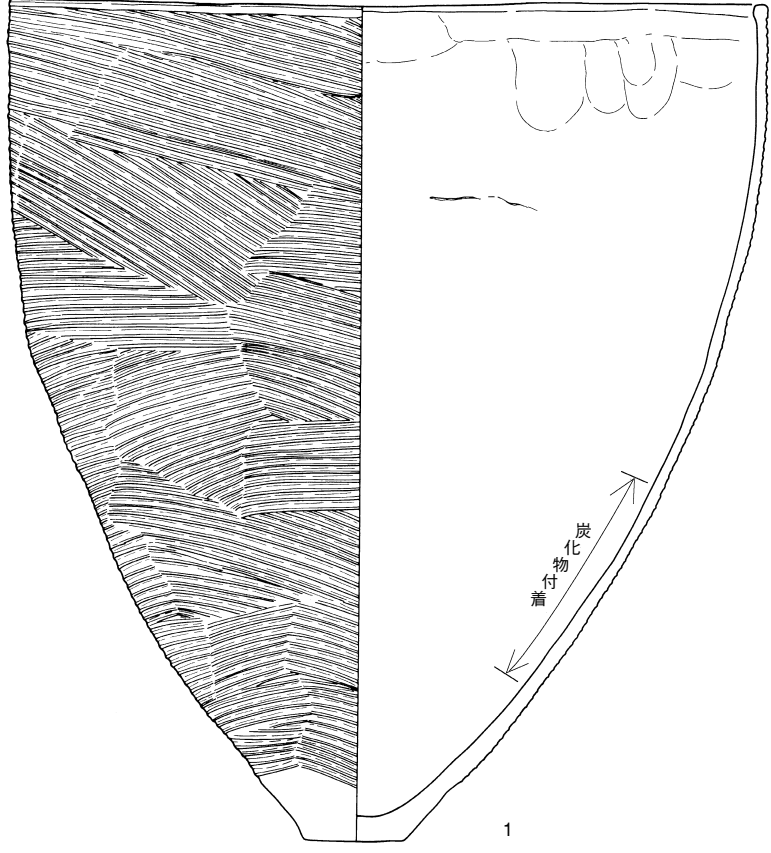
IIIG4b



X-88.220  
IIIF5q

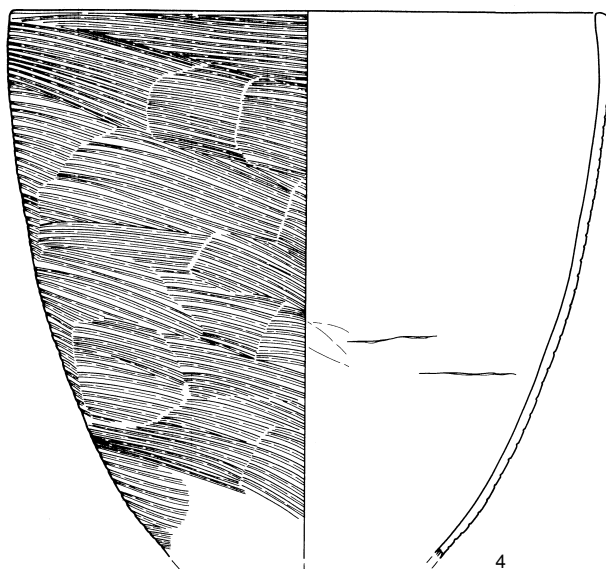
X-88.225  
IIIF6q

X-88.230

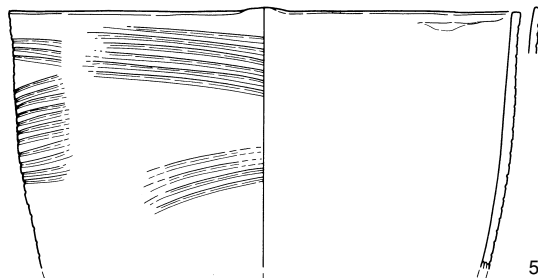


0 10cm

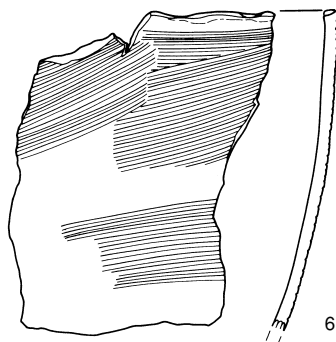
SZ 02



4



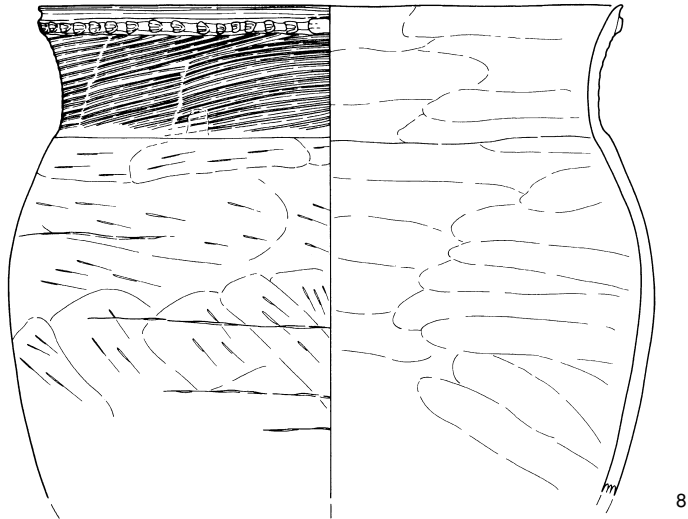
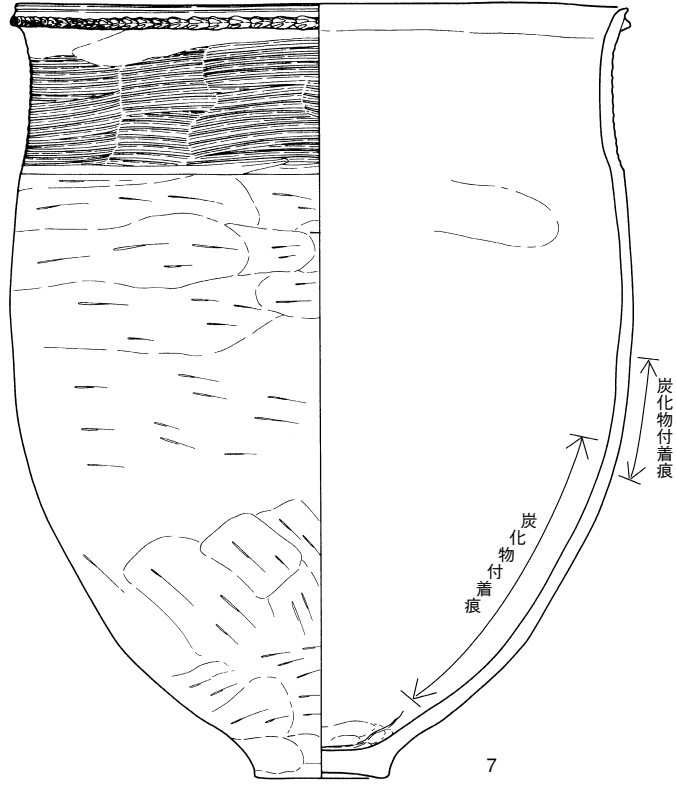
5



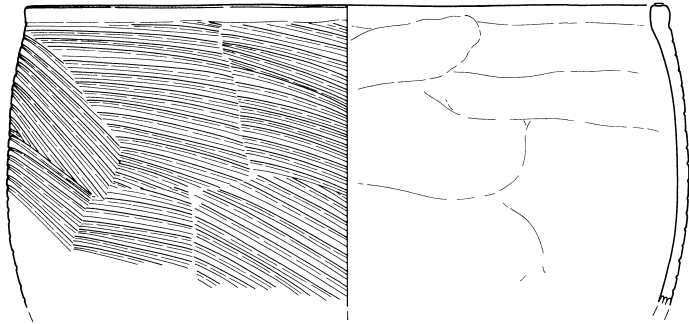
6

0 10cm

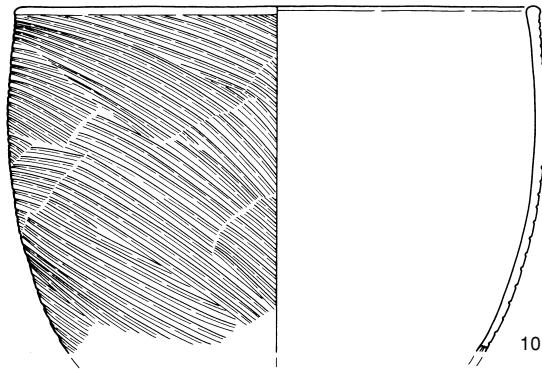
SZ 03



0 10cm

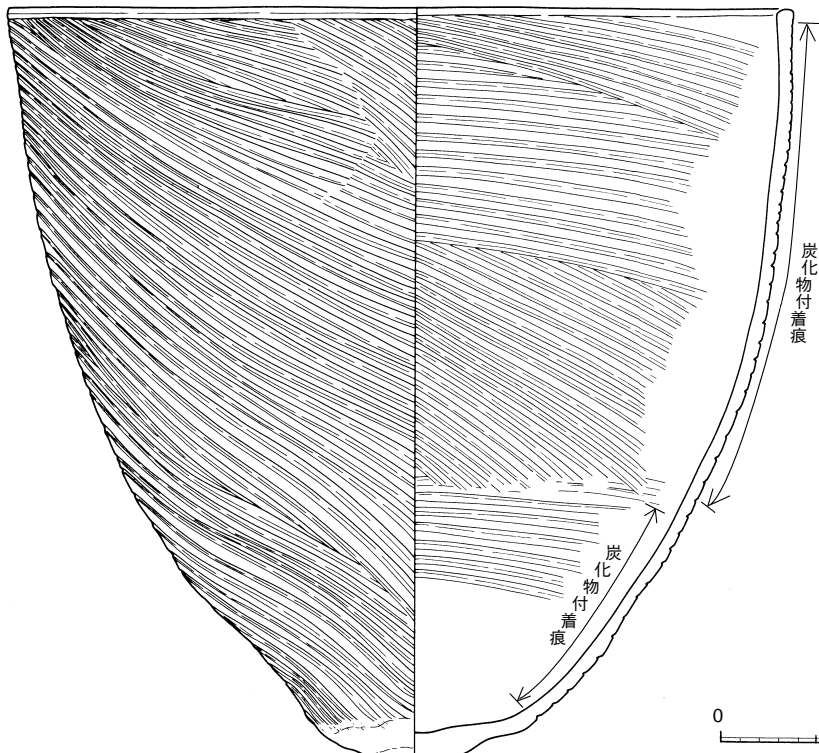


9



10

SZ 06



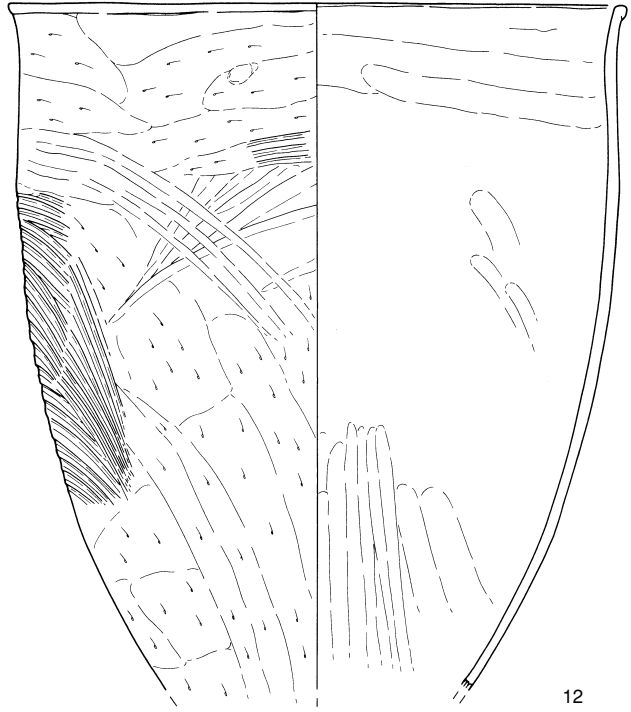
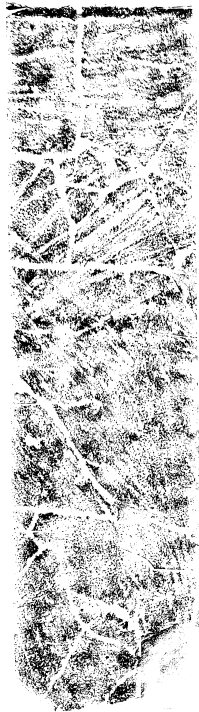
炭化物附着痕

炭化物附着痕

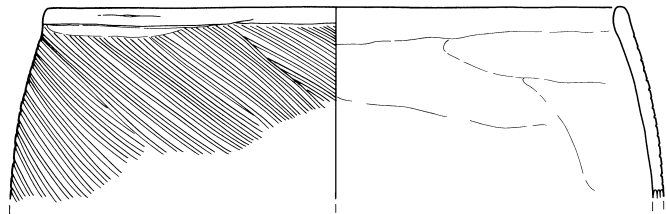
0 10cm

SZ 07

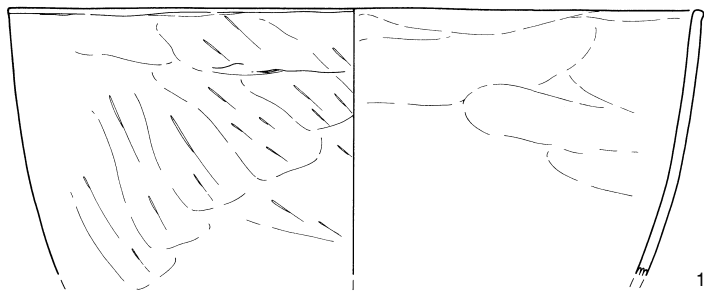
11



12

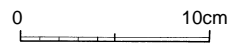


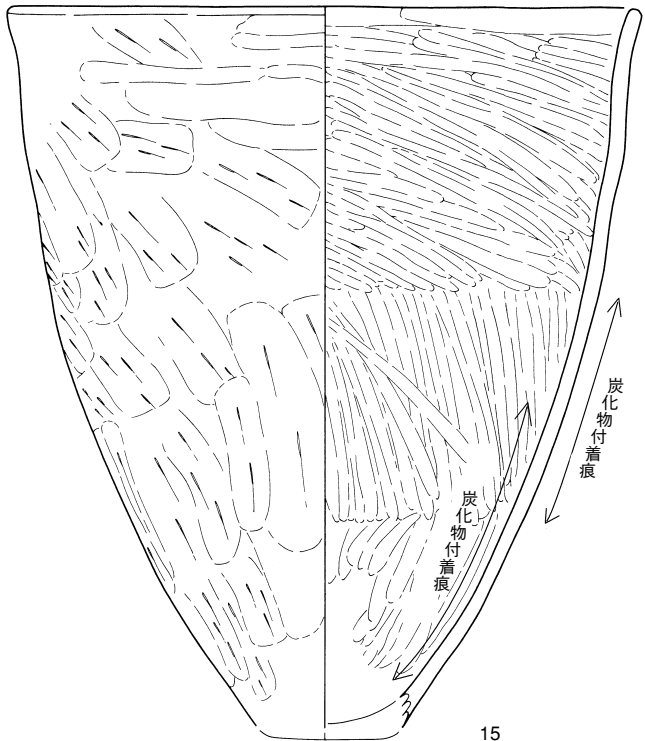
13



14

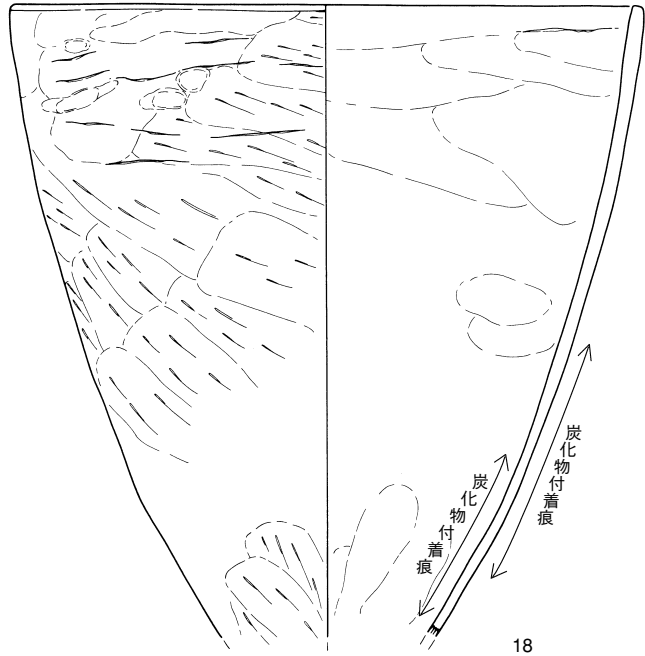
SZ 08





SZ 09

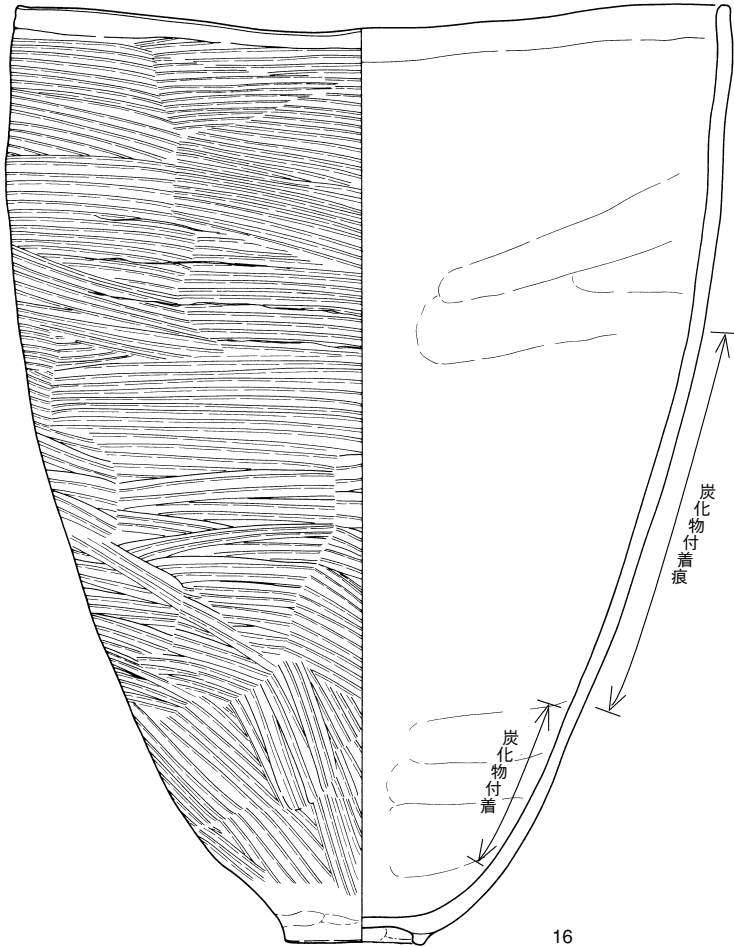
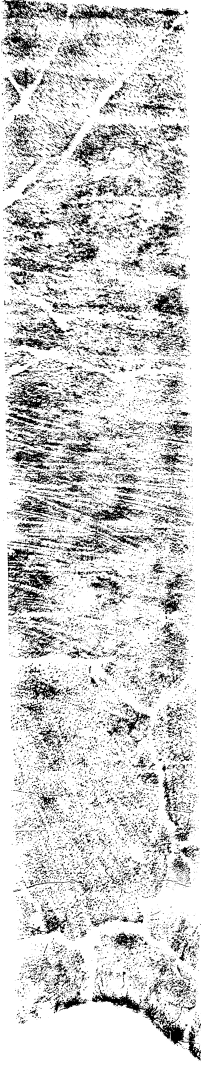
15



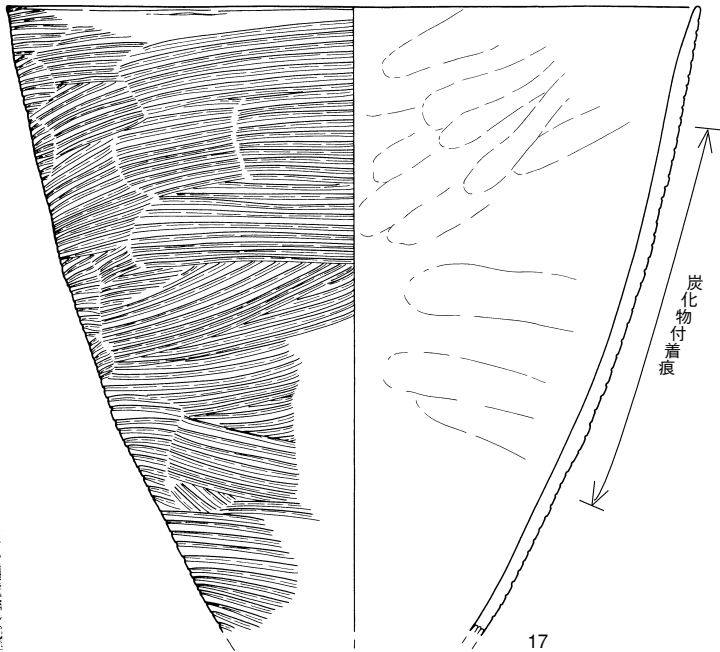
SZ 12

18





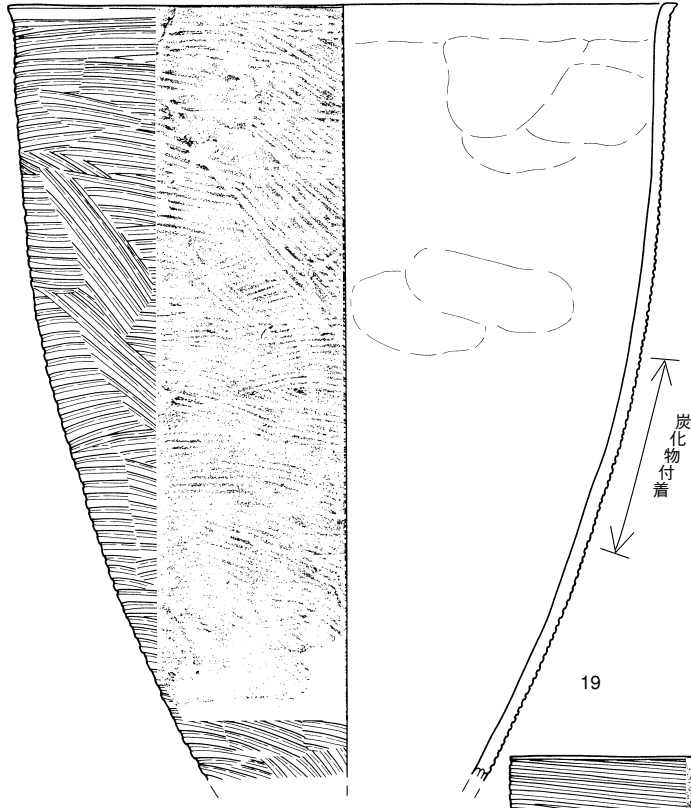
16



17

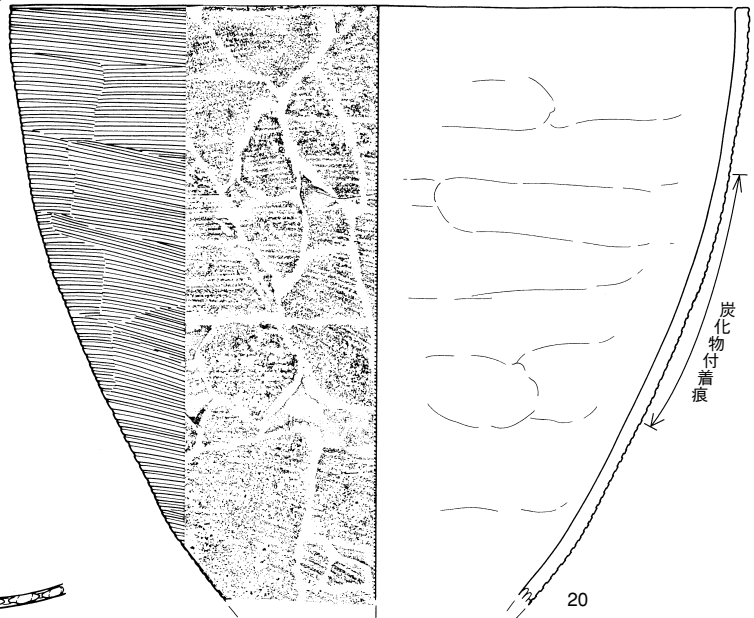
0 10cm

SZ 10

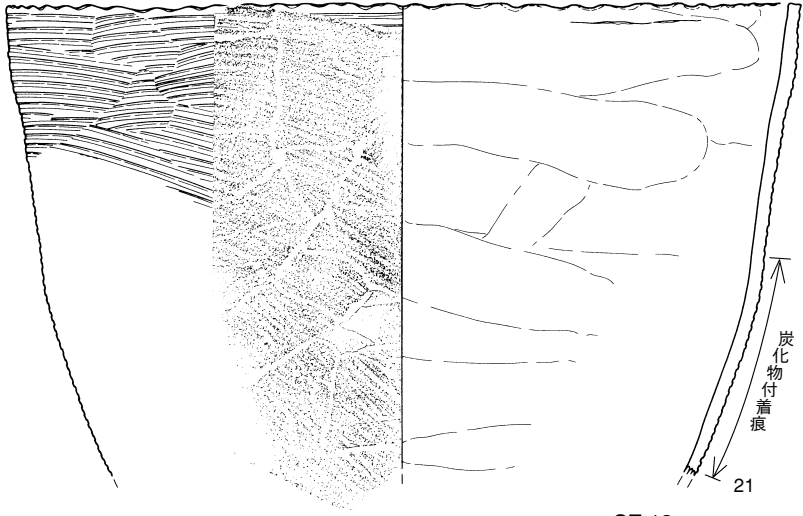


19

SZ 07



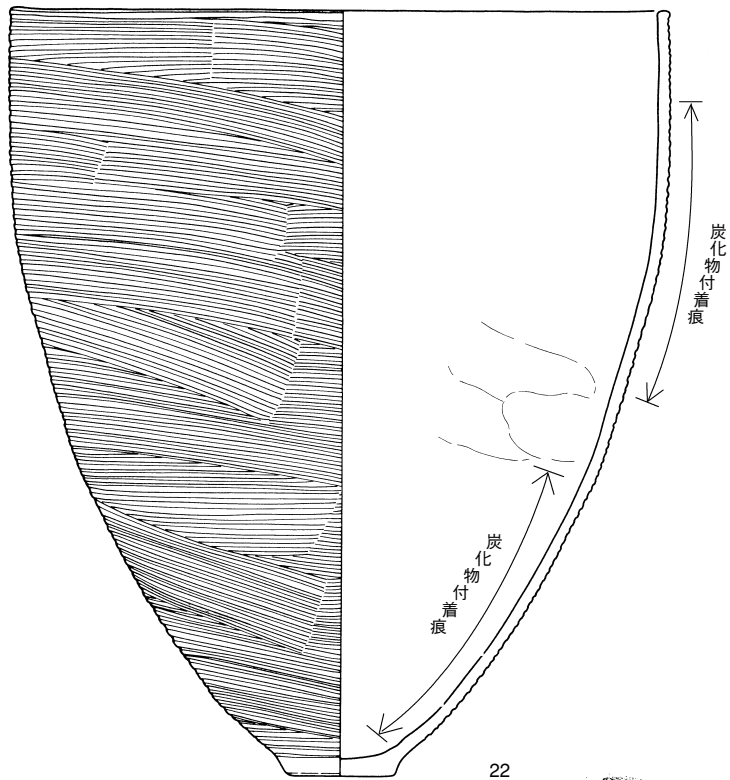
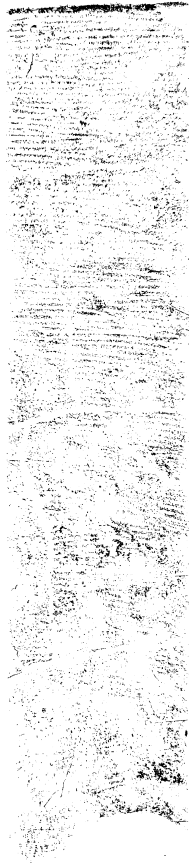
20



21

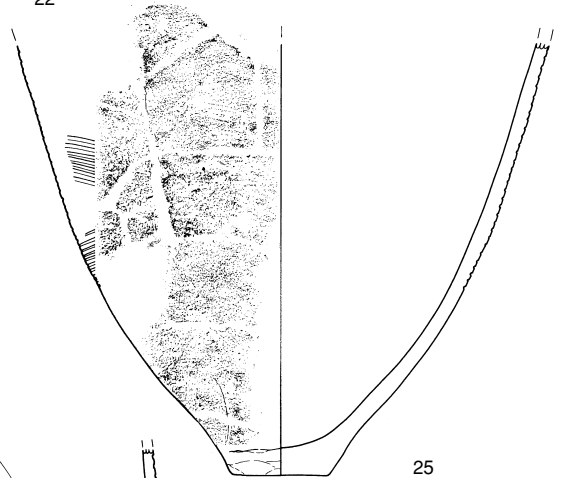
SZ 13

0 10cm



SZ 14

22

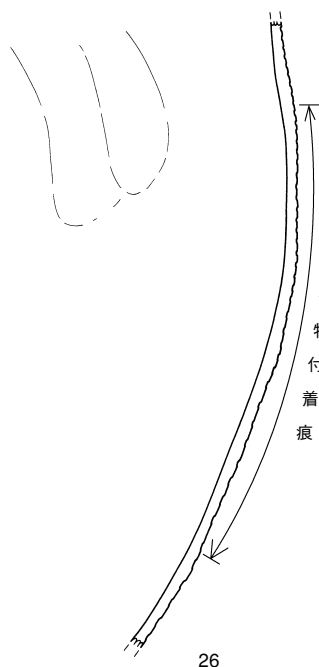


SZ 16

25

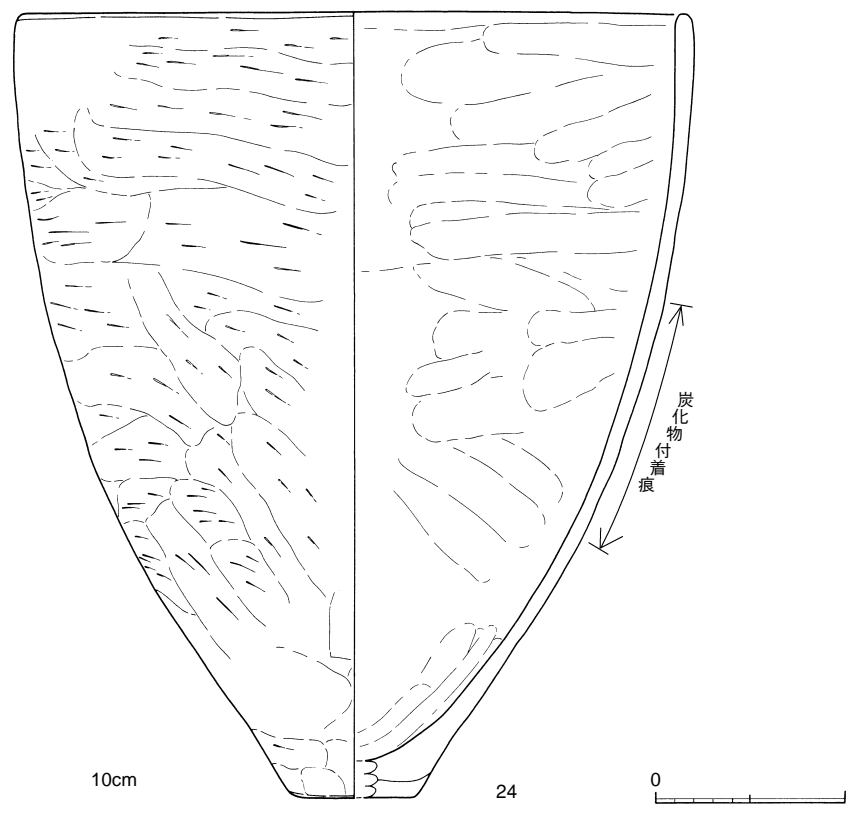
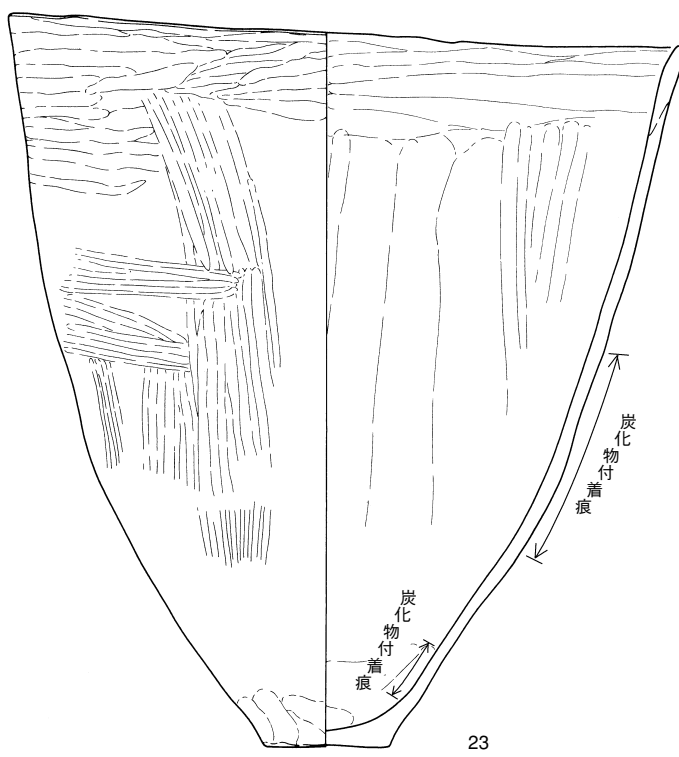


SZ 17

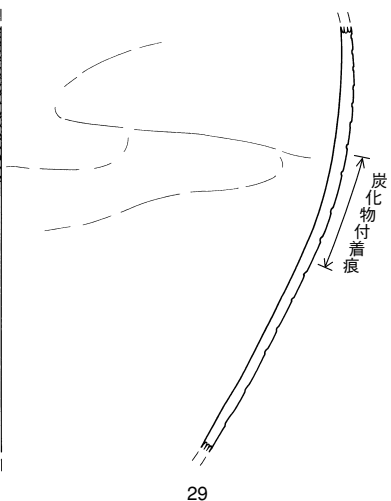
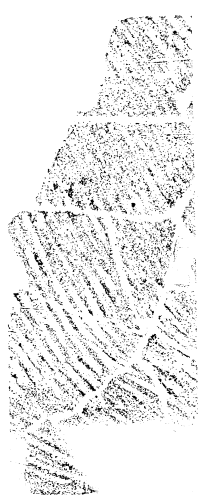
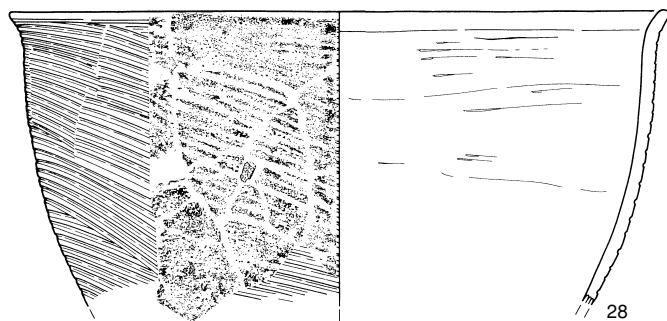
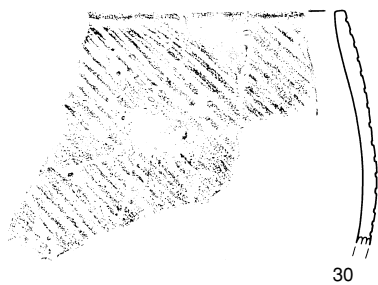
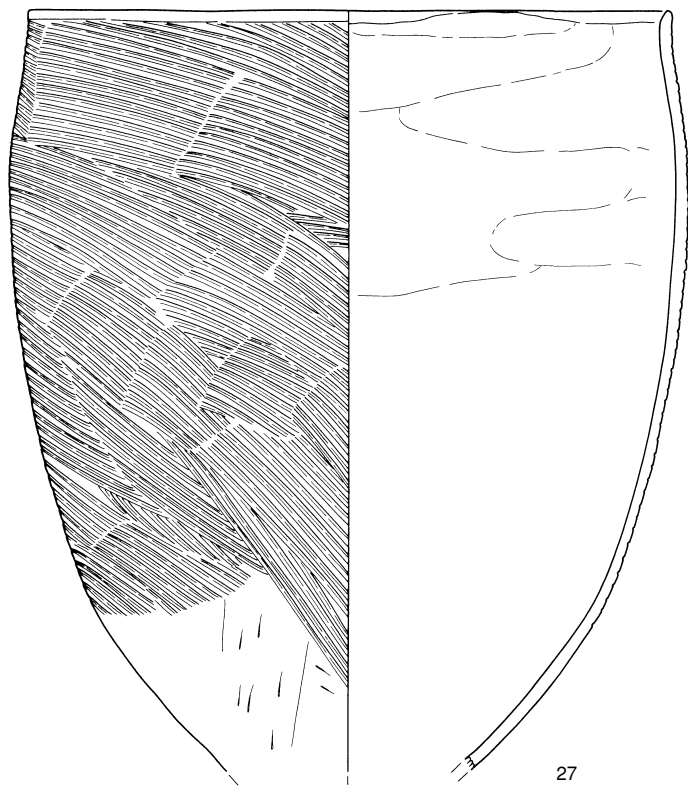
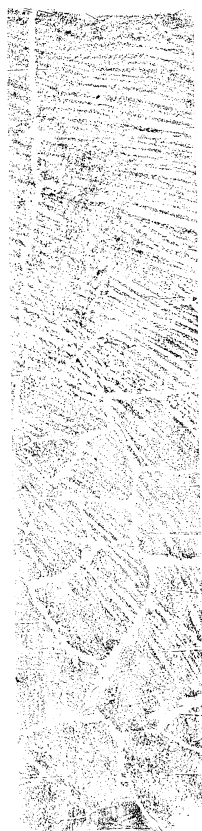


26

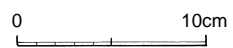
0 10cm

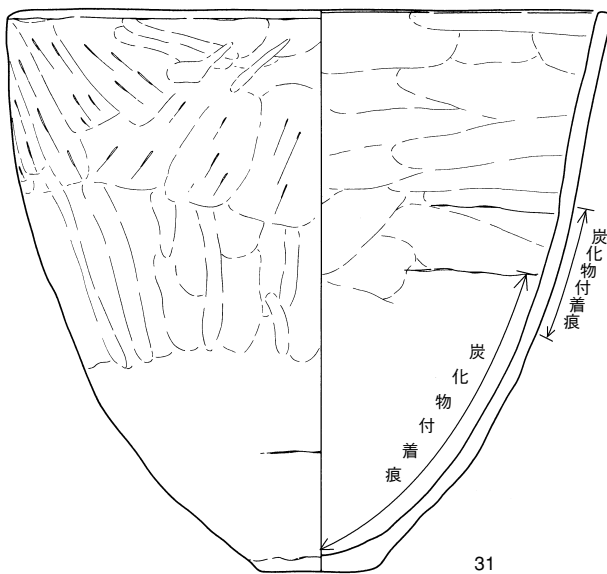


SZ 15

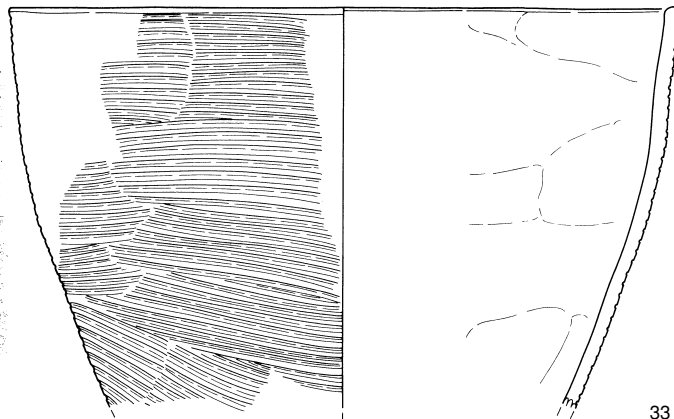
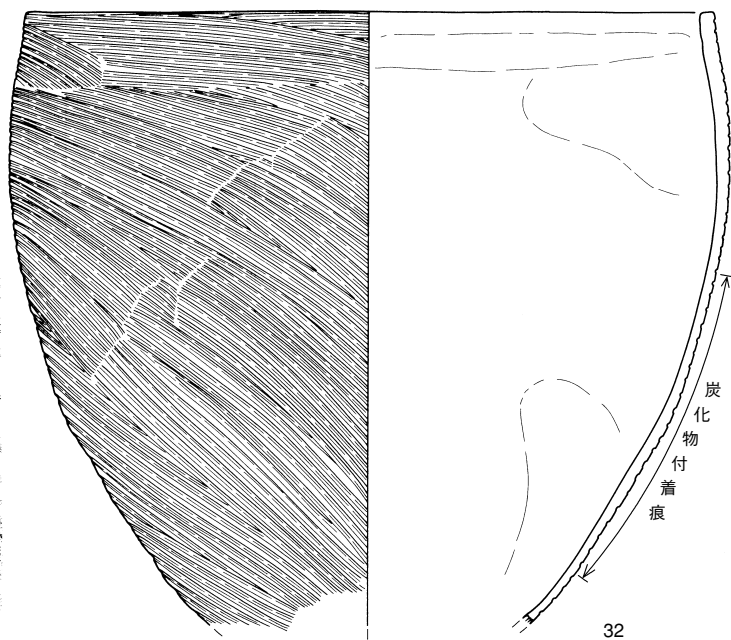


SZ 18

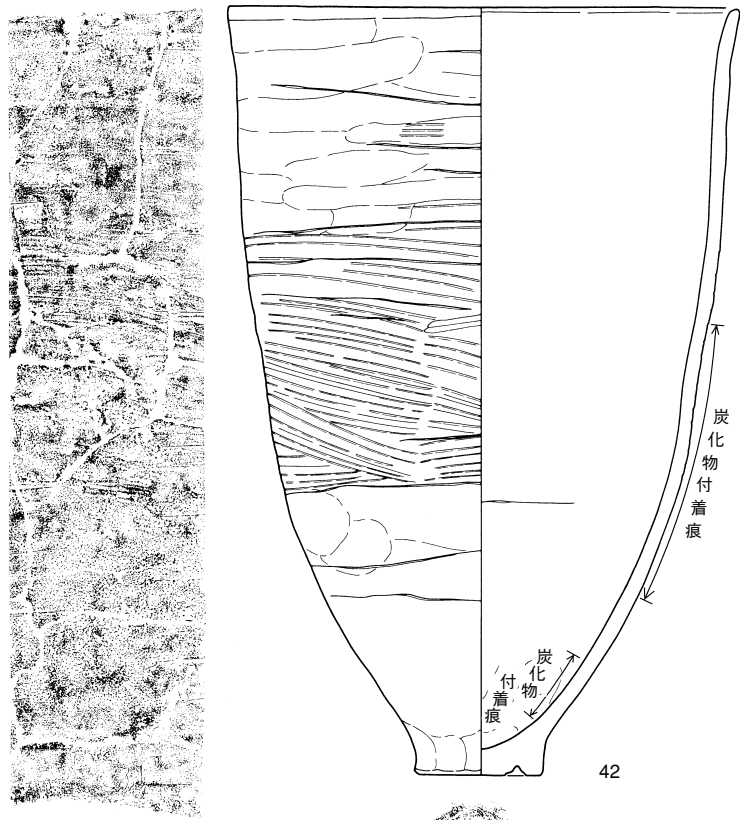
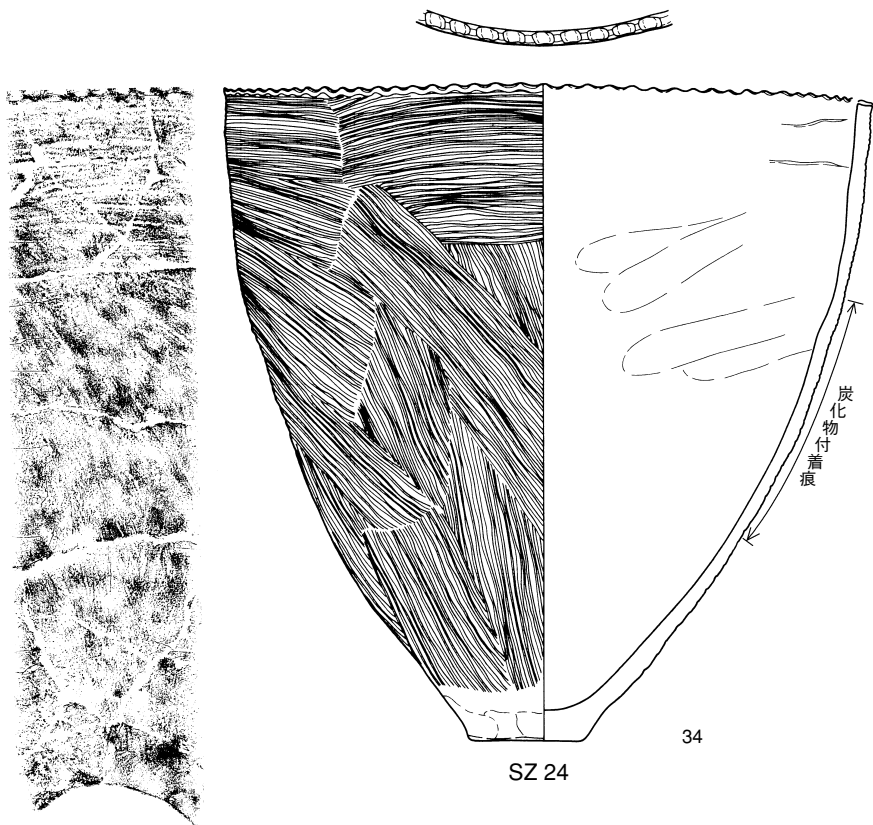




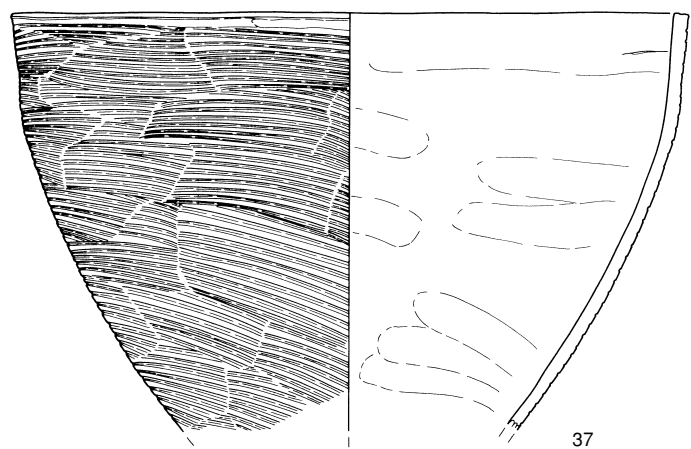
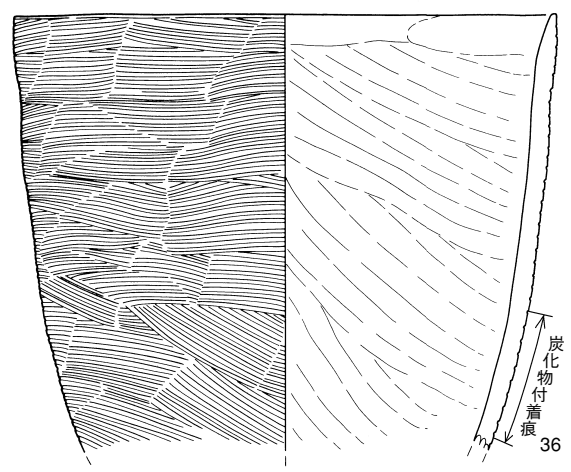
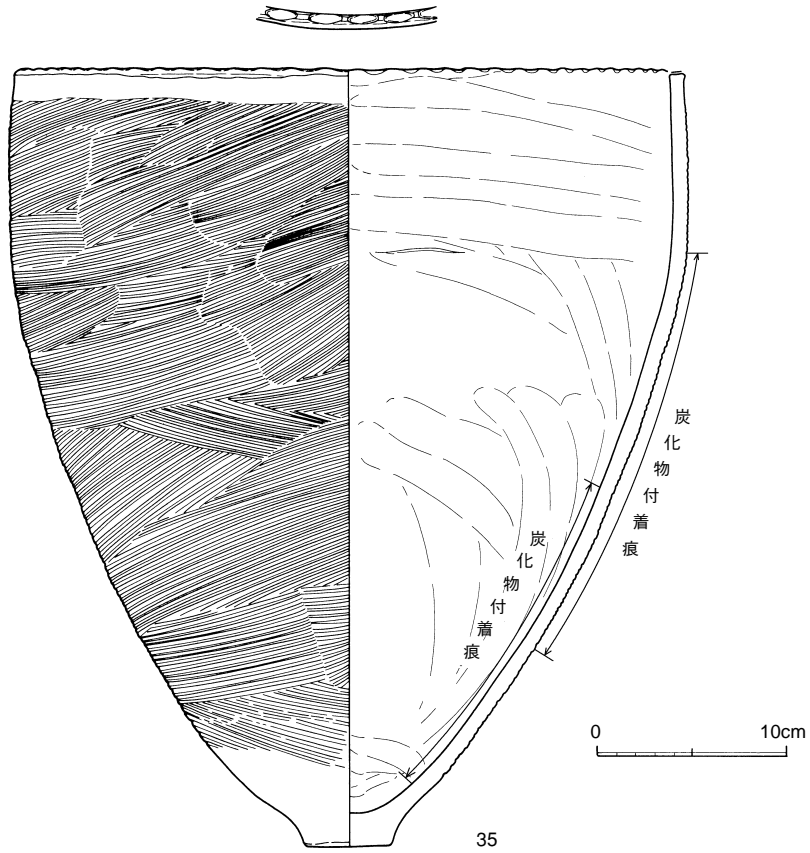
SZ 22

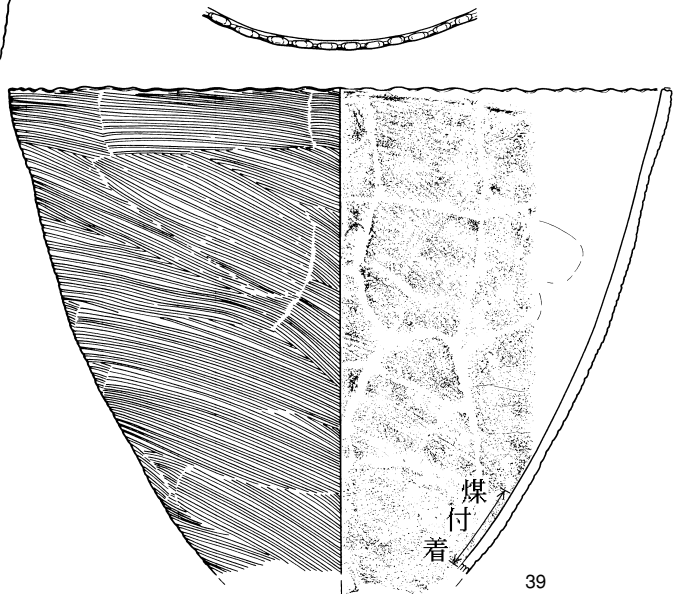
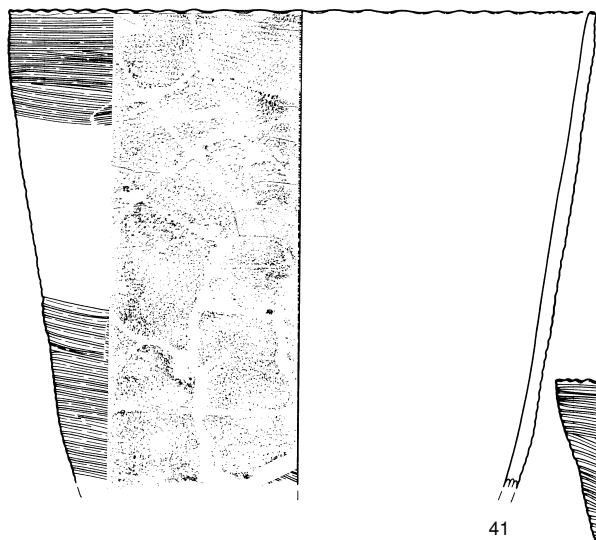
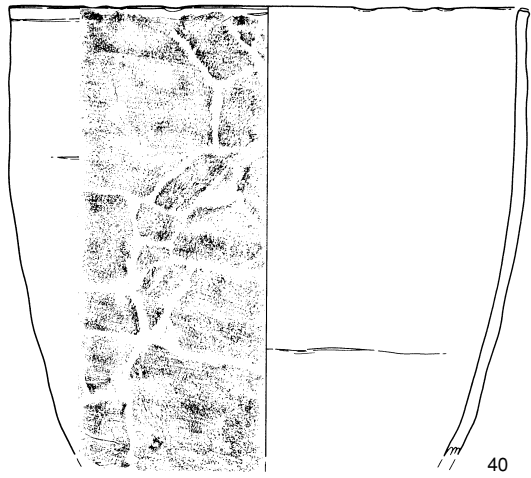


SZ 23



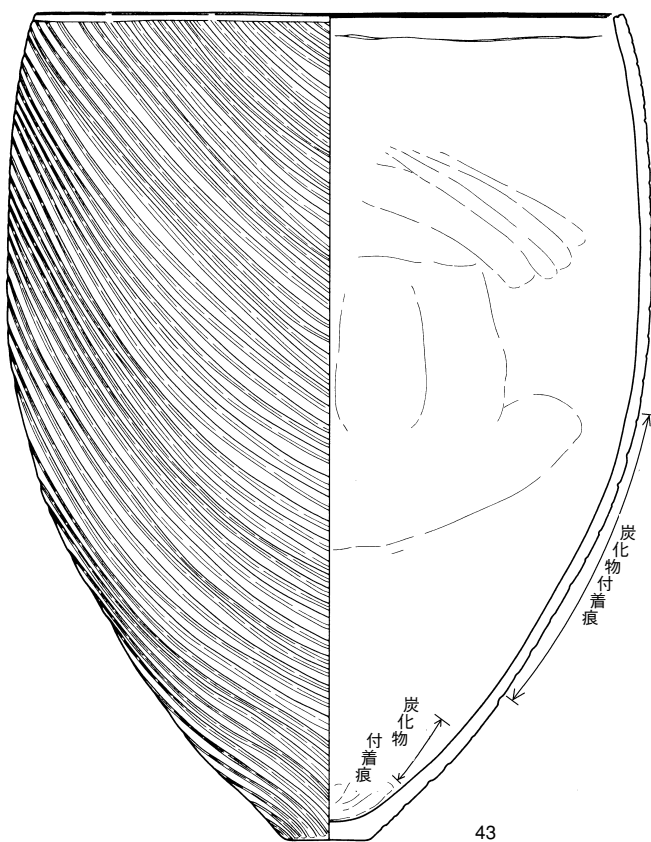
0 10cm



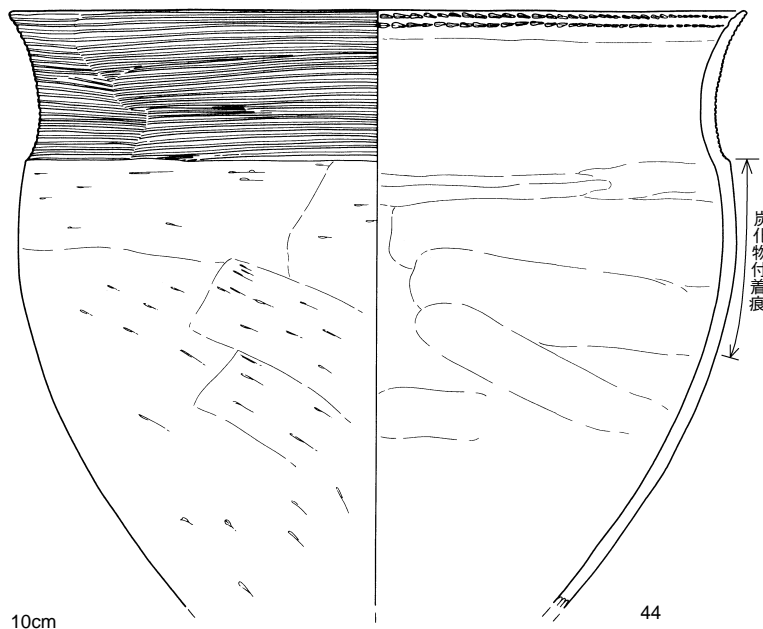


0 10cm

SZ 27



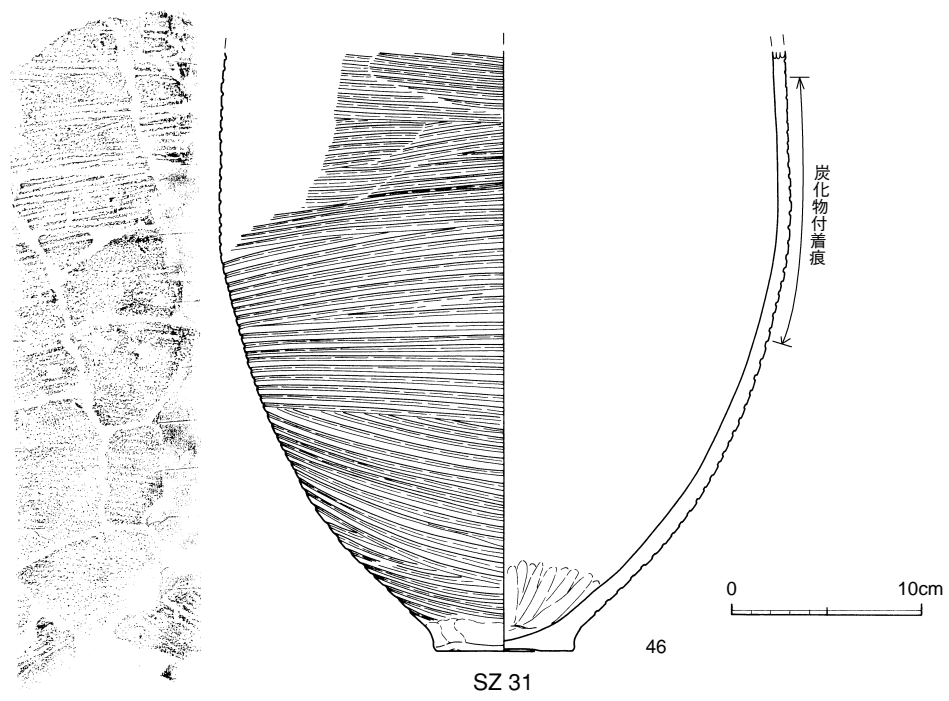
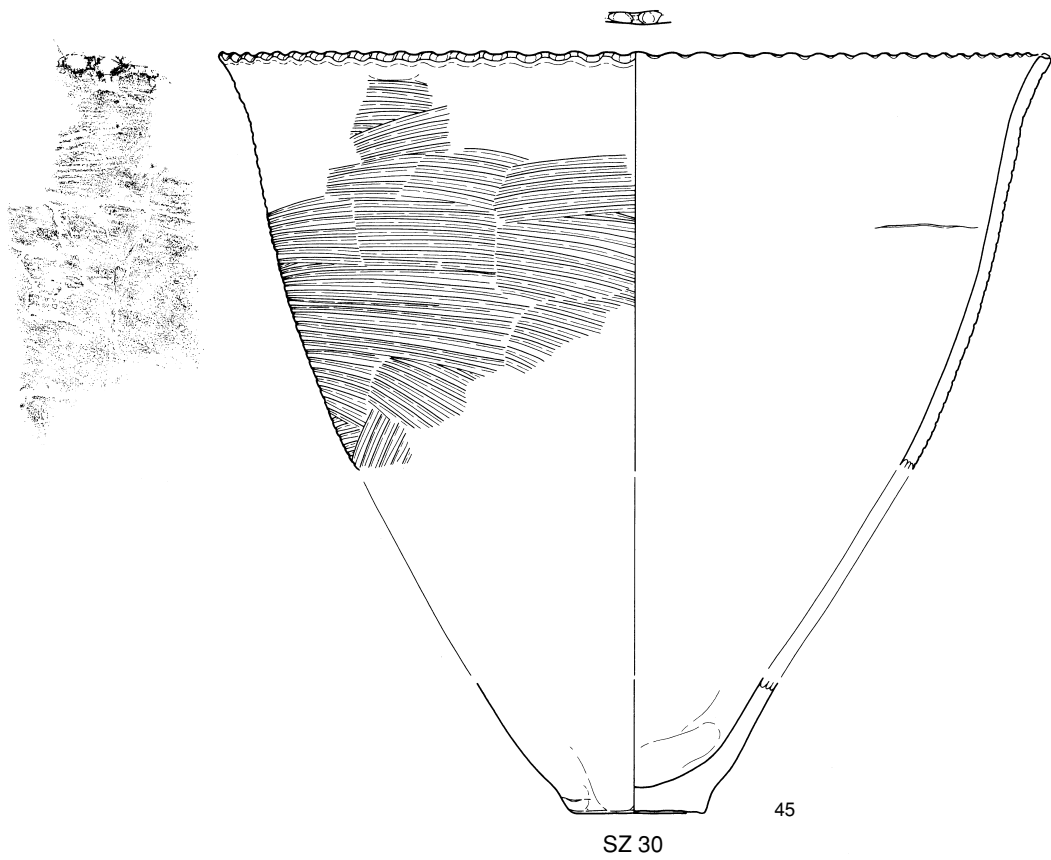
43

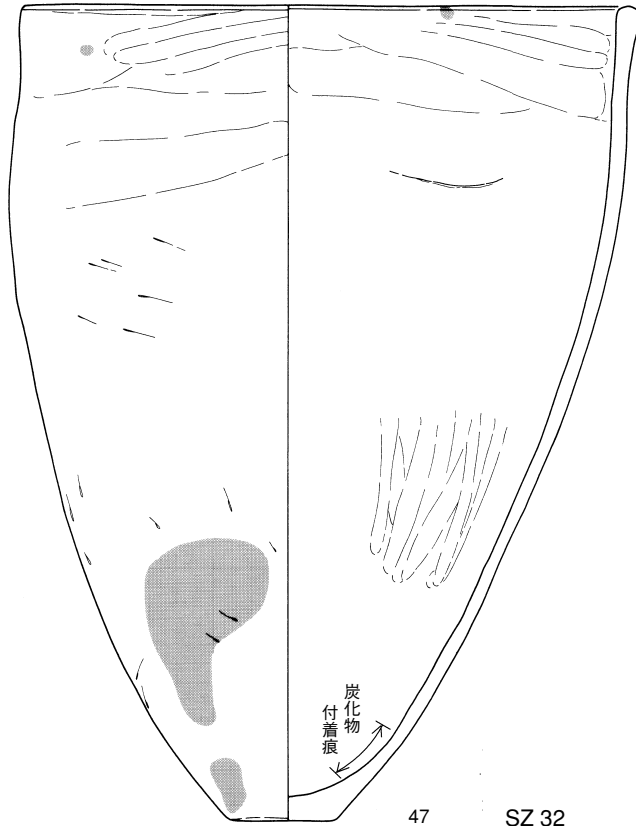


44

0 10cm

SZ 29





47

SZ 32

トーンは赤彩の残存部分

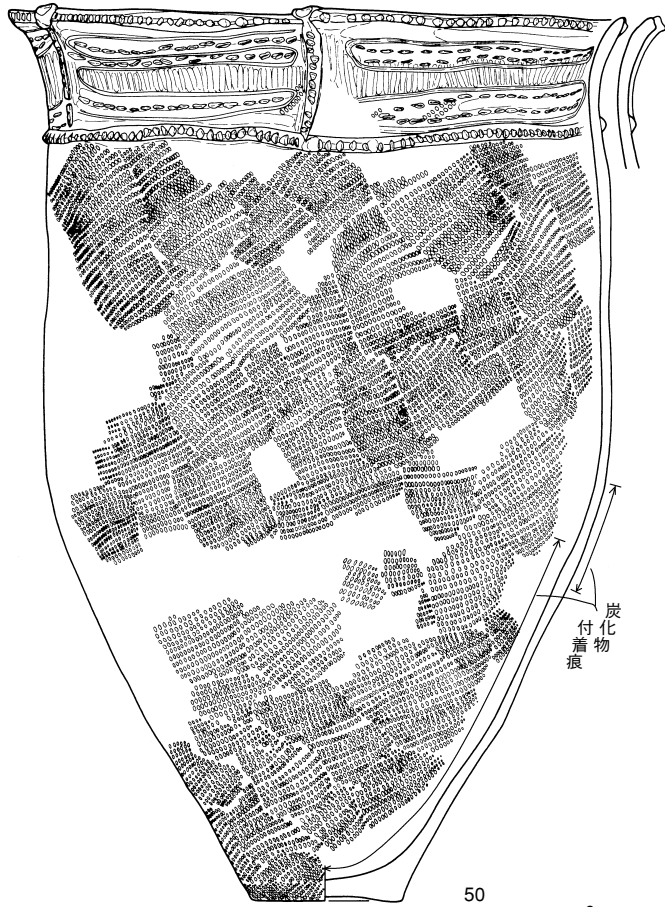


48

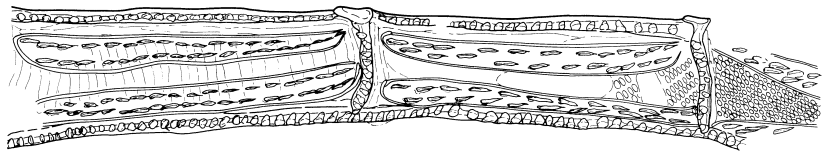
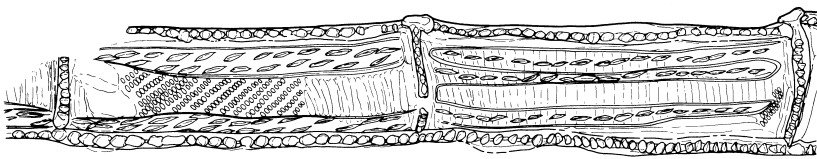
0 10cm

SZ 33

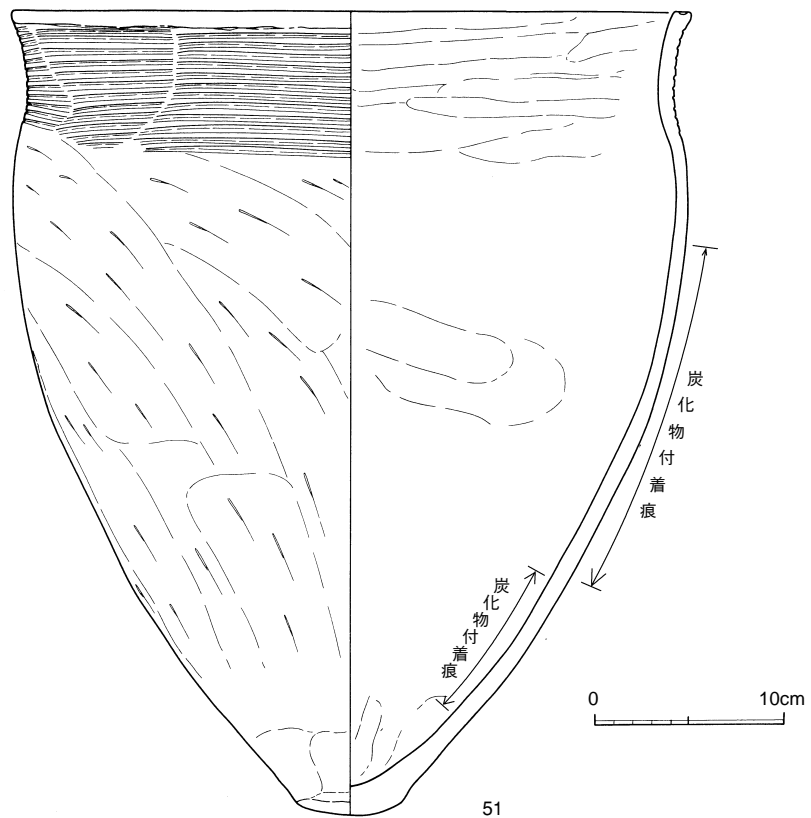
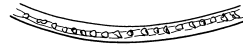




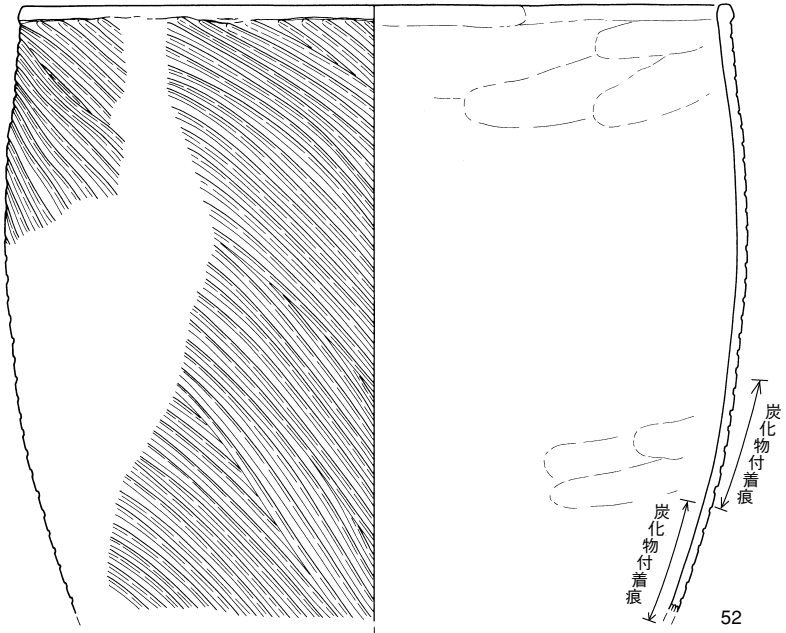
0 10cm



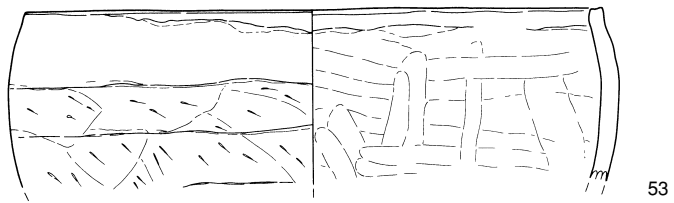
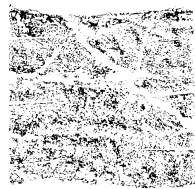
SZ 34



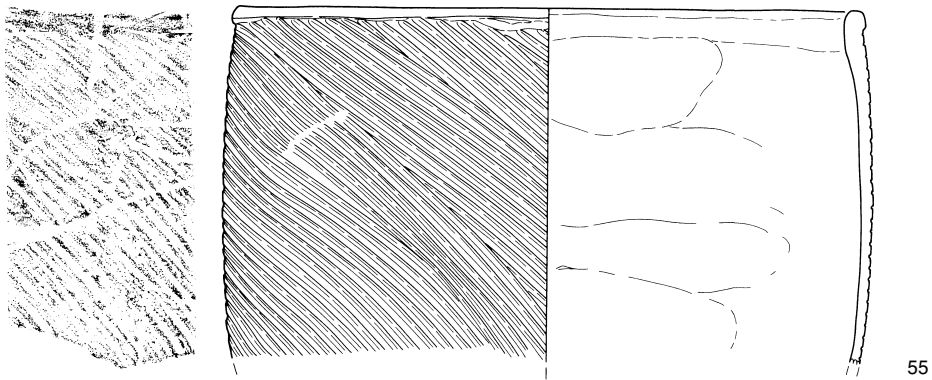
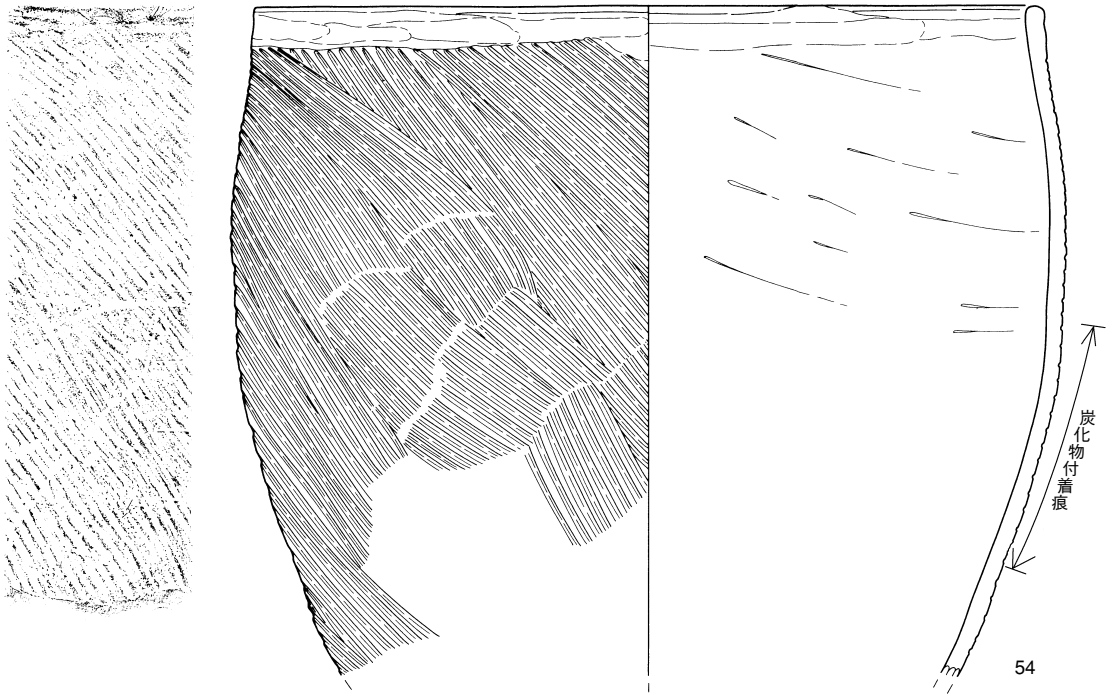
51



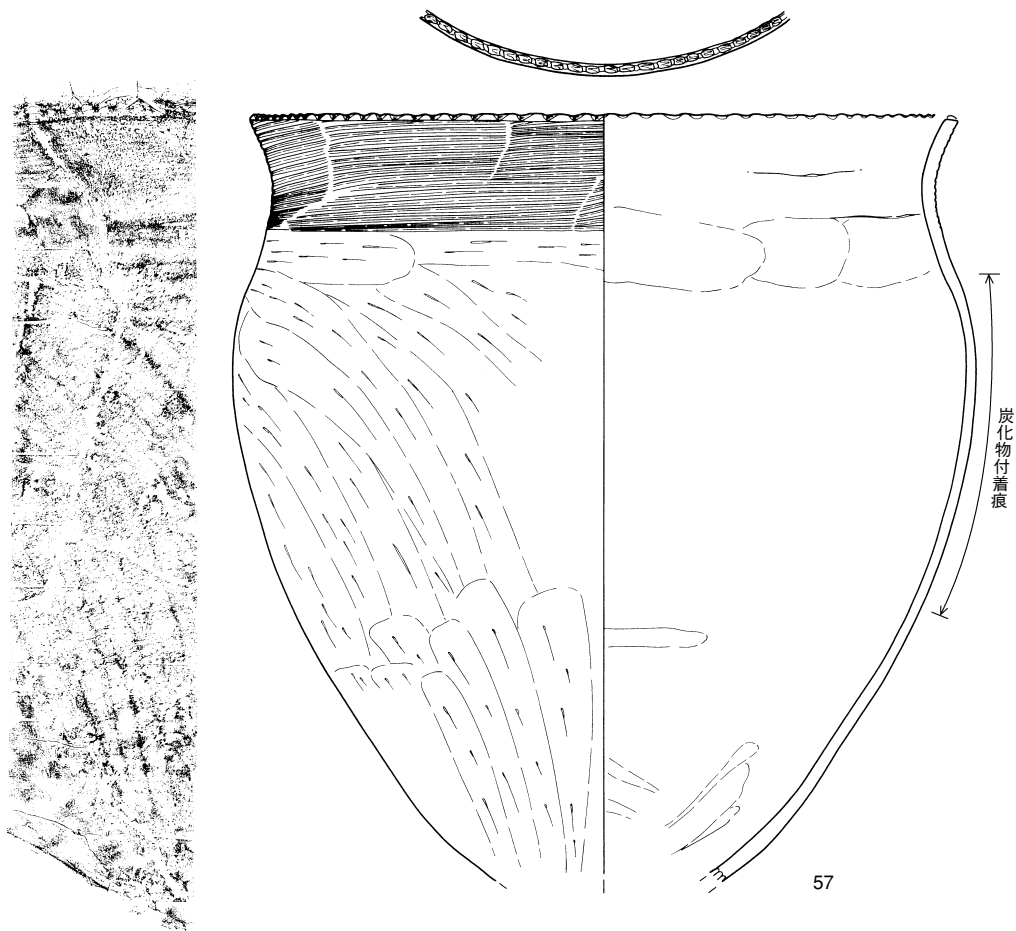
52



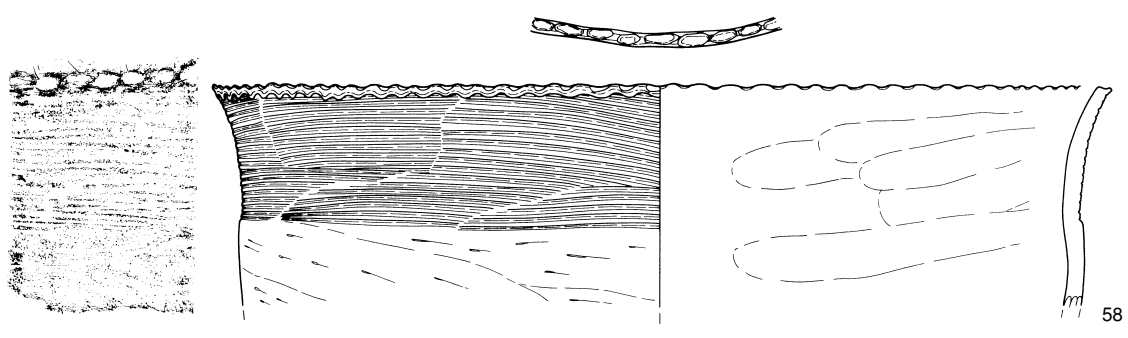
53



SZ 36

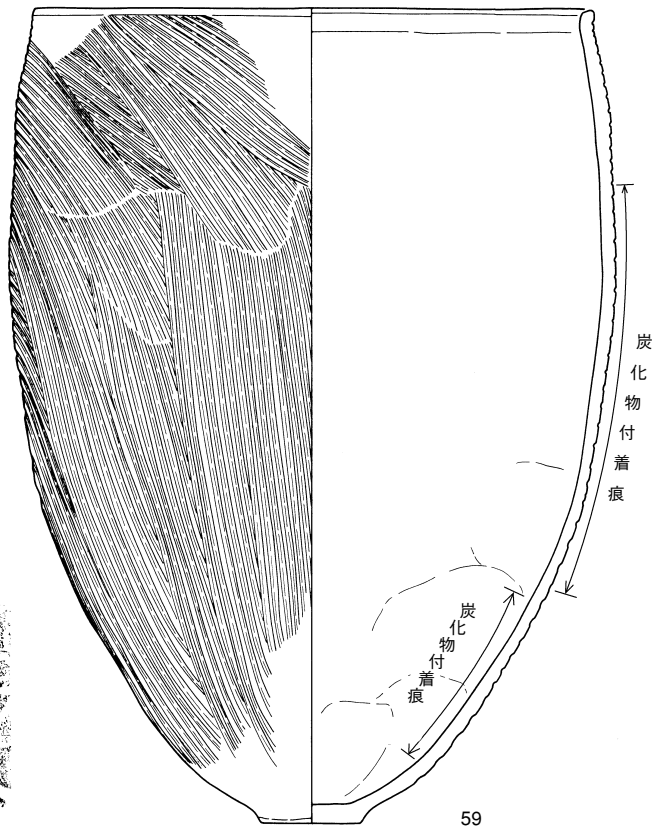


57

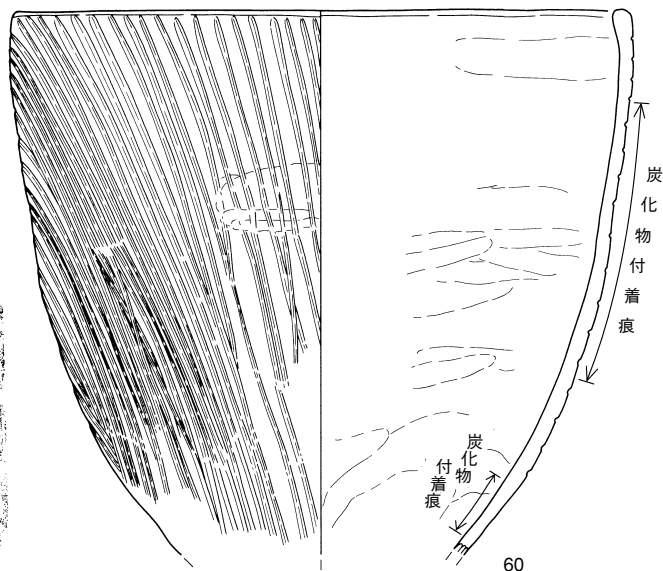


58

SZ 37

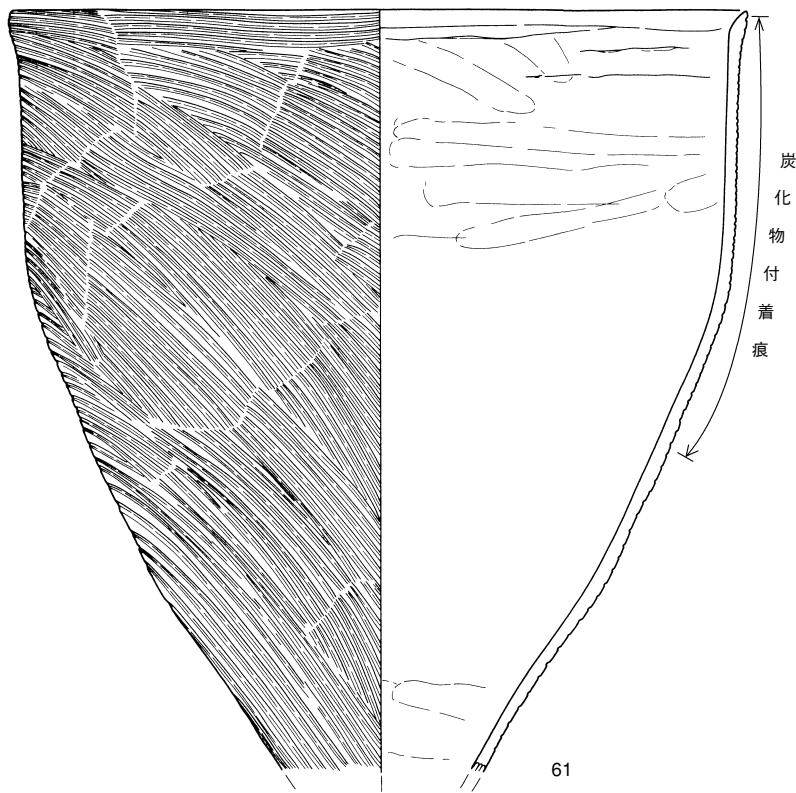


SZ 38

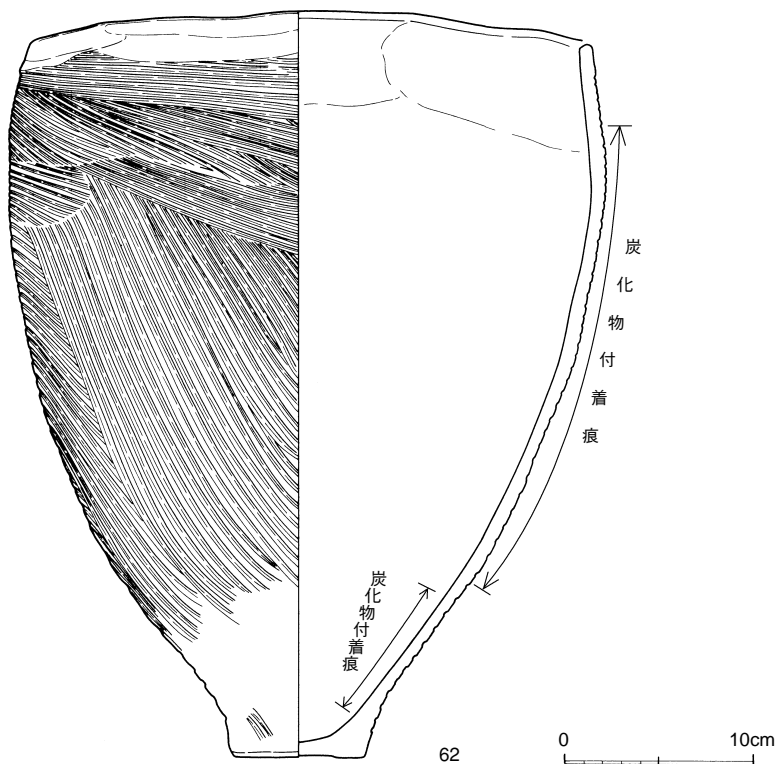


SZ 39

0 10cm

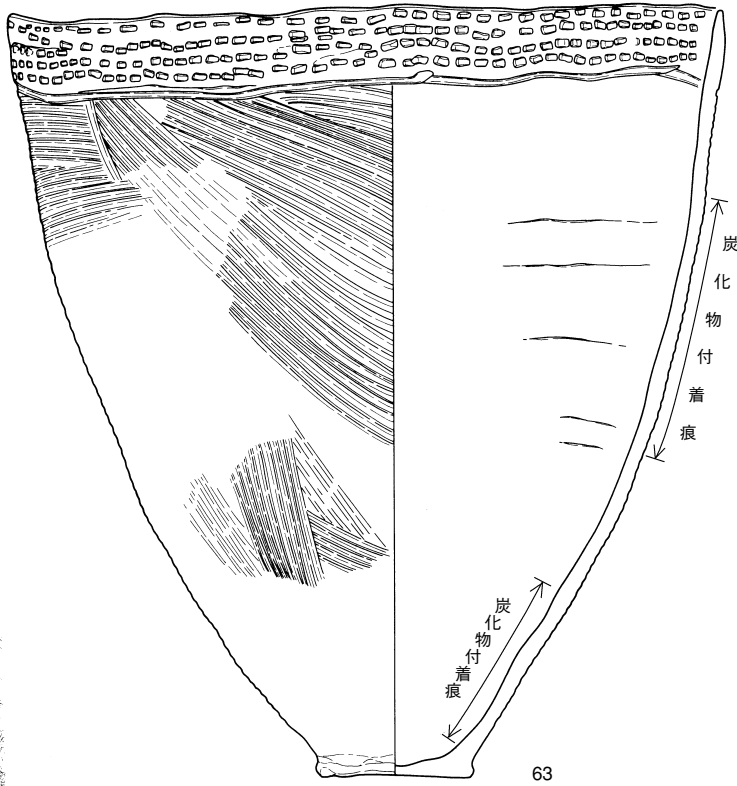


61



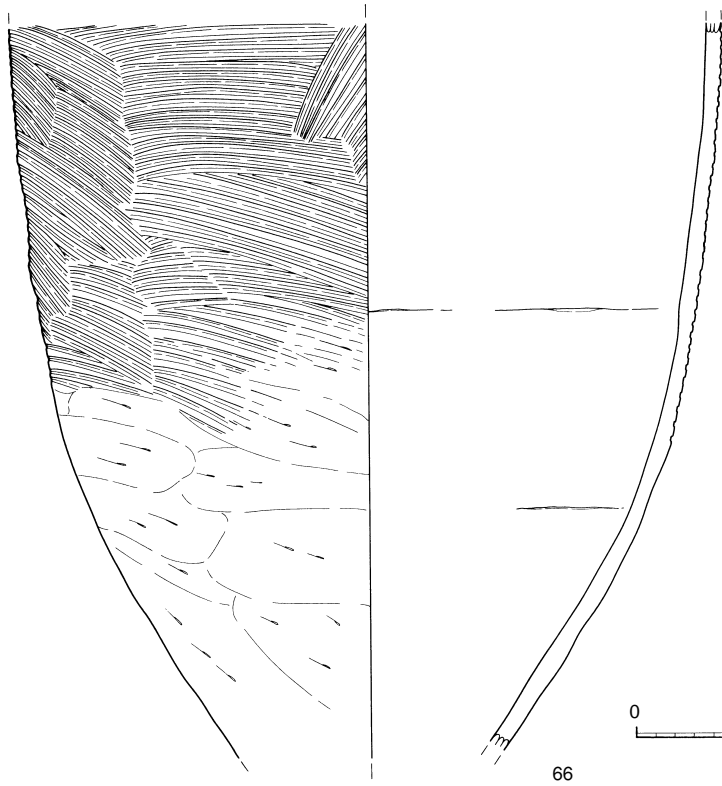
62

SZ 40



SZ 41

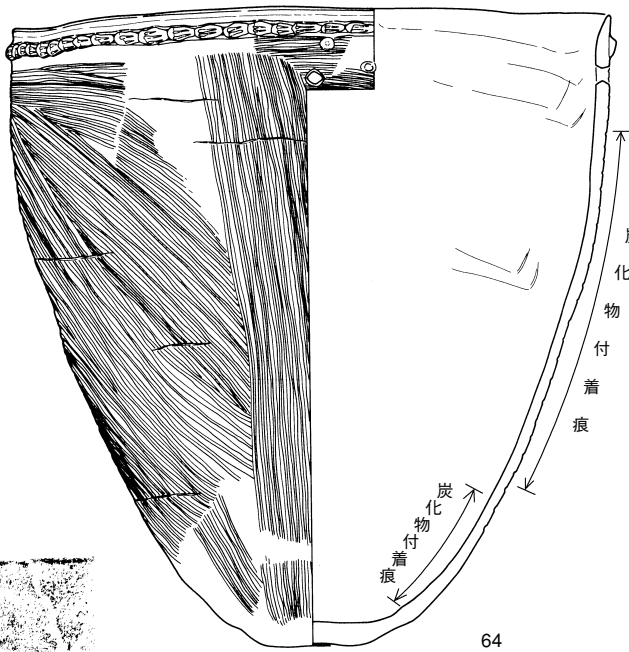
63



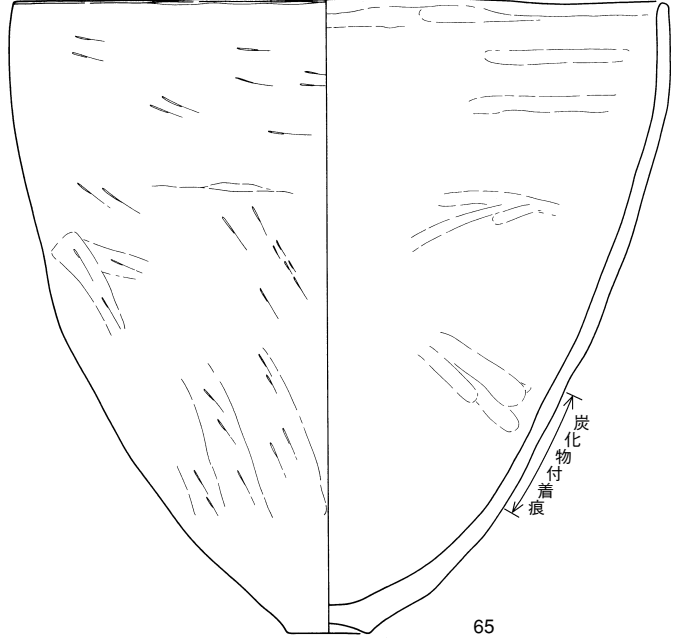
SZ 43

66

0 10cm

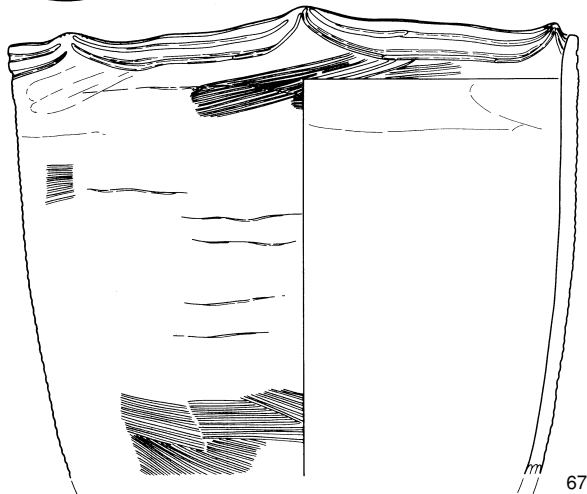


64



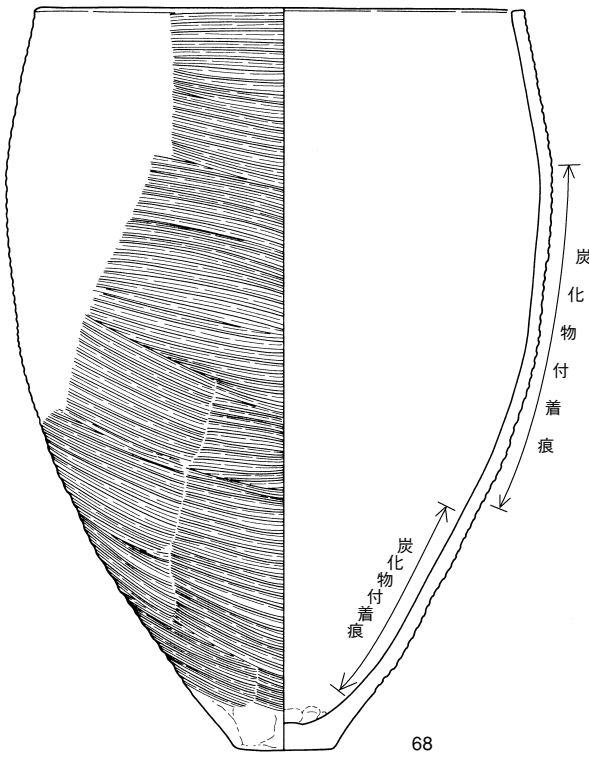
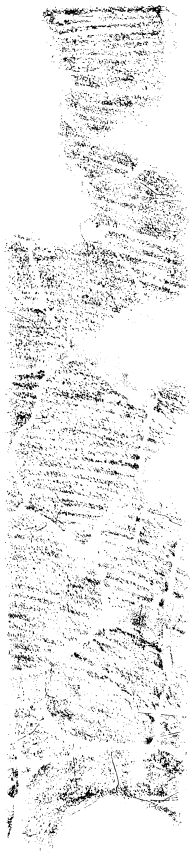
65

SZ 42

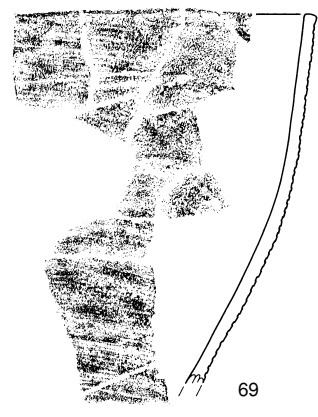


67

SZ 44

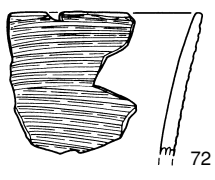


0 10cm

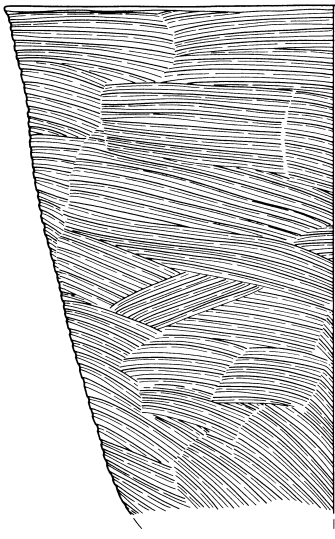


68

SZ 46



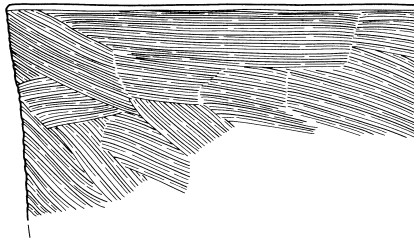
72



炭化物付着痕

70

炭化物付着痕



71

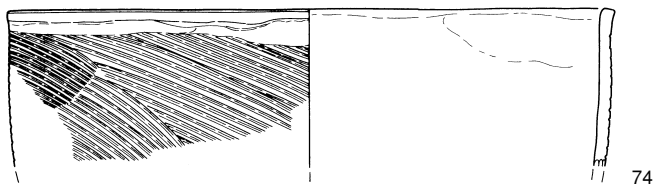
SZ 47



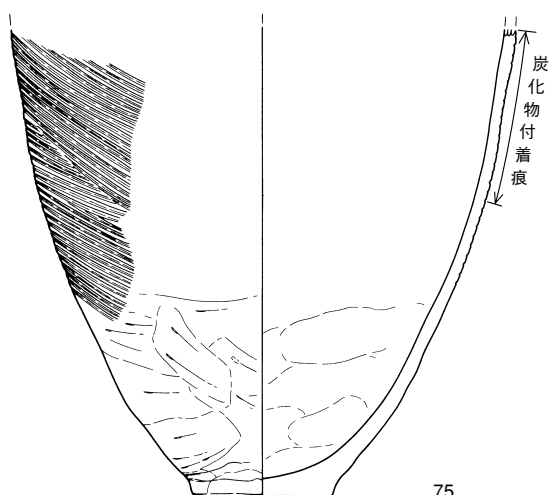
0 10cm



73

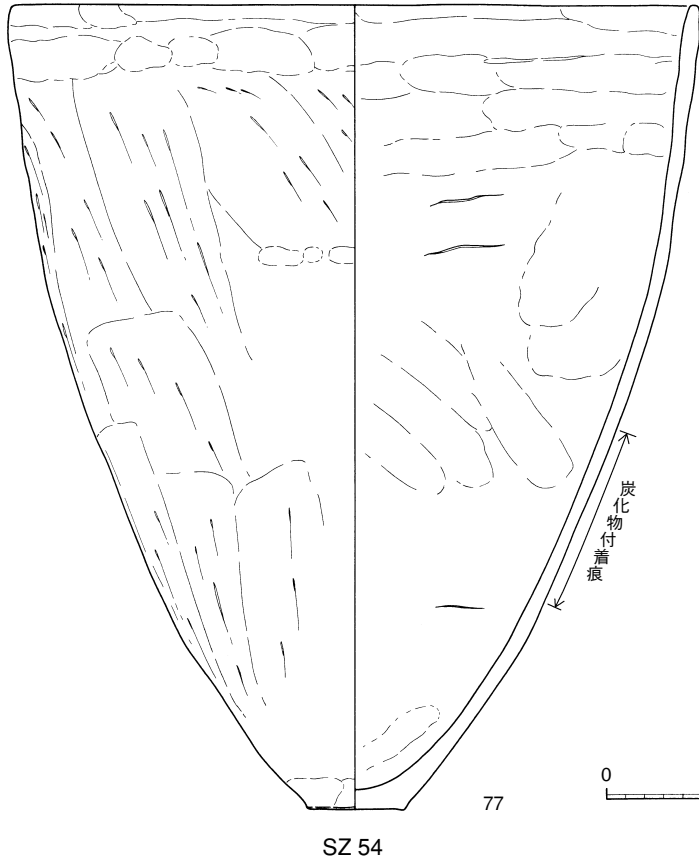
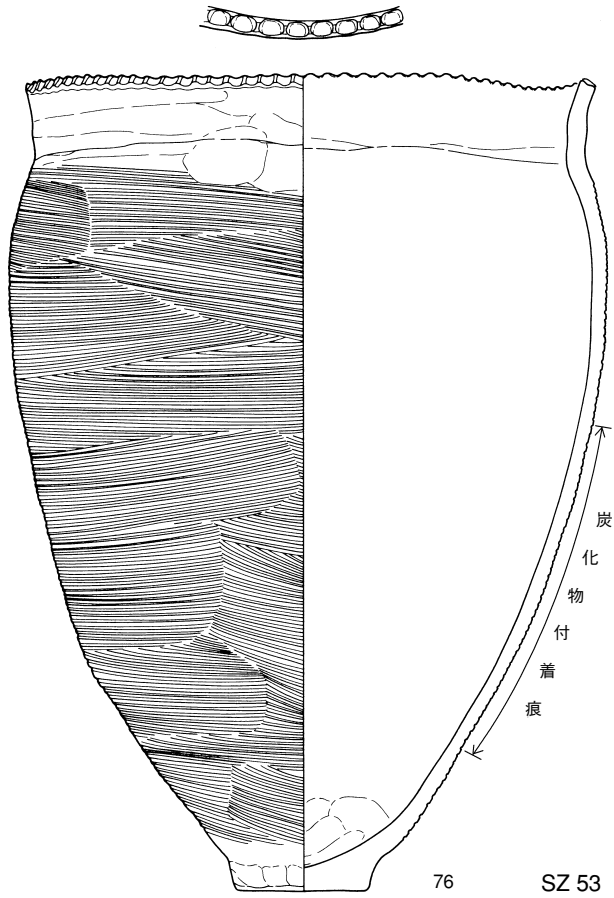


SZ 49

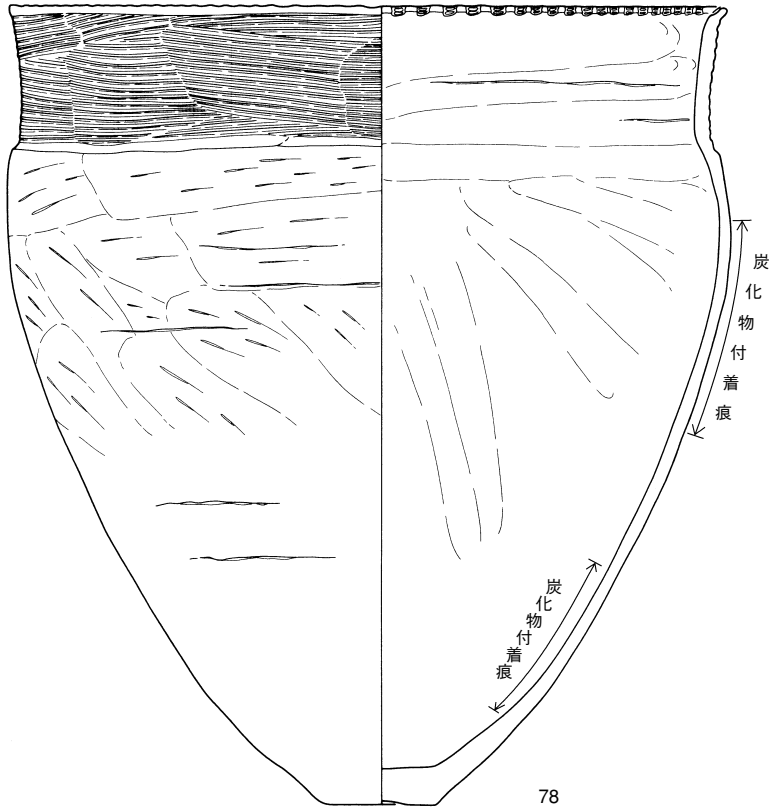


75

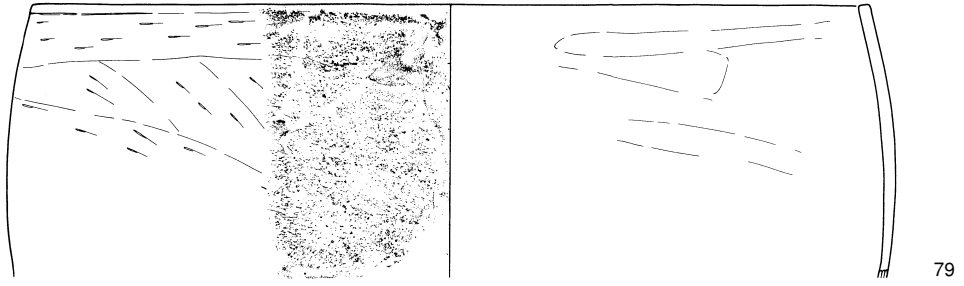
SZ 50



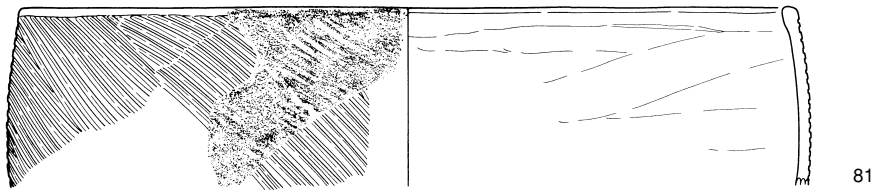
0 10cm



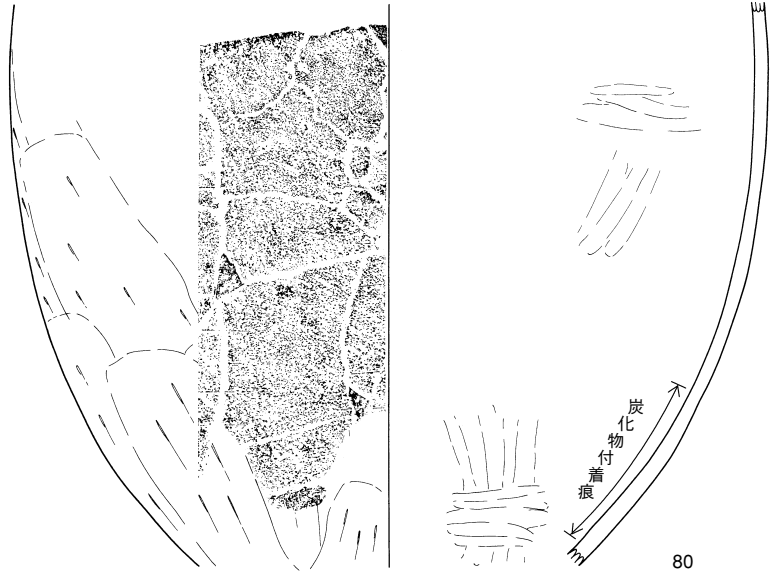
78



79

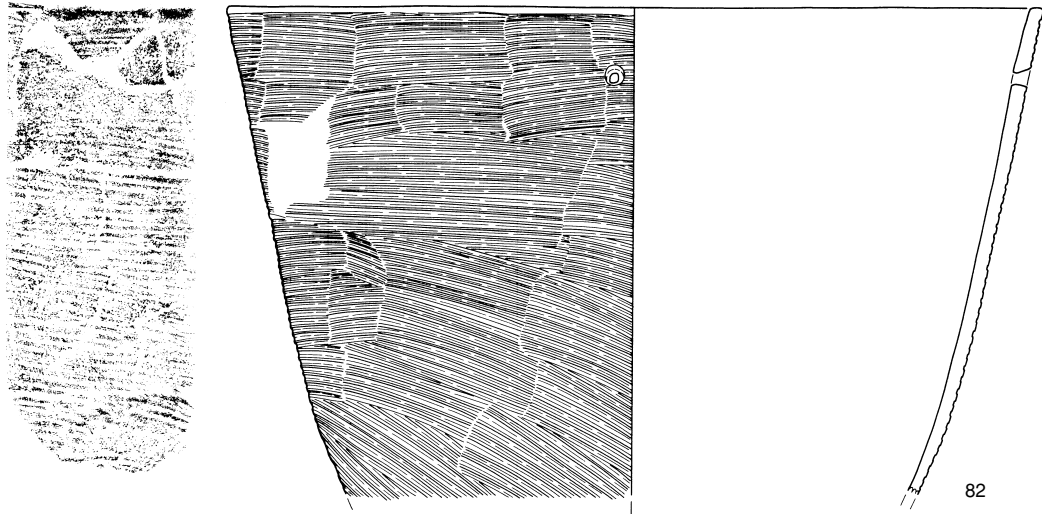


81

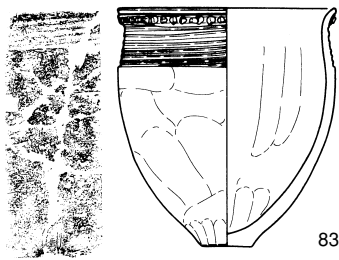


80

0 10cm

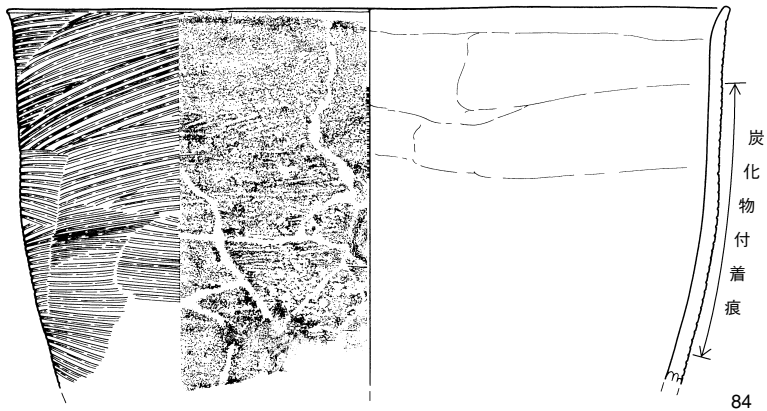
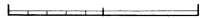


82



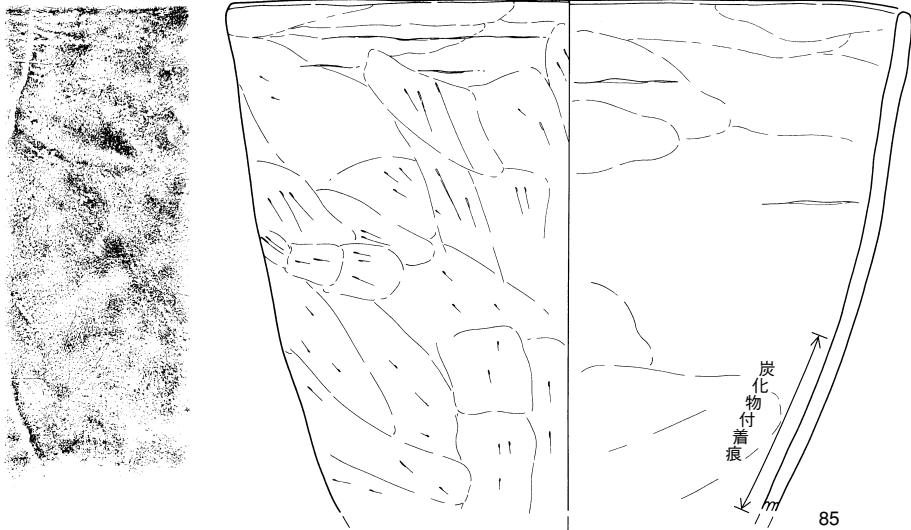
83

SZ 56



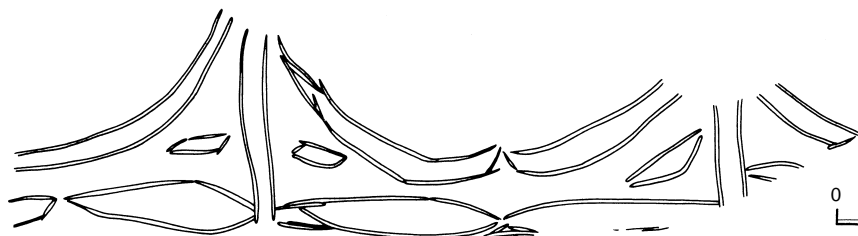
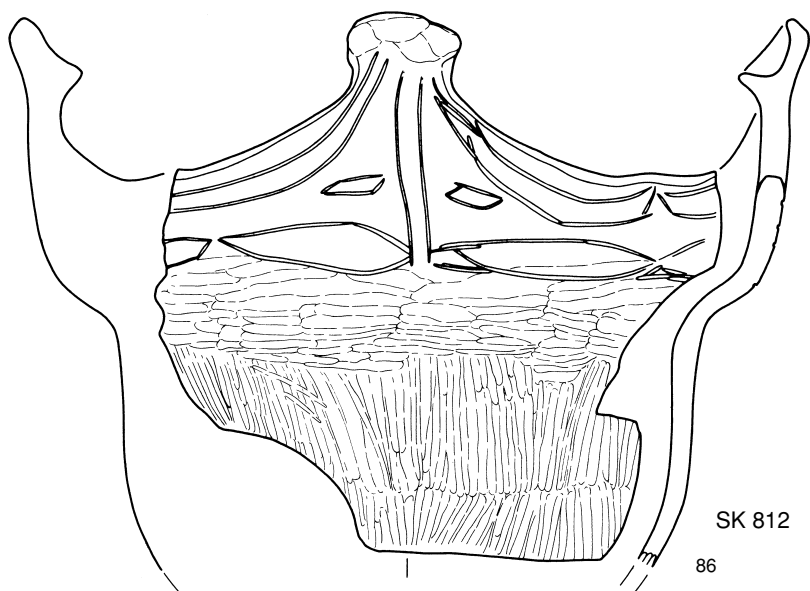
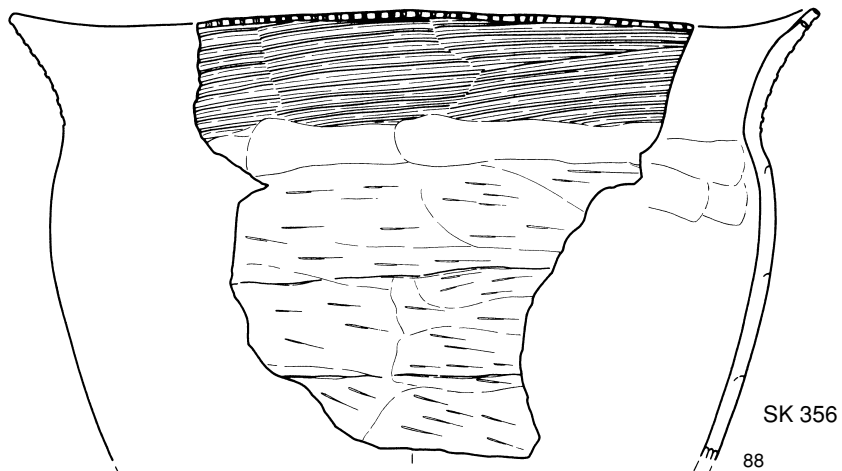
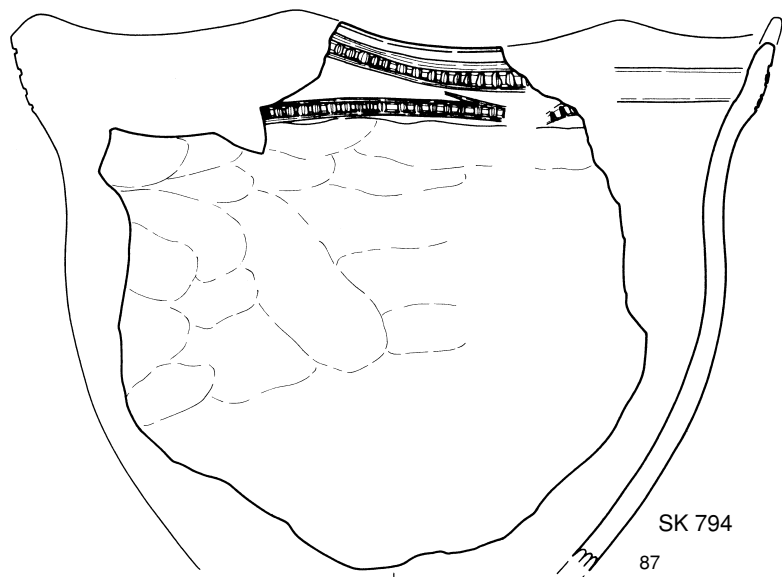
84

SK 592

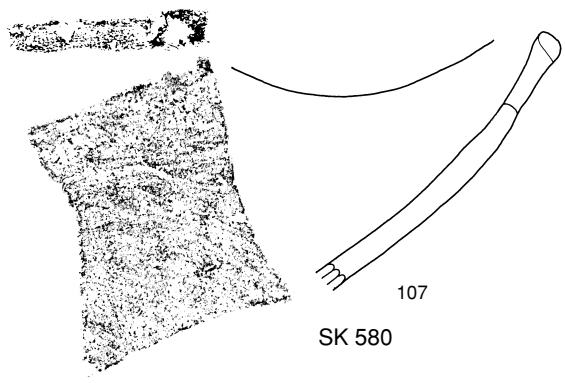
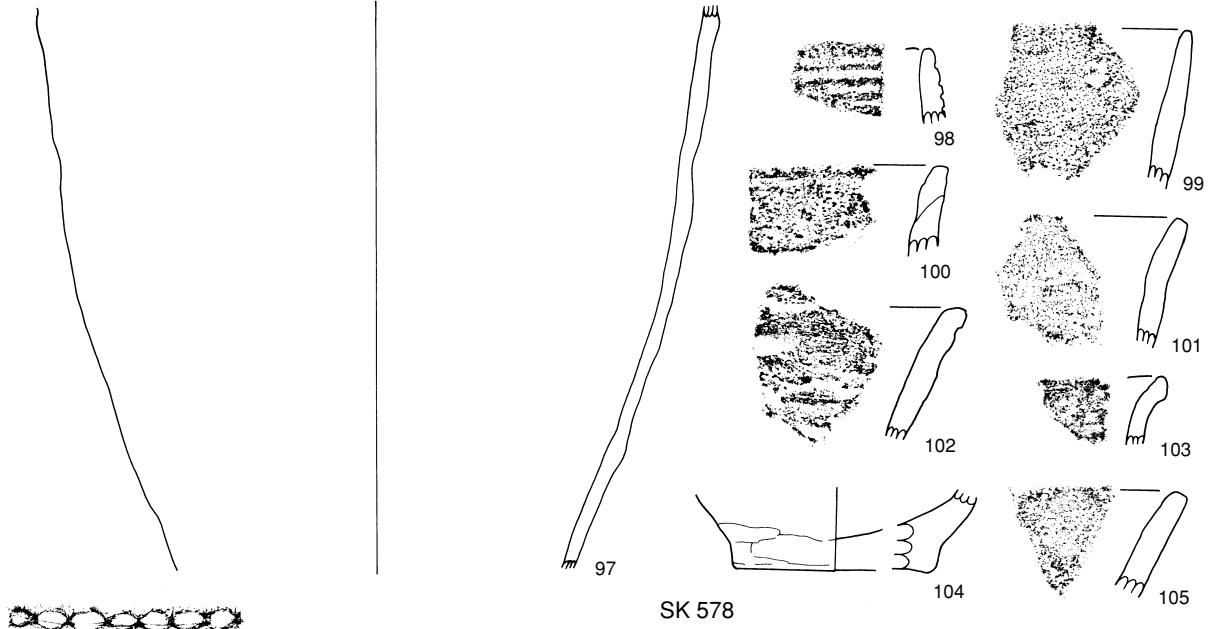
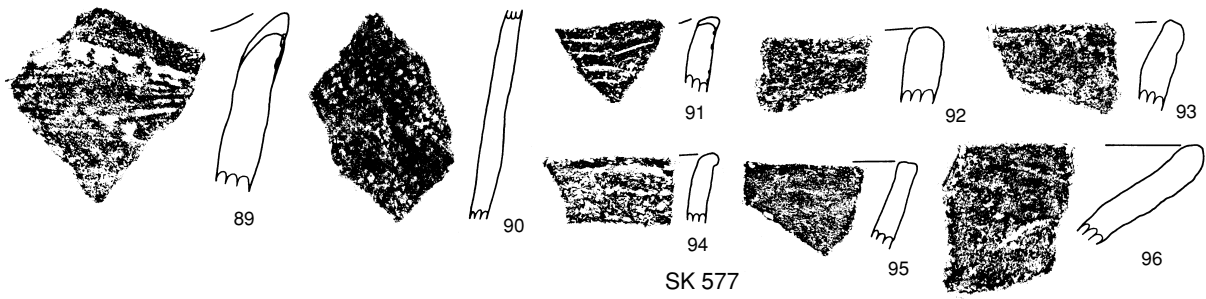


85

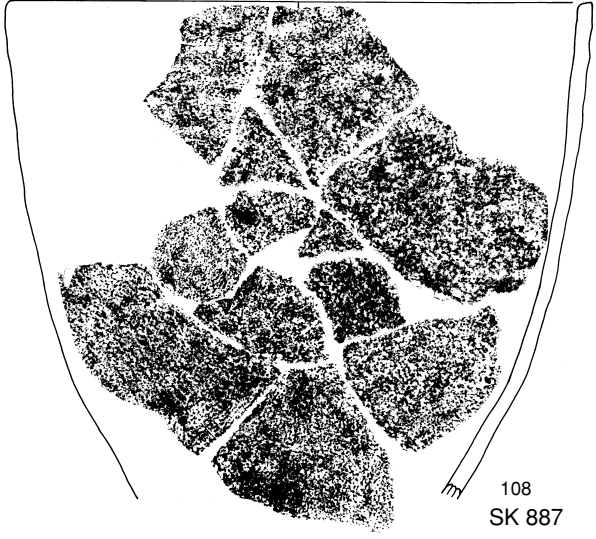
SK 804 • 805

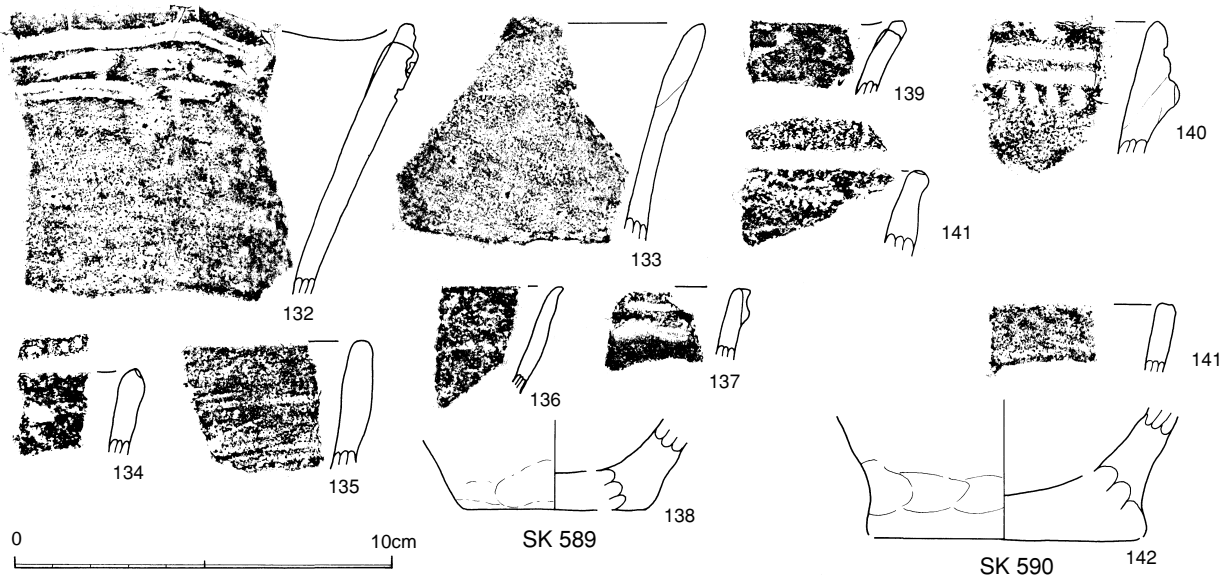
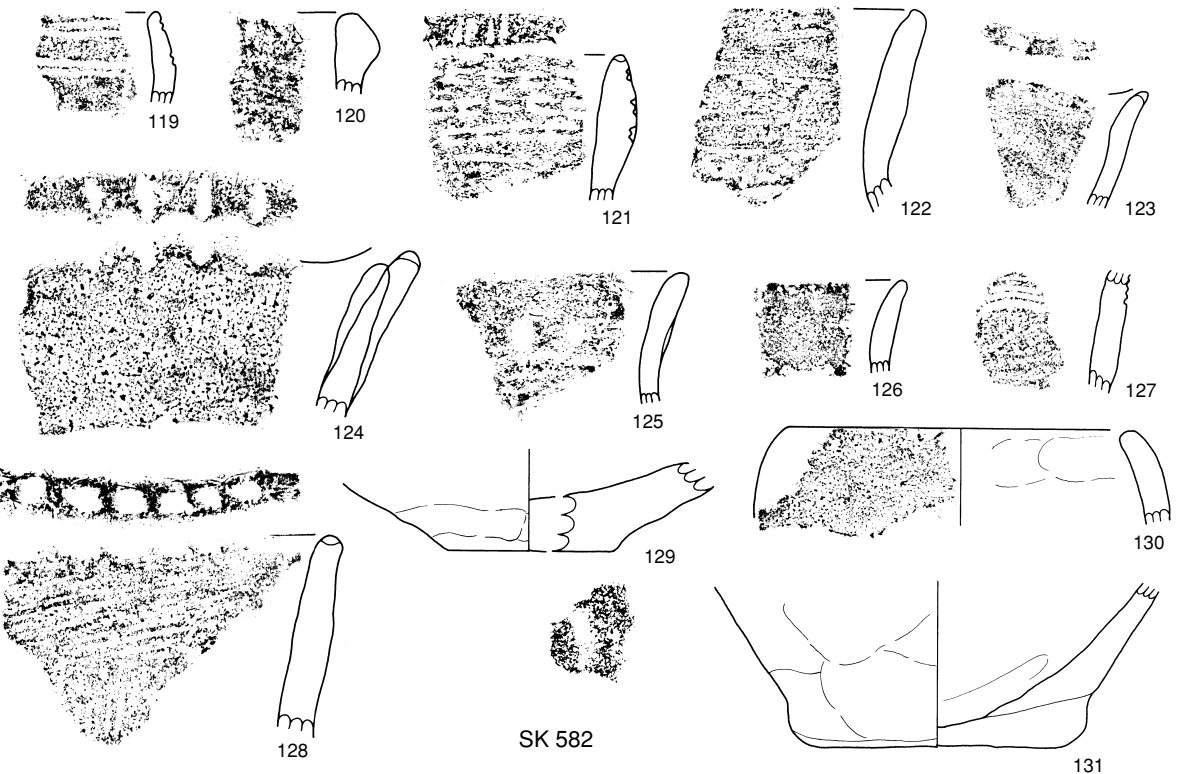
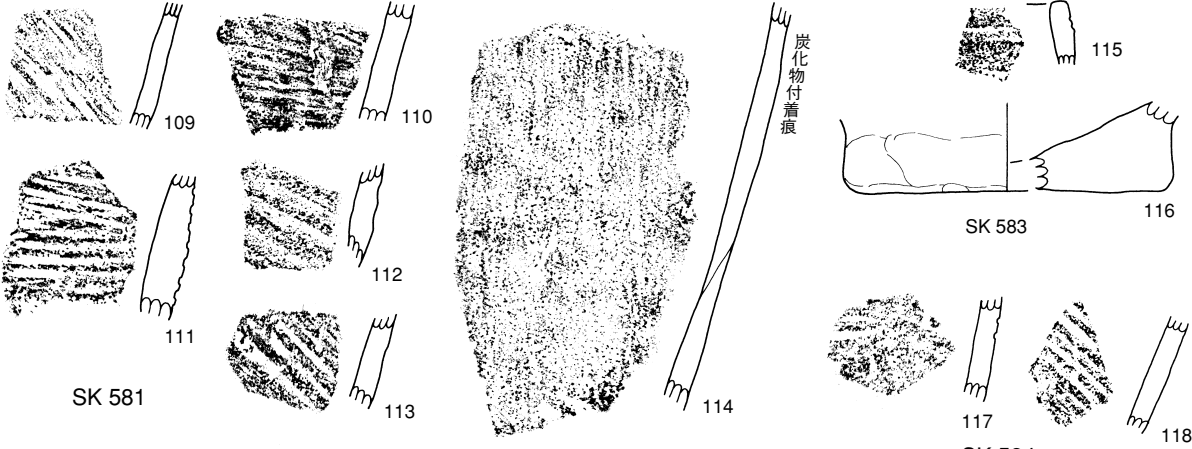


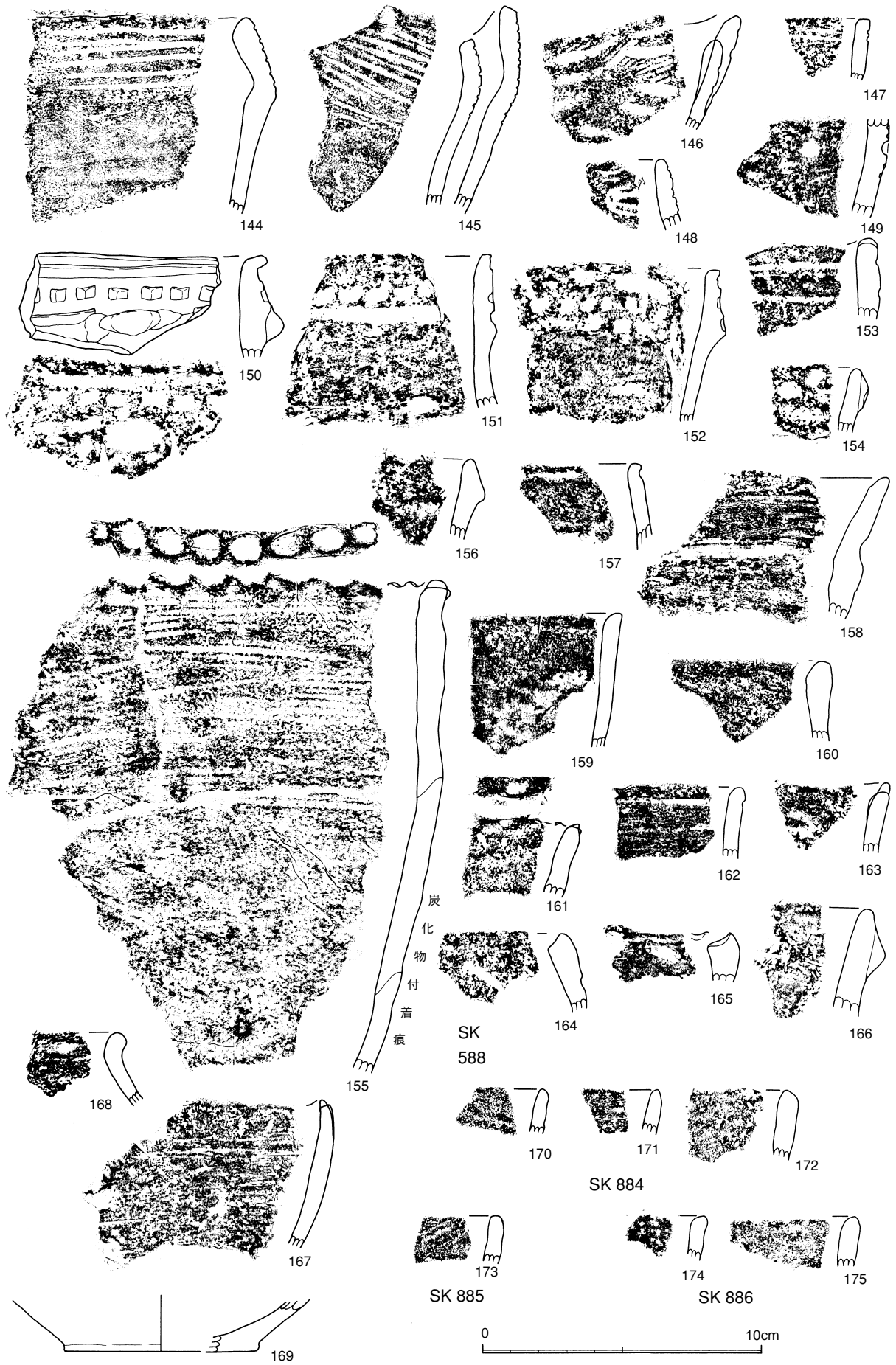
0 5cm

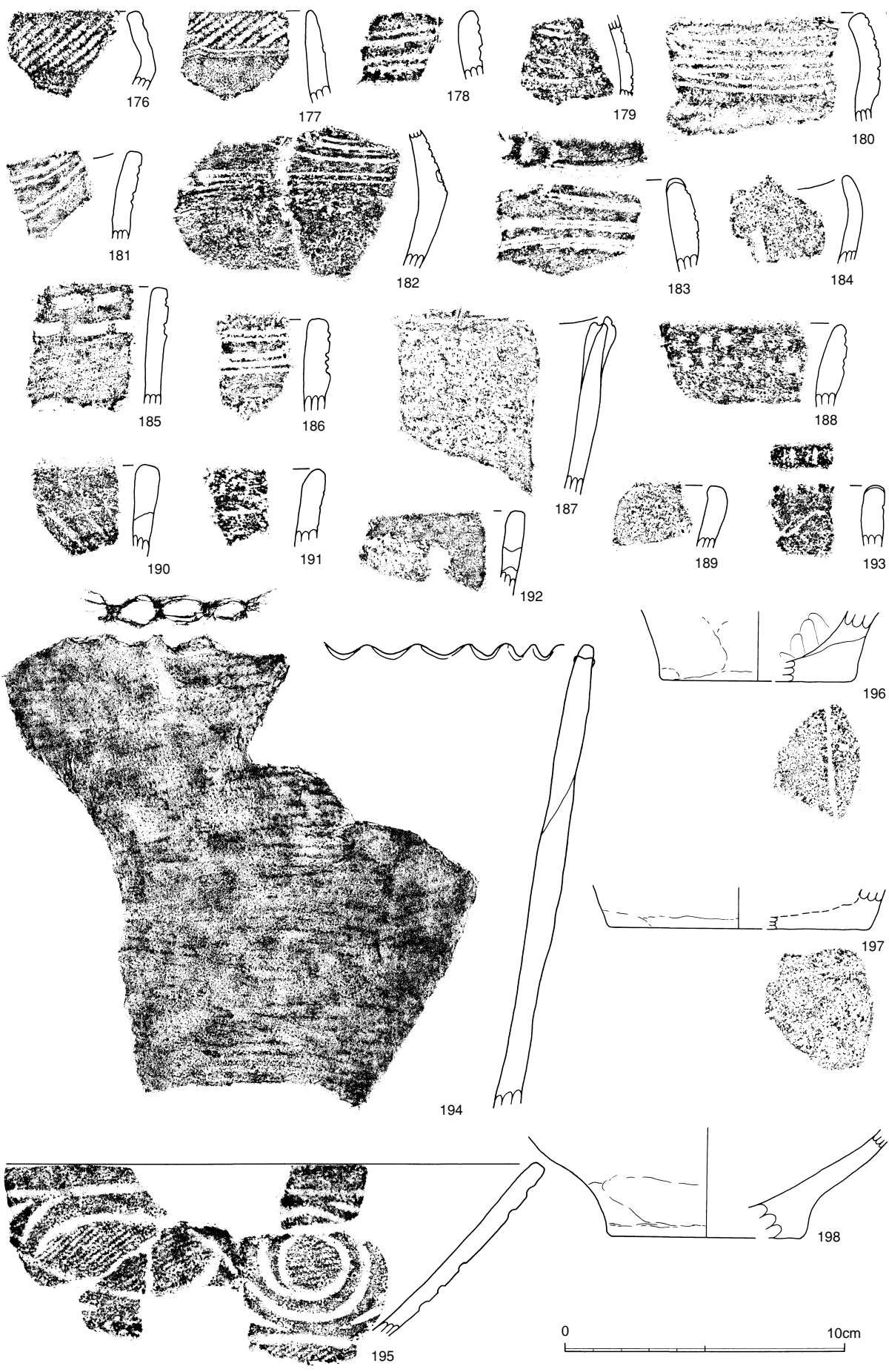


0 10cm  
0 10cm  
97 · 106 · 108

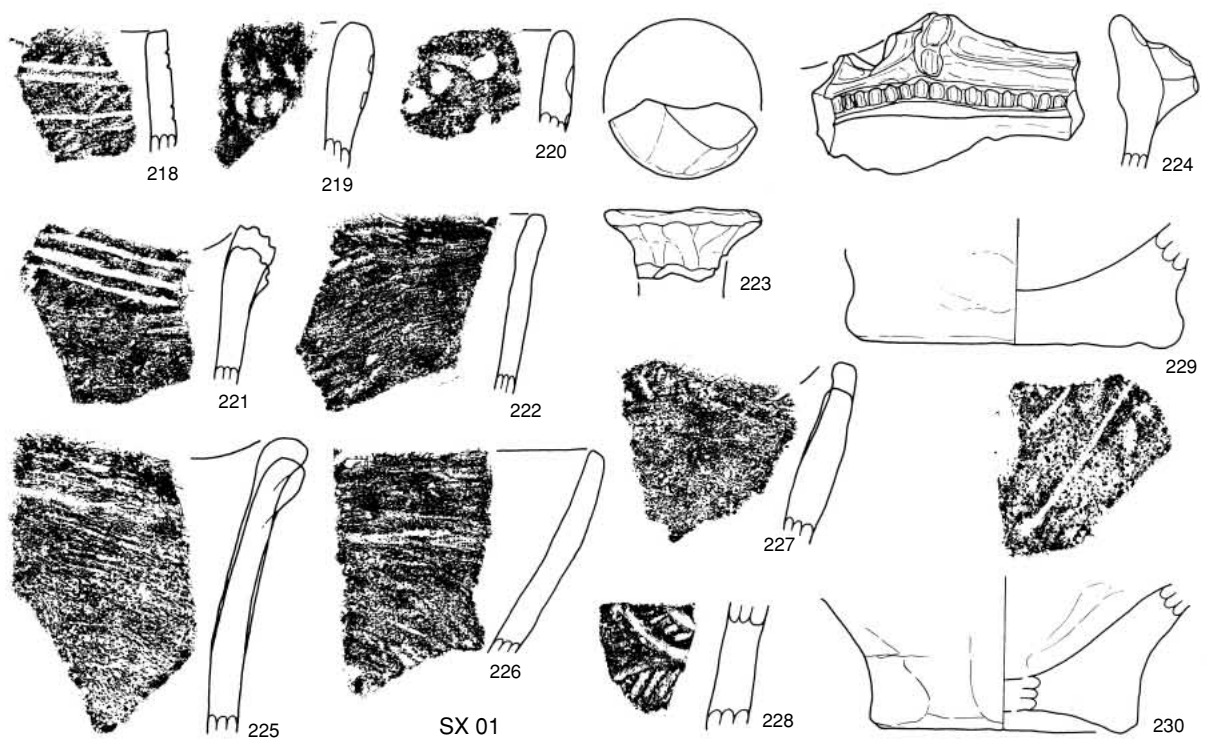
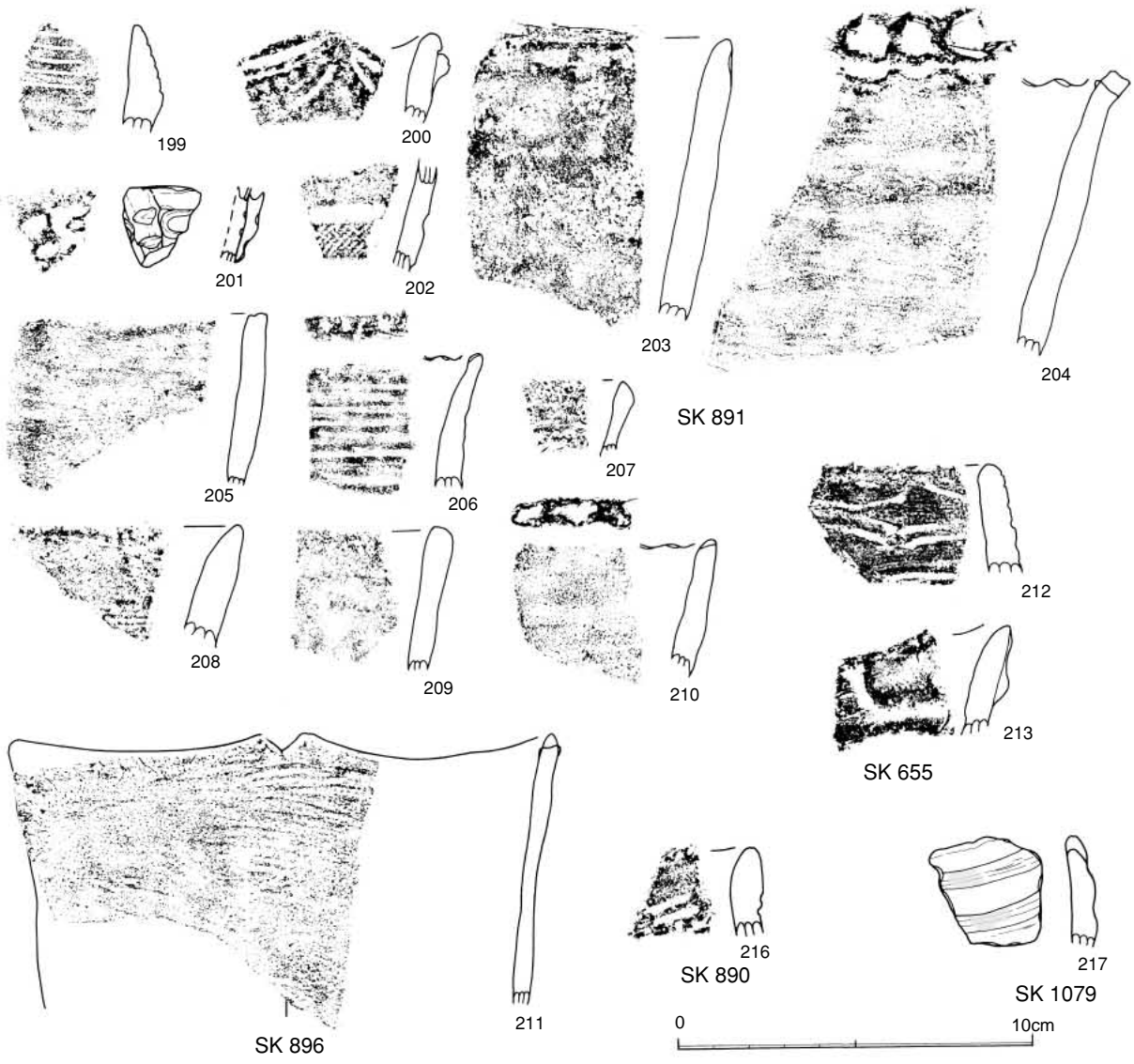


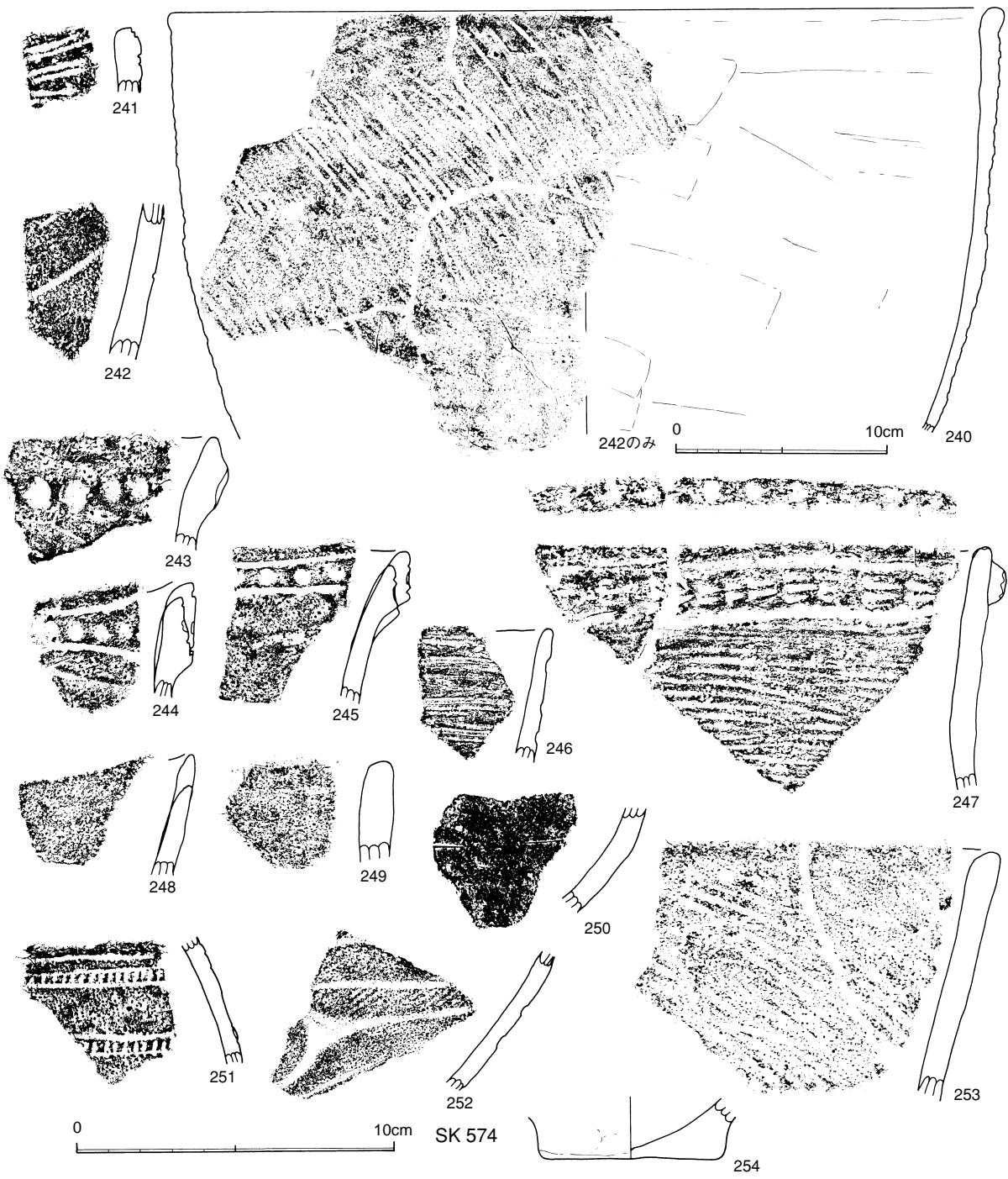
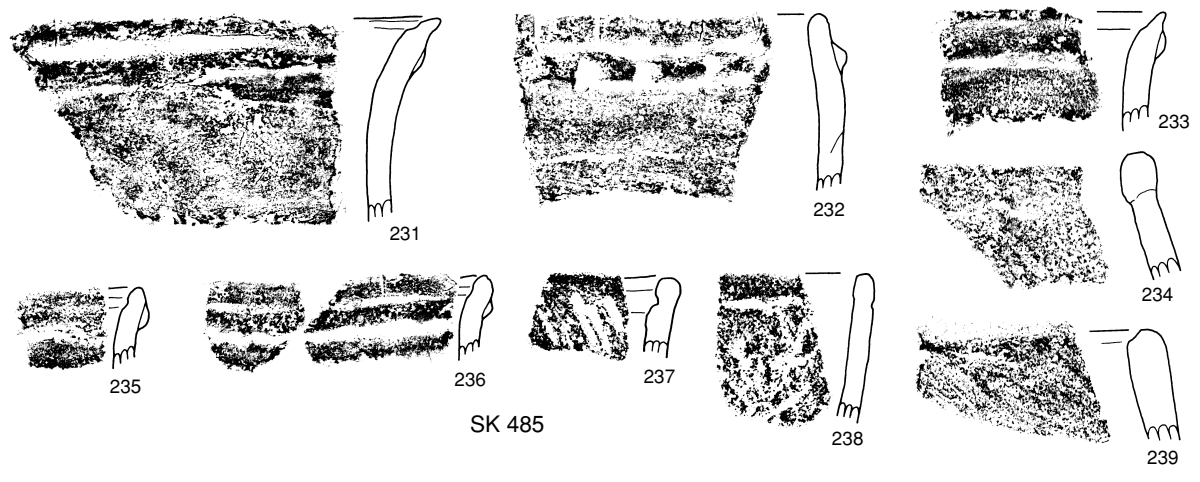


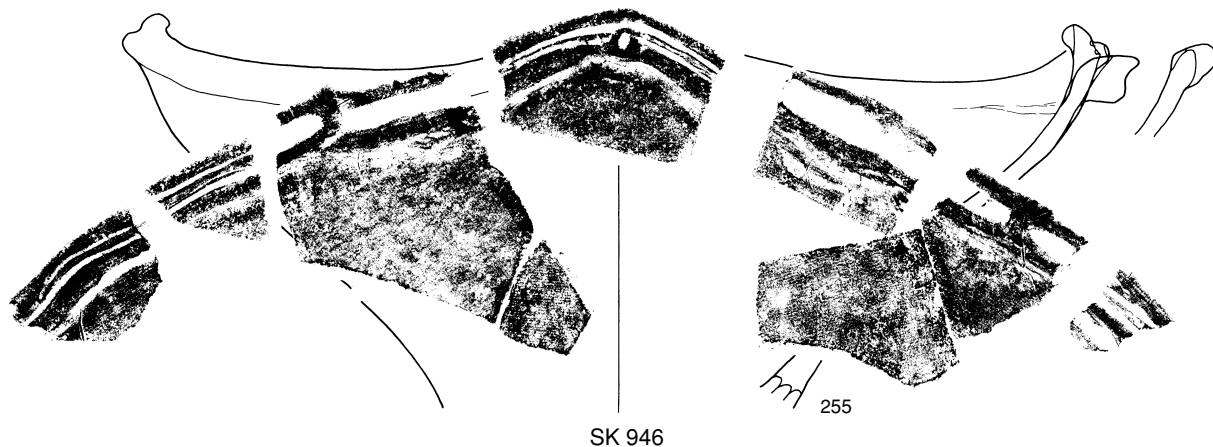




SK 894

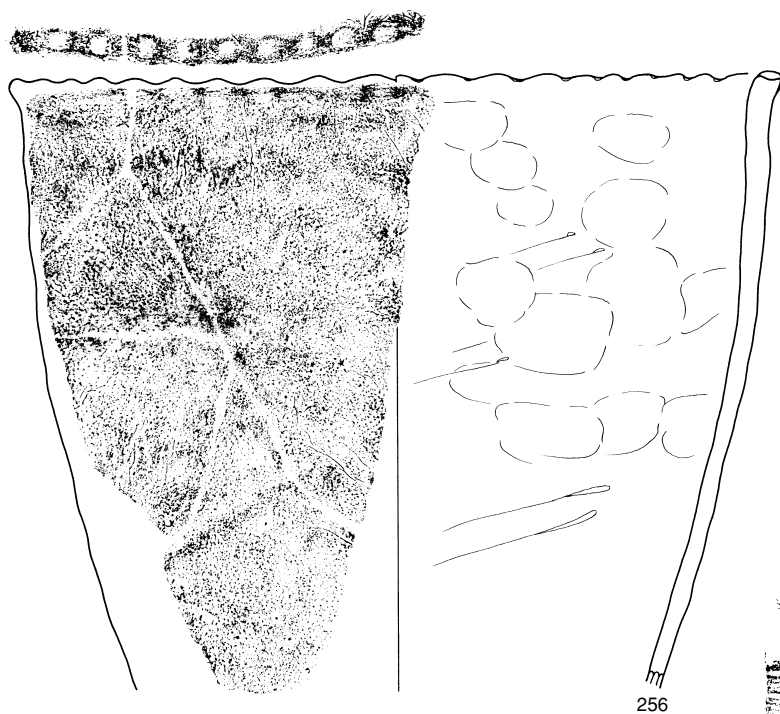




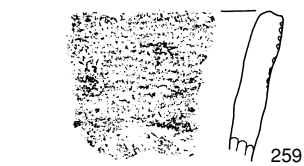


SK 946

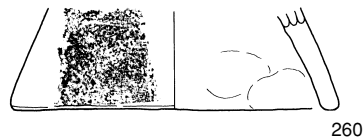
255



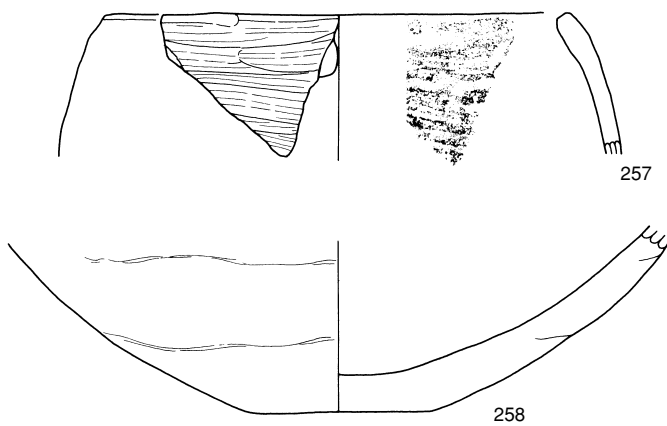
256



259



260



257

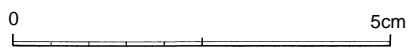
258

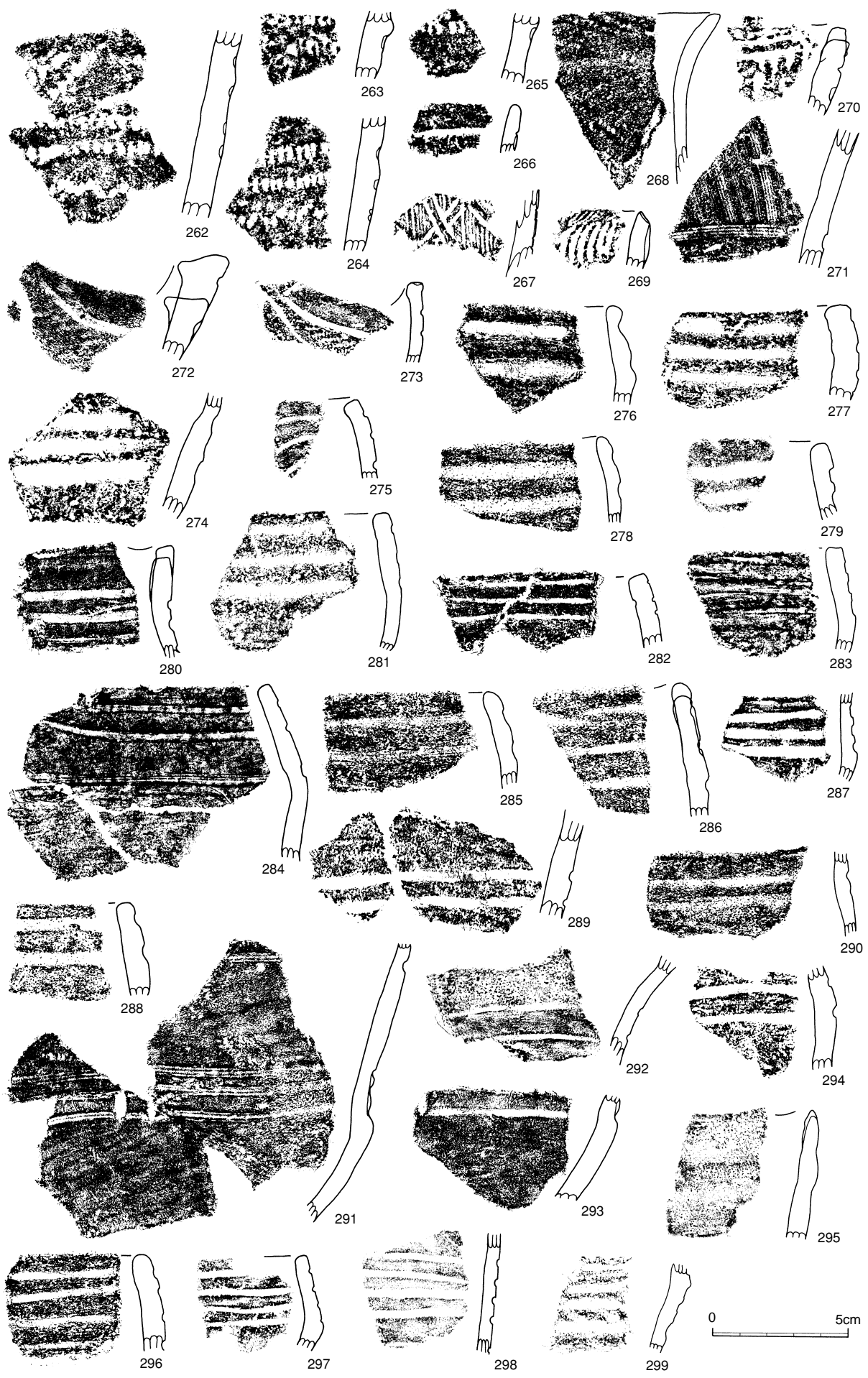
SK 512



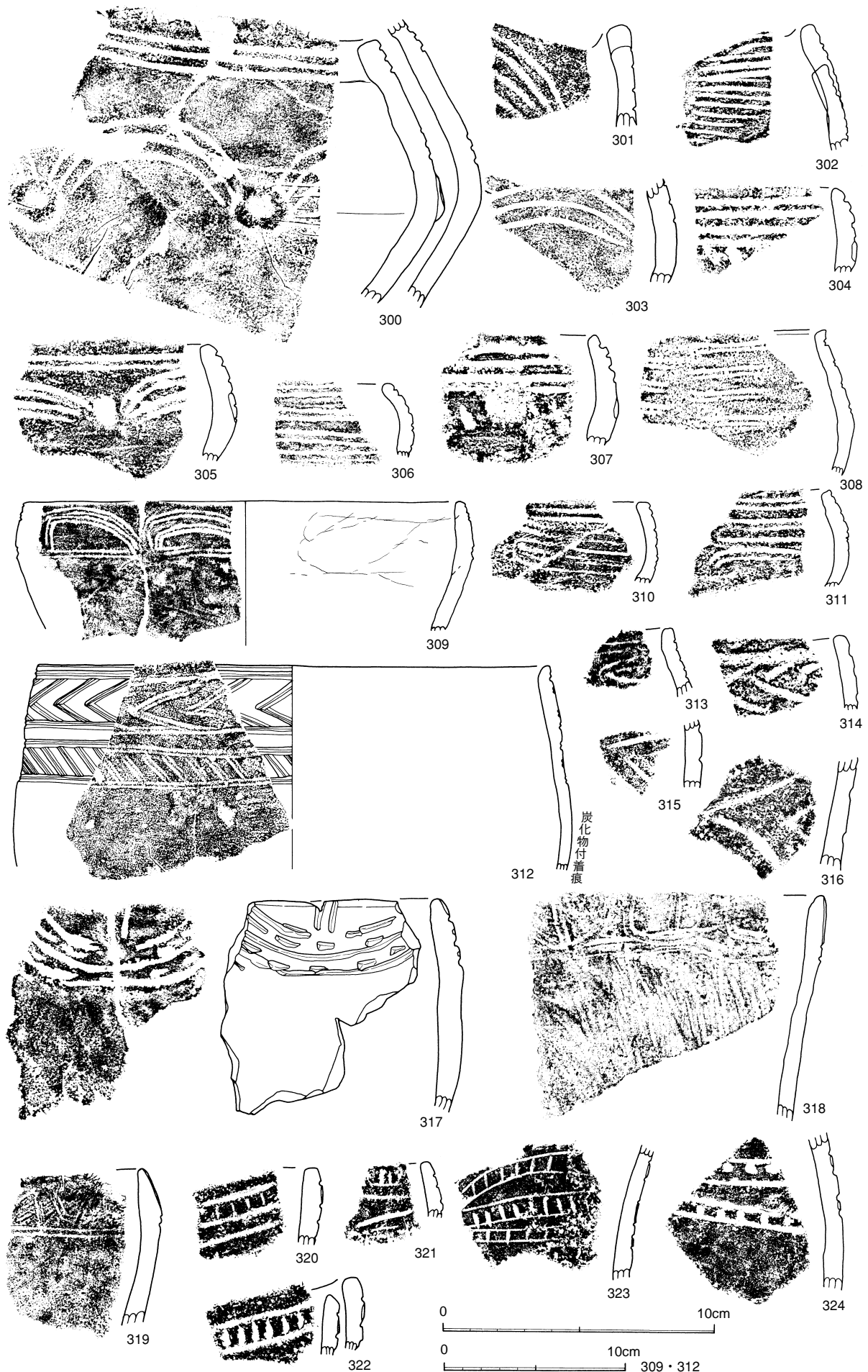
261

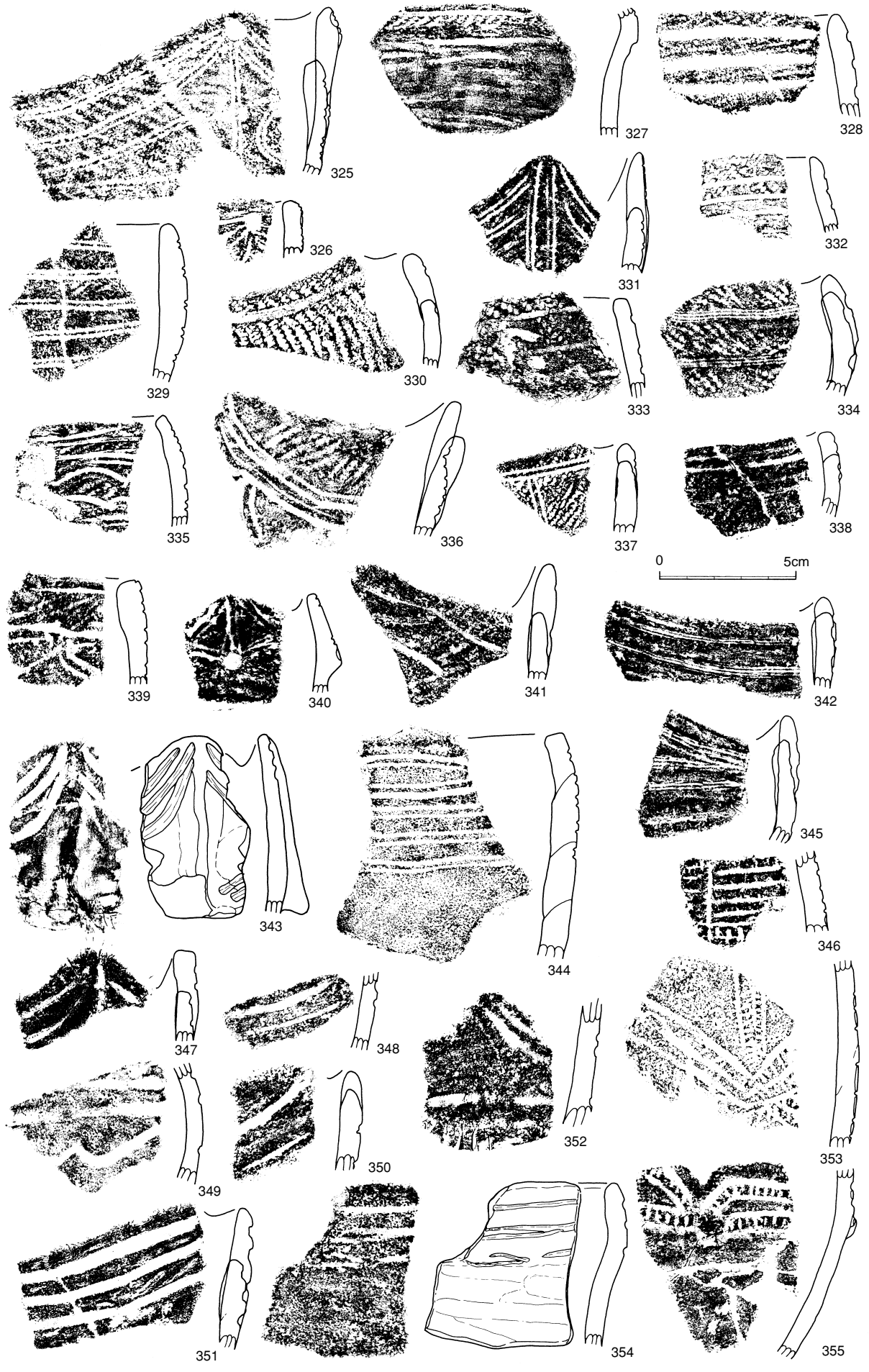
SK 385



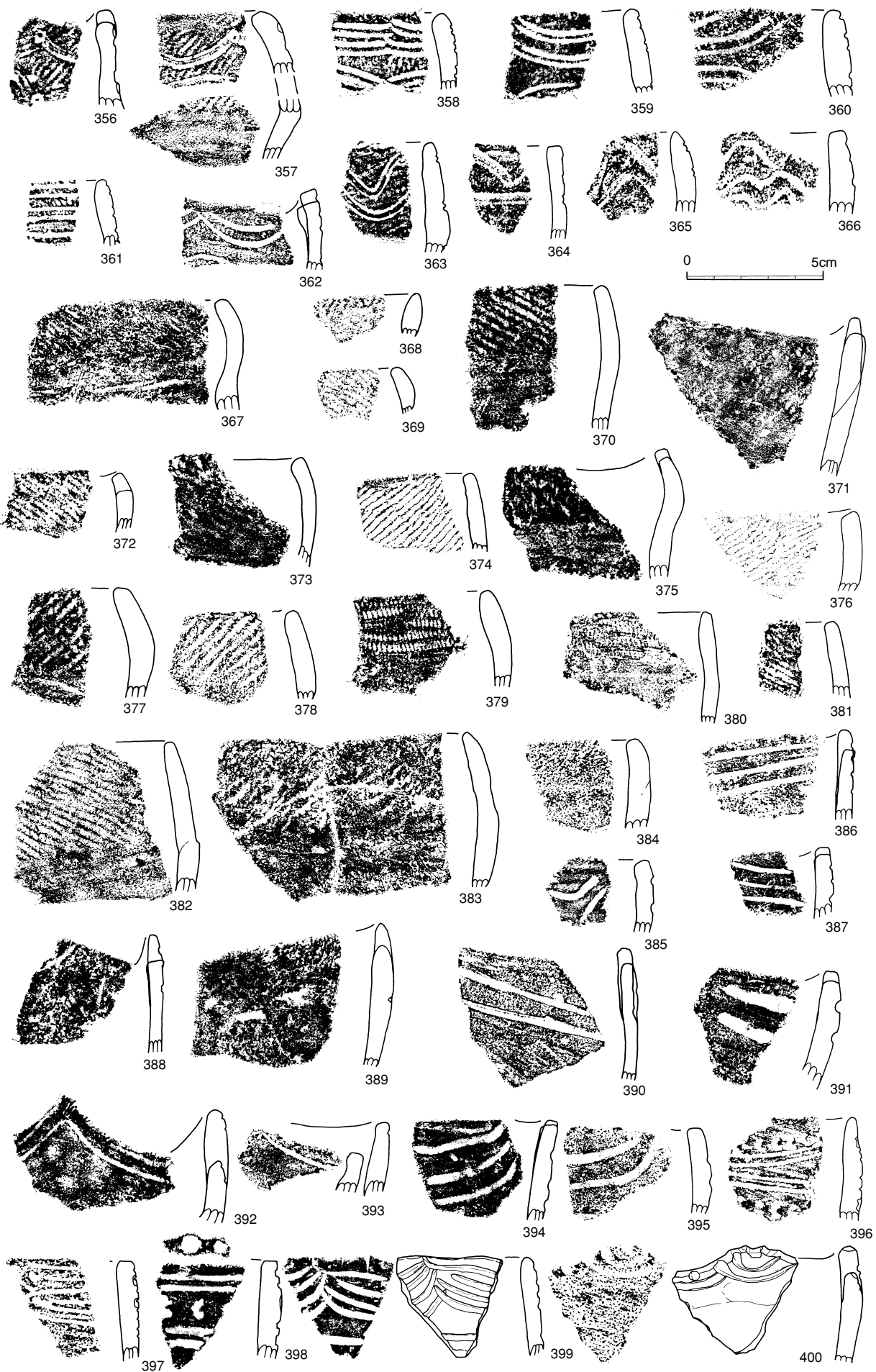


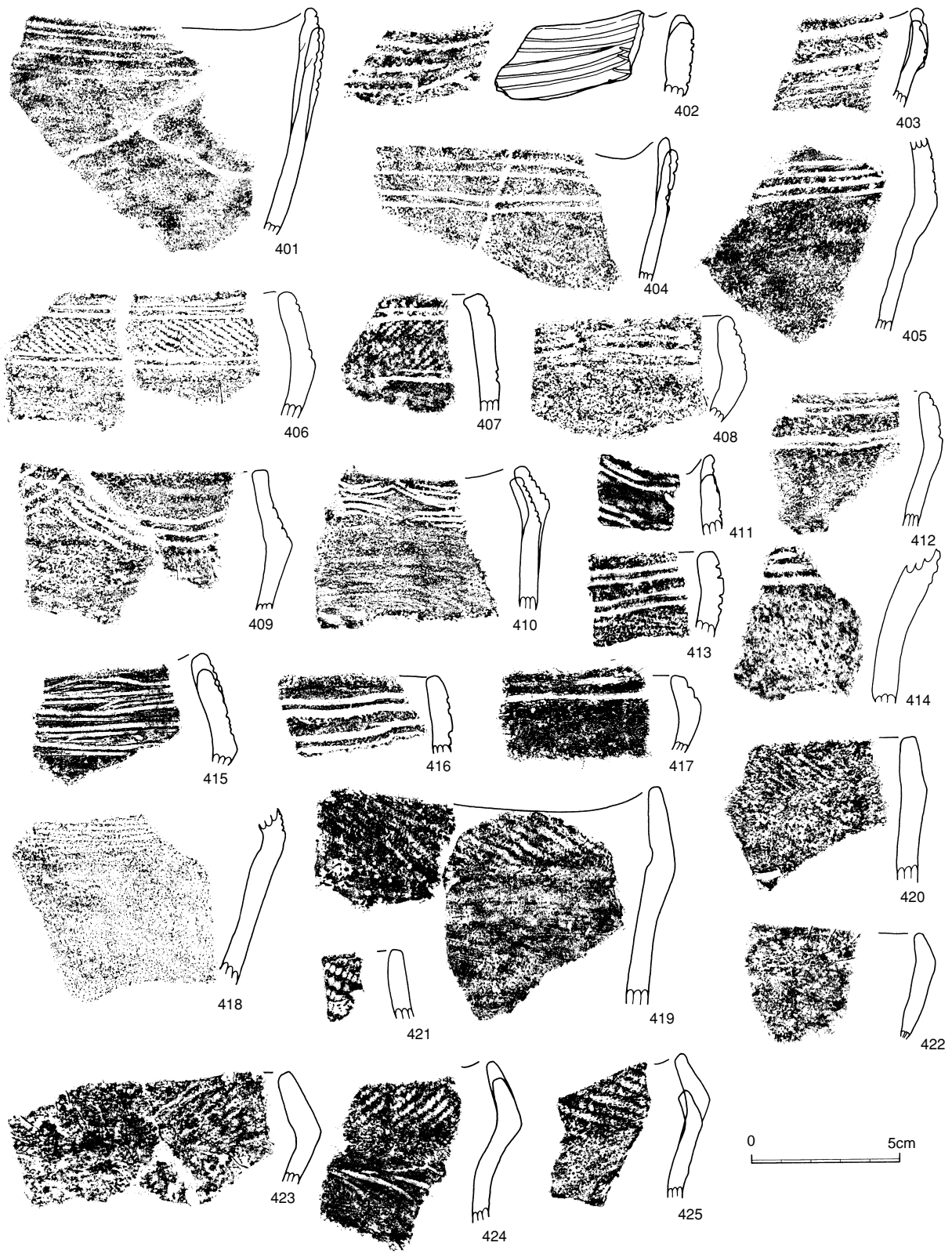
I 群 · II 群 · III 群 · A 類 · III 群 C 類 g

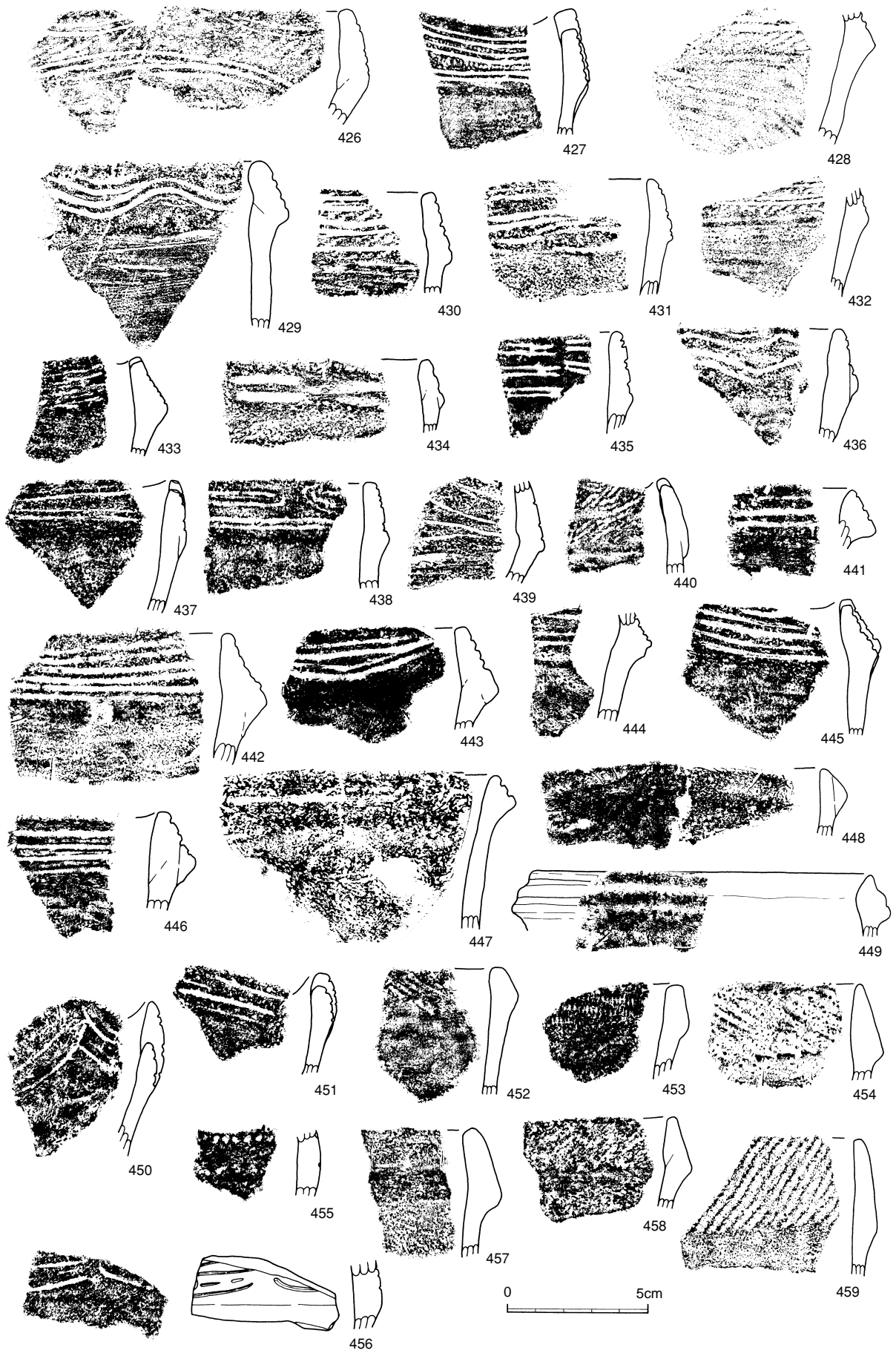


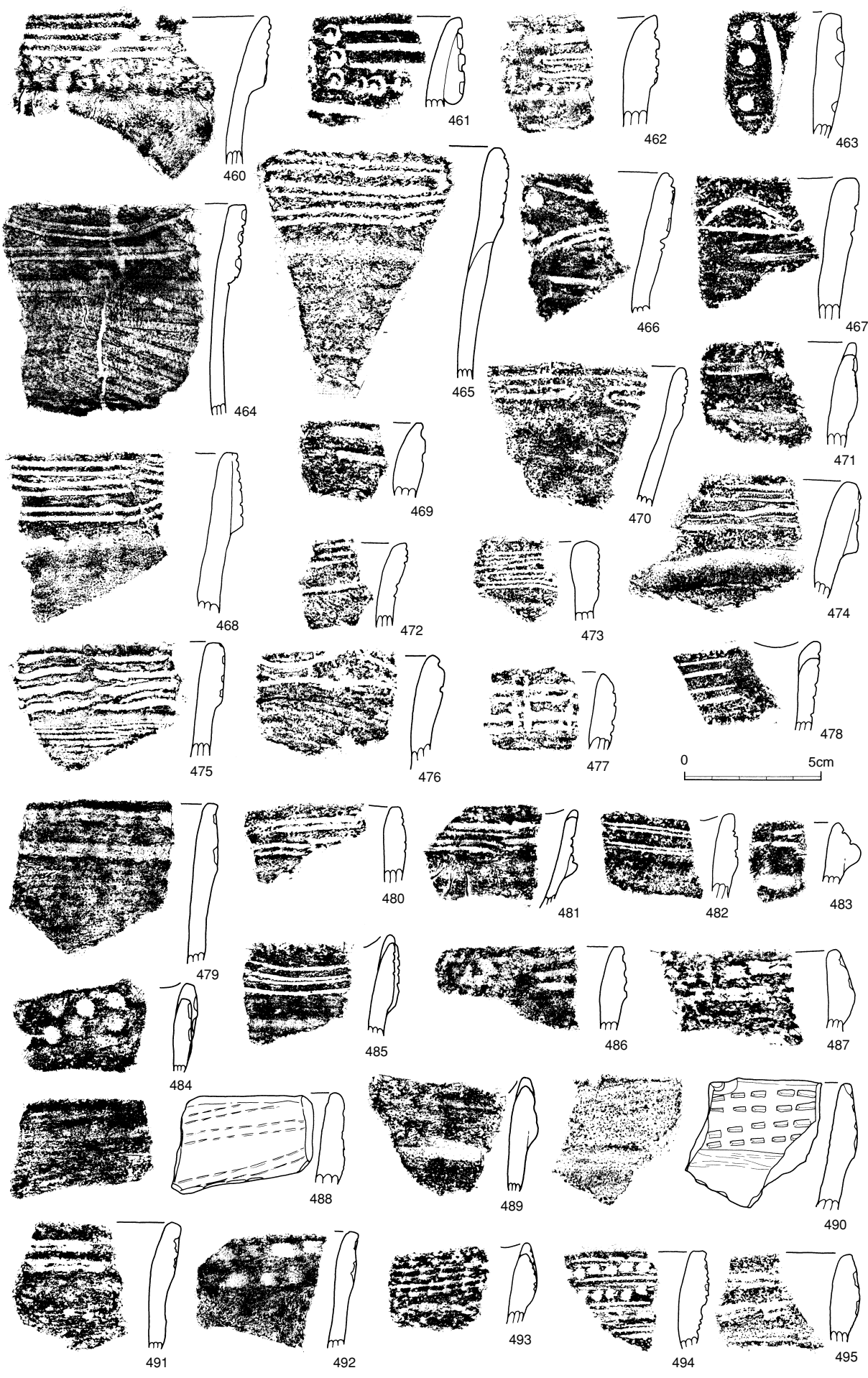


III群 B類 g

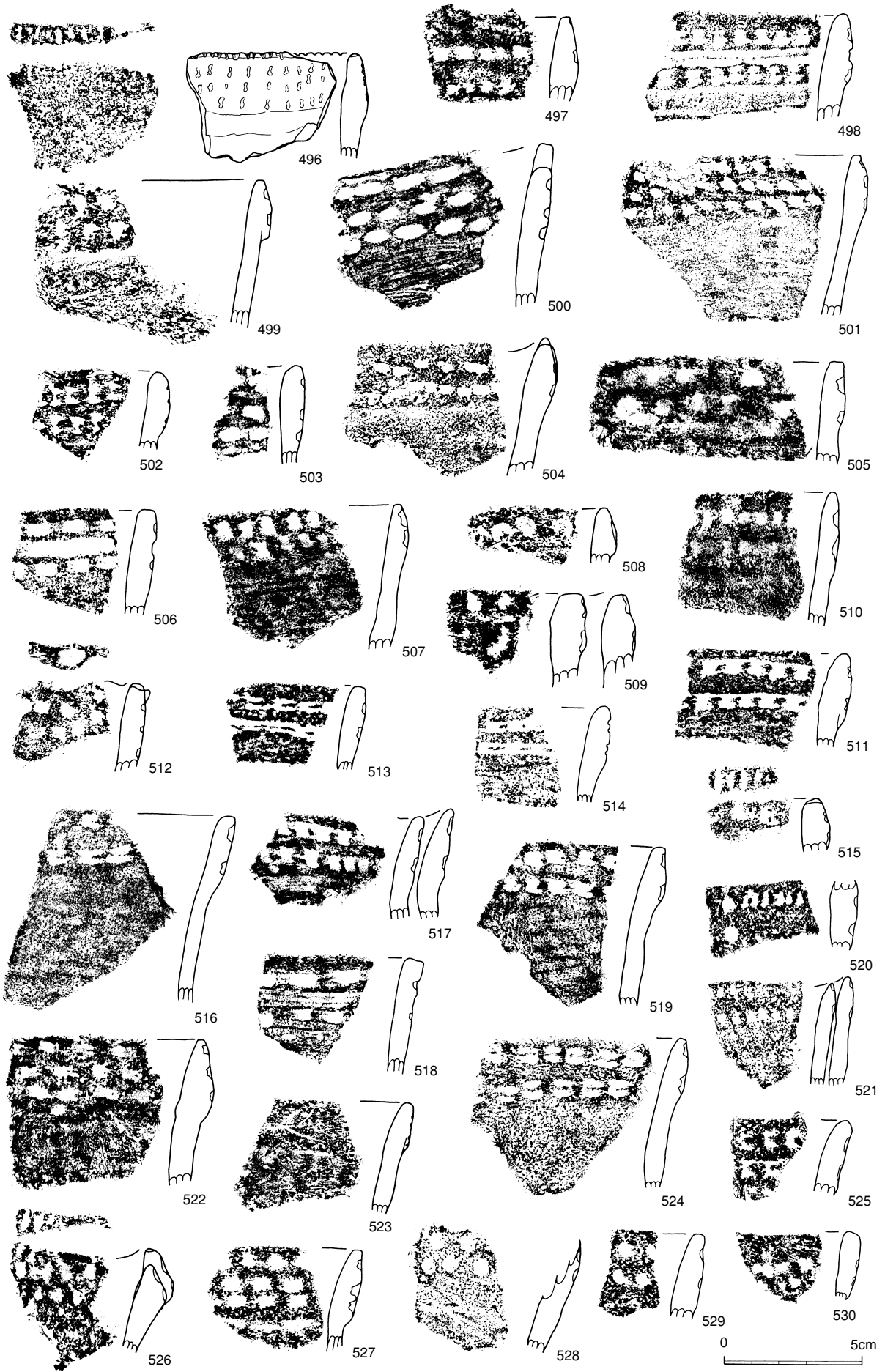


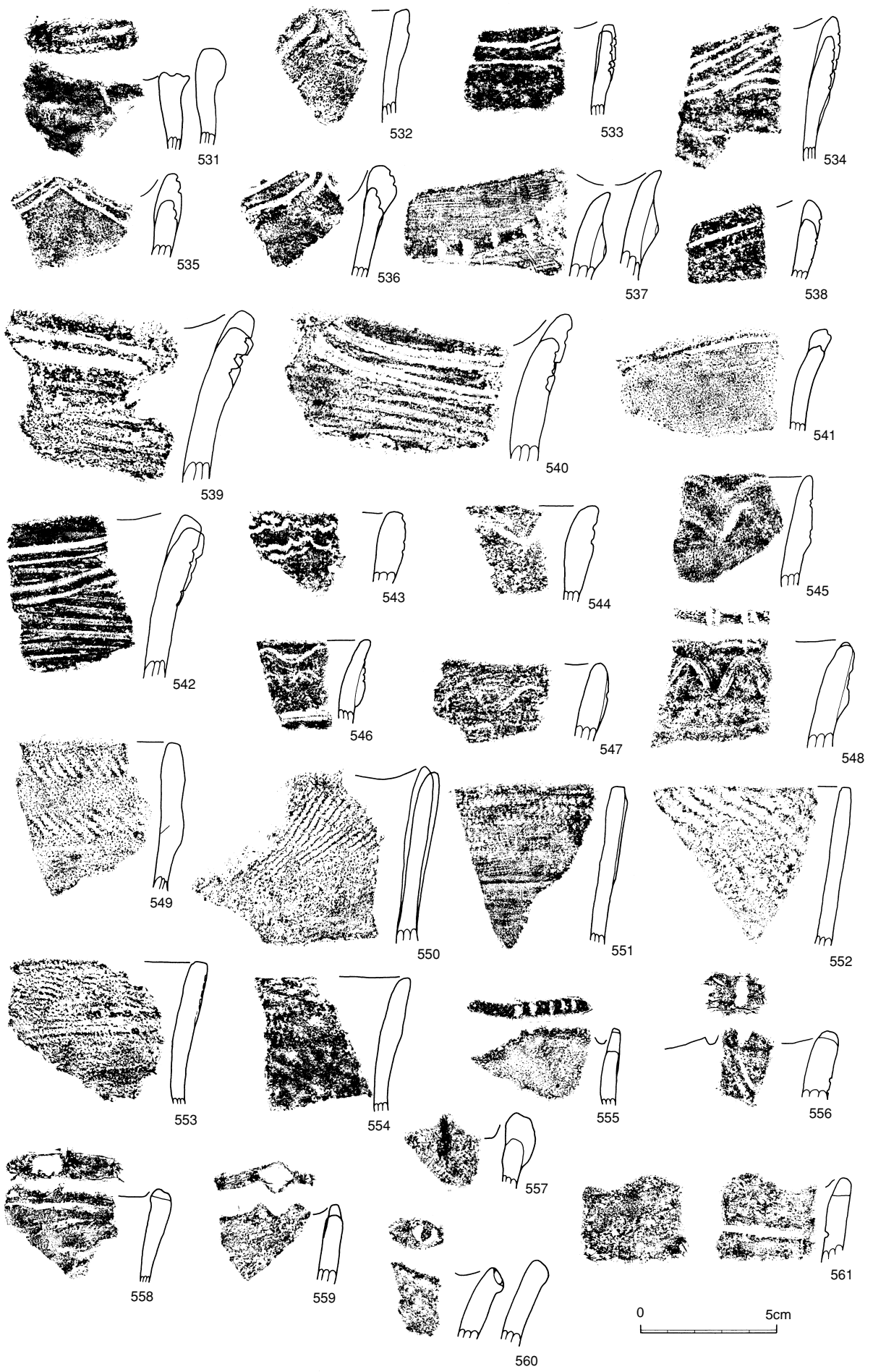


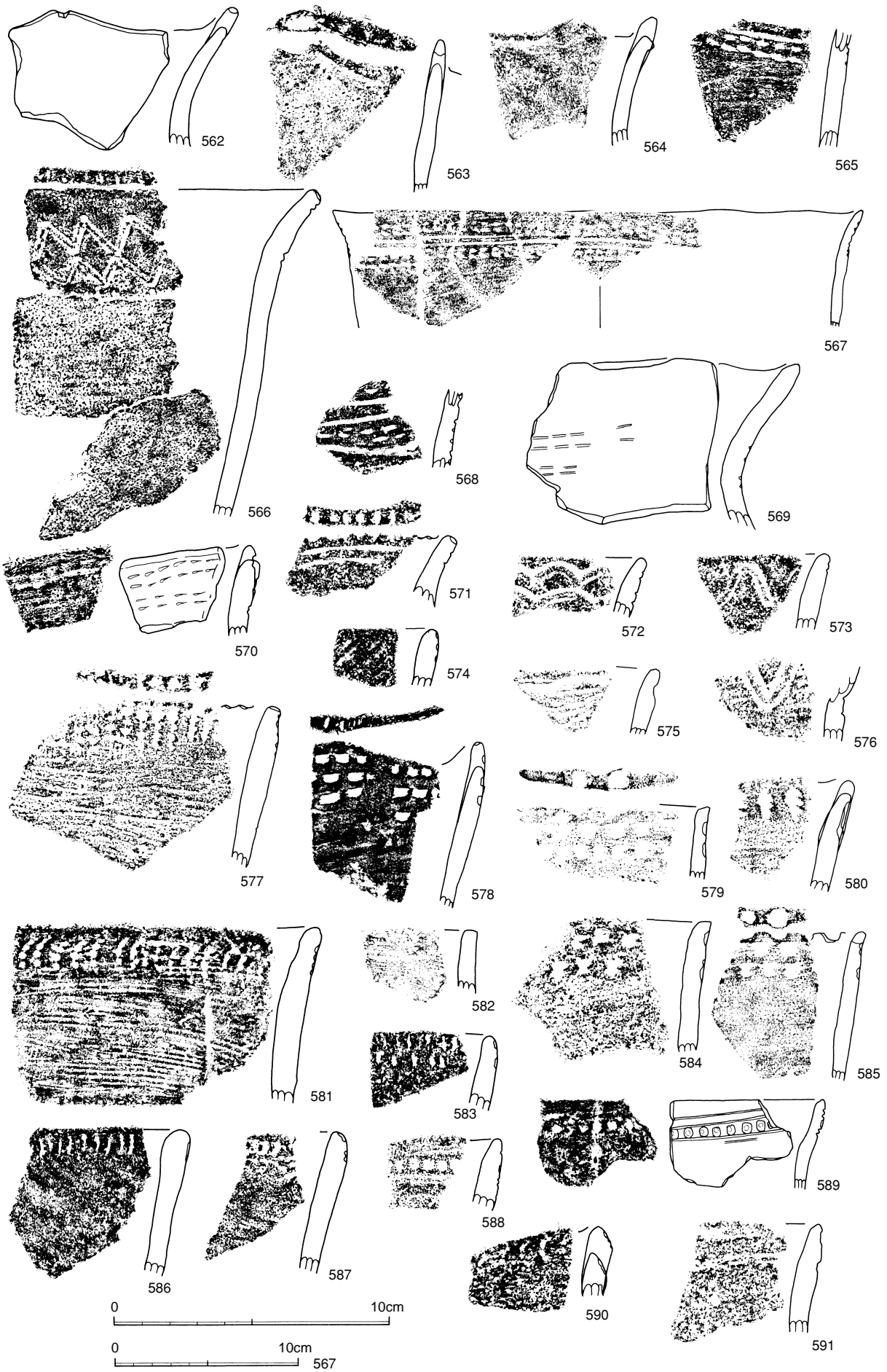




III群 C類 a

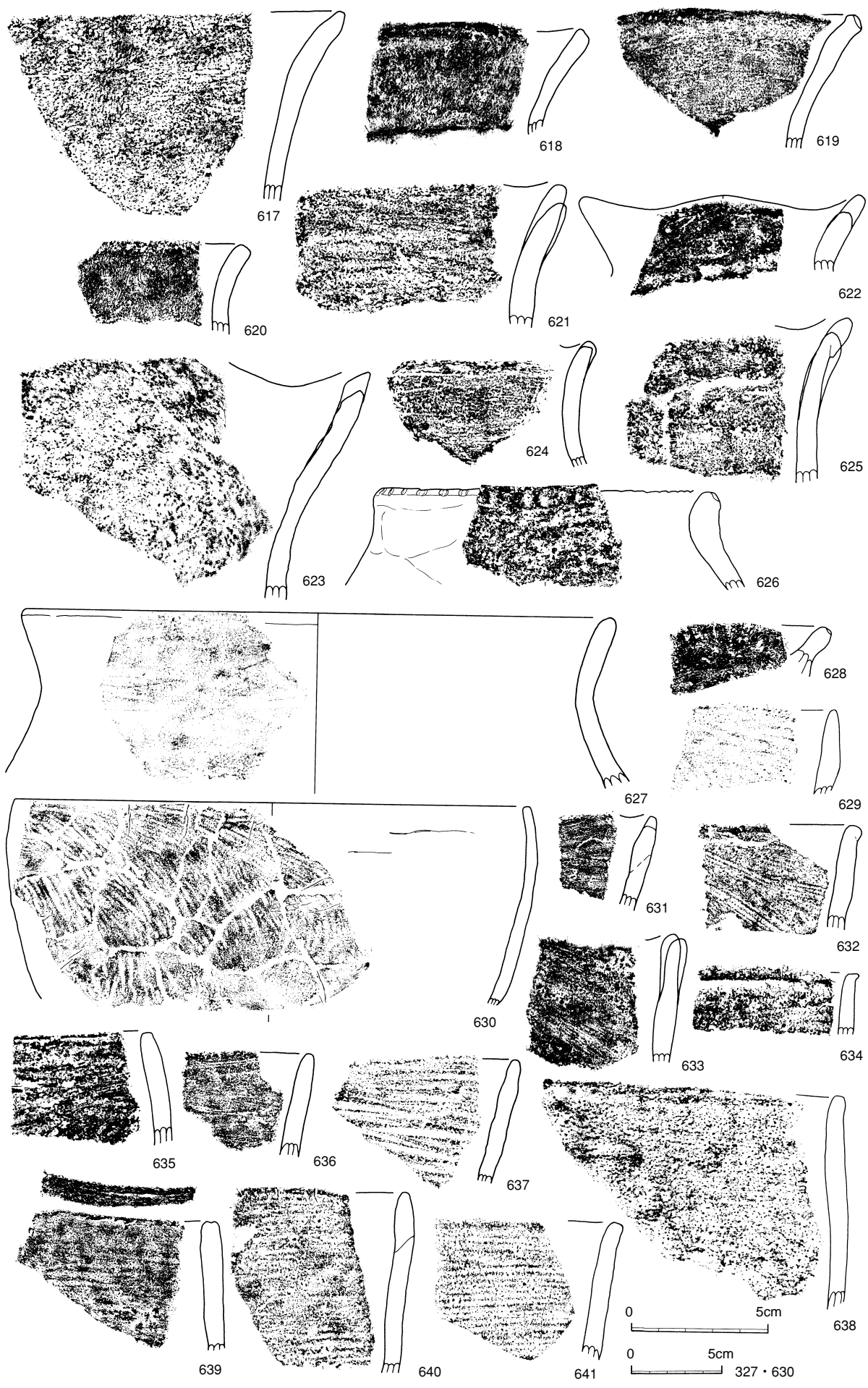


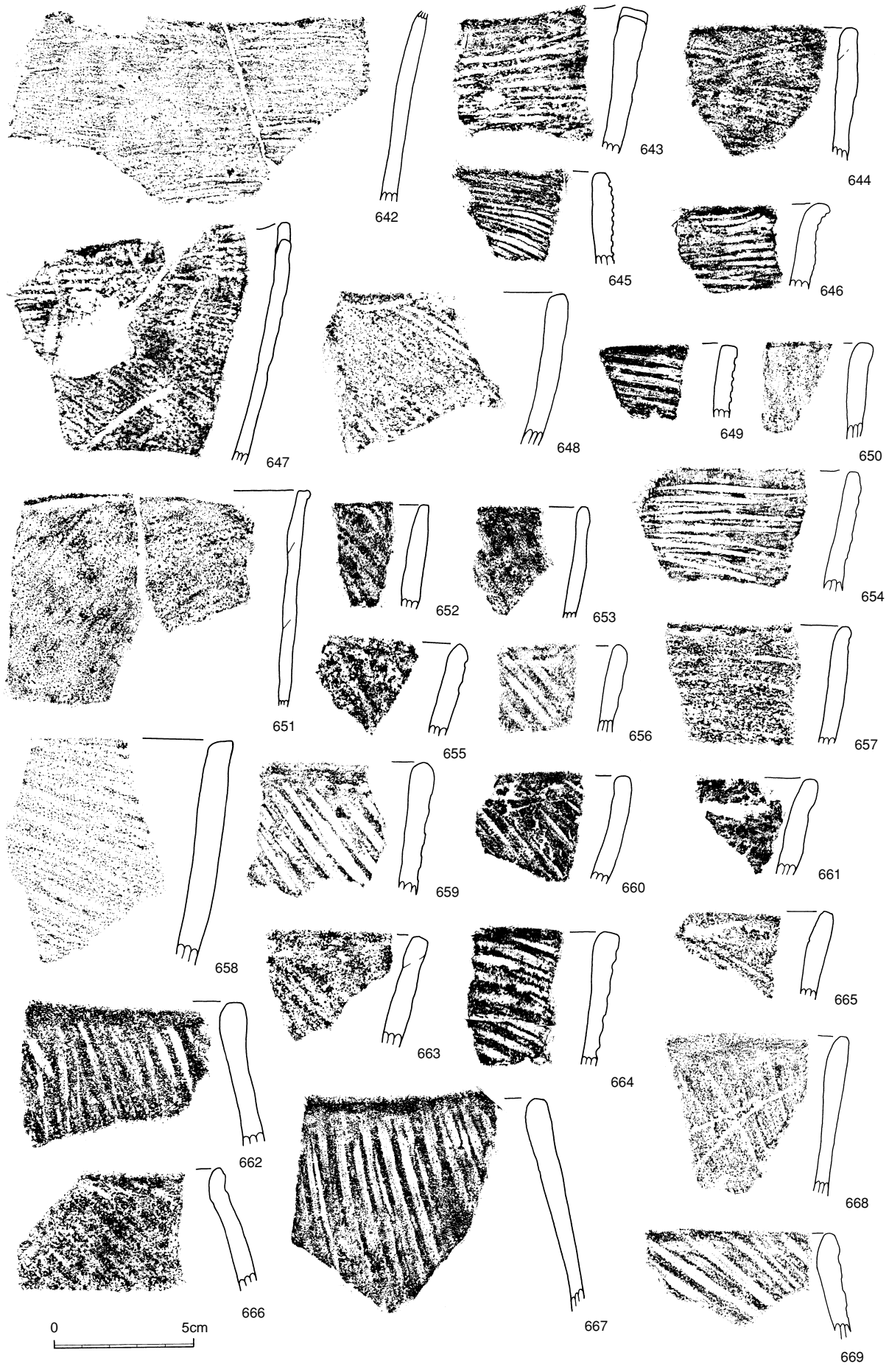


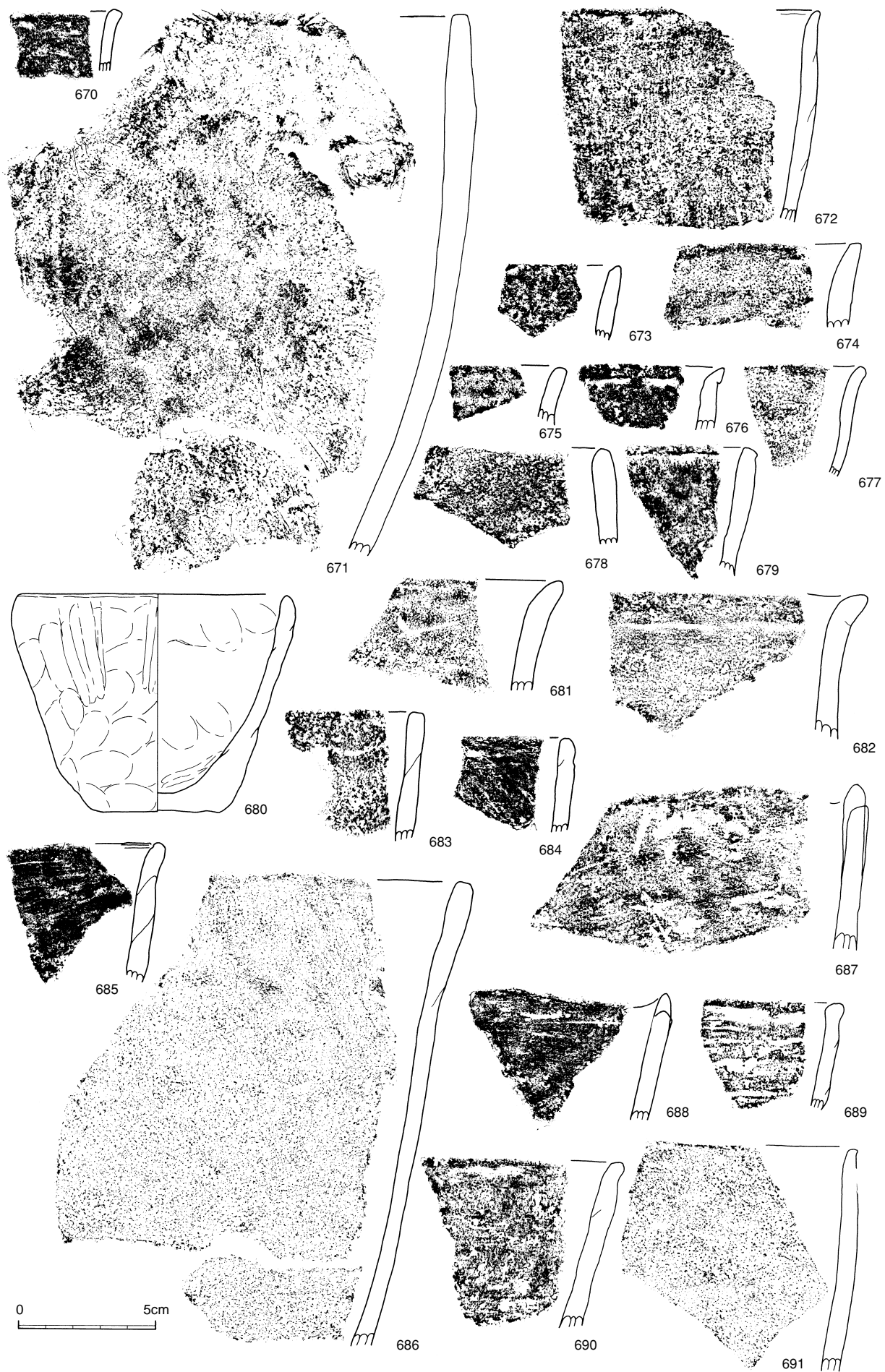


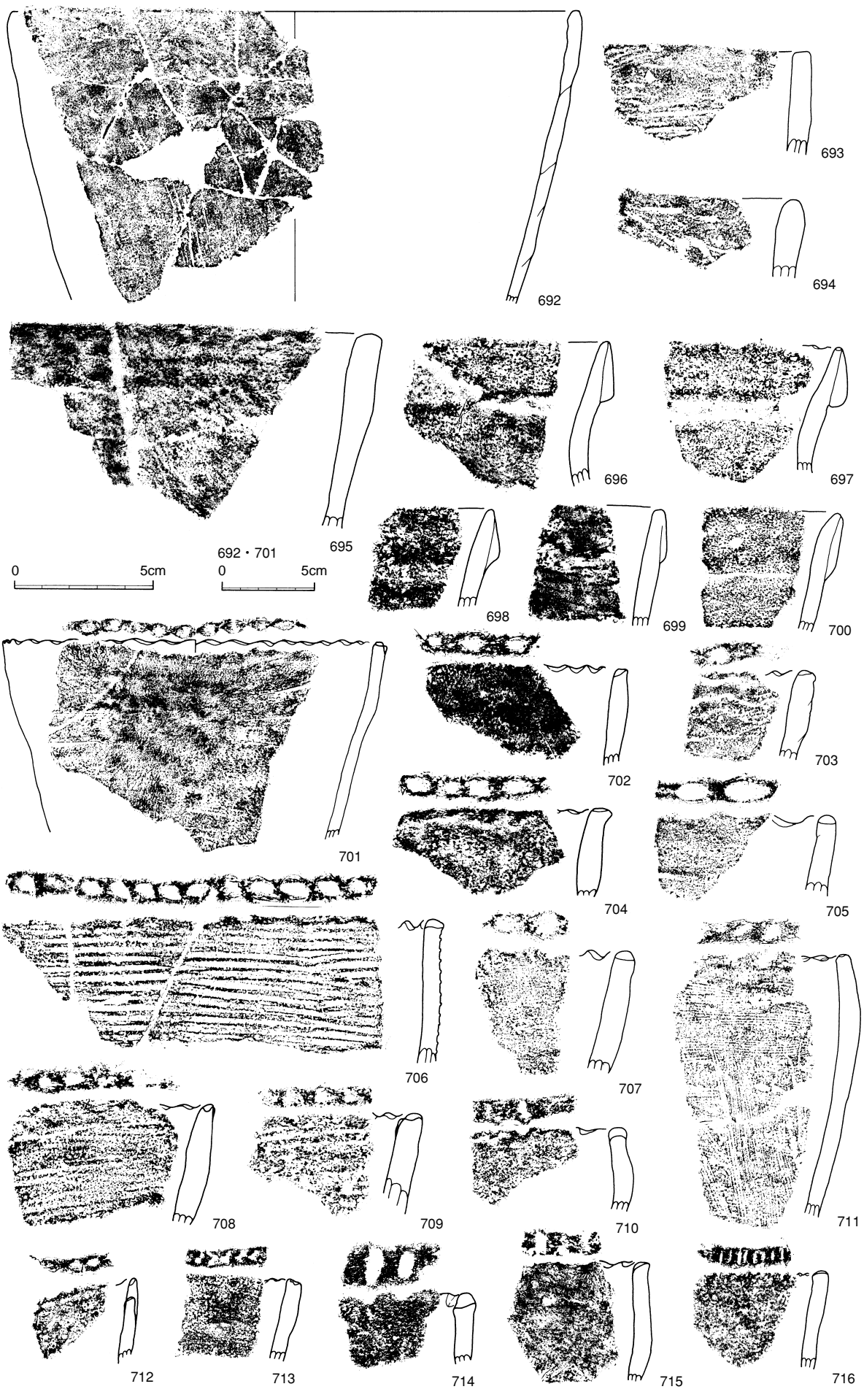


IV群 A・B類

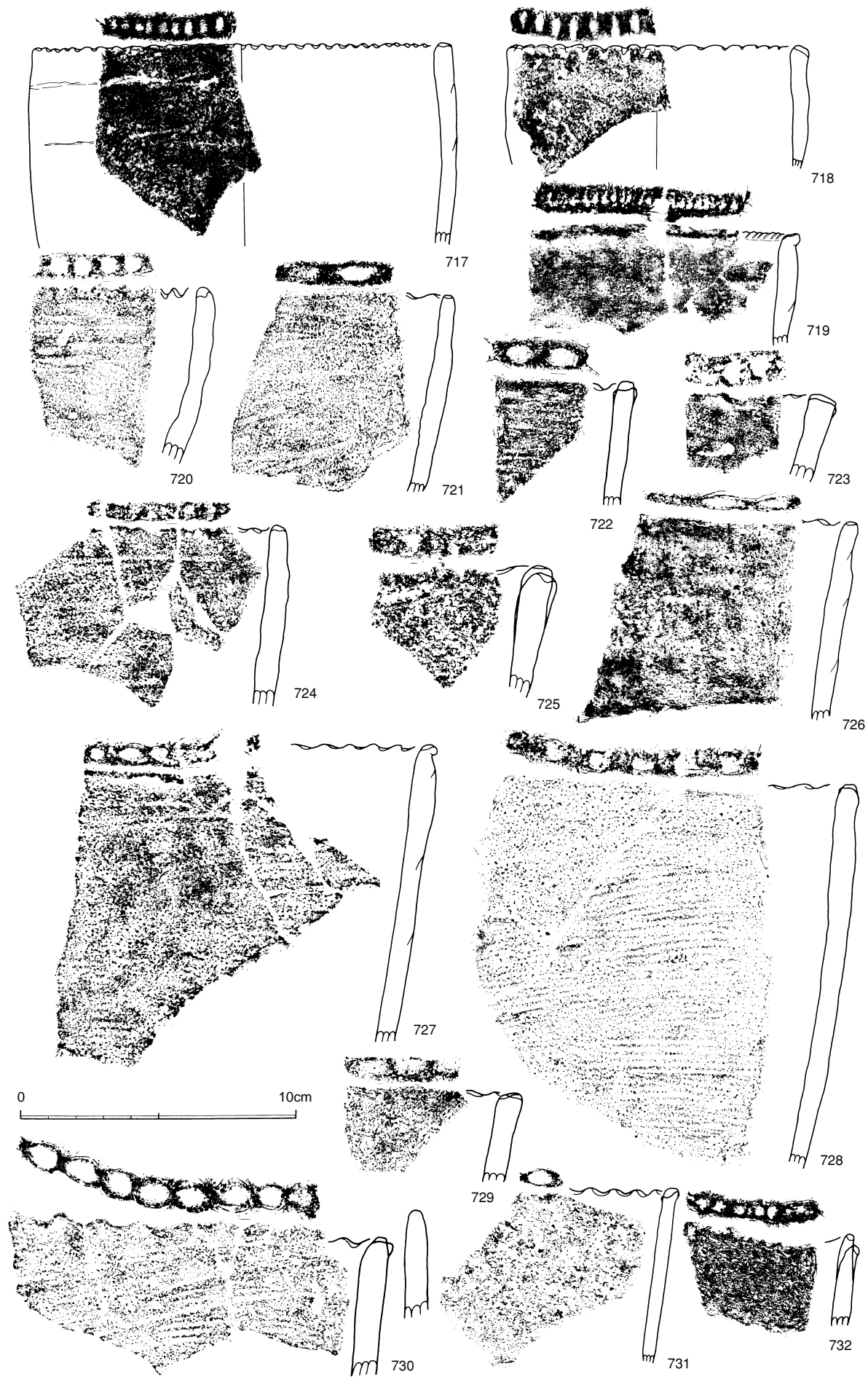


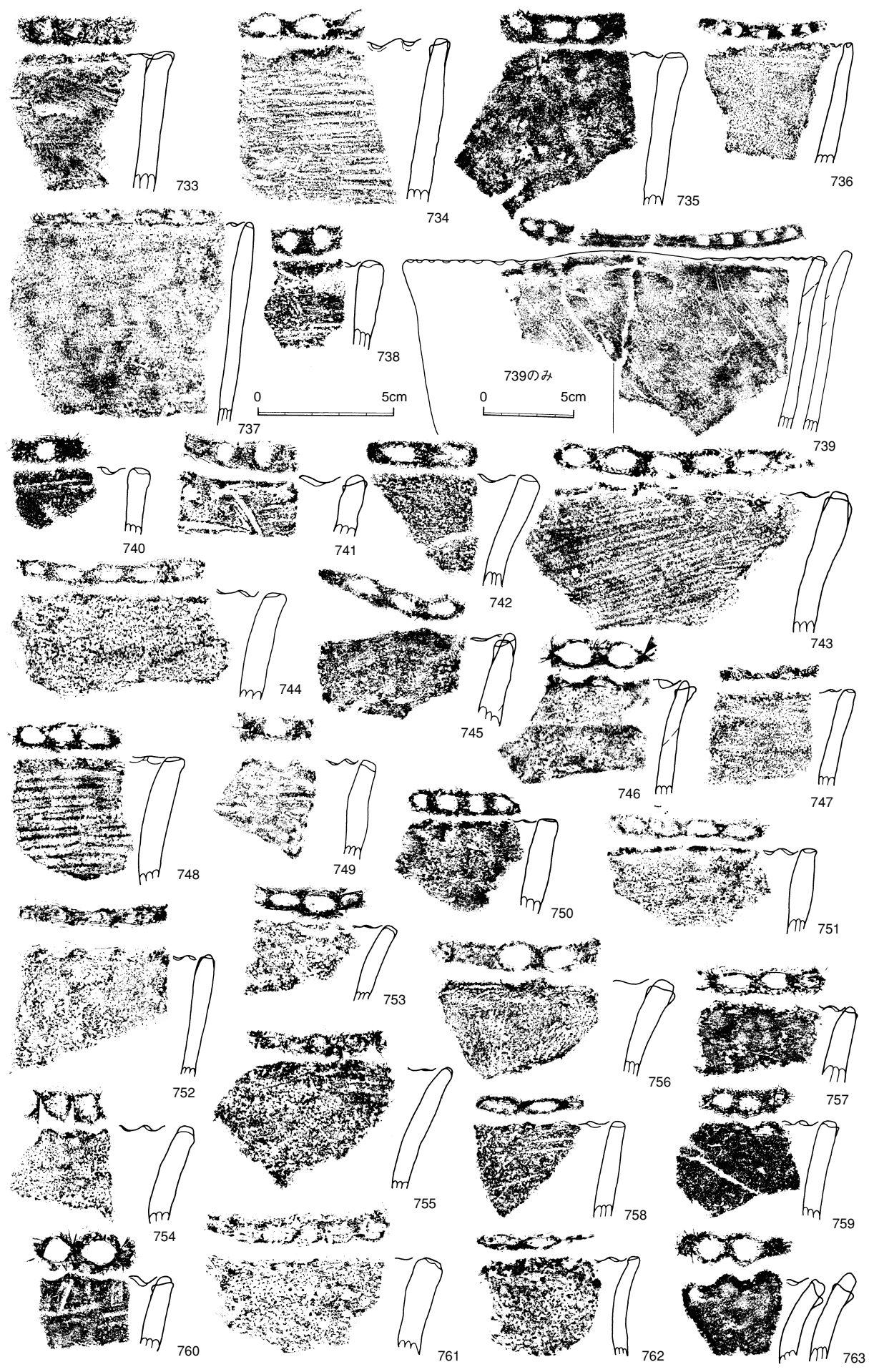






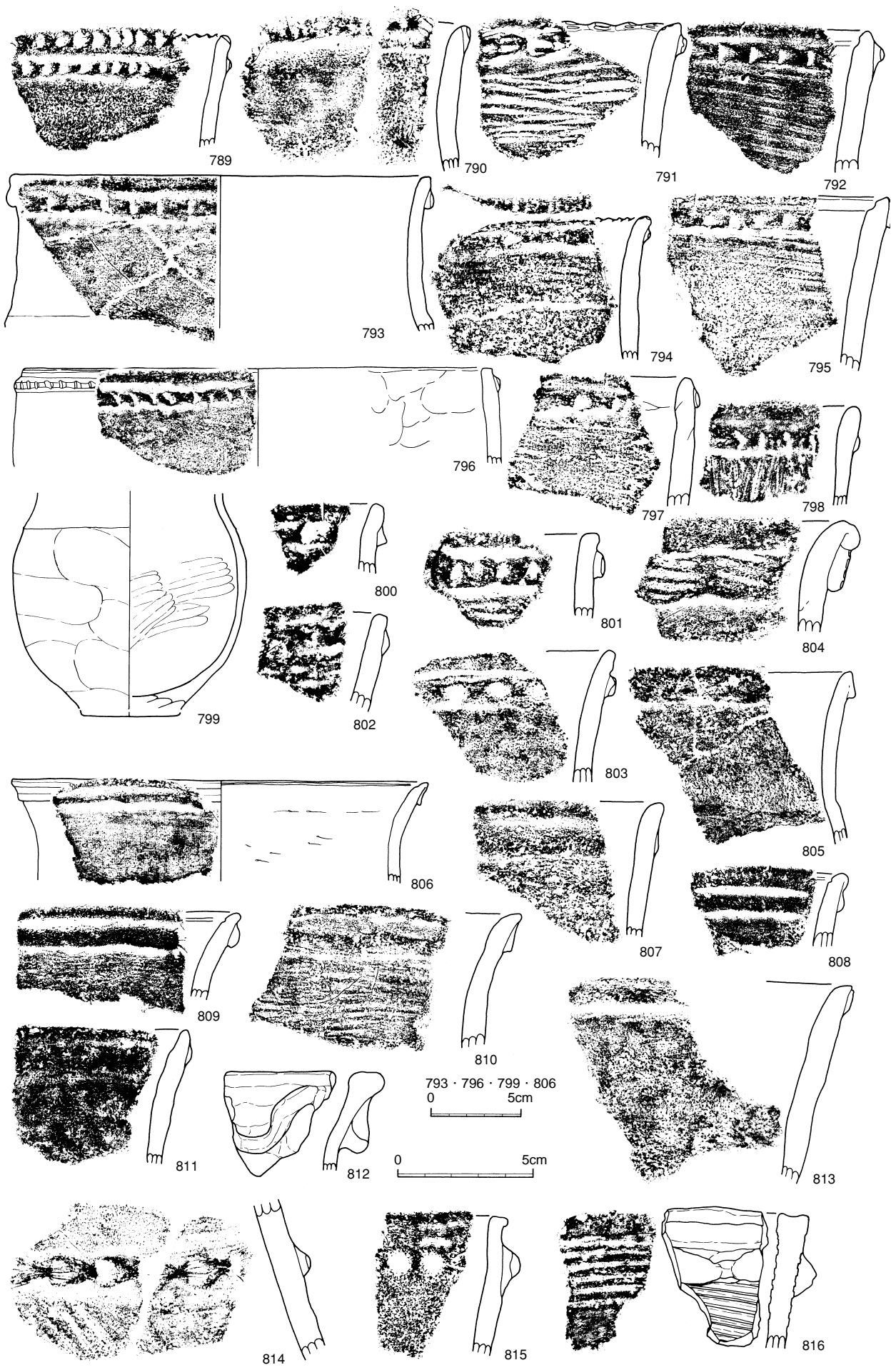
IV群 C類・C'類b



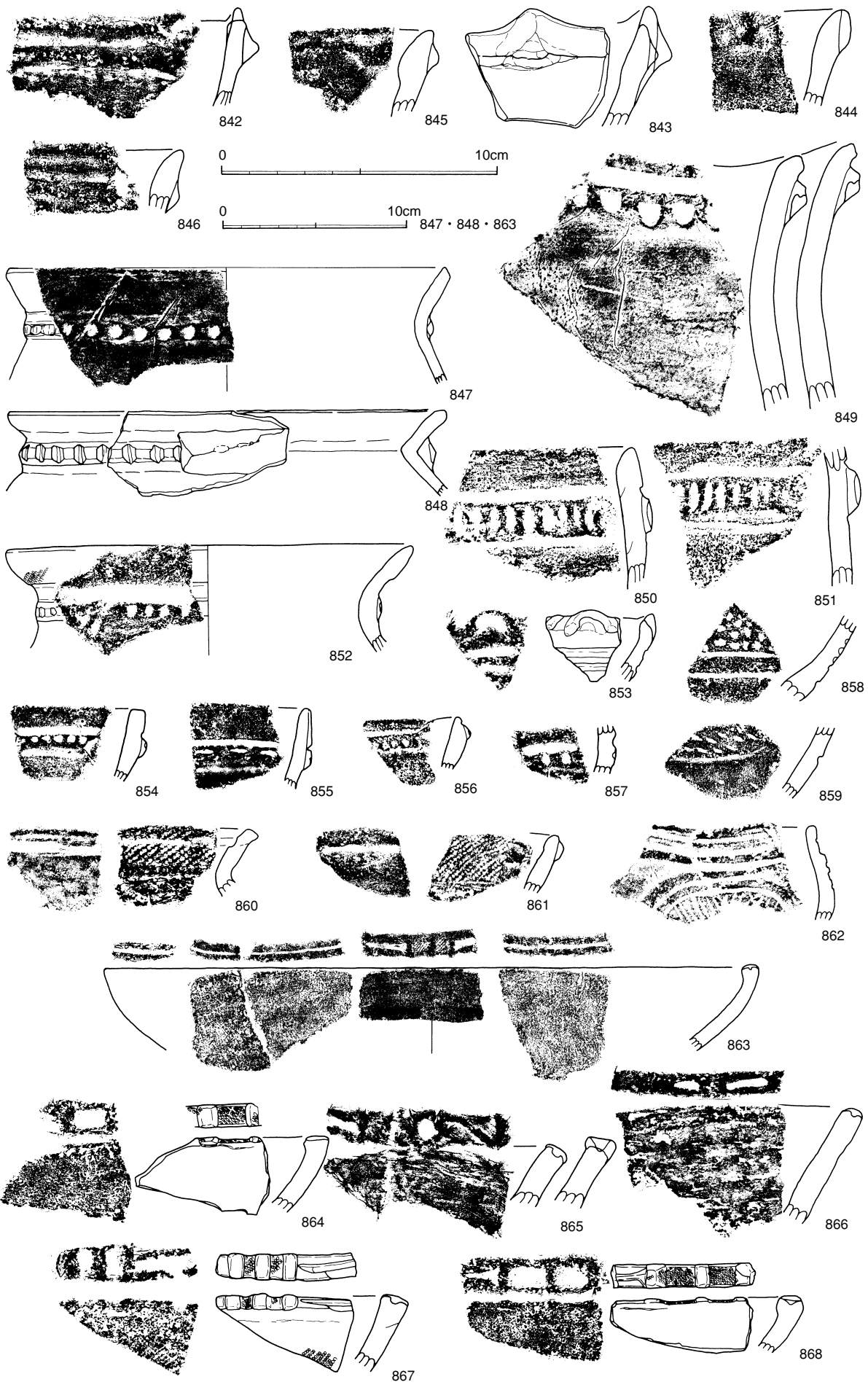


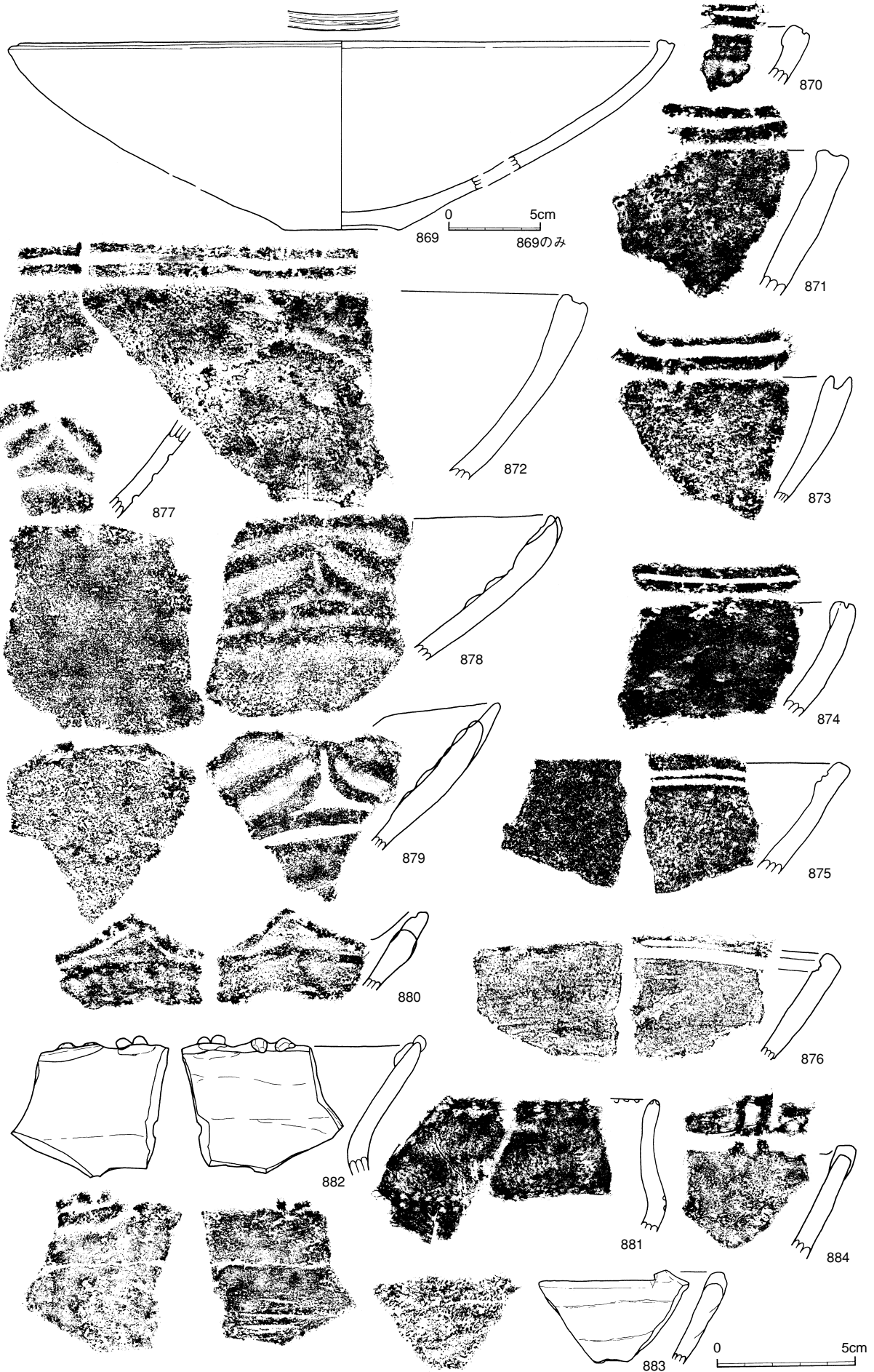
IV群 C'類a・D'類

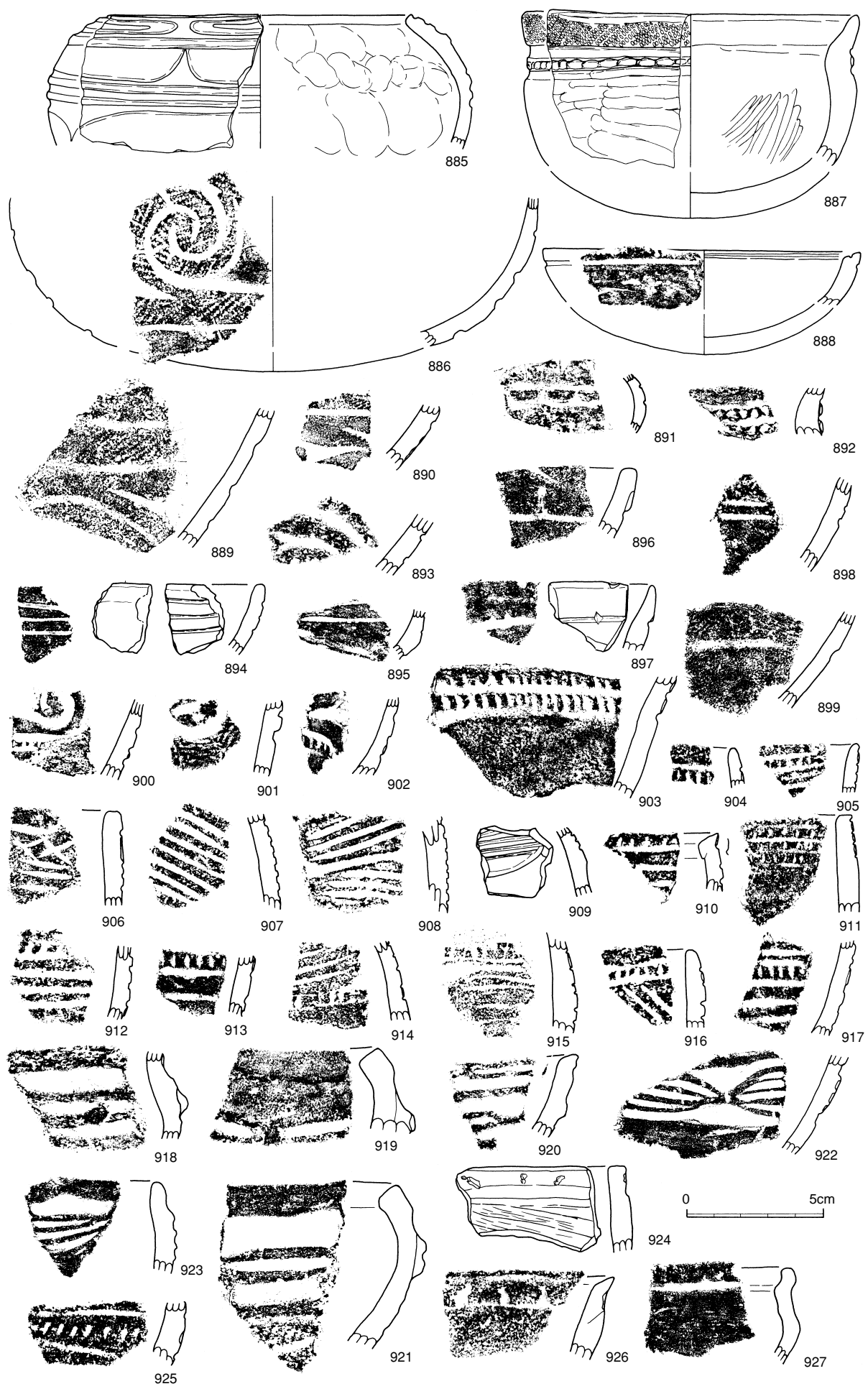


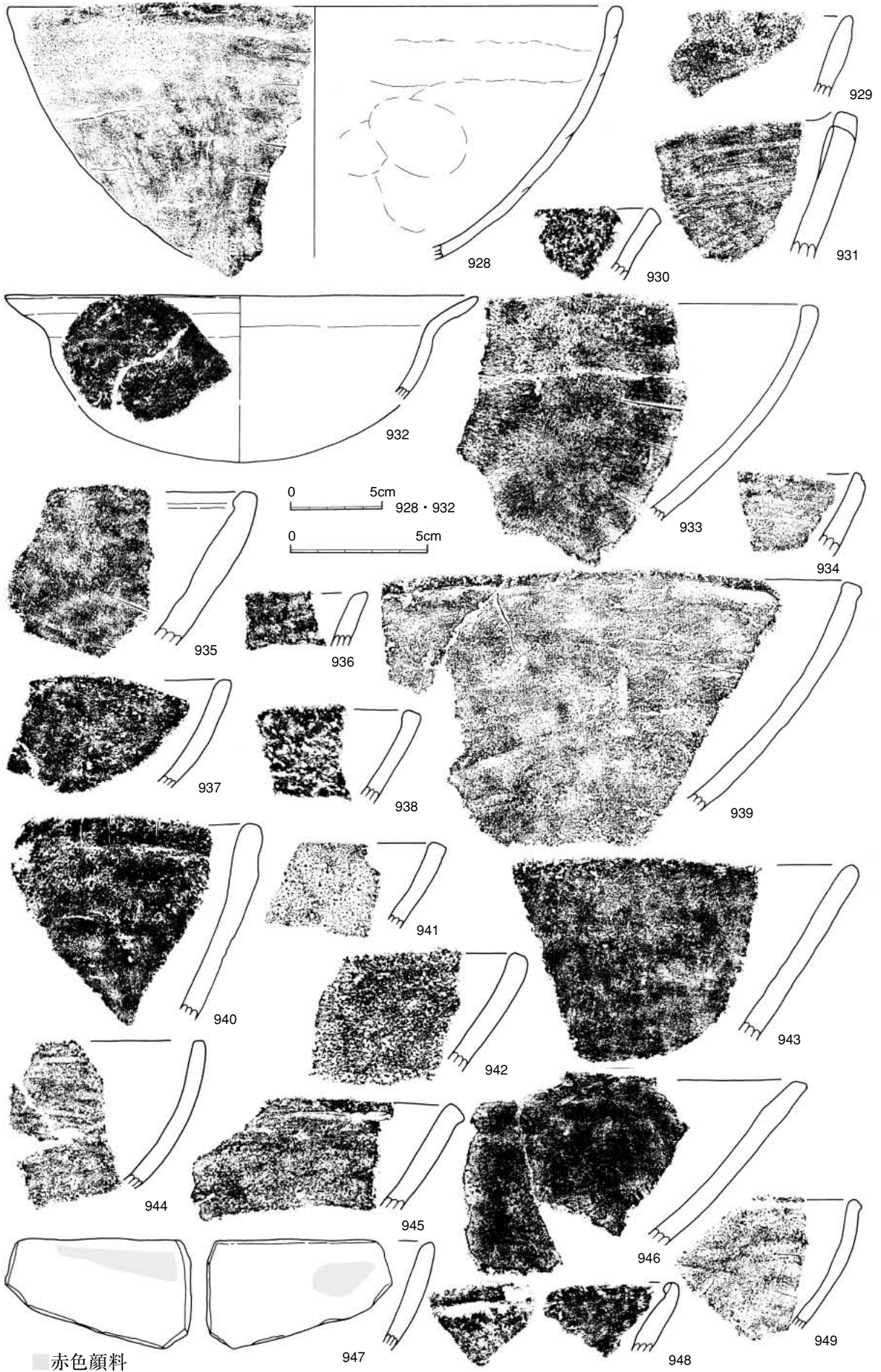


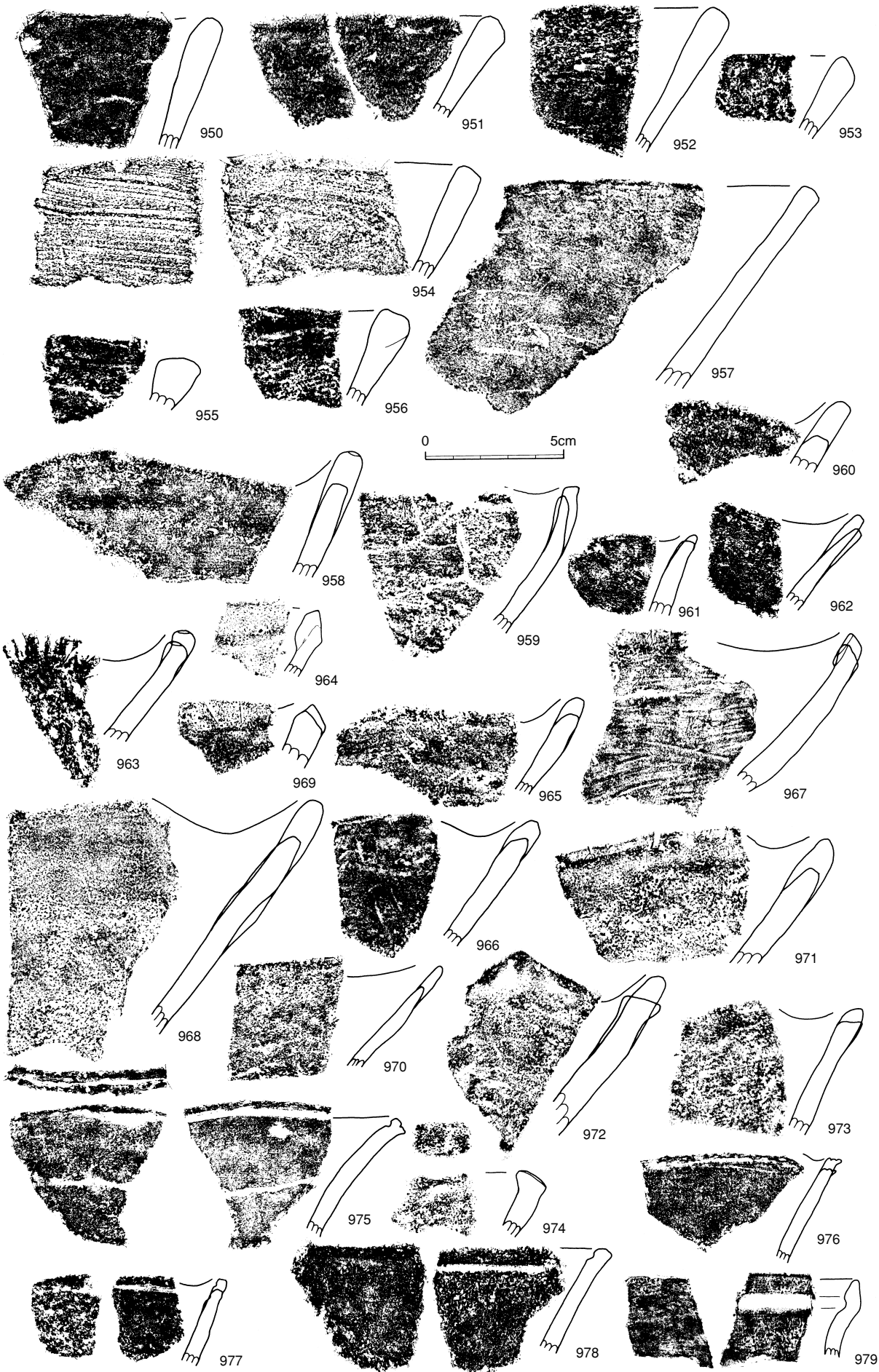


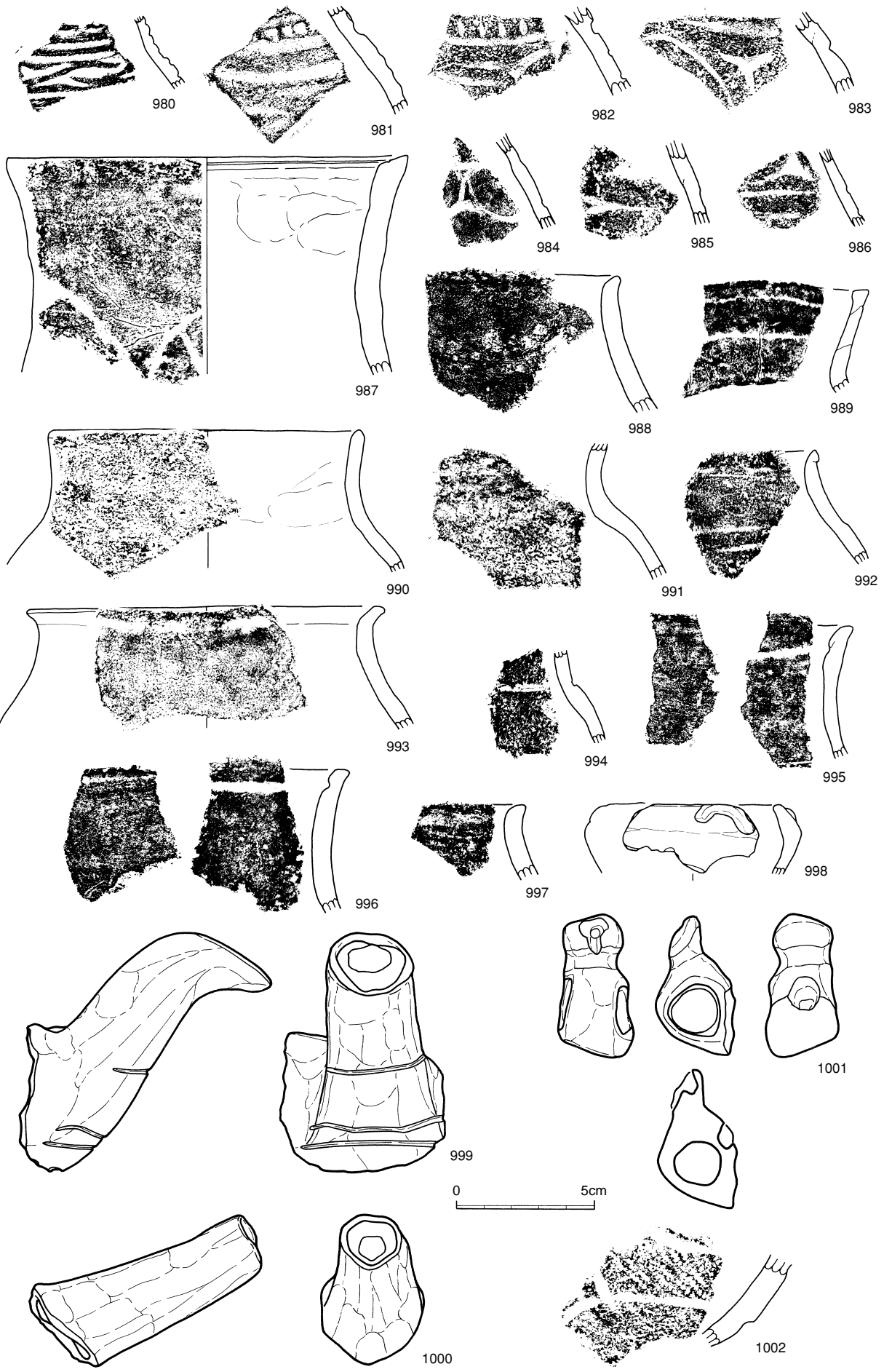


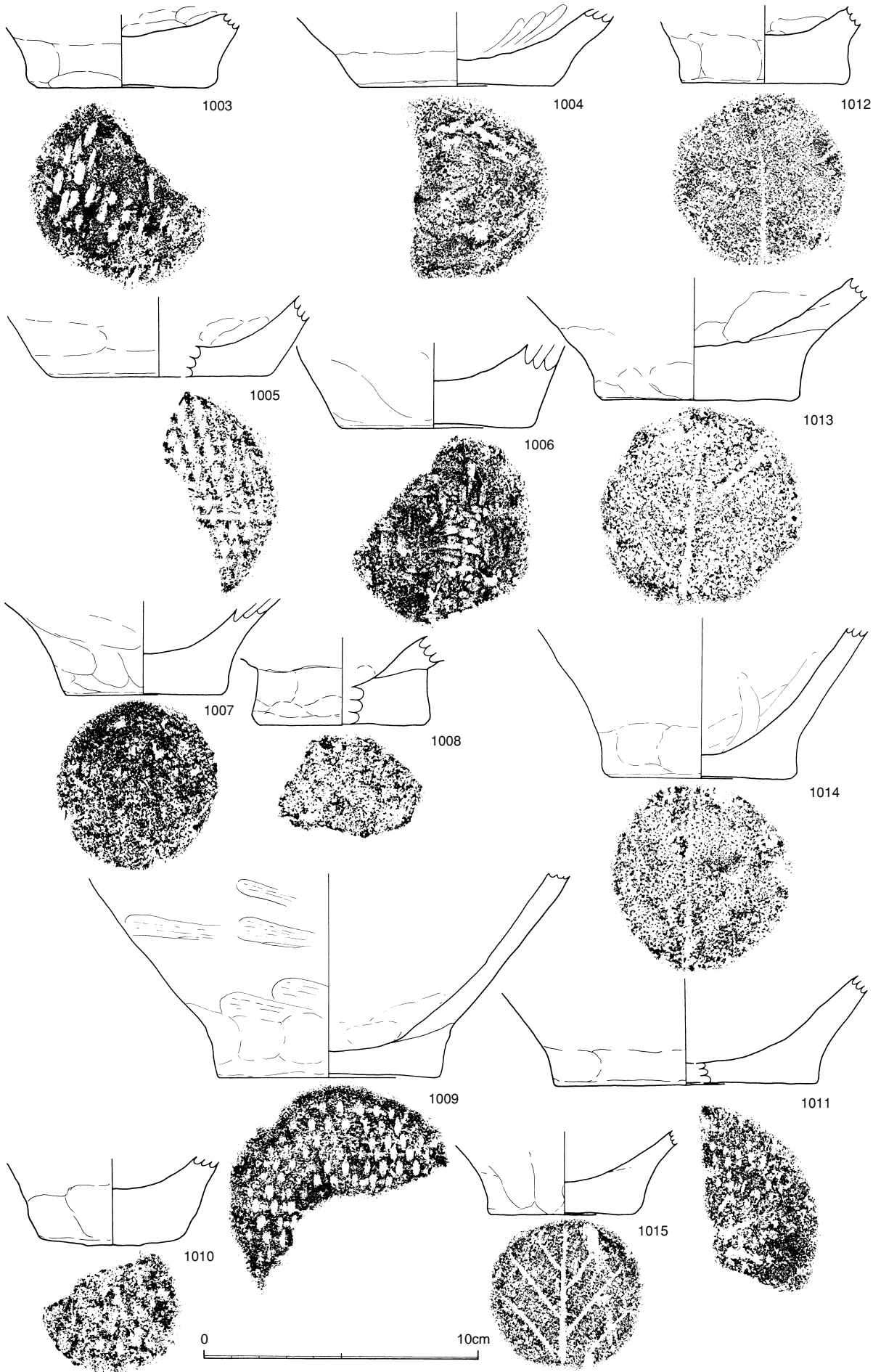


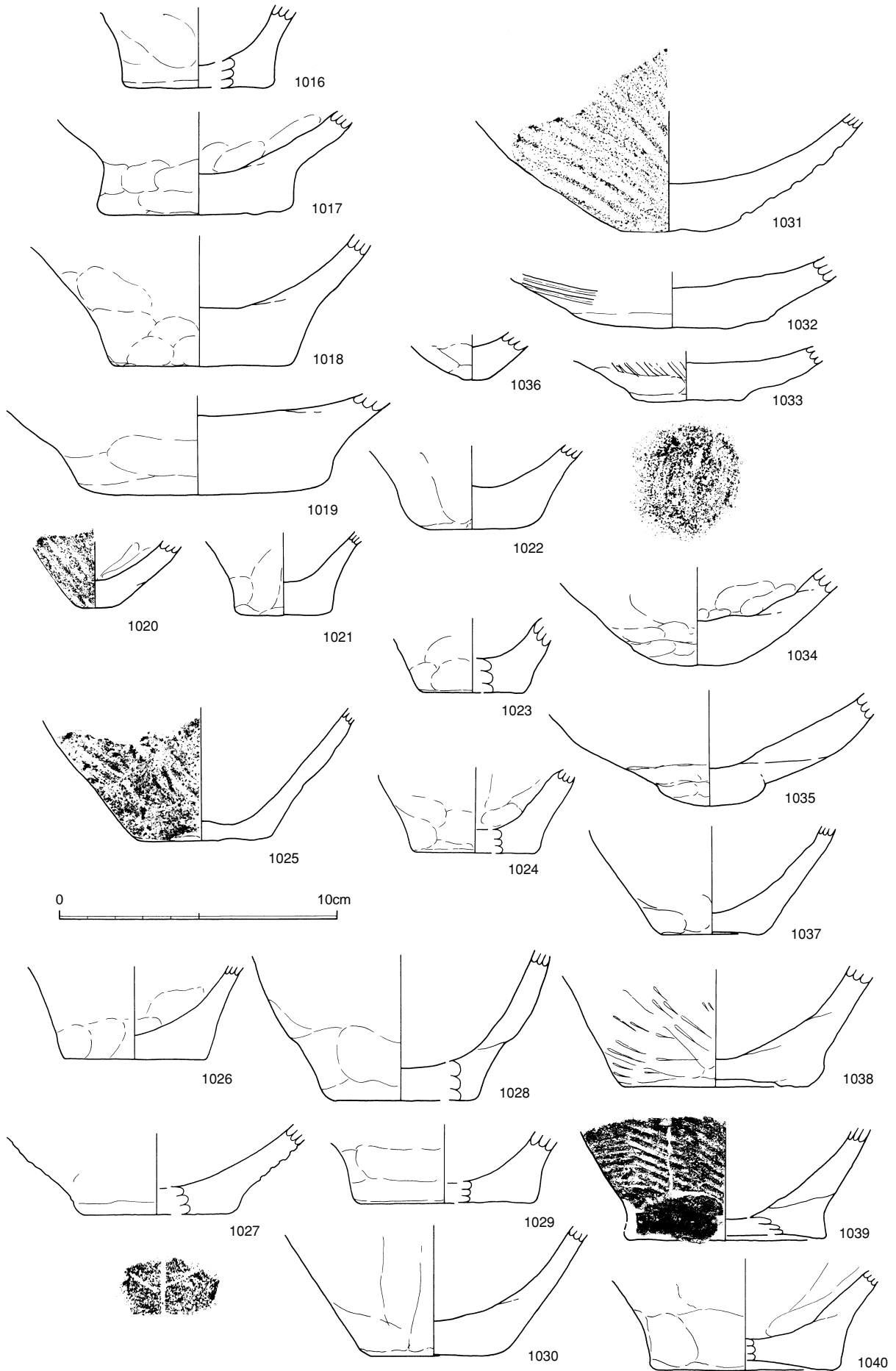


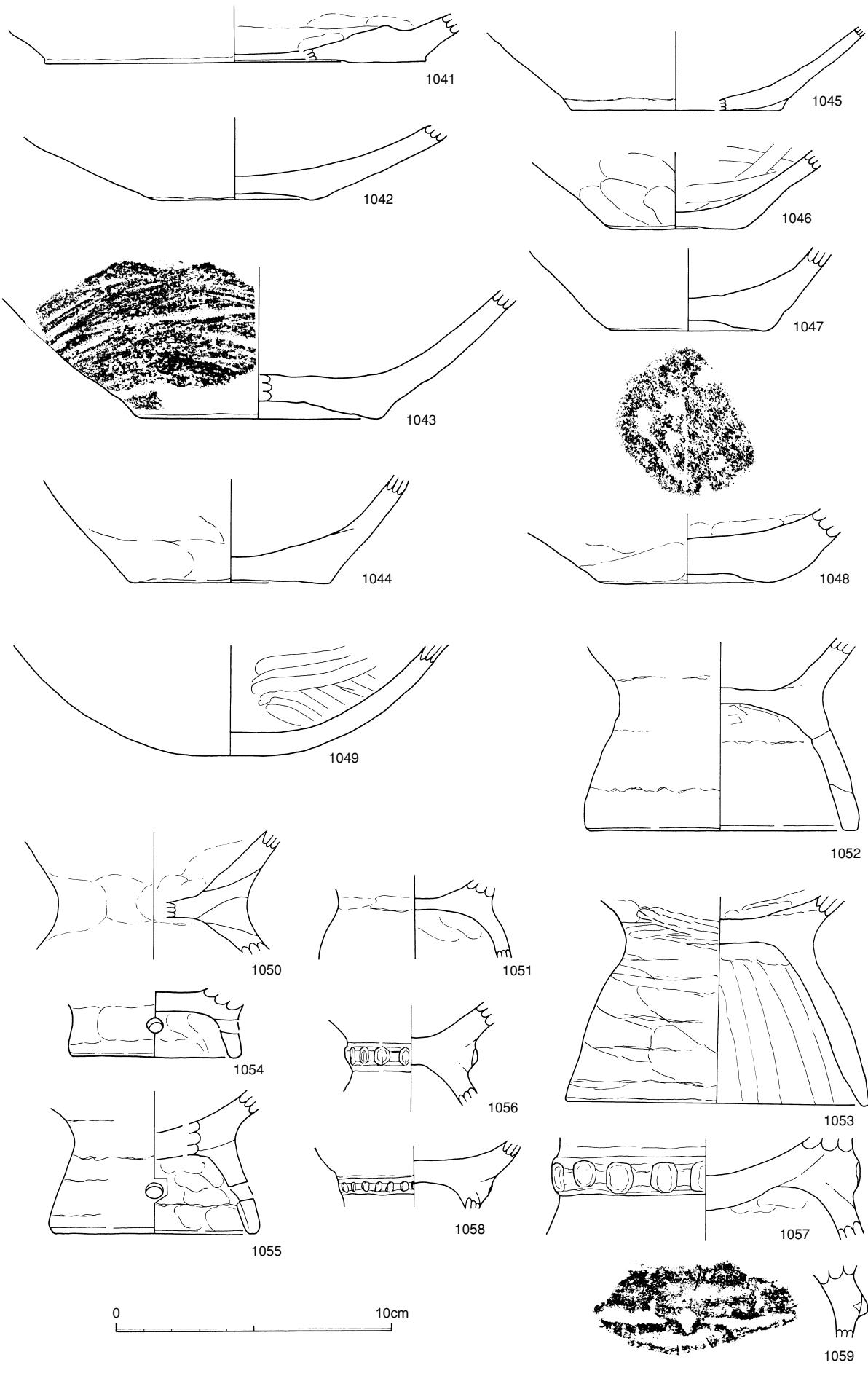


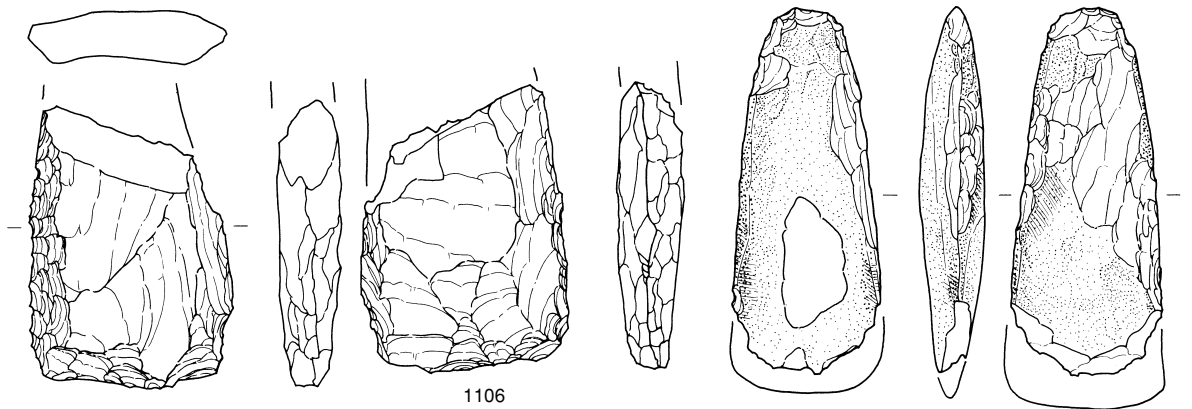






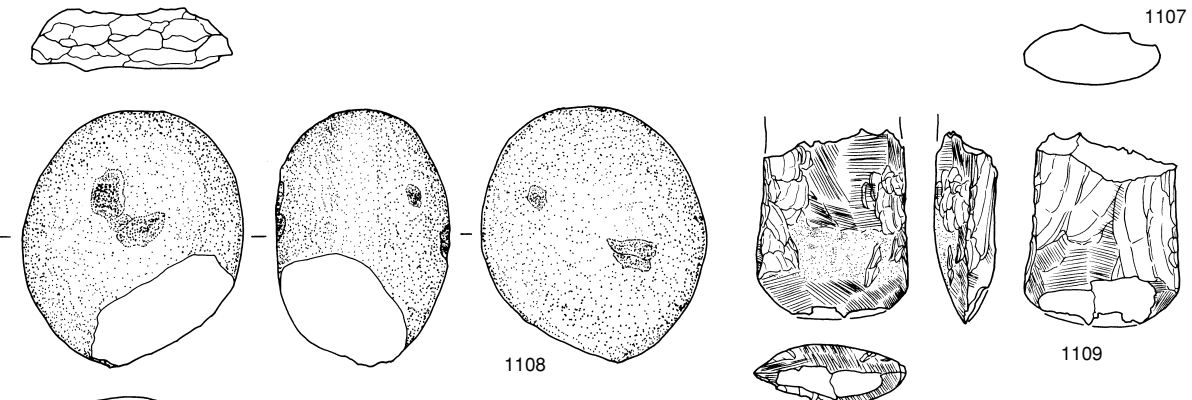






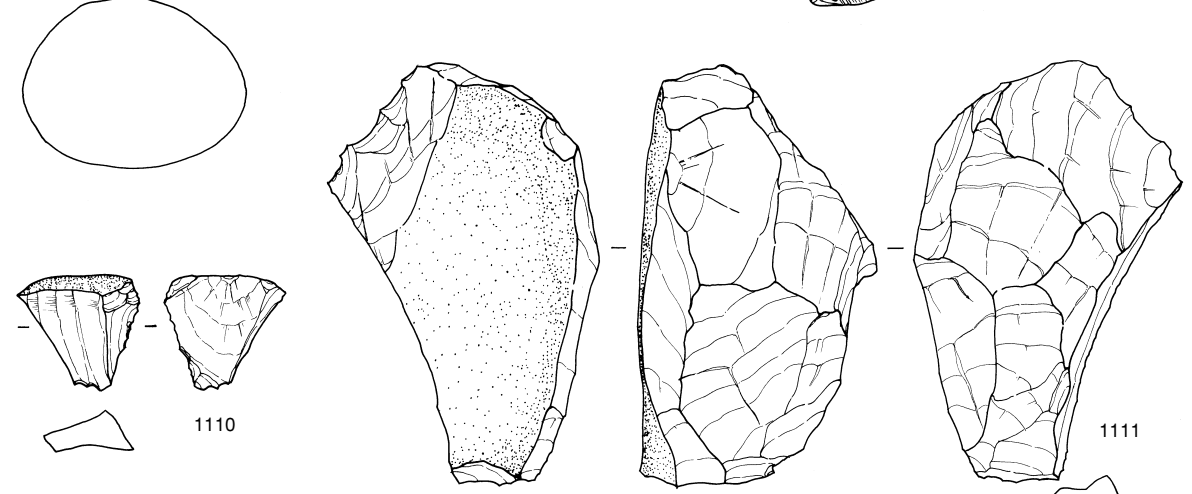
1106

1107



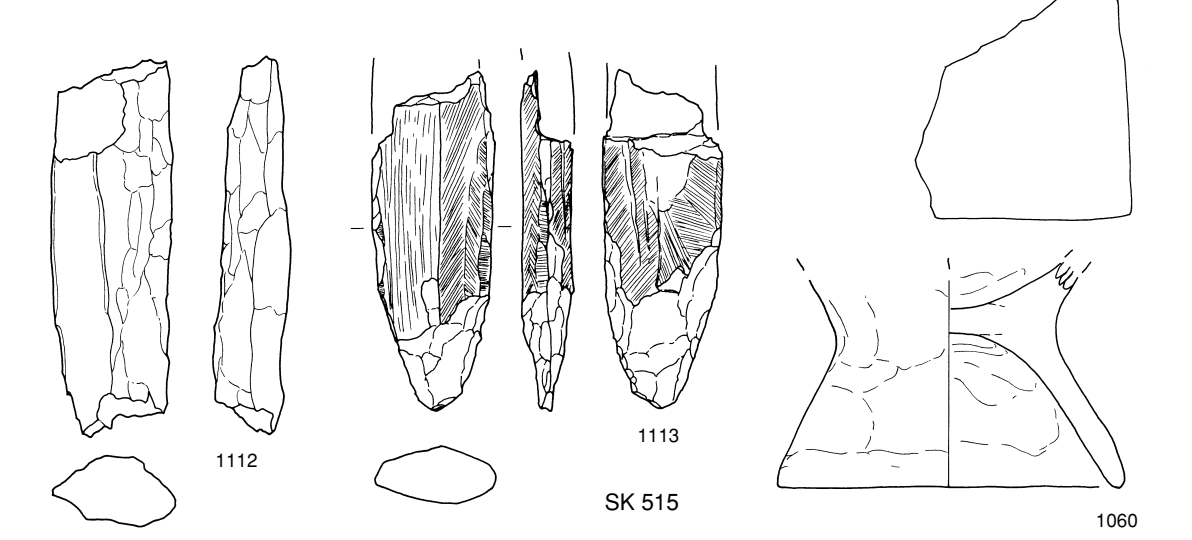
1108

1109



1110

1111



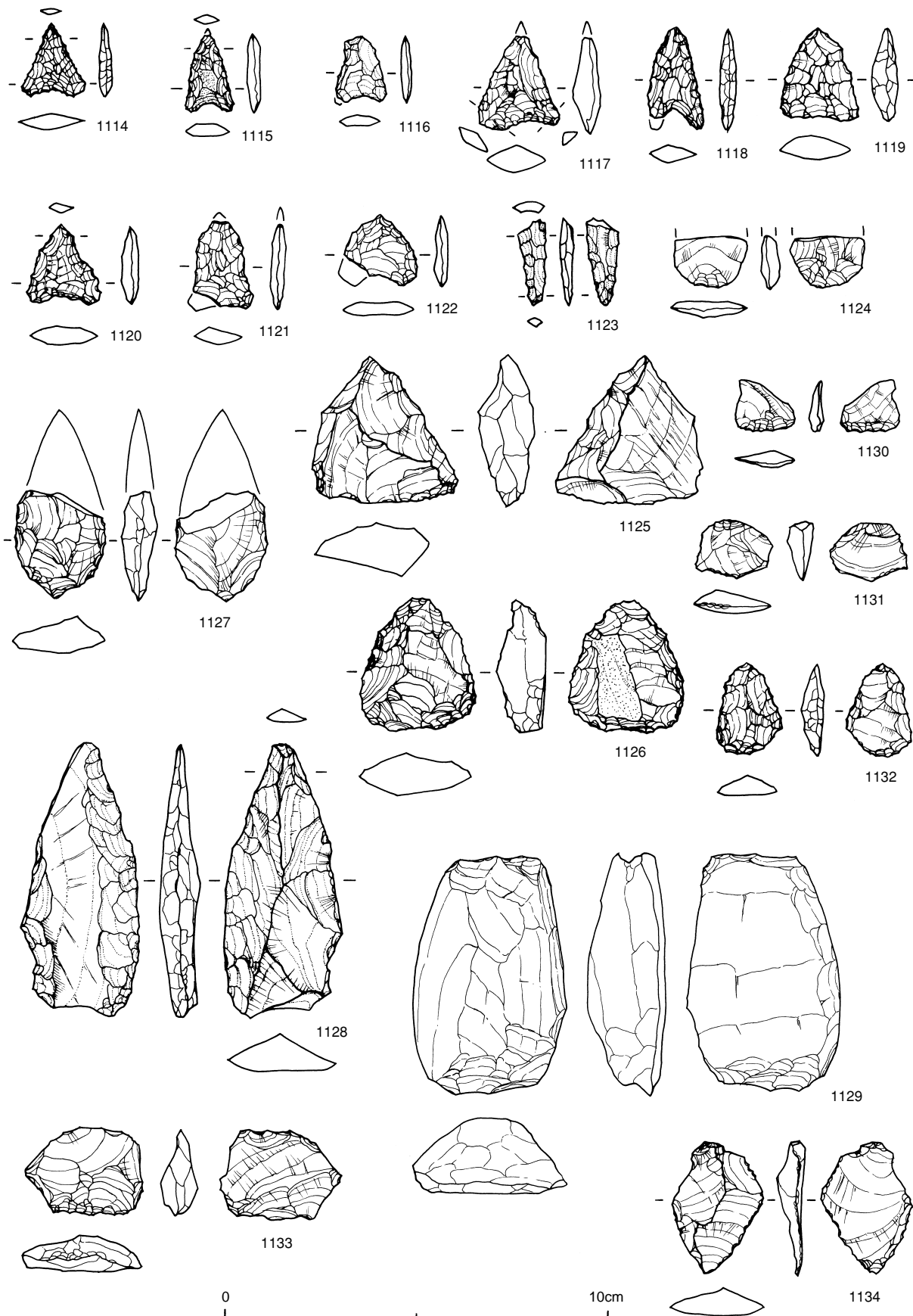
1112

1113

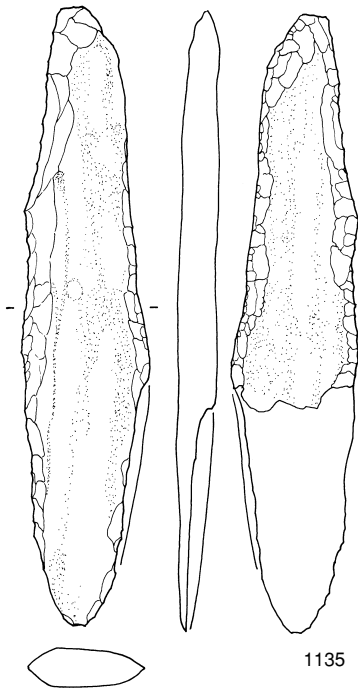
SK 515

1060

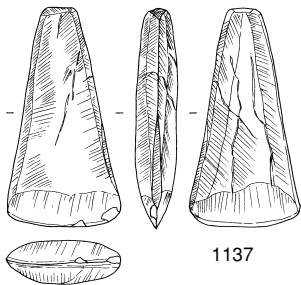
0 10cm



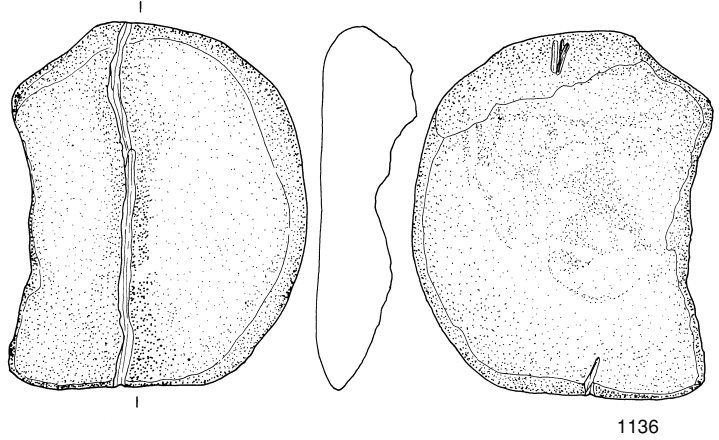
SB 04



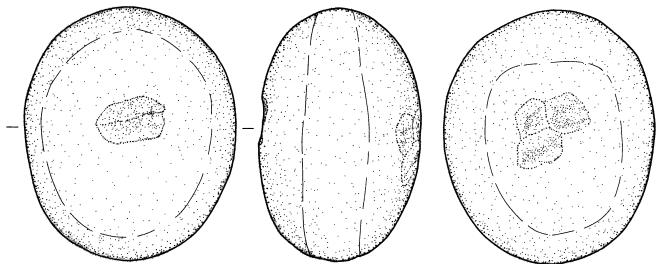
1135



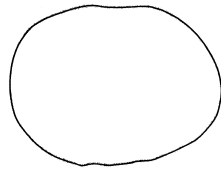
1137



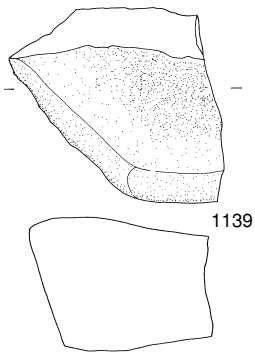
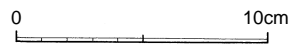
1136



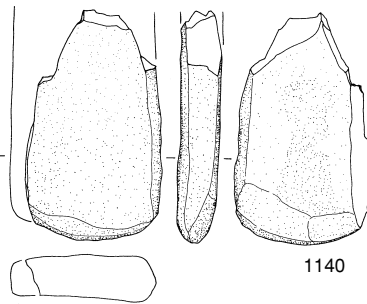
1138



SK 385

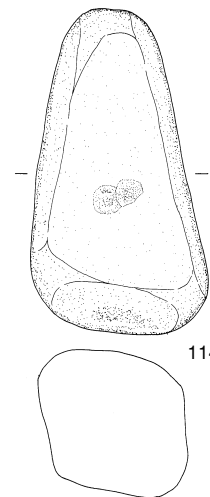


1139

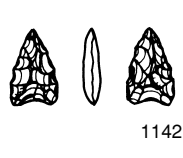


1140

SK 799



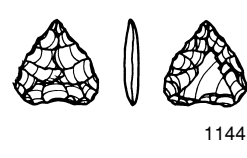
1141



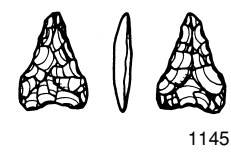
1142



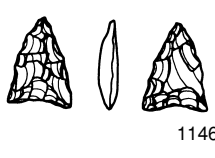
1143



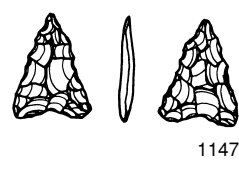
1144



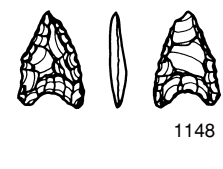
1145



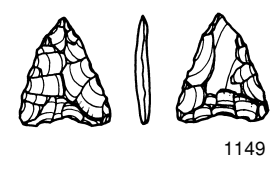
1146



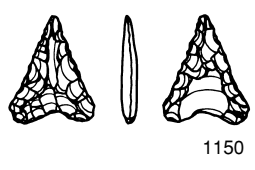
1147



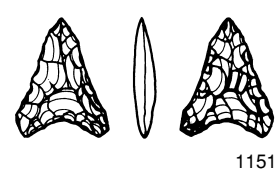
1148



1149



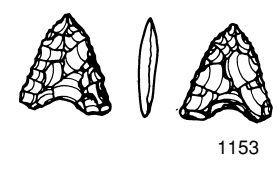
1150



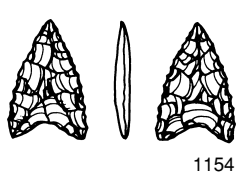
1151



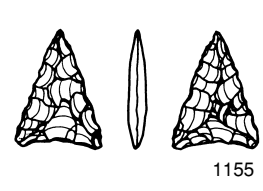
1152



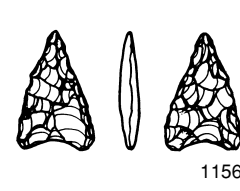
1153



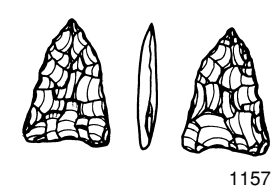
1154



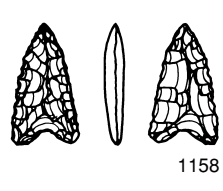
1155



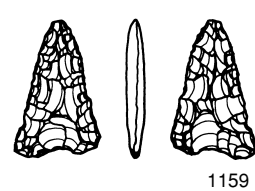
1156



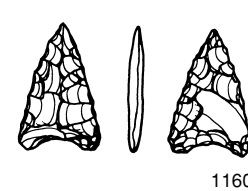
1157



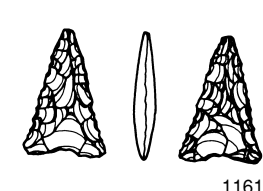
1158



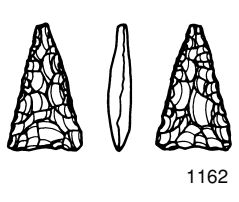
1159



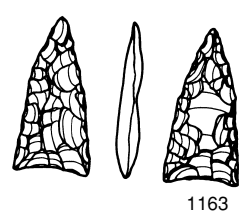
1160



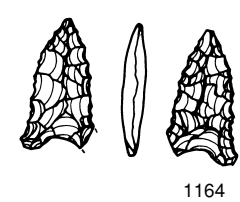
1161



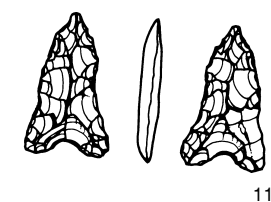
1162



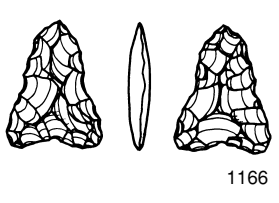
1163



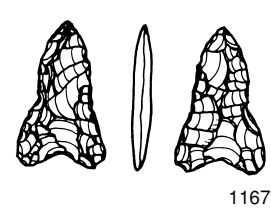
1164



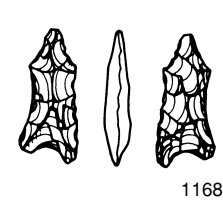
1165



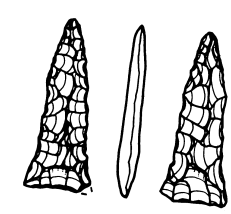
1166



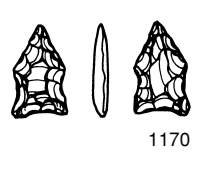
1167



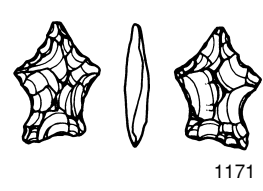
1168



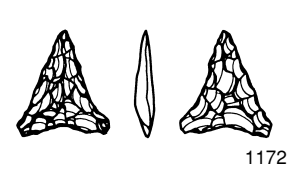
1169



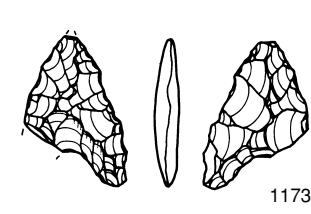
1170



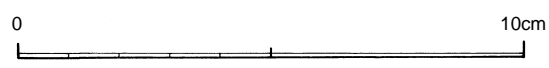
1171

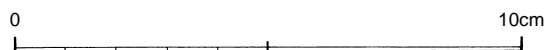
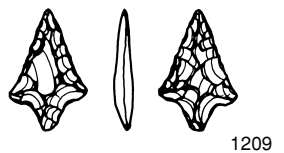
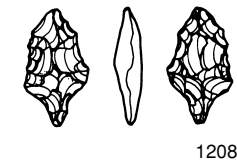
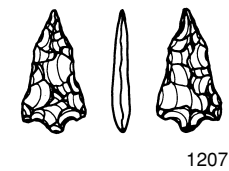
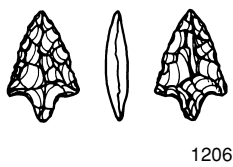
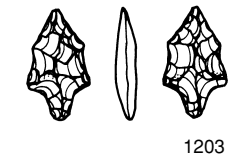
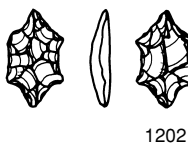
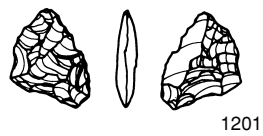
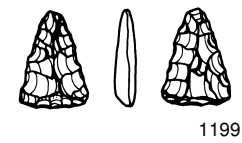
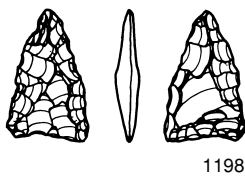
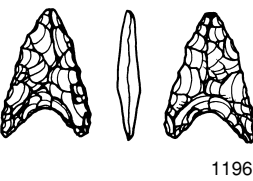
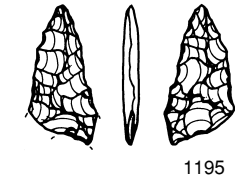
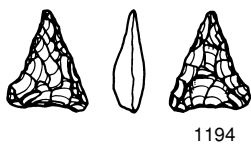
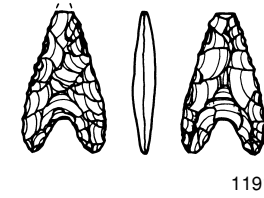
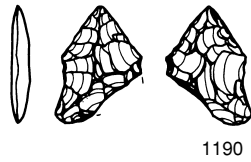
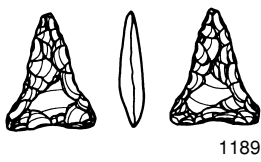
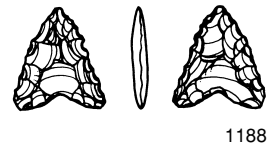
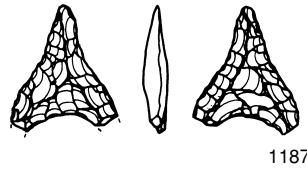
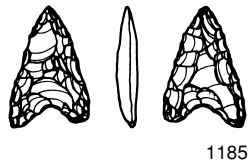
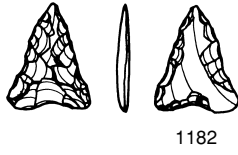
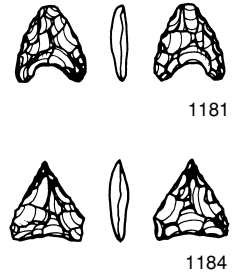
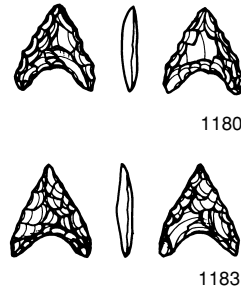
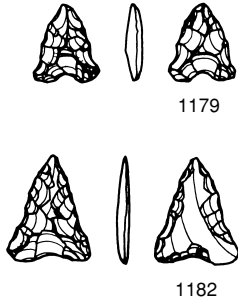
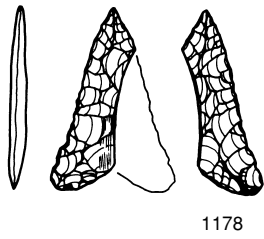
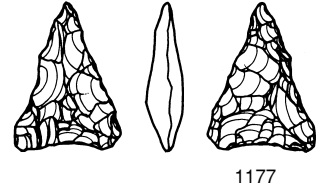
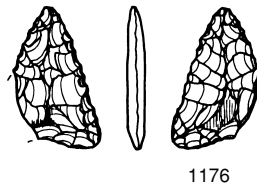
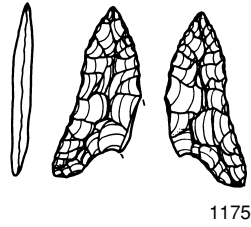
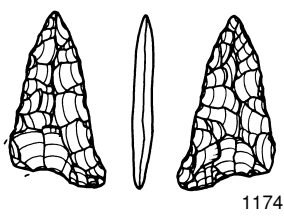


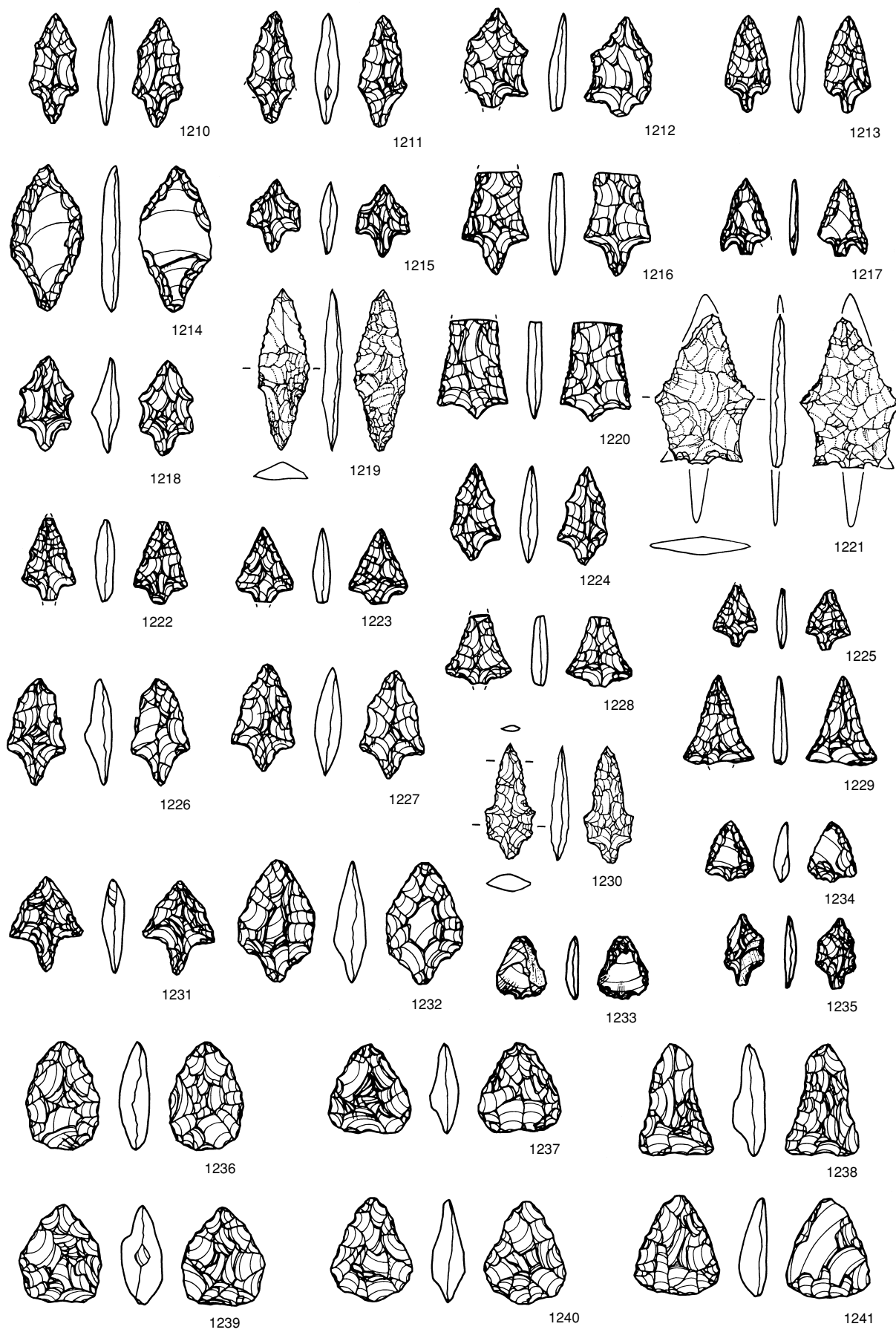
1172



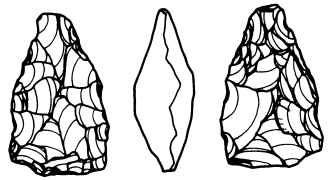
1173



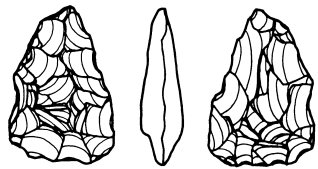




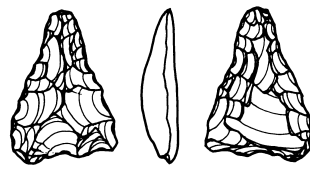
0 10cm



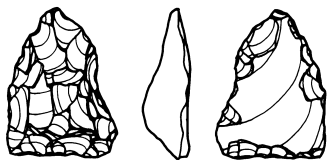
1242



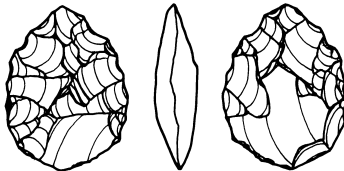
1243



1244



1245



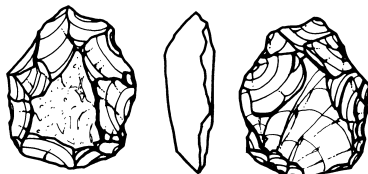
1246



1247



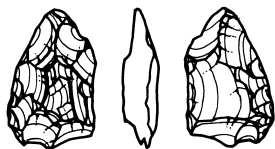
1248



1249



1250



1251



1252



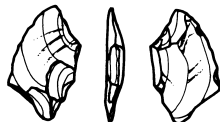
1253



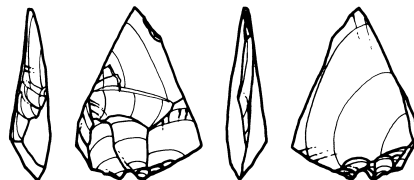
1254



1255



1256



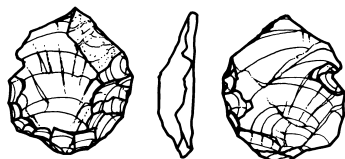
1265



1257



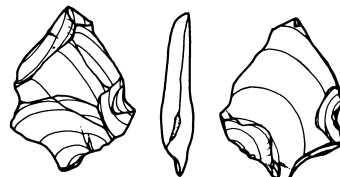
1258



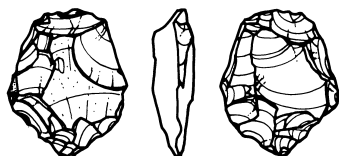
1259



1260



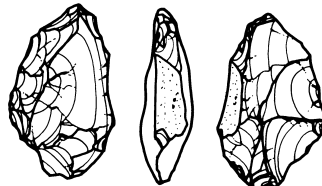
1261



1262

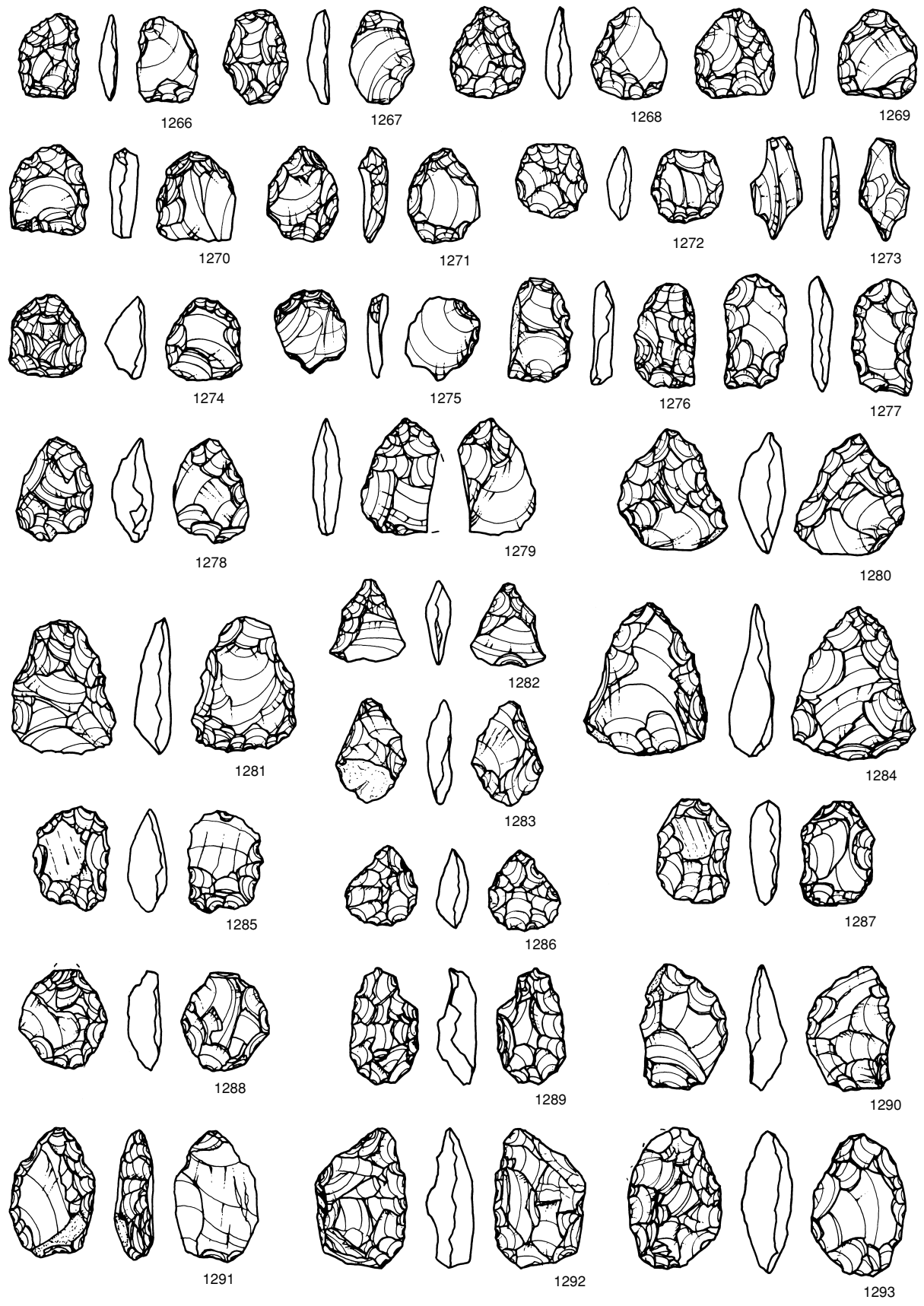


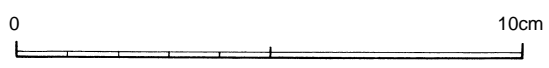
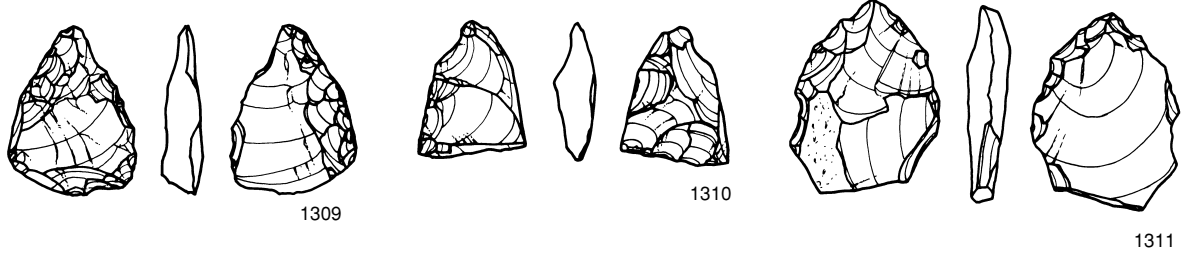
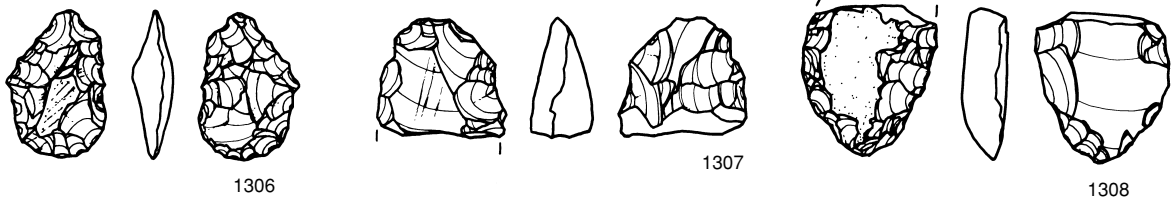
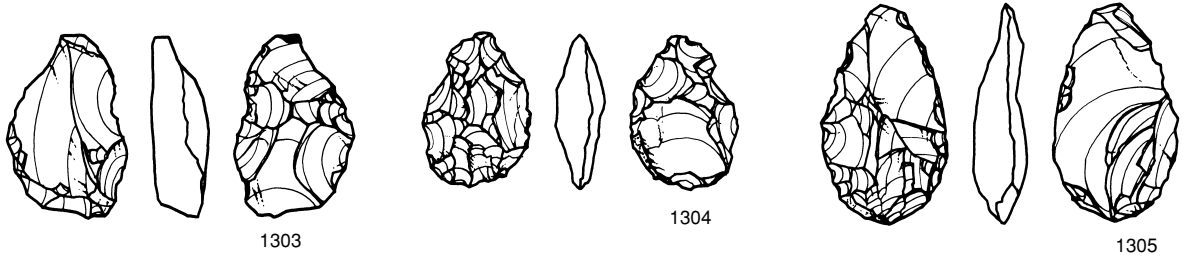
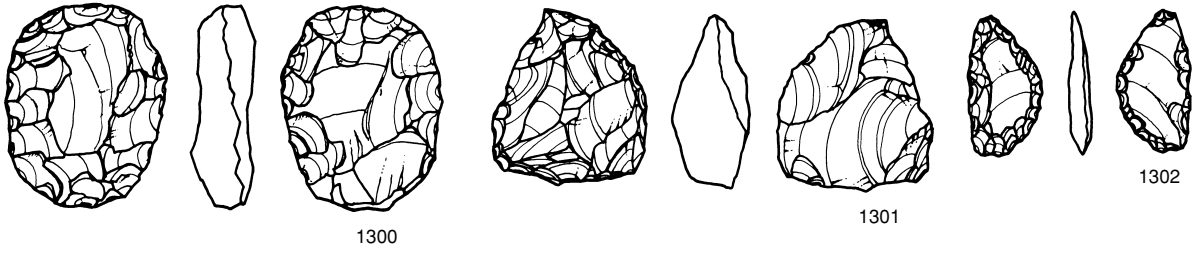
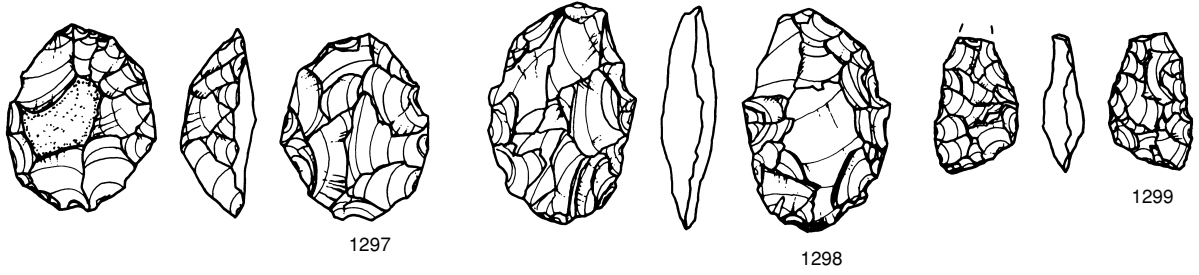
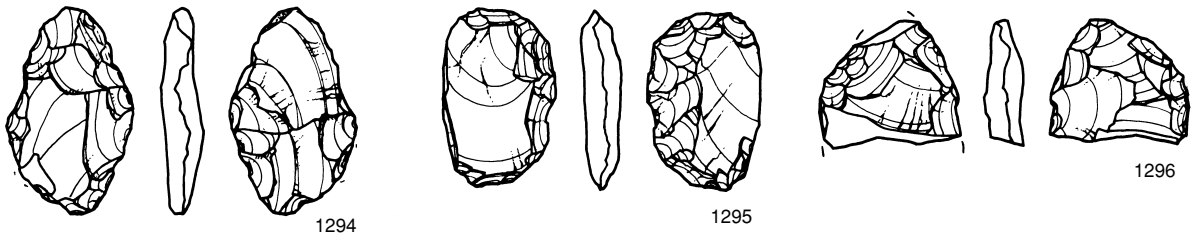
1263

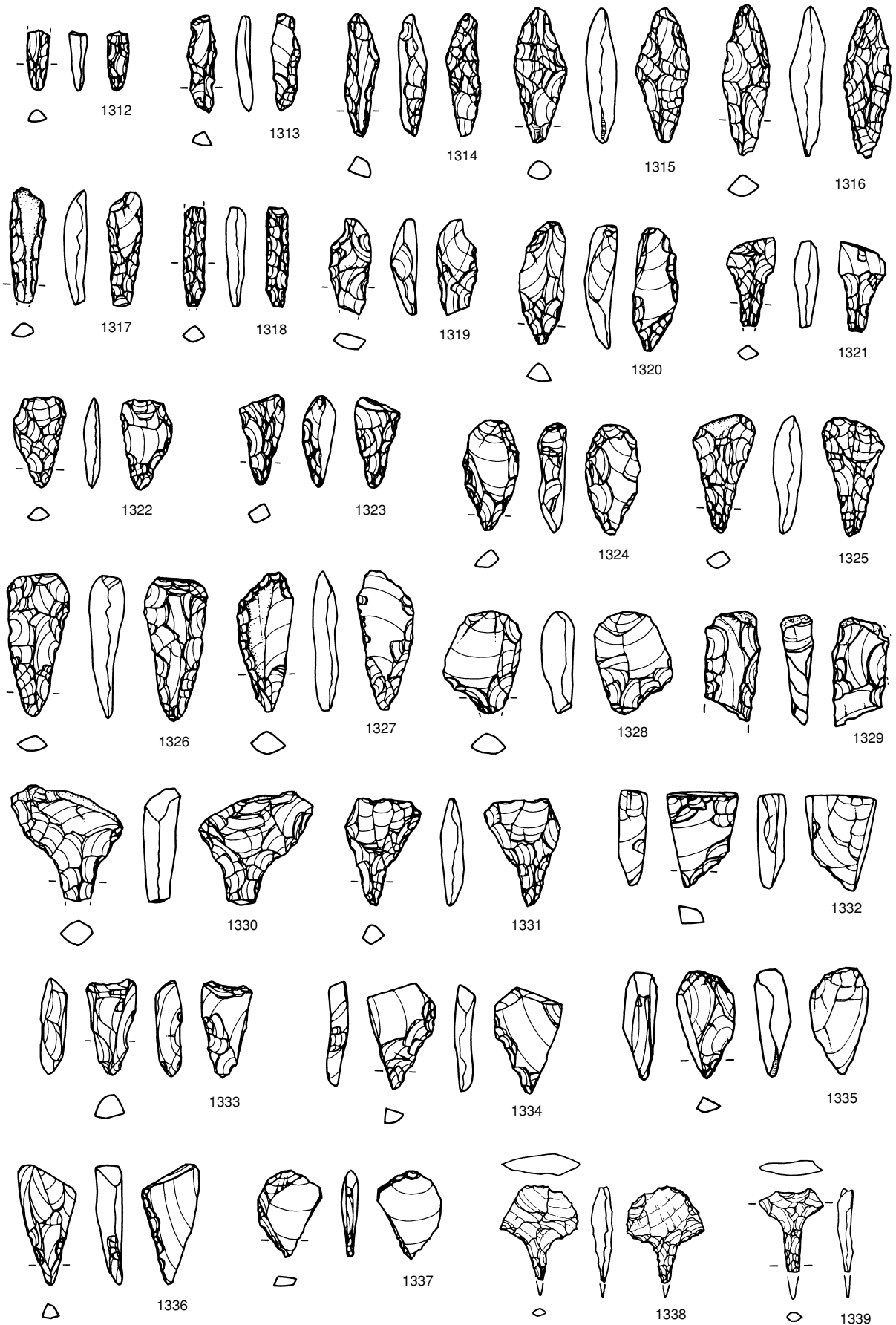


1264

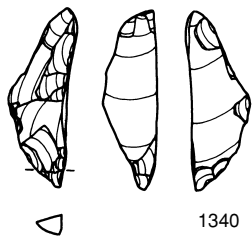




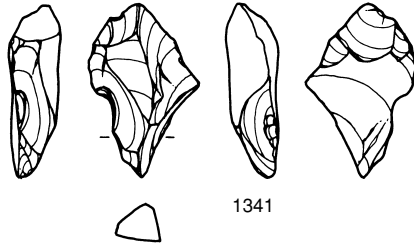




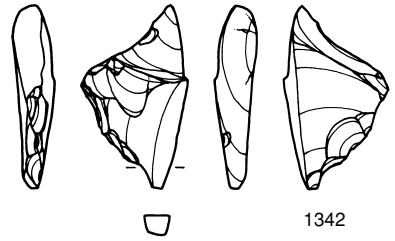
0 10cm



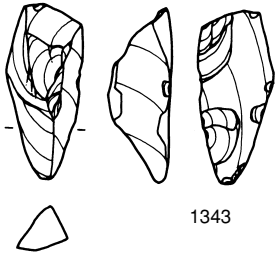
1340



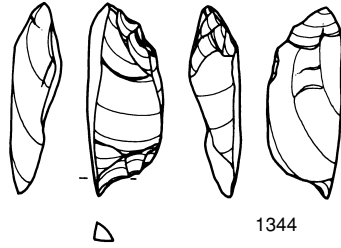
1341



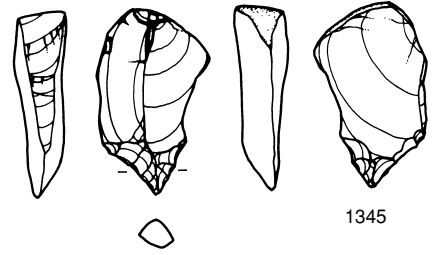
1342



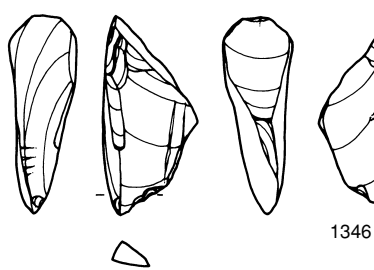
1343



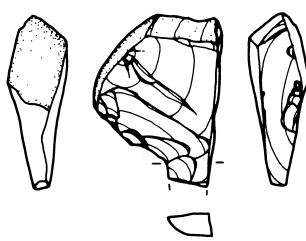
1344



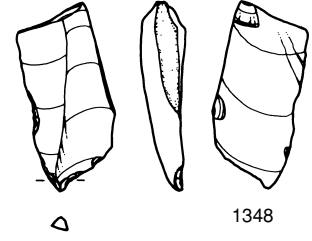
1345



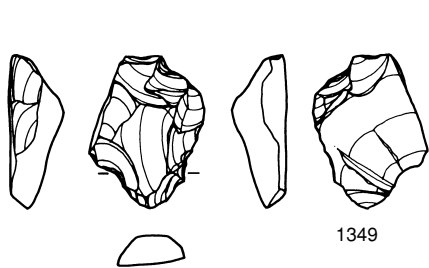
1346



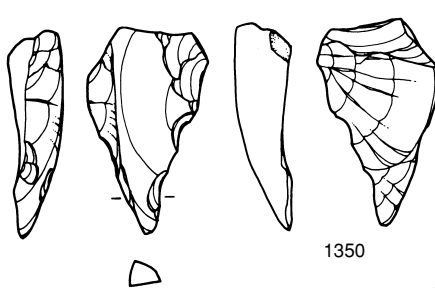
1347



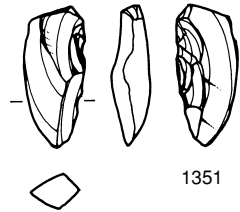
1348



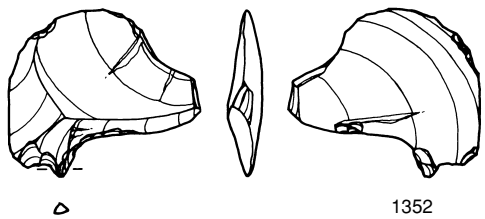
1349



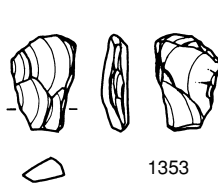
1350



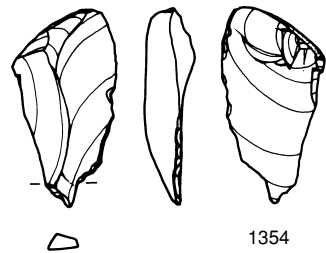
1351



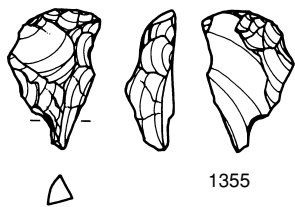
1352



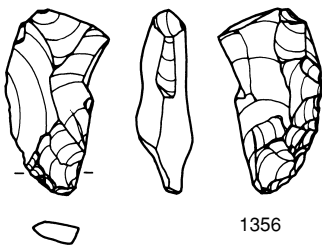
1353



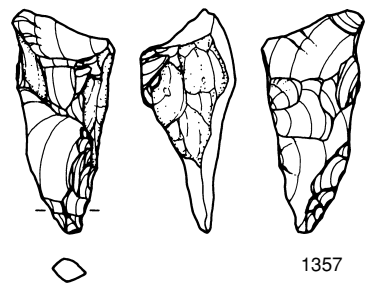
1354



1355

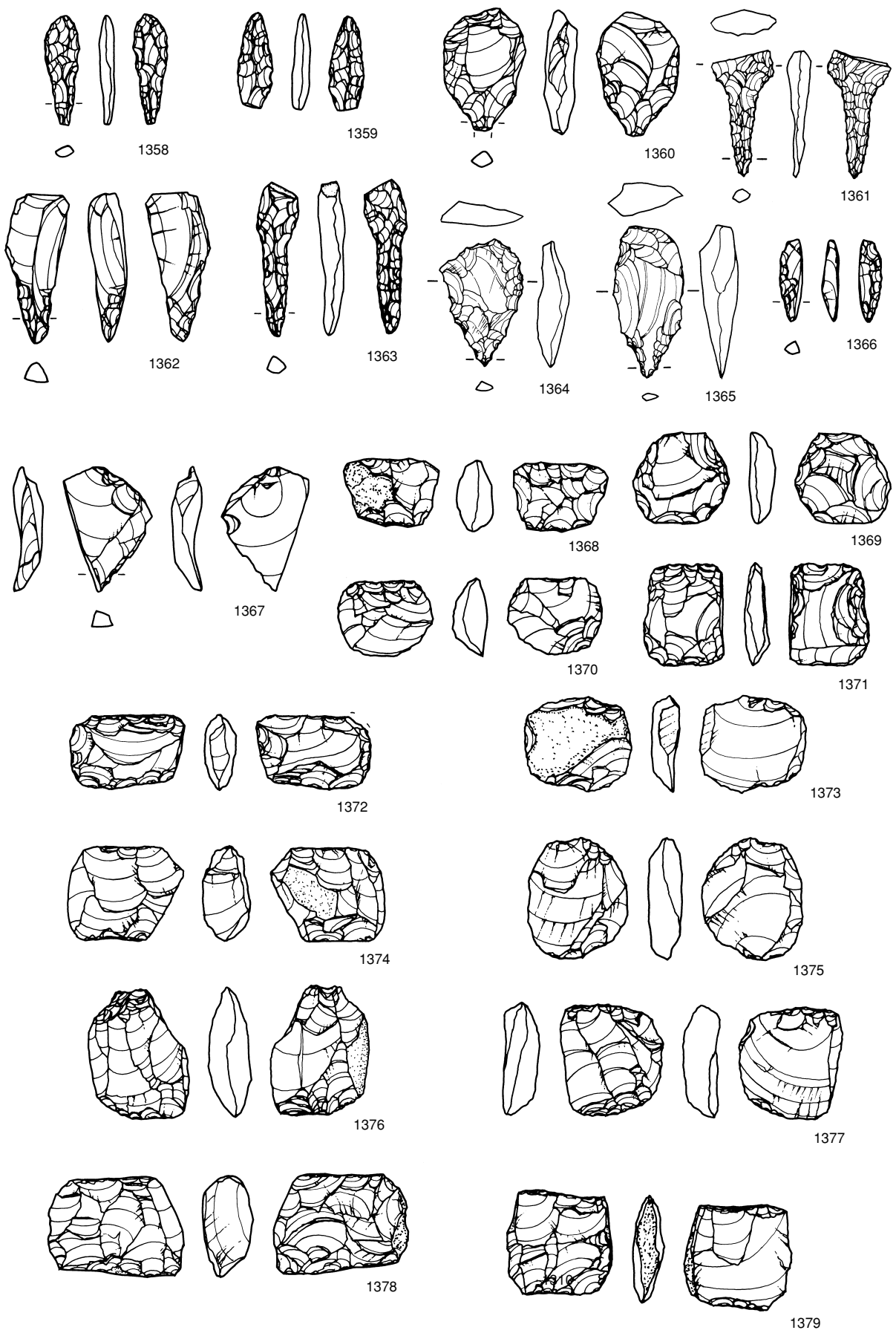


1356

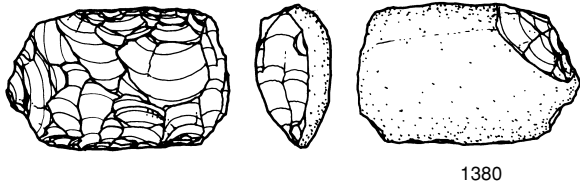


1357

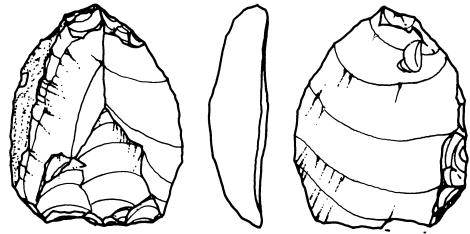




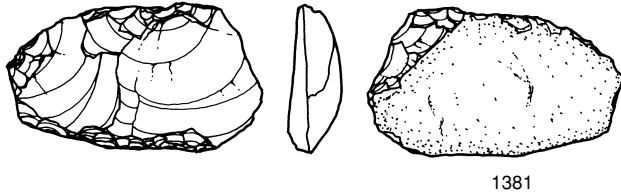
0 10cm



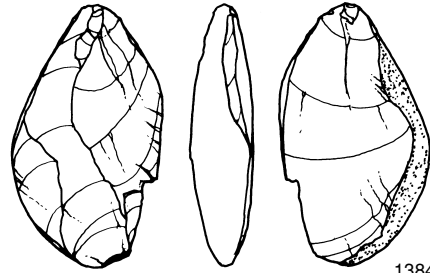
1380



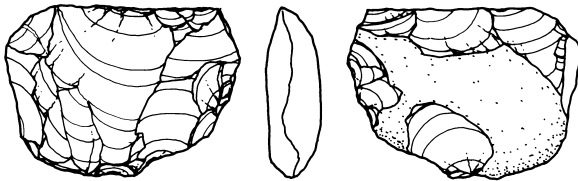
1383



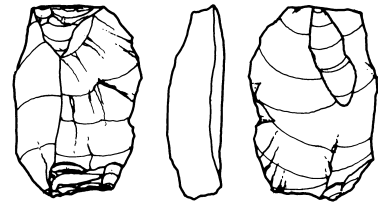
1381



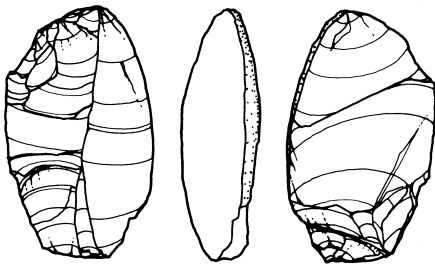
1384



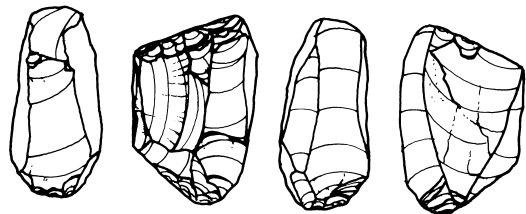
1382



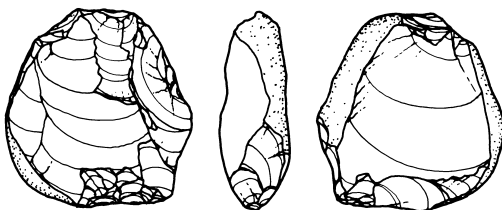
1385



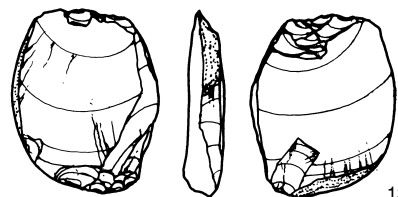
1386



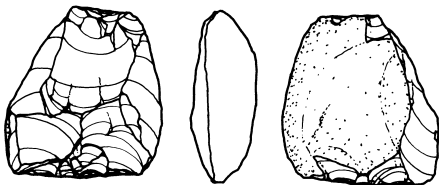
1387



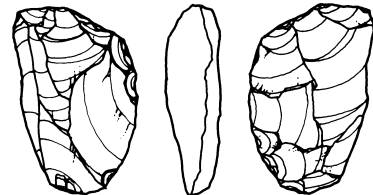
1388



1389



1390



1391

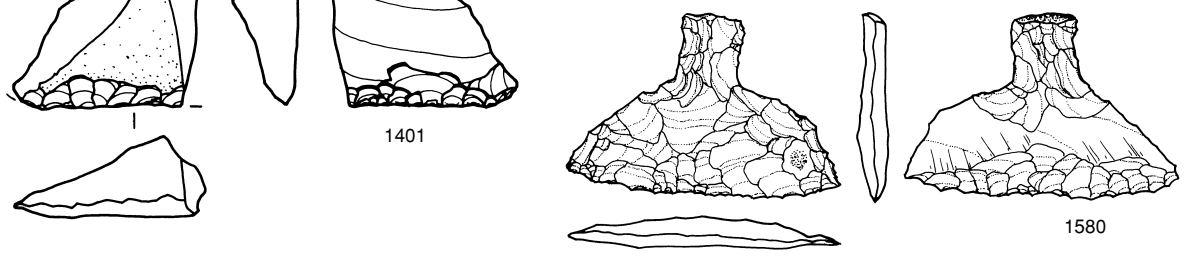
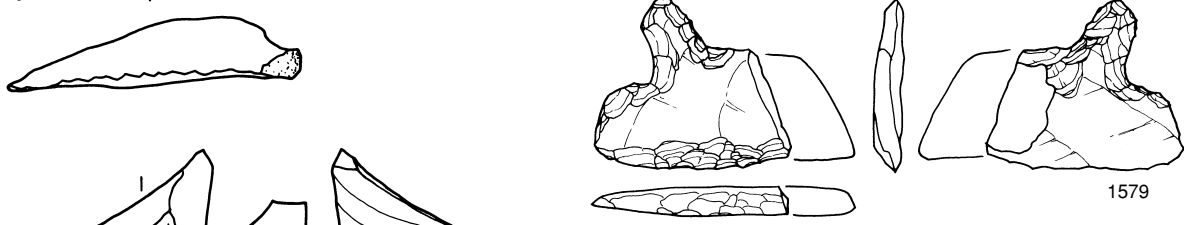
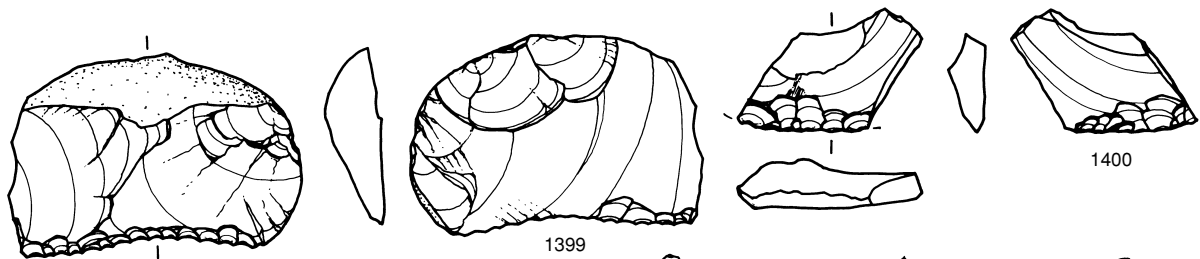
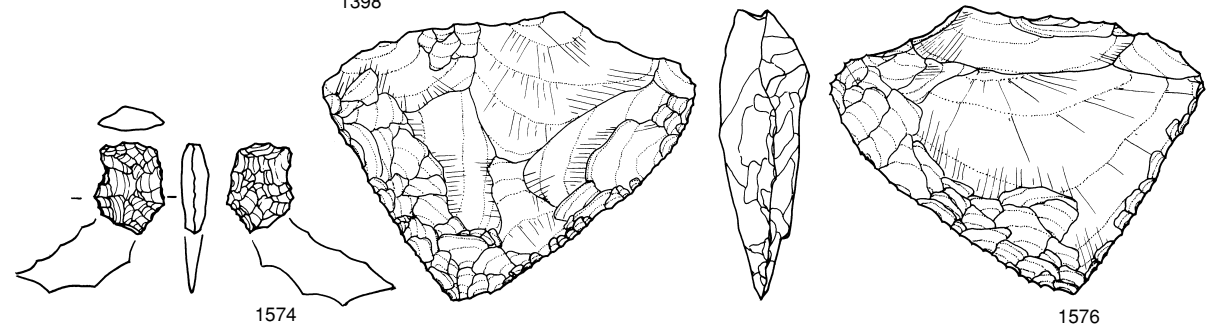
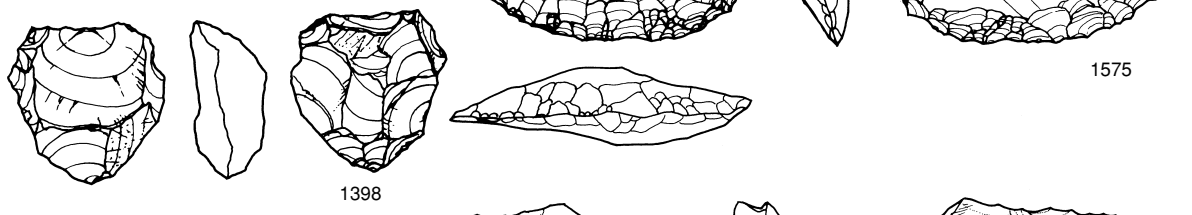
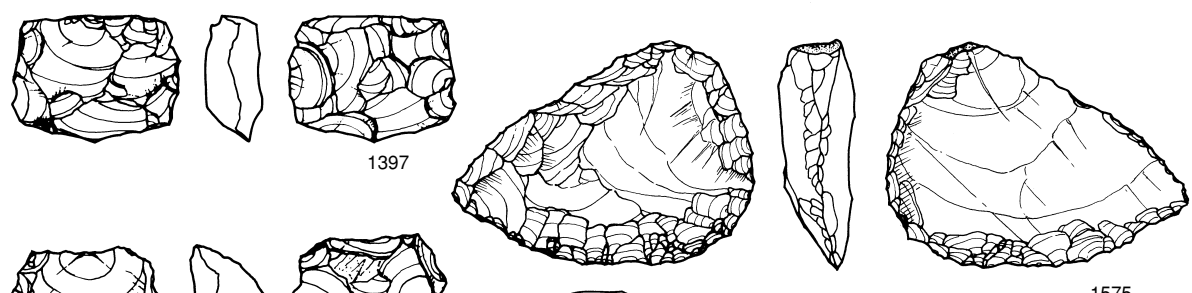
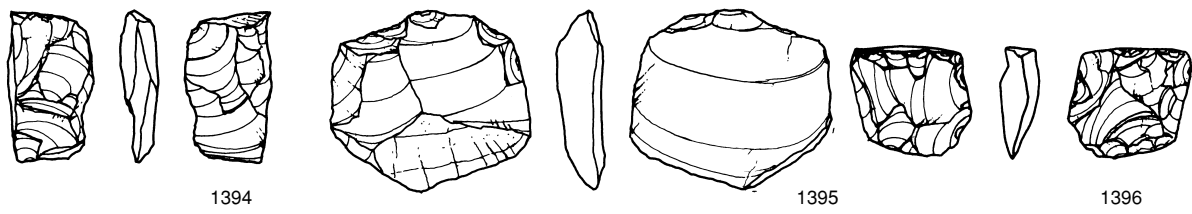


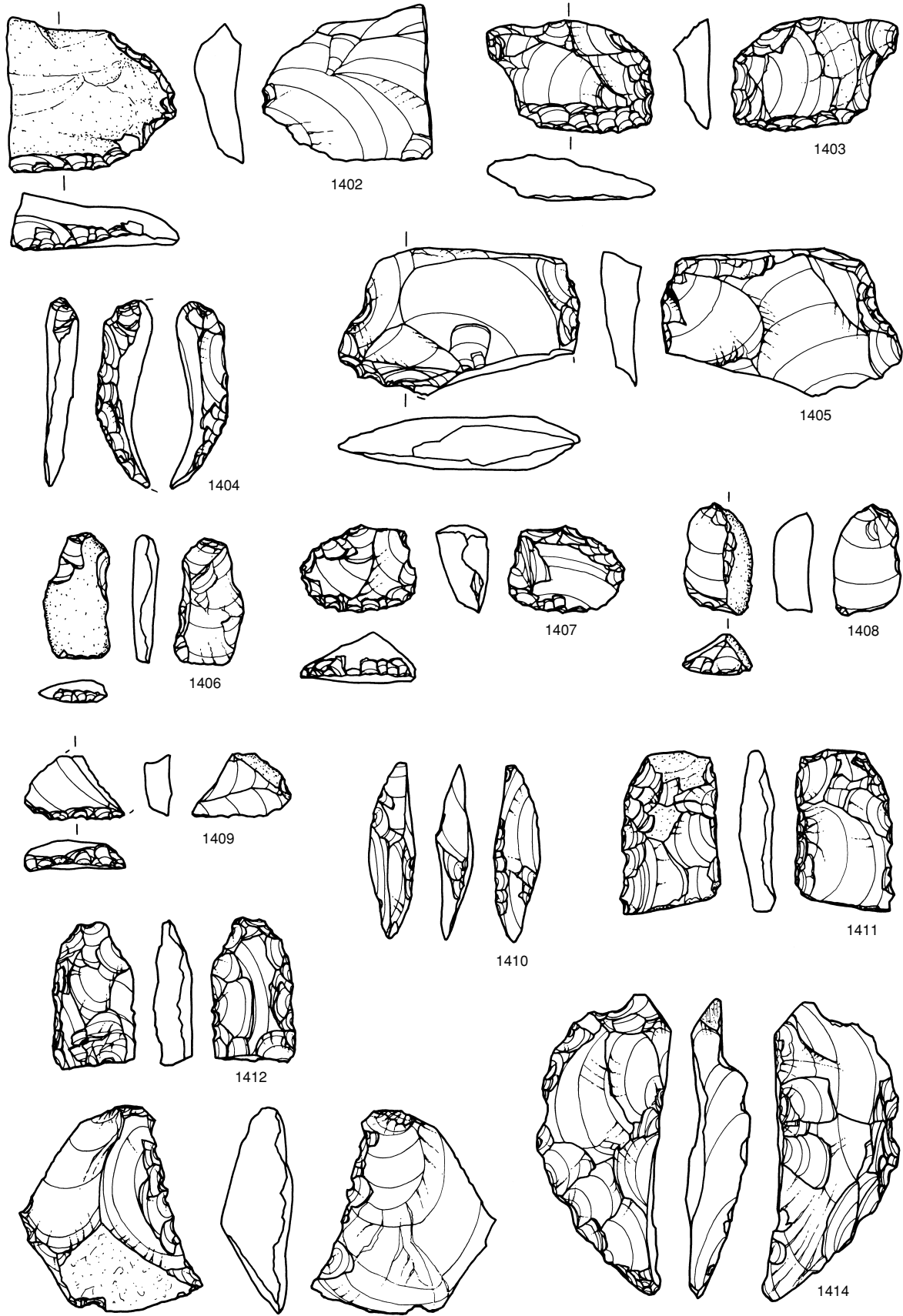
1392

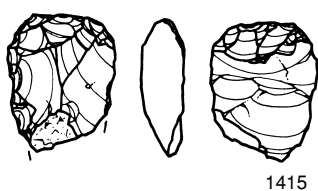


1393

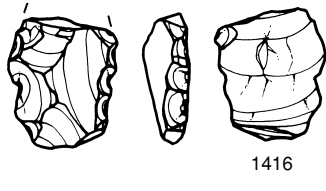




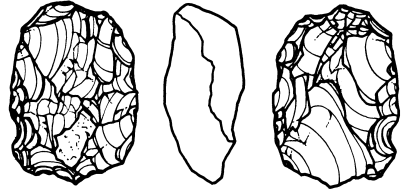




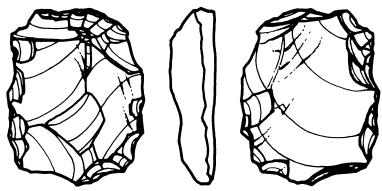
1415



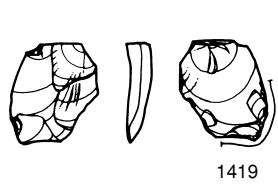
1416



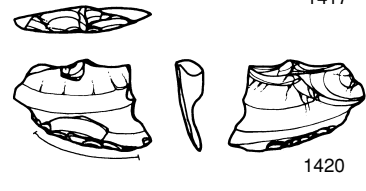
1417



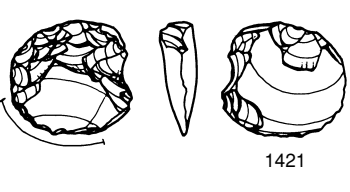
1418



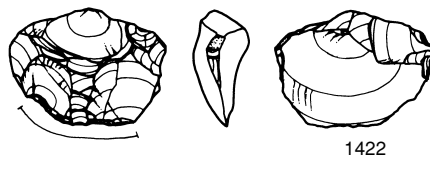
1419



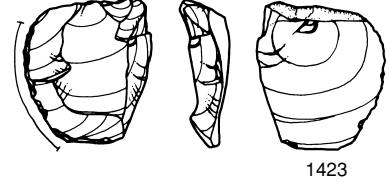
1420



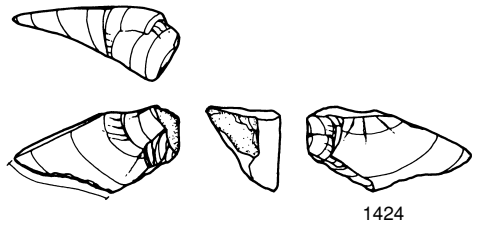
1421



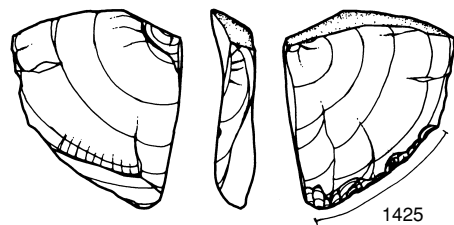
1422



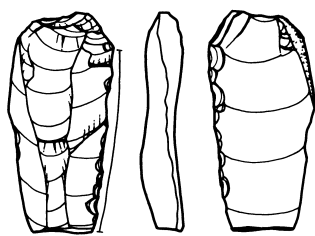
1423



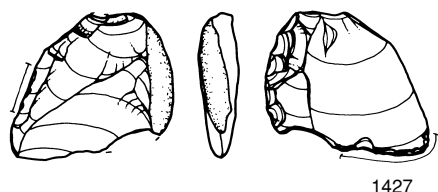
1424



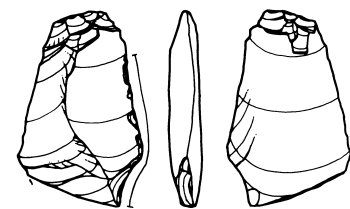
1425



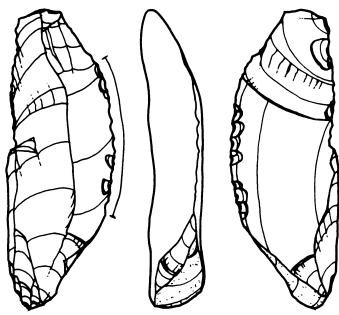
1426



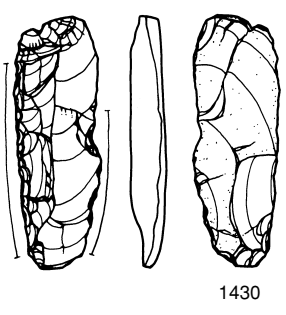
1427



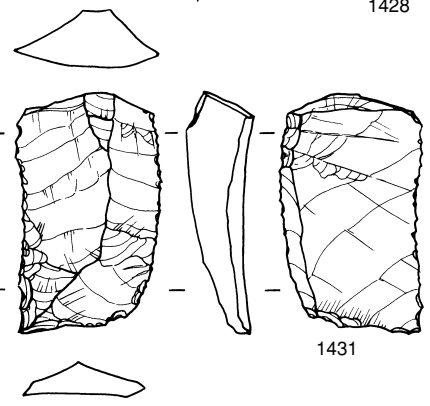
1428



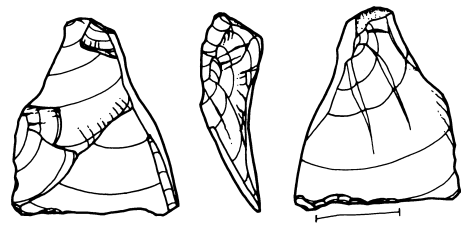
1429



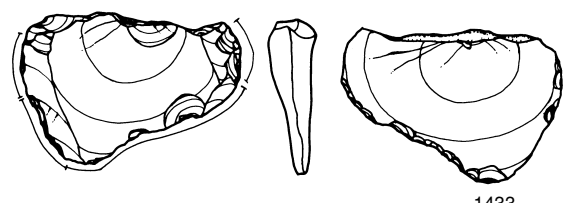
1430



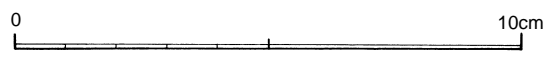
1431

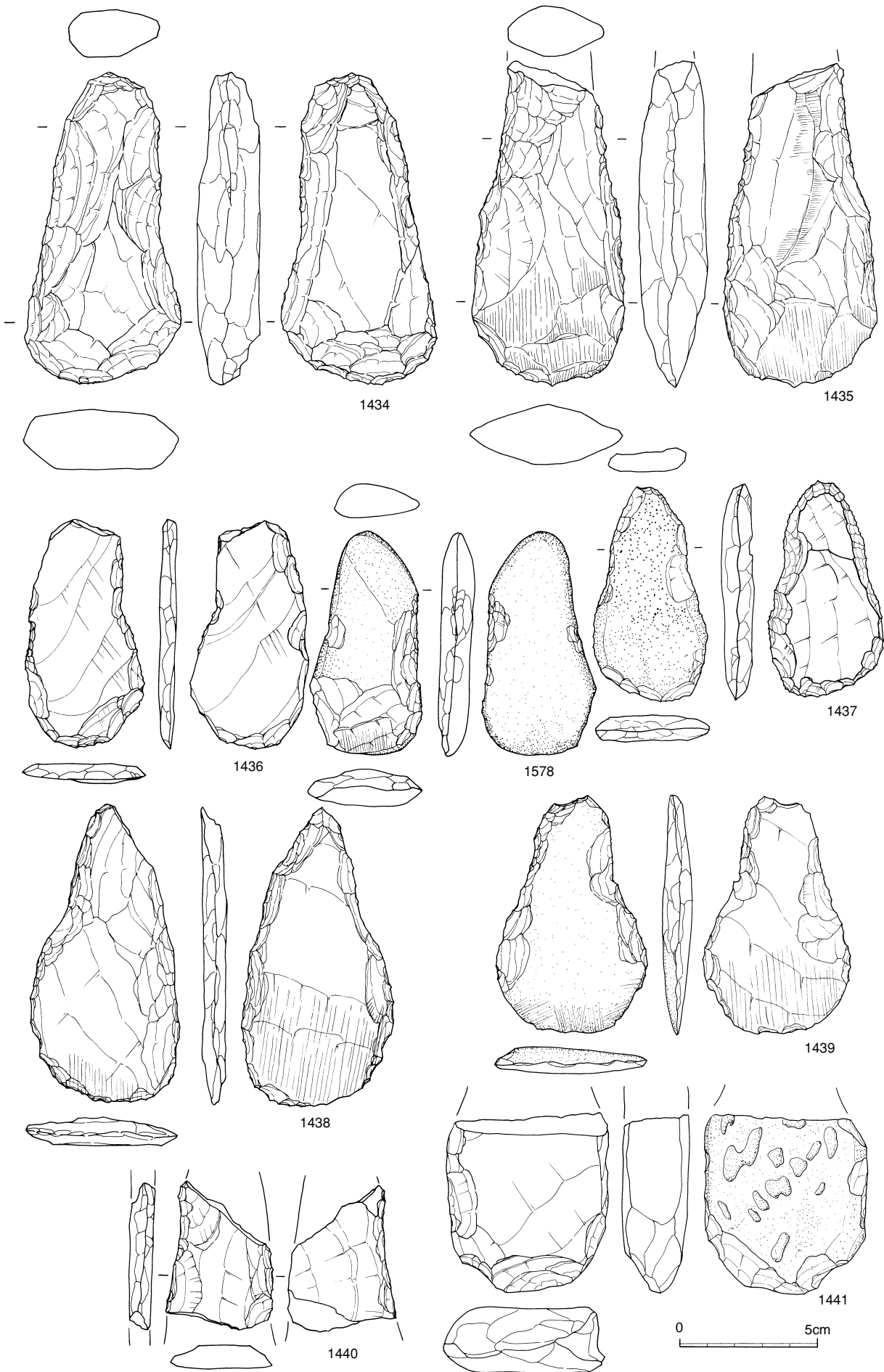


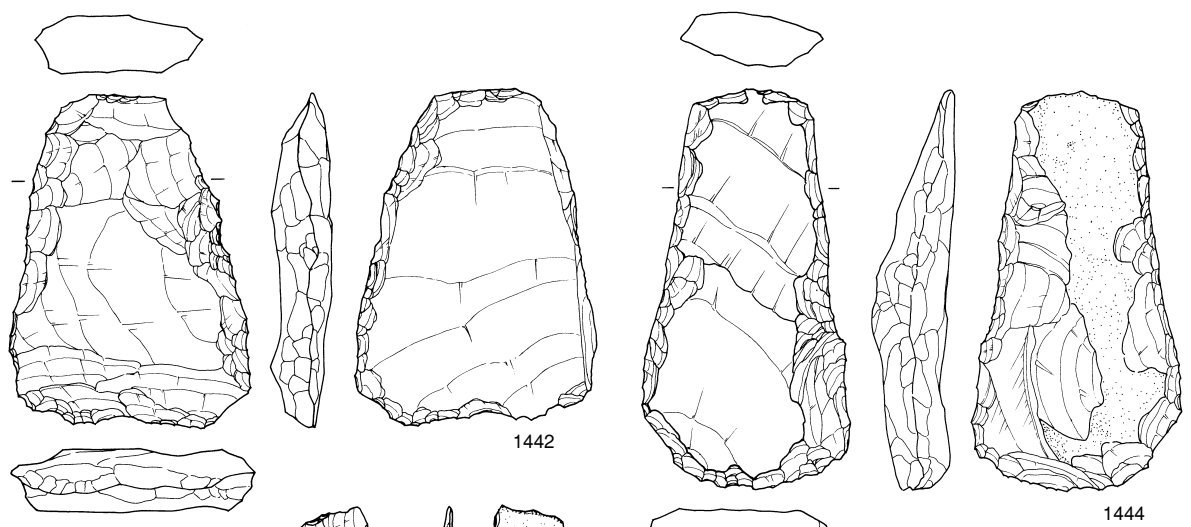
1432



1433

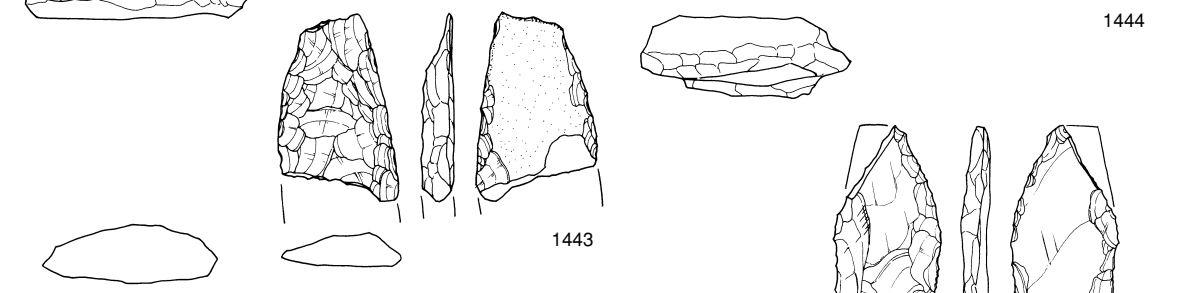






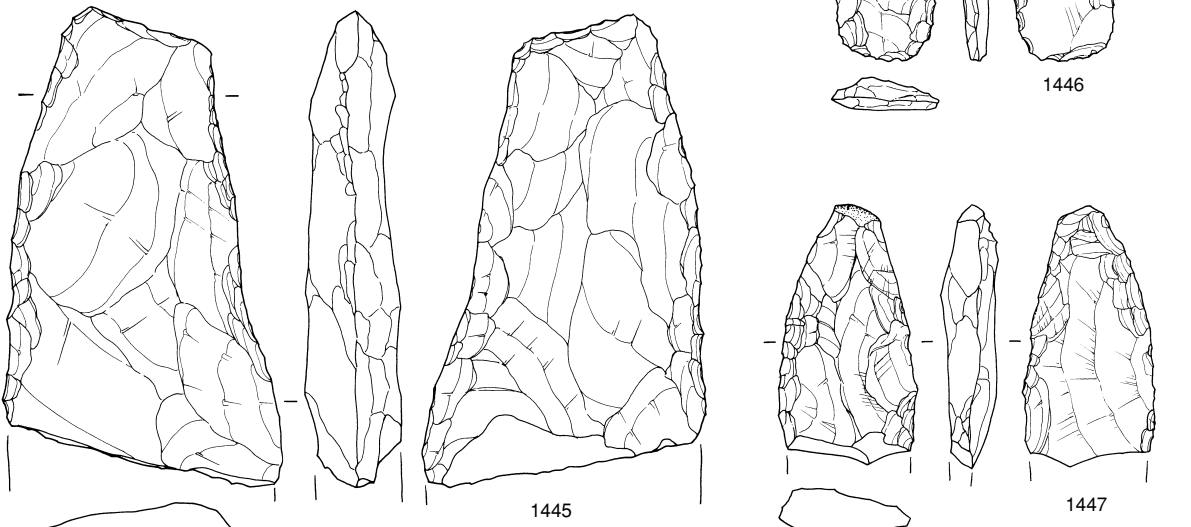
1442

1444



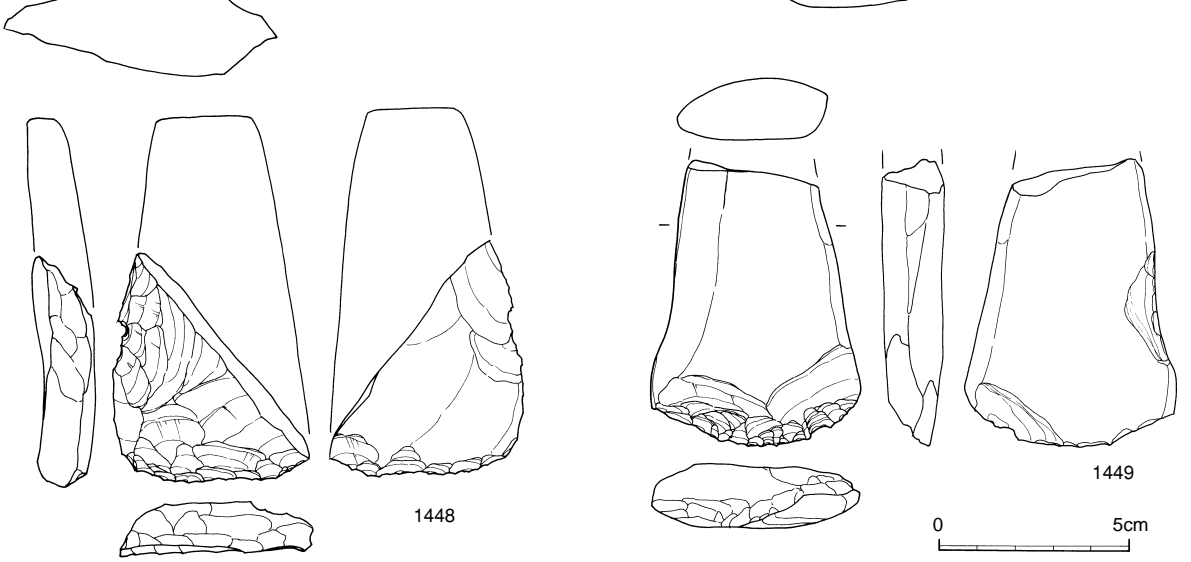
1443

1446



1445

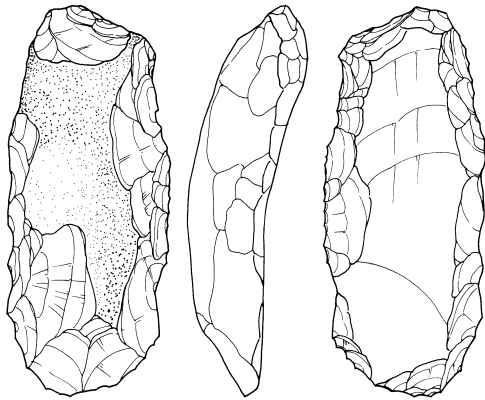
1447



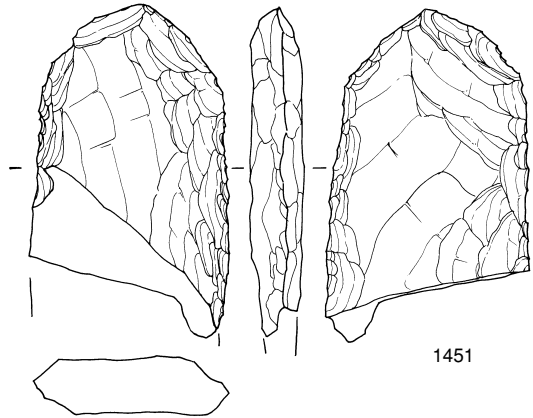
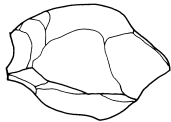
1448

1449

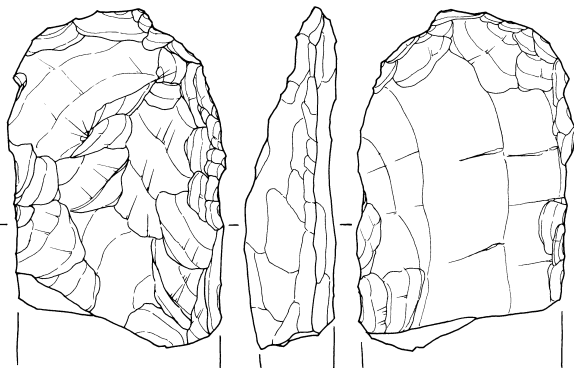




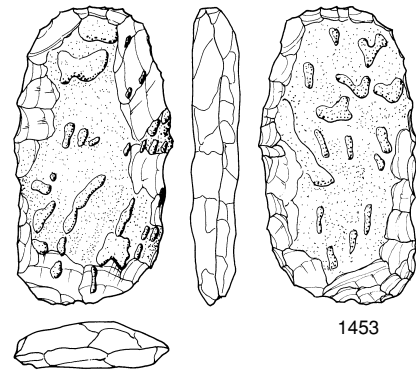
1450



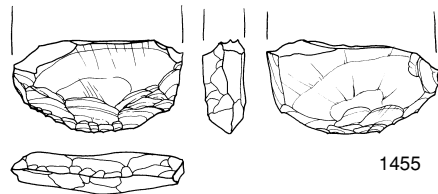
1451



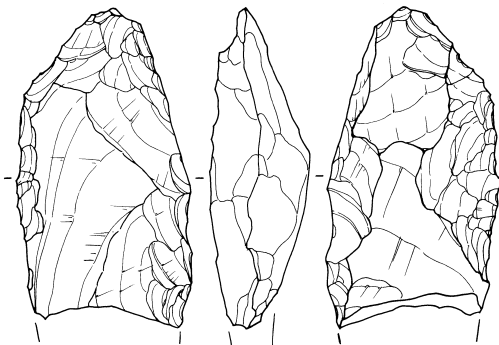
1452



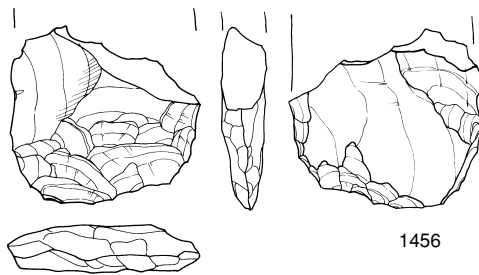
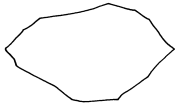
1453



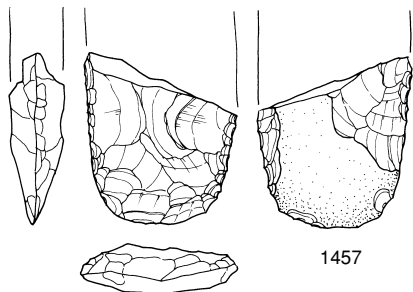
1455



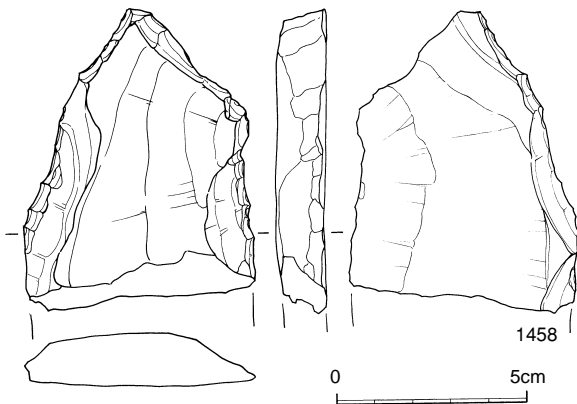
1454



1456

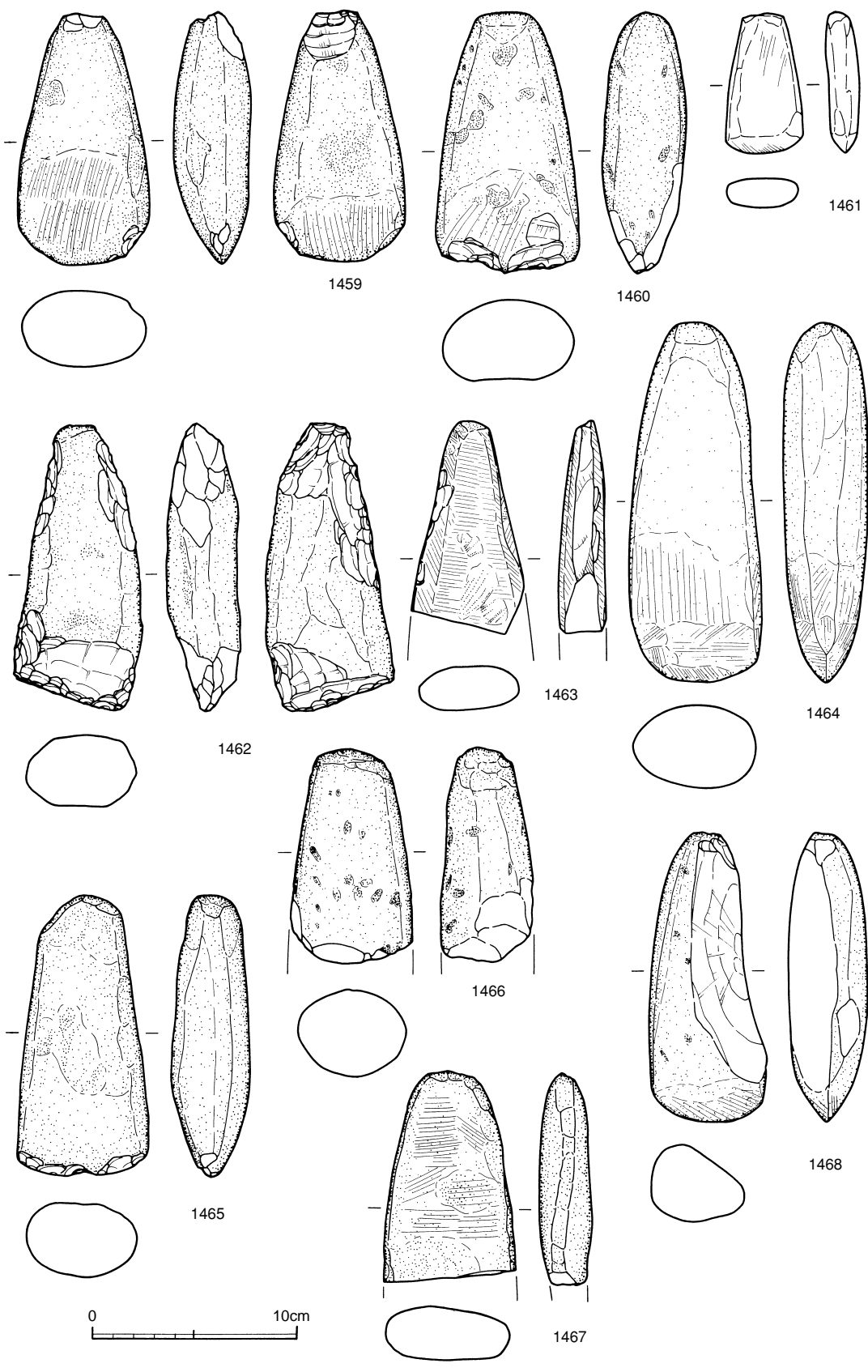


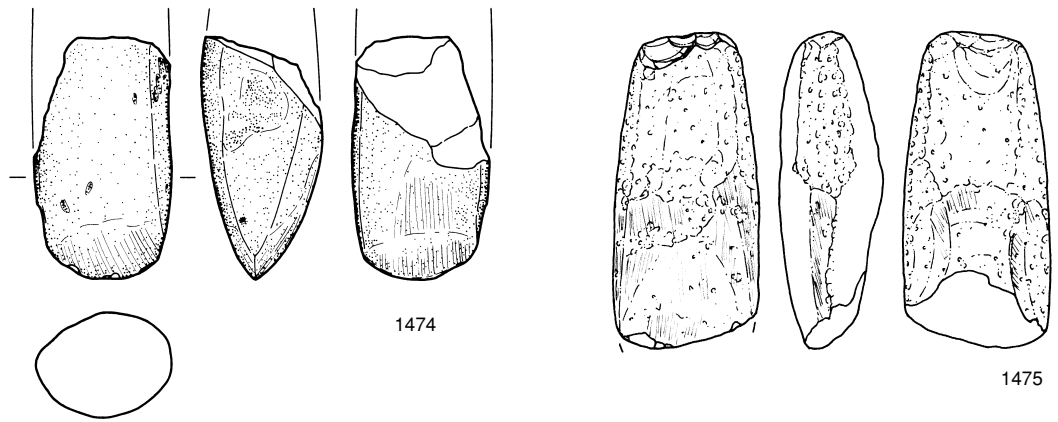
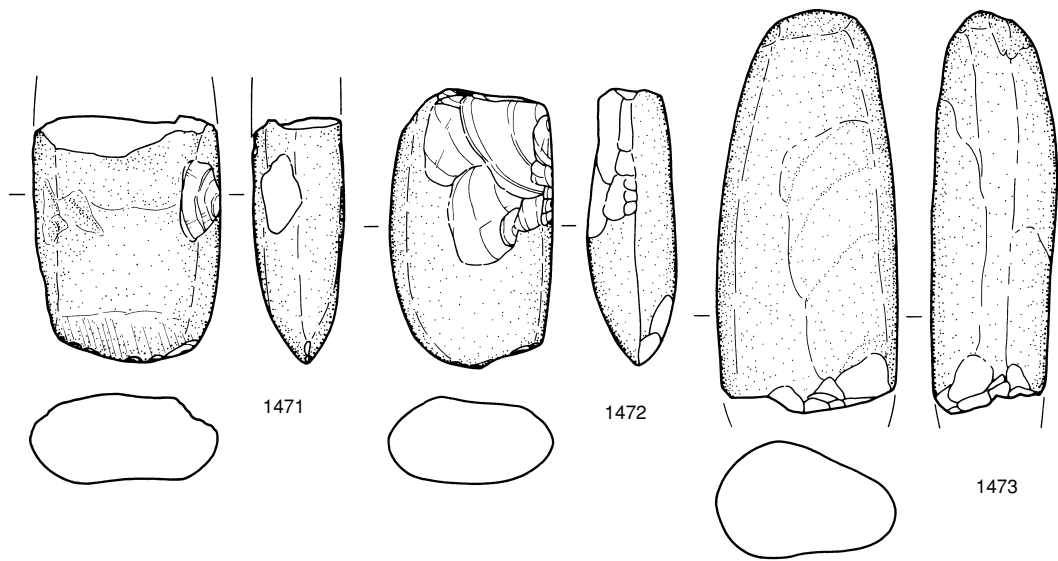
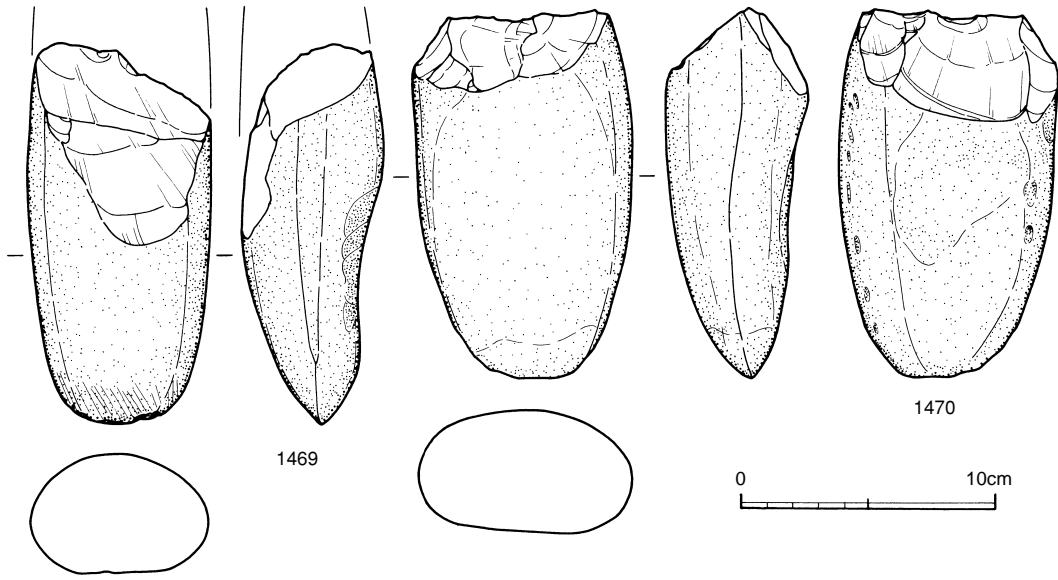
1457



1458

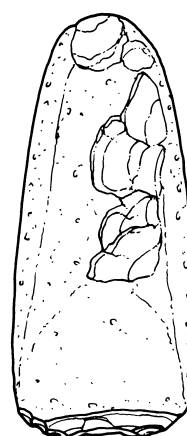
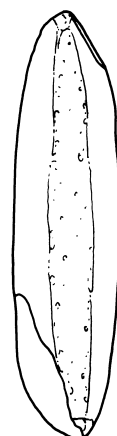




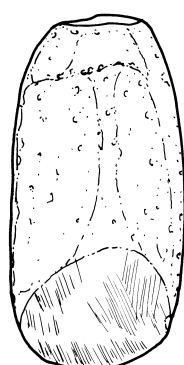




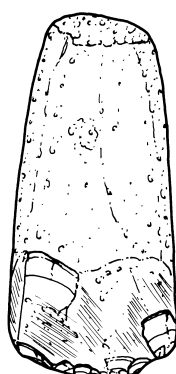
1476



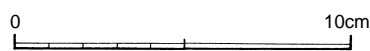
1477



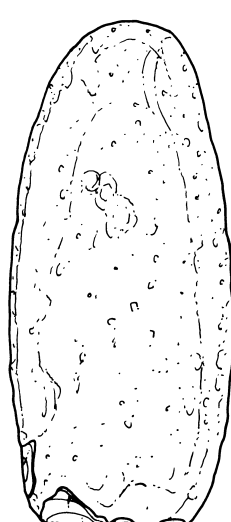
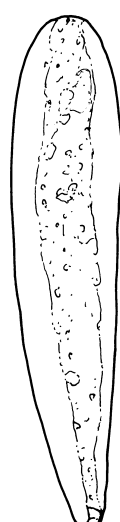
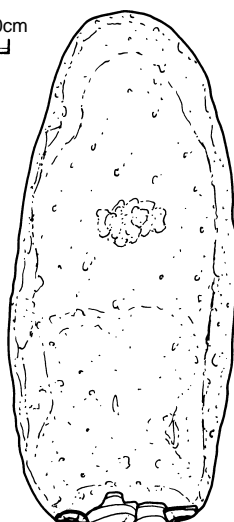
1478



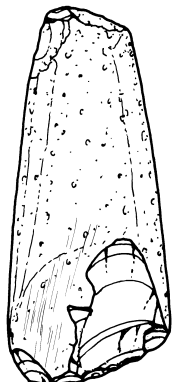
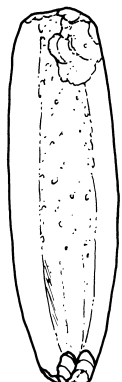
1479



1480



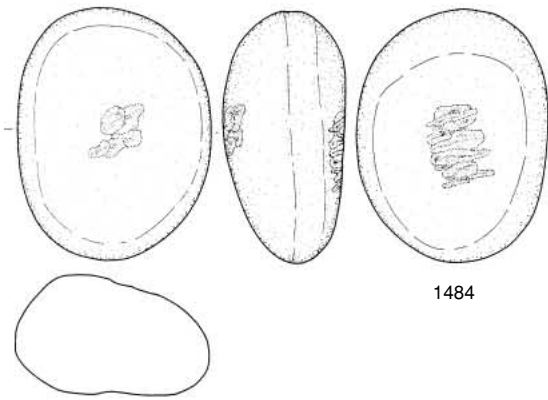
1481



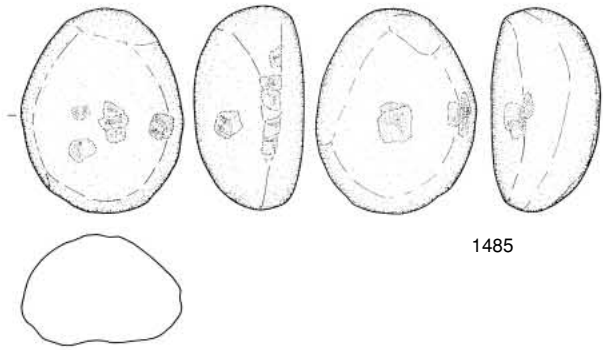
1482



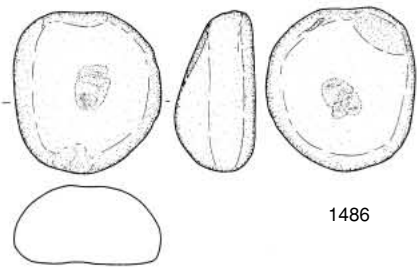
1483



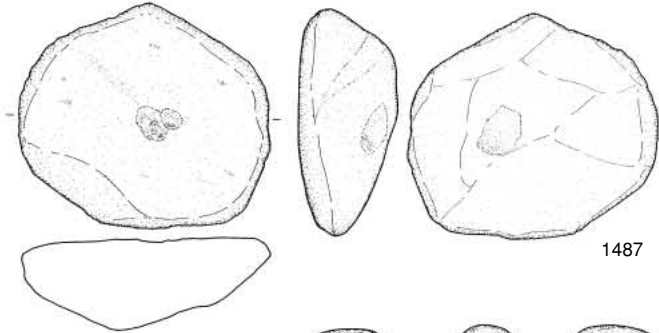
1484



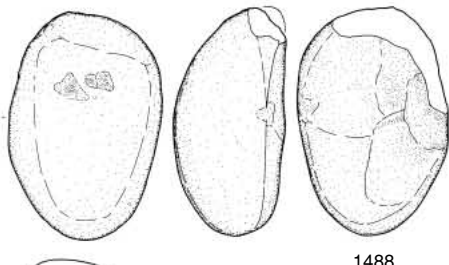
1485



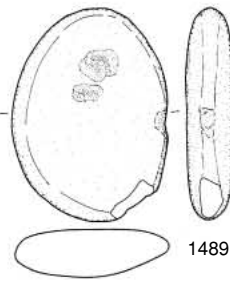
1486



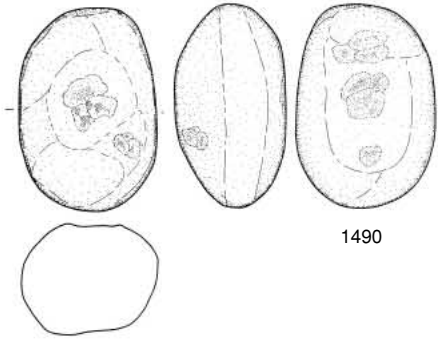
1487



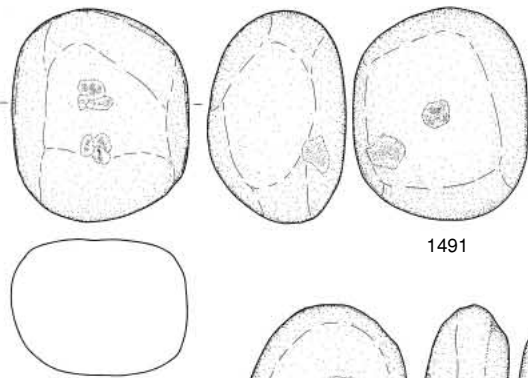
1488



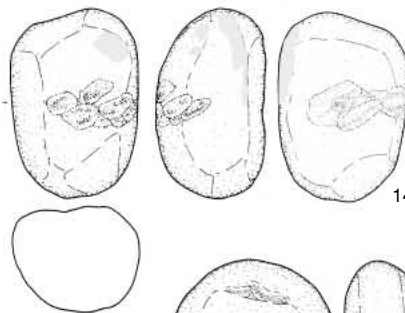
1489



1490

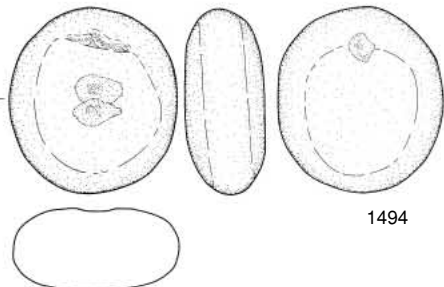


1491

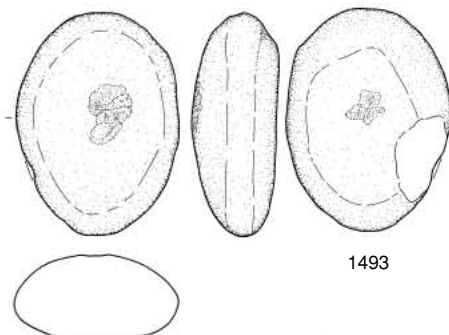


1492

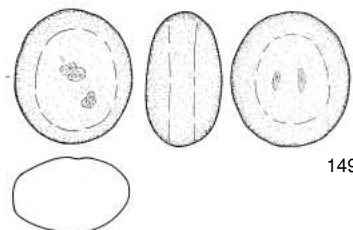
は赤色顔料  
残存部分



1494



1493

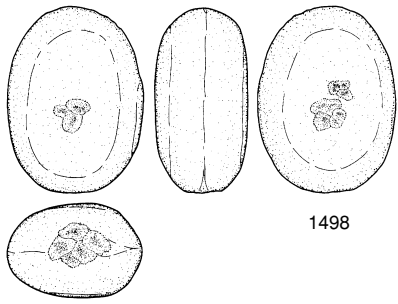


1495



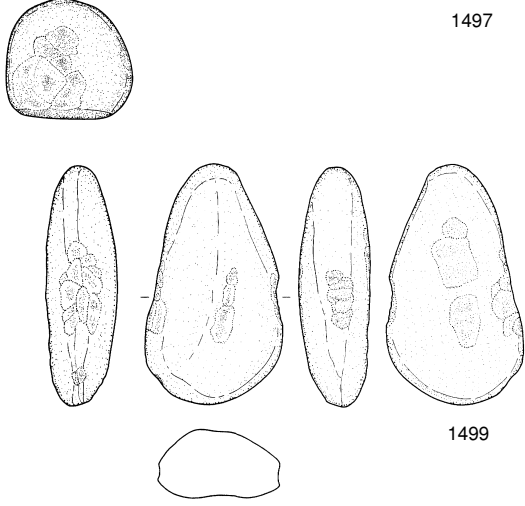
1496

1497

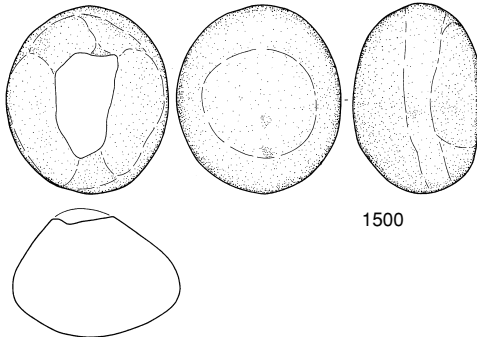


1498

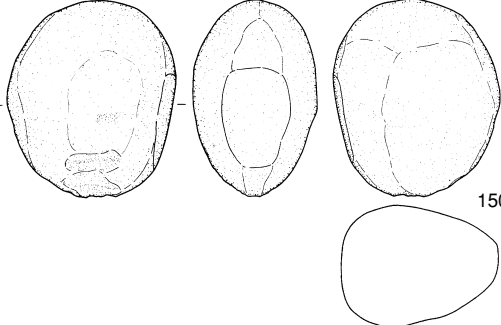
1577



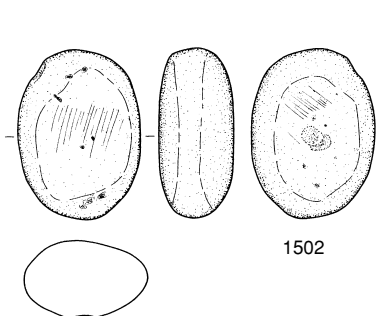
1499



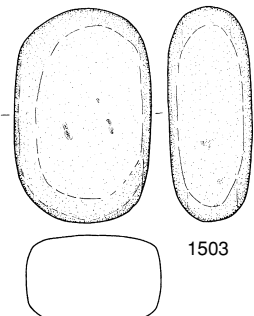
1500



1501



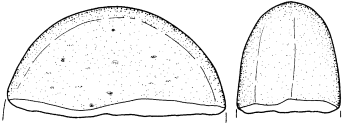
1502



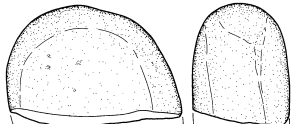
1503



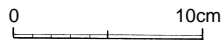
1504

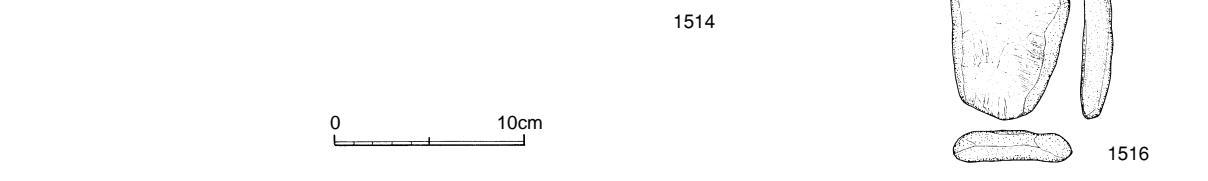
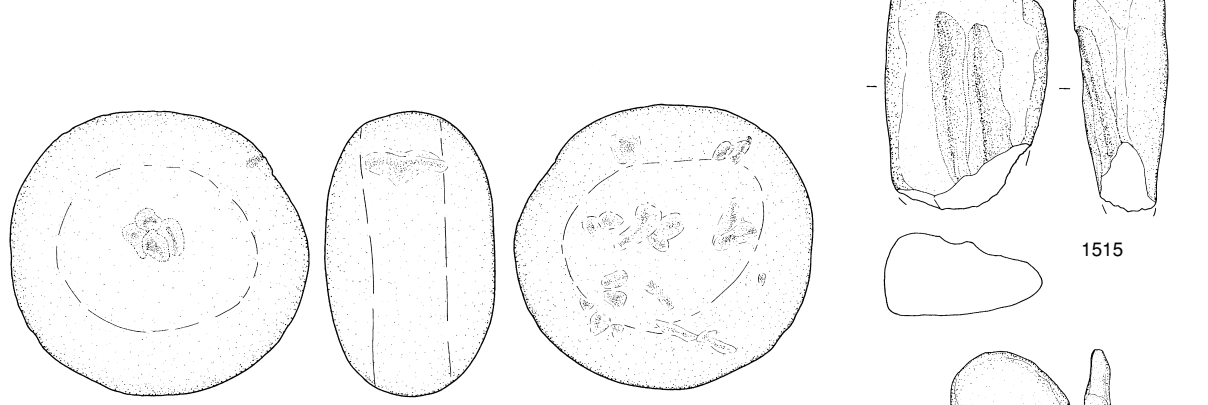
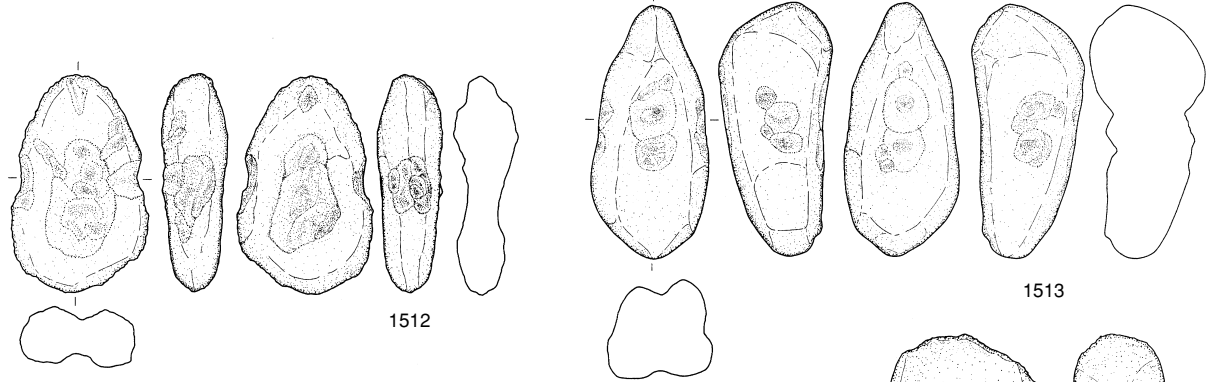
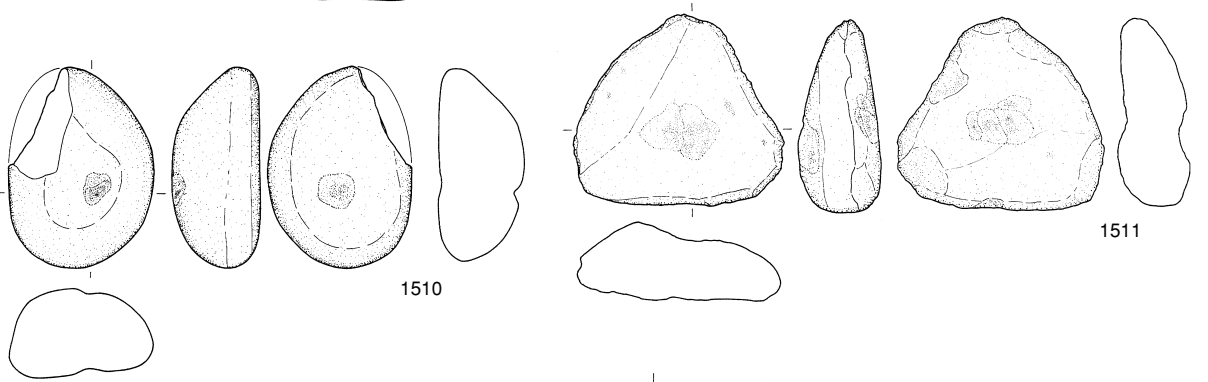
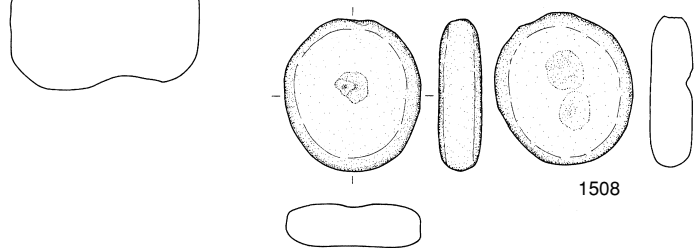
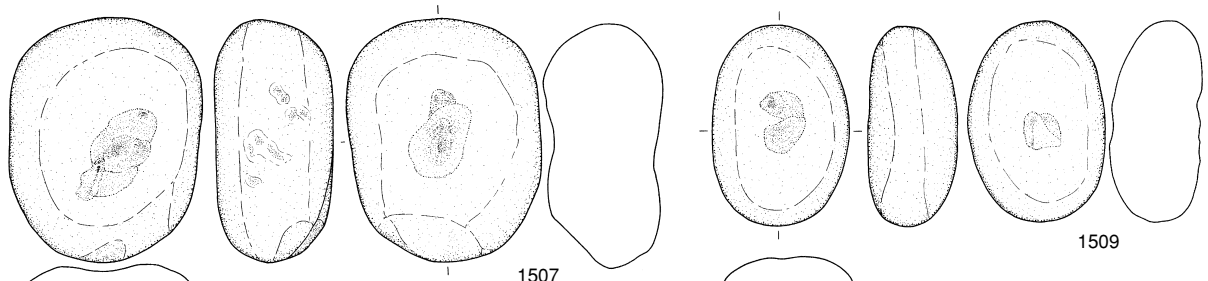


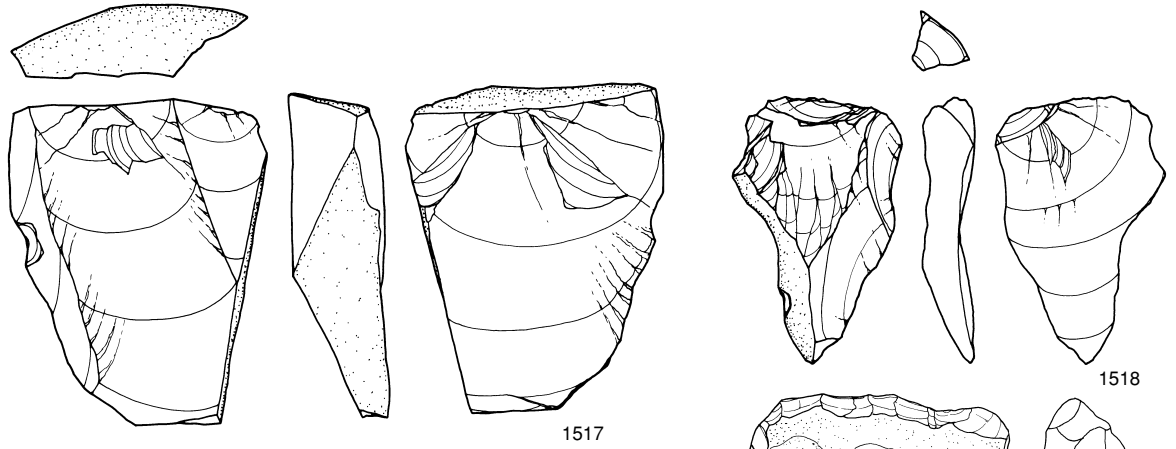
1505



1506

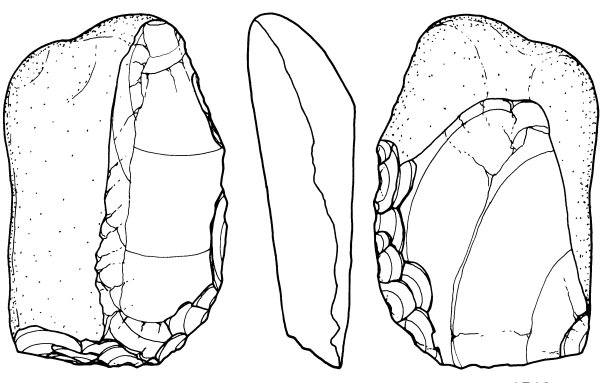




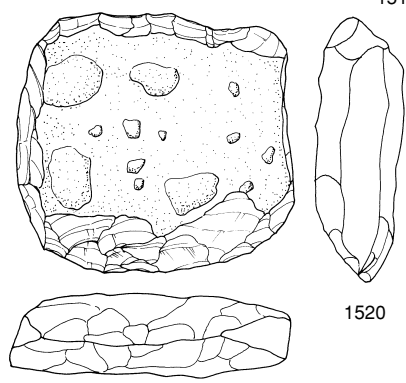


1517

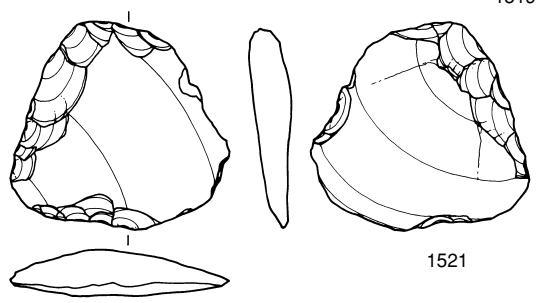
1518



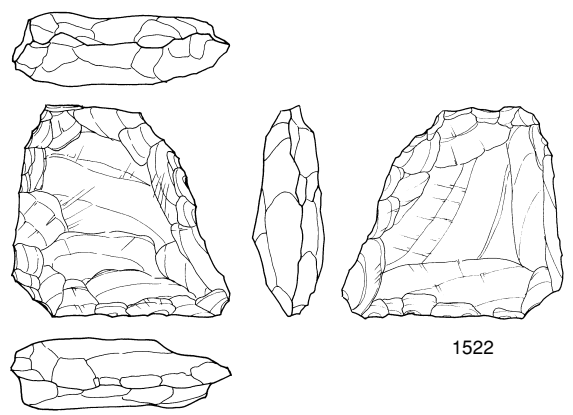
1519



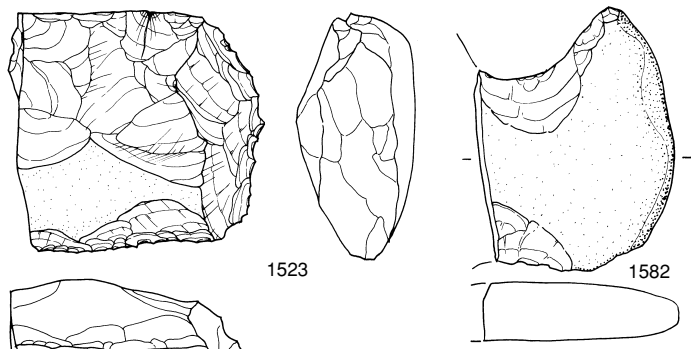
1520



1521

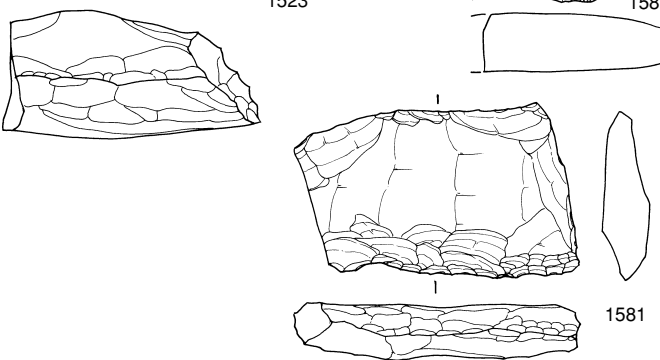


1522

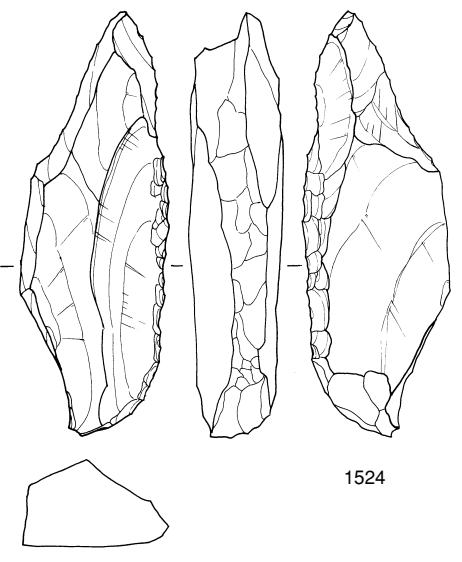


1523

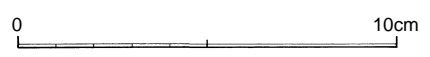
1582

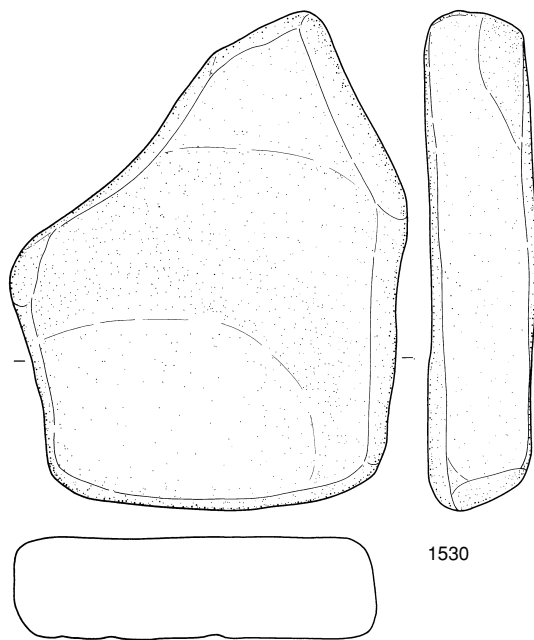
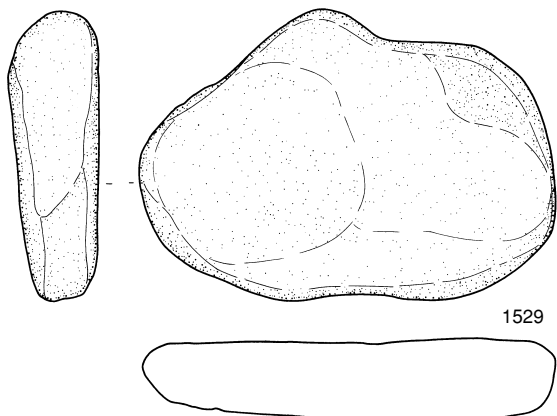
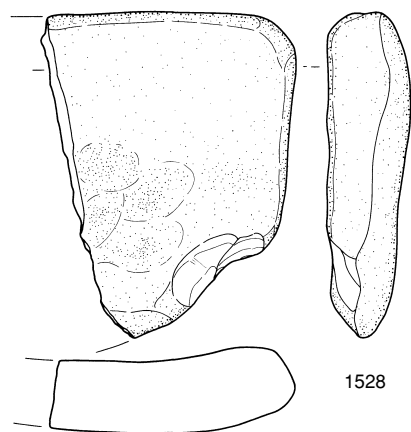
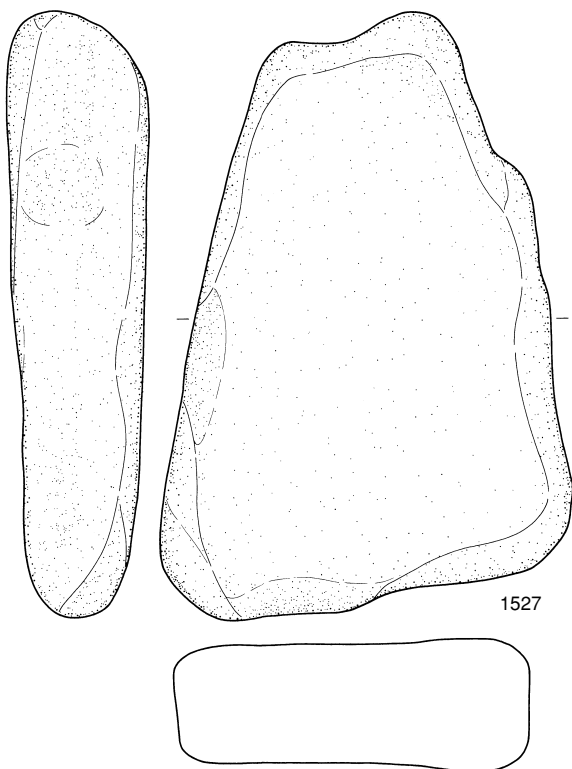
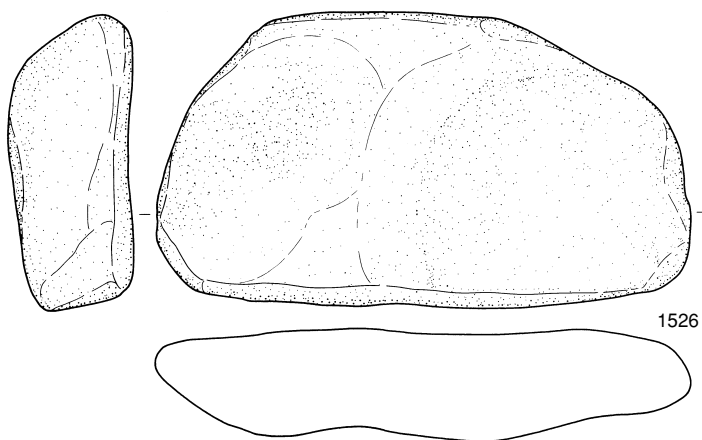
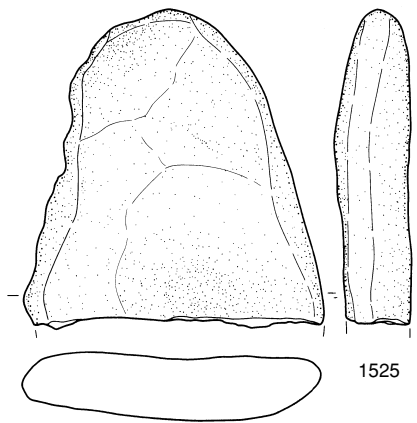


1581

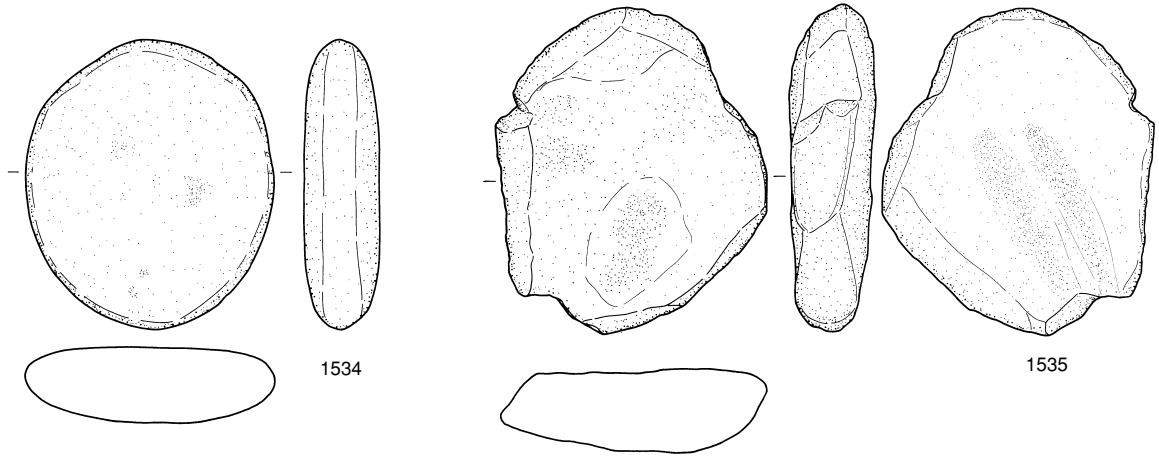
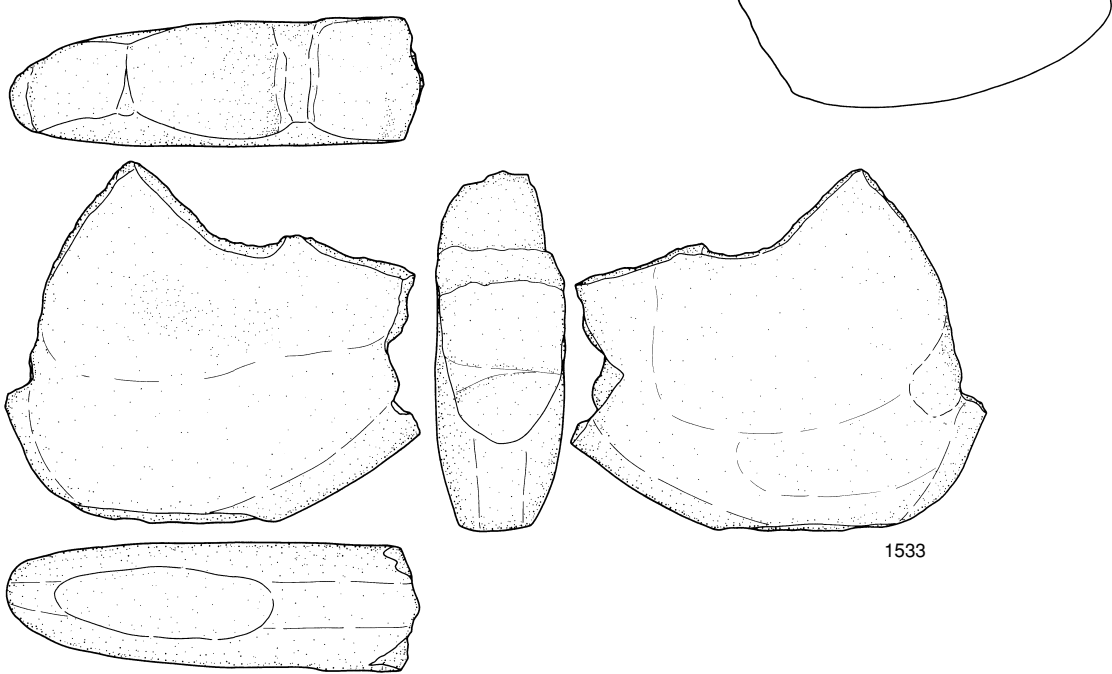
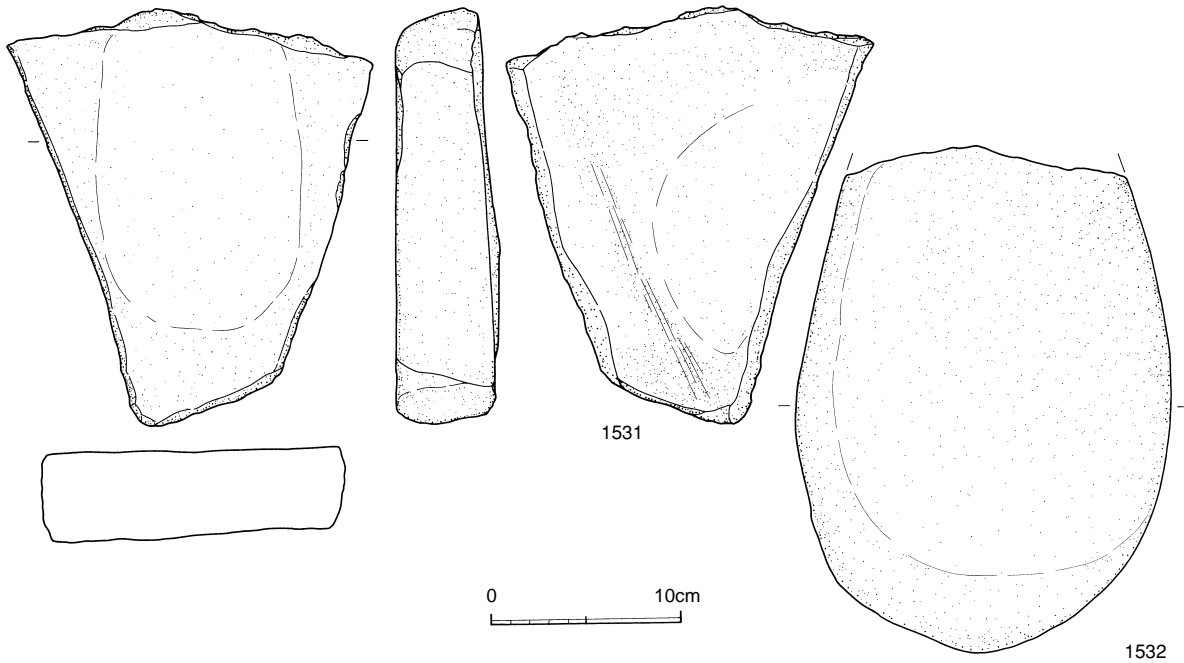


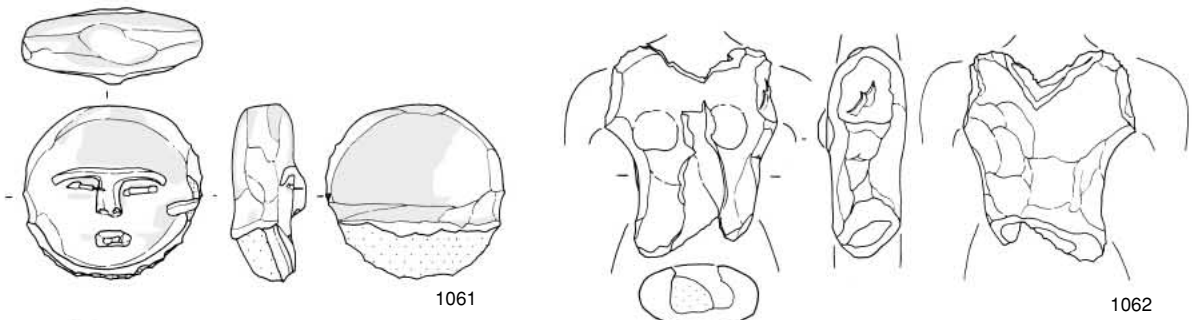
1524



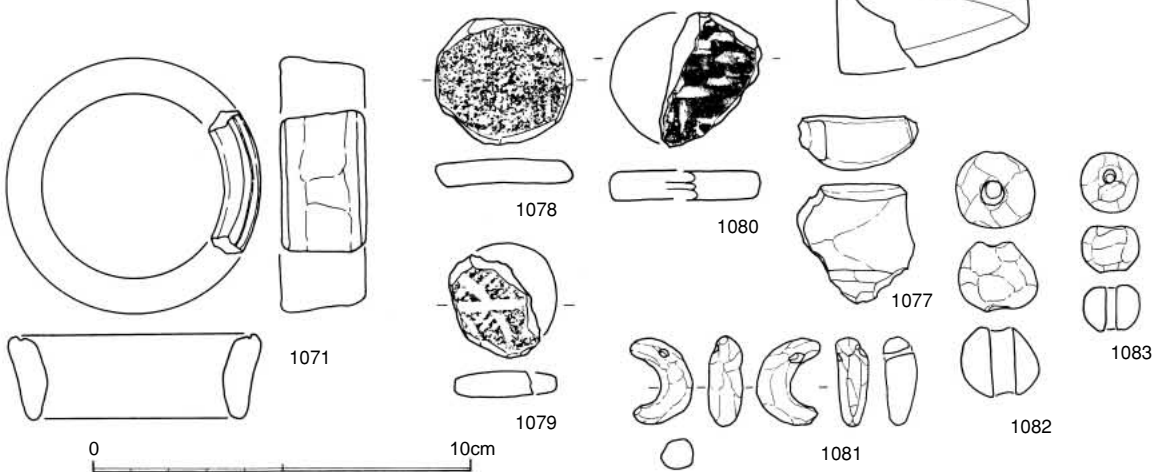
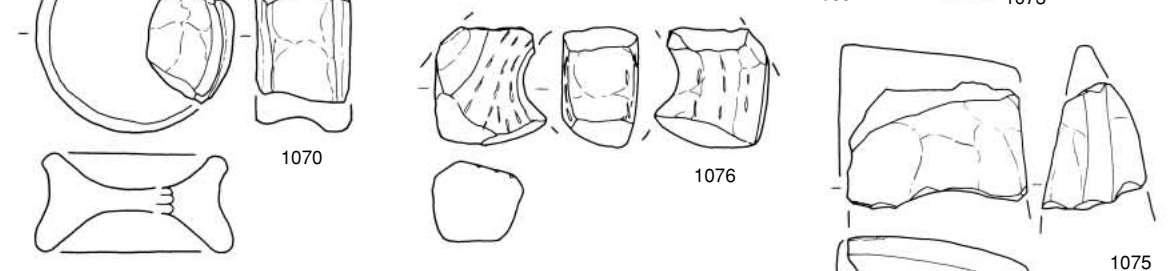
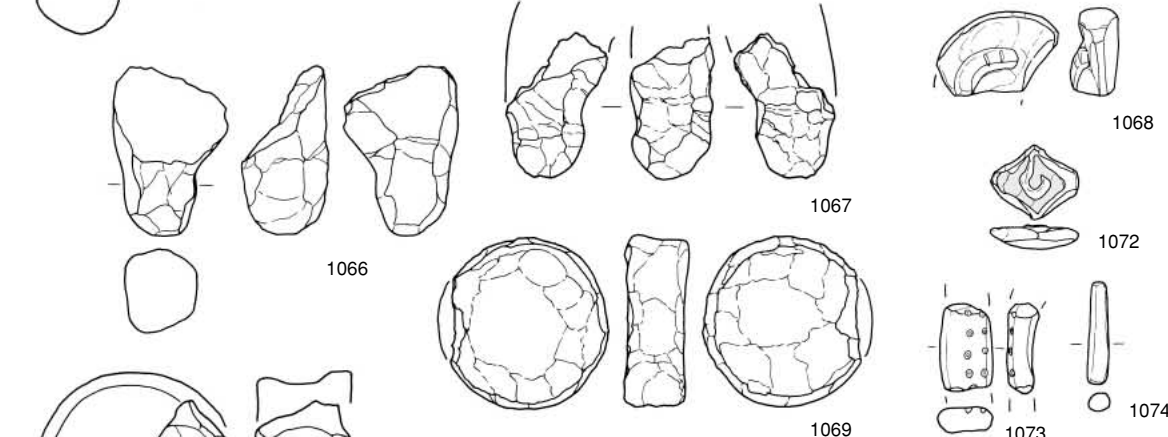
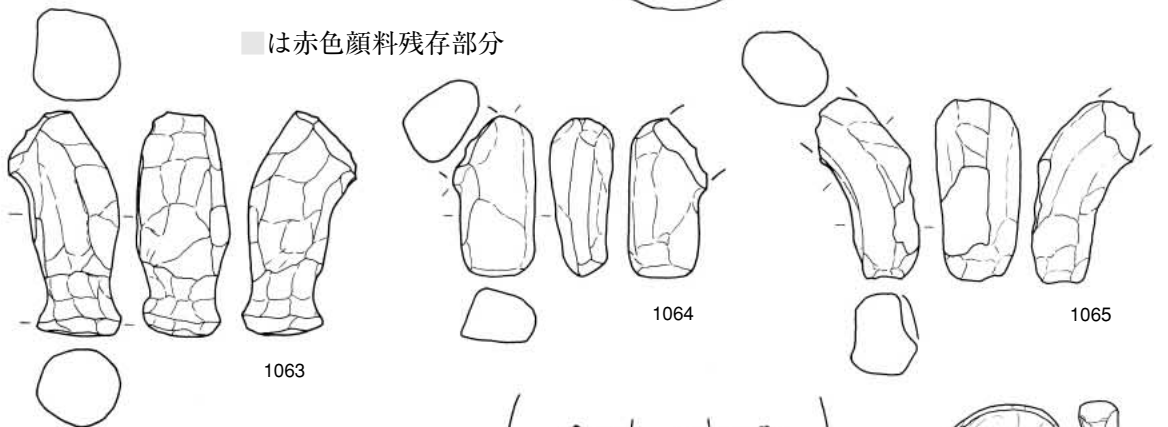


0 10cm

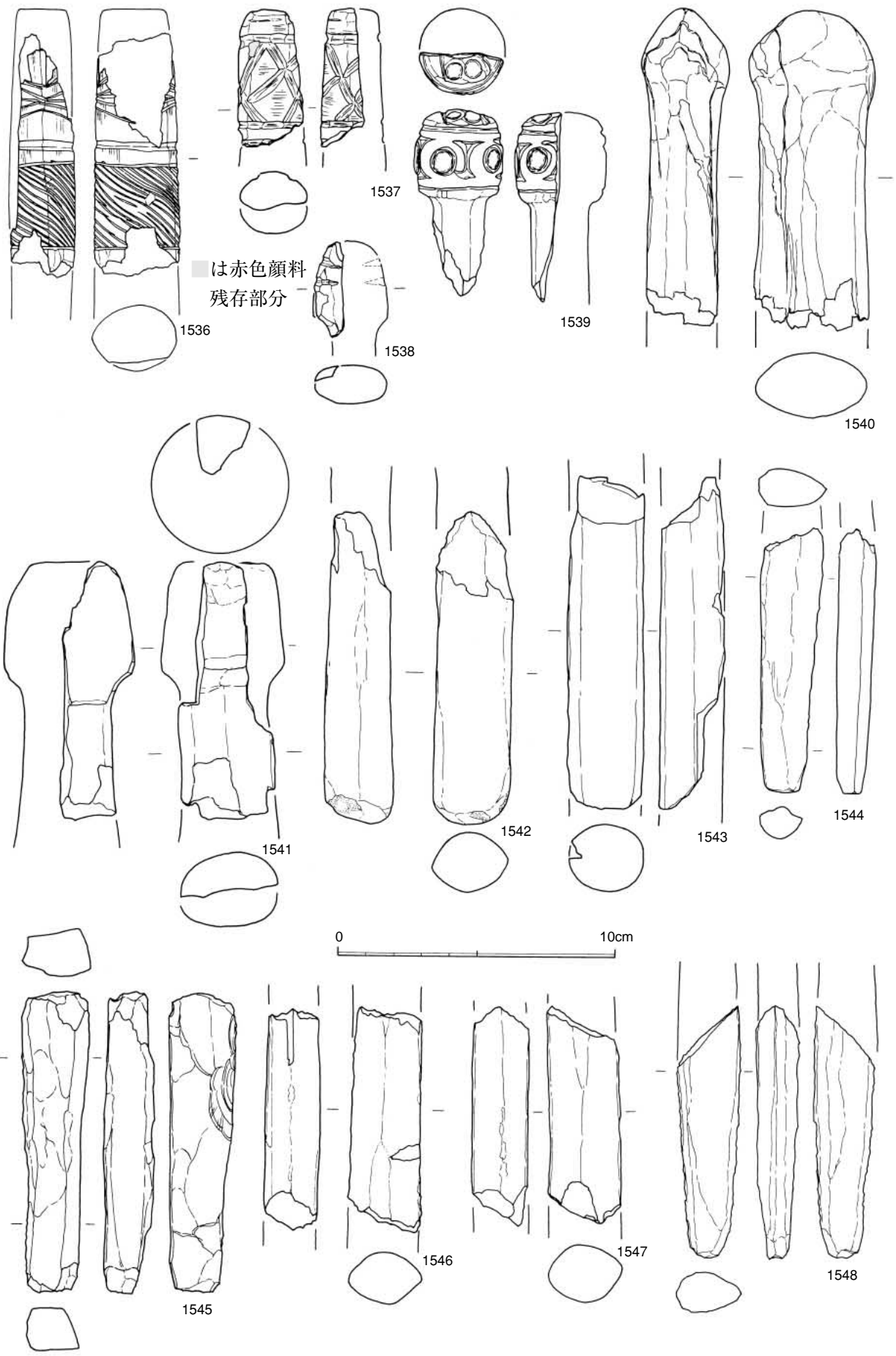


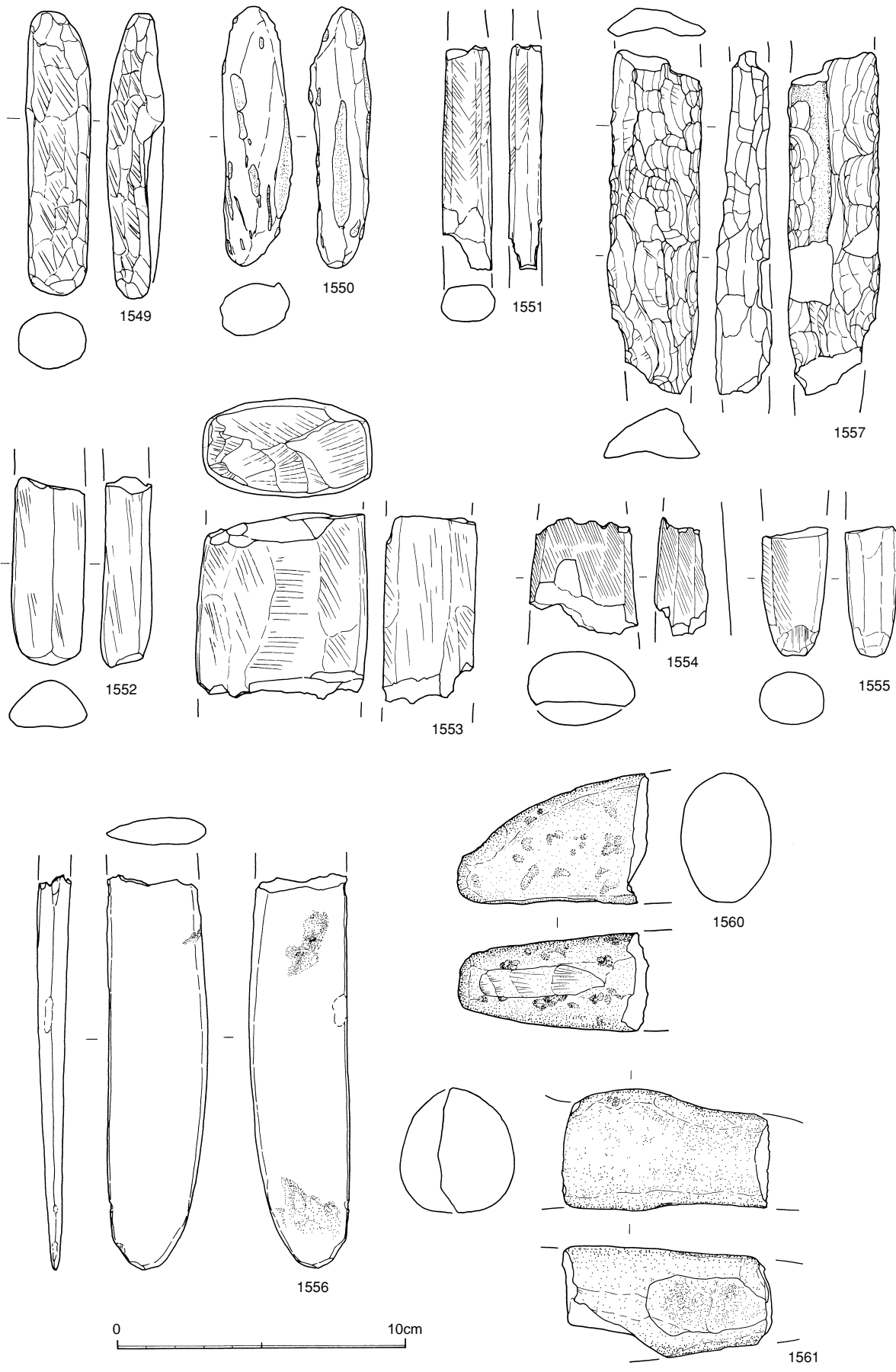


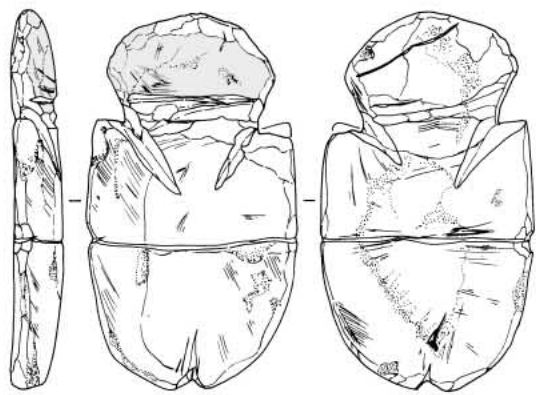
■は赤色顔料残存部分



0 10cm

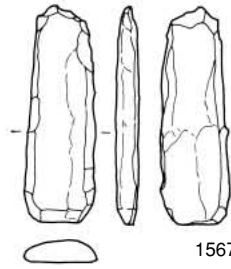




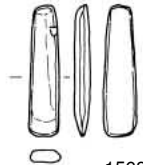


1562

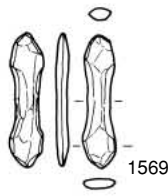
■は赤色顔料残存部分



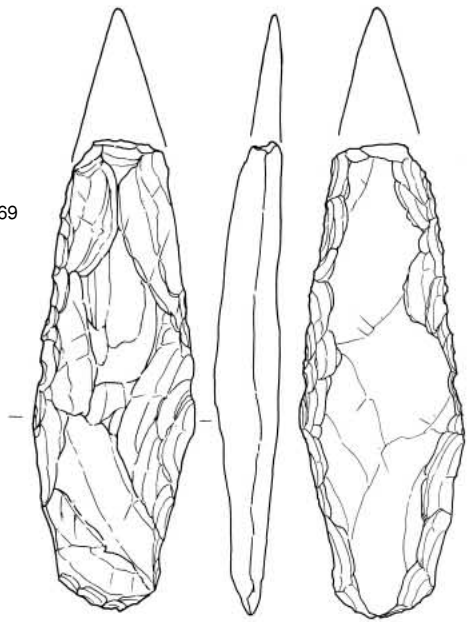
1567



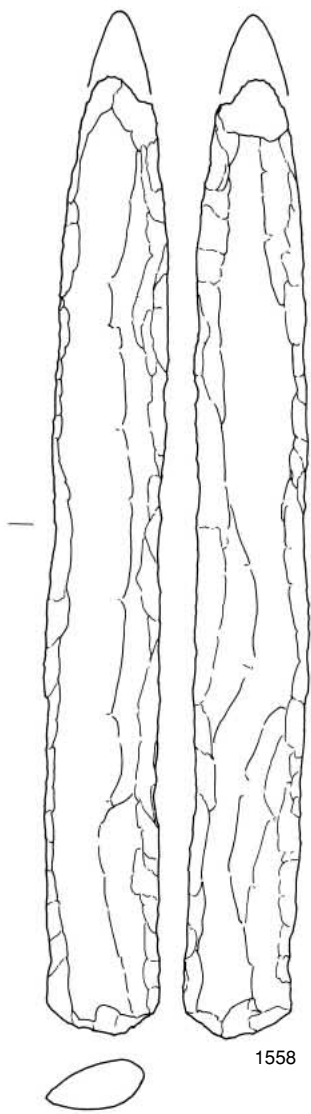
1568



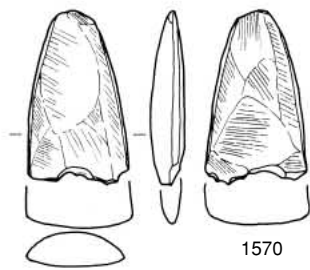
1569



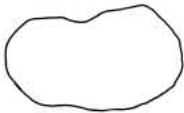
1559



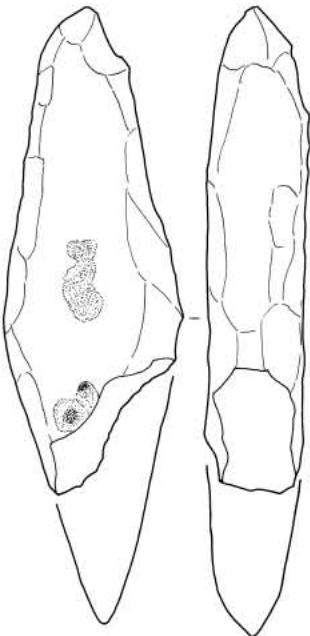
1558



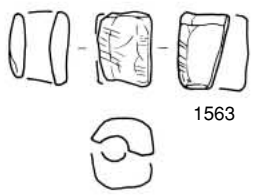
1570



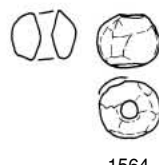
1571



1572



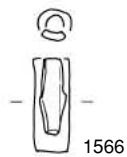
1563



1564



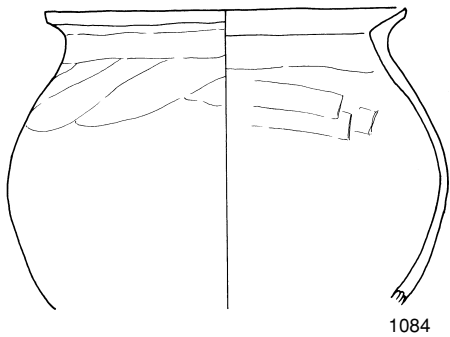
1565



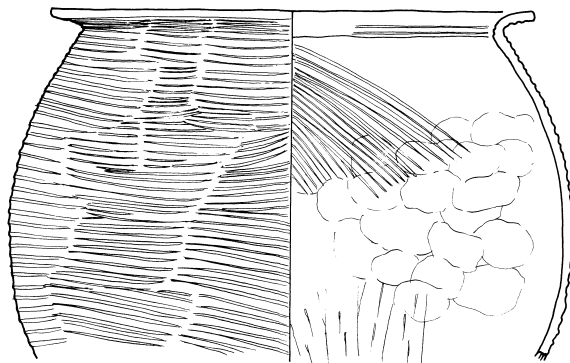
1566



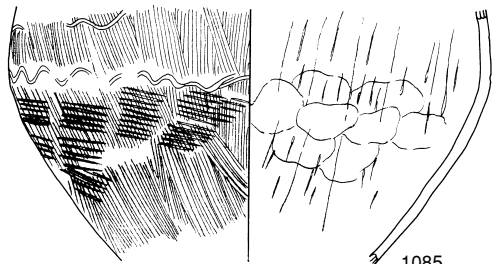
1563~1566



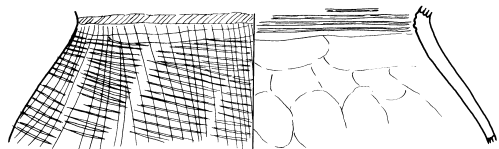
1084



1086



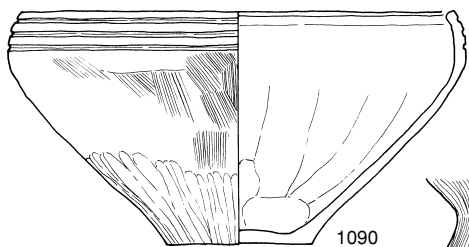
1085



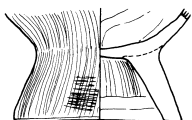
1087



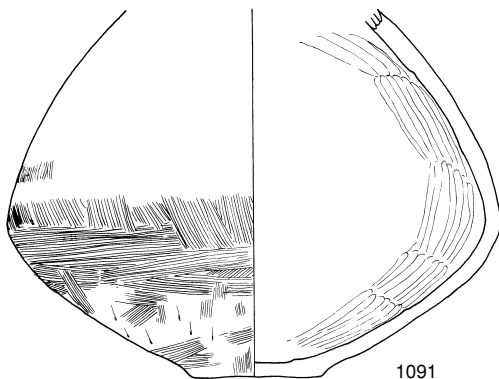
1088



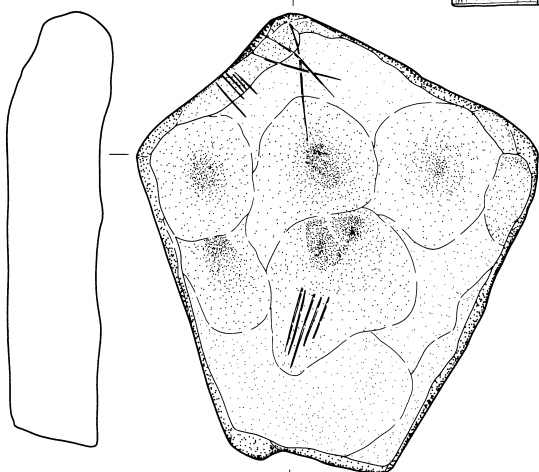
1090



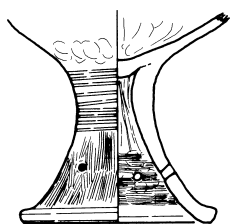
1089



1091



1573



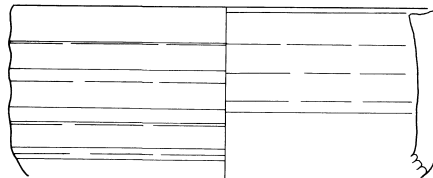
1092



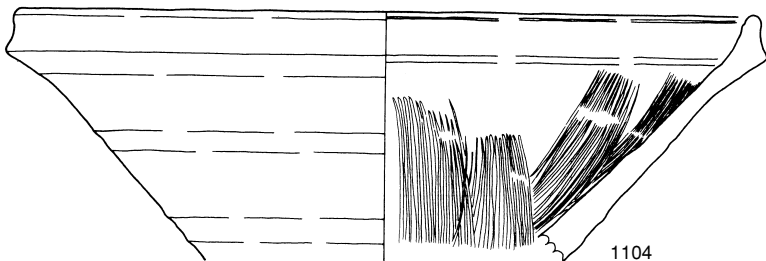
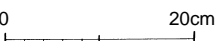
1093



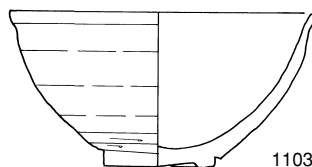
1102



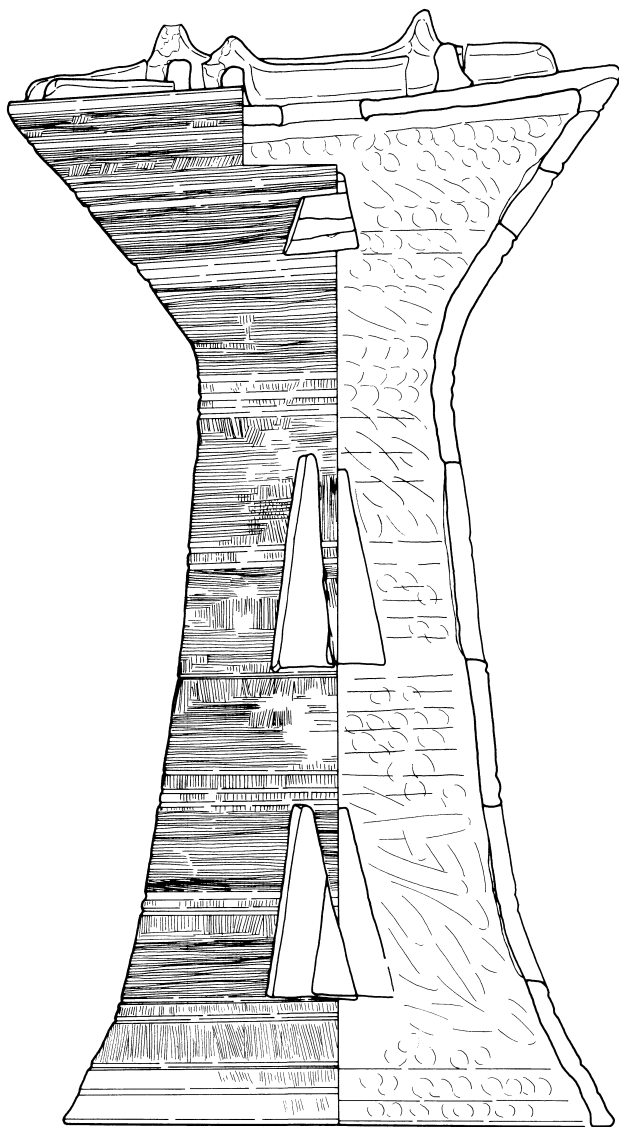
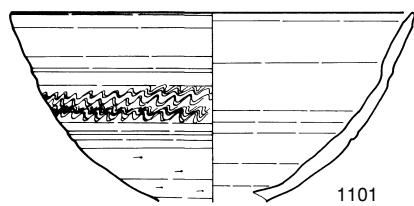
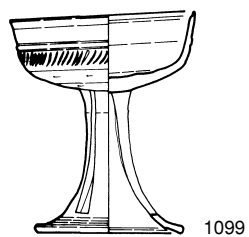
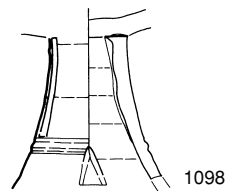
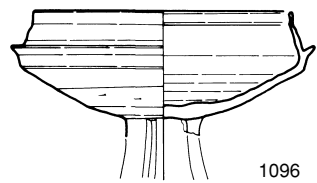
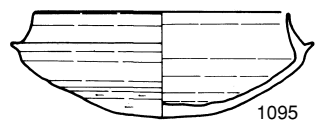
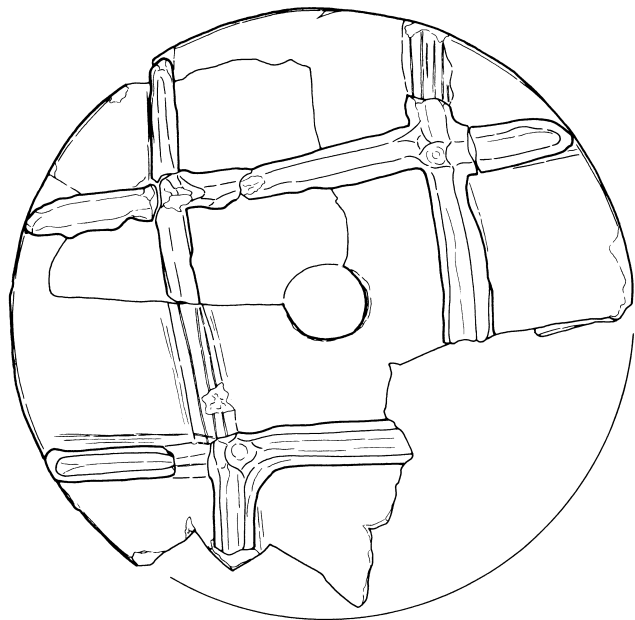
1105



1104



1103



0 10cm 1094

0 10cm 1095~1101

1094



99A・B区完掘状況(西から)



99A区完掘状況(北から)



99A 区完掘状況(西から)



99A 区遺構検出状況(西から)



00A 区完掘状況(北西より)



00B 区完掘状況(南より)



99A 区 中世遺構完掘状況(西より)



99B 区 中世遺構完掘状況(北西より)



99B 区 中世柵列完掘状況(北より)



SZ02(下)・14(上)



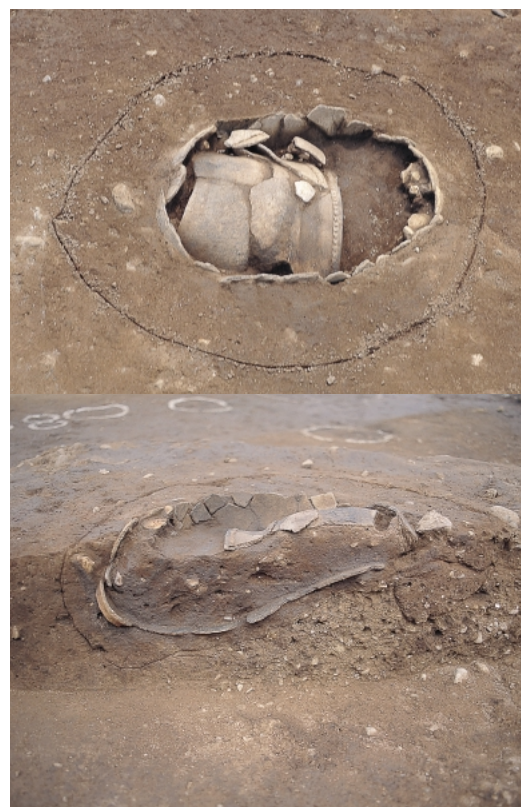
SZ02(南より)



SZ14(南西より)



SZ03(南東より)



SZ04(上北より・下南より)



SZ06(南より)



SZ07(南より)



SZ08(北より)



SZ09(東より)



SZ10(右)・26(左)(東より)



S26(東より)



SZ10(南より)



SZ12・13(南より)



SZ18(南から)



SZ22(上 南より・下 西より)



SZ27(上 北より・下 南西より)



SZ24(北より)



SZ28(北より)



SZ29(南より)



SZ33(西より)



SZ32(上 西より・下 南より)



SZ34(上 北より・下 東より)



SZ35(南東より)



SZ36(北西より)



SZ37(左)・38(右)(東より)



SZ39(南東より)



SZ40(南西より)



SZ41(上 西より・下 南より)



SZ42(南東より)



SZ44(東より)



SZ43(南東より)



SZ47(西より)



SZ49(南東より)



SZ53(東より)



SZ54(北西より)



SZ55(上 南西より・下 南東より)



SZ56(東より)



SB04 左 検出状況・右 完掘状況(東より)



SK385(東より)



SK386(南東より)



SK515(南より)



SK592(北より)



SK579(北より)



SK512(東より)



SK709(南より)



SK799(北東より)



SK804・805(北東より)



SK812(北より)



SK946(北より)



SX01(南より)



SB01(北より)



SB03(西より)



SB02(南西より)



SK289(南より)



SD01 セクション  
(北より)



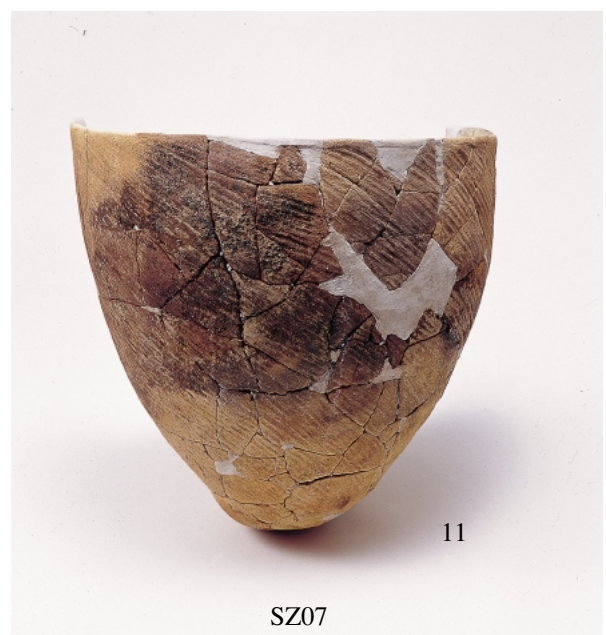
SK144(北より)



SX03(西より)



SX03 遺物出土状態(北西より)





SZ09



SZ10



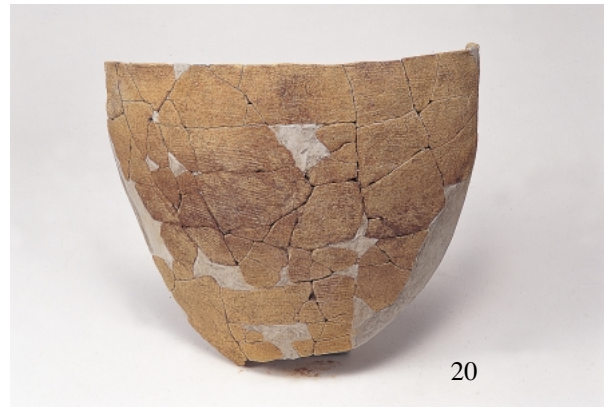
SZ12



SZ14



SZ13





SZ15



SZ16



SZ22



SZ18





SZ23



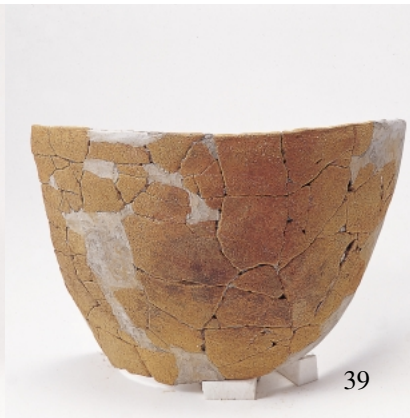
SZ24



SZ26



SZ27



SZ27



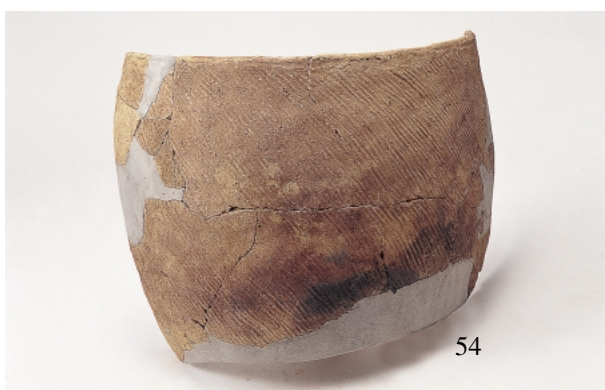
SZ28



SZ31



SZ29



SZ36



SZ33



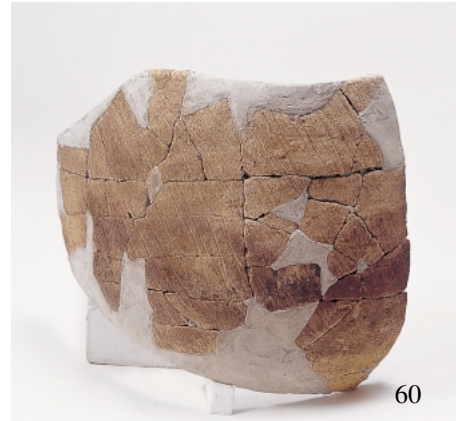
SZ34



SZ35



SZ37



SZ39



61



62

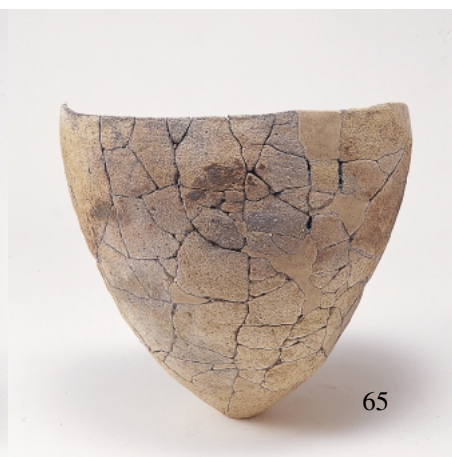
SZ40



SZ41



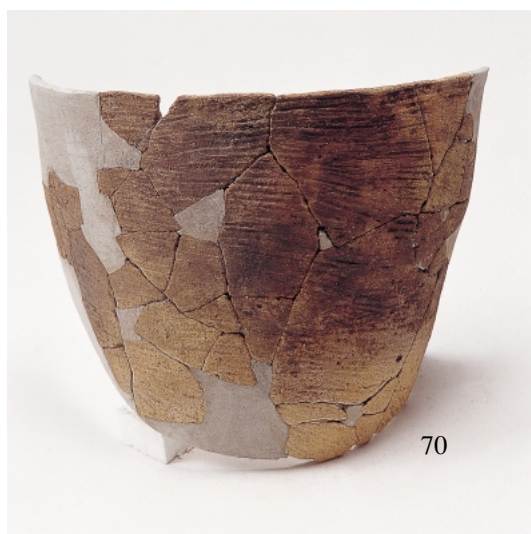
SZ43



SZ42



SZ44



SZ47



SZ49



SZ50



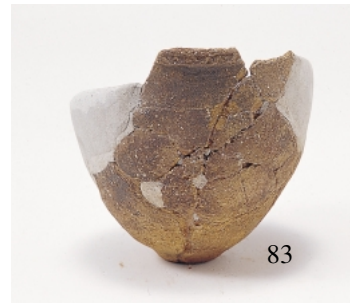
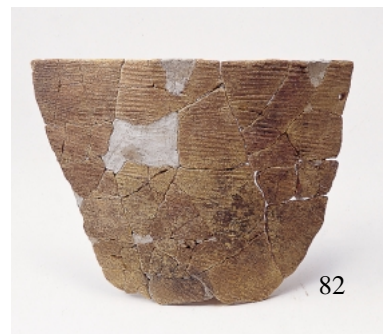
SZ53



SZ54



SZ55



SZ56



1



11



12



16



18



19



22



32



34



43



42



50



54



60



61



62



63



64



76



78



23



土器棺使用土器



85

SK804・805



87

SK794



88

SK356



86

SK812



255

SK946



592

SK719



799

SK386



256

259

257

260

256

258

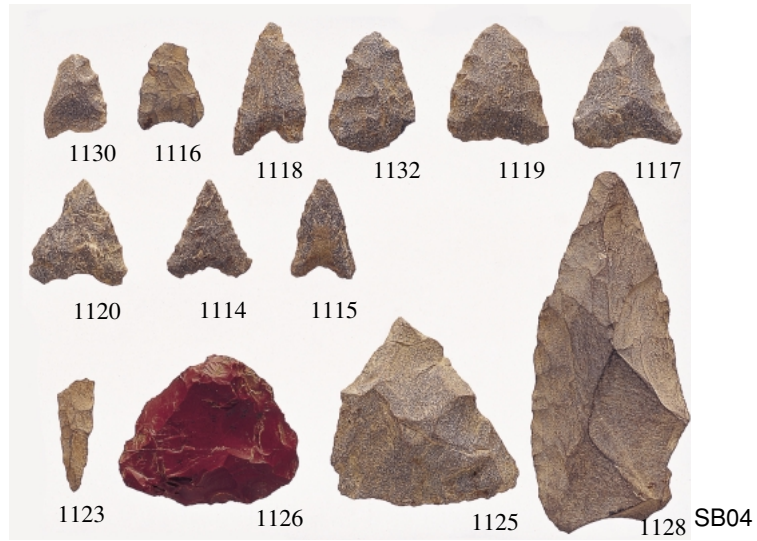
SK512



SK579

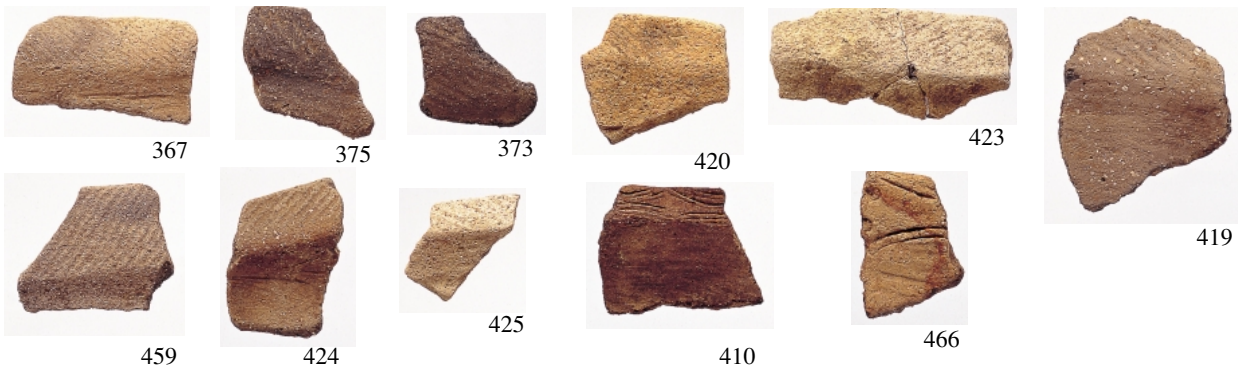


SK385



SK515







428



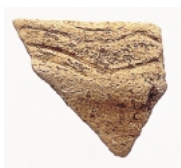
434



446



447



436



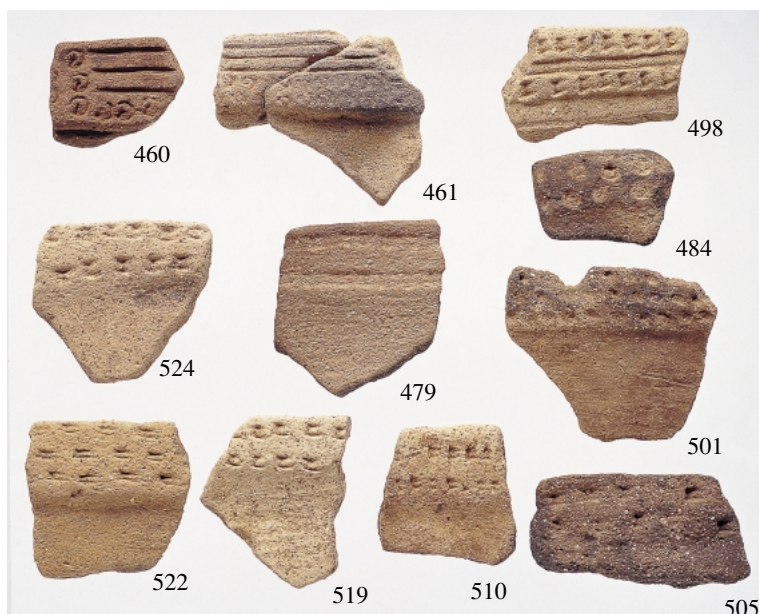
443



442



449



460

461

498

484

524

479

501

522

519

510

505



445



433



540



580



583



588



589



577



581



578



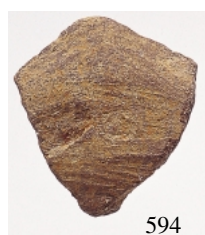
585



586



584



594



595



632



587



601



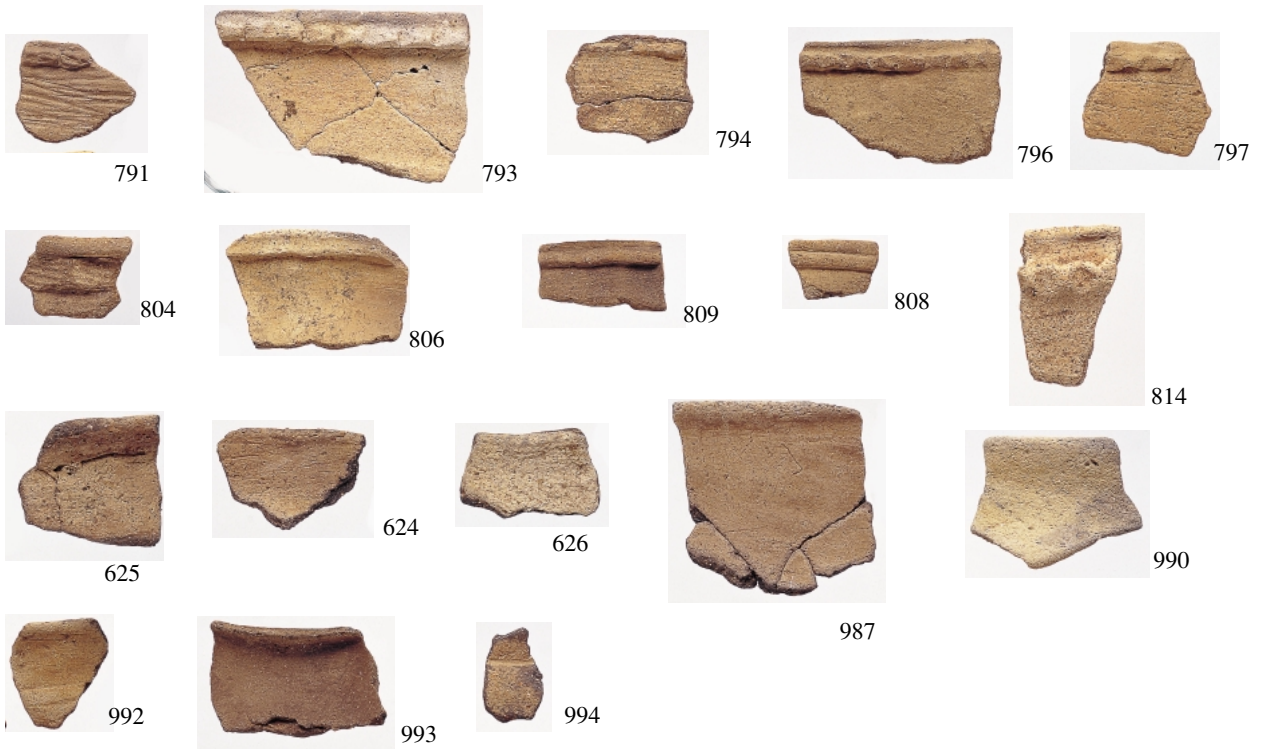
617



680



711





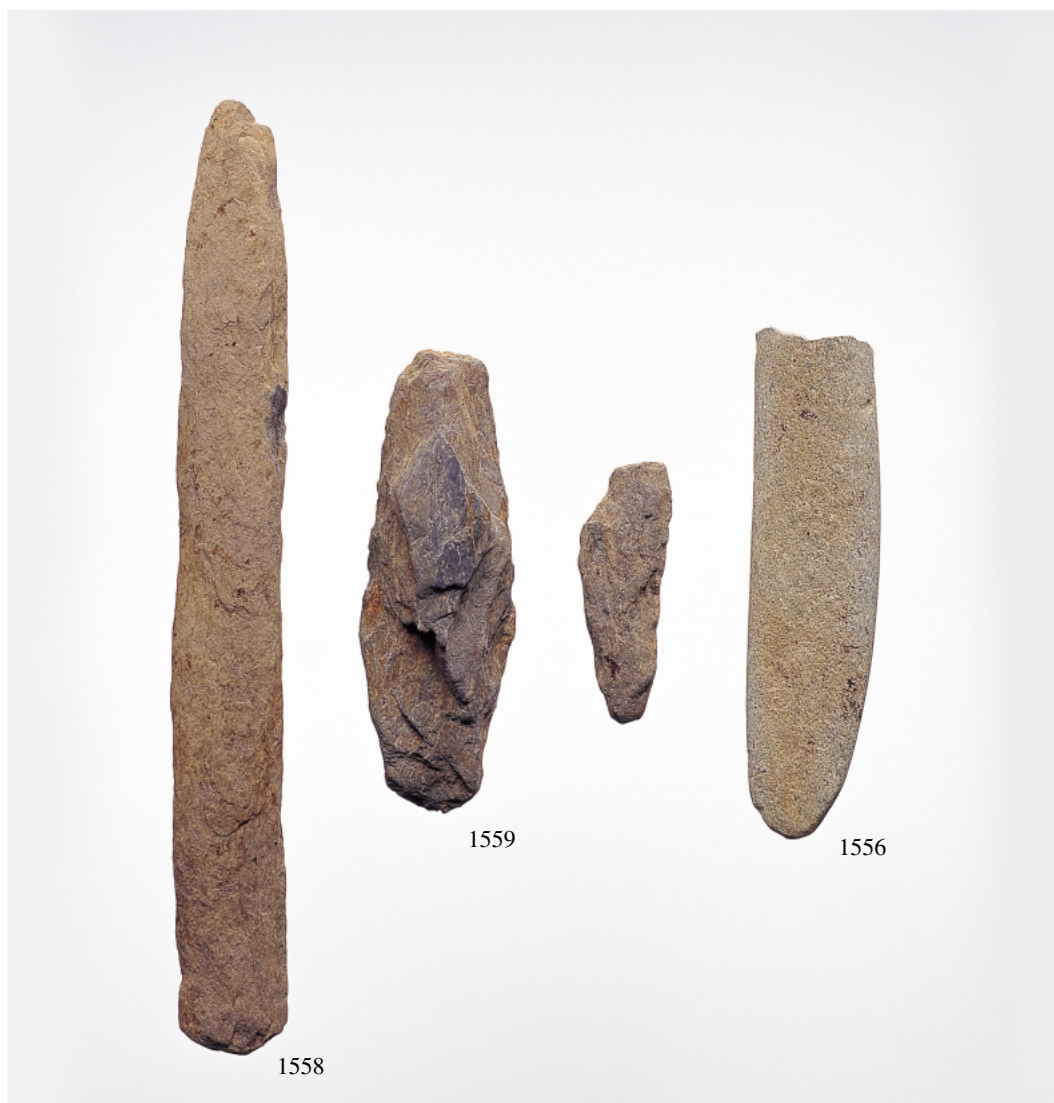














SB01



SB03

SK289



106



1094



1095



1099

SX03

## 報告書抄録

|        |  |
|--------|--|
| ふりがな   | うしまきいせき  |
| 書名     | 牛牧遺跡   |
| 副書名    |  |
| 巻次     |  |
| シリーズ名  | 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書                                    |
| シリーズ番号 | 第95集   |
| 編著者名   | 川添和暁・魚住英史・早野浩二・佐野 元・瀬瀬 茂                             |
| 編集機関   | 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター                       |
| 所在地    | 〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 Tel.0567-67-4161 |
| 発行年月日  | 西暦2001年9月  |

| ふりがな<br>所収遺跡名   | ふりがな<br>所在地  | コード |      | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間              | 調査面積 m <sup>2</sup> | 調査原因             |
|-----------------|--|-----|------|-------------|-------------|-------------------|---------------------|------------------|
|                 |  | 市町村 | 遺跡番号 |             |             |                   |                     |                  |
| うしまきいせき<br>牛牧遺跡 | なごやしもりやま<br>名古屋守山<br>区大字牛牧・<br>たかしまちようおぼた<br>高島町・小幡<br>なかさんちよう<br>中三丁目 | 01  | 1153 | 35度         | 136度        | 199906～<br>199911 | 1,000m <sup>2</sup> | 県営守山住宅建替えに伴う事前調査 |
|                 |  |     |      | 12分         | 58分         | 200004～<br>200004 | 200m <sup>2</sup>   |                  |

| 所収遺跡名 | 種別   | 主な時代   | 主な遺構                   | 主な遺物   | 特記事項             |
|-------|------|--------|------------------------|--|------------------|
| 牛牧遺跡  | 集落墓地 | 縄文     | 住居跡・土器棺墓群・埋設土器・土坑・集石遺構 | 縄文土器・土偶・耳飾・石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・敲石・磨石・石皿・石棒・石剣・石刀・垂飾・岩偶 | 土器棺墓群<br>石鏃の大量出土 |
|       | 集落   | 弥生     | 住居跡・土坑                 | 弥生土器・石器  |                  |
|       | 集落?  | 古墳     | 不明方形遺構                 | 須恵器坏身・高坏・裝飾付器台                                     | 特異な形態を持つ裝飾付器台    |
|       | 集落   | 中世～戦国期 | 溝・柵列                   | 山茶碗片・播鉢・天目茶碗                                       |                  |

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第95集

## 牛牧遺跡

2001年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社